

閃の軌跡 ～八葉を継ぐ者～

クラウンドッグ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある雪の日、シュバルツアー男爵家の治めるユミルの地にて倒れていた男は記憶を失い、名前さえも忘れていた。

彼は「ナギト」の名と「シュバルツアー」の姓をもらい、シュバルツアー家の一員となる。

一年の時を経て、義兄リインと共にツールズ士官学院に入学する事になったナギトは、そこで何を成すのか。

出会いと別れ、脳裏に響く声……失った記憶を取り戻し、使命を果たす事はできるのか!?

☆★

本作はpixivにて連載中の『閃の軌跡　～八葉を継ぐ者～』のリメイク作品です。
本作は『閃の軌跡Ⅲ』発売以前に連載開始しており、『閃の軌跡Ⅱ』以降、原作とストーリーが乖離します。ただし、人物名などは原作寄せで。あとpixiv版のオリジナル八葉一刀流も原作に寄せていきます。

続編はコチラ←

<https://syosetu.org/novel/325928/>

目次

序章

トールズ士官学院 | 1

回想 | 目覚め、すべてを失つて | 55

55

回想 | 八葉一刀流とナギト・シユバル

ツアー | 68

回想 | エリゼとナギト | 89

回想 | 運命の時は未だ遠く | 105

第一部 記憶の淵から

ナギトの立ち位置 | 122

夢 | 163

自失無我 | 201

敗北の記憶 | 229

ナギト・シユバルツアーの不細工なや

り方 | 265

確信と変えられる事 | 309

一員であるという幸福 | 337

未だ知らぬ | 故に | 368

これまでとこれからと | 414

リアル | 460

雪辱戦・鬼と狼 | 489

近似 || 相違 | 544

夢中 | 572

《剣鬼》再臨 | 597

セルリアンブルーの | 636

断章

劍の頂き——その一端	672
始まりの一太刀	708
絶不調の始まり	751
カイエン公爵のお膝元	769
羅刹の教え	798
本物と偽物	826
“通じない”こと	876
帰郷く決意の果てにく	890
幸福を	917
偽・夢現界廊	969
風雲急告	1008
未来への軌跡	1046

トールズ士官学院	1097
追憶　く《劍鬼》誕生の時	1145
追憶　く今はただ	1161
追憶　く煌都、暗殺者2人	1180
追憶　く鬼とBとCatと	1193
追憶　く鬼と狼	1213
追憶　く鬼と修羅	1234
追憶　く斯くして、《劍鬼》は	1255
第二部　蝶の羽ばたき、荒野の嵐	
其は閃光の如く	1285
《羅刹》、《聖女》、《騎士》、《神速》、	1301

	《灰の騎神》と《閃嵐の騎士》	1337
	湧き上がったもの	1367
	幕間。離反の時	1387
	再会 / 再開	1422
	正義の在り処	1457
	ケルディック寄港日	1475
	「強くなった」	1487
	覚悟を問う	1512
	確信は知識。知識は経験。経験は過	1521
	去。	
1541	続く言葉は、終わったあとで。	
	巧言令色多し仁	1560
	後の楔	1576
	剣鬼覚醒	1588
	ナギトという人格	1613
	ラウラ・S・アルゼイド	1668
	バリアハート寄港日	1680
	ナギト・シユバルツァー	1700
	碧く澄んでる泉に深く、そつと隠した	1740
	願ひひとつ	1751
	リヴァル・アルヴァンス	1785
	終章 願ひの果て	
	トールズ士官学院	1817
	同志	1855
	明日を掴むために	1883

運命の刻

願いの果て

後日譚 青春の終わり

友の声

どっちでもいいの真意

《緋玉の騎兵》

ほんの1ページ

八葉を継ぐ者

19441913

20402011200219841979

序章

トールズ士官学院

「起きろ、着いたぞ」

肩を揺さぶられて、目を覚ますと彼は目を何度かまたたかせて「もうトリスタか？」と義兄に問う。

短く「ああ、よく寝てたな」と返事をしたのは義兄——リイン・シュバルツァー。未だ少年のようなあどけなさを残しつつも、将来は凛々しい男性になるだろうと予想される顔立ち。

そのリインに起こされたもう一人の彼は、義兄と同じく黒髪黒目ながらも凛々しきとはかけ離れた表情でヘラツと笑う。どこか滑稽洒脱さを感じさせる2・9枚目の男。

二人は列車を降りると、改札に向かう。まだ眠いのか大きなあくびをするリインの義弟は申し訳程度に口に手を当てているが、品がないと思われるやうな所作である。

リインが注意しようと口を開けると、機先を制するように義弟が言った。

「何人か、俺たちと同じ赤い制服のやつがいるな」

ラインと義弟が身を包むのは赤い制服だった。しかし、それ以外の大半の生徒は若草色の制服か白い制服を着用している。

ラインらが入学するツールズ士官学院は貴族生徒と平民生徒でクラスが分かれており、貴族生徒なら白い制服、平民生徒なら若草色の制服……というふうになっている。

しかし今、ラインらが来ているのは白色でも若草色でもない赤色の制服。これが何を意味するのかはわからないが、義弟は赤い制服という共通点を持つ他の生徒を目ざとく見つけていたようだった。

「よく見てるな」

注意しようとした矢先に抜け目なさを見せつけた義弟に鼻白む思いをしながらも「それはそうと」と話を切り替える。

「はしたない真似はよせ、ナギト」

「はは、すまん。お兄様」

まったく反省していない様子で謝る義弟——ナギト・シユバルツァー。二人は談笑しながら改札を抜け、駅を出た。

トリスタ駅を出ると、眼前に広がるのはトリスタの街並み。帝都近郊というだけあり、二人の故郷より栄えているように見える。駅を出て正面にはトールズ士官学院が見えて、これから始まる学院生活を二人に想像させた。

ナギトの前を歩くリインは立ち止まると、視線を上げた。その視線を追うとそこには見事な花が咲き乱れていた。

「見事だな。そう思わないか？」

これは何という名だったか。記憶から検索するナギト。ヒット件数は一件。これはライノの花だ。この季節に咲く花で旅立ちやら新たな出会いを夢想させるような希望に満ちた色をしていた。

そんな時だった。

「きやつ」

「えっ」

ラインと少女の声が重なった。

視線をライノの花からラインに戻すと、どうやら金髪の女子とぶつかったであろう事がわかった。二人とも見事に咲き誇るライノの花に気を取られていて互いの存在が見えていなかったようだ。

ラインとその少女は互いに謝り合おうと、いくつか言葉を交わして別れた。

金髪の少女もナギトやラインと同じく赤い制服だったため「同じクラスかも」なんて笑いあっていた。ちなみにナギトはその少女とは話せていない。その女子が金髪ツインテールの美少女だからというわけではない。断じて。

ラインは少女の背中を見送ると、ぽりぽりと頬を搔く。

断じて嫉妬とかそういうわけではないが、無性にイライラしたのでナギトはたいそう

ふざけた様子でリインをからかう事にした。

「名前聞いとけばよかったなー、とか考えてるんですよね？わかりますう。」

駅前であつかるつてどういうこと？テンプレ過ぎて死ねよつて感じなんだが」

普段よりウザさ5割り増しのセリフと挙動に、いつもなら辟易するはずのリインだが、どうやら凶星だったようで「な、なんの事だよ」と狼狽えるだけだった。

ユミルでもそうだったが……リインの女たらしは今に始まった事ではないのでからかうのも大概にして、士官学院までの坂を登る事にした。

「まだ入学式が始まるまで時間があるけど、少しだけ町を見てみるか？」

リインが提案するとナギトは「また始まったよ……」と言わんばかりにため息をついて、

「正気かリイン？入学式に遅刻なんてシャレにならんぞ」

「大丈夫さ。軽く礼拝堂を覗くくらいだって」

ラインの忙しなさも、女たらしと同じく今に始まった事ではない。故郷ユミルでも事あるごとに町民に話しかけてはただ喋るだけだったり、悩みを聞いたりしていた。

ナギトはその儀式をマラソンと呼んでいたが、入学式以前にこの調子なら、入学した後はトリスタマラソンも捗るだろうな……と嘆息する。

教会に行く前にトリスタの公園のベンチで寝ている銀髪の少女を発見するとラインはご多聞にもれず話しかけようとするが、それはナギトが「ステイ」と押しとどめた。

「気持ち良さそうに寝てるだろ。ほっといてやれよ」

「でも入学式に遅れたら大変だろ？」

「ありや仮眠だ。自分で決めた時間には起きる」

ナギトが説得するとラインもしぶしぶ引き下がる。後ろ髪を引かれる思いで再び教会への坂を登り始めた。

ラインを制止したナギトであつたが、銀髪の少女が気になったのは同じだった。何せ

自分たちと同じ赤い制服を着ている。しかも、服の上からではわかりづらかったが、しなやかな筋肉をつけているようだった。おそらくは実戦で鍛え上げられたものだと思われる。

少しだけ口角を上げたナギトは、そのままリインと礼拝堂に入った。

《七曜教会》……この大陸が今の文明に入る以前、古代ゼムリア文明が滅んだ後、暗黒時代が始まった。魔物が跋扈し人々が困窮するまさに暗黒の時代だ。

七曜教会はそんな時代に女神エイドスを信仰する集団として誕生し、人々に信仰という希望を与える事で暗黒時代は終わりを迎えた。今では世界一大宗教だ。

そんな女神の像の前に跪く男が一人。ナギトラと同じ赤い制服に身を包む浅黒い肌で長身の男だった。どこか雄大さを感じさせる浅黒い肌の男は祈りを終えると、同じ色の制服を着ているナギトたちに気づいたのか近づき挨拶をする。

「いい日和だな。まるで天が俺たちの入学を祝福してくれているようだ」

「ああ、そうだな」

「雨の日の入学式なんて幸先悪い感じだしな」

リインが肯定し、ナギトは肩をすくめる。どうにも素直な言葉を発しないナギトに黒い肌の男は困ったように笑ったあと「それではな、入学式で会おう」と言い残して去っていく。

リインとナギトは女神像に祈りを捧げると教会を後にして再び士官学院を目指す。

士官学院への道の途中で、ナギトとリインは凜とした青い髪の少女を見つける。どうやら老執事から荷物を受け取っているようで「体に気をつけるように」とか「父上の不在をよろしく頼む」だとか言葉を交わしていた。

少女は短く締めると振り返る事なく士官学院へと進んでいった。その様子は武人然と表現しても良いだろう。身にまとう制服は赤だった。

老執事はその様子を見ていたナギトたちに気づいたのかぺこりと一礼し、

「本日はよき日和でございますな。この度はご入学おめでとうございます」

にこやかに微笑む老執事だが、その所作は武人のそれと同等でありその事を理解したナギトとリインは「ありがとうございます」と返す事しかできない。尤もそれ以上のやり取りは不要であり、老執事は再び一礼するとトリスタ駅に向かって行くのだった。

坂道を登った先、トールズ士官学院校門前で一台の高級車が止まる。停車した車両から出てきたのは気品のある金髪の美男子だった。荷物を持つと言う従者に「悪目立ちしたくはない」と断り、帰るように指示するとそのまま士官学院の校門をくぐる。彼の制服もまた赤色である。

「ほお、ありや大貴族の子息だな」

感心するように、あるいは見定めるようにリインに話を振ったナギト。リインは「そうみたいだな」と肯定しつつ、

「でも、従者に荷物持ちをさせて悪目立ちしないのは好感が持てるんじゃないか？」

そう話をナギトに返す。ナギトは「フツ」と笑うがその後「確かな」と続けて、

「従者を連れて偉そうに行くやつよかマシだな。何を競ってるのか知らんが、よくもまああんな堂々と道の真ん中を歩けるもんだ」

「そう言うナギトも道の真ん中を図々しく歩いてるけどな」

辛辣な言葉を貴族生徒に向けるナギトだったが、そんなナギトも偉そうな貴族生徒のように道の真ん中を歩いているのだと指摘したリイン。

「俺はお天道様に顔向けできないような事をした覚えはないからいいんだよ」

だが、軽妙に放たれたブラックジョークにリインは黙ってしまった。

リインを言い負かしたように感じたのか、ナギトはさらにわざとらしく胸を張って、そこから話を変えた。

「それにしても、赤い制服のやつら…みんなキャラ濃くね？」

金髪ツインテールの美少女に、銀髪のしなやかな筋肉をもつ少女、浅黒い肌の男に、武人然とした青い髪の少女、大貴族の息らしき金髪の美男子。

思いつきながら「やっぱ濃いよな、俺の勘違いじゃないよな」と呟くナギトに、リインは柔和な笑みのまま答える。

「安心していい。ナギトもキャラ濃いから」

「えー、それは嘘だろ」

「ホントだって。名門の士官学院にナギトみたいなふざけたやつなんているわけないだろうからな」

「お兄ちゃんが辛辣で俺が泣く」

と、そんなやり取りをしていたら、そろそろ時間が押してきていた。士官学院の校門を通り抜けると、若草色の制服を着た小柄な少女が満面の笑みで話しかけてきた。

「ご入学、おめでとーございますー！」

傍らにはふとましい体格の、黄色の作業着を着た男子も控えていた。

「うんうん。君たちで最後……じゃないか。」

リイン・シユバルツァー君とナギト・シユバルツァー君……でいいんだよね？」

「ど、どうも。はじめまして」

「はじめまして、ナギト・シユバルツァーです」

リインとナギトは挨拶をして、どうして自分たちの名前を知っているのか尋ねるが「ちよつと事情があつてね、今は気にしないで」との事だった。

その後、「申請した品」を作業着の男に手渡す。包みに入っているのは二人の得物である太刀だった。これは案内書に書いてあつた通りのため、なにも含むところはなく武器を預ける。

あとでちゃんと返されるから心配はしなくていい、と丁寧に作業着の男は説明してくれた。

そして再び小柄な少女からツールズ士官学院入学を言祝がれ、入学式のある講堂の場所を案内してもらい、その場を離れようとする。

が、ナギトは立ち止まったかと思うと、自らの制服をつまんで見せて小柄な少女に話しかけた。

「もし赤い制服の生徒をお探しなら、駅を出たところにある公園で一人寝てましたよ。定刻までには来ると思いますけどね」

そんな言葉に少しだけ驚いてみせた小柄な少女は「ありがとう」とナギトに礼を言う。と作業着の男と少しだけ話して公園に向かったようだった。

「すごいな、なんでわかったんだ？」

振り返ると、ラインが小柄な少女同様驚いた顔でナギトになぜ小柄な少女が赤い制服の生徒を探していたのがわかったのか問いかけた。

「お、聞きたい？聞きたいよねえ」と意味もなくもったいぶった後、それまでの様子が嘘のように淡々と説明する。

「俺たちが来たとき、最後……じゃない」って言うてただろ。あれはチェックリストか

なんかで入学生の名前とかを確認してたから出てきた言葉で、最後じゃない……と言うことは最後に近いって事と同じだよな。でも、俺たちの後ろにはまだわんさか入学生がいたから、最後に近いのはただの入学生じゃなく、赤い制服の入学生じゃないか……と思ったのよ」

時たまナギトが見せるこうした推理力を、リインは素直に尊敬している。こうした推理は鋭いからできるのではなく、全体を俯瞰しているからこそできる芸当だからだ。それは師の「観の目」の教えに通じるものがあるとリインは考えていたからだ。

「あの二人は先輩だよな？小柄な方は年上には見えなかったけど」

しかし、ナギトにそんな尊敬の意を知られてしまえば一昼夜通してからかわれるのがわかっていたリインは露骨に話題を変えた。

「飛び級なんじゃね？入学式の手伝いをするって事は生徒会の役員とかだったりしてな」

話をしていると、講堂に到着していた。最後に二人で身嗜みのチェックをやっているとやはり「大丈夫？ネクタイ曲がってない？」なんておどけたので手刀を入れる。

「いいかなギト。ここはトールズ士官学院。かの《獅子心皇帝》ドライケルス・ライゼ・アルノールが建てた由緒正しき名門士官学院だ。くれぐれも入学式で変な事はするなよ」

ナギトは手刀をくらった頭をさすりながら「さすがに俺もそこは弁えてるよ」と視線を落としたのだった。

☆★

入学式は当然のように、お偉方のありがたい話が聞ける。

それを半分寝ながら右から左に聞き流していたナギト。ラインはそれを胃が痛い思いで見つめていた。最悪な事に座席が少しばかり離れてしまったので注意する事もできない。

だが、学院長が壇上に上がった事でナギトは覚醒し、先程とはうってかわった真面目

な表情で話に聞き入るようにしており、ラインも一安心する。

トールズ士官学院の長、ヴァンダイク。白髪に髭をたくわえる老人のはずなのだがその肉体は筋骨隆々であり、老いて益々盛んという言葉が脳裏に浮かぶ。元は帝国正規軍の元帥であり、現在も名誉職としてその名は正規軍の中に残っている。生ける伝説の男だ。

鋭い視線をヴァンダイクに向けるナギト。話の内容は聞こえていない。ちら、とヴァンダイクから視線を外し列席する教官陣を見やるが、これもみな粒ぞろいと言うべきか……かなりできそうなのが数人いる。

今では士官学院というより名門高等学院としての面が強くなっているトールズだが、やはりその教官ともなれば文ではなく武においても優秀な者が揃うのだろう。

『若者よ——世の礎たれ。』“世”という言葉をどう捉えるのか、何をもって“礎”たる資格を持つのか。これからの2年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手がかりにして欲しい」

話を聞き流していたはずのナギトの耳に、ヴァンダイクの声がねじ込まれる。うだう

だ長つたらしいものではなく、言葉そのものに宿つた意思がナギトの耳朶を打ち、意識を強制的にヴァンダイクに向けさせられた。

“若者よ、世の礎たれ”

トールズ士官学院の創設者にしてエレボニア帝国中興の祖であるドライケルス大帝の残した言葉。

それだけを印象に残して、入学式は終わりを迎えた。

その後は各自、案内により白い学生服の貴族生と若草色の学生服の一般生が教室への移動を開始したが、ナギトやリインを始めとした赤い学生服を着た数名は講堂に残ったままだった。

「ふむ……」

来る途中にも見かけた奴らがいるがこの面子は、貴族と平民の別がないクラスか？とナギトは考える。

おそらく、入学案内について来た戦術オーブメントが関係してる線が濃厚だろう。あれは最新式の戦術オーブメントであるエニグマⅡとも違ったものだった。

そんな事を考えていると、ナイスバデーの美人な教官がやってきてその場に残っていた数人についてくるように言った。

胸元チラリふとももチラリの露出多めの美女でグッドです。リインとは離れていたため冗談は心の中だけに留めておいて、ナギトは教官の後を追った。

案内された場所は古めかしい建物。建てられてからかなりの年月が経っているのがわかる。このツールズ士官学院が設立されたのがおよそ220年前という話だから、これはおそらくその当時の校舎だろうとあたりをつける。

しかし、新しい校舎もあるのにどうして旧校舎を残しておく？ 歴史的建造物にしてはひっそりし過ぎだ。

と、そこまで思考したところで気配を感じて振り返る。旧校舎に続く道の上：せり立つ丘の上に四人の人影が見えた。

二人は校門で出会った先輩で、一人はバンダナを巻いたチャラそうな男、もう一人はライダースーツを着こなす美男子：否、胸のふくらみがある事から女子だと判明。男装の麗人というやつか。

ナギトはおどけて手を振るかどうか迷ったが、すでに自分を除く全員が旧校舎に入っただ後だったのでやめておく事にして、さっさと教官たちに続く。

教官はステージらしき場所に立つと「サラ・バレスティン」と名乗った。

サラによると、このクラスはやはり平民と貴族を関係なく集めた、新設のクラス……特科クラス《VII組》だと説明する。

「冗談じゃない！身分に関係ない!? そんな話は聞いていませんよ!」

それに食ってかかる男子生徒が一人。生真面目そうで眼鏡をかけた男だ。

マキアス・レーグニツと名乗った彼は「貴族風情」と同じ教室で学ぶのは我慢ならぬ、というような事を言った。

それを横から鼻で笑う金髪の美男子がいた。ナギトとリインが校門前で見かけたいかにも大貴族なあの美男子だ。

その態度からマキアスはその男を大貴族と目星をつけたようだが……果たして、その男は大貴族の子息であった。

ユーシス・アルバレア……それが彼の名であった。

アルバレアと言えば、《四大名門》と呼ばれる大貴族の一角であり、帝国でも一、二を争う公爵の家柄を持つ最高位の貴族だ。

学院の入学試験を受けるにあたり、覚えた知識が役に立つ。

言い合いはヒートアップする前にサラによって止められた。

マキアスの貴族嫌いはどうやら筋金入りだという事が、この短いやり取りで誰もが理解する。それにしても、アルバレアとリーグニッツが同じクラスなんてどんな偶然だ？ 士官学院にまで政治の魔の手が及んでは考えたくないが。

サラはそろそろオリエンテーリングを始めるとか言つて何故か後ろに下がりはじめた。

それを見てナギトはふと嫌な予感がした。

うーん、こんな場所つてなにか仕掛けとかありそうだよな。

天井が落ちてくるのか、床が開いて落っこちる・・・とか。

だから教官はステージに避難したとか。ハハハ、ないか。

と思つてたらやっぱりありました仕掛け。サラが仕掛けを発動すると床が割れて全

員が地下に滑り落ちていく。

ナギトはそれなりに予想はできてたため難なく着地したが、とりあえずリインの安否を確認しようと、リインが立っていた方向を見ると……………

な、なんとそこにはラツキースケベが展開されていたのである。

リインの顔面に、さつき駅前で会った金髪ツインテール美少女のおっぱいが押し当てられてるではありませんか。

「羨ま死ね」

ナギトは小さくそう呟いた。

リインはビンタを1発もらったが、あのラツキースケベの代償とすれば安いものだろう。

全員が立ち上がりある程度した所で、懐から機械音がした。全員がそれをポケットやらから抜き出す。

入学案内書と一緒に送られてきたあの戦術オーブメントだ。そのオーブメントの通信機能によりサラの声が届けられた。

サラによると、このオーブメントはエプスタイン財団とラインフォルト社によって開発された次世代の戦術オーブメント《ARCUUS》というものらしい。

このARCUUSを使えばアーツと呼ばれる魔法が使えるとか。
アーツ・・・たしか導力魔法だったか。

導力という、一定時間が経過すると元に戻るエネルギーを使った、機械的な魔法だ。使った事はないため実感は湧かないが、これで俺も魔法使いデビューだ！と密かに嬉しがるナギトであった。

「それじゃ、始めるとしますか」

サラの言葉と同時に出口らしき門が開いた。

「そこから先はダンジョン区画になってるわ。

割と広めで入り組んでるから少し迷うかもしれないけど・・・

無事、終点までたどり着けば旧校舎1階に戻る事が出来るわ。

ま、ちよつとした魔獣なんかも徘徊してるんだけどね」

そう説明するサラの声音は少し楽しげだった。

魔獣が徘徊してる士官学院とは、これ如何に？

しかし、魔獣ともなれば怪我どころじゃなく死ぬ可能性も出てくるんじゃないやあるまいか。いや、そうならないためのセーフティがあると考えるべきだ。

見たところ、あの銀髪の少女はさっきの床開きのトラップにも反応してたし、彼女が生徒が死なないための安全装置……？

しかしまあ、なににせよ油断は禁物か。と結論を出す。

「それではこれより、士官学院・特科クラス《Ⅶ組》の特別オリエンテリングを開始する。

各自、ダンジョン区画を抜けて、旧校舎1階に戻ってくる事」

文句があつたらその時に受け付ける、とサラは言い、さらにこう続けた。

「何だったらご褒美にホップにチューしてあげるわよ」

最後は絶対ハートマークついてた。ナギトはそう確信した。

「ほう……燃えてきたな！」

ナギトはやや大げさに反応してみるが、こちらを向いた者はいなかった。

いや、数名がジト目をナギトに向けていた。込められた感情は「近づかんとこ」と言つたところだろう。

ARCSからプツツと音がして、それ以降はサラの声は聞こえなかった。

とりあえず《VII組》メンバーは円になった。

意外な事に口火を切つたのはさつきリインが知り合つたばかりの草食系男子代表のような容姿のエリオット・クレイグだった。

それも「え、えっと」というものではあつたが、この空気で口火を切るとは中々に肝つ玉のでかい男のようだ、とナギトは笑う。

ラッキースケベ被害の女子が「どうやら冗談という訳じやなさそうね」と続ける。

するとユースシスが、フンと鼻を鳴らして奥へ進もうとした。
それをマキアスが止める。

「いきなりどこへ……一人で勝手に行くつもりか？」

「馴れ合うつもりはない」

マキアスの制止をユーシスは一刀両断。取り付く島もない、とはこの事だろう。さらにユーシスは追い討ちをかけるようにして挑発する。

「それとも『貴族風情』と連れ立って歩きたいのか？まあ、魔獣が怖いのであれば同行を認めなくてもないがな。武を尊ぶ帝国貴族として剣はそれなりに使えるつもりだ。
ノブレスIIオブリージュ 貴族の義務として力なき民草を保護してやろう」

完全な挑発に「だ、誰が貴族ごときの助けを借りるものか！」とマキアスは声を大にして反論する。

しかし、ここがチャンスだと見定めたナギトは、

「あ、僕、保護してもらっていいですか？うわあ、ユーシスさんとお近づきになれるなんて光栄つすわあ」

(棒) (笑) この2つを両立させながら言うナギト。

ユーシスとマキアスのやりとりだったのに突然割って入ったナギトにクラスメイト全員が唾然としている。

なんだろう、この謎のしてやったり感。

「ナ、ナギト……?」

ナギトの行動の意味がわからないらしいリインがその名を呼んだ。

だがナギトは振り向いて笑うのみ。否、眩^うしいばかりの笑顔にサムズアップ付きだった。もれなく全員から「ヤベーやつ」認定をくらいそうだったが、そこで我を取り戻したマキアスが声を張り上げる。

「もういいー! だったら先に行くまでだ。」

旧態依然とした貴族などより上である事を証明してやる!」

かなりヒートアップしてるが、あの手のタイプは放っておけば反省して頭を冷やすだろう。そのうち誰かと合流するはずだ。

「そんじゃ行こうか」

ナギトがそう言うのと、ユーススは動揺しがちに「あ、ああ。ついて来たいならそうするがいい」と答えた。

こうしてナギトはユーススと二人きりで旧校舎1階を目指す事となった。

☆★

集まってきていた魔獣の最後の1匹を斬って、戦闘は終了。

「よしオツケー、先に進むか」

ユーシスは剣を鞘に納めながら言った。

「なかなかの腕前のようだな。それにその得物は……」

「これは太刀だよ。ま、東方の剣って考えてもらえばいい。それに腕前に関しては……お前もやるみたいだな。宮廷剣術か？」

「ああ。兄上を師として学んだ。東方の剣ならば、やはり東方の剣術を使うのか？」

おっと、その問題を突いてくるか。何と答えるべきか迷った末にナギトは自己の知るありのままを答える事にした。

「ああ。八葉一刀流つつてな。この1年でリイン……さつきラツキースケベ発動させて

た黒髪の奴から叩き込まれた」

「ラッキースケベ・・・ああ、あの男か。

しかし、1年だと？そんな短期間でそこまでの腕が身につくものなのか？」

ラッキースケベで通じるかどうかわからなかったが杞憂だったようだ。

「…………まあ、そこは才能ってやつだな」

少しだけ濁してナギトは答えた。

「そうか」

ユーシスは納得してない、とでも言う声音で言った。が、ナギトの表情からこれ以上は突っ込んだ話をするべきではないと判断したのか、話題を変える。

「しかし、俺について来た理由はなんだ？取り入るのが目的ではないようだが」

「クラスメイトと仲良くなりたかったから・・・とか？」

「質問に質問で返すな。まったく、貴様を相手にしていると調子が狂う」

「やれやれ、とでも言いたげなユーシスに愉快そうに笑うナギト。しかし、ここらで楔を打つておくかと考えたナギトは爆弾を投下した。」

「マキアスの事なんだが」

「……あの男がどうした」

「マキアスの名を出した途端にむすつとした顔になったユーシスに嘆息しながら、クラスメイトとして助言する。」

「仲良くなれ……とまでは言わんが、喧嘩友達くらいにしとけよ。いつまでも今のままじゃクラスの雰囲気最悪だぞ」

「……馴れ合うつもりはない」

目を逸らしながらユーシスは言う。

馴れ合うつもりはない、とか言いながらすでにナギトと馴れ合ってるからだ。

「まあ、さっきのはマキアスが悪かったと思うけど、お前のほうはまだ余裕があっただろ。」

あいつは何らかの事情で貴族を恨んでるっぽいから視野が狭くなってるだけで地が悪い奴じゃなさそうだからさ、何を言われても広い心で受け止めてやればいいんじゃない?」

「……………」

無言という返事。

ユーシスにとり、ナギトの助言は聞くまでもなくわかっていた事だ。

しかし、売り言葉に買い言葉というべきか…貴族への嫌悪感丸出しのマキアスに鏡写しのような対応をしてしまった、と。

「話の続きはこいつらを片付けてからにするか」

話し込んでいたら、周囲には魔獣の気配が充満していた。ナギトの言葉で視線を上げたユーシスは歯切れが悪そうに「ああ」とだけ答えた。

戦闘に支障がない事を願いながら抜刀した。

「ほっ！」

魔獣の爪を躲けて太刀を叩き込む。魔獣の数も減っており余裕が出てきたところで、ナギトはアーツを試してみる事にした。

「ARCUS 駆動」

発動するのはファイアボルト…火球を撃ち出す導力魔法だ。

さあ、飛び出せ火球！ロマンと共に！

「ファイアボルトお！」

駆動を終えてアーツが発動する。ナギトの足元から火の粉が立ち上り、それらは球体の形に凝集すると、魔獣に向かって飛んでいく。……それはもう、ひよろひよると。ナ

ギトのファイアボルトは直径1リジユほどの球体であり、その勢いはひよろひよろと表現するほかない。

火球が魔獣にヒットする。魔獣はわずかに鳴き声をあげるが、ダメージと呼べるほどのものではなかった。人間からすれば「アチっ！」と言うくらいだろう。

「おい……なんだ、それは……？」

ユーススが憐れみの目をナギトに向ける。「ファイアボルトお！」と勢い込んで叫んだ。いいものの、出てきたのは火花と呼んで差し支えないもの。ナギトは半泣きになりながら、

「俺だって知るかあ！」

そう言つて太刀を振り抜いた。

最後の1匹を片付けると同時にラインとエリオット、マキアスと浅黒い肌をした長身の男が追いついてきた。

「ふう……それで何の用だ」

ユーシスは剣を鞘に収めながら、リインたちに向き直った。

「いや、お見事。リイン・シユバルツァー。さつきは名乗る暇もなかったから自己紹介しておくよ」

「どうも……エリオット・クレイグです」

「ガイウス・ウォーゼルだ。よろしく頼む」

「ユーシス・アルバレア。一応、改めて名乗っておこう」

ユーシスに続いてナギトも自己紹介する事にした。

「ナギト・シユバルツァーです。よろしく」

「シユバルツァー、ということは」

ナギトの名にガイウスが反応した。

「ああ、そのMr. ラツキースケベ・リインとは兄弟にあたる」

「ラツキースケベって・・・」

半ば躊躇いがちにエリオットが言う。

「あれは・・・助けようとしてだな」

リインは言い訳するが、わざとではない。だからこそラツキースケベの幸運事故なんだろうが。ナギトの言葉で場の雰囲気はやや和らいだ。

これであとはユースとマキアスが互いに食ってかからなければ良いのだが。そう上手くはいかぬのが世の理だ。

ユーススが「フツ」と笑う。その視線の先にはマキアスがいる。

「それにしてもなかなか殊勝な心構えだな」

「な、何がだ!？」

「あれだけの啖呵を切ったくせに連れ立って来るとは。大方、すぐに頭を冷やして殊勝にも詫びをいれたのだろう。いやはや、*“貴族風情”*にはとても真似できない素直さだ」

うん、なんかもう挑発としか思えない。

内容は間違っていないよ。むしろ褒めてると思う。

けどそれを今、君が言っちゃやうと挑発にしかならないからね。

案の定、マキアスはやんのかコラ、みたいなオーラを全開にした。

「ぐっ、何様のつもりだ……!?!その傲岸不遜な態度……君たち貴族はみんな同じじゃないか!

特にアルバレア公爵家といえは帝国で一、二を争う大貴族……さぞ僕たち平民の事を見下しながら生きているんだろう!？」

「それをお前に言われるつもりはないな」

ユーシスは静かに反論する。さんざん「貴族風情」と馬鹿にされたお返しだとも言いそうなほどの怒気を滲ませて。

「レーグニッツ帝都知事の子、マキアス・レーグニッツ」

熱くなりがちなマキアスに、冷静に事実をつきつけるように話すユーシス。

マキアスは父親が帝都知事と言えども平民の身分であると主張する。

「だがレーグニッツ知事と言えばかの《鉄血宰相》の盟友でもある『革新派』の有力人物だ。

そして《鉄血宰相》率いる『革新派』と四大名門を筆頭とする『貴族派』は事あるごとに対立している」

そこまで言つて、ユーシスが何を言いたいのか理解したナギトは「おいユーシス」と声をかけて制止しようとするも、ユーシスは止まらない。

「ならば、お前のその露骨なまでの貴族嫌悪の言動……ずいぶん〴〵判りやすく〴〵安っぽ
いと思つてな」

「(っ)のっ……！」

この言葉にさすがのマキアスもキレた。

自分の感情が、父親が対立してる相手だからだとコケにされたからだ。

ユーシスに殴りかかろうとするマキアスをリインが止めて、言いすぎたユーシスにも
注意する。

その後、マキアスは頭を冷やしてくるといつて別行動をする事になった。

「俺はマキアスと一緒に行くわ」

ナギトはため息をつきながら言った。

「この状況で1人にするのは危険だからな」と続けたナギトにリインはこくりと頷いて
「頼んだ」と言う。

リンたちのパーティにはマキアスの代わりにユーススがINする。

「それじゃ、またねユースス、エリオット、ガイウス。あ、スケベ男爵は結構です」

「誰がスケベ男爵だ」

リンのツツコミに「ははは」と笑って、ナギトはマキアスを追った。

その背中を見つけて話しかける。

「おっす、マキアス」

マキアスは振り向いてナギトを確認した。

「きみは……僕にいったい何の用だ？」

「用って言われてもな。この状況で1人になるのは危険だからさ、追ってきたってわけなんだが」

ナギトがさつきまでユーシスと行動してたから若干敵視されがちなのは気のせいではないだろう。

しかし、マキアスは深く呼吸をすると、

「そうか、少々軽率だったようだな。すまない、心配をかけた」

素直に謝った。

貴族以外が相手だとそこまで視野は狭くないみたいだな。とナギトは考えて、そこでマキアスがさつきまでラインと同道していた事を思い出す。

ここでナギトに突っかからないのは、ラインがシュバルツアー家が貴族だと言つてないからだ。

「きみはナギト・シュバルツアーだったな。失礼だが家柄は……いや、ラインと兄弟だと言つていたか。ならば貴族ではないな」

言つてないみたいです。なにが「頼んだ」だ。面倒ごとを押し付けやがつて。ライン……あの義兄め！

「それはラインが？」

「ああ」

「なんて言ってた？」

「少なくとも高貴な血は流れていない、と。というか、何故そんな事を聞くんだ？」

高貴な血は流れていない、ねえ。ラインめ。俺が使うような言い訳しやがって…と心の中で毒づく。

案の定、質問の理由聞かれたナギトだが、これの対する切り返しは用意してあった。

「いや、ラインが言ってることは間違いじゃないが、俺の場合は当てはまらないかもしれないかもしれないな」

「どういふことだ？」

「俺って記憶喪失なんだ。1年くらい前かな……俺はリインの家の近くに倒れてたらしい。」

で、リインの家族に助けられて、それ以降シユバルツアー性を名乗っているわけなんだが……それ以前の記憶がまったくくないんだ。自分の名前さえ覚えてなくてなあ。

今はナギト・シユバルツアーと名乗っちゃいるが本名はどんなもんかわかったもんじゃない。だから、ひよつとしたらどつかの貴族の息子かもしれないな……と」

少しだけおどけてみせると、それが「気にしてないフリ」のように見えてより言葉に現実味を帯びさせる。

「そう、だったのか。すまない……」

マキアスは目を伏せた。

よし、言い訳終了。

シユバルツアー家が貴族ではない、とは言っていないし、嘘はついてない。

ナギトの記憶にしたって真実を語ったまでだ。

実際にナギトは1年以上前の記憶は思い出せないし、本名もわからない。だから、ラインから教わった八葉一刀流も経験年数も1年なのだ。

「別に構わんよ。俺から言ったことだし。さて、休憩はここらにしてそろそろ進むか」

「ああ、そうしよう」

☆★

マキアスと一緒にしばらく進むと、銀髪の女の子と遭遇した。

遭遇、というのも歩いてたらたまたま出会った、というより、彼女が壁を駆け上がったきたようなのでそう表現したのだ。

銀髪の女の子は「フィー・クラウゼル」と名乗った。

それにしても小さい。身長は150リジュあるかどうか。

胸部装甲は薄い……うん、だがしかし貧乳は正義だと思っけどね！

とか思ってたらジト目で見られたナギトであった。

「そーいや、急いでたみたいだが」

ナギトがそう話を逸らすと、フィーは道の先を見た。

「戦闘音がする。それも結構大きい相手」

結構大きい相手……この回廊には小型の魔獣しかいなかったから……大方ダンジョン区画のボスってところだろう。

「先行したリインたちが苦戦中かも知れんな。急ごう」

ナギトはそう言って駆け出した。

すぐ後ろにはマキアスとフィーもついてきている。

回廊を抜けて広間に出ると俺たち以外の《Ⅶ組》メンバーが揃い踏みだった。動く石像らしき魔獣と相対している。

「まあ、仕方ないか」

フィーはそう言つて、小型の双銃剣を取り出して構えた。

「みんな、大丈夫か!？」

マキアスもそう言つてシヨットガンを構える。

「フィーは右足を頼む。マキアスは隙を作れ」

「・・・っああ!」

ナギトの突然の指示にも応えくれるマキアス。やはり地は優秀らしい。

「わかった」

フィーは相変わらず淡々とした様子だ。こういった修羅場には慣れていそうな雰囲気だ。

ナギトはわずかに集中して、居合をするように太刀を構えた。

「八葉一刀流、二の型……」

マキアスのショットガンがガーゴイルの頭を捉える。ヘッドショットに怯んだガーゴイル。その隙にナギトは斬り込んだ。

「————疾風！」

風の如き速さでガーゴイルの左脚を斬り飛ばす。

一瞬遅れて飛び込んできたフィーがガーゴイルの右脚に大きな傷を刻んだ。

両脚にダメージを追ったガーゴイルは、そこで体勢を崩し大きな隙ができる。誰かが言った。

「勝機だ……！」

凜としたよく通る声。

全員が声を重ねて返事をする、不思議な事にみんなとどこかで繋がった感覚がした。

みんなが一斉にガーゴイルに攻撃を仕掛ける。

剣が、槍が、銃が、銃が、弓が、杖が。あらゆる攻撃がガーゴイルに殺到する。近接武器での連携はシビアだ。自分の攻撃が味方に当たるリスクがある。

しかし、この《Ⅶ組》の連携においてそれはありえなかった。

繋がった感覚、リンクしているとも言えるべきそれからみんなの動きが手に取るようにわかるからだ。

みんなが攻撃する中で、ナギトはガーゴイルの両翼を斬り飛ばした。

今度は裏疾風の要領で風の刃で、その翼を斬り裂いたのだ。

万が一にも逃しはしない。

「今だ……！」

リインが言った。それはナギトに言ったわけではない。このVII組の中で最も攻撃力を持つ真打に対して言ったのだ。

「任せるがよい……！」

青髪をポニーテールにまとめた少女が、身の丈はありそうな大剣を構えて言った。

「はあああああつ！」

そして、裂帛の気迫と共に跳躍。大剣を一振りし、ガーゴイルの首を跳ね飛ばした。首を飛ばされたガーゴイルは石となり、光に包まれるようにして消えた。

それを確認したⅦ組のメンバーは一息ついて再び円になった。

「良かった。これで……」

眼鏡をかけた少女が言った。戦闘中はエリオットと同じように魔導杖オーバルスタッフ振るっていた胸の大きな女子だ。入学試験では首席だったらしい。

「ああ、一安心のようだ」

長身の槍使いであるガイウスもガーゴイルという破格の相手には緊張していたようで、安心したと言う。

その安心感を全員で共有したところで、エリオットが話を変えた。

「それにしても……最後のあれ、何だったのかな？」

「そういえば……何かに包まれたような」

金髪の少女が言うそれは、リンクした感覚の事を言っているのだろ

「ああ、俺も含めた全員が淡い光に包まれていたぞ」

ユーシスがそう説明すると「そうだったな」とマキアスも肯定する。

「ふむ、気のせいか……皆の動きが手に取るように“視えた”気がしたが……」

武人然とした青い髪の少女、ガーゴイルの首を刎ねた彼女がはリンクしていた感覚を
そう表現した。

それに答えるようにしてフィーが言う。

「……多分、気のせいじゃないと思う」

さて、ようやく俺の番か。ニヤリと笑うとナギト。

「俺たちが淡い光に包まれると同時に、みんなの動きが手にとるようにわかるようになった……考えられる要因とすれば、これだな」

懐からARBUSを取り出し

「AR…」

「そう。ARBUSの真価ってワケね」

サラが拍手をしながら現れる。

クソウ！なんか美味しいところを持ってかれた気がする。

「いや、やっぱり最後は友情とチームワークの勝利よね。うんうん、お姉さん感動しちゃったわ」

芝居がかつてるのが微妙にうぜえ。ナギトどころかVII組全員から冷ややかな視線を浴びせられるもたじろぐ様子はなく。

サラが階段から降りてくる頃にはVII組メンバーは横一列に並んでいた。

「これにて入学式の特別オリエンテーリングは全て終了なんだけど……なによ君たち。

もつと喜んでもいいんじゃない？」

ここで1人だけ「ヒヤッホウ！勝利だぜく！」とか騒いでもよかったが、マキアスが即座に反論してきたのでやめておこう。自粛したナギト。

その後は疑問やらがサラにぶつけられ、それはすぐに説明された。

先程ナギトたちが体験した、みんなが繋がっているような感覚はどうやらARCU Sの《戦術リンク》という機能により発現したらしい事。

VII組メンバーが身分や出身に関係なく集められたのはARCU Sの適性が新入生の中で特に高かったから、だとか。

そしてその後、問われる。

このトールズ士官学院・特科クラス《VII組》に参加するか否か。

通常よりもハードなカリキュラムになるらしいが、すでにナギトの心は決まっていた。

1番乗りで名乗りをあげてもいいが、さすがにその見せ場は義兄に譲ってやろうと考
えた。

決意した表情で、リインは一步前が出る。

「リイン・シュバルツァー。参加させてもらいます」

予想通りに名乗りをあげるリイン。こういつた時の行動力は高評価の対象だ。

「1番乗りは君か。何か事情があるみたいね？」

サラ教官はそう訊ねる。

今の一瞬の間でリインの肚の内を読んだと見える。

前に聞いた事はあるが、リインは自分の中の「鬼」と対峙するために力を欲してい
る。

ハードなカリキュラムはむしろ望むところだろう。

「いえ……我儘を言って行かせてもらった学院です。

自分を高められるのであれば、どんなクラスでも構いません」

ほら、予想通りの答えだ。微かに笑ったのち、ナギトも一步前に出た。

「ナギト・シユバルツァー。同じく」

「へえ、あなたは確か……記憶喪失だったはずだけど、それはまたどうしてかしら？」

サラ教官のカミングアウトに対し、クラスメイトに動揺が走る。記憶喪失とは思えない今までの行動に疑問を覚えているようだが、それは無視してナギトは微笑を浮かべたままサラの質問に答える。

「建前とか抜きでぶつちやけると。面白そうだから、です」

「みっちりしごいてあげるわよ」

「ハハ、期待しておきます」

リンやナギトの名乗りを聞いて、重い腰を皆が上げていく。

結局はⅦ組はメンバー10人全員が参加する事となった。

回想　　く目覚め、すべてを失ってく

うエレボニア帝国、ノルデイア州辺境の領地ユミル。シュバルツアー男爵家の治めるこの地は皇帝家とも縁深く、温泉郷の名で知られている。それに加え、アイゼンガルド連邦にほど近い北の大地であるため、冬には雪の降り積もる土地である事も有名だ。

その年も、良く雪が降っていた。

だからであろう。彼が、生きていたのは。

☆★

「これは……っ！」

テオ・シュバルツアー。ユミルを治めるシュバルツアー男爵家の当主であるこの男は、今や忘れ去られかけている貴族の義務を体現する者の一人であり、善政を敷く彼は

領民から人気を得る人物であった。

昨日の夕刻、ユミルの地に轟音が届いた。それは土砂崩れや雪崩れを想起させる轟音であり、ユミルは一時期警戒態勢、年配の方々は避難すらしていた。が、およそ4時間に渡る警戒も杞憂だったようで、山に積もった雪がユミルを襲う事はなかった。

轟音の原因を突き止めるべく、翌朝テオは山を登り——そして、それを発見したのだった。

「まだ脈はある………リイン、こっちに来てくれ！」

崩れた崖を形成していた土、降り積もった雪の中に埋まっていたのは、20歳前後の男だった。死体かとも思ったテオだったが、脈はかろうじてある。

「父さん！人が埋まっているのか!？」

テオに同行していた息子リインの助力もあり、テオはその男を救出する事に成功する。

しかし、その男はまだ脈こそあるものの瀕死の状態である事は明らかであった。雪に埋もれて一晩を過ごしたのだから当然だ。むしろ良く生きていてくれたと言うべきだ。

「衰弱している……郷まで急ぐぞ、リイン！」

テオはその男を背負うと、ユミルの郷に急ぐ。リインは先導し、行く手を阻む魔獣の類を切つて捨てー……。

その男は、ユミルの郷にある七曜教会の礼拝堂に預けられる事となった。

☆★

目蓋が開く。意識は半覚醒で、身体中が痛む。

「う……あ……」

声なき声が漏れる。およそ雑多な中では聞き取れるはずもない音。しかしその男が声を出した場所が静謐な礼拝堂で、しかも室内にシスターがいた事もあり男の目覚めは

無事に察知された。

シスターは男の意識の有無を確認した後、教区長に報告するとシユバルツァー男爵家に走った。

しばらくすると、一人の少年が男の部屋へと足を踏み入れた。

その男児こそリイン・シユバルツァー。ユミルを治めるシユバルツァー男爵家の長男であり、男を助けた人物の一人だ。

同じく男を助けたシユバルツァー男爵家当主テオは室外で、男の容態を教区長から聞いている。

「良かった、目が覚めたんだな」

そう言いながら近づいてくる少年に男はベッドに座ったまま柔和な笑みを浮かべて謝意を述べる。

「ありがとう。お前が俺を助けてくれたんだってな。おかげで命拾いしたよ」

「いや、いいんだ。雪山で死にそんな人を放っておけるわけがないしな。俺はリイン・シュバルツァー。君の名前は？」

自己紹介をしたリインは男の名前を問う。しかし少し困ったように笑って「悪いな」と言う。

「俺の名前を教える事はできないんだ」

「え…？それはどういうー」

「リイン」

二人のやり取りを遮るようにしてテオが入室してくる。眉根を寄せて厳しい表情…というよりは驚愕を隠そうと表情を作っているように見える。

テオの姿を認めた男は「助けて下さりありがとうございます」と頭を下げる。

「困っている人がいれば助けるのは当然の事だ。それよりも、その…本当なのかな…」

「？」

テオが教区長から聞き、言い淀むセリフを男は何ら躊躇う事なく言い放つ。

「はい。俺は記憶喪失です」

「まあ失ってるのはエピソード記憶だけみたいですけどね」と軽々に言うが、聞いたリインとテオはやはり表情を歪ませていた。

“名前を教える事はできない”という先程の言葉は文字通りの意味だったのだ。知らないのだから、教える事ができないのは道理だ。

「どこか行く当ては……いや、それすらもわからないのか」

先に教区長から記憶喪失について聞かされていたテオはいち早く正気を取り戻し、問いかげようとするが失言だったと理解して言葉を引っ込める。

「そうですね……どうしてユミルに来ていたのか……それだけでもわかればありがたいん

ですが……」

記憶はまるで白紙。どうして自分がわざわざユミルくんだりまで来ていたのか。黄金の軍馬を掲げるエレボニア帝国。広大な版図を持つこの国でもユミルは田舎の方だ。「温泉郷」と呼ばれ皇族ゆかりの地ではあるものの、用もないのにわざわざ訪れる意味はない土地だ。

それとも温泉道楽として湯に浸かりに来たとでも言うのだろうか、記憶を失う前の自分とは？ ケーブルカーを使えばいいものを、アイゼンガルド連峰を越えてユミルに到ろうとするとはよほどのマゾか修行馬鹿くらいのもだろう。

そんな自分の思考に辟易する男に、テオが「君が記憶を取り戻すきっかけになるかもしれない物がある」と言った。

☆★

「これは……太刀ですか」

礼拝堂を出てシユバルツアー男爵家の邸宅に入った男が見せられたのは一振りの太刀であつた。

男は太刀を受け取るとすらりと抜き、剥き身の刀身を見やる。

「ふむ……一見して名工が打つたようには見えない鈍ですが……刃こぼれ一つない。不思議な太刀ですね」

外に出て軽く太刀を振つてみた男は「うん、手に馴染みますね」とにこやかに笑う。

「これは俺ので間違いないみたいですね。ありがとうございます」

抜いた時と同じようにスムーズに納刀した男はにこやかな表情から一転、肩を竦めて「でも、記憶は戻らないみたいですね」とため息を吐く。

「淀みない太刀筋……もしかしたら君は八葉一刀流の使い手なのかもしれないな」

八葉一刀流の初伝を授かるリインは太刀という大陸西部ではあまり見かけない得物

にシンパシーを覚え、その使い手ではないかと勘繰る。

「確かに、このユミルにはたびたびユン殿も訪れている。君が太刀を使う以上、八葉一刀流と関係はありそうだ」

リインの言葉にテオも八葉一刀流の開祖という好々爺の顔を思い出しながら頷く。

「八葉一刀流…ユン・カーファイが興した東方剣術の集大成でしたか。ならそこから俺の正体を探ってみるのもありかもですね」

光明が見えた、というような男の顔にリインもテオもいたたまれない気持ちになる。

記憶を無くして、名前さえも失って、辛いはずがないのに。

自分たちに心配をかけまいとわざと明るく振る舞っている。

「…父さん」

リインの呟きに「ああ」と答えたテオは男に正面から向き合い、提案をした。

「記憶喪失で、自分の名前さえ忘れて……さぞ心細いだろうに我々に世話をかけさせないようにする君の心意気は買おう。しかし当てもなくミラもなくしては旅も長くは続かないだろう。…どうだね、怪我が治るまでとは言わない、ユン殿が訪れた時に君を紹介するのでもいい……それまで我が家に世話になるつもりはないか？」

「そんな、悪いですよ」と男は言うが、テオの言う通り路銀もない旅路では行き倒れコース直行なのは間違いない。あるいは魔獣を狩り、入手したセピスを売ってミラにするのもいいが自分は太刀の振り方さえ忘れてしまっているのだ。ユミルの溪谷を越え、アイゼンガルド連峰に踏み入れる頃には瀕死になるかもしれない。

となればやはり最善はテオの提案に乗っかる事だ。

男の思考はすでにそちらに傾いていた。「悪いですよ」なんて言いつつも自分は死ぬわけにはいかないという使命感に突き動かされて。

「すみませんが、お世話になります」

こうして男はシュバルツアー家に世話になる事になったのだった。

☆★

「しかし、そうなるといつまでも『君』という呼び方もしてられないな」

礼拝堂の教区長に男をシュバルツァー家で預かる旨を伝えて、邸宅への帰り道でテオが言う。

「そうだな………どうにか名前だけでも思い出せないのか？」

「うん、無理だな」

リインの問いに即答する男。これまでどうにかひり出そうとしたもののうんともすんとも言わない記憶。しかし名前さえ思い出せればそれを皮切りに全てを思い出せるような確信はあった。……だからこそ名前を思い出すという行為に嚴重なロツクがかかっているような気もするが。

「ならば、*“ナギト”* というのはどうだ？」

「ナギト、ですか。……どこことなく東方風の響きですが……うん、気に入りました。ではそれでお願いします」

テオの提案にこれまた即答する男——もといナギト。

「うむ、それではこれからよろしく頼むぞ、ナギト・シユバルツアー」

「おっと、まさかのシユバルツアー家入り。しかし了解です。こちらもお世話になりませう、親父殿。……それにリイン兄様」

軽妙にやり取りを交わすナギトとテオ。ナギトに*“兄様”* 呼ばわりされたリインは思いつき顔をしかめる。

「兄様はやめてくれ、鳥肌が立つ。というか、俺が兄貴なのか!？」

「まあほら、リインの方がシュバルツアー歴長いし、歳もそう変わらんならどっちが上でも下でも構わんだろ？」

「それは別に構わないけど…：とというかシュバルツアー歴ってなんだ!?! ああもう父さんも笑い過ぎです！」

記憶を無くし、名前を失い、剣技も忘れ、使命さえ闇の中。
すべてを失った男の物語は幕を開けた。

回想く八葉一刀流とナギト・シュバルツアーく

ナギトがその名を貰ってから3ヶ月が経過した。

怪我は全快したし、郷の人たちは良くしてくれるし、温泉は最高だし、言う事なしの日々を送っている。

ただ一点、記憶が戻らない事を除いては。

まあ焦った所でどうなる事もなし、とナギトはシュバルツアー家の好意に甘えているわけなのだが、さすがにいつまでも客人待遇に甘んじられるはずもなく、今は家事や狩りの手伝いなどをしてなけなしの満足感を得ている所である。

ルシアと一緒に朝食後の皿洗いを終え、テオと一緒に夕食に出す獣を狩りに行き、鹿一匹を捌き終えた所でリインと剣術の修行をする。八葉一刀流の修行。

ナギトは記憶を失っており、喪失前に修めていた剣術が何かは知るよしもなかったが、八葉一刀流の型は良く身体に馴染んだ。

とはいえ、体が覚えている…というのもその程度で、リインに教えを請おうとしたのだが、リインは「師匠」と呼ばれる事を拒んだ。何でも弟子を取ることを許可されてい

ない身だから、とか。どうにも自信なさげなのが目についたが、
「共に切磋琢磨する兄弟弟子」という立場で落ち着いた。

郷の防衛を兼ねたウォーミングアップとして溪谷道の魔獣を狩り、休憩を入れてから
実戦さながらの立ち合いを行う。

ナギトとリインの実力は伯仲一歩ではなく、リインに軍配が挙がる。しかしナギト
もこういった模擬戦のたびにめきめきと成長している。否、ナギトにとってそれは成長
というより、「取り戻す」という感覚に近い。

相対するリインも同じ考えで、やはりナギトは記憶を失う前は八葉の剣士だったのだ
ろうと推測した。

「二の型」

疾風、と聞こえるより速くリインを斬撃が襲う。しかしリインもただでやられるはず
もなく、五の型の要領でひらりと攻撃を躲す。

追撃の一太刀を構えるリインだが、視線で追った先にすでにナギトの姿はなく。

「孤影燎原」

声は頭上から。疾風で踏み込んだ勢いをそのまま跳躍力に変えて跳び上がったナギトはリインの頭上から孤影斬の雨を降らせる。

質より数を重視した「孤影燎原」は一撃の重さは通常の孤影斬に劣るが、広範囲に降り注ぐ斬撃は必然防御を選択させる。そうして足が止まったリインに力任せに業炎撃を叩きつける。

「ぐっ……！」

辛うじてガードしたリインだが業炎撃の勢いに負けて後ずさってしまふ。膝をついたリインを見てナギトは得意げな笑みを浮かべる。

「今日は俺の勝ちかな？」

それに釣られて、ではないがリインも笑んだ。

「いや、まだだ」

そう言って立ち上がり、祈るようにして太刀を構えた。

「まったく……ナギト、君つてやつはどんどん強くなるな。だけど、俺もそう簡単には負けられない！」

出たセリフは闘争心剥き出しのそれ。しかし本音はそうではない。もちろん闘争心もあるが、それ以上に楽しいのだ。力を競うのが、速さを比べるのが、技術を出し合うのが、剣を合わせるのが。

ナギトも同じ気持ちで、それは2人がどうしようもなく剣士である事の証明でもあった。

ナギトとリインは未だ知らない。それが「理合が心地良い」という感情である事を。

「焰よ……我が剣に集え……！」

焰の太刀を携えて迫るラインの姿に、唐突にナギトの記憶がフラッシュバックする。

輝く黄金の剣。

燃え盛る炎。

鋭い斬撃。

「鬼炎斬——！！」

それはナギトの意識に一瞬の間隙を生み、間隙はナギトの肉体を無意識に動かす。過去と符合する脅威を排除するために。

踏み込みの音を置き去りにして、残像の追従すら許さず、まるで雷が落ちるよう
に——

剣鬼七式 外ノ太刀、雷の型 迅雷

「な……」

太刀を握っていたはずの手はビリビリと痺れている。いつの間にか手から離れていた太刀は宙をくるくると舞って今地面に突き刺さった。そして、喉元にはナギトの太刀が置かれていて。そのナギトの瞳には何の色もなかった。

馬鹿な。ナギトからは一瞬も目を離さなかった。それなのに、見失う？確かに焰の太刀は未完成の戦技だ。しかし、今のこの状況はそれだけが理由ではありえない。

「え……？」

間の抜けた声と共にナギトに意識が戻る。思わずナニコレ？と言いたい所であったが、それではあまりに締まらないと思いだや顔を決める。

「どうやら俺の勝ちみたいだな？」

そんなナギトの様子にリインは「はは」と笑い、

「そうだな。俺の負けだ」

あつさりど、認める。ナギトに背を向けると地面に突き立った太刀を回収して慣れた手つきで納刀する。

そのあまりにもそっけない返事や諦感に微妙に腹立たしい気持ちになったナギトだが、過程はさておき初勝利を噛み締める。

ユミルの郷に戻る帰りでリインは先程の様子を尋ねる。

「さっきの、何だったんだ？」

主語がない話の振り方だったが、それが何を指しているのかはすぐにわかる。負けるはずだった模擬戦の結果をひっくり返した、目にも止まらぬ電光石火。疾風を超えるスピードで太刀を振るう雷の如き戦技。

「俺の真の実力ってやつだな」

はぐらかすのはその答えがナギトにもわかっていないからだ。あの戦技を繰り出した瞬間、脳裏にその名前が浮かんだ気がするが正直あの刹那は意識がなかった。というか、あらゆる感覚器は働いているはずなのに脳がそれを認識していないイメージだ。見えているのを見ていない。聞こえているのに聞こえていない。茫然自失、という表現が1番正しいかもしれない。

と、そのままで考えた所でナギトは「フツ」と鼻を鳴らしてしまう。〃記憶を失った俺が自失の状態に陥った時に喪失以前の戦技が使えるとは、何とも気の利いた皮肉じゃないか」と。

「どうかしたのか?」

いきなり笑ったナギトを不審がりつつも心配するリインに「なんでもない」と返して話を戻す。

「アレについては俺も本当にわからん。ただあの動きは俺が意識してやった事じゃない」

「そうか。だったらあの動きは本当にナギトの真の実力かもしれないな。記憶を失う前の」

「でもそれを意識的にできないんじゃないやなあ、つて話だろ。だからアレで勝つても微妙に納得いかないけど、それはそれとして初勝利は嬉しいからリインの敗北宣言を甘んじて受け入れた俺なのであった！という感じなんだけどいいかな？」

「俺が知るわけないだろ」

いつものおふぎけモードにシフトしたナギトに苦笑しながら、リインがツツコミを入れる、そんな日常的一幕なのであった。

☆★

「ナギトっておかしな性格だよな」

「そういえばここ3ヶ月くらい一緒に生活してみても思ったんだけど」と前置きしたリインは躊躇いなくナギトを罵倒した。リインにその意思がなくてもナギトはそう感じた。夕食後、露天風呂で疲れを癒している最中の出来事である。

「別に変な意味じゃないんだ」

「おかしな性格ってそのまま受け取ると悪口なんだけど。もしかしていじめ?」

言いながら、リインの言葉の意味を何となくは理解しているナギト。記憶喪失という人格の初期化にも等しい被害を受けていながら、この3ヶ月で郷の誰とも似つかない性格になった事も無関係ではないはずだ。

ナギトのツツコミを否定して、リインはそう言った意味を説明した。

「掴み所がないって言うかき、ボケたかと思えば真面目になったり、的外れな事を言うてるようで実は穿った意見だったり。少しユン老師を思い出したけど、あの人より人間性の全容が掴めない。ナギトって実は多重人格だったりしないか?」

最後の一文は苦笑しながらリインは言った。冗談なのだろうと理解したが、ナギトは

すごいと感じていた。それが何を思つての事なのかはナギト自身にもわからないが。

「ははは。そいつはたぶん、俺が浮かれてるからだな」

笑つて、ナギトは自分が日々感じている気持ちを言葉にした。『浮かれている』と。

「俺はな、何でかはわからんけどリインと一緒に過ごさせている事がすごく嬉しくて楽しくて、毎日ワクワクしてるんだ。そういうのを浮かれてるって言うだろ。だから今の俺は浮かれ放題…浮かれポンチという事だ。ま、そんな状態だから性格が掴み難いとか言動がおかしいって感じるのは正解だろ」

誤魔化すようで真摯なセリフのナギトにリインはいつものものおかしさを感じるが、修行時代に養つた『観の目』はナギトの言葉に嘘偽りがない事を理解していた。とは言つても自分はまだまだ未熟も良い所のためあまりそれも信用ならないかもしれないが、とリインは自ら嘆息する。

そもそも修行をつけてもらう事になった原因の『鬼の力』にさえナギトは感づいているフシがある。昼間の模擬戦で見せた実力と言い、記憶を失う前のナギトはそれこそ

《劍聖》 クラスの達人だったかもしれない。

そんな風にリインが思考を巡らせている時に露天風呂にもう1人の男が姿を見せた。鍛えられた肉体を湯着に包むのはシュバルツァー家の家長たるテオだ。

「浮かれているのなら、私に対してもっと砕けた口調で喋ってもいいんじゃないかな？」

「父さん」

「おっと、これは男爵。お先にいただきます」

「フフ、構わんよ。露天風呂は皆のものだからな」

2人と軽く言葉を交わしたテオもナギトラと同じく湯に浸かる。

「男爵は命の恩人で、しかも確かな身分もない俺を養ってくれてるわけですからね、軽々しく扱うべからずって自分で決めてるんです」

簡単に、それこそ軽々しく受けている恩を列挙したナギトだが、テオに対して一定の礼儀を保つ意思は固いものだと思われられる。

「それを言うならリインだつて命の恩人だろう。それなのにリインとだけ親しくするのは、少しずるくないか？」

困り顔で、ナギトと同じく冗談めかしてテオは言う。そんなテオの様子に苦笑しながら、

「ずるいって…男爵…、リインは同年代つていうのもあつてこう振る舞ってるんですけど、あなたの場合はそうもいかないでしょう。ユミルの領主つて立場のお方に、ようリイン！」みたいなテンションでは喋れませんって」

言いつつも、どうやら分の悪さを感じたのかナギトは立ち上がる。

「そろそろのぼせそうなんで、先に上がらせてもらいます」

ちら、と見られたリインは「俺はもう少し浸かっていくよ」と視線の意図を理解して返事をする。それを見届けてから「ではでは」と更衣室に向かっていくナギトにテオは真面目な口調で語りかけた。

「ナギト、少し話があるから後で私の部屋に来てくれ」

振り向いて驚いた表情を見せたナギトは続いて柔和でいてニヤリと擬音が出そうな笑顔のまま一礼して了解の意を示すと今度こそ更衣室の扉の向こうに消えた。

それを見たシュバルツァー親子はどちらともなく、やれやれとばかりに肩を竦めたのだった。

☆★

コンコン、とノックをしてから名乗るとドアの奥から「入ってくれ」と言われて従う。入室しドアを閉めてテオと向き合ったナギト。「よく来てくれた」と椅子に座ったまま言ったテオに「いえ」と返し、次の言葉を待つ。

「君がここに来てからだいたい3ヶ月が経つたが……ユミルの郷はどうかかな？」

「良い所だと思います。郷の人たちが良くしてくれるのもありますけど、郷自体も落ち着いた雰囲気です、過ごしていて心地良いです」

「はは、そう言ってくれるのは嬉しい限りだ。温泉なども気に入ってくれてるようだなによりだ。郷の皆とも上手く付き合っているようだしな」

「得体の知れない野郎にこんなによくしてくれる所なんてそうそうないと思いますよ。領主殿の治世がいいのも一躍以上買ってるのは間違いないでしょう」

また笑ったテオが「世辞はよしてくれ」と言い、それから本題に入るようだった。

「さて、ラインが来春には帝都近郊の士官学院に入学する……いや、入試を受ける事は知っているか？」

「ああ……確かトールズ士官学院でしたか」

トールズ士官学院。獅子戦役の覇者、帝国中興の祖であるドライケルス大帝が建てたという名門。当時はなかった貴族と平民が共に学ぶ士官学院だ。

「単刀直入に言おう。ナギト……君もトールズ士官学院に通う気はないか？」

テオのいきなりの提案にナギトは言葉に詰まる。

「……さすがにそこまでしてもらおうわけにはいかんでしょう」

正直な話、トールズ士官学院に入学する事に魅力を感じてはいる。もはや行くべきという使命感すらあるほどだ。

しかし、ナギトは未だシュバルツアー家に養ってもらっている身。ろくにミラを稼ぐ事もできない肉体派ニートだ。そんなやつが名門トールズに入学しようとすれば、入学までの月日をミラ稼ぎに奔走するしかないが、ろくに勉強もできずに入試を受ければ落第は確実だ。

つまり入試までの月日を勉強に充てて、士官学院でかかる費用をシュバルツアー家に肩代わりしてもらうしか選択肢はない。ナギトがトールズ士官学院に通うとすれば。

だが、命の恩人にそんな事をしてもらうわけにはいかない。

だからそう言ったのだが、やはりテオは言葉の意味を理解したようで、薄く笑みながら背もたれに身体を預ける。

「ミラの事なら気にしなくていい。1人も2人も変わらない」

「変わるでしょ。1人から2人って倍かかるでしょ！」

テオの言葉に思わずツツコミを入れるナギトにテオは優しげで余裕を醸した表情を崩さずに言う。

「私もユミルの領主だ。それなりの蓄えくらいある」

「そうは言っても……」

申し出自体は有難いし嬉しいが、やはり気が引けるといのがナギトの断る理由になっっている。赤の他人にそこまでしてもらおうわけにはいかないのだ。

「勉強が嫌いか？私に指図されて学院に通うのが嫌なのか？そこまで遠慮するわけを聞かせてくれ」

「今の俺が言った所で説得力ないですけど、いくらシュバルツアー家に貯蓄があるからと言って赤の他人である俺が食い潰すわけにはいかないでしょう」

ナギトがテオの提案を断る理由を説明すると、テオはおおげさにため息をついた。「そんな下らない理由か」と。

「君はナギト・シュバルツアーだ。誰が何と言おうと記憶が戻るまで君はナギト・シュバルツアーだ。君は私の家族だ。私の息子だ。まさか親子だと思っていたのは私だけだったのか？」

その想いに、今度こそナギトは本当に言葉を失った。

自分は確かに「ナギト・シユバルツァー」だ。しかしそれは仮初の名前。記憶が戻るまでのただの名称だったはずだ。それがいつの間にかシユバルツァー家の一員である事を示す名になっていた。

自分の名前さえも忘却した男を、ほんの少しだけ家の事を手伝っているだけの男を。息子として認め、学院に通わせるなんて。

なんて……、人間の大きい男なのだろう、テオ・シユバルツァーという人物は。

ナギトはテオの問いかけに「いいえ」と答える。

「いいえ。俺はナギト・シユバルツァー……あなたの息子です」

言うど、テオは満足げに微笑んだ。対するナギトは少しだけ泣きそうな笑顔で。

「ならば、納得してくれるだろうか？ 子が親に何かしてもらうのに負い目を感じる必要はない」

そうだ、テオの言う通りだ。親が子を愛するのに理由は要らず、子が親に愛を求める

のは当然の事だ。

「それでも君が遠慮すると言うなら、私から一つお願いをしよう。どうかリインを見守ってやってくれ」

さらにテオは「お願い」という逃げ道まで用意してくれる。ナギトを学院に通わせるのはリインを見守るといふ依頼を達成させるための手段だから、という認識の逃げ道を。

「わかりました。その依頼、このナギト・シュバルツアーが承ります。……あなたには敵いませんね、親父殿」

ナギトからの呼び方の変化にテオは一瞬だけ目を丸くして、やはり微笑む。

「そう容易く父超えを為せると思うな、ナギト。今はまだ、父の偉大な背中に甘えていなさか」

テオの冗談にナギトは「ふふ」と笑い、つられてテオも笑う。

こうしてナギトがツールズ士官学院の入試を受ける事が決まったのであった。

回想くエリゼとナギトく

エリゼ・シュバルツアーにとつて帰郷とはある種の一大イベントである。

というのも、想い人であるリインが郷にはいるからである。

リイン・シュバルツアー。シュバルツアー家の長男にしてエリゼの兄。しかし血縁はなく、それを知らされた時のショックは計り知れない。

この恋は許されるのだと胸が踊った。いや、おそらくその感情が恋であると理解したのもリインと血縁がないと知った時だ。

その時からエリゼはまともにリインの顔が見れなくなり、そのまま帝都にあるアストライア女学院に入学した。その事でリインに嫌われていやしくないかエリゼは気が気ではない。

のもあるが、今回はそれとは別に心配の種がもう一つ。

手紙にあつた新しい家族、もう一人の兄についてだ。

どうやら冬の雪山で倒れてた所を助けたら記憶喪失で自分の名前さえも忘れていたその人物を、シュバルツアー家は持ち前のお人好しで保護、家族として扱っているという。

手紙の内容から彼が悪人でない事は伝わってくるが、本当はすべて嘘でシュバルツアー家の財産を狙った詐欺師かもしれない。

シュバルツアー家は父も母も兄もお人好しだ。自分がそうじゃないとは言えないが、帝都で数多くの人と触れ合っている分だけ人を見る目はあるつもりだ。

自分だけでもその彼を警戒しておこう、と静かに決意してケーブルカーを降りたのだった。

☆★

ナギトがシュバルツアー家に保護されてから……否、シュバルツアー家の一員となつてから半年以上が経過し、季節は夏、8月になっていた。

相変わらず記憶は戻らないが、それなりに郷の人たちとは仲良くやっついていて充実した日々だ。ナギトが苦手だと言う勉強の時間が長いのは来るトールズ士官学院の入試を突破するためだ。今はリインにつきつきりで教えてもらっている状況だ。

今日はシュバルツアー家の長女であるエリゼが夏期休暇という事でユミルの郷に戻ってくる日となっている。

ちなみにそんな日でもリインは勉強にかける時間を削って妹に割く気はないようで、

それとなく促したナギトは「勉強をサボるつもりだろ」と言われてしまった。

「出迎えに行く」と言うリインに着いてナギトもケープルカーの発着場でエリゼの帰郷を待っていた。

「なんだ、緊張してるのナギト？らしくないな」

エリゼを乗せたケープルカーが近づいてくるにつれてナギトの表情が硬くなっているのを見たリインが言葉をかける。

「まあ、な。ルシア夫人に似た美人が出てきたら俺の初恋が始まっちゃうかもしれないし、今からドキドキだ」

ナギトがそう笑うと、リインは途端に睨んできた。割とマジな殺気も込めてあるのでシスコンぶりがわかるというものだ。

「…じ、冗談だって。それより、緊張してるのはお前の方だろ？」

「む、気づいてたのか。さすがだなナギト」

ナギトの指摘でリインが真面目な表情になり、話を逸らせた事にほっとするナギト。

「そりゃ気づくさな。親父殿や夫人…それにお前の溺愛っぷりでエリゼがいい子なのはわかる。そんな相手にお前は嫌われてるかも、なんて言ってるし…、可愛い年頃の妹に嫌われないかどうかで緊張しない兄ってあんまりいないと思うぞ」

「それもそうだな」

とリインが顔を伏せて少ししてエリゼを乗せたケーブルカーが到着した。

「ほれ、来たぞ」とリインの背を叩くとナギトは大仰に笑って見せる。リインもそれで笑顔を思い出し、発着場に姿を見せたエリゼを出迎える。

「おかえり、エリゼ。帝都からの長旅、ご苦労様」

「ただいま戻りました、兄様。わざわざ出迎えてもらって申し訳ありません。……それ

で、その、そちらの方が……？」

「ああ……、ナギト」

兄妹の再会に水を差すようなバツの悪さは微塵も感じさせず、ナギトは優雅に一礼する。男爵家の一員にふさわしい作法で。

「はじめまして、マドモワゼル・エリゼ。半年程前からシュバルツアー家でお世話になっております、ナギト・シュバルツアーです」

言つて、ピシリと正した姿勢を和らげ、硬くなつた表情を崩して、貴人らしく構えていた雰囲気霧散させ。ニヤリと笑う。

「気軽にナギトお兄ちゃんつて呼んでくれていいぜ！」

「君はそうやっていつも小ボケを挟まないと気が済まないのか!？」

すっかり挨拶したかと思えばすぐにいつもの調子に戻ったナギトにリインが鋭いツツコミを入れる。そんな二人の様子を見てエリゼもくすくすと笑う。

「いやいやいや！エリゼを笑わせるためだつてば。久々の兄妹の再会が笑顔じゃないとか嫌じゃん？ほら、笑顔で行こうぜ、スマイル！」

掴みかかったナギトの言葉を聞いてリインはハツとする。たしかに再会したエリゼの表情は硬かった。それこそリインと同じように緊張していたようだ。

まさか、笑顔で再会をさせるためにわざわざピエロを買って出たとも言うのだろうか。

「まさか……ナギト、そのために……？」

「フツ、まあな」とサムズアップで答えるナギトの頭を叩くリイン。こういう反応のナギトは起こした問題を口先八丁でなんとかした時に見れるものだ。

「いってえ!?!おま、マジで叩いたな馬鹿！」

「うるさい！ だいたい俺を差し置いてお兄ちゃん呼びなんてさせるわけがないだろう！」

そんな二人を見てエリゼは「仲が良いんですね」と笑い、それでひとまずナギトとリインも不毛な争いは終わった。

ひとしきり笑い終えたエリゼは「自己紹介がまだでしたね」と言つて、綺麗なカーテシーをした。

「はじめまして、エリゼ・シュバルツァーと申します。よろしくお願いしますね、ナギトさん」

こうしてひとまずの挨拶を交わした三人はシュバルツァー邸へ戻っていくのだった。

☆★

「あの、兄様……」

遠慮がちに、手も伸ばし切らずにかけられた声にナギトとリインは立ち止まった。夕食後のシユバルツアー邸の廊下での事である。

「……すまない、エリゼ。今は少し忙しいんだ。急ぎじゃなかったら、次の機会でも構わないか？」

リインの言う「忙しい」とはナギトの勉強の事だ。今までナギトがどう生きてきたのかはわからないが、基礎学力が低過ぎたため、このままではツールズ士官学院入学など夢のまた夢といった感じのせいで、冗談じゃなく一分一秒が惜しく、勉強に時間を充てたいというのは本当の話だ。

「この馬鹿。久しぶりに会ったんなら家族サービス優先してやれ」

しかし、それは久しぶりの兄妹水入らずの会話を邪魔する程ではないとナギトは考えていた。

「そう言つてまたサボるつもりじゃないだろうな？」

ジト目でナギトを見るリイン。前例がいくつもあるせいだが、今回ばかりは純然たる善意によるリインの監視からの脱却だ。

それに、今日エリゼが帰つてきてから今までリインとエリゼは二人きりでろくに喋つていない。

ケーブルカー発着場からエリゼをシュバルツァー邸まで送つた後は日課の八葉一流の修行、夕食を挟んでナギトの勉強だ。夕食時には家族の会話があつたがリインとエリゼの間にあつたのは当たり障りのない会話だけだつた。

そのため善意で、本当にただ気を利かせただけなのに睨まれたナギトは呆れ顔で「お前な…」と言つた所で、エリゼが引き下がつた。

「いえ、いいんです。大した用事でもなかつたので」

「そうか…すまないな、エリゼ」

リインの返事を聞くとエリゼは足早に自分の部屋に入つていく。

それを見たナギトは「バーカ」と言つてリインの腹を軽く殴る。「なんだよ」と不満げなリインにため息をついて、頭を切り替える。

「いいや？ 今日も勉強憂鬱だなんて話」

☆★

本日分の勉強が終わり、部屋で一息ついたナギトはおもむろに立ち上がるとエリゼの部屋の前に立ちノックした。リインは一足早く温泉に浸かりに行つていいる。

「はい」という返事に「ナギトお兄ちゃんですよー」と名乗る。僅かな沈黙ののちに入室が許可されるとナギトは遠慮なくエリゼの部屋に入り後ろ手に扉を閉めた。

「夜更けに淑女の部屋を訪ねるとは、どんな了見ですか？」

言葉の節々に感じる刺々しさは決して勘違いではなかった。第一印象は良くもなく悪くもなく……だったはずだが、昼間も夕食後もリインを独占してしまった

事で颯楚を買つたのだろうと当たりをつけるナギト。

「おっと、のっけから手厳しいなあ。別に夜這いに来たわけじゃないから安心してくれ」
「ベッドに座っていい？」と聞くと「ダメです」と即答される。仕方がないのでそのまま用件を話すことにしたナギト。

「いやー、謝ろうと思ってるさ」

「あなたに謝られるような事はされた覚えはありませんが」

「すげなく言葉をぶった切られる感じを見て、警戒されてんなー」と思うナギト。しかし、そんな理解はおくびにも出さず、続くセリフを吐き出す。

「今日一日、リインを独り占めした事に対してだよ」

「なっ！……んの事がさっぱりわかりません」

「取り繕えてねーよ」とエリゼの反応に苦笑しながらツツコミを入れるナギト。

「俺も郷に来て半年、ちよつと不思議に思つてた事があつてな」

そう前置きしてナギトは語る。

無類の人たらしであるリインに恋人がいないのが不思議だった事。郷の女連中はリインと親しげにしながらもどこか一線引いたような付き合ひだったこと。

それがすべて、エリゼに遠慮してるなら辻褄は合うという事。

「ぶつちやけエリゼつてさ、リインの事好きだろ。男として」

ナギトの言葉に「違う」とは言えず、さりとして簡単に肯定もしたくない。それゆえエリゼの返事は無言であつた。

「オーケー、オーケー。返事はなくていい。察するに兄妹だからと封じていた気持ちだが、血縁じゃないって事実で枷が外れてリインの顔をろくに見れないって感じだな、わかるとも」

自分の推測が当たっていた事に気を良くした風のナギトはエリゼの返事を待たずに喋り続ける。

「しかしそのせいでリインには『嫌われてる』と誤解されてしまった。誤解を解く事もないまま帝都の女学院に入学、後悔しつつ学生生活を送っていたが、それを払拭しよう」と帰郷、リインの誤解を解くべく動くも兄を名乗る不審者に機会を邪魔される――と」

「いえ、そんな――」

ナギトの的外れな指摘に否定しようとして言葉に詰まるエリゼ。ナギトの指摘で間違っているのはエリゼが最も突かれたくない点だ。

つまり、後悔を正そうと、リインに嫌っているわけがないと言おうと決意して帰ってきたはずなのに、いざリインの顔を見ると顔は赤くなって頭は真っ白になって、ろくに喋らずそっけない返事をしてしまう事。

そこにナギトが入り込む余地はなく、むしろ夕食後の一幕では手助けしようとしてくれた程だ。

ゆえに、新たに兄を名乗るこの男がその一点を間違えるはずがなく、あえて指摘しないのは優しさでも言うのだろうか。

「それについては本当にすまんの一言しかない。俺がいなきやもつと早く仲直りできてたかもなのに」

「そんな事は――」

言いかけて、言い淀む。否定すべきで、甘えたい答え。エリゼに勇気があればすぐに終わる問題を、長引かせてる自分自身を嫌いにならないように。

「まあ、今日はチャンスはなかったけど明日の午前中ならリンの予定は空いてると思うし、その時に話したらいいんじゃない？」

今日エリゼがユミルに到着したのは昼過ぎだった。午後からリンは八葉一刀流の修行だったり勉強だったりでナギトに付きつきりになるが、午前中ならナギトは家の手伝いで忙しくリンはフリーになる。そこを狙えとナギトはエリゼに言っているのだ。

「俺の方からもリインにはいい感じに伝えておくれ、明日にでも言いたい事言えばいいよ」

ナギトの言葉にエリゼも “そこまでお膳立てされたらやるしかない” という気持ちになる。

ナギトの提案がなかったら、きつとこのタイミングでリインの誤解を解く事はできなかっただろう。……と言うには少し早いが腹は決まった。

エリゼが感謝を伝えようと口を開きかけた所で、ナギトはにんまり笑っておどけて見せる。

「エリゼに勇気が出るなら、だけどね」

「~~~~~っ！」

見透かしたようで核心には触れず、しかし最後の最後で悪戯染みた表情で見透かしたような言動のナギトをエリゼは部屋から叩き出した。

締め出された扉の向こうを想像して少し笑うと「んじやあ、おやすみ」と軽々しく去っていくナギトであった。

ナギトの足音が遠ざかっていくのを確認して、扉にずるずると寄り掛かるエリゼ。

「まったく、礼も言わせてくれないんですから」

あの悪戯っぽい笑顔を思い出して、エリゼは自覚なく微笑んだ。その頭はからはすでにナギトが詐欺師かも、なんて考えはなくなっていた。

「でもほんの少しだけ……ありがとうございます、ナギト兄様」

翌日、エリゼは無事にラインの誤解を解き、気兼ねなく夏期休暇を満喫するのであった。

回想く運命の時は未だ遠くく

「どうだった、って聞くのは少し躊躇うような顔だな」

学科試験が終わり、口から魂が出そうなナギトを見てリインは苦笑した。

ナギトがシユバルツアー家の一員となり、およそ一年が経過し、二人はツールズ士官学院の入試を受けるために帝都近郊の町トリスタに来ていた。

「いや、マジ…冗談じゃなくすまん。たぶん落ちるわ」

「あんなに付きつきりで教えてもらったのによお…：ほんと情けない」と今にも泣きそうなナギトだったが面接で呼ばれると表情を一変させた。

「あとは面接に賭けるしかないな。じゃつ、行ってくるー！」

ピツ、とハンドサインをしてキリツとした顔で「失礼します」と面接会場に入室した

ナギトである。

面接官は3人。ビン底眼鏡で視線が読めない胡散臭い青年に、いかにもチャランポランしてそうな赤い衣服に身を包む金髪の青年、筋骨隆々の肉体は魔獣かと勘違いする壮年の髭面。

入室してすぐにナギトは違和感を感じた。3人から向けられる視線が、少なくともいち士官学生希望者に向けるようなものではない事に。

思わず眉根を上げそうになるが、面接官の前で変顔をするだけの度量はない。受験番号と名前を名乗り、着席するナギト。

妙な視線とは裏腹に面接自体はスムーズに進んだ。ツールズ士官学院を志望した理由は？学院に入って何をしたいのか？軍事国家の士官学院に入学する意味は？そういった質問がいくつが続き、ナギトは用意していた答え、あるいはアドリブで回答した。15分もせずに面接は終わり、退室が許可された所で立ち上がると金髪の青年がナギトを呼び止めた。

「もし君がツールズに入学したとして、卒業する頃には色々な力を持つ事になるだろう。

個人の武、軍事に関する知識、トールズ卒業生のコネクション……そういった力を、君はどう使う？」

質問の意図を考える。このタイミングの質問だ、おそらく面接のマニュアルにはない質問だろう。だが、この質問の内容には帝国人としての模範回答もあるように思える。

“帝国のために”というのが軍人志望なら一番正しい。

しかし……

「自分の大切な人たちを守るために」

しかし、そういった答えは求めていないだろうと感じた。

リベールの異変を解決するのに遊撃士と共闘したオリヴァルト・ライゼ・アルノールなら。

「……そうか。わかったよ。ありがとう、これで面接は本当に終わりだ。呼び止めて悪かったね」

「いえ、失礼します」

再び一礼すると今度こそ退室したナギト。校舎から出てツールズ士官学院の敷地の外に出て、大きく息を吐く。

あつぶねえ！ちようあぶねえ！あの顔、どつかで見た事あると思つたらオリヴァルト皇子じゃねーか！土壇場で理事長つて事思い出して良かった！

校門の前で過呼吸気味にあわあわしてるナギトに「なにしてるんだ」と声をかけたのはリインだ。

「お、リイン。面接は終わったのか」

「ああ、どうやら受験番号が連番でも面接官は違う人みたいだな。俺もナギトが呼ばれてすぐに別の部屋で面接を受けたよ」

「そっか、どうだった？」

「まあ、悪印象じゃないと思うけどな。ナギトの方は？」

「俺も悪かねーとは思う」

そんな事を言いながら、二人は坂を降る。トールズ士官学院からトリスタ駅に向かって。「二人で合格するといいな」なんて話しながら。

☆★

「おー、ここが帝都か。でけーな。もう駅からしてでかい」

「少しは落ち着けナギト。そんなんじやお上りさんみたいだぞ」

「誇張なくお上りさんだよ俺は。さて、まずはホテルにチェックインしてから観光だな」

「そうだな。一泊だけだから高級なホテルを選んでもらった父さんと母さんに感謝だ」

ナギトとリインはトリスタでツールズ士官学院の入試が終わると、そのまま帝都に来ていた。緋の帝都ヘイムダル、人口88万人の帝国一の大都市だ。

記憶を失って初めてユミルを出たナギトに帝都を見てこいと言ったのはテオだった。案内役はリインでこれまで一年、勉強なんかを頑張ったご褒美のようなものらしい。

一泊二日の観光だが、ナギトは楽しみにしていて、しかし逸りそうになるのを自制してまずはホテルにチェックイン、荷物を預けてから帝都を堪能しようと思っていた。

ホテルはガルニエ地区にあるデア・ヒンメル。導力トラムで近くまで行き、そのままホテルに向かうーと見せかけて。

「リイン」

「ああ、気付いてる」

駅からこつち、二人を尾行しているか気配があった。数まではわからないし、どんな目的があつて二人を尾行しているのかわからないが、八葉に連なる者として最低限、気配の有無は感じ取れた。

二人は何気なくを装って路地裏に入った。道のわからないお上りさんだから、という体で。

すると狙い通り、気配は近付いてくる。曲がり角を折れた先で待ち伏せしていたナギトは躊躇いなく太刀を尾行者に突き付けた。

「きやつ!?!」

「おっとお!?!」

現れたのは男女一組だった。いちやいちやする様はどう見てもカップル。水色の髪を持つクールビューティと赤髪の2、5枚目の男。

「おやや?こりや申し訳ない。人違いみたいだ」

太刀を納刀したナギトはそう言ってカップルに低頭する。

「いや、こつちも悪かったなア。ここは穴場だからよ、誰もいねーと踏んでたんだが。なア、ルーシー？」

「ええ、そうですねレクさん。先客がいるなら仕方ありません、今日はホテルで休憩しましょう」

微妙に艶かしい会話に若干腹を立てつつ、いちやつくカップルを見やるナギト。

「しっかし、お前さんらも男同士とは中々好きもんだなア。ま、今回の事は口外しねエからよ、じゃあな」

カップルのやり取りで、ナギトらが迷い込んだふりをしたこの場所は恋人たちの秘密の場所らしかった。スリルを感じるプレイをするのいうつつけの場所なんだろうと理解する。

去っていくカップルを見届けて思い切り地団駄を踏むナギト。しきりに「爆発しろ」と唱えるナギトに苦笑しながら再び気配を探るラインだったが、すでに二人を尾行していた気配は消えてしまっていた。

「いつそあの二人が尾行してた奴らだったらどれだけ良かったか。躊躇いなくぶった斬るトコだ」

同じく気配の消失を確認したナギトが悪態を吐く。

「ああくそ、タイムロスだ。さっさとホテルにチェックインしようぜ」

ユミルでは1年間ついで女つけのなかったナギトは腹立たしさを隠そうともせずホテルに歩いていく。リインもそれについて行くのだった。

そんな二人の様子を眺める、二対の瞳。

「行った、みてエだなア」

「…はい、助かりました。レクターさん」

それは先程のカップルであった。尾行をしていたのは真実、このカップルだったのである。本当は二人は恋仲ではないし、ナギトラを尾行していたのは二人だけではなかったが。

「しかし咄嗟とは言え、お前と恋人のフリをするなんてなア…クレア」

「ふふ、咄嗟だったせいでしょうか…確か、ルーシーという名前は…」

「だー、それについては言うな。つーか俺が前にふざけて名乗ったレクって名前はどこで聞いたんだ?」

「それは企業秘密というやつです。…今は彼は放っておくしかないようですね」

「…だな。厄介極まりねー奴だと思ってたが、あの様子…もしかしたら記憶を失ったって噂は本当かもな」



翌日の朝、ホテルのチェックアウトの手続きをリインに任せてデア・ヒンメルを出たナギトは同地区にある帝都歌劇場をぼうと見やる。

確かここには《蒼の歌姫》とかつてスターがいたよな……名前はヴィータ・クロチルダだったか。なんて考えていると歌劇場から当のヴィータが姿を現し、タイミングの良さにナギトは鼻水を吹き出した程だった。

さすがにそんな反応をされるのは慣れていないのか、ヴィータはナギトを見ると驚いた表情をするが、すぐに艶然とした笑みに切り替えて近寄ってきた。

「見ない顔ね、帝都は初めてかしら？」

「はい。まさかあのヴィータ・クロチルダさんに会えるとは思ってませんでしたけど」

「あら、私の事を知っているのね。帝都は広いからゆっくり見て回るといいわ」

「ありがとうございます」とナギトが言った所でリインがホテルで手続きを終えて出てくる。ナギトの名前を呼びながらきよるきよるしているので、すぐにリインと合流する

事にした。

「では、すみませんけどこれで。連れがいるので」

「ええ、帝都を楽しんで。できれば歌劇場のS席チケットでもあげられたら良かったのだけど」

「はは、それはサービスが過ぎますね」

笑って、ナギトはヴィータとわかれてリインと合流した。

「何をしてたんだ」と問うリインに自慢げに、「歌姫に口説かれてたんだよ」と鼻孔を膨らませて、ヴィータがいた方向を見る。手でも振ってくれるかと思ったが、すでにそこにはヴィータの姿はなかった。

「アレレ？」

「ふう……ナギト、夢は寝てる時に見るものだぞ」

「俺が白昼夢見た前提で話すのやめない？」

なんてやり取りを交わしながら二人は帝都観光を続ける。

その二人の背中を見届けるのは先程ナギトと言葉を交わした歌姫。

「フフ、まさかこんな所で特異点と会えるなんてね。てつきり私の騎士にやられたもの
だと思っていたのだけど……」

呟くと、また艶然と微笑む。

「でも、私に気づかないなんて案外鈍いのかしら？一緒にいた子も気になる事だし、少し
調べてみるとしましょうか」

☆★

太陽はすでに中天を過ぎ、そろそろ列車に乗る時間が近づいてきたナギトとリインが最後に訪れたのはドライケルス広場だった。

「ほほー、あれがバルフレイム宮か。でけーな」

ドライケルス広場の奥、憲兵の守る道路の先に見えるのが皇族の住まう宮殿、バルフレイム宮だ。巨大国家であるエレボニア帝国の皇帝が住まうにふさわしい偉容が見て取れる。

「んで、中央にある像が……」

「《獅子心皇帝》ドライケルス・ライゼ・アルノールの像だな」

ナギトの言葉を継ぎつつ、買ってきたアイスを手渡したりイン。

《獅子心皇帝》ドライケルス…先日ナギトたちが受験してきたツールズ士官学院の創設者でもある人物で、帝国における中興の祖であり“大帝”と称される長い帝国史においても際立つ存在である。

「もつと近くで見よう」と言うナギトと一緒にドライケルスの像の元に行く事にした二人。

「ほー」としきりに感心しつつ像に近づくナギトを襲う、唐突な頭痛。

そして、フラッシュバックする光景。

「言わせるかよ」

演説する宰相を襲う一発の銃弾。

割れた仮面から現れる見知った顔。

白銀の空中船艦から地上に降り立ち、正規軍を蹂躪する巨大な人型兵器。

そうして始まりを告げる内戦。

そのすべてが一瞬の事で、ナギトには何が何だかわからない。

当然頭を押さえて苦悶の声を上げたナギトにリインは尋常ではない様子を感じ取り

「大丈夫か？」と心配する。

「銃声……」

「銃声……？俺には聞こえなかったが……」

リンのその様子にナギトがたった今、垣間見た光景は現実のものではないと理解する。

「そうか……ならいいんだが。近頃、ここで銃殺事件なかったか？ 割りと近代だと思っただけだ」

頭痛は抑まりつつあり、ナギトは先程の光景が過去の事件を目撃したものではないかと推測してリンに尋ねるが答えは否であった。

と、なるとあの光景は何だったのだろうかと考える。

今までもあいつがフラッシュバックはあったが、どれも記憶を失う以前の自身の記憶である実感があつた。

しかし今回のそれは自分の記憶であるという実感が薄い。

というか三人称視点で、どこかの空からこの一幕を見ているような感覚だった。

それはとても奇妙で。しかしナギトに答えを出せるはずがなく。

喪失した記憶と同じく、「どうしようもない」と結論したナギトはにかつと笑って手に持つアイスクリームをリインに見せつける。

「アイスは落とさなかったぜ。セーフ」

そんないつも通りのナギトにリインは嘆息して「そうだな」と相槌を打つ。

「でも、つらい時はちゃんとそう言ってくれよ」

いつもと変わらぬリインの気遣いにナギトも作り笑いから柔和な微笑に変化し、素直に礼を言うのだった。

それから二人はアイスを食べ終わると帝都駅に向かい、列車に乗りユミルへの帰路に着くのだった。

第一部 記憶の淵から

ナギトの立ち位置

ナギトがトールズ士官学院に入学してから半月が経過し、本格的な授業が始まり、所属するクラブなども決める時期になっていた。

放課後、ホームルームまで終わり、クラスメイトたちもまだ上手く距離感が掴めていないためか小さいグループか個々人で教室を出て行く。去り際の挨拶こそあるが、その程度だ。

小さいグループとしてナギト、リイン、エリオット、ガイウスの四人で形成する仲良し四人組があった。マキアスやユースもたまにグループに参加するがお互いを敬遠して本格的にⅦ組男子組を作るつもりはないらしい。

その内クラブ見学のためにグループも解散していく。教室に残されたのはナギトとリインのみであった。

「どうする、一緒に見て回るか？」

「いや、やめとこ。お互いの意見に引っ張られるのも嫌だしな」

ラインの提案をすげなく断るナギトであったが、その返事にはラインも納得を示して別々で行動する事になった。

「さて……」

ナギトが視線を落としたのはツールズ士官学院のクラブの一覧と簡単に活動内容が記載してあるプリントだ。

まだクラブに所属するかどうかも決めていないナギトであったが、所属するならば、というクラブにいくつか目星をつけていた。

まずグラウンドに行ったナギト。目的は馬術部だったがラクロス部の方に見知った金髪が見学しているのを発見して話しかける事にした。

「よっ、アリサ」

声をかけられて振り返ったのはアリサ・R。彼女の気の強さを表しているような赤い瞳が特徴的だ。

「あなたはナギト・シユバルツアーだったわね。…シユバルツアーという事は彼とは双子かしら？ それにしてはあまり似てないけど」

「リインの方が男前だって？ やかましいわ！」

「言ってるから」

いつものように小ボケを挟んだナギトはすっかりツツコミを入れてくれたアリサに内心感謝しつつ「ラクロス部に入るの？」と尋ねる。

「ええ、そうしようと思ってるわ。あなたはさすがにダメよ、ラクロス部は女子限定だもの」

「わかってるよ。あ、でもマネージャーとかなら……」

「ダメよ」とナギトの提案を即座に両断するアリサ。あまり親しい間柄ではないため言うのを避けたが、何となくナギトからいやらしい波動を感じたためだ。あるいはそれもツツコミ待ちのボケなのかもしれないが。

アリサの返事にナギトが肩を落としたのも一瞬で、その後はすぐにいつもの表情に戻り「ところで」と話題の転換をした。

「そろそろリインと仲直りするつもりとか、ない？」

それを聞いたアリサは話しかけてきた本題はこちらだと察する。ナギトはこうした喧嘩の仲裁のような事を良くやる立場に落ち着いていた。事あるごとに対立するマキアスとユーススの口論をスマートと言えるやり方ではないが調停するのもナギトで、そのナギトなら入学式後のオリエンティングで微妙な仲になったアリサとリインの間を取り持ちたいと考えるのは当然の事だ、と。

正直な話、仲直りはしたい。というか自分が一方的に悪いから謝りたいと思っているアリサ。しかし、どうしてもあの瞬間を思い出すと気恥ずかしさが勝って未だに謝れずにいるのだ。

アリサにとってナギトが持ちかけた話は渡りに船と言えた。ナギトならどうにかラインの都合も付けてくれるだろう。

「もしかして恥ずかしいのかな〜?」

俯いて考えるアリサを見てそう煽るナギトをアリサはキツと睨みつけ、言い放つ。

「私の問題なんだから、私がケリを付けるわ。申し出はありがたいけど、引っ込んでいてちょうだい」

やはり気の強さを隠しきれない赤い瞳の決意を見てナギトは一瞬だけ優しく微笑むと「遅くならんように頼むぜ」とすぐにいつもの調子に戻って去っていく。

「余計なお世話よ!」というアリサはナギトの背中に言葉を差し向けると、ラクロス部の見学に戻るのだった。

アリサの返事を聞き届けたナギトは今度こそグラウンドに来た目的である馬術部の見学に行く。するとそこには赤い制服の先客がいた。

「よう、ユーシス」

「…貴様か」

手を挙げて挨拶すると一瞥されて終わる。それでもめげずに「馬術部に入るつもりなのか？」と聞く。

「ああ。今は実家にいる相棒を満足に走らせる事ができるのは馬術部くらいだろうかな」

ユーシスの実家、すなわちアルバレア公爵家。ユーシスには相棒と呼ぶだけの愛馬がいるらしいが、誇らしげに語る様子から名馬である事が察せられた。

「貴様も馬術部に入部するつもりか？」

今度はユーシスからの質問にナギトはニヤッと笑って、

「ユーシスがどうしても、つて言うなら考えてやってもいいけど？」

「どうしても入部するな」

芝居がかった様子で決めたナギトだったが、ユーシスのつれないどころか突き放すような返事に「ぐはっ」と言ってるで殴られたかのような動作をする。

「くっ……この、照れ屋さんめ！」

が、実際はまるで効いておらず、これまたうざったらしい動きでユーシスに詰め寄るが、ユーシスは無視して部長と話に行く。ユーシスは早くもナギトの扱い方を覚えてきたようだった。

その後、体験という形で乗馬させてもらったナギトだったがイマイチぴんと来ず、馬術部は候補の一つに留まるのだった。

次にナギトはギムナジウムに向かおうとして、途中のベンチでうとうとうとしている。フィー・クラウゼルを発見した。数秒見つめていると、視線に気付いたのかフィーは目を開けてナギトを視認した。

「あ、ナギト」

「よう、フィー。昼寝か？」

特別用もなかったが、少しだけ話そうかと質問をなげかけ「ん」というフィーの返事に笑って「今から寝てたら夜に眠れないんじゃない？」と尋ねた。

「心配無用。いつでもでも休息を取れるようにしてるから」

フィーの言葉に「ふうん」と興味なさげに返事をしたナギトだったが、そのセリフを頼りにフィーの正体にあたりをつける。

先のフィーの言葉は“休める時に休む技術”を習得している、というように聞こえた。それはつまり、常日頃から安心して眠れる環境にいなかった事を暗示している。加

えて、幅広い戦局に対応できる銃と剣が一体化したブレードライフルは猟兵が好んで使う得物だ。

身のこなしと引き、実戦慣れした立ち回りと言い、ファイが元猟兵なら納得できる…というのがナギトが出した結論であった。

「ところでファイは何かクラブには入らないのか？」

「今のところその予定はないかな」

「そうか。まあ花の学生時代だし何かのクラブで青春の汗を流すのもいいと思うけど」

「ん、そだね。ナギトは？」

「候補がいくつあって感じ。屋内の体を動かさない美術部とか吹奏楽部とかは入る気もないけど、水泳部とかフェンシング部、あとチェス部は覗いてみようかなって」

「そうなんだ。私は…どれも興味ないかな」

「つれないな、いいけどさ。じゃあそろそろ行くわ。昼寝もほどほどにな」

フィーと軽妙に会話を終えたナギトはその足でジムナジウムに入る。まずは目的の一つである水泳部の見学に行くとする。

プールサイドに足を運ぶと、そこにはナギトより一足早く見学に来ていたラウラがいた。

ラウラ・S・アルゼイド。帝国最高の剣士とも呼ばれる《光の剣匠》ヴィクター・S・アルゼイドを父に持つ青髪の少女。

アリサやユースにしたように「よう」と話しかける。

「む、そなたは…ナギトだったな。そなたも水泳部の見学に？」

「そうだよ」と返事をしてプールに張つてある水に触れる。

「さすがに冷たいな」

「春先とは言え、まだ水は冷たかろう。だからこそ精神を鍛えるのにつけてつけだと思
うのだが……その様子だと水泳部に入る気は失せたようだな？」

ラウラの言葉に「バレたか」と肩を竦めるナギト。

「ラウラの水着姿には惹かれなくてもないが……夏の水練の授業までとっておく事にしよ
うかな」

「フツ、冗談はよすが良い。そのようなセリフは、その嘘くさい笑みを消してから言う事
だ」

「手厳しいな。まあそこがラウラの魅力でもあるんだが」

嘘くさいとラウラに言われた、胡散臭さマックスの笑顔で減らず口を叩くナギト。し
かしその言葉は本心でもあった。ナギトはラウラに惹かれつつある。まだお互い名前
だけしか知らないような間柄ではあるが、旧校舎にてその剣筋を見た瞬間から、心を奪

われたのだ。ガーゴイルを屠った一閃。真つ直ぐな剣筋に。

本当の事を言つて騙す、というある種詐欺師じみた手際でラウラのしかめっ面を引き出したナギトはその笑顔のままに踵を返す。

「藪蛇かな。じゃあ俺はとつとと退散するわ」

来て早々であつたがラウラの不興を買わないため：という体裁なら去るというアクションは正しい。その体裁そのままに受け取つたラウラは去りゆくナギトの背中に声をかけた。

「長い付き合いではないゆえ過ぎた事は言えぬが、そなた：誰かと本心から向き合つた事はあるのか？」

問い質す、というより叱責するかのような口調にナギトは薄く笑む。「青いな」と。嘘の笑顔で敵を作らず、薄っぺらい言葉で信用を買うような処世術をナギトの真だと思つているのだ。

「あるよ。それはⅦ組のクラスメイトにも同じだしな」

胡散臭い笑顔と嘘臭い言葉にラウラの眼光がさらに鋭くなる。

それを軽くないしつつ「ふふふ」と声に出しつつ笑うナギトは続ける。

「俺の言葉の真偽を見抜く事が出来ないのは、お前の目が節穴だからだよ…剣匠の娘」

胡散臭い、嘘臭い、薄っぺらい。そんなポーズに騙されているに過ぎない。《光の剣匠》の娘というだけでラウラを新入生最強と囃し立てる連中と同じだと指摘された気分になったラウラは思わず顔を俯かせた。

ナギトはそれを見届ける事なくプールサイドから去ろうとして、ドアノブに手をかけた所で思い直して振り返る。

「…すまん。今のは挑発が過ぎた。でも本心からⅦ組のみんなと向き合いたいってのは本当。俺のふざけた言動は照れ隠しだと思ってる欲しい」

「いや……（こちらも出過ぎた事を言ったようだ。許してくれ）」

指摘で少し冷静になっていたラウラはナギトの弁明を聞くと謝罪する。するとナギトは真面目な表情から一転していつもの胡散臭い笑顔になった。

「いやいや、これでラウラのと距離が詰められたかと思うと万々歳だよ」

「ふむ……確かに照れ隠しと思つて聞くと、もはやそうとしか思えんな」

「冷静に分析されると恥ずかしいからやめてね!？」

ナギトの言葉を最後に、どちらともなく笑い出す二人。やがてナギトが「じゃあまた」と手を挙げて別れを告げる。ラウラも同じような返事をする。ナギトは今度こそプールサイドから出るのであった。

次のクラブ見学は本命のフェンシング部。ツールズにおいては騎士剣術や百式軍刀術を主として部活動に励んでいるようなのだが、そこから何か得られるものがあるのではないか、という興味からフェンシング部を本命に定めている。

部活動くらい剣から離れてもいいのではないかと思うが、自然とフェンシング部を本

命に定めていた自分がいた。今までは余程剣に没頭した人生を送ってきたのだろう、とナギトは自身で嘆息する。

ふと、記憶を失う前の自分が今の自分を見たらどう思うのだろうか？と益体もない事を考える。

剣に生きた男が今の自分を見たら。憤るだろうか、そんな事をしている暇はないと。あるいは羨むだろうか、新しいものを得られた事を。

いずれにせよ自分には関係のない事だ。

シュバルツアー家に拾われ、ラインの義兄弟となり、ツールズ士官学院に通っているのは、紛れもなくナギト・シュバルツアーなのだから。

フェンシング部の部室に入ると、大柄な男に新入生の男子が打ち倒された所だった。模造の剣は弾き飛ばされ、新入生の男子自身は体勢を崩してナギトに突っ込んでくる。

あわてて新入生の男子を受け止めたナギトは「大丈夫か」と尋ねる。

「あ…ああ。すまない」

「なら良かった。部活体験かな？」

と聞いたナギトに答えたのは、新入生の男子——アランを打ち倒した本人である大柄な男——ロギンス。

「ああ。つつても大して強く打ち込んでないから安心しろ。君も見学か？」

「はい。あー…つと、もしかして…見学だけで帰してくれる気はない感じ？」

「あなたが望めばね？どう、お姉さんの胸を借りるつもりはない？」

アランを離して苦笑するナギト。どうやらナギトの相手をするのは細身の女性らしい。ロギンスが咎めるように「おい、フリーデル」と名前を呼ぶが、ナギトが模造剣を拾うと「彼はやる気みたいよ？」と返す。

「ではでは、胸をお借りするとしましょう。名門ツールズのフェンシング部がどんなものか知りたい気持ちもありますしね」

「フッフ、情熱的じゃない？」

ナギトの挑発じみた言葉を「情熱的」と受け流したフリーデルにロギンスは「やりすぎんなよ」と言つて、模擬戦は開始した。

フリーデルは当然のようにナギトに初手を譲る。ナギトは模造剣の感触を確かめながら、ユミルで見た騎士剣術を思い出していく。

鋭い踏み込みからの横薙ぎをフリーデルは容易く躲す。そのまま刺突を繰り返すが、ナギトはそれをヘッドスリップで避けるとそのまま回転して剣を打ち付ける。フリーデルはそれをガードしたが勢いに乗った一撃の威力を殺しきれずに後ずさった。

「なかなかやるわね」

「涼しい顔で捌いて何を言つてんすか…」

次もナギトから仕掛ける。前に出つつ刺突を繰り返すが、そのすべてはフリーデルによつて捌かれて一撃も届きはしない。やがて業を煮やしたナギトは大きく踏み込んで

剣を振るうが、それは受け流されて翻ったフリーデルの剣がナギトを捉える。

かと思われたが、半身になりながら紙一重でそれを避けたナギトは逆袈裟の一閃を見舞う。それは八葉における残月に近い動きであったが、万全でない体勢から放たれたせいか精度も低く隙も大きかった。

そんな隙を、フエンシング部の部長であるフリーデルが見逃すはずがなく、振り抜かれた剣を弾き飛ばして勝負を決めたのだった。

「勝負あり、だな」

弾かれた模造剣が床に転がり「まあ新生にしちや悪くない動きだったが」と続けようとしてフリーデルに制される。

「いいえ、まだよ。君……手を抜いてたわね？」

フリーデルに鋭い視線を向けられたナギトはいつもの調子で「そんなつもりはありません」と返事をする。

「君の剣は、その道に生きてきた者の鋭さがあつた。だけど、それにしても動きがチグハグと言うか……どこか違和感を感じるのよね」

小首を傾げながら推理するフリーデルにナギトは答えを教える。

「自分が普段使うのは東方の剣術です。それを無理に騎士剣術に落とし込もうとしたので、先輩が感じた違和感はそれだと思います」

「なるほど、道理で」と納得を見せたフリーデルだったが、次の瞬間には満面の笑みで、「じゃあ次は本来のスタイルでやってくれるかしら？」

そんな事を言い出した。この場合はクラブ見学の場合だ。新入生を歓迎するための。そこで接待プレイをするどころか二回戦目を笑顔で無理強いするとは、さすが名門ツールズ、生徒の頭のネジがぶつ飛んでいる。

しかしナギトも苦笑しながらそれを受け入れるくらいには頭のネジがぶつ飛んでいた。床に転がった模造剣を拾い上げて「開戦の合図を」とロギンスに頼み、二回戦目が

始まる。

次も先手を打ったのはナギト。しかし今度は譲られたわけでもなく積極的に攻めていく。

疾風のスピードに乗った斬撃をフリーデルは何とか防ぐ。すれ違い様に切り付けていったナギトを追って振り返るが、そこにはすでにナギトの姿はない。

疾風の踏み込みの勢いを跳躍力に転じて、その姿はフリーデルの頭上にあつた。

そこから孤影斬で斬撃を飛ばすが、すんでの所で気づいたフリーデルは剣を払ってそれを霧散させた。

着地したナギトに獰猛な笑みを見せて今度はフリーデルから仕掛ける。鋭い二連撃はXを描き、続く締めめ刺突はその中心を穿つ。ナギトはそれを螺旋撃で相殺すると、二人はどちらともなく距離を取った。

「六の型、秘技…飛燕斬」

先程の孤影斬よりも巨大な、燃えるような緋色の斬撃をナギトは見当違いの場所に放つ。それは曲がる緋空斬だ。燕のように空中で軌道を変化させる剣技。フリーデルの

背後に回った飛燕斬に合わせてナギトもフリーデルに距離を詰める。こうしたセルフ挟み撃ちを受けたフリーデルは刀身に青白いオーラを纏わせると先に飛燕斬を斬り払い、一瞬後に迫るナギトを迎撃する。

音が炸裂した。

くるくると回る欠片が床に落ちた所で場に充満していた闘志：緊張感がふっと消えてなくなった。

「……まで、ですかね」

「ええ、そうしましょう」

二人の模造剣は半ばから折れていた。その結果が今回の勝負が引き分けに終わった事を物語っており、二人ともひとまずそれで剣を収める事に同意する。

「ふう」と大きく息を吐き出してから雰囲気を一変し、誤魔化すように笑う。

「いやー、すみません！部活の備品壊しちゃったみたいで！」

「それは構わないわ。君、かなりやるじゃない！フェンシング部に入るつもりなのよね？」

備品の損壊を気にされなかったのはナギトにとって幸いだったが、対面するフリーデルの笑顔からは面倒な予感しかなかった。

まさしく、ちょうど良い稽古相手見つけたー！と聞こえんばかりに目をキラキラさせている。助けを求めるようにロギンスを見るがすつと目を逸らされる。先程の考えが正解である事の証左だろう。

確かにフェンシング部に入部する事で得られるものはあるだろう。しかしその大部分はユースから得られるものでもあるのだ。宮廷剣術と騎士剣術：型は同じでも質が違う：剣技に込められた意味が違うが、それでも本質は同じだからフェンシング部に所属するメリットはさほどない。

それに今回の模擬戦は120%の力を出したナギトに対してフリーデルはまだ余裕がありそうなのだ。今後メツタメタに打ちのめされる事を考えると腰が引けるのもある。

しかし、こうも熱烈に勧誘されるのを断るのも男が廃るといふもので。フリーデルと

の交渉の末、幽霊部員として不定期的にクラブに参加（最低週一回）という事に落ち着いたのだった。

そうしてフェンシング部室を出ようとした所で貴族生徒三人とすれ違う。

「待ちたまえ」

「待ってよ」

その中の一人：金髪を真ん中分けしたいかにも高慢ちきな男子がナギトに話しかける。どことなく面倒な波動を感じ取ったナギトは同じく部室を出ようとしたアランに振ろうとしたが、

「君だ！Ⅶ組の！」

その金髪の生徒——パトリックにツツコミを入れられる形で失敗した。

ため息を吐くのを我慢してにこやかに振り返り「なにか？」と用件を問うた。

「その赤い制服…新設されたⅦ組とかいう寄せ集め連中のものだろう。まさか特科クラスなどと言われて調子に乗っているんじゃないだろうな？」

面倒な予感は的中したようで、しかし全然嬉しくないナギトは、え？なんでいきなり難癖つけられてんの俺。と呆然とするが、とりあえず煽り返す事にした。

「調子に乗るなんてまさか。というか、そちらさんこそ初対面の相手にそんな口を利けるとは、家柄だけで調子に乗ってるのかな。まあⅦ組をやつかむ気持ちはわかるぜ、特科クラスなんていかにも少数精鋭っぽくてカッコいいもんな？」

凶星だったのか、パトリックは顔を真っ赤にしながらも青筋を立てている。適当な当て推量だったが、なかなかどうして正鵠を射ていたらしい。

「…貴ツ…様あ…！！！」

凶星を突かれたのと煽られたのとでパトリックは言葉に詰まる。育ちが良いせいかな

パツと罵詈雑言が浮かばないのか。そんなパトリックを見兼ねたのか脇の二人がナギトに舌鋒を向ける。

「貴様、無礼だぞ！」

「そうだ、このお方がハイアームズ侯爵家三男、パトリック様と知つての事か！」

「知らんがな」と悪態を吐きながらパトリックがハイアームズ侯爵の三男であつた事を知つて、まずつたな…と思う。ハイアームズ侯爵家と言えば帝国における四大名門の一角だ。帝国の爵位の順位は公侯伯子男、ユースの実家であるアルバレア公爵家と比較すれば家格は落ちるが、ナギトが世話になつているシュバルツァー男爵家と比べれば圧倒的格上だ。

シュバルツァー男爵家が皇族と縁がある事や社交界から遠のいてゐる事を踏まえても敵に回すべきではない相手だ。そう思ったナギトは煽りの矛先を脇の二人に向ける事にした。

「ハイアームズ侯爵家か……なるほど、道理で脇の二人が取り巻きクセーと思つた」

「なっ!？」

「貴様!」

逆上してナギトに掴みかかろうとする二人をパトリックは制して先程のお遊びとは違った敵意でナギトを睨みつけた。

「抑えろ、とは言わない。だがここは僕に任せてはくれないか。正々堂々、一対一で勝負しよう……決闘だ」

パトリックはポケットからハンカチを取り出すと、それを床に落とした。

このハンカチの上に自らのハンカチを重ねれば、それは決闘の合意となる。騎士の流儀だ。

「や、普通に断るけど」

それを刹那の逡巡もなく断るのがナギト・シユバルツアアであった。いくらパトリッ

クが大貴族の子息と言えど決闘ともなれば相応の覚悟が必要だ。自分だけでなく友人をも侮辱した無礼な男に誅を下す——そう自らに言い聞かせるも、決闘という形式に持ち込むからには緊張もするというもの。

そういった決意を一も二もなく台無しにするのがナギトという男。

クラブ巡りもまだしなきゃいけないし、日もすでに落ちかけていて小腹が減る時間帯だ。相手したくない。

というか、そもそも面倒なのだ。勝つにしろ負けるにしろ決闘”という形式で決着を着けるといふ事が。

それよりも、こんな小競り合いにもっと相応しい勝負の場というものは存在する。

「…は？」と間の抜けた声を出した。パトリックはしばらくしてようやくナギトの言葉を理解した。 “断る” という意味を。

「は…ははは…ははははは！ そうか、断るか。さてはこの僕に臆したな…臆病者め。達人なのは口先だけだったようだな！」

「安っぽい挑発だな。脳味噌あんのかつてくらいだ。ま、突然決闘なんて持ちかける単

細胞にはお似合いの出来だが」

パトリックが「なにい!？」と反応するのを待たずにフリーデルとロギンスが二人の間に割って入った。

「まったく、決闘なんて穏やかな響きじゃないわね」

「やり合うのは勝手だが他所でやってくれ、入口を占拠されちゃ他の新生が入ってこないだろうが」

「違うわよ、ロギンス君。やり合うなら他所じゃなくてここでやってもらわなくちゃ。二人ともフェンシング部に入って、そこで決着をつければいいのよ」

そんな上級生たちの言葉にパトリックらは理解を示し、ナギトは待つてましたとばかりに微笑む。

「俺はそれで構いませんよ。幽霊部員としてですけど一応フェンシング部に入るつもり

ですし。今日は用事があるので無理ですけど、明日以降なら」

「僕も異論はない。もともとフェンシング部には所属するつもりだったしな」

ナギトもパトリックも、フェンシング部に入り、そこで決着をつける」という事で納得した。「ではでは」とにこやかに去っていくナギトを見て、パトリックは「食えないやつめ」と吐き捨てたのだった。

パトリックとの一悶着を回避したナギトはジムナジウムを出て学生会館に足を運んだ。学生会館の一階は食堂になっているが、二階は数件のクラブが入っている。三階は貴族生徒のサロンになっていて、一応シユバルツァー姓を名乗るナギトであれば入る事はできるが赤い制服だと目立つだろうため、ある程度人に慣れるまでは入り浸らないように考えている。

ナギトの目的は二階に数あるクラブの内の一つであるチェス部だ。二階には他にも文芸部等があるがひとまず文化部系で興味があつたのはチェス部だけだった。

チェス部の部室に入ると男子二人がチェス盤に向き合っていた。とは言っても対局

しているという雰囲気ではなく、入室したナギトを確認すると声をかけてきた。

「君も入部希望かい？赤い制服という事はマキアス君と同じⅦ組かな？」

「ナギトか。君もチェス部に？」

「はじめまして、ナギトです。マキアスもおつす。期待させて悪いですがあくまで見学です」

ナギトが名乗るとマキアスの隣にいた男子生徒は第二チェス部の部長のステファンだと自己紹介した。

「これは…チェス・プロブレムですか？」

自己紹介を終えたナギトは二人が向き合っていたチェス盤に視線を投げる。盤の上には数少ない駒と、すでにチェックメイトの局面が出来上がっている。チェス・プロブレムとは言ってしまえばチェス版の詰将棋のようなものだ。

そうだ、と肯定したステファンは次いでチェスのルールを知っているか尋ねるがナギトは「駒の動かし方くらいなら」と肩を竦めるのみ。流れでマキアスが解いたチェス・プロブレムに挑戦する事になった。

シユバルツァー家で何度かプレイしている事に加えてマキアスが完成させた盤面を見ている事も手伝ってナギトがチェス・プロブレムを解くのに然程時間はかからずに終わり、ステファンから勧誘されるといふ一幕もあつたが「入部は検討します」と誤魔化してその場を去る。

考えて見ればチェス部は貴族生徒と平民生徒で分かれている。ナギトは一応貴族生徒なので第一チェス部に所属する事になるだろう。そうなるとマキアスに貴族だとバレてしまうため入部希望を静かに取り下げるナギトであつた。

チェス部を出てナギトはひとまず目的のクラブ活動の見学が終わつたと一息つく。週一程度でフェンシング部に通う幽霊部員というのが最終結論になるだろうと予想しながら廊下を歩いていると、「キャアツ！」と女子生徒の悲鳴が聞こえてきた。ナギトの耳が腐つてなければクラスメイトであるエマ・ミルスティンの声のはずであり、有事かと思つたが危ない気配が漂つてないあたり、なにかそう…イケナイものを見てしまったかのような声音である事を理解したナギト。

悲鳴の理由を探るべくエマの声が聞こえた部屋の扉をノックすると返事を待たずに

開け放つ。

扉の先に待っていたのは文芸部の部室。突然の闖入者に驚くエマは「ひっ」と息を吸い込む。ナギトはわざとらしくニヤリと笑い、

「ち、ちがつ！ 違うんですナギトさん！ わ、私……こんな世界があるなんて知らなくてっ!?」

そんなナギトに弁明するように喚き立てるエマの見たこともないような姿に思わず笑ってしまう。赤面してしどろもどろの委員長など中々のレアモノだと思った。

エマは目をぐるぐると回したままナギトを押し除けて文芸部を走り去って行ってしまう。その背中を見送ったナギトと文芸部に残った女子一人。どうやら先輩らしくドロテと名乗り部長である事を明かす。

「さつき廊下でエマとすれ違ったんだが……何かあったのか?」

そんな所にリインが現れてナギトは軽く「さあ?」と流す。再び現れた入部希望者(と思しきリインに)ドロテは自己紹介する。

「リイン・シュバルツァーです」

「ナギト・シュバルツァーです！二人合わせてシュバルツァー兄弟ですっ！」

ドロテと同じく名乗ったリインに続いて名乗りあげたナギトはそのままシュバルツァー兄弟のポーズ（即席）を取る。一人で。

いい感じにスベった所でドロテに視線を向けると、

「同じ年の男兄弟…身近過ぎて自覚できない愛…しかし士官学院に入学して二人の時間が短くなる事で自覚した恋心……禁じられた愛……！」

そんな感じでトリップしていた。ヨダレを垂らしそうな口元を見てナギトは名門トールズの認識を改めるべきか迷う。

「ナギト……これは……」

「耽美な世界、つてやつかなあ……エマが逃げ出すのもわかるわ、うん。ここは逃げの手だと思っけど、同意見かな……お兄様？」

「ああ、無茶な要求をされる前に立ち去ろう」

一瞬で団結したナギトとリインは妄想に浸るドロテを残して静かに文芸部を立ち去る。あれにナギトとリインが実の兄弟ではない義兄弟だと明かせばさらに妄想が捗るだろうが、面白味と同時に危険度も増すため自重したナギトであった。

その後、まだマラソンが終わってないらしいリインと別れてナギトは第三学生寮に戻る事にした。

「よっ、後輩」

校門前で呼び止められて振り向くと、そこにはどこかで見た気がする銀髪の子が立っていた。

「ちよいと50ミラコインを貸してくれねえか」

「2年V組所属、クロウ・アームブラストだ」

「加勢するぜ、後輩ッ！」

「士官学院《Ⅶ組》のカーラーを見せてもらおうか！」

「つたく、甘ったれめ」

「だが、ずいぶん遠くに来ちまった気がするぜ」

その顔を見て、声を聞いて、姿を認めた瞬間――脳内に溢れ返るいくつもの光景。

「ちよつとはがり早いが早めのランチとしようぜ」

「“今”を踏ん張ってこそ“未来”だろうが！」

「…………ただひたすらに…………ひたむきに…………前へ…………」

————運命を変えろ————

一瞬で流れていくノイズがかった情景の後に、それがお前の使命なのだと言わんばかりに声が響く。

思わずたたらを踏んだナギトだったが、思考を阻害するような靄を無視して、クロウに「何か用ですか？」と向き直る。

「いや、用ってほどでもねえが…噂のⅦ組に入った感想を聞きたくてな。入学して約半月…調子のほどはどうよ？」

フラッシュバックと共に頭痛がしたせいかわか声かわか思わず刺々しいものになってしまい、結果的にナギトとクロウは「軽々しく喋りかけた先輩と、それを煩わしく思う後輩」のような図になった。

「ぼちぼちですかねえ…………授業の方は予習復習を一日でも欠かせばすぐに置いていかれ

「そんな気がしますけど」

先程のイメージを払拭すべくナギトは努めて明るい声を出す。冗談じみた言葉は半ば本音で、やれやれと肩を竦める動作も一緒に行っておく。

「はは、違いねえ。まあ本格的にカリキュラムが始まるのはこれからだろうし、気合入れてがんばっていいや、後輩」

「了解です」と笑ったナギトにクロウはお近づきの印に手品を見せてくれると言う。言われた通りに50ミラコインを渡す。クロウは持っていた巾着袋を足元に置くと「よく見てろよ」と言つてコインを指で弾いた。

くるくると舞ったコインはやがて重力に従い落下する。それを掴もうとクロウは右手と左手をそれぞれで動かして――

「おっと」

それをすり抜けて地面に置かれた巾着袋の口に吸い込まれかけた50ミラコインを

ナギトは掴み取った。

「うげ、初見でそこまでやるかよ」

「あらかじめ手品つて聞いてましたからね。足元の袋もわざとらし過ぎますよ」

本当ならコインを掴み取るような動作だけをして50ミラは巾着袋に落として、〃右手と左手のどっちにコインがあるでしょう?〃という問題突きつけるつもりだった。その段で右手と左手のどちらにもないと気づく者はいるが、そもそも巾着袋に落ちるはずのコインをそのまま掴み取るなんて早々できる事ではない。

驚くクロウにナギトは当然のように答える。まるでトワの聡明とアンゼリカの破天荒を足して割ったような人格だとクロウは思った。

ナギトは掴んだコインを指で弾いてクロウに寄越す。

「それは手品を見せてくれたお礼、チップです」

ニコリ、あるいはニヤリと微笑んで見せたナギトは「では、これからも仲良くしてく

ださいね」と言うのとクロウの前から立ち去るのだった。

その背中に突き刺さる、強烈な視線には気づかずに。

第三学生寮に帰る下り坂で「あれ？」ととぼけた声を出すナギト。

「名前、聞いてたっけ？」

先程の銀髪先輩。三流以下の手品を披露してくれた彼。クロウ・アームブラスト。

“2年V組所属、クロウ・アームブラストだ”

そんな自己紹介を受けた記憶がある。

いやー、いや！自己紹介なんてされてないはずだ。なのに自己紹介を受けたシーンが記憶にある。

これは誰の記憶だ？

ふと、そんな事を思った。

ありえないはずの仮定。失った自分の記憶の代わりに誰かの記憶が流入したのでは

ないか、という。

そんな事がありえるはずはない。しかし、そんな特別がありえるのだという確信もあつた。

「あばよ、《剣鬼》」

「ツー」

フラッシュバック。同時に頭痛。ノイズがかつた刹那の映像は自らの記憶だと自覚できた。

「……わっけわかんねえ」

悪態を吐き、第三学生寮に入る。ドアが閉まる瞬間、ツールズ士官学院の方向を見る。

「……楽しくなりそうだ」

無意識に呟く。

ナギト・シュバルツァーのスクールライフは始まったばかりである。

夢

夢を見る。

死ぬ夢。彼が、死ぬ夢。

その手からゆつくりと、命の灯が消えていく。

何故だと思った。どうしてこんな悲劇が許されるのかと。

涙は止まらなくて、でも彼の名を呟く事すらできなくて。ただ俺たちはそれを眺める事しかできなくて。例え声を出しても彼の耳には届かず、定められた物語は定められたままに終わる。自分が何をしようと結末は変わらなくて、受け入れるしかなかった。

それでも……ああ……夢を、見る。

彼が生き残る夢。彼が死なない夢。チリひとつ誤算を許さぬ運命、それに風穴を開けて彼を生還させる夢を。

夢を見る。夢を。夢を見る。夢を見た。夢見た。だから俺たちは————

——運命を変えろ——

奇跡を背負う。何千万、何億と世界が観測した結末を書き換えるために。

☆★

「眠すぎて眠い」

「文が繋がってないと思うんだが」

ナギトは自らを起こしに来たリインを見て言った。

夢を見ていた気がする。内容なんて忘れてしまったけど、とても悲しい夢を。

夢を見ていたという事は睡眠が浅い証明であり、未だ眠いのも当然だ。そんな益体もない事を考えたナギトだったが、さすがに授業を欠席するわけにもいかず、リインには「先に行つといてちよ」と言つて身支度を始める。

「やだあく、遅刻しちゃうウー！」

なんて言いながらトリスタの町を走る。

止まって話をしているラインとエリオットの間を「遅刻遅刻ウー！」と言いながらすり抜けて、少しした所で何者かにぶつかった。

まさか、運命の出会い!?こんなシチュエーションでぶつかるなんて運命の出会いに違いない。

と、思ったのも束の間。男の声だったため希望は絶望へと変わる。

「あっ」

しかも、ナギトがぶつかったのはどうやら貴族生徒。しかも見知った顔だった。

パ、パトリックウー!?!と喉まで出掛かり、セリフを飲み込む。彼とはすでに面倒事を起こしている。今日の放課後にフェンシング部で勝負する予定なのだ。そんな彼とこれ以上の揉め事を抱え込みたくないナギトは倒れた。パトリックに手を貸す事もなく、

「サーセンつしたあーッ！」

叫んで、疾風の如く学院への道を駆け上げるのだった。

☆★

やがて放課後となり、憂鬱さマックスのナギトの周りにリイン、エリオット、ガイウスが集まった。

クラブは何にするか決めたのか？、なんて話をする。

エリオットは吹奏楽、ガイウスは美術部にそれぞれ所属するらしい。

「ナギトはどこか決めたのか？」

「正式に所属するクラブはないかな。週一くらいでフェンシング部に通う事にはなっただけだ」

「へえ、フェンシング部か。あれ？でも八葉一刀流じゃフェンシングにはならないん

じゃないか？」

リインは当然のように疑問をぶつけてきた。

「だから正式に所属するわけじゃないんだよ。……まあ色々あつて週一で顔を出す事になった」

遠い目をするナギトにリインは察したように「そ、そうか」と言うしかない。

その後、サラが教室に戻って来て、誰か生徒会に行ってくれないかと話があつた。なんでも学院生活に欠かせないものがあるとか。

その役目はリインが引き受けたので、ナギトとエリオット、ガイウスはそれぞれクラブに向かった。

☆☆

ナギトがギムナジウムの一角：フェンシング部で使われている部屋に入ると、そこではすでにフェンシング部の面々が待ち構えていた。

部長であるフリーデルに始まり、ロギンス、パトリック、アランまで勢揃い。パトリックはふん、と鼻を鳴らすと「あまりに遅かったから逃げたのかと思ったぞ」と言う。

「すまんすまん」と軽々しく謝ったナギトにパトリックは再び青筋を立てそうになり、今朝の追突について追及しようとしたが、ナギトの雰囲気の変化がそれを許さなかった。

「さて、やろうか」

剣呑。そう表現するのが最も正しかろう。声音こそ穏やかだが、その裏には刃圈に入ったものを尽く斬り伏せる鬼の如き威容が感じ取れて、パトリックは思わず生睡を飲み込む。

生睡は飲み込めても吐いた睡は飲み込めないのが道理…否、誇り。

ロギンスから刃引きしてある模造剣を受け取り、構えた。

「二年I組所属、パトリック・T・ハイアームズ」

「二年VII組所属、ナギト・シュバルツァー」

「いざ参る」と声が重なり、模擬戦が開始する。

大きく振り込んだパトリックが横殴りの一閃を見舞う。が、薙ぎ払ったはずのナギトの姿は陽炎のように消え去り、一瞬の後に目の前に出現する。

剣すら邪魔になる超至近距離で、ナギトはパトリックの胴体を押しつつ足を絡めとり転倒させ、その喉元に模造剣を突きつけた。

「終わりでいいか？」

一瞬の攻防。ただの一度も剣を交わす事もなくナギトとパトリックの勝負は決着した。

卑怯だぞ、なんて負け惜しみすら言えない程の実力差を味わったパトリックは自失のまま突きつけられた剣の鋒を見つめている。

遅れてフリーデルが「勝負あり！」とナギトの勝利を宣言する。

剣を下げたナギトはパトリックを立ち上がらせて、未だ勝負前の気迫を取り戻さないのを見かねて、あえて辛辣な言葉をかける。

「家格だけで調子に乗るなよ、パトリック。人の価値はそんなもんじゃ測れない。それに誇りつてのは見せびらかすもんじゃないだろ」

その言葉に食ってかかりそうになるパトリックだったが交差した視線、透徹した眼差しに弾き返されて黙した。

それを見ていたフリーデルやロギンスは予想外の結果に意見を交わしていた。

「おいおい……一瞬かよ」

「これは…ナギトくんの作戦勝ちね」

フリーデルが見抜くナギトの作戦とは、先に見せたナギトの変貌……要は殺気をぶつけられたパトリックが、それに飲まれまいと強気に踏み込んでくる事を見越した誘き寄せだ。

殺気を当てられて強ばった体をほぐす間もなくナギトは勝負を終わらせた。作戦がまんまと当たったとしても上出来な結果と言えるだろう。

「なるほどな。実力差以上に経験の差があつたつてわけか。……ナギトはパトリックの実戦経験の少なさを見抜いて、気当たりによる作戦を実行したわけだな」

「ええ、おそらくはそうでしょう。こんな場においては少々品がないと言えましょう」

とは言え、だ。殺気をぶつけて相手をコントロールするなど、とてもじゃないが出来る事ではない。それが実力が近い相手なら尚更だ。此度の模擬戦はナギトの圧勝に見えたが、実の所はそれほど力の差があるわけではない。事前にパトリックの人物像を把握し実戦経験が少ない事を予測できたのもあるが、それ以上にユースやフリーデルの剣筋を見ていた事が大きい。

それがなければ、あるいは何の因縁もなく新入部員同士の力比べなどであればパトリックに軍配が上がっていた可能性もあつた。

機械音が鳴る。ナギトは懐からARCSを取り出すと着信を確認した。

「では、今日の所は失礼します」と低頭すると部員らの返事を待たずにナギトは退室、通信に応答した。

「ナギト・シユバルツァーです」と名乗るのとほぼ同時に担任教官のわざとらしく作った低い声音が耳朶を打つ。

「グーテンモルゲン、我が愛しの教え子よ」

「グーテンモルゲン、我らが麗しの教官殿。何か用です？」

「何よこなれた対応しちゃって、可愛くないわね。ナギト、ちよつと今から時間を貰えるかしら？もし無理なら夜に寮でも良いんだけど」

「ほう？教官と学生で夜の密会ですか。なんとも心躍りますね」

「あんだ、あたしが教官室で教頭に睨まれながら通信してるのわかって言ってるのよね。まったくいい性格してるわ」

「挨拶の時点で小ボケかましてるし、睨まれてるの俺のせいじゃないですよ。……まあ今なら教官のために時間を作る事はできます」

「言い方。ホントに疑われかねないからやめて」

軽快に言葉を交わしながらサラはナギトに用件を告げる。「少し話したい事があるから教官室に来て欲しい」と。ナギトは二つ返事で了解し、すぐさま教官室に向かう。

「やつほー、ナギト。元気してる？」

会うなりサラは気安く言葉をかけてきた。

さつき会ったばかりでしょうが、という言葉が喉元までせり上がってきたのを抑えて返答。

「元気ですけど」

「素っ気ないわね。そんなんじやモテないわよ?」

余計なお世話だ、という言葉を再度飲み込み、顎をしゃくって教頭を指す。

電話口でならいくらでもボケて見せるが、教官室でバカをやるほどの胆力はナギトにはなかった。

入学して約半月で、いかにも神経質そうな教頭に目をつけられるのは避けたいナギト。しかしサラは気にした様子もなく言葉を続ける。どうやらサラにとって教頭に睨まれるのは日常茶飯事らしい。

「まあ、あなたを呼び出したには理由があつてね、本来なら特別オリエンテーションの時に言っておくべきだったんだけど」

サラはそこで一度区切る。一瞬だけ躊躇いがあつて、それから本題に入った。

「えっと、言いにくいんだけどあなたのARCSの適正についての話よ」

ARCSの適正について。《Ⅶ組》に選ばれたのは特別ARCSの適正が高かつ

た者たちという話だ。

ARCCUSの真価と言えば味方の動きをリアルタイムで読み取る戦術リンクだが、それ以外にも通信機能や戦術オーブメントとしての機能も備えている。

ナギトの頭を過ぎるのはオリエンテリングで的一幕。魔法使いデビューだ！と息巻いて放った導力魔法ファイアボルト…火球が飛び出すはずのそれは火花と言って差し支えない威力であった。

「実はね、あなたのARCCUSの適正はほかの《VII組》メンバーと比較すると低いよ。ギリギリARCCUSを使えてるって感じね。それでもARCCUSの様々な機能を扱うのには困らないんだけど……ただ1つだけ、ほかのメンバーには劣る点があるのよね」

もしかして俺のアーツ適正低過ぎ……？という疑問があつたが、今のサラの話を書く限りではおそらく違う。

「アーツの出力の話ですか？」

「気づいてたのね」と言うサラにオリエンテリングでの出来事を伝える。少しだけ気

の毒そうな表情のサラを無言で見つめて次の言葉を促す。

「察しの通り、あなたがアーツを使うと、通常とは比べ物にならないほど効果が小さくなって出力されてしまうわ」

やはり正面から言われるとショックを受けるナギト。戦術オーブメントを手に入れてからこつち、アーツを使うのを楽しみにしてただけにがっかり度合いも推して知るべし、だ。

しかしそこは発想を逆転してポジティブシンキングするナギト。

アーツ系統のクオーツをARCU Sにセットしても効果が低いのであればステータスアップ系統のクオーツを優先してセットできるのだと。

「なによ、あんまりショックじゃなさそうね？」

「いや、ショックですけど」と返事をしつつ、どうして自分のARCU Sがそんな仕様なのか、という点について考えるナギト。

ARCU Sの適正が低いなら他のクラスに振り分ければいいだけ。ラインと兄弟だ

からと言って気を利かせて同じクラスにした、なんて学院にとっては何の利点もない。というか、ARCCUSを使える代わりにアーツの出力が低くなる…とはどういう事だろう？ARCCUSを使う代償にアーツの出力を落としたというように理解するのは曲解だろうか。

無理矢理にARCCUSを使用可能にしてまで自分をⅦ組に入れたかったのか、と考えるのはさすがに邪推か。

しかし曲解に邪推を重ねて、あるいは正道に立ち戻る事もある。マイナスとマイナスをかけ算するとプラスになるように。

それに、とナギトは視線を教官室に走らせる。放課後だからと言って教官すべてが教官室に集まっているというのは出来過ぎではなからうか。それはまるで、ここでナギトが暴れても制圧可能な面子を揃えているかのように感じられて。

ナギトはそこまで考えて、跳躍した思考を笑う。考え過ぎだと。

「あと、もう一つ話があるわ」

ナギトの思考の決着を知ってか知らずか、サラは話題を変える。教官に向いてないのではないだろうか”というナギトの評価が誤りであるというような教官らしい瞳。

「貴族生徒と平民生徒の集まる《Ⅶ組》において、あなたとリインの存在は特別よ。それは否定しないわね？」

特別。確かにそれはそうだ。リイン・シユバルツアーとナギト・シユバルツアー。共にシユバルツアー男爵家の姓を名乗ってはいるが、その実態は養子。身分は貴族でありながら心持ちは平民より：という所だろうか。

というより養父の影響で悪い意味での貴族らしい貴族ではない、と言うべきか、ともあれ貴族と平民という身分の差の中間にいと云えるだろう。

「だから、あなたとリインには《Ⅶ組》の“重心”になつてほしいのよ。“中心”ではなく“重心”に」

中心ではなく重心。サラの言葉を咀嚼するナギト。

ユースとマキアスの例が最たるものだがⅦ組は色々と爆弾を抱えているクラスだ。価値観の相違など、様々な事柄がⅦ組の絆を深めるのを阻害する要素になるだろう。それには身分の違いも一役買う事は間違いなく。

それらを未然に防ぐ、あるいは事が起こった後に対処するのに適した立ち位置を得ると。

「と言つても、あなたはリインと比べると一歩引いてるところがあるのよね」

そこまで見ているとは、とナギトは目を細めて驚く。ナギトはⅦ組では今のところユーシスとマキアスの喧嘩の仲裁役のような立場に収まっていて、それこそが重心の役目だと思われる可能性もあったが、実はそうではない。

ナギトは喧嘩を止めても、それ以上は踏み込まない。あくまで当人たちの問題として片を付けるべきである、というのがナギトのスタンスであり、サラが「一歩引いている」と言う点なのだ。

「あたしはリインに『重心』としてクラスをまとめるように言うわ。

でも『重心』として動くようになれば否が応でもストレスが溜まってくると思うの。だから、あたしがあなたに頼みたいのはリインのケア……言うなれば『重心』の『重心』
“つて所ね”

「『重心』の『重心』ですか。いや……これはもはや『重心』の重臣と言えるかもしれない……」

ハインリッヒ教頭にバレないように小ボケを挟みつつリインについて考える。

リイン・シユバルツァー。一見すると落ち着いた好青年だが、その実とても不安定な子供だ。

入学して半月で色んな爆弾が見え隠れするⅦ組だが、リインのそれはⅦ組の中でもとびきりだ。そんな爆弾を抱えているリインに重心が務まるかどうか。いや、そんな爆弾だからこそ容易には爆発しないだろうと考える事もできる。

そう考えれば、やはりリインこそがⅦ組の重心にふさわしいのだと結論した。

「それじゃ頼んだわよー」とナギトの小ボケを受け流しながらサラは会話を打ち切った。ナギトも捨て鉢に了解の意を示して教官室を出る。

その足が向かうのはギムナジウムだ。先程のパトリックに向けた言葉は諫言ではあったが、刺々しいものが混じっていたのも間違いはない。始まったばかりの学院生活で四大名門の子息の不況を買うのはまずいと考えたナギトは謝罪すべくフェンシング部に向かったが、すでに部活動は終わっていた。

空を見上げれば夕陽はほとんど沈んでいて、暗がりには包まれかけている。サラとの会話にそれなりの時間を割いていたようで、パトリックへの謝罪は後日に取っておく事を決意したナギト。

そのまま第三学生寮に帰ろうとしたが、ギムナジウムの出入口でラウラと遭遇した。

「む、ナギトか。そなたも今、帰りか？」

「ラウラもそうみたいだな」と返しつつ一緒に帰る構えを取る。

「そなたはフェンシング部であったな。クラブ活動すら剣を選ぶとは、そなたも中々に剣が好きなのようだ」

「まあ週一で顔を見せるくらい幽霊部員だけだな。華の青春すべてを剣に捧げるのはちよいと遊びが足りないと思うし」

「ふむ、『遊び』か。私の剣には未だない要素ではあるな。それがどんなものか聞いてもっ」

「うーん、言葉で説明しようとするの難しいんだが……」

ラウラもナギトの同道を拒まず、二人は並んで帰る事になったのだった。会話の内容は剣の談義という色気のないものであったが、二人の表情から笑みが欠けることはなかったという。

☆★

さて今日は待ちに待った自由行動日だ！と息巻いて部屋を飛び出したのが昼過ぎだったナギト。

普段から朝に弱いナギトだったが自由行動日は「思いつきだらけるぞう！」と意気込んでいたのもあつて二度寝、三度寝を敢行。本格的に目を覚ましたのが昼過ぎになるといふ、貴重な自由行動日の半分を寝て過ごすという覚悟を貫徹し、少しだけ後悔していた。

「さてさて何するか……」

帝国時報にさらつと目を通し、昼食を終えたナギトはトリスタの中心にある小公園で大きく伸びをする。

昼過ぎである事を考えれば帝都まで行つて遊ぶ選択肢は除外される。かと言つてトリスタで何かする事も無い。暇つぶしに時間学院の図書館に向かおうとも考えたが、そこでピンときたナギト。

よし、ラウラの水着姿を拝みに行こう！

決意は決して声に出さず胸に秘める。町中でリインが走り回る様を見かけたが、あれは住民に話しかけて回つたりするいつものマラソンだろうと決めつけて声をかける事はしない。

ルンルンしたままギムナジウムに向かうと、その入口の近くに少女が立っていた。貴族生徒を意味する白い制服にブロンドの髪を伸ばした美少女が。

リインなら話しかけるだろうか。でもなあ……俺だしなあ……一応制服だから不審者扱いはされないだろうけどなあ……

とナギトが話しかけるかどうかを迷っていたら、その美少女からナギトに話しかけた。

「あの、すみません。フェンシング部の方でしょうか？」

「あー、つと。幽霊部員…入ったばかりで幽霊部員というのもなんですけどフェンシング部の幽霊部員です！」

普通に答えようとしたナギトだったが彼女の憂い顔を見て、わざと明るく馬鹿らしく返事をする。外してしまったが。

「私の知り合いがフェンシング部に入部したらしくて、様子を見に来たんですけど、部室を前にしたら勇気が出なくなってしまって…」

知り合いと聞いてまず浮かんだのはパトリックの顔だ。貴族同士だし何かと縁もあるろう、と。しかし、そんな予測は次の言葉に裏切られる。

「なので、もし良ければ代わりに様子を見て下さいませんか？私の知り合いはアランと言います」

アランという名前を記憶から掘り返すと、フェンシングに入部した平民生徒であった事が思い出された。

ほう、ほう……ほう？どこことなく面白い波動を感じる。平民男子と貴族女子の身分を超えたラブロマンスの予感がナギトの中で迸った。

二つ返事で了解すると美少女はブリジットと名乗る。それを聞いてフェンシング部に「お疲れ様ですう」としれつと入る。

入る、と。そこではすでに勝負が決していた。

パトリックとロギンスの。すでに昨日の時点で一色触発だつたらしいが、パトリックがナギトとの勝負を控えている事もあつて今日に持ち越したのとこと。

結果は引き分けで、それを見ていたアランは「やっぱり貴族には勝てないのか」といった旨の発言をしており、劣等感が垣間見える。

確かに見方によつては部内の実力の序列はまずフリーデルがいて、それからパトリックとロギンスが次いで……となる。幽霊部員であるナギトも含めれば部内の上位三人は貴族生徒であると言える。

アランの言葉に「そんな事はない」と言うのを飲み込んだ。剣の腕に生まれが関係ない——なんて事はない。

貴族というのはそも、過去に偉業を成し遂げた者の末裔であり才覚が他の者より優れて産まれる確率が高い。加えて、英才教育に際して剣術を修めさせる事もあるだろう。武を尊ぶ帝国なら尚のこと。

だが。

「大切なのは剣を振るう理由だ」

それを差し置いても大切なのは——と、ナギトは口にしていた。

「パトリックの剣技は自分を飾り付けるための装飾品に過ぎない、言わば惰性」

これまでの修練が、今の実力に至らせているのみ。

「お前の剣を振るう理由はなんだ、アラン。……女に悲しい顔をさせるなよ」

そこまで言って「なくんちやつて」とおどけるつもりだったナギトだが、アランが「剣を振るう理由……」とまじめ腐った顔で呟いているのを見て喉元で押し留める。

リインのようにクサイセリフを連ねるのは小恥ずかしいし、他人の恋物語なんて野次馬根性フルスロットルで見守りたいところなのだが、そこに「剣」を意味付けられると真摯に対応するしかないナギトであった。

「剣を振るう理由、か」

口の中だけで呟いて、自嘲する。アランに言っておいてナギト自身もそれをわかっていないのだ。自分が剣を振るう理由を。

今はただ、手に馴染むというだけで八葉一刀流に縋っているが、記憶を失う前の自分が剣を振るう理由はわからない。

しかし、このツールズでならそれを見つけられるかもしれない。そんな予感がナギトにはあった。

「貴様は……来ていたのか」

息を整えて立ち上がったパトリックはナギトの姿を認めると声をかけてくる。話し

かけられたナギトは朗らかに笑うと、

「おうパトリック、昨日はすまんかったな！ 言いすぎたわ！」

昨日の出来事を軽々しく謝った。それはある種の氣遣いでもある。

「決闘」なんて重々しいものを回避し、「勝負」という体裁も立たない程の結末を迎え、しかしそれを「喧嘩」にまで落としめる言葉。

勝負のように白黒つけるでなく、明暗を分かつのでなく。喧嘩両成敗という形でこの出来事を収めようというのがナギトからの提案である。

パトリックは一瞬だけ怪訝な表情を浮かべたが、おおよその意図を察すると自らを鼓舞するように「ふん」と鼻を鳴らした。

「先日の件については、僕にも過ぎた部分があつた事は認めよう。しかし今後は貴族を貶める発言は控えてもらいたい……これでも四大名門の一角、ハイアームズ家の子息だからな。他の者たちの手前、面子もある」

「うん、わかった。今後は気をつけよう……お互いに」

売り言葉に買い言葉、学生だからこそ喧嘩で終われる出来事だ。二人が大人で同じような闘争があったのなら、後に引けぬ決闘以上の最悪を迎える可能性だってあるだろう。

今後はお互いに言葉には気をつける、という事で話は決着した。

真面目な話が終わると、ナギトは深い笑みから朗らかな笑顔に変えてパトリックの肩を抱いた。

「おっし、じゃあこれから友達だな。よろしくマイフレンド！」

うざったらしく絡んでくるナギトを引き剥がして、パトリックは叫ぶ。

「ええい、何がマイフレンドだ！僕たちはライバルであるべきだろう！」

「ほほう、ライバルとな？なら今から模擬戦でもやるか？」

「それは」と言葉に詰まるパトリック。ロギンスと一戦交えた直後であり、消耗した今で

は歯牙にもかかけられず敗れると見たのだろう。しかし逃げ腰の台詞を吐くわけにもいかず。

「あら、いいわね。それなら私も混ぜてもらおうかしら」

そこに割り込んだのはフリーデルであった。スー、と血の気が引いていく音を自覚したナギト。

ああ、つい今さつき言葉には気をつけると自分で言っておいてすぐにこれだ、とナギトは自省する。

フリーデルと模擬戦という事態をどうやって回避すべきか思考を巡らせる。思い浮かんだのはブリジットの顔だった。そもそもフェンシング部に顔を出したのはブリジットからの依頼があつたからであり、その報告のためならば模擬戦から逃れる良い口実となるだろう。

「すみません、用事を思い出したので今日はこれで」

「それはどれくらいかかるのかしら？」

「10分もあれば」

即答していた。逃げようとしていたはずなのに、フリーデルの嘘ついたら針千本飲ます（物理）という笑顔に逆らえず、恐怖のままに真実を曝け出してしまった。

その後、ナギトはフリーデルに言われるままに急いでブリジットに報告を済ませ、フエンシング部に戻って模擬戦を行った。地獄の百本勝負（部内総当たり戦）が終わる頃にはナギトはやつれ果てているのだった。

まこと、口は災いの元である。

☆★

フエンシング部の百本勝負でやつれ果てたナギトを潤したのは、ラウラの水着姿であった。あつた。

休憩するという彼女と談笑しながらラウラの水着姿を視姦したナギトはご満悦だ。ジロジロ見すぎだ！というツツコミ待ちでもあつたのだが、ラウラはそつち方面には疎く、ナギトが少しだけ罪悪感を覚える結果となつた。

その罪悪感を抱えたままギムナジウムを出ると見計らったかのようにARCSが着信音を鳴らす。

「士官学院《Ⅶ組》、ナギト・シユバルツァーです」

「あ、ラインだけど」

ラインの話は「今から旧校舎を調べるんだけど手伝ってくれない？」というものだった。どうやら学院長であるヴァンダイクからの依頼らしい。

探索メンバーが男子だけだったので気乗りはしなかったが、付き合う事にした。メンバーはナギト、ライン、エリオット、ガイウスの4人だ。

旧校舎に足を踏み入れると、その異様さが身に染みてわかる事となった。

「…嘘だろ」

「ふむ、俺たちが前に来た時より2回りは部屋が狭くなっているな」

「それに、あの石像もないみたいだし…」

レクレーションの最後にガーゴイルと戦った部屋の大きさが変わっていたのだ。それに、前に来た時にはなかった門すら出現している始末。

さらに進むと、この旧校舎地下の構造そのものが変化しているのがわかった。

すでに帰りたい気持ちマックスのナギトだったが、リインの言葉により先に進む事が決定してしまっていた。

徘徊する魔獣にはさして苦戦する事もなく、最奥の部屋に辿り着く。

「いーが終て……んん？」

ここが終点みたいだな、と言おうとしたナギトだったが、その前に眼前の空間が歪み始めた。

歪みが収まると、そこには魔獣が出現していた。

この旧校舎地下を徘徊するただの魔獣とは違う、一筋縄ではいかないと思わせるような気配を漂わせている。

いや、これはむしろガーゴイルと同じ魔物に属する類いなのではないか。

見た目は、毛むくじやらの鬼と言った所だが、油断はしない方がいいだろう。

戦術リンクを駆使して何とか魔物の体力を削っていく。

裂帛の叫びと共にエリオットのアーツとガイウスのクラフトが魔獣に直撃する。

しかし魔獣はそれを意に介さず（というよりは意図的に無視して）ガイウスに肉薄。振り下ろすだけで大ダメージを与える腕を高く持ち上げた。

「伏せろガイウス！孤影斬！」

崩れた体勢で、しかしそのまま伏せる事はできたガイウスはリインの指示に従う。

ガイウスが伏せた上の空間を孤影斬が走り魔獣の胴体を深く切り裂いた。

エリオット、ガイウスから続く三連撃に魔獣はたたらを踏む。ダメージは着実に蓄積しているのだ。

そこにナギトが踏み込み、切り裂かれた胸板を刺突でさらに深く抉る。苦し紛れに魔獣は両腕を振り回す。ナギトはそれを後退して躲した。

「ナギト！」

「ああ！」

リインと戦術リンクを繋いで同様に太刀を構えた。

「四の型」

魔獣が吼える。決死の覚悟がX字に交錯し、魔獣の剛腕が振られるより速く斬撃が刻まれる。

「紅葉切り！」

パチン、という納刀音が小気味良く響き魔獣が崩れ落ちる。

「ふっ」と息を吐いてリインに微笑みかけたのはナギト。笑みを向けられたリインもまた笑い、ここに戦いが決着した。

「すごいや…」

「ああ、さすがは兄弟と言ったところか」

文字通り息びったり、というのがエリオットとガイウスの感想だ。呼吸の一つすら違わぬ連携。戦術リンクの恩恵もあるのだろうが、それ以前の絆が2人の連携の妙なのだろうと理解した。

その後、ナギトらは学院長ヴァンダイクに旧校舎について報告する事になった。

ヴァンダイクの話によると、旧校舎はたびたび異変が報告されていたが、今回のように内部の構造がまるつきり変化していた事はさすがになかったそうだ。

それに、旧校舎ができたのはツールズ士官学院の設立以前……かの《暗黒時代》の産物らしい。

《暗黒時代》とは栄華を誇った古代ゼムリア文明の《大崩壊》後に人々が彷徨った、まさ

しく暗黒の時代の事だ。

《暗黒時代》は女神を崇拜する七曜教会の活躍により終焉を迎えたものの、その残滓は大
陸各地に残っているようだ。

☆★

それから数日が経過し、実技テストの日がやってきた。

機械仕掛けの魔獣らしきものを相手に3人〜4人を一組として相手にする。ナギト
はリインやガイウス、エリオットと組み、先日の旧校舎探索の経験もあつてか余裕を
持つてテストをクリアする。

他の面子も3人一組となつて機械仕掛けの魔獣と対峙するが、戦術リンクがあつても
未だ連携はぎこちなくテストはクリアしたものの及第点と言つた所だった。

実技テスト終了後、サラから《Ⅶ組》の特別なカリキュラムについて説明がなされた。
それは特別実習と言い、A班、B班に別れて帝国各地に赴き、用意された課題を達成
するというものだった。

ナギトの所属はA班。メンバーは、ナギト、リイン、アリサ、ラウラ、エリオット。行
き先は貿易地ケルディック。日時は今週末、両班共に鉄道で移動との事だった。

☆★

特別実習開始日、朝早くに目覚めてしまったナギトは周囲を軽く散歩してから学生寮に戻った。

準備も終えて30分前には集合場所である寮の玄関にあるソファに寝転がっていた。しばらくするとリインがやって来て、その後すぐにアリサもやって来た。

妙な沈黙にナギトは青春臭い波動を感じとる。この時点ですでにニヤニヤがノンストップだったが、からかうのを我慢してリインとアリサのやり取りを見守る。

2人はいくつか言葉を交わした後、同じタイミングで謝り合い、そしてまた同じタイミングでどうして謝るのかと互いに聞く。

それから、妙に気が合うみたいだな、みたいな会話をした後、エリオットとラウラもやってきた。

やってきた2人は、リインとアリサが仲直りしたのをわかったようで少しいじる。
……いや、2人ともあれは素なのか？

狙って言ってるわけじゃないのなら…非常にデンジャラスである。

「さて、これであとはナギトだけか」

ラウラがそう言う。どうやらラインらの立ち位置からはナギトが見えないようで「呼んでくるよ」と言つてラインが階段に向かおうとするが、無駄足なので止めておく。

「その必要はない」

微妙にカッコつけながらソファからむくつと体を起こしたナギトに硬直するラインとアリサ。

「ナ、ナギト……いったいいつからそこに？」

ラインの間にナギトはニコツ！と効果音が出そうなほど快活な笑みを見せる。

「えつと……じゃあまさか私たちのやりとりを……」

アリサが冷や汗を垂らしながら聞いてくる。

ナギトは何も言わずにニコツと笑い、グッドサインを見せた。



列車は走る。有角の獅子紋を背負う若人たちを乗せて。

貴族派と革新派の陰謀渦巻く帝国の地を駆け抜ける。

行き先は——貿易地ケルデック。

自失無我

貿易地ケルディック。

その名の通り貿易が盛んな街であり、大市で賑わっているのが特徴である。

「さて、それじゃまずは宿にチェックインしましょうか。あそこに見える《風見亭》よ。ビールがおいしいのよね〜」

と、サラが差したのは宿酒場《風見亭》。一階が酒場、二階は宿という帝国では珍しくもない店だ。A班の面々はサラに促されるままに風見亭に向かって歩いていく。

それを離れた場所から見やる人影があつた。

「おやおや、あれは《紫電》のお嬢さんに……………よもや《剣鬼》もいるとは。それにあの制服は……………ふむ、どうやら魔女殿の言っていたあの線が現実味を帯びてきたかな……………？」

白い外套の貴族衣装を着る青年。しかし貴族と言うには少しばかり胡散臭く、なんならヘンテコなステッキと羽をあしらった仮面が似合いそうな風貌の人物。

「ふふ……気まぐれで立ち寄ってみたが、面白い事になりそうだ」

妙な視線を感じて振り返るナギト。しかし、ケルディックの駅前から風見亭まで自分たちを見ていたような輩はいない。「気のせいか」と呟いて納得して、クラスメイトたちについて風見亭に入るのだった。

風見亭にチェックインしたA班は荷物を下ろすために部屋に入る。しかし、その部屋というのがどうやら1つしかとっていないらしく、男女で寝食を共にするらしい。一部屋にベッドが5つ、綺麗に並んでいた。

「これはサラ教官の配慮らしいけど……つまり、そういう事ですよね？男女間の仲を深める（意味深）っていう……」

「ちよつとーありえないんですけどー年頃の男女が一緒の部屋で寝るなんて！サラ教官は何を考へてるの!？」

わざとらしく肩をかき寄せて言うのならまだしも、アリサのそれはガチだ。ガチで嫌がつている。とうかナギトもナギトだった。うら若き乙女達の前で冗談は冗談でも悪い冗談が過ぎた。

そんなアリサの言い分も確かではあつたがラウラにたしなめられる事となる。

“我々は士官学院の学生であり、将来軍人になれば男女の別などない” という内容の正論で。

有史以来、正論は人をイラつかせても救つた事はない……あえて会話にまざらず、そんな事をぼんやりと考へるナギトだった。

アリサはしぶしぶながら……本当にしぶしぶながら納得した。

「うー……仕方ないわね。……でも男子！ちよつとでも怪しい動きをしたら許さないからね！エリオットはまだしも、誰かさんは前科があるし、誰かさんは常にいやらしい顔してるし！」

「言われてるぞリイン」

「前科っていうのは俺だけど、常にいやらしい顔してるのはナギトだろ」

「ああん!?!お前だつてオリエンテーリングの時——っ痛い!イタタタタ!痛いですアリサさん耳引つ張らないで!?!」

「さ・っ・さ・と・い・く・わ・よ……!」

忌まわしい記憶を思い出さないように!—と言わんばかりの怖い笑顔でナギトの耳を引つ張りながら部屋から出て行くアリサ。残った面々は苦笑いするしなかったという。

☆★

その後、実習の課題についての書類が入っている封筒を開放し、中身を拝見。

内容は、このケルディックの人々からの依頼だった。

手配魔獣の討伐に、導力灯の交換、教会のおつかいなど多種多様な依頼だ。

これはいったいどう言う事なのだろうか？そんな疑問をぶつけるべく酒場で昼前ながら酒とツマミをいただいているサラに話しかけてみた。

サラによると「必須」と書いてある依頼以外はこなさなくても良いとの事。ただし、そこらへんの判断も特別実習の評価に繋がるらしい。

宿酒場から出たナギトらは、依頼をこなす事にした。

まずは西ケルディック街道に出て導力灯の交換。

途中に現れた狼型の魔獣の群れはラウラのSクラフトで一掃した。

Sクラフトは通常の戦技クラフトと異なり、余力を残さず全霊を尽くすスペシャルな必殺技だ。リインも何か掴みかけのようだし、兄弟分として負けていられない。とか考えるナギト。

そうこうしているうちに依頼のひとつである手配魔獣と遭遇する事になった。

「先手必勝！」という事で、まずはアリサ、エリオットによるアーツで戦端を開く。

うろろうろしていた所を攻撃され、怯んだ魔獣に詰め寄るのはA班の剣士3人。

「合わせろリイン！」

「任せろ！」

戦術リンクを結び、いつも以上に息ぴつたりの2人による紅葉切り。それはアーツで怯んだ魔獣をさらに硬直させ、生じた隙には待つてましたとばかりにラウラの剛剣が叩き込まれる。

現状で考え得る理想的な連携。ファーストコンタクト。しかしそれだけで斃れてくれるほど易しい相手なら手配魔獣とはされないだろう。

A班の初撃を耐え切った魔獣は叫び声をあげる。敵を威嚇するためか、自らを鼓舞するためか。

そのハウリングの直後、眼前にいたラウラに向けて鋏にも似た剛腕を振り下ろす。

それは大剣で防御するが、その威力に思わずたたらを踏むラウラに魔獣は追撃を行う。

そうはさせじとナギトは疾風で斬り込み、魔獣の尻尾を切り落とす。今度こそ痛みに喘いだ魔獣を油断なく見据えるナギトの頬には一条の傷があった。

それは魔獣の攻撃によるものではなく、アリサの矢でできた傷だった。ナギトと同じ

くラウラのカバーをしようと放った矢がナギトを掠めたわけである。ナギトからすれば「後ろにいるなら前の奴の動きくらい見てろバカ！」であり、アリサには「いきなり射線に入らないでよバカ！」という言い分がある。単なる連携不足であった。10リジユもずれていれば頭を穿っていたであろうと考えれば2人とも内心冷や汗ものだった。

そんな事はあれど、隙は隙である。エリオットのアーツが再び放たれる。アクアブリード。打ち出された水弾は魔獣の顔面に激突し、衝撃で上体がのけぞった。

「ラウラ、足元崩せ！」

「承知！」

好機と見たナギトはラウラに指示を出し、ラウラは間髪入れずに地裂斬を繰り出して魔獣の足元を抉った。体勢を崩した魔獣。これ以上ないチャンス。

「リイン！」

「ナギト！」

どうやらリインもナギトと同じく考えのようで、同時に互いの名前を呼んだ事に苦笑

しながら太刀を構える。

「三の型、業炎撃！」

大上段に構えた太刀から炎が立ち昇る。業火を纏った剣を力任せに叩きつけ、それのようにやく魔獣はこと切れるのだった。

☆★

その後、依頼達成の報告を行い、ケルディックに帰還したA班一行だったが、なにやら大市が騒がしいようだ。

行こうと言うので行ってみると、そこでは2人の商人が今にも取っ組み合いを始めようとしている所だった。

それを慌てて止めると、タイミング良く大市の元締めオットー氏がやって来ていさかいを納めた。

商人2人の喧嘩の内容は、大市正面の場所をどっちが使うのか、というものだった。

これについての申請は領主に行い、期間と場所を指定されるのだが、今回の問題は商

人2人共、大市正面の場所を使う許可を得ている事だった。

しかも期間まで同じ。正面という目立つ場所ゆえに商人たちのヒートアップも仕方ない面もあった。

これについて元締めオットーに聞くと、少し前に大幅の増税があり、それについての陳情をやめない限りは領邦軍（各領地を治める貴族が持つ半正規軍のようなもの）は動かず、今回の商人2人の喧嘩のような事態もたびたび起きるようになった……とのこと。

大市についての許可は領主が下すため、今回のようにわざと場所と期間を同じにすれば喧嘩を起こさせて、大市の売り上げも下げられるし、それを仲裁するはずの領邦軍も動かないとなるとさらに売り上げは悪化する。

となれば陳情を取り下げなければいけないので、ケルディック大市としては困るわけだ。

「というかそれでケルディック大市が過疎りでもしたら、それこそ税収ダウンじゃないの？もしかして領主様ってアホでらっしやる？」

オットーの話聞き終え、A班は宿酒場に戻り夕食を楽しみながら、そういった雑談を交わす。ちなみに発言者はナギトだった。

「その辺はバランスを取ってるんでしょね。生かさず殺さず…真綿で首を絞めるみたい……」

「というか、ケルデイツクの増税主はクロイツエン州を治めるユーシスの父親だぞ？」

アリスが妙にリアリティのある怖い発言をして、リインが増税主について言及する。「そーいやそーうか」とナギトは思い出す。エレボニア帝国を四分し管理する四大名門。その一角であるアルバレア公爵家は帝国の南西部クロイツエン州を統括している。

クラスメイトのユーシスを見てみると、優秀という言葉が良く似合う男という印象を受ける。何事もそつなくこなす美男子……ナギトからすれば字面だけで腹が立つてくるくらいだ。

しかもその兄貴は絵に描いたような貴公子で、社交界の噂はとある放蕩皇族と二分するほどだという。

そんな人物たちの父親が、こんな後先を考えない増税をするか？と疑問が生まれるが「優秀な人物の血族が全員優秀なわけもないか」と結論する。

そんな感じで話は進み……

「しかし……この急な増税は、何かの準備なのかねえ……」

夕食を食べ終えて、優雅に紅茶を啜りながらナギトは言った。わざとらしく「何かの準備」を強調して。まったく優雅ではなかった。

「準備……と聞くとちよつと嫌な予感がしちやうね。革新派と貴族派の対立が深まってるって聞くし……」

「領邦軍の軍拡の話もあつたわね。……まったく、内戦でも起こすつもりなのかしら？」
 「さすがにそこまで愚かな事はしないはずだ。帝国正規軍は精強……おそらく相手と同等以上の力を持つ事で交渉を有利にするつもりなのだろう」
 「なるほどな、そういう考え方もできるのか……」

そうした雑談と言うには物騒な雑談がひとしきりした所で、
雰囲気が暗くなつていた話のトーンが落ちていた事を誰ともなく認識し、話題を変える。

その後、話は《VII組》について、からツールズへの志望動機に変わる。

ラウラはある人物に近づいたためと言った。

アリサは「自立」するために、家を出たかったと。

エリオットは本当は音楽系の学院に通いたかったそうだ。

「俺は……自分を見つけるためかな」

リインは問いに対してそう答えた。

「ぶふっ」

くっさ！くさい！これはくさい（確信）！

危うくラウラに紅茶を吹きかけてしまう所だったじゃねーかりイン！

「げほっげほっ……げほげほげほ」

これはあかん。紅茶が気管に侵入してきた。やべえ、咳が止まんねえ。

大丈夫、続けて。とジエスチャーをして会話を続けさせるがナギトの咳のせいで微妙に締まらない雰囲気になってしまった。

ナギトの咳が止った頃、よくやくリインの「……自分を見つけるためかな（きりっ！）」

についての説明も終わったらしく、次はナギトの番となった。

「ナギトはどうなの？」

「それはもちろん、女の子との出会いが目的で」

「ふ、不純だね……」

不純ってなんだエリオット。

思春期の男って言うのはな、みんな色々と建前を立てちやいるが、ほとんどは出会い目的の行動をするもんなんだよ。

…と心の中だけで反論する。すでに全員からの視線が痛い。ジト目の威力を身をもって知った。

「というのは冗談半分で。俺は1年以上前の記憶がないから。自分が今後どうやって生きて行くか……この士官学院で見つけられたらなあ、って感じかな」

言葉にしたらラインの「く以下略(きりっ!)」とほとんど変わらない件。学院に提出

した願書の志望動機にはそう書いた記憶がある。

実は「楽しそうだから」というのが一番の理由だが、勉強はきついし実技もしんどいのはわかってたのに、何故楽しそうだからと思っただけは自分でも謎だ。

まあ、それだけじゃ志望動機としては不足していて、シユバルツアー男爵家にミラを出してもらう以上は、テオ・シユバルツアー男爵言われた「リインを見守る」というタスクはこなすため……という理由もあった。

「へえ、意外と真面目なのね」

「いつもの様子からは想像できない理由だな」

と、女性陣。

「あれ、おかしいな？なんか俺の評価がすごく低いのは気のせい？」

「気のせいじゃないだろうな」

「気のせいじゃないだろうね」

と男性陣。

「当たりきつすぎてびえんだわ」

と、そんなこんなで笑い話も終わつたし部屋に戻つてレポートをまとめよう……とし
て階段を登る前にラウラに声をかけられた。

「リイン、ナギト」

「ん、なんだ？」

「へい、なんででしょう」

振り返つて見たラウラの表情はどこか神妙なものがあつた。あんまりふざけてはい
られない雰囲気であると察したナギトは表情を引き締めた。

そして、ラウラは意を決したように訊いてきた。

「そなたたち、どうして本気を出さない？」

一瞬の空白。どうしてラウラがそういう発想に至ったのか理解する工程。色々な要素が頭の中を駆け巡る。

「そなたたちの太刀筋…《八葉一刀流》に間違いはないな？かの《劍仙》ユン・カーファイが興したとされる東方剣術の集大成。皆伝に至った者は理に通じるとされ、《劍聖》と呼ばれるという……」

ラウラはリインとナギトの2人が八葉一刀流の剣士だと見抜いていた。ていうか「見たか…八葉が一刀！」なんてリインがバトルを締めるから割りとバレバレではあったのだが。

「父上にも言われたのだ。剣の道を進むのなら、いずれ八葉の者と出会うだろう…とな」

その時のナギトは微妙な表情をしていた。何と答えるべきか。記憶喪失の件もあるし、ほとんど推測だからなー、と。あるいはリインに全任すつか、とも。

「確かに、俺たちが扱うのは八葉一刀流だ。俺は一時期、ユン老師に師事してた事もあった。だけど、劍の道に限界を感じて修行を打ち切られた身だ。俺はただの初伝止まり……期待させたのなら謝るよ」

リインは少しだけしゅんとした様子でそう言った。あくまで「俺は」と言っているあたりナギトについて語るつもりはないらしい。

「いや、そなたが謝る必要はない。して、ナギトはどうなのだ？」

ラウラはリインの言葉に若干の不快感を一瞬だけ滲ませて、次はナギトに訊ねる。

「俺は……1年以上前の記憶がない。だから、俺が八葉一刀流を使えるんだとしたら、それはリインの教えによるものだ」

未だどう答えるか決めかねていたナギトは事実のみを説明する。

これは「普通に考えたらそうなる」という回答に過ぎない。

しかし、推測ができている以上はそれを語らない事にも座りの悪さを感じたナギトはまた微妙な表情になった。

「そうか……よい稽古相手が見つかったと思ったのだがな。外で素振りをしてくる」

ラウラは残念そうに言うのと外へ出て行ってしまった。

これでいいのか、と自問する。

『剣』の道に生きている以上、『剣』について真摯に來られたら、真摯に返すべきなんじゃないか？

「あー、くそ」

くだらない。こんな理由付けはいらない。自分が嫌になる。

ナギトはただ、自分の事をラウラに知って欲しいだけだ。例えそれが真実でなくとも、推測混じりであろうとも。

「ちよつとラウラと話してくる」

ナギトはリインにそう告げると、ラウラの後を追って外に出た。

風見亭から外に出ると、少し歩いた所でラウラが素振りをしていた。

一抹の不安も、迷いも、恐れも、何もかもを振り払うような、断ち切るような、感じさせないような素振り。

なんてまっすぐなんだろうか。

この娘がそのまままっすぐに剣の道を歩んでいったとしたら、どれだけの傑物になる事か。

「ラウラ」

「……ナギトか。何用だ？」

ちよつと対応が冷たいのは気のせいじゃない。

さつきの会話で気に障ったセリフがあるはずだ。

「……本当の事を話したい。俺の、八葉一刀流についての」

「本当の事？」

ラウラはそこで素振りを止め、その瞳を俺に向けた。

すべてを包み込むような……それでいて何もかも切り裂くような琥珀色の瞳。

「ああ。俺の実力について」

ナギトは躊躇わずに言った。隠さないと、決めていた。

深呼吸をして「広い場所に行こう」と歩き出す2人。

「俺は、戦いというのは互いに向き合う前から始まっているものだと思ってる。考えて、考えて、考える。そうする事でどんな事態にも対応できて、どうやって自分を押しつける戦いができるのか。相手に何もさせないにはどうすればいいのか。それを考える奴

が強いんだと思ってる」

「兵法の1つにもそのような文言はあるな」

ナギトの言葉を否定したいのだろうか。冷たい口調でラウラはそう返事をした。

まあ、ラウラは正々堂々が大好きな騎士道まつしぐらの剣士だから、想定内の反応だよーいドン、で戦いを始めたタイプなのだろう。

「……考えて戦う。例えば、俺がラウラと戦う事になったとして。俺が戦闘中に胸を揉んだらお前は動揺するだろ？その時に俺が斬りつければ、はい俺の勝ちってなるわけだ」

「なっ……!?!」

ラウラは絶句して足を止める。例えば、と前置きしたが想像してしまっただろう。赤面しながら、動揺が見て取れるようにプルプルと震えていた。

「ち、乳を……いや、私はそんな事で動揺などしない！さ、さあ！揉むが良い！」

揉むが良い！ではない。意地を張っているのが丸わかりなのに、そんな事を言うものではない。

ラウラのお胸を堪能する大チャンスに見えて落とし穴だ、これは。

「そんな事言つて、いざ揉んだらキレルんだろ。知つてる知つてる…リインとアリサがやつてたやつね」

勇気が出なかったとか、そんなわけではない。決して。

「まあ、俺が言いたい事はだな。人は考えて戦う方が強いはず。感覚だけで戦うよりは、どうやって相手を下すのか常に思考している者が強い…という事。だけど、皮肉な事に俺の場合は思考を行わない、感覚だけで戦う方が考えて戦うより圧倒的に強いんだよ」

ナギトの言葉にラウラはハテナマークを浮かべる。

さもありません。どちらにしる使える身体スベツクは同じもの。

だったら無思考で戦うより、どう相手を打倒するか考えて戦う方が強い……という自らの結論を否定する発言。

東ケルティック街道まで出た。

「お喋りは、これにてお仕舞い」

「え？」と立ち止まるラウラから数歩離れて太刀を抜き放つ。ナギトの雰囲気はいつもの洒脱なものではなく真剣そのもの。

ここまで真面目なナギトをラウラは初めて見た。

「口で説明するより体感した方が速かろうよ。……ラウラ、3分で良い。集中を切らさずに俺の攻撃を待て」

色々と聞きたい事はあったが、ラウラも剣を鞘から引き抜いた。

気圧された、以上に愉しみに心が震える。

「……いいだろう。今のそなたはまるで抜き身の剣のようだな。それがより研ぎ澄まさ

れるというのなら、いくらでも待とう」

ありがたい、なんて言わない。ナギトは目を瞑り、集中を始める。いや、正確にはなにもしない。ただ、頭を空っぽにする。

思考という思考を排除する——という思考すら邪魔だ。

思考だけじゃない。この器に居座るナギト・シユバルツァーなんて人格も不要だ。戻れ。戻れ。戻れ。記憶を失う前の剣の鬼に。

剣鬼七式 外ノ太刀、雷の型 迅雷

太刀を構え、駆けて、ラウラの首元にそれを置いた。

「…………ツ なに!？」

驚愕のラウラの表情。

無我状態を解くと、一気に思考の渦が脳内の天地を埋め尽くした。

「これが、俺の本気^①の速度だ。さっきの状態だと、スピードだけでなくパワーもテクニクも、通常の俺とは次元が異なる高みへと至る」

太刀を納めて、言葉を続ける。

「何か感じられたか？俺の動きを察知できたか？認識できたか？」

ラウラは悔しそうに「まったく見えなかった」と返す。

「これが俺の真の実力……普段は発揮できない本気つてやつだよ」

それからナギトは順序立てて説明していった。

俺が1年前にシュバルツアー家に拾われて、リインに八葉一刀流を教わった事。

その際、付近に落ちていた太刀（今も使っている）が手に馴染んでいる事。

1年という短い期間では弟子が師の技を超えるのは不可能だろうという事。

そして、無我状態になると師であるはずのリインを圧倒できるような力を発揮できる事。

「これらの要素を組み合わせて考えてみると、1つの可能性が浮かび上がる」

「1つの可能性……？それはいったいなったのだ？」

ラウラはナギトの言葉に興味深々だ。

次のセリフも半ば予想できているだろうから興奮も覚めやらぬ……といった様子。

「それは……記憶を失う前の俺が、リインを遥かに上回る、それこそ《劍聖》クラスの八葉一刀流の使い手であつた可能性だよ」

「ふ、ふふ……」

俺の言葉を聞くと、ラウラは不敵に笑い始めた。

なんだろう？ ラウラの戦闘狂が発動しそうな気がする。

「やはり、父上が言っていた事は本当だったではないか！ よしナギト、今すぐ手合わせしてくれ！ さあ、さあ！ 今すぐやろう！」

夜の個室だったなら喜んでパンダイブしていた所だが。

さすがに大胆過ぎますラウラさん。

なんて言えるはずもなく、今日の所は勘弁してもらおう事になった。

これからはナギトが週一で顔を出すフエンシング部でなら手合わせしてもいい、という条件を出したら、渋られたもののなんとか承認は得られた。

さすがに四六時中やろうやろうって言われたら、意味が別だとわかっていても興奮しちゃうもの。

その後、ナギトとラウラは宿酒場に戻り、リイン、エリオット、アリサに指導されつつ実習のレポートを書き上げて就寝するのだった。

こうしてⅦ組の初めての実習の夜は更けていく。

波乱の2日目、夜明けは近い。

敗北の記憶

「……なんか騒がしいな」

起床して準備を整え、A班のメンバーで風見亭から出ると大市の方が騒がしくなっている事に気づく。

賑やか、ではなく騒がしいのだ。

嫌な予感を携えつつもA班は大市に向かう。

大市の真ん中で言い争う2人組を発見する。それは昨日言い争いをしていた商人2人だ。一度は矛を収めた兩人だったが、今回は元締めオットーがいるにも関わらず収集がつかないほどヒートアップしている。

どうやら2人とも自分の屋台を壊され、商品も盗まれたという事で激怒しているらしい。

とうとう殴り合いに発展しようか、という段になるとまるで見計らったように領邦軍がやつてきた。「こんな早朝から何の騒ぎだ」と。

青と白を基調とした軍服に身を包むクロイツェン州の領邦軍……有り体に言えばユーシスの実家であるアルバレア家の私兵だ。

商人たちが事情を説明すると、領邦軍の指揮官らしき人物が商人2人ともをひつたてるように指示した。

場所を順番で使う事に腹を立てた商人が、同時に事を起こしたと考えれば説明はつくだろう、と言つて。

「んなアホな話があるか」

と、そこで思わず呆れ声を出したのはナギトだった。本人は「おつと口がダダ滑りしたあ！」とわざとらしく咳き込んだ。

しかし領邦軍の指揮官は見逃してくれず、観衆をかき分けるとナギトの面前に迫る。

「なんだね？ たかが学生ごときが我々に意見するつもりか？」

ナギトは待つてましたと言わんばかりに口角を吊り上げると「いえいえ滅相もない」と優雅に一礼する。絵に描いたような慇懃無礼というやつだ。

「ただひとつ、推理をするなら」

と続ける。

横にいたリインはやれやれと頭を抱え、他のメンバーは「なにやってんだコイツ」というように目を見開いていた。

「あなたがたの推測では、まず手前の屋台の人物が奥の屋台を破壊し商品を盗み、次に奥の屋台の人物が屋台の破壊と商品の盗みに入る…という筋書きしか成り立ちませんよね?」

屋台の破壊と商品の盗み、その順番の話だ。

はじめに手前の屋台が破壊されていれば、その主人が奥の屋台を破壊する際に気づくからだ。

「それがどうした？」

言ってから領邦軍指揮官の表情がわずかに歪む。まるで続きを促すセリフが、真実に到達する可能性を恐れているように。

「まあその可能性はほとんどないですよ。だとしたらあまりに女神の悪戯が過ぎる。……仮定をいちいち話してもつまらないですから結論を言いますが」

仮に商人が犯人だとして、の仮説は色々無理が多い。それを一つ一つ検証するのもひとつの道ではあったが、ナギトは警察ではない。

「十中八九、複数犯。盗まれた商品の数や屋台の破壊の程度。……一介の商人に一晩でできる事じゃない。商品が盗まれるだけならまだしも、屋台まで壊されてるんですから、人通りの少ない夜なら音も相当のはずでしょうからね」

まるで政治家が演説するように語るナギト。すでに民衆は聞きいついて、領邦軍は厳しい表情をより険しくしている。

「しかし多少以上の無理があるにせよ、そちらの話も筋は通る。……だってこの商人の2人の仲は険悪だった。だから、お互いが犯行に及んだという筋書きが通るわけです。お互いが犯人だと指摘し合うわけです。つまり、2人の関係が最悪だと知っている人物が犯行に関わっているという事です」

喧嘩していた商人2人がまったくの他人なら、屋台が破壊され商品が盗まれたとしても「被害者同士」となる。しかしそうならないのは「お互いの仲が悪かった」から。「お互いに営業妨害をしてもおかしくない関係」だったからだ。

「ふん、ならば事情を知る大市の誰かが徒党を組んで屋台の破壊と盗みをやったと言うのかね」

指揮官はナギトの推理の示す犯人象を言い当てる。すると大市の商人たちはざわめき出すが。

残念、それはミスリードだ。

「いいえ。昨日の騒動を見ていた人たちが一夜のうちに盗人になって徒党を組むなんて可能性の馬鹿らしさは論外として。あるじゃないですか、この2人の仲が陰悪であろうという客観的な証拠が」

さらつと指揮官を小馬鹿にして「元締め」とオットーに視線を向ける。商人2人が陰悪だという客観的な証拠。それは聞き齧っただけのナギトより元締めであるオットーの方が精通している事情だ。

「領主の手違いによる、商売場所と期間の重複……」

「そう、それです！ “領主の手違い” で場所を争う事になった商人2人の関係は最悪に決まってる！……しかしそれを知るのは昨日の騒動があつた時間に大市にいた者と…… “手違い” をやった側でしょうなあ」

適当に歩きながら喋っていたナギトはそこでピタリと足を止め、ジロリと領邦軍を睨んだ。明確に誰が犯人と言ったわけではないが、その意図は場の全員に伝わっている。すなわち、この屋台の破壊と商品の盗難は領邦軍の仕業、ないしはその手引きした者

による犯行だと。

「貴様、無礼だぞ！」

領邦軍の兵士の一人がナギトに向けて銃を構える。ナギトはそこで再び優雅に一礼すると申し訳無さそうな体面で、

「申し訳ございません。……しかし所詮はたかが学生の即興推理。本気になられる事もないでしょう。私はあくまで——」

可能性の一つに過ぎませんので、とノリノリで言い切ろうとした所でラインがナギトの頭を掴んで低頭させた。

「すみません！こいつ、調子に乗ると饒舌になるやつでして！決して本心から言ってるわけじゃないんです、勘弁してください！」

確かに調子に乗ってたなと感じたナギトはラインの手の押さえるままに頭を下げておく。

「すみません、調子に乗りました」

わずかな緊張感と共に十呼吸ほどしただろうか、かちやりと銃口を下げる音が聞こえた。

「ふん、まあいい。所詮は学生の当て推量だ。我々もいちいち相手にするのは馬鹿らしいからな。これ以上騒ぎ立てるようなら連行せざるを得ないが」

指揮官はナギトを睨みつけ、反意がない事を確かめると商人2人に視線を移す。商人2人もさすがに牢屋行きは勘弁らしく、頭をぶんぶんと振る。

そうして領邦軍は引き上げていった。

「ふう……、まったくどうなる事かと思っただぞ」

「はは、すまん。ちよいと興が乗っちゃまって」

リインの安堵に悪びれもせず謝罪するナギトに拳骨が落ちる。それを甘んじて受けたナギトを見たラウラが口を開く。

「しかし…ナギトの推測も筋は通っているように思えるな」

「うーん、確かに。きつといくつも穴があるんでしようけど…昨日まで大市なんて気にかけてもいなかった領邦軍が今日いきなり出張ってきたのは少し引つかかるわね」

それにアリサが賛同して「まあ半分はハツタリだけだな」と当のナギトがぶち壊しにする。

絶句するA班一同だが、それを尻目にナギトは言葉が続けた。

「全ての不可能を除外して最後に残ったものが如何に奇妙なことであってもそれが真実となる……つてわけでもねえし。すべての可能性を不可能だと断じるだけの材料もないしな」

ナギトは警察でなければ探偵でもない。領邦軍のやつらが言う通りたかが学生だ。

だから、現実的に考えてありえそうな可能性を提示したのだ。その提示の仕方に悪意がなかったとは言わないが。

5 択問題の答えがわからないから、これだ！と思つた選択肢にまるをつけるようなもの。

その後、少し話し合つて領邦軍の詰所を訪ねてみる事になる。当然ながらナギトは別行動だ。

ケルディックの町を歩きながら考える。

嫌な流れだと。大市で推論をかましたりはしたものの、この揉め事は特別実習の範囲外だろう。表面だけを見ればたかが器物破損と窃盗だ。しかしナギトの推理が当たつていると仮定して、大きな視点で見れば革新派と貴族派の争いにまで規模は拡大する。

大市からの税収は差し詰め領邦軍の軍拡のためといったところか。

そんな問題に学生が関与するべきではない。大人の問題に子供が首を突つ込めば痛い目を見るに決まっている。

しかし、どこかでそういう問題に巻き込まれていくのだという確信があった。大きな流れからは逃れられないと。激動の時代は世界そのものに伝播するのだと。

「……あら」

そんな思考の狭間から脱したのは、既視感………というよりは昨日の景色のまんまの光景を目にしたからだ。

人通りの多いケルディック大市において景色が変わらないのはほとんどありえない。屋台に並ぶ商品も変われば買う人も変わる。

しかし、町の外れ。街道の入口近くに昨日と変わらぬ光景があった。酔っ払いだ。どうやらその場で一夜を明かしたようで、何やら目撃していそうだったため話を聞いてみる。

その頃ちょうどリインらも領邦軍から話を聞いていたようで合流して情報を統合する。

どうやら事件にはやはり領邦軍が関与しているようで、実行犯はルナリア自然公園に逃げ込んだらしいと思われた。

ルナリア自然公園は西ケルディック街道の先にある公園で、今は管理上の問題で封鎖しているらしい。

A班が自然公園に向かうと、その入口の門は南京錠で閉じられていた。

しかし、その門の近くに盗んできたと見られる商品が転がっていたため、ここを拠点としているのはほぼ確定だ。

「本気で行く気かよ？」

今にも突入しそうなA班の雰囲気になギトが水を差す。

「今回の件は領邦軍が関わってるのがもう確定だろ？ 最悪、事実隠蔽のために消されるんじゃないか？」

「いや……さすがにそんな小説みたいな事ないだろ……」

そんなナギトをリインが諫めて、結局はルナリア自然公園に突入する事になった。

今回の事件は領邦軍が絡んでる。実行犯じゃないにしろ、かなり深いところで。しかも、大本を辿れば商人2人が争う事になった大市正面の場所は領主が裁可したものだ。……つまりクロイツェン州を統括するアルバレア公爵家の謀略の一端だ。どうして学生風情が始末されないと安易に判断できよう。まあそんな事を口にするわけもないのだが。

☆★

自然公園の奥では清掃業者に扮した野盗が「今回は良い稼ぎになった」なんて話をしていた。A班総員で乗り込んで制圧する。

拘束まで終えたところでエリオットがきよろきよると周囲を見渡した。

「どうした？」

「なんだか笛の音が聞こえた気がして」

ラインの問いに不思議そうにしながらエリオットは答える。

「笛の音……？」

ありえない、と断じる。施錠されていた自然公園の奥地で笛の音が聞こえるなんて、何かの作為があつての事だ。

しかしナギトがそれを伝える前に解はやってきた。雄叫びをあげて地響きを鳴らしながら、それは姿を現す。

「きよ、巨大なヒヒ……!?!」

「この自然公園のヌシと言ったところか」

猿型の魔獣だ。ゴリラと言った方がしっくりくるが。その登場に表情を強張らせる。

「リイン、どうする？ とんずらかますのが最善だと思っけども」

そこでナギトはリインに判断を仰ぐ。ナギトの意思は伝えた通りだが、甘ちゃんであるリインは「それはダメだろ」と正論で返してきた。

自分たちは被害に遭わないし、悪事を働いた野盗たちは懲らしめられる、と。そんな目論見は打ち砕かれたわけだ。

「じゃあやるとすつかあ！」

気合を入れて意識を切り替える。太刀を握り直してヌシとその取り巻きである2匹の中型猿魔獣を睨みつけ——

「——ぬっは!？」

すっ転んだ。

「ナギト、なにやって——」

足元の注意不足を咎めようとしてリインは視線をナギトに向けたが、そのナギトはむしろ林の奥に引きずられていくところだった。

ナギトはただ転んだわけではない。ツタのようなものに脚を取られ……文字通り絡

みつかれて転ばされたのだ。

そして驚くべき事にそのツタは動き出してナギトを自然公園のさらに奥に引きずり込もうとしている。

大型の猿魔獣に気を取られていたA班のメンバーも異変に気づくが、

「俺はいい！お前らは猿どもを相手にしろ！」

ヌシの脅威度は先程の野盗とは比較にならない。一瞬の気の緩みが死に繋がりがかねない相手だ。それをはつきりと理解していたリインとラウラは意識を切り替えてヌシと対峙する。アリサとエリオットは狼狽えていたものの、ナギトを思つて戦力を分散するよりヌシを早く斃してナギトを救助した方が良いのは理解できたのか、それぞれ得物を構えるのだった。

それを見届ける前にナギトは藪に突つ込む。

「いてててて、いたいいたいあ！ちよ、痛いんですけどお!!」

木の枝やら根っこやらに激突しながら引きずられ続け、少し開けた原っぱに出る。す

るとナギトをここまで強制連行したツタは煙のように消え、この自然公園にはふさわしくない格好の人物がナギトの前に現れた。

「久しぶりだね《剣鬼》殿。……とは言っても私の事を覚えてはいないかもしれないが」
白い貴族風の衣装に羽をあしらった白銀の仮面。忘れたくとも忘れられない風貌だろう。

と言う事はつまり、先のセリフは。

「俺が記憶喪失なのを知ってんな？」

端的に、その事実のみを確認する。

それを聞くと相手はニヤリと笑ってから高笑いを始めた。

頭が痛い。

「やはりそうか！ 魔女殿の仮説は正しかったようだな。よもやあの《剣鬼》が己の罪業すらも忘れ学生になり果てているとは！ これほど破滅的な結末が見えた物語があると

は……」

《劍鬼》

劍の鬼。どうやらそれが記憶を失う前のナギトの異名らしい。察するにあまり善い行いをやっていなかったのだろう。

「………気に食わねえな。俺の過去の何を知っていて、今の俺を定義してんのか知らねえが。俺の行く末をお前が決めてんじゃねえよ」

だが、それで自分の未来を破滅的だと予言されるのは容認できない。自身でも意味がわからないほど嫌悪する感覚だった。

頭が痛い。

「………面白いではないか。此度は挨拶だけのつもりだったが………どれ、味見でもしてみようか」

「まったく趣味の悪いワードチョイスだな……」

太刀を構える。いったい何が相手の琴線に触れたかはわからないが、どうやら戦闘は避けられない流れらしい。

頭が痛い。

「改めて名乗らせてもらおう！ 結社《身喰らう蛇》執行者N o. X 《怪盗紳士》ブルブラン！ どうか覚えて帰ってくれたまえ」

ブルブランがステッキを一振りするとその背後に機械兵器が出現した。ルナリア自然公園に出現する猿型の魔獣ほどの大きさではないが、備え付けられた銃口は現実的な脅威を思わせる。

それに加えて《怪盗紳士》が相手だ。言動こそはただの不審者だが、立居振る舞いからそれなり以上の使い手と察される。

「つたく、とんだハードモード……」

これなら自然公園のヌシをリインたちと一緒に討伐する方が遥かに楽そうだ。
そんな感慨を抱いて—————

先手必勝。まさにその四文字を想起させるに足る爆発だった。

弾かれたような高速移動。すれ違いざまに斬撃を叩き込む二の型疾風。

ブルブランの背後に出現した機械兵器の3体を撃破する。その勢いのまま飛び上がり、太刀を振り抜いた。

「————孤影療原！」

「むっ！」

孤影斬を幾重にも降らせる、頭上からの攻撃。ブルブランは躲すが機械兵器は余さず切り刻まれて無力化される。

「フフハハハハ！ やるではないか！ その生き様、今ここで手折ってしまうのも一興か……？」

着地するナギトを見やり、杖をくるくると弄びながらブルブランは下卑た笑みを浮かべる。

余裕、なのだろう。業腹な事に今の自分の腕前ではブルブランを跪かせる事はできないだろう。

「ならまあ、一泡吹かせるくらいかね」

「ん？ 今なにか……」

「お前の動きのクセはもう掴んだって言ったんだよ」

ニヤ、と笑ってナギトは告げる。ハツタリだ。

しかし記憶を失う前の《剣鬼》というネームバリユーと人形兵器を倒した手並みが真実味を抱かせる。

「何を……バカな事を……」

疾風の歩法でブルブランの懐に入り込む。眼球はその動きを追うが、肉体は追いつかない。

鞘から抜き放たれる斬り上げを上体を逸らして何とか致命傷を避けるブルブラン。

「くっ…」

そのままバックステップで距離を取るが、ナギトの追撃も同時だ。

「おおおおー！」

廻り、焰が太刀に纏わりつく。大上段に振り上げるとそれは龍の形を為し、そして放たれる。

螺旋龍炎撃。

回転する事で練り上げられた龍炎は叩きつけられるのではなく宙を駆けてブルブランに突撃する。

「ぐうっ…!？」

ブルブランはステッキで受け切るが、炎が掻き消えたその先にはすでにナギトが迫っている。

今度こそ、致命的な距離。太刀の一振りで首が飛ぶ射程。

しかし。

「な、に……」

ビタリ、とブルブランの首筋でナギトの太刀が止められる。ナギトの意思ではない。

「フフフ……学生にしてはいい動きだと言えるだろう」

余裕の笑みを見せるブルブランは杖で地面を指す。そこにはナギトの影がナイフで地面に縫い付けられていた。

「影縫いだ。……まあ《剣鬼》ならば一瞬で拘束を解けるくらいの子供騙しなんだがね。

さてどうしたものか、ナギト・シユバルツァー」

わざとらしくナギトの名を呼ぶブルブラン。《剣鬼》としての記憶を失い、剣技すら無くした哀れな剣士。それがナギト・シユバルツァーなのだ。暗に言っているのだ。

腹が立つ。そんな感情が身を焦がすより早く。

頭が痛い。頭が痛い！頭が痛い！！

視界がぼやける。ブルブランの姿が消える。灰色と金色がやけに眩しい。

「命の危機に力を発揮するなんて可能性があるかもしれない！」と言いながらうつろな瞳になったナギトの周囲にナイフを展開する。

空中に浮いたナイフは一斉に射出され影縫いで身動きのできないナギトに殺到する。

頭が、痛い。

風に揺れるアッシュブロンドの髪。

長身を覆う灰色のコート。

携えるは金色の魔剣。

「貴様ではこの《剣帝》に勝つ事はできない」

炎が。灯る。

バギン！と音を鳴らしてナギトの影を縫い止めていたナイフが弾けて碎ける。

そして、鬼を斬る炎が解き放たれた。

それはナギトに迫るナイフの悉くを撃ち落とし、安全圏にいたはずのブルブランすら薙ぎ払った。

「むうっ……!!? これは…、この戦技は……ッ！」

それはかつて結社《身喰らう蛇》においてブルブランと同じ執行者だった男の奥義。彼の代名詞ともされた剣技だ。

「はあつ……はあつ……」

振り切ったナギトは、倒れそうになるが剣を杖にしてそれを拒否。なんだ今のは、と疑問が頭を埋め尽くす。

幻覚……と言うよりは、やはり記憶なのだろう。

今の剣技も、きつと本家には及びもつかない劣化版に違いないという確信があった。でなければ負けるものか、という敗北感が共をしている。

「ふ、フフフフ………実に面白いものを見せてもらったよ。ナギト・シュバルツァー」

立ち上がったブルブランはあまりダメージはないようだった。対するナギトは記憶の剣技を再現した事で疲労困憊だ。

「やはりここで手折るには惜しい…… 《幻焰計画》の幕が上がるまで間も無く………君はそこで一花添えてもらおうでしょう！」

ブルブランの足元に魔法陣が広がる。「さらばだ！」と言い残してその姿が消え去った。

転移をしたのだ、という確信があった。やはりこれも過去に体験した事なのだ。

「あー、くそつたれ。休憩したいんだけどなー！」

今すぐにも大の字になりたい気持ちを押し殺してナギトは走り出す。リインたちが心配だ。

☆★

息を潜めて、考える。どうしたものか。

ナギトがA班に合流しようと思ったのも束の間、ヌシが出現した広場ではリインらを領邦軍が取り囲んでいた。

どうやらヌシは無事に倒せたらしいが、その後事態の隠蔽に来たらしい領邦軍に見つかったようだ。

考える。考える。考える。

思考に埋没する。思考に沈殿する。思考に、靄がかかる。

ここで逮捕されないために、領邦軍を打ちのめして逃げたとすれば、クロイツェン州の領邦軍……ひいては四大名門を相手取る事になりかねない。

それはまずい。学院にも迷惑がかかる。

ベストなのは、自分たちがこの場から逃れられて、且つクロイツェン州の領邦軍と敵対しないようにする事。

ふと「殺す」という選択肢が浮かび上がる。

「そうだ……殺そう……」

今朝の大手の事件……その調査の末に野盗に行き着いた領邦軍だったが、現地協力者だった士官学生を庇い野盗と相打ちになった。

そんな筋書きが頭を支配する。

領邦軍は子供を庇った名誉の殉死。自分たちは助かる。その場合は野盗には死んでもらわないと。

決意なんてものは必要としなかった。それは合理的に論理的に破滅的に、《剣鬼》に根付いた方程式。

パンを食べる時にわざわざ「パンを食べるぞ！」と決意しないのと同じように。ただ当然の如く太刀の柄に手をかけ「—————」。

「—————からは私たちに任せてください」

藪から広場を覗いていたナギトの肩が掴まれた。ハッと息を飲んで振り返ると、理知的な目がナギトを射抜いていた。

特徴的だったのは水色の髪。整った顔の造形はまるで彫像のようでスタイルもモデル並だ。状況が状況でなければ口笛のひとつでも吹いていたところだ。

しかしその魅力は軍服によって硬く引き締められている。グレーの制服はおそらく

鉄道憲兵隊
TMPのものだ。

「ふう」

その雰囲気から彼女が凄腕である事も読み取れる。この場を任せる事に躊躇いはなく、ナギトは抜きかけた太刀を鞘に納めた。

彼女は部下を率いて広場に突入すると、領邦軍をあつという間に包囲した。領邦軍も第三者が介入した事により野盗を事件の犯人として扱う他なく、また分の悪さも手伝つて素直に撤退して行った。

TMPによる制圧が終わった後にナギトも広場に踏み入り、「よ」と手を挙げた。

「ナギト…無事だったんだな」

「おうよ、何とかな。そつちも無事で何より」

どうやら案じていたのはリンらもナギトと同じようで互いの無事を喜び合う。

話も一段落したところでTMPの面々と共にケルディックの町に戻る事になった。

町に戻る際にTMPの指揮官の女性は「クレア・リーヴェルト」と名乗った。……………前述の通り美人だが、何か……………違和感と言うか、既視感？

ケルディックに到着し、TMPとは別れる事になる。屯所に入る憲兵らを見送り、最後に駅に入ろうとしたクレアに声をかけた。

「失礼、綺麗なマドモワゼル。……………私たち、どこかでお会いした事はありませんか？ よければ連絡先でも……………」

ナギトの言葉に目を剥くクレア。その紳士然とした言葉使いではなく、その内容そのものに、だ。

しかし、クレアがそれに反応するより早く、別の声がナギトにかけられる。

「なにナンパみたいなの事なんかしてんのよアンタ」

ジト目で現れたのは教官サラ・バレストインだ。どうやらB班の実習先からケルディックにトンボ帰りして来たらしく、疲労感が目に見える。

「なつ、サラ……！　ち、違う！　誤解だ！」

「何で浮気がバレた旦那みたいな反応してんのよ!？」

そんな即興コントにA班のメンバーは苦笑い。クレアは呆気に取られつつもクスクスと笑んだ。

「とても仲が良いんですね。そんな女性をほうって他の人に声をかけてはいけませんよ」

そしてそのまま悪ノリして来たが、当のナギトが「いやいや」と話を打ち切った。

確かにさっきの言葉はナンパの常套句だが、そう言ったのは実際に会ったことがある””と思っただからだ。

どこかの町ですれ違ったか、あるいは挨拶でも交わしたか。あまり印象的ではない出会ったから覚えてないのだろう。

あるいは、その時と今のイメージが違うのか。

「でも、本当に会ったことないですか？ ……例えば、帝都でも」

「さあ…帝都は広いですからね。きつとすれ違つたくらいじゃありませんか？ そうでなくても私のような没個性の女…覚えるのも大変でしょう」

「いえいえそんな。本当にお綺麗です。連絡先を教えていただければ毎日でも声を聞きたいくらいです」

「だから何口説いてんのよ、アンタは」

ナギトの言葉は受け流され、加えてサラに肩パンされる始末。

そんなナギトを見つつ、クレアはメモ帳にさらさらとペンを走らせるとその部分を破つてナギトに手渡した。

「私の連絡先です。こうまで熱烈に求められては悪い気はしませんからね」

「ちよ、アンタも何のつて来てんのよ。相手は学生よ」

今度はクレアがサラに睨まれる番だった。ナギトは「ありがとうございます」とメモの切れ端を拝領し、直後「業務用ですけど」というクレアの言葉に打ちのめされる。

そんな一幕がありつつも、VII組の初めての実習は終わりを告げた。

クレアと別れて列車に乗る。トリスタまでの短い道のりを駆け抜けていく列車の中で会話をする。

特別実習とはなんなのか？

《VII組》とは？

その1つは、教科書の知識でしか知らない、現地を己が身で体験する。というもの。それともう1つ、ラインが気づく。

特別実習で俺たちがした事は遊撃士に似ている、という事。

《遊撃士》とは《支える籠手》を紋章として掲げる組織。

レマン自治州に本部を置き、民間人の安全を第一に考える正義の味方。ただし、事に政治が絡むと途端に力を振るえなくなる、そんな弱点も抱えた組織だ。

寝ていたはずのサラ教官は「てへ、バレたか」などと言い、狸寝入りする。

《Ⅶ組》に遊撃士の真似事をさせるのが目的なのか。だとしたら《Ⅶ組》はいつたいどんな期待を背負わされているのか。

遊撃士はエレボニア帝国において活動を制限されている。何年か前にあつた遊撃士協会への襲撃がその原因だ。遊撃士への攻撃を民衆に及ばせないために遊撃士の活動も制限されたという話だ。

ならⅦ組に求められるのは遊撃士の代わりか？

この推測はかなり近いと思われた。しかし本質的に求められているものは遊撃士の役割ではなく、第三勢力の可能性があつた。

革新派と貴族派の対立する帝国において、そのどちらにも属さない第三者。

それはきつと、特別実習で帝国各地を実際に見て回るⅦ組だからこそ出来る芸当だ。

考え過ぎだ、とナギトはかぶりをふつた。

理事長オリヴァルト・ライゼ・アルノールはリベールで遊撃士と共に事件を解決したというが、それゆえに遊撃士の在り方に希望をもっているのか。

そんな推測を試みるものの、答えは得られず列車はトリスタ到着の汽笛を鳴らすの

だ
っ
た。

ナギト・シュバルツァーの不細工なやり方

「流れ行く 星の軌跡は 道しるべ 君へ続く

焦がれれば 想い 胸を裂き 苦しさを 月が笑う

叶うことなどない はかない望みなら

せめてひとつ 傷を残そう」

放課後、学院の屋上からグラウンドを眺めながら口ずさむ……否、熱唱する。

曲名は『琥珀の愛』。

少し昔に流行った曲で、ラジオ番組『オリビエ・レンハイムのリベール旅日記』のエンディングで流れる曲でもある。

暇潰しに屋上に来て鼻歌まじりに景色を眺めていたら、いつの間にか興が乗って熱唱してしまっていた。

せめて屋上に人影がないのがせめてもの救いではあったが、どこぞの教室の窓でも開いていたら聞こえるくらいに熱唱だ。

マイクを片手に持つようにノリノリに歌いあげたところで、パチパチパチパチとはりない拍手が行われる。

「よう、なかなか上手いもんだな」

現れたのはクロウ・アームブラスト。2・5枚目キャラの2年生で、初対面のナギトから50ミラを盗もうとした先輩だった。ちなみにリインは普通に手品に騙されて50ミラを奪われたそうだ。

当人から聞いて大爆笑してやったら普通に殴られた。

「50ミラ先輩じゃないですか」

「50ミラ先輩ってなんだオイ」

若干気恥ずかしかったためそんな言葉で感情を隠す。クロウが破顔したのを見て同

じくナギトも表情を緩め、

「冗談ですよ、クロウ先輩。何か用でも？」

「いやなに、屋上から奇声が聞こえるってんで調査に来たわけよ」

どうやらこの罵倒が50ミラ先輩呼びの仕返しらしかった。ナギトは「はっ」と笑って肩をすくめる。

「それはそれは。どうもお騒がせしました」

慇懃無礼に一礼し、顔を上げるとクロウと視線が交錯する。

その目つきはいつものおちゃらけたものではなく、鋭い。それにどんな意図があるのか。そもそも意味なんてないのか。真顔なのか。

黙ってればイケメンとはこういう事か。などと納得する。

「ジオルジュが呼んでたぜ」

クロウの用件とは、ジョルジュがナギトを呼んでいる事を伝える事だった。

「ああ、なるほど。…ARCUSで呼んでくれればいいのに」

「通信で呼び出せて？ 味気ねえ事言うなよ」

なにが、と言いたかったが、先輩相手にさすがに生意気だと思って喉元に留めておく。

「工房棟に行けばいいですね？」

すでに歩き出したナギトは速度を緩めずに問う。「ああ」と言うクロウ。すれ違いざまに再び視線が交わった。

身震いするほど底冷えのする視線。こちらを見透かそうとする赤い瞳。が、すぐにお調子者のそれに変貌する。

「得物の話だったか？ 面白そうだし俺もついてっていいか？」

クロウの提案を却下する理由もなく、「どうぞ」と返事をする。

ナギトの得物：すなわち「太刀」。それについてジオルジュに調査を頼んでいた。きつとその報告だろうと当たりをつけて工房棟へ向かう。

事の発端は数日前に遡る。

☆★

「……相変わらず傷ひとつなし、か」

太刀の刀身を眺めて、嘆息するようにナギトは言った。その手には己の物と思われる太刀——おそらく記憶を失う以前から使っていた得物が握られていた。

ラインの見様見真似で太刀の整備を行った後の一言である。

ケルディックでの実習を終えて1日が経過していた。レポートやら面倒な課題を片付けてようやくと太刀を点検する。

記憶と共に太刀の扱いについても忘れたナギトはラインがやっているのを真似して

太刀を手入れする。

ユミルの修行中にも思っていた事だったが、ナギトの太刀には刃毀れひとつない。ラインの愛刀はたびたび本格的な整備を行っていたが、ナギトの太刀はそういった必要もなかった。

ケルディックの実習ではかなり無茶な使い方をしたし、今回こそ傷つくかと懸念していたが杞憂のようで、しかしそれはそれで疑問だ。

実習においてブルブランという脅威を退けた、炎の剣技は本来太刀で使うクラフトではない。しかしそれを使い、なおかつ太刀に傷ひとつないのは疑問と共に不信感を抱かせる。

“剣”と“太刀”は似て非なる武器だ。

剣が“叩き切る”のに対し太刀は“斬る”。

刃の鋭い太刀は耐久性を犠牲にしているとも言える。

それなのにナギトの太刀は剣のような扱いをしても折れるどころか刃毀れひとつない有様だ。

使い手としてはありがたいが、有事の際にぼつきりいかれても困るので、わかる人間に見てもらおう必要性を感じたナギトはメンテナンスできる人を探し、それに引っかけ

たのがジヨルジユであった。

ジヨルジユ・ノーム。トールズ士官学院の2年生であり、黄色のツナギを着た恰幅の良い青年だ。技術者としての力量は本職顔負けであり、卒業後の進路についてもすでにいくつかスカウトがきているほど。

「結果から言うと、この太刀には本格的な手入れは必要ない」

工房棟にて、ナギトの太刀をテーブルに置き、それを挟んでナギトとジヨルジユが向かい合う。クロウはさっさと奥の方に入って行ったが、どことなく聞いている雰囲気は感じられた。

「と言うと、どういう意味です?」

「君の太刀が特殊な鉦石でつくられているからだ。ゼムリアストーンについては知っているかな?」

“ゼムリアストーン”

この大陸の名を冠する鉱石については耳にした事があった。

「確か、世界一硬い鉱石じゃないですか？」

「うん、その通り。ゼムリアストーンは世界一硬い鉱石とされている。そしてこの太刀はゼムリアストーン製だ」

「つまり、世界一硬いゼムリアストーンで製作された太刀だから、手入れの必要はない？」

「そういう事だね」とナギトの言葉を肯定するジョルジュ。

「それでも軽いメンテナンスはした方がいいだろうけどね」

ジョルジュの言う軽いメンテナンスとは、これまでやってきたようなリインの猿真似メンテナンスだろう。

「はい」と受け取ったナギトに「だけどね」とジョルジュは続けた。

「ゼムリアストーンの加工法が確立したのは2年ほど前：リベール王国のA・ラツセル博士によってなんだけど、この太刀が製造されたのはそれより前のようなんだ」

そう言ってジョルジュはナギトに写真を見せる。どうやら太刀を分解した時の写真のようで、刀身を留める目釘穴の下部、なかに1201と刻んである。おそらく制作年だ。その裏側には「宵星」と彫ってあった。こちらは太刀の銘だろう。

「なるほど？」

ナギトの太刀が制作されたのは1201年。これはゼムリアストーンの加工技術確立以前だ。

つまりラツセル博士が加工法を確立するより前に、別の誰かがゼムリアストーンの加工に成功していた？

「1201という数字を根拠にして、1201年につくられたと断定はできないけどね。

…でも正直、1201年に制作されたと思えるほどには、つくりが粗い」

「……ああ」

と、そこでナギトはジョルジュの言いたい事を理解した。

「要は、ゼムリアストーン加工技術が確立されるより前に、無理矢理ゼムリアストーンを加工してつくった太刀だから、つくりが粗いと」

「その通りだ」とジョルジュは首肯する。

「僕は太刀という武器について詳しくないからリンくんのそれと比べて…になるけど、耐久性はこちらが高い。だが切れ味については劣る。…そんな感じだね」

「まあ確かに、太刀と言うにはお粗末なつくりだとは思ってました。正直なところナマクラでしょう」

ジョルジュがオブラートに包んだ評価がナギトによって剥がされる。見た目でわか

る刃紋にしてもリインの愛刀のほうが立派だ。

しかし太刀の問題点である脆弱性についてカバーできていいるなら評価は五分五分だろうと自分を慰める。

そんな時、工房棟の奥からクロウがひよこつと顔を出した。

「ゼムリアストーン製の武器だつて？ ジョルジュ、お前が打ち直してやる事はできねーのか？」

確かに科学・技術分野において貪欲であるジョルジュならゼムリアストーンの加工技術を体得している可能性はあった。

クロウも一年前からの付き合いであるジョルジュの有能さについては身をもって理解しており、それゆえの提案だったが、

「うーん、ゼムリアストーンそのものを加工するだけならできるけど、一度かたちにされたものを再度打ち直すのはさすがに無理かな」

ジョルジュの回答は否。それに太刀を打ち直すのにだって専門的な知識と技量が要

る。ジョルジュならすんなり覚えそうな気もするが、ナギトのためにそこまで労力を割いてもらうのも申し訳ない。

「俺には今のままで充分ですので」

ナギトはそう言つて太刀を腰に提げた。話は終わりかと思われたが「そうか？」とクロウが口を挟んだ。

「お前は本当にそんな得物で満足なのか？ ナマクラつて自分で言うくらいだろ」

言葉の意味を測りかねた。クロウの声音は字面通り受け取らせるものでもあり、また何かを探られているような気もする。

「…？ まあ、俺がもうちよい拘れるくらい強かったら話は違つたんでしょうけども」

言つてから、まずつたかと内心で冷や汗をかく。言葉を額面通りに受け取り返答するという演技。クロウの言葉に、それ以上の意味を見出した事を隠すための演技を見抜かれたかと。

「…そうかよ」

クロウの怪訝な視線は3秒と続かない。きつとクロウも探っている事を感じづかれないのだ。

お互いにまだ気づいていないと、勘違いだと言い逃れできる場面だ。

なんとなく据わりは悪いが……ああ、なんだろう……こんな腹の探り合いが、少しだけ楽しい。

「話が終わったんならちよつと来てみるよ。面白いモン見せてやるぜ、後輩」

ジョルジュに視線をやると、うんと頷かれた。ここにきた本題は終わり、クロウの道楽に付き合う事になる。

クロウに続いて工房棟の奥に進むと、そこには前後に車輪のついた乗り物らしい機械が安置してあった。

「これ……バイク？」

「誰かから聞いたか？ こりや導力バイクつつつて風を感じられる最高のマシンだ。今は組み立て中だがな」

「導力バイク」 初耳だ。なのに何故自分から「バイク」という単語が出たのか不思議でたまらない。普通に知識としてこれがバイクだと知っているような感覚だった。幸い、それについてクロウは深く追及してこなかったためナギトも考えるのをやめた。

「…導力自動車の二輪版みたいなもんです？」

「ま、そんなとこだ。組み立て終わったらお前にも乗せてやんぜ」

「ありがとうございます？」

「乗ってみりゃコイツの良さがわかるさ」

そんな事を言うクロウは楽しそうで、先程のような不自然なものは何もない。その後も他愛もない話をして時間が過ぎていく。やがて退校のベルが鳴り、他の学生と同様に寮に戻るのだった。

☆★

「あ」

「あ」

ある日の放課後、学院内をうろついているとパトリックとぼったり出くわしたナギト。

「そこにいるのはマイフレンド、パトリック！ ご機嫌いかがかなー？」

とりあえずウザ絡みしておく。

するとパトリックは苦い顔をして、「だからマイフレンドと呼ぶのはやめたまえ」などと言う。

ナギトとパトリックは部活での対決以来、そこそ良い仲となっていた。

パトリックはどこかⅦ組を疎ましく思っている様子があるため、その架け橋になれ

ばとナギトはらしからぬ殊勝さを発揮していた。それだけが友情の理由というわけでもないが。

「僕は今から部活に行くが……君もどうだ？」

パトリックが所属するのはフェンシング部であり、ナギトはその幽霊部員としての地位を確立していた。

具体的に言うとな週一で顔を出せば良い事になっている。

「一昨日に顔出したから今日はパスで。ちよいと用事もあるしな」

ナギトは今週すでに顔を出すというノルマを達成していた。

時間があれば誘いに乗るのもやぶさかではなかったが、生憎と用事があった。

「そうか。…手は必要か？」

「いや大丈夫。ありがとさんです」

この頃パトリックが微妙にデレを見せてくる。根はいいやつなのだろうが、いらんぷライドで普段はつんけんした態度になっているのだろう。

その後、パトリックと別れたナギトは学生会館に向かう。

ナギトの用事というのは、端的に言うともキアスとの関係の修復だ。

帝都知事を父に持つマキアス・リーグニッツは貴族を毛嫌いしている。そこに父親が関係しているかは判明してないが、貴族嫌いは相当なものだった。

そのマキアスと不仲になった理由は、先月の実習ののち、ラインがシュバルツァー男爵家の息子だと明かしたからだ。

ちなみにナギトは記憶喪失の話をもつてしていたため好感度ダウン度合いはリンよりマシだ。

それでも「貴族かどうかは関係なく、嘘をつく人間を信用する事はできない」という理由で睨まれる事にはなっているが。

時間が解決するかとも思っていたナギトだったが、今月の特別実習も近づいてきているため、本格的に関係を修復しなければ実習先で痛い目を見る可能性もあるのだ。実

際、前回の実習でB班はそれで崩壊寸前だったらしい。

そうじゃなくてもクラスの雰囲気も悪いため、その解決に動くのは自然な事でもある。

「失礼します」

学生会館の2階に上がると第二チエス部のドアをノックして開放、入室する。

「つと、マキアスいま…せんね」

室内を見渡してもマキアスは見当たらない。

放課後であれば所属する第二チエス部にいるかと思っていたが当てが外れた。

「君は…マキアスくんの…」

その代わり、部室には1人の男子生徒がいた。水色の髪を短く刈り込んだ熱血ゲジ眉のステファンだ。

「クラスメイトのナギトと言います」

トールズ士官学院において赤い制服を着たⅦ組を判別するのは容易だ。

マキアスのクラスメイトという体裁で名乗ると、部室への闖入者であるナギトへの警戒もやわらいだ。

「マキアスくんなら今日はまだ来てない。もし良ければここで待っているといい」

ステファンの提案に乗ってナギトは第二チエス部の部室でマキアスを待つ事にした。

その間の暇つぶしとしてステファンとチエスで一勝負する事になったが、余裕で負け事は言うまでもない。

雑談しつつ一局勝負するのにおよそ一時間ほどかかったが、それでもマキアスは来なかった。

「今日はもう来ないかもしれない」と言うステファンに別れを告げて寮に帰る事にする。第二チエス部への入部を誘われたが、丁重にお断りしておいた。

学生寮でマキアスと話そうとすると「忙しい」と言われて門前払いをくらうのはここ2日間で理解していた。

いつそサラに相談してみたが、

「自分たちの問題は自分たちで解決しなさい。：特にあんた、重心の重臣なんでしょ」「くそが」

という会話で終了した。

サラはⅦ組の担任教官のくせに、Ⅶ組という括りに自分を含めていない。

それが担任としての適切な距離感かはわからない。それも学院の方針かもしれないが、生徒の自主性を重んじ過ぎではないだろうか。

それでも実習の時にフォローするのは、サラなりの責任の取り方か。なんだかんだでサラはナギトにとって尊敬に値する人物だった。さすがは元A級遊撃士だ。

ともあれ、ひとまずマキアスとの仲良し計画はナギトに一任された。

大貴族で険悪を隠さないユーシスは論外であり、貴族である事を隠していた負い目があるリインも同様。ラウラもまた人の機微に聡いとは言えない事に加え当事者ではな

いたため任せられない。

「ノックしてもつしもおくし！」

ドンドン、という遠慮のないノックと共に名乗らずともナギトとわかる間の抜けた声をかける。

わずかな沈黙ののち、ドアの向こうから「何の用だ」と低いマキアスの声。

「お喋りしようぜ」

「僕は忙しい。またにしてくれ」

「それ昨日も一昨日も言われたんだが。で今日またやって来たんだが」

取り付く島もないかと思われたが、沈黙とため息の後、ドアは開かれた。

「君もわからないやつだな。どうしてこう…」

言葉を遮るようにしてナギトはその脇を通り抜けてマキアスの部屋に入り込んだ。そのままベッドに腰掛けつつ、

「三顧の礼つてやつよ。三度目の正直つて言い換えても良し」

「流れるようにベッドに座るんじゃない！」

「ははは。まあそうかつかすんなよ。友達なくすぜ？」

マキアスのツツコミにからからと笑い、冗談のように本題を暗示した。

「友達」というワードにナギトがやって来た理由を把握したマキアスも雰囲気が一変する。

部屋の温度が、下がった気がした。

「僕は君を友達だと思っていない」

「そうか。俺はお前を友達だと思ってるよ」

年頃の男子が、同年代の男子に言うには勇気があるセリフだ。棘があるセリフだ。隔絶を覚悟すべき言葉だ。

それを軽々しく受け止められ、そして友達だと思っていると言われたマキアスはばつが悪い。

「ツ……、よくもそんな事が言えたものだ。君は、君たち兄弟は僕を騙っていた！ その上で友達だと？ 厚かましいにも程があるだろう！」

「そうだな」と言つてナギトは哀しげに微笑む。

ここで正論を言うのは簡単だ。しかしそれでは誰も救われない。友達との喧嘩に、正論を使うのは正しくない。友達なら同じ目線で、同じ土俵で喧嘩をするべきなのだ。

だからナギトは幼稚に、挑発的に、無遠慮に、言葉を紡ぐ。

「ただど〱騙していた〱とは人聞きが悪い。俺とリインは何一つ嘘はついていなかったのに」

「誤解を承知で黙っているのは嘘をついているのと一緒だ。掌で転がされる僕を見てさぞ気持ち良かっただろうな！」

「んな事ねーよ。俺もリインもお前と友達でいたかった。だから……」

「だから黙っていたとでも言うつもりか！ 騙して、それでできた友情に何の意味がある!？」

「正しさ」には人を屈服させる魔力がある。人を振るい立たせる魔力がある。自らの信じる正しさに人は抗えない。まるで麻薬。

「俺は、俺の事について真実を話したよ。リインについては……本人が黙っている事を俺が喋るのも筋違いだろ。それにマキアス、お前は初めて会った時から貴族嫌いが目に見える。そんなやつと仲良くしたいと思えば貴族である事を隠すというのは当然の選択だし、仲良くなれば今度は友情を失いたくないと身分を明かす事に臆病になつてもおかしくはない」

マキアスが言葉に詰まる。ナギトの言が「正しい」からだ。しかし未だ会話は同じ次元で行われている。上から押しさえつけるだけの正論は、まだない。

「だからと言って…君たちが僕に隠し事をしていた事に変わりはない」

マキアスから勢いが消え失せる。なんだかんだでマキアスも自身に非がある事をわかつているのだ。

「そうだな。でも人間関係ってそんなもんだろ。特に俺たちはまだ出会ってから2ヶ月と経ってない。それなのに胸襟開いて隠し事なし、秘密なんかとんでもない…なんてそれこそありえない。マキアス、お前だつてみんなに言っていない事があるはずじゃないの?」

「それは…:…ツ」

ナギトの言葉にマキアスの表情が歪む。

「あるだろ。ないはずない。お前の人生がたった2ヶ月ぼちちで理解されるほど薄っぺらなはずがない」

「知ったような口を……！」

「知らないからな、お前が話さないから。だから知ったふうな口しかきけない」

ラインがシュバルツアー家が貴族だと語らなかつたように、マキアスにも隠し事がある。その指摘は皮肉でもあり、また論点のすり替えにも近い。

「君たちと一緒にするな！ 僕は……」

マキアスの言葉は続かない。続くはずがないのだ。マキアスの貴族嫌悪の理由を、そう軽々と話せるわけがなかった。

「知らねえから知ったような口をもうひとつきかせてもらえば、だ」
そう言つてナギトはマキアスにたたみかける。

「お前がどんな理由で貴族が嫌いなのかは知らん。けどそれは、俺たちには関係ないだろ……！ マキアス、お前の憤懣を俺や、ラインや、ユーシスにぶつけるのは八つ当たりだろ！」

「八つ当たりだと……？」

マキアスは目を伏せると表情を消し、わなわなとふるえたかと思うと、烈火の如き勢いでナギトに詰め寄って胸ぐらを掴み上げた。

「ふざけるなっ！ お前たち貴族が僕の姉さんにつーー」

止まる。停止する。凍てつく。

事情を語るべき場面ではないと気づいたから、というのもあるが、それ以上にナギトの視線が怜悯なものだったからだ。

それこそ、マキアスの烈火をかき消してあまりある程の。

「建前が崩れたぞ」

冷ややかに告げられ、マキアスははっとした。

マキアスがナギトとラインとの仲に亀裂を入れたのは、貴族だからではなく、嘘をつく人間を信用できない”からだ。

しかし今のマキアスのセリフは、ナギトとラインが貴族だから嫌ってるのだと言ったようなものだった。

ナギトは自身の胸ぐらを掴むマキアスの腕を捻りあげると、そのままベッドに投げた。

失望した、と言わないのは友情を繋ぎ止めるためだった。

そのまま部屋を出ようとして、はたと足を止める。

「あー、くそ」

悪態。舌打ち。ため息。

くるりと振り返ってマキアスを見るナギトの表情は先程とは違い、いつもおどけてみせるⅦ組でお馴染みのナギトの顔だ。

「話めっちゃ逸れたから本題を簡潔に言います！ 俺はお前と仲良くしたい。リインもお前と仲良くしたい。シュバルツァーが貴族って事を隠してたのは悪いと思ってるけどそれはお前との友情の喪失を恐れてとのことと理解してほしい。ていうかそこに拘る必要もないよね。身分の違いでナギト・シュバルツァーとマキアス・レーグニッツが友誼を結ぶのに何か支障がありますか？ ないです！ せっかくクラスメイトになれたんだから仲良くなろうぜ！ 以上！」

簡潔でも何でもなく、自分の気持ちを叫ぶだけのセリフだったが、それだけに真っ直ぐな言葉だった。

ナギトは言い切るとマキアスの反応を待たずに部屋を出て、そして――

「あ」

目が合ったリインらに向かって顎をしゃくって先導するのだった。

☆★

「で、なんで俺の部屋なんだ？」

マキアスの部屋での言い争いを聞きつけたリイン、エリオット、ガイウスはナギトに先導されるままにリインの部屋に来ていた。

ナギトは凶々しくベッドに腰掛け、リインは椅子に座り、ガイウスは壁に背中を預け、エリオットは所在なさげに立っている。

「だって俺の部屋でイカ臭いとか言われたらショックだし」

「お前な……」

目を細めて困ったようにナギトを睨むリイン。ちなみにエリオットとガイウスは「？」という顔である。幼い。

「部屋でイカでも食べてたの？」

「聞くなよ」

「イカは消化に悪いと聞く。夕食後に食べるのはおすすめしない」

「掘り返すなつての」

エリオットとガイウスの追及を躲し、「ごほん」と咳払いするとナギトは本題に入る。

「どう思ってる？ ユーシスとマキアスのこと」

わざわざナギトとマキアスの言い争いを盗み聞きしていた3人だ。その理由に思う事があるのだろうかという話題の提供。

しかし、問われた3人は視線を落として渋い顔をした。

「よし、ユーシスん部屋凸るか」

「待て待て待て待て」

ノータイムで立ち上がったナギトを制したリイン。ナギトの行動は暴挙としか言いようがなかった。

先程のマキアスとの会話も仲直りしに行った、と言うよりは喧嘩を売りに行ったと表現すべきだ。それをユーススにもしようと言うならば止めるのは当然だ。

すでに学級崩壊寸前なのにそんな事をすれば閾値を突破し騒動になる。

ナギトは制されるまま再びベッドに座る。今の行動は、意見がなければユーススの所に行く、というポーズのようだった。

「正直、クラスの雰囲気は良いとは言えないよね。特にその…先月の実習以降」

そこで口火を切ったのはエリオットだった。はつきりしない物言いはしかし、彼の優しさの証左だ。

だが、そんな優しさがリインには刺さった。エリオットの言う先月の実習以降の話はつまり、リインが身分を明かしてから的事だ。

ナギトは短くりインの名前を読んで表情の険しさを取り払う。その目は、お前のせいじゃない、と言っているかのようだった。

「この際だから俺も言わせてもらうが。マキアスに対するユーシスの対応も悪いが、そもそもマキアスの突っかかり方が異常にも思える」

今度はガイウスが言った。その意見はきつとⅦ組でも共通の認識だ。

マキアスの貴族への嫌悪感——喧嘩を売るような言動が多過ぎる、と。

「そうだよな。それについては何か理由がありそうだったけど」

ナギトが言うそれは、先程マキアスから聞き出したものだ。姉が云々という話なのだろうが、詳しい話は聞けなかった。

「だが、例えば理由があつたとしてもマキアスの態度は少しばかり目に余る」

頑な、と言い換える事もできるかもしれない。

“マキアス・レーグニッツは貴族を嫌悪する” という一線を守る決意と言うのは少し大袈裟であるが。

ガイウスからすれば貴族と平民というだけでクラスメイトがここまで険悪なものも不思議な話なのだろう。ガイウスは言ってしまうえば外国人であり、身分制度のない土地から来ているのだ。

だからマキアスの態度を理解できない。

「……俺も、今のままで良いとは思えない」

ラインも苦々しげに心情を吐露する。エリオット以上に言葉を濁した表現だった。

なにせ、ラインは当事者でもある。マキアスからの嫌われ具合はユーシスより劣るものの、その対応は明らかにクラスメイトに対してするものではない。

それを招いたのが自分の不徳だとラインは思っているのだ。

そんなわけがない、と安易には言えない。初めの自己紹介の時に貴族である事を説明していれば、今のような関係ではなかったのかもしれないし、あるいは真実を語っていれば良かったのかもしれない。

しかしそれは、マキアスの過去をほじくり返すのと同等の行為だ。それを語る誠実をマキアスに向けるのは土台無理な話だ。

「まあ、3人とも現状を良しと思わないのはわかった」

リイン、ガイウス、エリオットを順に眺めてナギトはそれぞれの気持ちと同じ方向を向いている事を確認した。

「ちなみに、俺がマキアスと話し合いしてる時にユーシスは出てきた？」

最も遠い部屋のリインが聞きつけてマキアスの部屋の前で盗み聞きしていたくらいだ。それより近い部屋のユーシスに聞こえなかったわけがない。

「えーっと、それは…」

「『またナギト・シュバルツァーのお節介か。…ふん、騒々しい事だ』と言っていた」
言いにくそうにエリオットが言葉を濁したが、直後ガイウスよりおそらく原文ままのセリフが語られる。

リインとエリオットは『あーあ言っちゃったよ』的な顔をしており、それを受け取ったナギトは「なるほどなるほど」と意味深に頷き、

「よし凸るわ」

「ちよ、待つー」

決意。立ち上がったナギトを再度鎮めようとしてリインが掴みかかったが、その手を躲して身体を躍らせると、リインはいつの間にかベッドに投げ飛ばされていた。

ガイウスとエリオットの静止も振り切ってそのままユースの部屋に呐喊。

「たのもー!」

扉を蹴破るかのようなモーションと共に声を張り上げ、しかし実際に蹴破る事はなく優しくノック。

「こんな夜更けに何のよ…」

「ラリアーッ!」

言わせるかよ！ というような勢いでユースシスにラリアットをかましたナギト。だがどうやったのか勢いは弱めで、そのままユースシスはベッドに投げ飛ばされた。

「ぐっ……何をする!？」

「ラリアットですう」

ユースシスの問いに気の抜けた返事をするナギト。それは問われた意味を理解してお相手を小馬鹿にする態度。あるいは意味などお前の方が良く知っているだろうと暗示するものか。

遅れてやってきたリインら3人はナギトの暴挙を止められず悔恨の表情だ。特に未だ大貴族アルバレアに恐れを抱くエリオットは戦慄していると言っても過言ではない。

「来たのは正直、勢い。でも理由はある。わかるだろ？」

「……話し合いか。俺とお前、リイン……そしてリーグニッツとの関係の」

「うん」とナギトは顎を引く。話し合い。いかにも軽々しい字面だが、それは現状を打破する正しい手段だ。

友人間の不和を話し合いで解消する。暴力も打算もなく、話し合いで解決する。

ナギトのやり方はスマートとは言えず、いつそ暴力的なまでの暴論なのだが、それでも論理を交わそうという意志がある。

「先程リーグニッツの部屋で話をしていたようだが…それについてはどうなった？」

その真摯さに胸を打たれたわけではあるまいが、ユーシスは早くもナギトと会話する姿勢に入る。

「なんつーか、やっちゃまった感はあるよね！　ひとまずマキアスの俺とリインを嫌う理由が建前つてのは暴いた！　んでクラスメイトだし仲良くしようぜ！　って言ってきた」

「最悪だな」

考える間もなくユーシスはナギトの行動を最悪だと断じた。自覚はあったナギトだがオブラートに表現する意思のない毒に「うっ」と漏らす。

ナギトの行為は言わば、マキアスの心に土足で踏み入ったようなもの。しかしそれで迷惑をかけられているナギトとしてはいざとなったら開き直るつもりである。

「それはいいんだよ。マキアスは経過観察だ。んで、問題はお前だよユーシス！」

強引に話題を打ち切ったナギトはぴつとユーシスを指差す。

「……俺の何が問題だ？ 俺の態度は言わばリーグニッツの写し鏡……因果応報、と言えばわかりやすいか？」

「そ・れ・が！ 問題って言ってるんですー。完全に売り言葉に買い言葉じゃん。お前があの場でラウラと同じような対応しとけば今みたいな事にはなってなかったと俺は思うんだけど？」

マキアスとユーシスの関係は言ってしまうえば子供の喧嘩に等しい。身分の隔たりがあるせいでそう見えないだけで。

その意味でラウラの対応はある種理想的なものではあった。マキアスの貴族嫌悪の建前を封殺する高潔。そう誇れるだけの貴族が帝国にどれだけ現存しているかは定かではないが。しかしユーシスなどは数少ないそれに該当しそうなものだ。

ちなみにナギトが懇意にしているパトリックは典型的な貴族の子息で、おそらくマキアスが目の敵にするであろう貴族のお手本だ。

ともかく、そんなユーシスだが「目には目を」的な部分がありマキアスとの仲は険悪と言ったところ。

ユーシスは少しだけ黙考すると「ふん」と鼻を鳴らす。

「……ひとまず、お前の言い分はわかった。俺の方でもリーグニッツへの態度は緩和する事にする。…しかしわかっているな？　リーグニッツの言動がそれでも改善されなかったら……」

ナギトの早口の説得にユーシスも折れてくれたようで、そういった提案をする。

「今の対応に戻る、と。…オーケー、とりあえず納得しとく」

ひとまずの所ではあるが、ユーシスからも譲歩を引き出せたとして納得しておく。……きつとマキアスの態度が軟化する事はないとわかっているだろうが。

しかしこういつた譲り合いの精神こそが大切なのだ、とナギトは自分の心を誤魔化しておく。

「そんじゃ本日はこれにて。お邪魔しやした〜」

真面目な雰囲気を打ち切って軽薄なそれで塗り替え、そのまま退室する。ユーシスから呼び止める声はなく、背後のドアが閉まると同時に大きなため息が漏れた、ラインとエリオットから。

「ふはあ……き、緊張したあ」

「…:心臓に悪いぞ、ナギト」

「構え過ぎだよ君たちい」とねちっぽさを含めてナギトが嘆息する。

エリオットはもちろん、ラインもユーシスに対して構えている部分がある。ユーシス

が大貴族アルバレアだからというのものもあるが、それより日々マキアスとの衝突を見せられているからだろう。

しかしユーシスも心根はいいやつなのだ。そういった確信がナギトの中にはあった。それがあからあそこまで気安い…気安すぎる対応ができた。

そんなナギトと同じくらいユーシスを芯を見ているのはガイウスだ。人を見る才に長けているのか、人の背景を鑑みる事ができないのか。

「マキアスには忠告し、ユーシスからは譲歩を引き出した。……ひとまず今日はこんなところか？」

「そだな。……何か変わればいいんだけど」

ガイウスからの問いかけに首肯して、ナギトは物憂げに天井を見つめた。

どこかで、何かが変わるわけでもない。という確信があつて。それでも何かしておきたいから。

☆★

「……………」

目が覚めたナギトはベッドから降りると思いつきり伸びをした。軽くストレッチをして睡眠で強張った肉体をほぐしていく。

今日は自由行動日。名門トールズの休日ならぬ休日だ。全生徒に1日の自由が与えられた今日ばかりは怠惰に過ごすとナギトは決めている。

しかし寝起きのストレッチは最早習慣のようなもので、また声と欠伸を漏らしながら続けていると。

「ん？」

部屋の扉。その下の隙間から紙片が覗いているのがわかった。ナギトはそれを拾い上げると短い文面を読み上げた。

『マキアスとユーシスが喧嘩した。起きたら連絡をくれ。リイン』

「くそつたれ」

早くも自由行動日が潰れそうな面倒事の気配にナギトは恨めしげにそう呟くのだった

た。

確信と変えられる事

「で、喧嘩って？」

『連絡をくれ』のメモに従い、身支度を整えるとリインと通信したナギトはキルシエにて合流し、朝食を摂りつつ事の次第を聞き出す。

「ああ、それなんだが…喧嘩、という程でもないんだ。　コーヒー党、紅茶党で意見が分かれたらしくてな、それで軽く罵り合っていたんだ」

思わず「くっだらねえ」と言いたくなかった。言わなかつたのは朝食のサンドイッチが口の中に入っていたからだ。

その後、サンドイッチを飲み込んでコーヒーを一口。それで、

「くっだらねえ」

と吐き捨てた。口がフリーになったら自然と出たセリフだった。それくらいくだらない内容だ。

「はあく」とわざとらしくため息をついて続ける。

「マジかあいつら。マジかよあいつら。こないだ注意したばっかだぜ？ あいつら反省とかしないの？」

「ま、まあ…俺も少し敏感になってたかもな。ナギトも気にしてたみたいだし、一応報告しておこうと思ってただけで……」

「あー、つか…喧嘩の内容がそれならまずいな」

ぐちぐちと悪態をつくナギトにフォロワーを入れるラインであったが、ふと微妙な表情になったナギトを見て「え？」と漏らす。そこに、

「何がまずい?」

ユーシスが登場する。それでリインもナギトの危惧が理解できた。

おそらくナギトは喧嘩をしたと聞いてユーシスを呼び出していたのだ。しかし紅茶党、コーヒー党の争いだと知らなかったため普通にコーヒーを飲んでいる。

ユーシスがナギトやリインと同じ卓に着く、その前にナギトの前にあるコーヒーカップを見て「ふん」と鼻を鳴らした。

「どうやら貴様もコーヒー派の尖兵だったようだな。そんな泥水の何が美味しい?」

「か、過激いー!?!ユーシスさんてば過激!!」

そう言いつつ肩を抱くナギト。いつものような態度、対応にユーシスはまた軽く笑う。冷や冷やしたリインだったが、これが2人の距離感だと理解して安心したのも束の間、「アイスコーヒーです」と店員が2つのカップを持ってきて、それは当然のようにリインとユーシスの前に置かれた。

「——ッ」

今度こそ絶句したリインは、先程アイスコーヒーを注文した事を思い出していた。自分の分が1つと、ナギトが1つ。ナギトのは2杯目だと思っていたが、その実、呼びつけたユーシスへの気遣いだったんだらう。

それが裏目に出るとはナギトも考えていなかったに違いない。

ちら、とナギトを伺つてみると面白い顔でフリーズしていた。きつと何か面白い言い訳でも考えているんだらう、とリインは思考を放棄する。なんなら今すぐ席を立ててしまいたい気分だった。

「これは何のつもりだ」

ユーシスは苛立ちを隠そうともせずに言い放つ。セリフには疑問符が付いているようである。付いてない。つまり激おこだ。

「——お前の事だ、きつと飲まず嫌いじゃないんだらう。だけど泥水呼ばわりは品がない。前に飲んだのがたまたま口に合わなかっただけかもしれない。たまたま淹れ方

が悪かっただけかもしれない。……ここまで言えばわかるよな？」

リインは思わず「う、うまいっ！」と言いつつうなづいた。

ユーススを注意しつつも意見は否定せず、しかし結論は丸投げするというかたち。

ユーススはゆっくりまばたきをすると、「口車に乗ってやろう」とおもむろにカップに手を伸ばした。一口啜り、そのままコクリと嚥下する。

カップをソーサーに置いて、「ふむ」と漏らした。ナギトが密かに唾を飲み込んだのをリインは見逃さない。

「……まあ、悪くはないな」

果たしてナギトの目論見は上手くいったようで、ユーススはわずかに顔を綻ばせた。

「しかし、やはり紅茶の方が上だな」

そう言うが、前言を引き出した時点でナギトは勝ったようなものだ。

「ま、それは個人の味覚でしょうよ。もう言うまでもないと思うけど……コーヒーも紅茶も、それぞれ違う良さがある。それは人の好みで美味しい、不味が分かれる。しかし自

分の舌に合わないからと言って一方的に貶すのは、相手からすれば良い気持ちはしない」

「言われずともわかっている。しかし…」

「はい反論しない。マキアスからふっかけた戦争だつてのは知つてんだよ。それでもだ、お前もうちよつと反省した方が良くないか？」

ナギトのセリフには「この前注意したばつかなのにまた喧嘩しやがって」という意味が込められている。

ユーシスの条件には「マキアスが喧嘩売ってきた場合は別」というものがあつたが、それを加味してもナギトが反省を促す方に理があつた。

「…わかつた。反省するでしょう」

ナギトの庄に観念したのか、ユーシスは素直に省みることを約束した。

「ならばまずは…レーグニッツに謝るべきか」

続いてユーシスはマキアスに謝罪する事まで検討し始める。どちらに非がある、なんて話ではないが謝罪は人間関係を円滑に進める上で重要なファクターだ。

それを意思表示した事はユーシスにとってかなりの譲歩であり、また歩み寄る姿勢がある事に他ならない。

しかしナギトは「それはどうかなあ」とため息混じりに言った。

「正直、マキアスの貴族嫌いは筋金入りだしよ、急に謝られても受け入れるだけの土壌がないと思うんだわ」

ナギトの見解に「む…」とユーシスが口をつくむ。あり得る話だと思ったのだ。

「そんな事はないんじゃないか？ マキアスもさすがにそこまでじゃないだろう」

ラインだけがそれに反対の意見を述べたが、それも根拠に乏しく、ナギトが「俺から言つとくわ」という言葉で締められる運びとなった。

☆★

ラインとユースと別れ、学院への坂道を登るナギトはふと馬鹿らしくなった。

「なんて俺は貴重な自由行動日をこんな事に費やしてるのかなっ！」

ふんす、と鼻息も荒く、不満たらたらといった様子だ。

“こんな事をして無駄”という確信がナギトにはあった。今はまだその時ではない”と。マキアスとユースの仲が改善されるのはもう少し後の事だと。

「つだかなあ、これ！」

頭痛がして、こめかみを揉む。ユミルの郷でもたびたびあった、こういう“確信”だが、ツールズに来ていつそう増えた。

未来を知っているような全能感でもあるが、中二的なアレかもしれないので周りには黙っているが。

「気持ち悪い」

眩くとナギトはそのまま学院に進む。目的地は第2チェス部の部室だ。

A R C U Sで連絡しアポを取る事も考えたが、以前「忙しい」で2日連続で対話拒否された事を念頭に置くと突撃説教の方が良いと判断した。

やがてチエス部の部室前に到着し、ノックして入室。

「失礼します」

部員2名と目が合う。マキアス是不機嫌そうに眉根を寄せ、ステファンは喜色を浮かべる。

「どうも」と会釈して、わずかばかりの言葉を交わす。

「ちよつとマキアス借りていいですか？」

頃合いを見計らってそう言うと、ステファンは快く送り出してくれた。

ナギトとマキアスは第2チエス部の部室を出ると、そのままグラウンドの近くまで移動した。

「ステファン先輩から聞いたよ、第2チエス部のホープなんだって？」

「…君には関係のない話だろう。それより用件は何だ」

雑談お断りつてか、この野郎。ナギトは内心でそう毒づいて本題を切り出した。

「そりやあまあお察しの通り……、また喧嘩したんだつてな」

ナギトのその言葉はマキアスも予想していただろうが、それでもぼつが悪そうに顔を背けた。

「喧嘩すんな、つては言わんけどな……もうちょい何とかならんか？」

具体性は何もなく、しかし論すような声音に「僕は……」とマキアスも声を出す。

「君の言い分もわかる、ナギト。だが僕は貴族らしい貴族のユース・アルバレアが嫌いだ。貴族だつて事を隠してたリイン・シユバルツァーが嫌いだ。君の事も……ナギト」

先日の注意が効いているのだろう、沈鬱な表情で言い切ったマキアスを「はん」と鼻で笑つてやる。

「つまらない事を言うなよ、マキアス。お前のそれは結局、〃貴族〃と〃平民〃で人を色分けしてるだけだ。相手の本質を見ようともせず肩書きだけで対応を変えるのは、それ

「こそお前の嫌う貴族の所業だろ」

言うのと、一瞬でマキアスが真っ赤になってナギトに詰め寄り、胸ぐらを掴み上げる。

「君はっ！どこまで人を馬鹿にすれば…ッ！」

「暴力かよ？」

ナギトの冷やややかな視線とセリフはマキアスの熱を貫いた。

青筋を立てていたマキアスは呆け、

「よいしょ」

瞬時にナギトに手首を捻り上げられてすっ転んだ。

マキアスが立ち上がるのを尻目にナギトは乱れた制服を元に戻す。

「ま、俺が言いたいののはつまり、立場だとか肩書きとかじゃなくて、その人を見ろよつて
っ」と」

言葉足らずな感はあるが、言うべき事は伝えた。

「というわけでナギト・シユバルツァーはクールに去るぜ……」

決め台詞と共に立ち去ろうとしたナギトはしかし、「おいナギト」とマキアスに呼び止められる事でも鼻を挫かれた思いをする。

振り返ったナギトが見たのは、久しく向けられる事の無かった知性が湛えられた瞳。ナギトとリインが貴族と判明する以前の、友人として冗句を言い合った時のものだ。

「しかし立場や肩書きが人をつくるとも言う。君の言う本質だけを見てしまえば、付き合いは極端になるんじゃないか？」

マキアスの言葉に今度こそナギトは「はっ！」と快哉をあげた。

「わかってるじゃねえか」

そうだ、最終的にはそこが目標だ。相手の立場や体裁などを勘案しつつ、その本質にも適う応対を行う。

それがナギトの思う対人関係の理想だ。パトリックともそうして仲良くなった事だ

し。

まあこういった面倒くさい事は抜きにして仲良くなれる者も多数いるが。それこそエリオットなどがそうだ。ガイウスやラウラは天然だから評価し難い。

ただ貴族であるだけで扱いを変えるマキアスにとって、そこまで求めるのは酷だと思つたナギトだったが、やはり地頭も良く人間関係が政治である事もわかつているマキアスは、相手が貴族であるという色眼鏡を外しただけで飛躍的な成長を思わせた。

数瞬、視線が交わつたが何も言う事もなくナギトは再びマキアスに背を向けて歩き始める。

「案外当てにならないな、俺のカンも」

天啓のように得られる確信。それが打ち砕かれた思いにむしろ清々しさすら感じる。自分の行動は無駄じゃないんだと。何かが変わえられるのだという希望を得て。

☆★

「…それで、今からナギトも来ないか？」

マキアスと別れてからしばらく経って、ナギトはリインからの通信に対応していた。内容は先月もあつた「旧校舎の探索」だ。

「え〜……」

言いながら、小説のページをめくる。『カーネリア』という人気の小説だ。色々と予定にない事が起こってしまったが、今日は読書に勤しもうと思っていたのだ。

それを邪魔されてはリインの頼みにも渋ろうというもの。

「うーん、そうだなあ…旧校舎と言うてもだ、もう目新しいものもないだろうしなあ」

ぺらり、ページをめくる。

「ちなみにアリサやラウラも参加だ」

ぴくり、耳が動く。

「しゃあねえ、行くか！」

「いいのかそれで……」

「というわけでやって参りました旧校舎……ってテンションだったけど、やばいなこれ
まずは例の構造が変わった階段部屋だが。

今回、入ってみると階段部屋ですらなくなっていた。

代わりにあったのは昇降機らしきもの。

アリサの調査で昇降機と判明したのだが。

昇降機で降りられるのは地下一階と地下二階のみ。

この前攻略したのは地下一階ということらしい。

一行はリインの号令の元、地下二階の最新部を目指し始める。

回廊を駆け抜け、魔獣を切り伏せ、最深部前に到達する。回復装置を使いつつ各々休

息を取る。

そんな中でナギトはアリサに尋ねた。

「アリサ・RのRってラインフォルトのR？」

「ふえ!? な、なんで知ってるのよ？」

ふえ!? ちやうわ! 声がでかい!

そんな思いを視線に込めるとアリサは口を手で押さえつつ、集まった他のメンバーの視線を散らす。

「知ったというか気づいた、かな。まあ、アリサが隠してるのも理由がありそうだしみんなには黙っとくけど」

気づいた、なんてのは半分嘘だ。またあの確信が舞い降りたのだ。アリサはラインフォルトの一族だと知っていた、それをふと思いついたような感覚だ。

「そ、そう……それなら助かるわ」

「それでもユーシスあたりは気づいてそうだけだな。ルーレ市の出身で“R”。しかもARCCUSにまで詳しくって、ヒントは結構あったし」

もし自分の知恵知力で気づけたのならどれだけ良かった事か。

そんな嘆息をアリサに悟られないように会話を終え、同時に休憩も終わる。一行は最深部へ踏み入った。

最深部の大部屋には案の定、強力な魔獣が待ち構えていた。

3体いた魔獣を、まずは数を減らそうという方針でリインとラウラのスクラフトが炸裂し、1体が消滅する。

その間、2体を相手取っていたナギト、アリサ、ガイウス、エリオットの4人は息の合った連携で魔獣にダメージを与えていた。

「アリサ！ エリオット！」

名前を呼んで、意図を伝える。ARCCUSの戦術リンクで繋がっていれば、あとはわ

ずかな合図だけで狙いを共有してくれるのは連携が上達した証だ。

「ガイウス！ 決めちまえ！」

「——ああ、了解した！」

アリスの導力弓による一矢が魔獣の出鼻を挫き、エリオットのアーツがもう一体を牽制する。

「二の型、疾風！」

そしてナギトの斬撃が魔獣一体の体勢を完全に崩した。見計らったガイウスが雄叫びをあげながら肉薄して槍を魔獣に突き立てると消滅させる。

魔獣は残り一体だ。ラインとラウラもナギトらと並び立ち武器を構えた。

「みんな、隙をつくってちょうだいな！」

それは、最深部に突入する前にも言っていた事だった。

「試したい技があるんで隙をつくってくれたら嬉しいかなあって。いやほんと、タイミングがあつたらでいいんで！よろしくお願いしまーっす！」という本人曰くクソヘリくだった言い方で。

魔獣も三体のうちすでに二体が斃れ、残る一体も手傷を負っている。ナギトのためにお膳立てするのに何も弊害はなかった。

リンとラウラが切り込み、アリサとエリオットが遠距離から魔獣の注意を分散させ、ガイウスの槍撃が隙をつくりだす。

ナギトは瞬時に納刀する。鏢と鞘のぶつかる音はまるで武士の金打だ。援護は十全。ここで決めなきや男が廃るつてもんよ！

刹那、抜刀――

孤月の閃きが疾り。一瞬の後に魔獣は崩れ落ちた。

「――さしずめ、神威残月つてとこだな」

それがナギトのSクラフトだった。

タネを明かすと、リインの孤影斬と変わらぬ剣技だ。ただそれが比較にならぬほど強大で速いという点以外は。

発動前に「納刀」というワンアクションを挟まねばならぬ事が玉に瑕か。抜刀術でなければ、あれだけのパワーとスピードの両立は難しいのだ。

しかしひとまず、リインへの対抗心から考案したSクラフトは実戦に耐え得ると理解できたところで、「ご協力ありがとうございませ〜」とめちやくちやに頭を下げる。

こうした面がなければナギトの扱いももつと変わるだろうに、とリインは嘆息するのだった。

その後、旧校舎から戻り、学院長へ報告。

学院長室へと赴き、学院長ヴァンダイクと相対するが相変わらず良い体格だ。元は正規軍の元帥だったとか。今でも名誉元帥であり、軍に影響力は残っているのだろう。

ヴァンダイクの話によると、旧校舎があれだけ不気味な代物なのに取り壊されていないのは、学院の創設者でもあるドライケルス大帝の言葉によるものだと言う。

「来る日まで旧校舎をそのままにしておくように」という文言が学院には残ってる

らしい。

暗黒時代の遺物に、獅子戦役の時代まで関係して来るとは。

“いったい旧校舎とはなんなのか？” そんな疑問が持ち上がったが、当然解答は得られず。

獅子戦役と言えば、ドライケルス大帝を支えた《聖女サンドロット》も有名である。

七曜教会にも聖人認定されている偉人《聖女サンドロット》。

彼女の率いる《鉄騎隊》は常勝無敗を誇り、彼女自身は《槍の聖女》と呼ばれていたのだとか。

なんて事を思い出すナギト。学院に来る前、来た後もそうだが、こういった歴史の勉強は苦ではなくすらすらと暗記できるのは、そういったものが好きだからだろうと自己分析する。

《槍の聖女》関連で思い出した事があり、寮に戻ってラウラと話をする。

元々、リアンヌ・サンドロット——サンドロット伯爵家はラウラの故郷、レグラムを治めていたはずだ。

そういった事を尋ねてみると、レグラムには未だサンドロットの城館があり、アルゼイド家は鉄騎隊副長の末裔だという事だ。

そして前回の実習でラウラが語った目標とする人物とは《槍の聖女》リアンヌ・サンドロットの事らしい。

ナギトはてつきり《光の剣匠》と呼ばれる父親、ヴィクター・S・アルゼイドと思っていた。

ちなみにアルゼイド家のミドルネームであるSは今は亡き主君サンドロットから取ったものだという小話なども聞くことができた。

代わりに神威残月について根掘り葉掘り聞かれたのだが「新しいSクラフトよ、それっ！」と返答しておいた。

そんな感じで、自由行動日の夜は更けていくのであった。

☆★

自由行動日から数日が経過し、実技テストの日となった。
例の機械仕掛けの魔獣をサラ教官が呼び出す。

一月前とは少し形状が違い、腕のようなものが生えている。

機械仕掛けの魔獣というのも面倒な表現だ。これからは戦術殻と呼ぼう。――

そつたれ。これが戦術殻と呼ぶのが正解と知っている感覚。もはやお馴染みの「確信」だ。

まずはリイン、アリサ、ラウラ、ガイウスが相手をする。戦術リンクも使いこなし、無難にクリア。

次はユーシス、マキアス、エリオット、エマ、フィーがカラクリに挑戦。こちらは連携が上手くいかず、辛勝と言った様子。

そして最後に俺。

「つてちよつと待つて。why? え?なんで俺1人なんです? 10人いるから普通は5、5で分けると思いますけど!」

鬼畜? 鬼畜なのサラ教官? ユーシスらが5人がかりで何とか倒したのを1人でやれとおっしゃる?

「いやー、ごめんね。アンタの事、すっかり忘れてたわ」

「うそん」

思わず声を漏らす。サラの割とマジなトーンに呆けかかったが、

「なんてのは冗談で。リインと組んでもらうわ。」

あなたとリインのコンビネーションは正直、目を瞠るものがある。それはARCU Sがなくても、戦術リンクを使っているかのよう。みんなも、この2人の連携を見
ておくように」

冗談（笑）により、ナギトとリインは2人で戦術殻に挑む事となった。

「連戦で悪いけど踏ん張れよ、お兄様」

「だからそう呼ぶなって何度も…」

2人、太刀を抜き対峙する。

まず人形兵器が狙ったのはリインだった。腕部をぶん回して殴りかかる。

リインはそれをバックステップで避け、空振った戦術殻にナギトが孤影斬を叩き込
む。

ふらつuitた戦術殻から視線は離さず、

「合わせろ！」

「任せろり」

互いに示し合わせたリインとナギトは同時に踏み込んで紅葉切りを見舞う。

一瞬の硬直。反撃の間も与えず、縦横無尽に太刀を振るう。

「決めろ、ナギト！」

「おうさー！」

ナギトが距離を取って納刀し、リインは戦術殻を身動きの取れない空中に打ち上げる。

「——神威残月」

抜刀。神速のそれは剣閃を飛ばし、戦術殻を真っ二つにした。

こうして実技テストは終わりを迎え、特別実習のメンバーと行き先の発表だ。

ナギトはA班。加えてメンバーはリイン、ユーシス、マキアス、エマ、フィーの6人。行き先はバリアアハートだ。

この班分けに猛抗議するのが2人。ユーシスとマキアスである。

2人はなんだかんだ文句を垂れていたが、結局はサラに丸め込まれる。しかし不満があるのは見え見えで、

「それとも、力づくで言う事聞かせてみる？」

そんなサラの提案に乗って、ユーシスとマキアス、ついでにリインを加えた3人で得物——剣と銃——を抜いたサラに挑む事になったのだが。

数分後、案の定とすら言えないほどリインたちは叩きのめされていた。一撃すら掠める事すらなく勝敗は決した。

強いとは思ってたけどまさかここまでとは、というのがナギトの感想だ。

連携が上手くないとはいえ、実戦を経験したリインらを赤子扱いだ。

そういった事もあり、ユースとマキアスも渋々ながら引き下がる。

そこでナギトは疑問をぶつけると、

「さつきマキアスも言っていましたけど、班分けの人数が明らかにおかしいですよ。6：4つて。いえ別にサラ教官様に楯突く気はさらさらなんですよ？ちよつと不思議だなって思っただけで」

「そんなあからさまにビビった態度取らなくてもいいから。何度も言う様だけど、この組み合わせがベストなのよ。実家つてことでユースは外せないし、マキアスもさつき言った通り。それにリインがいるなら、ナギトとの連携も見せつけないと損だし。そういう訳で今後リインとナギトは一緒に行動してもらおう事になるわ。あと女子は均等に振り分けないといけないから」

そんな風にサラは説明した。それには「なるほど」とⅦ組の総員が納得を示す。

先程のナギトとリインの2人で行った実技テストは、この義兄弟をセットで特別実習に参加させるための根拠にもなっていた。

少し気になる事はあつたが、ナギトはここで引き下がる事にした。

リンたちのようにサラの餌食にはなりたくないのだ。きつとユースとマキアスの関係修復に精を出してたおかげで魔の手を逃れる事ができたのだ。とぼつちりを受けたくはない。

そういう事で、軽いイベントはあつたものの特別実習とそのメンバーは発表の通りとなる。

ナギトの所属するA班の行き先は翡翠の公都バリアート。

ユースの実家であるアルバレア家が直接統治する、貴族派の本丸のひとつだ。

一員であるという幸福

特別実習1日目の朝。

支度をしてA班のメンバーと共に寮を出る。駅に行くとすでにB班は揃っていて、いくつか言葉を交わすと、そのまま列車に乗ってセントアークへと出発した。

ナギトらA班も切符を買い、バリアハート行きの列車に乗り込む。

バリアハートまで数時間の旅という事で早起きだったためナギトは列車に揺られながらうとうととしていた。

しばらくしてリインがバリアハートの説明をユースに求めるが、ユースはそれをマキアスへと振った。

それによつてまた口喧嘩へと発展しそうな所でリインが止める。

それから話は実技テスト後のサラにリイン、ユース、マキアスの3人がぼっこぼっこにされた件に移った。

途中で口を挟んだフィーによると、3人が負けたのは連携ができてないから。サラが

強い事ももちろんあるが、ARCSでの戦術リンクがあれば負けられない事はできた、と。「ナギトからは何かないか？」

狸寝入りしていたナギトだったが、意見を求められてゆつくりと瞼を持ち上げて大物感を演出する。

「まあ、そうだな。ユーシス、マキアスも……ここは言いくるめられとけよ」

そういう大人な言い方をして、薄く笑む。

ユーシスとマキアスの対立は結局お互いが気に食わないというガキの争いなのだが、ナギトが関与すると途端にダーティでアダルトチックな駆け引きになる。会話の雰囲気年齢が上がる、とでも言うべきか。

そうした経緯もあり、ラインの提唱した『特別実習中はB班に評価で勝つための仲間としてやっていく』という風に2人を説得されたのだった。

その後、改めてユーシスからバリアハートの概要が説明され、また『貴族社会のための街』であると念押しされる。

マキアスの貴族批判についてもやめておくよう釘が刺されるなどという場面もありつつ、話は一段落した。

それからポツポツと会話があたりはしたが基本的には口数も少なくなる。しかしリインが持ち込んだカードゲーム「ブレード」をする事になってからはそこその盛り上がりを見せた。

ケルディックへ行く時もやったが、恒例のイベントになりつつあった。当然のようにナギトが全勝した頃、列車はバリアアハートへ到着する。

アルバレア家の子息であるユーシスを出迎えるために駅員が集つたりという事件が起こつたものの、それはその場に現れたルーファス・アルバレア——ユーシスの兄により収められる事となる。

貴族派きつての貴公子であり、社交界ではオリヴァルト皇子と帝国の噂を二分するほどの傑物。ユーシスの剣技の師であるらしいし、佇まいからも只者じゃない事がわかる。

加えてアルバレア家の長子でありながら平民に対しても見下した様子を見せない振る舞い。貴族嫌いのマキアスもたじたじである。

ナギトらA班はルーファスに車で宿泊施設に送ってもらった後、実習の課題に取りかかる事とした。



実習課題に取り組む中で、バリアハートが貴族の街である事を実感する。

単純に貴族の権力が強く、平民はその威光に平伏すしかない……といった感じだ。

とある依頼では平民男性のためにA班が採取した《ドリアード・ティア》を貴族が滋養強壮といつて食べたり…、またとある依頼ではあからさまに見下されたり……という、苛立ちが募るイベントが多発した。

どちらも相手が途中でユースに気づいて態度を急変させたのは痛快を感じなかったでもないが。

というか、そんな事より驚いた事件があったのだ。

《ドリアード・ティア》の依頼で立ち寄った宝飾店で遭遇したブルブラン男爵という人物。これが完全に結社《身喰らう蛇》執行者の《怪盗紳士》ブルブランなのである。

先月の実習で対決したのだが、その時と仮面の有無という違いこそあれ、衣装や口調はそのまま。せめてもうちよい隠す努力をしてくれたら知らないフリをできたものを。

ブルブランは立ち去り際、ナギトの制服のポケットに紙片を差し入れた。ナギトが後で内容を確認したところ『翌日深夜に大聖堂にて』という短いメッセージが綴られてい

た。

バリアハートには馬鹿でかい七曜教会の聖堂があるためその事だろう。すつぽかす、というスーパー面白ムーブを思いついたものの、ブルブランには色々聞きたい事もあったため自らの提案を泣く泣く却下する事とする。

そんなこんなでA班は今、手配魔獣を撃破した所である。

ユースとマキアスが互いの胸ぐらを掴み合っている。

“評価のために協力する仲間”として、戦術リンクで組んでいたユースとマキアスだったが、そのリンクが戦闘中に突如断絶したのだ。

今はそのリンク断絶が互いの側からだど罵り合っている場面だ。

リンやエマが宥める隙もなく、ここで取っ組み合いを始める勢いの2人の横で、倒したはずの手配魔獣がピクリと動いたように見えた。

——これ、は。

嫌な事を思いつくものだ。

ナギトの脳裏に浮かんだのは、手配魔獣を利用してユーシスとマキアスに反省を促す策だ。

この状況、この位置どりなら――

次の瞬間、手配魔獣は起き上がると睨み合っているユーシスとマキアスに襲いかかった。

だがそこでリインが2人を突き飛ばして庇う。

手配魔獣の爪がリインの背中を抉る。――より早く、ナギトの太刀がその爪を斬り飛ばした。

「フイー！」

「了解」

軽やかに手配魔獣に飛び乗ったフイーは双銃剣をその背中に突き立てると炸裂させる。

それがとどめとなり、今度こそ手配魔獣は討伐された。

「おい、わかってんのかその2人。お前らのくだらない争いのせいでラインが怪我をする所だったんだぞ」

いつもとは違う、静かながら確かな怒りを孕んだ声音。その雰囲気、怒気に向けられているユーシスとマキアスはおろか、ラインとエマまで息を呑む。

「俺たちは休戦中じゃなかったのか……どつちが先にリンクを断絶したか？ ふざけんな！ お前ら2人が互いに信用できてなかったからリンクは断絶したんだろうが!!」

怒鳴ると、2人を庇ったラインが「いいから」と横やりを入れる。

「幸い、ナギトとフィーのおかげで俺にも怪我はないし。これを機に2人とも反省してくれるだろう」

「どうだかな。…ひとまずここは引き下がるがな、この先でも同じ事があれば…わかつ

てんな？」

リインに免じて引き下がる様子を見せるナギトだったが、しつかりとユースとマキアスには釘を刺しておく。

そのすべてが、こうなる事を確信しての演技であるとは夢にも思われまい、と内心で申し訳なさそうにほくそ笑むのだった。

手配魔獣討伐をオーロックス砦に報告に行く道すがら「さっきの」とフィーが小声で尋ねてきた。

「さっきの手配魔獣…生きてるって気づいてた？」

「……なんでそう思う？」

否定しない時点で自白しているようなものだが、ナギトはなぜバレたのか、フィーに問う。

「反応スピードが尋常じゃなかった。あれは生きてると確信できてなきやできない動き」

「なるほど」と笑んでみせる。フィー・クラウゼル：Ⅶ組最年少の15歳だが、戦闘能力ではトップクラス。

さすがは元猟兵と言うべき観察眼だ。

——フィーが元猟兵？

なんで俺はそんな事を知っているんだ。

「どうかした？」

気持ちの悪い感覚に呆けていたナギトだったが、フィーに言葉にかぶりを振って「なんでもない」と言う。

「正解だよ。気づいてた。ユーシスとマキアスが、自分のせいで仲間が怪我したとなれば、良い薬になりそうだと思っただからね。あの位置取りならリンが2人を庇うのは目に見えてたし。みんなには言うなよ？」

実際、怪我人は出なかったのだが。自分達のせいであわや大惨事…と想像できたなら反省するはずだ。

「なるほど、策士だね。…でも、味方を危険に晒す作戦はいただけない」

「もうしない」

「ん。じゃあ秘密にしとく」

「サンキュ」と、返事をして会話は終了。

急速に軍備を拡張しつつあるオーロックス砦に到着する。貴族派と革新派の対立は来る所まで来ているようだ、なんて話をして砦の兵士に手配魔獣討伐の報告を終えるとホテルに戻る事になった。

その帰り道の途中、オーロックス砦方面からサイレンが聞こえてきた。明らかにただ事ではない事象にA班の面子は立ち止まり言葉を交わす。その頭上を銀色の飛行物体が通り過ぎる。

「——ミリアム？」

「何か言いましたか、ナギトさん？」

その存在への確信が降り注ぎ、不注意にもそれを口に出していたナギトにエマが聞き返す。

「いいえ。でも頭痛が痛くて。エマが膝枕してくれないと治らない気がする」
「流れるようにセクハラしようとするな」

そんな義兄弟の即興コントで苦しくも言い逃れる。

その後、銀色の飛行物体を追ってきたらしい領邦軍に逃げた方向を教えて一段落。これについては特別実習の範囲外という事でスルーという結論が下される。

ホテルまで戻り、入ろうとした直前、車のクラクションで呼び止められる。

それをしたのはルーファスが乗っていた――A班がホテルまで送ってもらった――と同じくらい豪華なリムジンだ。

ユーシスが駆け寄ると車の窓が開かれ、金髪の壮年男性の顔が現れた。その人物はユーシスといくつか言葉を交わすとそのまま車を発進させて去って行った。

「なにあれ？」

ユーシスがA班の元に戻つてくるとフィーは先程の人物をあれ呼ばわりする。

「ぶつちやけ小物臭いな」

ナギトもフィーに便乗して適当に侮辱しておく。領邦軍に聞かれていたらしよつ引かれる可能性もあったが、積もりに積もった苛立ちを吐き出したい時もあるのだ、それがこの領邦の長であればなお痛快である。

ユーシスの説明によると、さっきの男性はやはりユーシスの父親らしい。

ヘルムート・アルバレア——クロイツェン州を統括するアルバレア家の現当主である。

「信じられない事に、この俺の父親でもあるらしい」とユーシスも実の父親に向かって辛辣なお言葉を吐いていた。

察するに息子の同級生に対して挨拶もしないような父親だ、さぞ苦労してきたのだろう。

その後はホテル近くのレストランで夕食に舌鼓を打ち、和む雰囲気の中で会話する。先月の実習ではB班はこんな雰囲気ではなかったらしい。もっと殺伐としていたのは想像に難くない。

しかしそんな雰囲気でも話す内容は士官学院生らしいものとなる。クロイツエン州の増税にオーロックス砦の軍備増強。引いては貴族派と革新派の対立にまで。

オーロックス砦に運び乗っていた重戦車アハツエン。それを大量に保持する正規軍——その七割を掌握している《鉄血宰相》。それに貴族派がどう対抗するのか。

「その者の発言力はその背景にある武力に依存する」

食後のデザートを頬張っていたナギトが不意に口を挟む。物珍しげな視線がナギトに向けられた。

「正規軍は強く、それを操る宰相の権力は強大だ。なら貴族も同等の戦力を保持して同じだけの権力——発言力を持たなきゃならない。そうしないと一方的な支配が始まるからだ。大切なのはバランスだよ。∴そういう意味で帝国はバランスの上に成り立っていると言ってもいい。危ういバランスの上に」

言い切ったナギトはまた一口、デザートを口に運ぶ。

「柄になく真面目だな」

「うるさいよ！俺はいつも真面目だよっ！」

真実を穿つた意見に、しんと静まり返った場だったが、それをリインが混ぜっ返し、ナギトが乗っかる。

リインは元より、普段から嗜められているユーシスとマキアス、賢しいエマに、本日ナギトの企みに気づいたフィーも。

ナギト・シユバルツァーという人間を計りかねている気がしてならない。

不真面目なように見えて、的を射た発言をし、真面目になったかと思えば、次の瞬間には場を巻き込んでボケ散らかす。

記憶喪失前のナギトがどんな人物だったのか、興味深いと。

「おお、青春の悩みとはかくも美しく尊いものか——」

そこにブルブラン男爵が登場する。ナギトは「チツ」と舌打ち。先程真面目な話をしたのは視界の端で出番を伺うブルブランを抑止するためだったのだ。

ブルブランは普通に悪趣味な事をきざつぽく言つて退場。去り際、ナギトにウインクをしていったのは腹立たしい限りである。

そうして夜は更け、ホテルに戻りレポートをまとめると翌日のために早々にベッドに入る事にした。

ブルブランとの待ち合わせに行きたいナギトであったが、同室の3人が寝ない事には動き出せない。

そのうちどうやら眠れないらしいユーシスとリインが話し始めた。

ユーシスが妾腹の子である事や、リインの危うさについても言及される。そしてナギトの異質さにも。

やがて会話も終わり、リインにユーシス、マキアスが寝静まったのを確認してからナギトは部屋を出る。

☆★

「こんばんわ、ナギト・シュバルツァー。今夜はいい夜だ。そうは思わないかね？」

大聖堂の扉を開き、内部に踏み入る。

奥部のすりガラスに月光が降り注ぎ、色鮮やかな光が怪盗紳士を包む。

「今夜はいい夜だ。思わず口が滑つてしまいそうなほどに。Mr. ブルブラン：遅れて申し訳ない」

昼間と違い仮面をしているブルブランに、大仰に一礼してみせる。

「構わないとも。その間、私はこの月を独り占めできたのだから」

どうやらきざぎざな台詞回しでは勝てない事が判明。さっさと本題に入る事にする。

「安心するといい。司教様方はぐっすり夢の世界だ」

ナギトの心配を見抜いたようにブルブランが言い放つ。なんだか機先を制されているようで気に食わない。

「本日はお招きいただきありがとうございます…つてか。 いったい何の用かな？」

懐から紙片を取り出す。ブルブランがポケットに忍び込ませた大聖堂への招待状だ。

「なに、少し君の事が気になっていてね。話でも…と思ったわけだ」

「なるほどな。それ俺も同じ意見だよ」

ナギトは自分の過去の趣味がある。過去に自分と出会った事のあるらしいブルブランに興味がある。ブルブランが所属する《身喰らう蛇》に興味がある。

「よろしい。ではシンプルに一回一答といこう。まず君が質問し、私が答える。次に私が質問し、君が答える。それでどうかな？」

「異議なし。…企業秘密ですつてのはなしだぞ」

「勿論だとも。我ら結社の執行者には『あらゆる自由』が保障されている」

「あらゆる自由？なんだそりゃ？」

「文字通りの意味だ、ナギト・シユバルツァー。私が所属する《身喰らう蛇》の執行者には『あらゆる自由』という権利が盟主から与えられている。それは命令違反や情報漏洩にも適用される」

とんでもない組織……いや、組織という体をなしているかさえ怪しいものだ。
ナギトはそんな風に《身喰らう蛇》を評価し、

「じゃあ一問目……」

「なにを言っている？」

一問目を繰り出そうとした所をブルブランに制される。

「今の一問目だろうか？」

その言葉でブルブランの意図を理解し、ナギトは舌打ちする。

「では一問目だ」

そんなナギトを見て、自分の論法が通った事を確認してからブルブランは一問目を始める。

「君は本当に記憶を失っているのか？——さあ、どうだ」

質問の意味を考えてみる。

記憶を失う以前のナギトは《剣鬼》と呼ばれていたらしい。剣の鬼というくらいだ、剣の腕が立っていた事は間違いない。

そんな自分が本当に記憶を失っているのか——？

それは《剣鬼》が未だ健在であり、記憶喪失と偽り、誰かを油断させるための罠ではないのか？

問いかけの裏にはそんな意味があるのかもしれない。そう言った場合、どう答えるのが正解なのか。

思考の末、ナギトは「知るか」と諦めた。どうしたって答えなのでない問題だ。諦めてさくつと答えよう。

「本当だ。俺はナギト・シユバルツァーになる前の記憶を喪失している」

「ほう。先月の問答である程度の確信はあったが——本人から認められるとより確実だな。では……！」

「二問目だ」

興奮し、なし崩し的に二問目に移ろうとしていたブルブランの熱を冷ます。先程と同じやり取りだ。演じたのが逆というだけ。……どうやらナギトとブルブランはどこか似た部分があるようだった。

「俺の記憶を奪った人物、あるいは事柄を知っているか」

「知らない。が、心当たりはある」

ナギトはこれまで自分の記憶喪失は崖から落ちたショックだと疑っていなかった。

しかしリインやⅦ組の仲間たちと過ごす日々が楽しすぎて、たびたび天啓のように舞

い降りる『確信』が怪し過ぎて。この記憶喪失が作為的なものに思えてきているのだ。

「君は記憶喪失だが…それはいつから？」

「1202年の12月頃」

雪深いユミルの領地で、記憶を失ったナギトはシュバルツアー男爵家に保護された。姓名を与えられて、住む場所、着る服、食べ物を与えられ、果てには息子とさえ呼んでくれたあの家には感謝してもしきれない。

「《剣鬼》の——……いや、お前がここに来ているのは結社の思惑か？」

「答えはノーだ。私の個人的な趣味に過ぎない。……まあ、下見と言い換えてもいいがね」

第三の問いかけはブルブランが今このタイミングでバリアアハートにいる理由。言いかけた質問は、ナギトに答えを聞く勇気がなかったから取り下げられた。

どうやらブルブランがバリアハートに来ているのはあくまで趣味だと。しかしその言い分から、おそらくはバリアハート——引いては帝国で結社が何かを起こす時の下見であるらしい。

「さて、質問だ。——君は今、楽しいか？」

「——ああ。楽しくて楽しくて仕方ないとも」

それはこの問答の事ではなく。

ナギト・シユバルツァーの人生として。

ラインの義兄弟として、この物語に加わっている事が——

「フフ、ハハハハハ！ これはなんとも愉快愉快な話だ、《剣鬼》殿！ 君がその記憶を取り戻した時が楽しみだよ！」

ブルブランは愉快そうに笑う。愉悦を浮かべて笑む。それが酷く不快で、次の質問のために口を開きかけるが、

「おっと、次で最後の質問だ。君のお友達が迫っているからね」

「あいつら……!」

タイミングが良いのか悪いのか。ブルブランとの問答は有益な一方で毒のようでもあった。ナギトの未来を呪うような魔力のような。

「早くしたまえ」と急かすブルブランを見据えながら、ナギトは思考をフル回転させる。先月、ブルブランを撤退させた技の主人は——？

結社の目的を聞き出すか——？

記憶喪失以前のナギトの名前は——？

「《剣鬼》……とは、なんだ!？」

ブルブランがステッキを振る。その足元に魔法陣が輝いた。

「カルバード共和国における英雄にして大罪人！そして八葉一刀流の次代たる剣の達

人だ！」

白衣装のブルブランの姿が消える―転移した―のとⅦ組A班が大聖堂に突入してきたのは同時だった。

☆★

「起きろリイン、君の義兄弟が消えたぞ！」

その異変に真っ先に気づいたのはマキアスだった。

リインとユーシスの話を聞き、悶々とした彼は眠りが浅かったのだ。

「トイレ……とかじゃなさそうだな？」

マキアスはリインを起こすと、ユーシスまで巻き込んで室内を探してみるがナギトの姿はない。

ARCUUSでの通信を試みるも、不通だった。

「ただ事ではないのは確かだが…己の意志で部屋を出たのは間違いあるまい」

A班が宿泊するホテルはルーファスの好意でそれなりにお値段の張る施設だ。セキリテイが悪いという事もなく、部屋の施設もしたし、誘拐されたのだとしても、なぜナギトなのかという疑問もある。

身柄の大切さで言えばユーシスやマキアスに分があるはずだからだ。よしんば失われたナギトの記憶が価値を高めるのだとしても、状況の不自然さは打ち消せるものではない。

そう結論づけて女子たちにもナギトの搜索の協力を依頼する。ホテルのフロントに尋ねると少し前にそれらしい人物が出て行ったとの事だ。

「ホテルから出たのはわかったが…いったいどこへ向かったんだ!？」

「こんな夜中です…街道には出てないと思います…」

「くそっ！相変わらず通信は繋がらない！」

ナギトが自らの意思で外に出たとしても非常事態である事に変わりなく、リインだけでなくエマやマキアスにも焦りが滲む。

「こんな深夜に少年少女がどうしたんだ？」

そこに現れたのは白いコートに身を包んだ金髪の青年。通り掛かりに慌てた様子のリインらが気になった、という感じだ。

「同じ年頃の兄ちゃんならさつき大聖堂に入って行くのを見たぜ！」

「――！ありがとうございます！」

その金髪の青年はまさしくリインらが求めていた情報を差し出してくれた。一行は礼を言うの大聖堂へと走り出す。

深夜という事も忘れてリインは大聖堂の扉を開け放つ。

「よお」

ステンドグラスが色とりどりの光を床に落としている。その中に佇むナギトはいつそ幻想的で、一瞬だけ目を奪われてしまう。

「こんな時間にこんな場所でなにをしている？ 女神への祈り——なんて敬虔なガラでもあるまい！」

「はっ。まあな。お前らこそ…、明日も早いんだ、さっさと寝ようぜ」

ユーシスの荒げた声に、ナギトはいつもの調子で答えつつ歩み、リインらの前で止まる。手を伸ばせば届く距離。それなのにどこか、遠い気がして。

そんな幻想を打ち払ってリインは咎めるような声を出した。

「質問に答える、ナギト。黙って部屋を抜け出してここで何をしていたんだ!？」

「とは言ってもだね、お前らに関係ない話だしなあ…」

頭をほりほり搔きながら、手を煩わせるのも悪い…と言う雰囲気の名ギト。

それに激したのはマキアスだった。

「君は…傲慢だな。貴族とか平民とか関係なく…：色んな問題を1人だけで抱える…！」

「そうです…！ ユーシスさんやマキアスさんの仲違いだって、私たちも何とかしたいと思ってるのは同じなんです！」

マキアスに続きエマも。日頃の鬱憤を吐き出すように不満を口にした。

「関係がないとは笑わせてくれる…！ 少なくとも俺たちはこの実習中は仲間だったはずだが…!？」

「……ん……昼間の事だつてそう。悪ぶつて貧乏くじ引きに行くのはどうかと思う」

ユーシスやフィーまで。咎めるように、労うように、その有り様を否定する。

「俺だつてみんなと同じ意見だ。ナギトは1人で何でもやろうとし過ぎだ。……もつと俺たちを頼つてくれ……!」

そしてリインにまで。言われたナギトはポカンとした後、「ははは」と笑った。

「つたく、総スカンだな。わかったよ、降参降参! 事情は共有する」

ナギトがそう宣言した事で張り詰めていた雰囲気は弛緩した。

マキアスやユーシスはもちろん、リインとエマの視線からも険しさが消える。フィーについては眠たげな半目だった。

「けどその前に場所は移そう。司教さんらはぐつすりらしいが……まあ、まずいだろうしな」

考える時間も欲しい事だし、とは内心だけで呟いてナギトは提案する。遅滞なく提案は受け入れられ、ホテルの男子部屋に移動する事になった。

大聖堂を出る一行の末尾でナギトは微笑んでいた。

それはいつもの悪ガキ然としたものではなく、本当の、本心からの幸福を得たからだ。

自分はただしくVII組の一員で、リインやユーシスやマキアスやエマやフィーの仲間なのだ。

そういつた感慨を、幸せを噛み締めながら。

ホテルの男子部屋でナギトは事情を説明した。

宝飾店や夕食時に出会ったブルブラン男爵に呼び出されていた事。ブルブラン男爵の正体が《身喰らう蛇》という組織の執行者である事。ブルブランとは先月の実習で対峙した事など。

“なぜ黙っていたのか”や“今夜の誘いを秘密にした理由”やその他もろもろに関して質問攻めにされたナギトはぐったりしながら寝に入ったという。

こうして特別実習の波乱の二日目は幕を開けたのである。

未だ知らぬ——故に

「くあくあ」

ホテルのロビーで大きなあくびをしたのはナギト。昨夜の夜更かしが響き、寝不足を隠す気もない。

ラインやユーシス、マキアスはしゃっきりした顔……とは言えないが、少なくとも表情は引き締まっていた。

少し待つと女子——エマとフィーも合流し、特別実習2日目の活動開始だ。

どうやら昨晚のラインとユーシスの会話を聞いていたマキアスの2人——否、ナギトを含め3人への態度は軟化しており、本日は良い雰囲気のまま実習に取り掛かれそうだった。

が、そこにアルバレア家の執事が現れてユーシスを連れて行ってしまふ。

ユーシスを欠く形にはなったものの、雰囲気は和らいだままで。

今朝から急にデレ始めたいじりが度を過ぎたのか、ついにマキアスがキレた。

「リイン、言っておくが君とのわだかまりは解けたわけじゃないからな！」

「え、そうなのか？」

「ナギト！君はいつも上から目線で助言ばかり。そんなのは僕に試験の点数で上回ってからやりたまえ！」

「それ言ったら俺はフィーくらいとしか喋れないんだが」

マキアスの照れ隠しとも取れるセリフはエマとフィーにも降りかかる。

エマには「6月に迫った中間試験では負けないぞ」と。フィーには「授業中に寝るな」と。

これまでのユーシスとの喧嘩じみたやり取りと比較すれば何と微笑ましいものか。

ナギトを始めリインやエマ、フィーですら微笑のままマキアスの発言を聞き流していた。

やがて課題に取り組む流れとなり、手配魔獣討伐のために街道に出る事になったA班一行。

「なあマキアス。 お前…先にトリスタに戻ってないか？」

その道の途中で、ナギトは切り出した。

「君はいきなり何を言い出すんだ」

そのあまりの唐突さにマキアスは怪訝と呆れを混ぜた顔でナギトに振り返る。

「…いや、お前がいいと思うなら別に構わないんだが」

「何を言いたいんだ？ そら、昨日のリベンジをするんだらう？」

「そうだな」と引き下がるナギト。

ここでマキアスを説き伏せるだけの材料がないのだ。根拠のない確信 漠然とした不安はあるものの、嫌な予感が頭から離れないのだ。

無理やり何かを挙げるとするならば、今現在A班はユース・アルバレアというバリアハート住人に対する鬼札を失っている状態であると言う事。

しかしそれだけで説得の決定打になるはずもなく。

☆★

その後、手配魔獣の討伐は滞りなく終わる。昨日と違い連携はバツチリで言う事なしの結果であった。

問題は、バリアハートに戻ってから起こった。

領邦軍がマキアスを拘束すると言ってA班を取り囲んだのだ。

容疑はいくつもあるが、大きなものは昨日のオーロックス砦への侵入罪だそうだ。

「おいおい、オーロックス砦へ侵入したのは銀色の飛行物体じゃなかったのか？ マキ

アスのどこに銀色の要素があるってんだ。眼鏡か？眼鏡のフレームか？」

「貴様…なんだ!?! 文句があるなら詰所で聞くが?。」

領邦軍の兵士たちにイチャモンをつけてみるが、返ってきたのは脅しだ。

「ハッ！話を聞くって？問答無用で帝都知事の令息を連れて行こうとするアンタらがか!?!」

ナギトが抱いていた嫌な予感は的中した。

ユーシスという貴族権威への防波堤を失ったA班は貴族の街であるバリアハートで後ろ盾を失ったも同然。『名門トールズ』の看板も見境なしが相手では輝きも鈍る。

ナギトの見透かした罵倒にカツとなった兵士の1人が携帯していた銃を振り上げた。銃把で殴るつもりなのだろう、街中で引き金を引かないだけマシだ。

が、大振りのそれを素直に受けてやる道理もなく。

ナギトは兵士の足を思いつき踏みつけると、痛みに腰を折ったそいつの顔面にアツパーカットを食らわせた。

「おっと。僕ったら脚が長いもんでして。あ、これひっかけた時の言い訳だったわ。あとアツパーはオマケね」

背中から倒れた兵士を見て領邦軍は素早く銃口をナギトに向ける。

「手を挙げる！抵抗すれば撃つ！」

舐め切った態度に公務執行妨害のオマケつきでナギトもマキアス同様領邦軍に連行される事となる。

貴族の子息であるという事だけを即座に明かしたのは射殺を免れるためだった。

マキアスと並んで連行されるナギトは一度だけ振り返って「あとは任せるぞ！」とリンらに呼びかけた。領邦軍兵士の銃に小突かれてまた歩き出すナギトは、返事をしていないリンの決意を秘めた眼を見て軽く笑むのだった。

☆★

領邦軍詰所地下の牢獄にぶち込まれたナギトとマキアス。そこでナギトは今後について思索に耽る。

まず今回の特別実習についてだが。

リン、エマ、フィーの3人はナギトとマキアスを助けるために動いてくれるだろう。正面からドンパチするわけもないから、おそらく地下水路経由で潜入を試みるはず。ユーススについては実家で軟禁というところか。まあ、あの男の事なので大人しく捕まっているだけのわけがないが。

次に、今後の展望について。

この件でⅦ組が貴族派に睨まれる事は……表立ってはないはずだ。

なぜなら、これが誤認逮捕だからだ。この件について真実が明らかになればアルバレア家はマキアス——Ⅶ組に対して負い目ができる。ナギトに限っては誤認逮捕もくそもないわけだが、なし崩し的に無罪放免される事だろう。——これが表向き。

しかし実際この件の狙いは革新派への牽制。レーグニッツ帝都知事という重鎮の息子の身柄を押さえ、何らかの交渉で有利に立つための。しかし帝国は法治国家であり、いくら大貴族と言えど誤認逮捕からの人質交渉なぞ反発は免れない。

つまりこれはアルバレア公爵の焦りに身を任せた悪手——

——焦り？

ナギトの内に、小さな疑念が生まれつつあった。

しかしそれが形となるより先に、マキアスから声をかけられている事に気づく。

「…いい、おい！ナギト、聞いているのか!？」

「うん、なんだ？」

「どうしてあんな真似をした！ 捕まるにしても、それは僕一人でよかったはずだろう!？」

マキアスの問いはシンプルでそれ以上の意味はなく、しかし言葉足らずだ。

視野が狭く思われたマキアスだが、頭の回転はむしろ早く、今回の冤罪が何を目的にされたものかはわかっていた。

つまり、貴族派と対立する革新派の重鎮であり、マキアスの父親でもあるカール・レー

グニツツ帝都知事への牽制。

それをするために領邦軍——引いてはアルバレア公爵はマキアスの身柄を確保したのだ。

「まーほら、1人だと心細いじゃん？」

「いかにも今思いつきましたって感じだな…」

実際のところ、貴族の横暴に腹が立ってたからやり返したかったから、というのとその後の展開的には牢屋にいた方が楽ができると思っただからだ。

「あれ、でもよく考えたらリインあの野郎、両手に花じゃねえか！計ったなあ!」

「って君はいつもそんな事ばかり考えているのか!？」

当初は6人いたA班も今やユーシスに加えマキアスとナギトまで離脱し、リイン、エマ、フィーの3人のみ。仮想ハーレムの完成である。「これは計られたなあ」とまた悔し

げに言うナギトに、マキアスが笑みをこぼした。

「ふっ…… 君は…本当に傲慢な男だな。不安なのは一緒だろうに、そんな軽口で僕の不安を和らげようとしてくれる」

「……………まあな！」

「なんだ今の間は!？」

「急に嘘臭くなったな…」とナギトにジト目を向けるマキアス。
それを見てナギトは柔らかに微笑む。

「君は…………どつちが本音なんだ!？」

気を使ってマキアスと軽口を交わしているのか、本気でラインが両手に花だとか言っているのか。

もちろん前者という理解はあるが、ナギトの態度がそれを否定しにくる。

翻弄されているのだと思いつながら、自分とナギトの距離感は今後こんな感じなのだろうという気も湧いた。

しんみりしたりツツコミを入れたりと表情をころころと変えるマキアスに「あつはつは！」と大笑するナギト。

しかしそんな穏やかな時間は長続きしないもの。複数人の足音が聞こえたかと思うと、ナギトとマキアスの入っている牢屋の前で止まった。

「黒髪の方、出る」

物騒な、それでいて不満げな領邦軍の司令官の指示により鉄格子が開かれ、ナギトが連れ出される。

「なんだ、今更別の牢屋に入れようって話かな？」

「無駄口を叩くな」

笑い声が癪に障ったのか、と推測しながら領邦軍兵士の数を数える。5人。一瞬で倒すには多い人数。逃げ出す前に応援を呼ばれて囲まれるだろう。

しかしどうするべきか、ナギトは素早く思考を巡らせた。従うべきか、逃げるべきか。最近の頭痛のタネである例の“確信”はこんな時に限って降ってこない。

やがて時間切れだ。背後の鉄格子は閉じられ、マキアスとの共同脱獄の可能性も消える。

舌打ちしたい気持ちを抑えて、最後に軽口を言つて領邦軍に連れられていく。

「それじゃお先〜」

ウインクを添えて。

向けられたマキアスは苦笑いするしかなかった。

☆☆

領邦軍兵士に連れられてナギトが来たのはアルバレア家の城館だった。そこから更に進んで中庭に出る。

芝生の整えられた、広い場所。

—— 剣が振れそうだが、なんて考えに自己の剣士性を感じて苦笑してしまう。

そこで待っていたのはルーファス・アルバレアだった。

洒落たイスに座り、テーブルにはティーセット。2つのカップからは湯気が立ち上り、今しがた淹れたものだと推測できる。

「連れて来ました」

「ご苦労だった。下がるといい」

領邦軍兵士はナギトをルーファスの前に差し出す。どうやらルーファスがナギトをこの場に連れて来るように命じたらしい。

「は、しかし」

「下がりましたまえ、と言ったんだ」

イスの近くにはナギトの装備一式が置いてあった。領邦軍兵士はこれを手に取った。ナギトがルーファスに襲い掛かる事を危惧しているのだ。

しかしルーファスは知らん顔で——否、そうなくても問題ないと言わんばかりに兵士を追い払う。

やがて中庭にはナギトとルーファスの2人だけになり。ルーファスの「座りたまえ」というセリフに従ってナギトは着席した。

「今回の件は貴方の企てですか？」

着席と同時に先制したのはナギト。この翡翠の貴公子と対して飲まれまいとする意気の現れであった。

そもそもそうする事自体が飲まれかけている証左でもあったが。

「この件、とは？」

とぼけるな、とは言えないし舌打ちもしない。

「マキアスの、逮捕」

言葉選びは慎重に。態度がどうあれ、敵意に類するものを形として表すわけにはいかない。

「それか。それは父上の暴走だよ」

言葉を交わす一つ一つで肝を冷やすナギトとは裏腹にルーファスは余裕げに答える。

「緊張しているようだね」

余裕を醸すルーファスに馬鹿らしくなってたナギトだったが、そんなルーファスの見透かすような言葉で再び身体を硬くした。

「ふむ……少し世間話でもしようか。　そうだね……今の帝国をどう思う？」

ナギトの緊張をほぐすためか、ルーファスは世間話をすると言う。しかしその話題が

帝国についてとは、ルーファスにとって帝国全土が世間の範疇に含まれるようだ。

「危うい…ですかね」

「ほう、それはどういう…？」

ルーファスが「世間話」と言うのだ。ナギトも気を遣い過ぎるという事もないと考えて、今月と先月の特別実習でも言及した帝国の現状について語り始める。

「革新派と貴族派の対立——それによる、言わば権力のバランスが、です」

思い返す。先月の実習…《風見亭》でどんな事を話した？昨日のオーロックス砦を見た感想はどうだった？

「どちらか一方が強くてもいけない。バランスが崩れますから。…しかし今、正規軍はもちろん領邦軍も軍拡が進んで…互いに主導を握らんがために」

「軍事力を背景に、互いに自らの言い分を通そうというわけだね。革新派は改革を推し進め、帝国をより強靱な国家にするため……、貴族派は国の中枢に返り咲き、古き良き国家に戻るため……」

「はい。しかしバランスが崩れ、秤が傾けば、その余波は帝国そのものを揺るがすものとなる」

「具体的には？」とルーファスが先を促した。ナギトはテストで採点でもされている気持ちになる。

「例えば、革新派と貴族派で内戦が起これば、その隙をカルバード共和国に突かれるでしょう」

「ふむ、そうだね。帝国と共和国は長年の仇敵同士……近年ではリベール王国が仲介し、条約などを結ぶに至ったが……」

「まあ、ハリボテですよね。未だクロスベルの件でもバチバチですし」

と言つてナギトは話が少し逸れたと思つた。世間話はいくまで帝国についてだ。

「つまり、そういった事情もあるから、きつとこの危ういバランスはしばらく続くとおもいます」

互いの軍事力だけでなく、東の脅威も手伝つて、動くに動けない状況である——ナギトはそんな風に話を締め括る。

ルーファスは「なるほど」と頷き、その見透かすような、透徹した青い眼差しをナギトに向ける。

「しかし、もし仮に帝国内がどちらかの勢力に統一されたとすれば……どうだね？」

その言葉がナギトには空恐ろしくてたまらない。まるで内紛が起こる事を予見——宣言しているように感じられたからだ。

「それこそとんでもないでしょう。仮に帝国が一枚岩になれば、それは名実共に最強軍

事国家の誕生だ。そうなれば、世界各国が対エレボニア帝国同盟でも結んで大戦が起こるのでは？」

しかしナギトはそれに答えてみせた。あくまで「仮」の話なのだ。

「フフ……それはまた随分と飛躍したね。しかし君は帝国が負けると思うのかね？」

「所詮は学生の妄想ですよ。さすがに世界が相手じゃ帝国も負けると思います。不快に感じるかもしれませんが」

ナギトの言葉にルーファスはまた笑い、「なに、聞いたのはこちらだ」と言った。それからカップに手を伸ばして紅茶を啜る。

ナギトも同じように紅茶を飲んで、その美味にユーススが紅茶党になった理由に納得する。

「さて、では本題だ」

そしてルーファスはそう切り出した。ナギトは睨むようにルーファスを見つめ、しかし言葉は発さない。

「それはずばり、君たちの現状について」

この「現状」と言うのはマキアスとナギトが逮捕され、ユーシスはどこぞに連れ去られている状況を指す。

「先程も言ったが、これは父——ヘルムート・アルバレア公爵の暴走だ。長期的な視野で見るとそうでもないが、当事者であり特別実習中の君たちは非常に困っている……：：：そういつた認識で構わないかな？」

先程の世間話の時と同じ、余裕のある表情のまま——否、若干の悪辣を滲ませつつ、ルーファスは問い、ナギトは「はい」と答える。

「私にはこれを止めるだけの力がある。：：：しかし勘違いしないで欲しい。いくら私がアルバレア公の次代と言えど、現当主を相手に無理を通すのは楽ではない」

ルーファスの回りくどく、しかし伝わりやすい文句に、その意図を察したナギトが続きを紡いだ。

「つまり、交換条件でなわけですね？　俺たちⅦ組A班の特別実習を助ける代わりに、何かを差し出せと」

「いかにも」と気取った——いやらしいほど様になる仕草と共にルーファスは立ち上がり、中庭の中央に向かって歩き出す。

「そして賢い君ならすでに気づいているだろう。——私が何を求めているかを！」

抜き放つ、長剣。

鍛えられた白刃は、鐔から柄にかけて金色と翡翠の装飾が模られていて、それがひどく貴公子然としたルーファスに相応しく思えた。

そもそも、なぜルーファス・アルバレアはナギトだけを牢から出し、自らの眼前に呼

び出したのか。

それは紅茶を味わってもらうためではなく、宣言めいた世間話をするためでもない。

「私と立ち会いたまえ、ナギト・シユバルツァー」

ナギトと、戦うためだ。

☆★

ゆつくりとした動作で剣を構えたルーファスを見てナギトは息を飲んだ。

柔らかな佇まい。自然体でありながら、まったく隙がない。それはまさしく宝石のよ
うな印象を覚えた。

そして、直感する。

あのユミルで目覚めてから今日までで見てきた剣士の、誰よりも強い。

一年余りを共に過ごしたラインよりも。

新入生最強と呼ばれるラウラよりも。

未だに勝てないフリーデルよりも。

ずっと、ずっと強い。

そこまで考えて、「はっ」とナギトは笑った。

「何がおかしい?」

その笑みの理由をルーファスが尋ねる。ナギトは残った紅茶を一気に飲み干すと立ち上がり、太刀を鞘から引き抜いた。

「いやなに、俺の世界も狭いなあ…と」

ルーファスの構えを見て、今までの誰よりも強いと思った。

しかしそれは剣士としての話。サラはもちろん、先月の実習で助けてもらったTMPのクレアも相当強いだろう。それにトールズ士官学院の学院長たるヴァンダイクはそれこそ破格の強さを誇るはずだ。

それでも、ナギトが挙げられる比較対象はたったのそれっぽっちだ。

ついさつきまで帝国がどうの、大戦がどうのと語った口で、ルーファスが今まで

会ったどの剣士よりも強い”だなんて笑わせる。

ルーファスとの距離はおよそ20歩。

——合図は、なかった。

脚力を爆発させる。20歩の距離が一瞬で消失した。

すれ違い様の斬撃は受け止められる——が、足は止めない。

「ああ、最高速の疾風だったさーそれが受け止められて自信喪失だよまったく！」

やけくそのように叫ぶ。ルーファスはそれを、360度からブレるような音として捉える。

「噂に聞く《風の剣聖》——それは彼の得意とする『疾風』か」

ナギトは、止まらない。

疾風のスピードを保ったまま、ルーファスの周囲を不規則に走り続ける。脚力を、爆発させ続ける。

自らより湧き上がる疑問。

スピードを保てるのか。

無理だ。

「続けんだよ」

体力が保つはずがない。

そうだな。

「知らないね」

勝てると思っているのか。

負けるよね。

「それを」

縦横無尽。斬撃と共に走る。

「決めるために！」——戦うのだ。

太刀は長剣に受け止められる。視線が交錯する。

ナギトの発奮につられるようにして、ルーファスも笑んだ。

相手が倒れるまで疾風を続ける。無限疾風とでも名付けようか、いや無限は無理だからせいぜい九十九疾風というところか。なんてナギトはどこかで思考しつつ、ルーファスが確実に反応できている事を理解した。

「フフ……なかなか止まらないものだ。では…」

ルーファスが対応に慣れ、反撃に移ろうした瞬間、これまで疾風で斬撃を重ねていたナギトは跳躍した。

「——孤影燎原！」

空中で幾つもの孤影斬を放つ。それはまさに斬撃の雨あられ。それがルーファスに降り注ぐ。

「甘いな」

ルーファスは空中のナギトに手を翳す。するとまるで放った孤影斬を吸い込むようにして闇色の球体3つが出現した。

それは引力を有し、ルーファスに降り注ぐはずだった細かな孤影斬もろともナギトを吸い寄せる。

「レネゲードエッジ」

横薙ぎの一閃を、ナギトはなんとか受け止めた。しかし勢いには負けて大きく弾き飛ばされる。

背中から地面に落ちて、芝生をごろごろと転がり、剣を杖にしてようやく立ち上がる。

「どうした、こんなものかね？」

対するルーファスはと言うものの、余裕の表情である。その言葉は挑発と純粹な疑問を兼ねていた。すなわちナギト・シユバルツァー——否。《剣鬼》の実力はこの程度か、と言っている。

断じて否である、と言つて立ち上がれば良かった。

しかし無理だ。ナギトの剣技は、記憶を失つて目覚めてからの一年半で驚異的に冴え渡りつつあるものの、それはまだルーファスには遠く及ばない。

《剣鬼》であつた頃の剣技を引き出す “自失無我” も、こんな状態では使えようもなく。

丹田に力を入れてナギトは立ち上がる。そして太刀を正眼に構えて、深く呼吸をした。

「来ないのなら……こちらからいくぞ！」

ナギトの受け身の姿勢を認めたルーファスは長剣を構えると突っ込んだ。疾風もかくやと言わん速度に、しかしナギトは驚かない。

翡翠の輝きを放つ長剣が肉薄する。すでに避ける距離ではなく、受けられる強度はなく——ならば、受け流せば良い。

勢いに乗った袈裟斬りに沿うようにして太刀を這わせた。それでわずかに軌道を逸

らし、しかしそれは剣士にとって致命的なズレとなる。

よもや受け流されると思わなかったルーファスは勢いのまま体勢がほんのわずかに崩れる。それはすぐに立て直せるものであるし、剣を差し込む隙もない、小さな間隙。

そつと背中を押すように、ナギトの手がルーファスの肩を突き飛ばした。

距離はわずか一歩分。時間はおよそ一秒に満たぬ。

太刀が納刀される。

「――神威残月」

そして、神速を伴って抜刀された。

斬撃が迸る。

「ぐ、うおおお……！」

あるまじき速度で抜刀され、発射された剣閃をルーファスは長剣で受けていた。

ナギトが突き飛ばしたのは太刀を振る距離と時間を稼ぐためだが、それは同時にルーファスが体勢を立て直す時間を与えた事でもあった。

それによりルーファスは、ナギトの次の攻撃に備えられたのだ。

ルーファスにとって予想外だったのは、その一撃が強烈だった事だ。余裕だった表情が驚きに染まり、そのまま押し負けて吹き飛ばされていく。

長大な弧状の斬撃は中庭の芝生を切り裂き、土煙を上げながらルーファスを押し込んでいく。しかしそれはやがて減衰し、溶けるようにして消えていった。

ナギトは肩で息をしながら、巻き上げられた土煙の様子を伺う。

「はは……「やったか!」って感じだな……ったく」

つまり、やれてないという事だ。

そんな予感を裏切らぬように、土煙の中からルーファスが現れた。

「……今のはいささか驚いたよ、ナギトくん」

多少の汚れこそついたものの、何もダメージらしきものを負っていないルーファス・

アルバレアがそこにはいた。

ルーファスにとっては褒め言葉なのだろう。それが皮肉っぽくなるのはユーシスと似ているとナギトは思った。

その裏で、ナギトは自らの直観を受け入れる。

—— “勝てない”

—— “このままじゃ、勝てない”

ルーファスの剣技は、ユーシスの剣技の上位互換に当たる。

そのイメージは凶に当たった。それがルーファスを驚かせた一撃に繋がった。しかし、それについても学習された以上は、また目新しいものでないと対応される。

さてどうしたものか、と頭を悩ませていたナギトに、空を疾る斬撃が襲いかかる。八葉一刀流で言う孤影斬に当たる、斬撃を飛ばす剣技。その宮廷剣術バージョンだ。

2連で放たれたその一撃目を太刀で掬い上げて己がものとし放ち、2撃目はそれをぶつける事で相殺する。

その様子を観察していたルーファスは「なるほど」と呟く。

「『螺旋』の技術か。良くもまあ器用にやるものだ。先程の受け流しもその応用かな？」

「まーそうですねー」

ハイこれで一の型も学習されましたー！と内心で絶叫するナギト。

この他にも二の型、五の型、六の型はすでに見せた。残るは三、四、七だが、そのどれもが宮廷剣術に通じている気がして、ルーファスには効きそうにない。辛うじて目がありそうなのは七の型「無」であるが、こちらはナギトの練度が低いためおそらく無理。

これもう詰んでるのでは？と思考を放棄しかけるが、剣士としての本能がそれを拒否する。

八葉で道が拓けぬならば、外からもつてくればいいのではないか。

しかし、そんな付け焼き刃がルーファスを相手に通用するのか。

では、外の技を八葉に落とし込めばいい。

手本は？ 目の前にあるじゃないか。

「ダブルブランド
双交剣派」

目の前の男の雰囲気が変わったのを感じとったのだろう、ルーファスは油断なく長剣を構えて受けの姿勢を見せる。

ナギトの姿が消える。高速で距離を詰める疾風——もはや見飽きたと言っていていいほど繰り返された剣技。

ルーファスの力量ならば後出しでも対応できる練度。

だが。

「逃がしは——っ!？」

防ぐだけでなく、太刀を受けつつ離脱を許さない位置取り。

しかし元より離脱する意図はナギトにはなく。

罅迫り合う太刀と長剣。ナギトの空いた左手に赤い輝きが——

「闘片集約」
ブレイブコネクト

何せ初めての作業だ。確認するように工程を口に出す。

「刀剣創成」
ブレイド・オン

——集束する。

光を放つ——否。光そのものである剣がナギトの手に創り出された。

「緋^ひ技^ぎ」

振り下ろす。

「——虚空剣」

緋色の輝きを灯して、剣はルーファスに肉薄する。

すでに避けられる範囲ではなく、長剣は太刀の防御に回している。勝った——そういう確信がナギトの中で芽生えた、

「おおおっ！」

瞬間。ルーファスは雄叫びを上げ、逆に距離を詰めた。

それにより虚空剣はルーファスの背中を薄く切り裂くに留まり、そのまま太刀を防いでいた長剣を滑らせてナギトを打ち据える。

「ぐうっ!？」

今度こそ受け身も取れずに倒れ、太刀は手放し、虚空剣は霧散した。呼吸が止まった一瞬、空は憎いほど青く――。

そのまま倒れ伏して理解した。

完全に、敗北したと。

☆★

「さすがに今のは肝を冷やしたな」

ルーファスは長剣を鞘に納めながらひとりごち、自身とナギトに導力魔法ティアを施した。この激しかった戦闘も、終わってみれば互いにダメージは軽微だった。ナギトの方は疲労困憊といった様子ではあつたが。

ナギトはため息混じりに立ち上がり「どーも」と礼を言う。そのままじーつとルーファスを見て、

「なんだね？」

「いえ、なんというか……なんなんですか？」

ナギトの内には様々な疑問が渦巻いていた。それがごちゃ混ぜになつて言葉にならな

ない。
「考えがまとまらないかね？」

「フフ」と笑い、ナギトの胸中を見透かすようにルーファスは続ける。

「ならばこちらから聞こう。その間に落ち着くといい」

ナギトが「わかりました」とまた嘆息すると、ルーファスは「では」と切り出す。

「先程の剣技…あれは何かね？ 見たところ、宮廷剣術に通じるものがあつたようだが」

「まあ、ほぼパクリですから。宮廷剣術には剣に闘気を纏わせてリーチと威力を底上げする技があるでしょう？ 確かユーシスは『ルーンブレイド』とか呼んでましたか…」

「ああ。宮廷剣術だけでなくアルゼイド流など——帝国武術にはそのような戦技が多い。君も知っているだろう通りな」

たしかにラウラのSクラフト『洗刃乱舞』などもそうだ。眩い光を放ち威力とリーチが伸びる。

しかしアルゼイド流のそれは攻撃力特化。その流麗と汎用は宮廷剣術が勝る。

宮廷剣術を採用した特段の理由として、その剣技は剣全体を輝きで包む点があつた。アルゼイド流が刀身だけに闘気を集中させるのとは違い、宮廷剣術は剣そのもの——柄尻から鋒まで闘気を帯びさせる。

だから剣そのものとしてのイメージがし易かったのだ。

「俺のこれは、自らの手の内に剣があると仮定して、それに闘気の刃を纏わせる…言わば、虚ろの剣。例えるなら、かぶせる頭もないのに用意したカツラというわけです」

その比喩にルーファスは吹き出した。「面白い例え方をするのだね、君は」とひとしきり笑ってから、真面目な顔に戻る。

「だが、見たところまだ未完成…しかも使い勝手も相当悪そうだ」

あの一瞬でどこまで見抜くのか、とナギトは戦慄を覚える。

戦技「虚空剣」はひどく燃費が悪い。手順としては闘気を集約させて剣を造り出し、そこにさらに闘気を流して強度を上げるのだが…、まず「闘気を集約させて剣を形造る」というのでごっさり気力^Cを持ってかれてるのだ。

体感的には不意打ち^C1つするため^PにSクラフト級の闘気^Cを使ってるようなイメージだ。

しかしそんな事まで説明する理由はなく、「そうですね、燃費悪いんですよ」と言うに留める。

そうして、自分が落ち着いた事を理解したナギトは頭の中を整理して、「じゃあ今度はこちらから」と質問を始める。

「そもそも、どうしてこんな模擬戦を？」

「ふむ、そうだね……一人の武芸者として、君の実力に興味があった、というのはどうだね？」

メチャクチャ胡散臭い物言いではあったが、『《剣鬼》の実力測定の意図があった』と理解する。

「ご期待には沿えなかったようで」

「そうでもない。君としての実力も見えた事だしな」

腹芸ならぬ腹芸。《劍鬼》としての實力は見えずとも、現状のナギトの力量は測れたと言っている。

「じゃあ次に……随分余裕がおありのようでしたが、それは決着の一撃に響きましたか？」

ルーファスに倣い、ナギトも迂遠な物言いをしてみる。

要は最後の―撃……ナギトを打ち据えた長劍の劍腹での殴打の意図を問うている。

ルーファスは虚空劍を受けつつ最後の―撃を繰り出したのだが、それは刃によるものではなく劍腹による打撃だった。あのまま劍を振り抜かれていたら死んでいたはずなので、ナギトとしては悔しさ余って感謝百倍という所なのだが……

「余裕……ではなかったがね。あの戦闘の最中……いくつも危ない場面はあった。しかし、それを押ししても私は君を傷つけられない立場だったのですね」

「立場？」とおうむ返しにナギトは聞く。言い回しもそうだが、内容そのものに疑問を覚える。

立場とは？ナギトの内できくつもの推測が形になる前に、ルーファスが回答した。

「ああ、言つてなかつたかな。私はツールズ士官学院の常任理事なのだよ」

「は？！」

「私はツールズ士官学院の常任理事なのだよ」という一言で、ナギトの思考は吹っ飛んだ。しかし頭の片隅ではなんとなく「そうだろう」と理解している自分もいて。

「あー……あー……、なるほどな、くそっ！」

悪態を吐く。ルーファスの優雅な笑みがいやらしく見えた。

「じゃあつまり……あれですね、茶番？」

端的に、ここでの出来事を総括した。

きつとここでの「交渉」がなくてもルーファスは常任理事の務めとしてA班の連中

を助けていたというわけだ。

優雅に：否、悪戯っぽく「フフ」とルーファスは微笑む。

ナギトはそれに引き攀った笑みをこぼし、

「あなたも大概…タヌキですね」

「——いいや、私は城将さ」

☆★

それからルーファスはヘルムート・アルバレアを説得するとサラと合流し、地下水路で奮闘中のA班を救出した。

その中で、やはりルーファスをトールズの常任理事だったと知らぬユーシスが驚愕するワンシーンなどあったりしたが事態は無事に収束し、すでに夕刻だった事もあり、トリストには翌日帰還する事になった。

その帰りの列車でサラの名言が炸裂し、皆が爆笑した時にマキアスが気づいた。

「どうしたナギト、君が一番笑いそうなものだが…」

「『今しか得られない』『何か』を掴むことは出来るはず」という名言。普段の様子からはかけ離れたギャップに生徒たちは大爆笑したが、その中で唯一ナギトだけが穏やかに微笑んだだけだ。

本来なら…というかイメージ的にはナギトが一番笑い、なんなら指差して大爆笑すると思っていた、それ以外の面子は未だ可笑しさの余韻に引つ張られつつもナギトを見た。

「ん、まあ普通に…というかかなりの名言だろ。ギャップとかそんな理由で笑ってやるなよ」

ナギトらしからぬ、とんだ正論だった。リインはすぐに真面目顔になって「変な物でも食べたのか？」と尋ねてくる。そんなリインには手刀を入れてやり、ナギトはそのまま真剣な表情でA班のみんなの顔を順番に見やった。

「何か言いたい事…いえ、気になる事がまだあるのね？」

その視線の意図を感じ取ったサラは話し易い雰囲気を作ってくれた。ナギトは「はい、和やかな雰囲気の水を差すようですが」と応じて言葉を紡ぐ。

「俺がルーファスさんと何を話したのかは、昨晚言った通り……なんだけど」

特別実習2日目、牢屋でマキアスと離されてからの出来事をナギトは昨日の内にA班とサラに知らせていた。

その時はざっとだったため今ここで再度話す事にしたのだ。

「ただの世間話という体だったし、どんな意図があつてルーファスさんが俺に聞かせたのかはわからない。でも一応、共有しておきたい」

そうしてナギトはルーファスとの「世間話」の内容を語った。

革新派と貴族派のバランス、内戦が起きた場合のリスク、国内勢力が統一された仮定の予想図など……

「そんな話をする中で、ルーファスさんの言葉はどこか確信……というか、どこか宣言染み部分があつたように思う」

「宣言……」

マキアスが深刻そうに呟く。リインもユーシスもエマもフィーやサラでさえ、その意味を理解して眉を顰めた。

「俺たちが思うより、事態はずつと深刻なのかもしれない」

すなわち、革新派と貴族派の武力衝突の 때가、間近に迫っているのかもしれない、という事だ。

貴族派の中核にいるだろうルーファスの言葉ゆえ軽く扱うわけにもいかず、一行の雰囲気は重くなる。

それからは皆むつつりと黙り込み、各々、物思いに耽っているようだった。

そんな中で「そうだ」とナギトが思い出す。そういえば聞かなければならない事がもうひとつあったのだ。

「ユーシス、『城将』って何かわかる?」

「城将……？」

「いや、わからないならいいんだけど。ルーファスさんが自分をそう言っていてさ」

「兄上が？ ……悪いが心当たりはないな。城将……確か“ルーク”という意味もあるが……」

「そうか……いや、ありがとう」

「参考になった」と言つて、ナギトも考え込んだ。なんとなく重要な気がするのだ。

城将——ルーク——チェスの駒。

もしもルーファスでさえ駒のひとつに過ぎないのだとしたら、いったい誰が指し手なのだろう、と。

列車の窓の外は、晴れているはずなのにどこか翳って見えた。

これまでとこれからと

6月中旬。トールズ士官学院に迫る最大の危機。
言わずと知れた中間試験である。

忘れていたわけではない。忘れていたわけではないが、ナギトは「余裕で死ぬる」と言い残して自室に閉じこもった。

勉強の時間だ。

VII組の他のみんなは放課後にわからない所を教えあう、なんて青春イベントを消化していたが、ナギトにそんな余裕はなかった。

時折、「あー」だの「死ぬ」だの「死ぬる」だのとナギトの部屋から聞こえて不安になるリン。

ついには「死んでやるうー!」と言って飛び出したナギトを見て、逆に安心したという。

教科書や参考書を読んでもさっぱりわからない。わからないと言うか、頭に入つてそのまま抜けていく。

「死んでやるう！」と言って気分転換に士官学院の屋上にやって来たナギトはそこで、オカルト部部长のベリルと遭遇した。

占いがよく当たると噂の不気味系女子だ。

「何か見通せないと思つたら……ウフフ、そういう事だつたのね」

激おこアリスや鼻血ドロテ、にんまりフリーデルとはまた違った恐怖を感じさせる霧囀りにナギトは足速に屋上を立ち去る事にした。

「待ちなさい……貴方、中間試験に絶望してるわね？」

しかし、ベリルのその言葉にナギトは驚愕した。どうしてわかる、と。

いや、普通に考えれば試験前の雨の日の放課後に屋上に来るやつなんて言えばよほど余裕があるか、むしろ諦めた猛者かだ。

それを鑑みるとナギトは霧囀気からして後者である事は明らか。勉強のし過ぎでそんな事にさえ頭が回らないナギトは、そのままベリルに頼み込んで試験問題を占つてもらつた。

つまり、試験の内容を教えてもらったのだ。

そして、試験当日。

ヤマカンの中ウー！と試験用紙を前にしてナギトは叫びたい気持ちになる。

ベリルに占つてもらった試験内容がピタリと当たり、問題がスラスラと解けるのだ。

やがて中間試験は終了し「どうだった？」なんて話になる。

クラスの秀才組——エマ、マキアス、ユーススの反応は三者三様……「まあまあ」と言ったり、それでも不安げだったり、興味なさげだったり。

ラインやアリサなど、普通に頭の良い連中も「まあまあ」と言っている。おそらくエマの謙遜のそれとは違い、本当にまあまあ……60〜80点くらいの自己評価なのだろう。

そしてフィーを筆頭とする馬鹿は「やつと解放された」とばかりに自由を満喫していた。言わずもがなナギトである。

そんなナギトにも「どうだった？」なんて話はくるわけで。

「ふっふっふ……よくぞ聞いてくれた。今回の試験……我が史上最高の出来である事は疑いようもなく………あえて言おう、勝った！第3章、完ッ！」

芝居がかったセリフと顔で、右手で天を指差して宣言するナギト。

それを見聞きしたⅦ組の一堂は息を、あるいは唾を飲み込む。

そしてリインは悲痛な表情で言った。

「なんだ、その………気はしつかり持てよ」

「慰めてんじゃねえっ！」

お決まりの流れであった。

☆★

自由行動日の朝、ひとまず自室で軽く伸びをしたナギトは「どうしようか」と本日の予定を考えてみる。

おそらくまた旧校舎の探索に付き合わされるだろう。そうなると夕刻前後は埋まるし………そういえば今週はまだフェンシング部に顔を出していない。フリーデルにとつ

捕まる前に自首した方が賢明だ。

時計を確認するとすでに10時半を回っていた。

「午後からでいいか」

とりあえず午前は逃げる事にした。

となると、午前がフリータイムとなる。当てもないがトリスタの町を見て回る事にした。

ブックストアとブティックを冷やかし、雑貨屋に足を運んだところでラウラと遭遇する。

「おっす、ラウラ」

「ナギトか。そなたも面白い物か？」

「ま、半分は冷やかしかな」

実を言うとナギトの懐はそこそこ暖かい。魔獣を倒した際に手に入る『セピス塊』を売って小遣い稼ぎしているのだ。

そのミラでクオーツを揃えたりしているものの、武装である太刀は粗雑ながらもゼムリアストーン製——本格的なメンテナンスは不要で、その分だけミラが浮いていた。

「ラウラは？なにやら難しい顔をしてたみたいだけれども」

「む、いや……」

商品棚の前で佇むラウラは眉間に皺を寄せるようにして目の前を睨みつけていた。その様子は入店して来たナギトにも気付かぬほどだった。

ラウラが言い淀んだのを見てナギトは質問を変える事にした。

「あ、そういえば部活は？」

「今日は休ませてもらっている」

ラウラは今度こそ視線を逸らした。

ナギトは心中で天を仰ぐ。こちらの話題の方が地雷であったと。

実は、先月のバリアハートでの実習でフィーが元“猟兵”である事が判明した。

猟兵とは高ランクの傭兵に与えられる別名であり、その名は死神と同義である。

元猟兵であるフィーと騎士道を重んじるラウラ。2人が相容れぬ人種である事は明らかであった。

しかし、だからこそ互いの弱点を補い合えるベストパートナーになれる予感もあるが、それも現状では望むべくもない。

とは言っても先月までのユーシスとマキアスのように険悪というわけでもなく、付き合いの浅いクラスメイトという風体である。

そんな感じで表立って喧嘩しているわけでもないため、仲を取り持つ…というようなムーブも難しいわけだ。

ナギトも何とかしたいとは思うものの、ユーシスらの時とは違い、リアットおらぁ！みたいなやり方も出来ずに参っている。

ラウラとフィーの2人は、これまで自ら歩んできた人生を肯定しているため、その点

において譲るつもりもないらしく。

しかしラウラは自分が年上のため、フィーに対して優しく接すべきと思っているようだが、どうも上手く動けずにいるみたいで、それが転じて「今日は部活休みます」となったんだろう。

地雷とわかったため、早々にこの話題から撤退したくなったナギトは「そうか」と流して、前の質問に戻る。

「んで、皺なんか寄せちゃってどうしたのよ？ 可愛い顔が台無しだぜ」

「からかうでない。…うん、では少し私の話をしよう」

ナギトの無理矢理な気遣いにラウラも気づいたらしく、薄く笑ってから話題の変化に乗った。

ラウラはそうして自らの感性が周りの女子とずれている事を語る。

例えば、服装。例えば、趣味。例えば、目標。

数えればキリがないらしく、「ここでひとつ女子らしいものを買っておきたい」との事だった。

それで、何をもって「女子らしい」とするかだが。

ナギトは商品棚の前に立たされる。

Q. この商品棚から女子らしいものはどれか、適当なものを選べ。

おかしいな、中間試験はもう終わったはずでは。

しかも参った事にこの設問についてはベリルのヤマカンから外れている。もはや直感で選ぶしかなかった。

そこでナギトが選び取ったのは愛らしい生物のぬいぐるみだった。

「このぬいぐるみなんか、どうだ。確か〴〵みっしい〴〵とかいうクロスベルのテーマパークのマスコットだったと思う」

「そうか……妙に心惹かれる造形だな」

どうやら正解だったらしく、ほつと一息、胸を撫で下ろす。その間にラウラも己の感性に従って物品をチョイスしていた。「これはどうだ？」とストラップをナギトに値踏

みしてもらおう。

「ドギというらしい」

「どうだい」

ナギトは嘖き出した。ラウラがひよいとつまみ上げたのは青髪の筋骨隆々の大男のストラップだったからだ。

明らかに女子らしいチョイスとは思えないそれにギャグだと思ったのだが、どうやら本気で選んでいたらしく「笑うでない！」と怒られる。

「ごめんごめん。じゃ、詫びの印にこれは俺からプレゼントしよう」

ナギトはそう言うのと、みっしいのぬいぐるみを買ってラウラに与えた。

「よいのか？」

「詫びと友情の印つてことで」

みつしいのぬいぐるみ代にしれつと友情まで上乘せして、ナギトは笑う。「感謝する」とラウラはぬいぐるみを抱いた。

それから2人は雑貨屋を出て別れる——かと思いきや、ナギトが「そういえば」とわざとらしく切り出した。

「今から昼飯、一緒にどうかな？」

自然体を装つてはいたが、視線は泳ぎ、声は震えていたようでもある。しかしそういった意味で鈍感なラウラにはまるで通じず、「うん」と許される。

「では私はこれを寮に置いてくるゆえ、少し待っていてくれ」

「ああ、じゃあ寮の前で待つよ」

ナギトとラウラはそうして第三学生寮まで共に歩き、ラウラが自室にぬいぐるみを置

いてくる間に昼食をどうするか考える。

と言つても、ここらへんで食べるどころと言えはキルシエが学生食堂しかないわけだが。

あるいは——、という所でラウラが寮から出てきた。その手にはなにやらバスケットがあり……

「お、どしたのそれ？」

「シャロンさんが持たせてくれてな。サンドイッチだそうだ」

「うっわ」

お見通しかよ、と続けそうになって言葉を飲み込む。

シャロン——シャロン・クルーガー。つい先日第三学生寮の管理人となったメイドであり、アリサの実家——つまりラインフォルトのグループの会長たるイリーナの付き人でもある人物だ。

ちなみにこのシャロンが寮の管理人になった際にアリサがラインフォルトの人間で

ある事も明かされる運びとなった。

シャロンだが、これまたナイスバディの可憐な淑女である。あわよくばお近づきになりたいナギトであつたが、本人の完璧な立ち居振る舞いや隙のなさ、あとアリサの視線が怖いのでやめました。

「どうやら昼飯を食べに何人か戻る事を想定されていたようだ」

前述の通り、シャロンは完璧なメイドである。

昼食の候補地として第三学生寮もあつたが、わざわざシャロンに作ってもらうのも悪いと考えたナギトだったのだが杞憂……というかむしろ思考を先読みされたみたいで怖い。

「なるほどな。それじゃあどこで食べようか？」

シャロンのスーパーメイドっぷりに戦慄しつつも提議。サンドイッチは駅から出てすぐの広場で摂る事となった。

話をした。他愛のない話を。どうでもいい話を。くだらない話を。おもしろおかしく、話をして。笑い合った。

やがてバスケットのサンドイッチも底をつき、30分に満たないランチデートも終了だ。

「では私はバスケットをシャロンさんに返してこよう。……こういった気遣いは女子らしいんじゃないか？」

言って、にやりとドヤ顔を決めるラウラ。確かに細やかな気遣いは女子力の高さが窺えるがドヤ顔で言う時点でお察しだ。『可愛いやつめ』とナギトは笑う。

「ああ、そうだな。悪いけど頼むわ」

名残惜しいが、あまり引き止める事もできないので「じゃあまた」と言つて踵を返した。

「そうだ、ナギト」と背を向けたナギトに向かってラウラが声をかけた。すぐさま振り向

くと、ラウラの真摯な視線が自らに差し向けられている事に気づく。

「このあと、時間があるなら一勝負どうだ？」

ケルディックでの初めての実習が終わった後、ラウラからはこうした修行のお誘いをたびたび受ける事となったナギト。

リインは付き合っているようだが、ナギトはのらりくらりと躲していた。

「んー、これから俺はフェンシング部に行くつもりだけど。お望みならそこで勝負してもいい」

ラウラとの勝負を避けていた理由を言語化したくはないナギトだが、あまり気乗りはしないものの今回は受けても良いと思った。

「……いや、やめておこう。そなたとはもつと…なんだ、言葉にできないな」

「ふっ……そうか。きつと俺も同じ気持ちだよ。そんならその機会はもつと然るべき時

までとつておこう」

「ああ、そうだな」とラウラが返事をして、今度こそ別れる。学院へ続く坂道を登るナギトはしめしめと独りごちる。

「フェンシング部で」なんて条件を出したのは、その隣が水泳部だからだ。ジムナジウムに居を構えるフェンシング部と水泳部にあまり交流がないとはいえ、休んだ部活の隣でハツスルするのは気まずいだろうと思つての提案だったのだ。

それでもラウラが来る可能性もあつたが、そこまでの覚悟・気分ではないと見ていた。

こうしてナギトはラウラの誘いを躲し、フェンシング部へと歩を進める事となる。そこにラウラと一勝負していた方がマシと思える地獄が待ち構えていると知りながら。

☆★

「おやおや」

学院の敷地に入ると、見覚えのあるブロンド美少女を発見した。ブリジットという貴

族生徒だ。その足はおそらくギムナジウムに向いており、行先は同じである。

「あら？」とブリジットが振り返り、ナギトを認めると距離を詰めて来た。

「あなたは確かⅦ組の……」

「ナギト・シユバルツァーといいます。……もしやもしや、またアランに用です?」

ナギトがそう言うのとブリジットは頬を染めつつごによごによと返事をした。

そうしてナギトとブリジットは共にフェンシング部——ギムナジウムに向かう事になったのだが。

ギムナジウムを前にドアを開こうとしたナギトだったが、突如そのドアが凄まじい勢いで開かれ、ナギトの顔を直撃した。

「!!」

危うく転ぶ程の衝撃だったが、幸いな事に鼻血なども出ていない。ブリジットも「大

丈夫？」と駆け寄り、

「すまない！……つて君は……、ブリジットも……？」

「タイミング悪すぎて草あー」

ギムナジウムから出てきたアランの姿を認めた。

顔を強打したせいでナギトのポケにもキレがなく、なりゆきを見届けるしかできない。

「アラン……？どうしたの？」

ブリジットはナギトの側で立ち上がり、いつもと違う様子のアランを不安気に見つめた。

「……ッ！ブリジットには関係ないだろ！放っておいてくれ！」

そんな視線に耐えきれなかったのか、アランはそのまま走り去って行ってしまった。

「なによ…アラン。私、あなたに何か酷い事した？」

ブリジットは泣き声を抑えたような声音でそう呟いた。

ナギトは途轍もなく居た堪れなくなり、立ち上がるとブリジットに一声だけかけてギムナジウムに入る事にした。

「その、あんまり気を落とさない方が。たぶん男のつまらない意地以上のものはないと思うし。…近いうちに俺からもアランとは話しとくから」

「それじゃ」と控えめに手を挙げてナギトはギムナジウムに姿を消す。ドアが閉じる間際に見えたブリジットの姿は悲しげなものだった。

と、そんな事がありつつもフェンシング部はいつも通り平常運転である。

ナギトが部室に入った時にはすでにパトリックとロギンスが対峙していた。ロギン

スには憤怒が宿っており、この場で何が起こったのか、予想に難くない。

「どうしたんすか、これ？」

それでもしれつと2人の対決を眺めるフリーデルに当然のように尋ねた。

「パトリックくんがアランくんを手抜きした上に圧勝しちゃってね」

「性格わっる」

「あなたが言えた口じゃないわね」

「解せぬ」などと呟いていると、戦況が動いた。

いつになく精彩を欠いたパトリックの剣戟の合間を塗ってロギンスが重い一撃を放つ。パトリックは何とか防御したが当たりどころが悪かったようで、そのままナギトの前まで吹き飛ばされてしまった。模擬戦はロギンスの勝ちだ。

「大丈夫か？」

息も荒く、立ち上がる事に時間をかけていたパトリックにナギトが手を貸そうとしたが――

「――触るな！」

ばちん、とその手を振り払われた。

「うエツ？」

まさかそんな事をされると思っていなかったナギトは驚きの声を漏らし、次いで激おこプリン丸と化した。

「どっせーい！」

ようやく立ち上がったパトリックの腹筋に右拳をねじ込み、下がった頭を小脇に抱えて寝業に移行。関節を決めて「おらおらおらおら！」と声を荒げる。

「い、いたっ!? やめっ! やめたまえ君!」

「ぶははははははは!」

そんな茶番を経てパトリックを解放。

パトリックは「僕を誰だと思ってる!? 覚えておきたまえ、ナギト・シユバルツァー!」
と言って大股でフエンシング部の部室を出て行った。

「んー? どったのかな、パトリックくんは」

その様子はこれまでの友情を感じさせるそれではなく、むしろ友誼を結ぶ前の貴族然としたものに戻っているように思えた。

「なにやらくだらない事で言い争いになった挙句、ボコボコにされたらしいわ」

「え、マジですか」

ナギトのそんな疑問に答えたのはフリーデルだった。パトリックをボコボコにできるなんて人物は学院でも限られるはずで、しかも語り口からしてその下手人はフリーデルではないらしい。

「マジよ」とナギトに合わせて答えたフリーデルに「詳細は？」と尋ねた。

「私との勝負が終わったら教えてあげるわ」

フリーデルもナギトの扱い方がわかってきたらしかった。

先月、先々月の実習で強敵と渡り合う事でナギトの实力は確実に向上している。今ならフリーデルさえ圧倒できるかもしれない——そう意気込んで一本勝負に臨んだのが1週間前。結果はボロ負け。

自分のイメージと実際の動きが噛み合わないのだ。集中できていないのか、あるいは模擬剣と太刀という得物の違いの差か。

どちらにせよ、このままではフリーデルに勝てないままだと思ったナギトは一つ手を打つ事にした。

「今日は、これでいいですか」

そう言つてナギトが抜いたのは太刀。フェンシング部の備品たる刺突剣や騎士剣の模造品ならぬナギト自身の得物。

「刃引きはしてあります」

それはナギトが余つたミラで買い叩いた太刀をジョルジュに加工してもらつたもの。

「あら、本気なのね。いいわよ」

言つて、舌舐めずり。フリーデルはあつさりと許可し、そしてロギンスの合図で一本勝負が始まつた。

初手はナギト。納刀した太刀に緋色の鬨気を纏わせる。

「緋空斬！」

横方向を大きくカバーする斬撃にフリーデルは屈んで対処。するだけでなく折り畳んだ膝を伸ばす勢いでナギトに肉薄。鋭い突きを放つ。

これは見えていたナギト、ヘッドスリップで躲すと一息でフリーデルの刃圏の外へバックステップ。

フリーデルは剣に鬨気を帯びさせるとナギトに追いつきすぎり剣戟を叩き込む。ナギトも同じように剣に鬨気を纏わせると迎撃、フリーデルの一撃を巻き取って体勢を崩す。そのまま蹴りを放ち、たたらを踏んだフリーデルに追撃する。

「っっー」

回転するようにして叩きつけられた太刀を、

「っっっかっっっっー」

ナギトがして見せたのと同じようにして、フリーデルは巻き上げた。

「天才かよっ!？」

ガラ空きのボディに柄尻がねじ込む。鳩尾に食い込んだそれによって呼吸が妨げられ、太刀を取りこぼす。

そのままドメを刺そうとするフリーデルの腕を掴むと背負い投げの要領で空中に投げ飛ばした。

手放した太刀を拾い上げると同時に脚力を爆発させてフリーデルに叩きつけた。

防いだものの、空中で疾風の勢いを殺し切れるはずもなく、フリーデルはそのまま部屋の壁に激突——

「甘いわ——」

——するわけもなく。くるりと宙返りをする。飛ばされた勢いを反発力に変えて部屋の壁を蹴ってナギトに迫る。

「——ねっ！」

そんな勢いや力の乗った一撃を防ぐ事も、受け流すだけの技量も未だナギトにはなく。そもそも避ける以外の選択肢を選んだ事自体が間違いだったわけで。

その代償は勝負の結果としてありありと刻まれたのだった。

☆★

「ふっひいー」

その後、勝負のダメ出しをフリーデルから喰らったりロギンスと勝負をしてからナギトはフェンシング部を出た。

いた時間は1時間にも満たないが、とんでもなく疲れた気がする。わけのわからない吐息が漏れるのも仕方なからうというもの。

「お、後輩じゃねーか。探したぜ」

「そこに現れたるはクロウ・アームブラスト！チャラついた先輩だアー！」

「……疲れてるみたいだな。…ちよつと用事があつたんだが、またの機会でいいや」

「待て待て待て待てい！こちとら正気ですとも、クロウ先輩！」

「正気のはやつはさつきみたいだなテンション上がった実況じみた事はやらねーが」とクロウのツツコミを頂いた所で用件とやらを聞く。

「いつぞや話した導力バイク、乗せてやれる機会がきたぜ」

「どうやらクロウがナギトを探していたらしい理由は、先月の『バイクに乗せる』という約束を果たすためらしかった。

「リインは50ミラをパクられたと言っていたものの、そういう所は律儀なのだろうか。」

「などと考えつつ、クロウと共にトリスタの町を出て街道に入ると、そこにはリインとトワ、ジョルジュ、それから学院で何度か見かけたライダースーツを着こなす麗人がい

た。

彼女は「君とはまだ自己紹介してなかったね」と言うので「アンゼリカ・ログナー」と名乗った。

「ああ、お噂はかねがね。ナギト・シユバルツァーです。よろしくお願いします」

「噂かい。まったく、人気者はつらいな」

「パトリックをボコボコにしたって聞きました」

やれやれ、といった風体だったアンゼリカはガックシと肩を落とした。

フリーデルから聞いた話だ。

学院で派閥争いごっこをしているパトリックだが、それによって怪我人が出たらしく、それがアンゼリカの「ハニー」女子生徒の大半はアンゼリカの「ハニー」であるだったらしく、詰問したパトリックに反省の色なしと見てボッコボッコにしたらしい。

これがおそろしいのは「らしい」の部分が多い事だ。皆がアンゼリカの不況を買わ

ないように事実ではなく噂として留めておきたいからだろう。

ログナーは四大名門の一角「ログナー侯爵家」なのだから是非もなし、と言った所である。

トワ、ジョルジュ、クロウ、アンゼリカ。この4人の面子をどこかで見た事があるな、なんて思いつつ導力バイクについての説明を受ける。

まずリインが試乗する事になり、上手く発進していく。あつという間に豆粒大になっていくリイン。それを見送る中で「あ」とナギトは思い出した。

「どっかで見た事あると思ったら、オリエンテーリングの時に旧校舎を見下ろしてた4人組じゃないっすか。どんな関係なんですか？」

「ハハ、そういやお前は気づいてたっけな」

「聞きたいのかい？私とトワの馴れ初めをっ！」

「やめなさい、アン」

クロウはそう言って笑い、アンゼリカは冗談半分に声のトーンを上げ、ジオルジュがそれを制する。

「私たちはね、一年次に翌年に設立されるクラスの試験運用のために集められた4人なんだ」

一拍おいてトワが答えた。

「そのクラスというと、Ⅶ組です？」

「そう。こう見えて先輩なんだよ！」

えっへん、とトワは胸を張る。初めて会った時は飛び級の天才かと思ったが、普通に年上の天才だった。実際にはナギトが何歳かわからないため年上年下がわかったものじゃないが。

「ははー！」と偉大な先輩たるトワに傳き、逆に恐縮されている内にリインが帰ってくる。

「なにしてるんだナギト。トワ会長に迷惑をかけるんじゃないぞ」

「いやいや、偉大なる大先輩に敬意を払ってた所なんだよ」

そんなやり取りを交わし、今度はナギトがバイクに乗る番だ。

説明はちゃんと聞いていたためちゃんと発進する事ができ、景色が勢いよく通り過ぎて行く。

「おー、なるほどなー。こりや便利だ」

初夏の暑さには心地良い風。このままバイクを駆って帝都まで遊びに行きたいくらいだ。

ある程度進んだ所でUターンし、クロウらの場所に戻る。

「どうだったよ、コイツの乗り心地は？」

「風が気持ちいいですね。冬だと寒そうですが。あと便利」

クロウは苦笑しつつ「そう言ってもらえるなら何よりだぜ」なんてバイクを受け取る。その後、技術棟に戻るとより細かな感想などを聞かれる事となった。

話を聞くと、どうやら導力バイクの試乗は生徒会からラインに回された依頼のようで、これにて達成という事らしい。

それからナギトはラインに連れられるままに旧校舎探索に付き合う事になったとき。

☆★

旧校舎では地下第三層が開放されていた。昇降機に乗って第三層まで行き、扉をくぐって探索開始だ。

地下第一層、第二層より確実に魔獣も強くなっており、それは最奥に潜む魔物についても同じだ。

悪魔のような見た目をした魔物を相手にⅦ組は総力戦を強いられた。

「フィーー！」

「任せて」

まずナギトの合図に合わせてフィーが仕掛ける。目にも止まらぬ乱撃に魔物は怯む。

「緋空十字斬！」

そこにナギトは緋空斬を十字に放つという新技を何気に披露しつつ、今度はガイウスに呼びかける。

「くらえっ！」

フィー、ナギトの連携で隙を晒した魔物にガイウスの力強い槍撃が突き立てられる。魔物は光を拡散するようにして消滅していった。

そうしてナギトらが一体を倒す間に残る2体もリインら7人で討伐しており、今月の旧校舎探索もお開きとなった。

リインが「気づいた事がある」と言い、旧校舎を出るとそれを説明した。

一つ、入口に必ず「扉」がある事。

一つ、終点で必ず強力な魔獣と遭遇する事。

一つ、1ヶ月毎に行ける階層が増えている事。

以上の3点をリインは「法則性」と言った。

エリオットは「何かに試されているみたい」だなんていい、エマは考え込むように視線を落とす。

ひとまず探索を続けるしかない…と結論した所でナギトに話が振られた。

「ナギトは何か気づいた事はないか？」

「うんにゃ。おおまかにはリインと同じさ。感想はエリオットと一緒。それ以外は—

—エマ。物憂げな顔をしてるな？何か知っている事でもあるのか？」

ゆつくりと、確信めいた声音でナギトは話をエマに向けた。エマの表情、沈黙がやけ

に気になる。——否、これは「確信」と言ってもいい。

エマはこの旧校舎について何か知っている。そんな天啓を得た気がしたが。

「いいえ。申し訳ないのですが、何も」

エマはそれを否定した。少しだけ強張った気がしたが、証拠もなくそこを追及しても得られるものは何もないので「そうか。すまんね」と引き下がっておく。

それからややあつて解散する事になり、ナギトはリインと軽くトリスタを回つてから寮に戻る事にした。

そして、寮に入る手前でくたくたになったサラと遭遇した。なにやらぶつくさ言っているサラを見てリインが「デートは上手くいかなかったみたいですね」なんて言う。

「え？昨夜から見かけなかったのってそういう？」

そんなリインとナギトの反応を見て「そうそう」と取り繕つてサラは「オジサマが情熱的でね」みたいに語り出す。

とんでもなく胡散臭いが、ナギトはふと真面目な眼差しをサラに向けて、

「サラ……寝たのか……俺以外のやつと……」

「そもそもアンタと寝た事ないってーの！ちよくちよくそう言った冗談挟むの好きよね、アンタも。まったく……そんなセリフは好きな子にとっておきなさい」

「さっきのは冗談ですけど、俺はサラ教官の事好きですよ」

真面目（演技）に続く真面目（ガチ）な雰囲気、言葉差し向けられたサラはもちろん横で聞いていたリインまでフリーズする。

これには歴戦のサラ・バレストアインと言えど冷静を取り戻すのに一呼吸以上を要した。

「でもアンタ、本命にはそんな事言えない子よね」

「ぐっはー！」

カウンターはクリーンヒットである。

そんな感じでナギトがしつかり言い負かされた所で、リインが話題を変える。それは第三学生寮に管理人が来たという話だ。

どうやらサラは管理人が来るという事を知っていたらしく、しかもそれがアリサの実家であるラインフォルト家のメイドである事も承知済みという担任教官らしい有能ぶりだ。

しかし、その人物がシャロン・クルーガーであるという事は知らなかったらしく。初対面のはずなのに互いにフルネームで呼び合って挨拶していたりした。

その雰囲気になギトは爆笑。「殺伐うー」とこぼしながら、自室のポストを探る。そこにはエリゼからの手紙があった。

「おいリイン、エリゼからの手紙があるぞ」

「え、本当か?」

あのリイン大好きなエリゼの事だからナギトに手紙を送ってリインに送らないわけがないので、おそらく本当。同じようにリインもポストを探るとエリゼからの手紙を探り当てたようだった。

夕食まではもう少し時間がかかるという事で、ナギトとリインは自室に戻ってエリゼからの手紙を読む事にした。

階段を登る手前で、シャロンを威嚇していたサラが「ナギト」と呼び止めた。

「夕食後、私の部屋に來なさい」

「え!?! ついにお誘い!?!」

「違うわよー!」といつものやり取りをして終了。高笑いしてから自室に戻る。

エリゼからの手紙には当たり前障りのない事が書いてあった。

学生生活が充実している事などがそれに当たる。その他にはリインの近況について答えよ、みたいなどう考えても地雷極まる内容があったりした。

あとは実は立腹しているらしい事も。

「あれ、まともな内容の方が少ないな」

手紙の内容の半分くらいはリインへの心配と愚痴であった。

想い人が義兄で、しかも人たらしだと心労が増えるんだろなあ、と他人事のようにナギトは微笑む。

しかしリインにアクションがなければ来月にもトリスタに來る旨が書いてあったの

で、その時に怒られないように、手紙にはしつかりとラインのたらしつぷりとナギトの火消しつぷりを書いて返事をする事にした。

やがてシャロンの作った夕食に舌鼓を打ち、その後約束通りサラの部屋に突撃する。

「き、ききました…」

ノック、返事を受けて入室。椅子に座るサラの前で立ち止まり、もじもじと前髪をいじってみる。

「アンタ、そろそろ記憶はどうなのよ？」

「いきなり本題すね。…まあぼちぼちでんなあ」

サラはナギトのボケに付き合う様子はなく、いきなり本題を投げかけた。

「……先月と先々月、結社の《怪盗紳士》を名乗る男と接触したそうね？」

「と言つても先々月はバトル、先月は質疑応答です。……学院側が心配するような事はなにもありませんよ」

「ナギト——」

「なんて、今のセリフはほほほほハツタリですよ」

少々効き過ぎたようですが、とは続けない。ピリついたサラの雰囲気を感じ取ったからだ。

「——はあ。……つたく、アンタも大概にしないとその内痛い目見るわよ？」

やがてサラの雰囲気もいつものそれに戻り、ナギトにアドバイスを与えた。

「はは、そうですね。気をつけます」

ナギトは笑顔で。後にサラが語るには「胡散臭い笑顔」で答え、最初の質問に戻る。

「記憶についてはほとんど何も。たまりにそれっぽい映像が脳内で再生されるんですけどね…どうにも現実感がなくて」

「ふーん、そうなのね。ま、また何かわかったら連絡しなさい。もう戻っていいわよ」

ナギトが真面目に答えると、サラは「ふーん」などと受け取ってから自分の机に向き直った。

「ええー、ここまで話したのに何もご褒美なしですかあ！何か色っぽいやつくださいよー」

もちろんこれも、冗談でしかないのだが。そんなサラとのやり取りが心地よくて、ついねだってしまうのだ。

「そーいえばオリエンテーリングの時のご褒美ももらってなかったなー！」

「ほっぺにチューしてあげるわよ」というやつだ。
そんな感じで上体をゆすつていたら、

「ああもう、うっさいわね！」

サラは机の片隅にあつた酒瓶（なんで常備してあるんだ）を煽り、ナギトにズカズカと近づくと――

「――んちゅ」

大胆にも顔を掴んで固定すると。

「――んう!?!」

――そのまま口づけして酒をナギトの口内に押し流したのだ。

繋がった唇から黄金色の液体が顎を伝って床に跳ねる。あまりの衝撃にナギトは動けずにいて。

3秒にも満たないそれで度のきついアルコールを嚙下すると、上気した顔が離れていく。

「なっ、ななな何すんですかサラ教官!？」

ようやく、正気に戻る。

入学以来、初めて見せるナギトの本気の焦り顔にサラはしてやったりと笑い。

「なになってご褒美よ。アンタからねだったんでしょーが」

「ぐう…それは、そうですが…!？」

まさか本気ですかあ!?!と言いたい。結局 “どの口で” という風に帰結するため言えるわけもないが。

「さ、もう帰りなさいナギト。今日のことは他言するんじゃないわよ」

「記憶の奥底に封印します」

「は、そりゃいいわね」

ナギトの記憶喪失にかけたジョークに軽快に笑うと、今度こそサラは机に広げた書類に向き直った。

「失礼しました」とナギトが退室する直前、ドアの隙間からサラが声をかけた。

「いくら冗談でもね、こちとら女盛りなの。そんなに誘われると、こっちも熱くなるってもんよ」

あくまで静かに、振り返らず言うサラに何も言葉を返す事はできず、ナギトは軽く会釈するとドアを閉めた。

これはガチ反省である。

その後、部屋でサラが悶える事になるなど、ナギトは知る由もない。

リアル

中間試験の結果が開示された。

わざわざ試験の結果を目に見える場所に張り出すとは、さすが帝国流と言わべきか。ナギトのように、これで結果が悪く、心が弱ければ1分は寝込む所だ。

しかし今回ばかりはそうはいかぬ。何せベリルの占ってもらったヤマカンがピッタリだったのだ。

楽しみにして開示してあるそれを見た。

1位 エマ・ミルステイン

1位 マキアス・レーグニツ

3位 ユーシス・アルバレア

4位 ナギト・シュバルツァー

5位 パトリック・ハイアームズ

なんとナギトは4位に輝いている。

マキアス是有言実行というところか、ちゃんとエマに負けてない。ユーシスについては必死こいて勉強した様子もなく3位、頭の出来が違うのだろう。5位はパトリックで基礎学力は確かと言える、ナギトがいなければ4位だったのは間違いない。

「ふっふっふ……フウーハハハ！俺だ、俺が4位のナギト・シユバルツァー様だあ〜！」

「ナギト、うるさい」

「あ、すみません」

張り紙の前ではしゃいでいたらフィーに怒られた。当のフィーはエマとのお勉強会が効いたのか、普段の成績より上位の結果を残していた。

そして、クラスごとの順位では我らⅦ組が1位だった。個人で1位から4位まで独占してるわけだから、当然とも言える。

それでパトリックが「I組は人数が多いからそのせいで負けたのだ」とか云々負け惜しみを言いに来たのだが「人数とか言い出したらこっちは少ないから1人でも点数低

いのがいるとそれだけでぐっつと平均落ちるわけだが？」と真つ当極まる文句で追い払っておいた。

中間試験の喜びを胸に仕舞い、実技テストへ向かう。

途中で。

スーツをびつちりと着込んだ神経質そうなヒゲ——ハインリツヒ教頭とすれ違う。

そのハインリツヒが小脇に抱えた教科書や筆箱の隙間から、ひらりと何かが滑り落ちた。

見ると、写真のようだった。

「教頭、何か落としましたし——」

裏側で落ちたそれを拾い上げて、しっかりと表面……その写真を見てみる。

そこに写っていたのはクロスベルはアルカンシエルが《月の姫》リーシャ・マオの姿

だった。

☆★

——これは記憶。

「まさか、伝説の《銀》殿とこうして肩を並べて歩く事になろうとは」

狭い、裏路地。

歩く、2人の男。

「ふふ……私も今、この共和国で話題の《剣鬼》殿と目的を同じにしているとは夢にも思わなんだ」

片や《剣鬼》。

片や《銀》。

今やカルバード共和国の裏側で最もホットな話題として知られる正体不明の剣客と、東方人街でまことしやかに囁かれる不老不死とも称される伝説の凶手。

「…それで、救出対象は《銀》殿の娘さんだったかな」

「否。その友人…時折遊ぶ子供らよ。人攫いか…趣味の悪い教団の残党でなければ良いのだが」

——暗転。

積まれたコンテナの上を駆け抜ける。

その最奥部に、赤く塗れた少女の姿を視認。

少女の手が素早く振り抜かれた。

次の瞬間、眼前にあったのはクナイに括り付けられた符だ。
太刀で弾く。背後で符が爆発する。

迫る少女。繰り出される貫手を避け、防ぎ——掴み取る。

「——ッ!？」

「硬気功か。速度も合格点だが」

蹴りが少女の鳩尾に突き刺さる。「うつ」と苦悶と共に隙を晒した少女を床にぶん投げた。

辛うじて受け身をとった少女だが、それに意識が向いた時点で勝敗は決していた。

「はい詰み」

す、と眼前に突きつけられた太刀を見て敗北と死を悟る。

しかし、その奥から現れた人影を見て、少女——リーシャは息を飲んだ。

「お父さん？」

「うむ、無事なようで何より」

《剣鬼》は嘆息しつつも太刀を引き、「見てたなら止めてくださいよ」なんて言う。

「ふ。噂の《剣鬼》殿と比較し我が娘の力量を測っておきたかったゆえ。許されよ」

《剣鬼》は太刀を鞘に納めつつ肩を竦めた。

この年頃で、これだけの力量があるのなら、身体の完成された数年後には、いったいどれほど隔絶した実力者になっている事か。

「末恐ろしいな……」

——リーシャ・マオ。

その名を胸に刻みつける。

——これは、失われた記憶。



「——あ」

唐突に、視界が切り替わった。

「——ギト？ ナギト、どうした!？」

目の前には少年の心配するような顔。
力が抜け落ちていく。記憶が塗り変わっていく。

「——ん？ あ、あー……リイ、ン……？」

自分がナギト・シユバルツァーである事を思い出す。眼前の少年が自身の義兄弟たる
リイン・シユバルツァーだと理解する。

ここがツールズ士官学院だということを記憶から掘り起こした。

「ナギト、どうしたんだいきなり…座り込んだりして」

「……ああ、いや。なんだ……」

言葉に詰まる。さっきの光景は間違いなく自身の記憶であるという確信があった。あの生々しい体感がそれを納得させる。

しかしそれを説明すべきか判断がつかない。……否。正直な話、自分の《剣鬼》である過去をリインに知られたいとは思わない。

「なんでもない」と告げて立ち上がる。ふらつく事もなくしつかりと立つ事ができた。

「それは？」

リインの視線が垂れ下がったナギトの手に向けられている。

ナギトはそれを持ち上げて、その薄っぺらな紙がプロマイドであると理解した。

——リーシャ・マオ

共和国は東方人街の伝説。《銀》の継承者。今はクロスベルで人生を謳歌中か。

このブロマイドこそがナギトに白昼夢を見させた——リアルな夢を追憶させたものだ。

「教頭！」

すでに遠くなりつつあった教頭ハインリツヒの背中に呼びかける。際どい衣装の《月の姫》リーシャのブロマイドを大手で振ると、ハインリツヒは青ざめた顔でナギトに詰め寄ってきた。

「落としましたよ、ハインリツヒ教頭」

満面の笑みで、ブロマイドを手渡す。

「あ、ああ。拾ってもらったようですまないね」

「いいえ。……しかしさすがは教頭。いい趣味をお持ちのようで。この場には理解できない者が多いと思うので、性癖を疑われるかもですが」

「性へ——ッ！」

ナギトと脅迫のような忠告にハインリツヒは大声を出しかけるも、それこそ注目を浴びかねないため自粛した。

失言の証にあわや口を押さえつつあったハインリツヒにナギトは肩をすくめてみせる。

「では」と言つてそのままナギトとリインはこの場を離れる事にした。早くグラウンドに行かなければ実技テストに遅れそうだ。

☆★

結果として、ナギトは実技テストに遅れた。

というのも、大事をとって保健室に行っていたからだ。ベアトリクス教官には「いたって健康」と診断されて保健室を追い出される。

その間に、リーシャの写真を見てフラッシュバック——否、追体験した記憶について整理した。

まずあれは記憶を失う前のナギトが体験した事実である事。加えてナギトが《剣鬼》である事が確定した。

次に《剣鬼》は《銀》と何らかの関係をもっていた事。追体験での発言とブルブランの言葉から、後ろ暗い背景がある者同士——というのがありそうな線だ。

以上2点がわかった事。

そして新たに謎も増えた。

なぜ今回の記憶についてだけ、これまでの曖昧な光景やフラッシュバックのような断片ではなく、追体験のような形をとったかだ。

これまでに《剣鬼》に会った事があるらしい人物——ブルブランだが——とナギトが邂逅したとしても「なんか会ったことあるかも？」くらいの感覚だった。

あとはクロウと会った時も、かなり曖昧なビジョンが見えた気がする。こちらは自身

の記憶であるという確信はないのだが……

加えて、クロウもこのトールズ士官学院で初めてナギトに会ったような対応だった。含みのある視線をたびたび送られてはいるものの。

こうなったらこつちから尋ねてみようか。

“どこかで会ったことある？”なんて感じで。

「ナンパか」

自身の思考にそうしたツツコミを入れていると、グラウンドの方からパトリックがずんずんと歩いて来ているのが見えた。

「おうい！パトリックう！」

友達スマイルを浮かべつつぶんぶんと手を振ってやる。パトリックは気づいたが少し戸惑ったあと、顔を逸らして中庭の方に方向転換して行った。

ははーん、さては。

自習なのをいい事にⅦ組の実技テストに乱入した挙句コテンパンにされ、さらには言い負かされた後と見える。

「だからなんで俺はそういうことを確信してんだっての」

「はあ」とため息を吐きつつグラウンドに到着。

遅れた詫びの印として、直立不動、敬礼の姿勢を保ったままサラに向き直った。

「お疲れ様です、サラ教官！ ナギト・シユバルツァー、ただいま参上いたしました！」

「はいはい、じゃアンタはラウラとフィーと組んでテストね」

「えっ、デジマ？」

「マジよ」

渾身のお滑りボケを流された挙句、地獄のような面子で実技テストに挑む事となっ

た。

「よろぴく〜」

「ん」

「…よろしく頼む」

三者三様、挨拶を交わして戦術殻へと武器を構える。

サラの合図で実技テストは開始された。

「んじゃまずは様子見の、疾風！」

ゆらり、ゆつくりと歩を進めたかと思えば、次の瞬間にはナギトは戦術殻に肉薄している。

すれ違い様の斬撃を叩き込むが、戦術殻の予想外の反応速度により、反撃を躲しつづとなったためダメージは低い。

「やっ」

次いでフィーが砂塵を突破して戦術殻に切り込んだ。素早い連撃でいくつか傷を刻むと、反撃を喰らう前に後方に跳ぶ。しかも銃の乱射付きだ。

そこにラウラも突撃するが、戦術殻はフィーへの反撃動作中で、そこに突っ込む形となる。巻き上がった砂塵のせいでラウラにはそれが見えていなかった。

「馬鹿、ラウラっ！」

馬鹿は俺だ、と瞬間自省する。 “下がれ” と言えば良かったのだ。

自分の動きに自信がなく、ナギトとフィーに続けて “とりあえず” 攻撃していたラウラはそれで動きを止めてしまった。

それは致命的な隙でもあったが、止まったおかげか戦術殻の一撃は空振りに終わる。しかし続く左腕の攻撃がラウラに迫った。

間に合う。ラウラの前で戦術殻の殴打を防いだナギトは身を沈めると、戦術殻を蹴り

打ち上げた。

「フイー！」

名前を呼ぶと意図が伝わったようで、フイーは打ち上げられた戦術殻に銃撃を浴びせる。

やがて戦術殻は地に落ちて、再び砂塵を巻き上げる。今度は攻撃に移る事はせず離れて様子を窺う3人。

砂塵を切り裂いて、ビームのような剣がナギトの鼻先を掠めていった。

「下がれ！ ラウラ、地を抉る一撃を！」

指示を出しつつ後退。ラウラは退いてから大剣を地面に振り下ろす。地裂斬が真っ直ぐに進み砂塵と戦術殻を吹き飛ばした。

「決める」

言つて、ファイヤーが何かを投げたのがわかった。それが何なのか理解して。それに背を向ける形でラウラの前に立ち塞がった。

刹那、閃光が炸裂する。

ファイヤーが投げたのはフラッシュグレネードだ。

戦術リンクで繋がっているためナギトはグレネードを投げる動作から何が起きるのか理解したが、同じく戦術リンクで繋がっているラウラは動作だけでは理解できず突撃する所だった。

意思疎通ができていない状態で使うフラッシュグレネードは諸刃の剣だ。今のタイミングであればラウラの視界が灼かれていた可能性があった。

ナギトは背を向ける事で。ラウラはナギトに守られる形でフラッシュグレネードの光から視覚を守った。

その間にファイヤーは駆けて戦術殻にダメージを与えていく。斬撃、銃撃を組み合わせた立体的な動きで。

そのアクションはさすが猟兵と言うべき殲滅の意志の現出。

しかしそのアクションも質を見極められたのか、戦術殻のカウンターによって中断する事になる。

「好機だ……！」

「おう！」

ラウラの言葉にナギトも同意する。戦術殻はファイへの対応で手一杯だったのだ。

「まずは俺が！」

太刀を二度振る。放たれた斬撃は横方向と縦方向を大きくカバーする緋色。

「緋空十字斬！」

その威力に戦術殻は不意を突かれた事もあり、完全に体勢を崩した。

「終わりだ！獅子連爪!!」

そこに飛び上がったラウラが剛剣を構えて落下する。凄まじい威力の攻撃に戦術殻は沈黙したのだった。

その後、ユーシス、アリサ、エマの3人による実技テストは戦術リンクを上手く活用し、苦戦もせずに終了。

ナギト、ラウラ、フィーというVII組でもトップクラスの戦闘力を誇る3人より、よほど良い成績を収めたのだ。

やっぱり連携って大事だなあ、とナギトはしみじみ思うのだった。

☆★

6月の特別実習、ナギトの所属するA班の面子はリイン、ガイウス、ユーシス、アリサ、エマにナギトを加えた6人。行き先はガイウスの故郷であるノルド高原。実習中はガイウスの実家に世話になるといふ話だ。

そして言わずと知れたツールズ士官学院の創設者、ドライケルス大帝の拳兵地であり

「——列車で8時間か……」

すつごく遠い場所である。

特別実習1日目、寮の一階で集合したA班はひとまずの会話を終えて駅に向かう事となる。

トリスタ駅ではすでにB班が揃っていた。いくつか言葉を交わしてから切符を買う流れになる——のだが。

「うん？」

みんなの視線が自然とナギトに集まった。ナギトはそれに眉を上げて何事かと問いかける構え。

「いや…何かB班に言う事とかってないのか？」

視線の意図を理解できないナギトにリインが説明する。そのB班とやらが示すのは

ラウラとフィーに他ならない。何せ実技テストで組んだ間柄だ。連携の悪さは承知済みというもの。

ぶつちやけた話、アドバイスは？という事である。

「うん、まあ…アレだ。お前ら…ここでもアレならマジでアレだからな!」

「アレアレ言い過ぎ」

「ずいぶん抽象的だな」

「くうつ」とナギトが唸る。こんな所ばかり息びつたりのラウラとフィーである。

そんな様子にⅦ組のメンバーはくすりと笑う。ナギトもそれを見て淡く笑むのだ。

そのナギトの在り方をリインは“笑い物になる事で意志の統一、絆の促進”を狙ったものであると思いかけたが、実際には“何も考えてないのを誤魔化すための微笑”と解釈する事にした。

そうして少しだけ雰囲気になった所で切符を購入、列車に乗り込む。帝都へイ

ムダルでA班はルーレ行きの列車に乗り換えだ。

シャロンが持たせてくれた軽食に舌鼓を打ちつつ談笑。実習地ノルドの説明をガイウスが行った。

いくつものトンネルを越えた先にある北の山々に囲まれた広々とした草原、帝国軍基地など以外は「ノルドの民」しかないのだとか。なんなら人より羊が多いなどという話も。

しかもノルドは羊だけでなく軍馬の産地でもあり、エレボニア帝国の紋章である「黄金の軍馬」もこのノルド産のものがモチーフだった、といううちくがユーシスから放たれる。

そういつた話を終えて、恒例のブレードタイムとなる。言うまでもなくナギトが全勝し。

ルーレに到着した。

ここで貨物路線に乗り換えてノルド高原を目指す事になるのだが、ここぞでなにか腹をもたせるものを買っておくか：なんて話をしていると、どこからともなくシャロンが現れた。

しかもどうやら昼食を作ってきてくれていた。

朝早くに出発したA班を待ち構えられたタネは、帝都から飛空艇でルーレにひとつ飛びしたかららしい。昼食はその飛空艇の厨房を借りたのだとか。

そうこう話している内に、金髪の女性が現れた。いかにもキャリアアウーマン風の彼女はイリーナ・ラインフォルト。何を隠そうアリサの実母であり、ラインフォルトグループの会長、それに加えてトールズ士官学院の常任理事の一人だという事も明かされた。

イリーナは挨拶できるとシャロンを連れてさっさと行ってしまった。
それにアリサは憤慨するが、

「それでも挨拶をしていただけマシというものだろう」

とユーススが言う。それは明らかに先月の実習で挨拶すらしなかったユーススの父、アルバレア公爵を批判していた。

その後、A班は貨物列車に乗り込んでノルド高原へ行く事になる。

まだぷりぷり怒っているアリサ。“自立したい”なんてケルディックの実習で言っていたが、そう意気込んで入学した士官学院は母親が常任理事。学費なども当然親持ちであり、

「手のひらの上でサンバ踊ってた気分だろ？」

なんて煽ったら普通に平手打ちを喰らいました。

そんなコントがありつつも比較的穏やかに会話は進み、ノルド高原に到着した。

貨物列車が止まったのはゼンダー門。普通の列車は走っておらず、この帝国軍基地まで物資を輸送するための貨物線にA班は同乗させてもらっていたのだ。

ゼンダー門では、その指揮官である中將が出迎えてくれた。どうやらガイウスの知己らしく親密そうに振る舞っている。

短く切った髪に、右眼を覆い隠した眼帯。服の上からでもわかる、筋肉の鎧を纏った体躯。

あらゆる戦場を体験してきたであろう、壮年の男がそこに立っていた。

——ゼクス・ヴァンダール

皇族の守護者であるヴァンダール一族の猛者であり帝国正規軍でも5指に入る名將《隻眼のゼクス》。

ガイウスと知り合った経緯は、高原に赴任したばかりのゼクスが魔獣に囲まれた際に

ガイウスに助けられた時からだという。その縁でガイウスを士官学院に推薦したのだとも。

その後、ゼクスが準備してくれた馬に乗ってノルドの集落を目指す事になったのだが。

用意された馬は4匹。馬に乗れる人物と、馬にかかる負担を考えて。

ガイウス、ユーシスは1人で。

ラインと一緒にエマ。

アリサと一緒にナギトが乗る事になった。

ちなみにナギトは馬には乗れないのでアリサの後ろに乗る事になる。

シユバルツアー家じゃ剣術と勉強に勤しみ、馬に触れる機会もなく、ツールズで馬術部に入ろうかと覚えればユーシスに拒絶される始末。

「これは仕方ないね!」と宣ったナギトを睨むアリサの目つきと言ったらそれはもう、恐怖しましたとも。

「変な所を触ったら落とすからね」

「それはフリですな。わかります」

そんなやり取りを経て乗馬。目的地である集落へと向かう。行きすがら、ガイウスにノルド高原のスポット紹介をされる。

この高原北部では、古の精霊信仰の名残である石柱群や帝国軍の監視塔などがそれに当たる。

その途中で、アリサの腰に当てていた手を、少し上にズラただけで肘鉄が飛んできた。今後はこんな事はしないと誓います。

集落に着くとガイウスの家族が出迎えてくれて、そのまま夕餉を摂ることになった。

ノルドの自然の豊かさを感じさせる食事に舌鼓を打ち、ガイウスの父でありノルドの族長でもあるラカンと少し話す事となった。

それはノルドと帝国の友好の歴史から。

すなわち、エレボニア帝国中興の祖たるドライケルス大帝と共に獅子戦役を駆け抜けたノルドの民の友情から続くものであると。

次にノルド高原の南東に進出してきたカルバード共和国について。

東の部族は交流しているそうだが、エレボニア帝国とカルバード共和国は長年の宿

敵。

そのせいで少しばかり緊張状態らしい。行きがけに見た監視塔も共和国の基地を監視するためのものだとか。

しかし、さほど心配する必要はなく、特別実習に集中して良いとラカンは言ってくれた。

やがて就寝の時間となり、A班は全員同じゲルで寝る事となる。

アリサも初回の実習以来、男女同室で寝る事に抵抗を薄れさせつつあったが、殊更ナギトを睨みつけてから床に入った。

ナギトは馬上で肘鉄を喰らった件もあり、アリサが怖いため夜這いの決行は中止する事に。

移動疲れもあったためか、すぐに眠りに落ちたのだった。

安心があつた。確信があつた。

例え、この実習で何が起こったとしても。

帝国と共和国の戦争なんて起きるわけがないと。そんなものは、回避されるに決まっていると。

雪辱戦・鬼と狼

ノルドの民の朝は早い。それはきつと遊牧民であるからとか、娯楽が少ないからという理由が一助である事は間違いない。

下世話な事を言うのと、夜は暗いし娯楽が少ないからガイウスも兄弟が多いのだろう。

空が白み始める時間に起床すると、制服に着替えてウオーゼル宅のゲルに向かう。朝餉を食しつつ談笑した後、午前の分の実習課題を受け取る。

その後、実習に取り掛かる前に集落を見て回る事にした。長老宅や薬師に挨拶し、シヨツプに立ち寄る。

「へえ、これはお土産にいいかもな」

リインはノルドの装飾品のようなものをつまみあげるとそう言った。

「誰への贈り物かしら？」

目ざとく、と言うか半ば威圧的にアリサが聞くと、リインは「妹に」だと答える。

リインの妹——エリゼ・シユバルツァーは本人にこそ気づかれていないものの、リインの事を好いている。帰郷の際に会った時にそれを暴いたら引つ叩かれそうな勢いで睨みつけられた。

それでもリインだけでなくナギトにも手紙を出すあたり、しつかりした妹だという認識がナギトにはある。

それに対してリインは兄でありつつも、どこか他人として一線を引いている。……より正確に表現するなら、自分は養子なのだから、トールズを卒業したらシユバルツァー家を出るべき。なんて考えが頭にあるのだ。

「確かにお土産に良さそうだな」

とリインの言葉に追従する。

しかしリインがエリゼに買うなら、ナギトまでそうする必要は低く思えた。

同じ意匠のノルドのお土産2つはさすがに持て余すだろうし、なにより、リインから

のお土産」という特別感が薄れてしまうだろう。

「じゃあ俺もラ——」

“ラウラにでも買っていくか”と、言いかけた。

“なんで?”なんて表面的な疑問でしかない。誤魔化しはいつまでも続かない。

咄嗟に青髪の少女の姿が思い浮かんだのは——、ラウラの喜ぶ顔が見たいと思ったのは。

自分の心を騙し続けるのもいい加減限界らしい。

ナギトは自らのこめかみを揉みたい気分になった、が、そうするだけの余裕はない。

「ラ? ラ…なんだ?」

なぜって、ユーシスがにやついた顔でナギトの言葉の続きを引き出しにかかったからだ。

ナギトは頭脳をフル回転させて続く言葉を変化させる。

「ラッキーな事に懐に余裕はあるからな。B班の連中に買っていつでも良いかもしれない」

慌てる風でもなく淡々と述べたナギトに、ユーシス以外の面子は誤魔化せたようだが、当のユーシスは「ふん？」とまたニヤついていたので、そのうちウザ絡みする事を決定した。

口は災いの元、というわけではないが有言実行としてナギトはB班のメンバーの分のお土産を買う事になったのだった、ポケットマネーで。

☆☆

ノルド高原は広大だ。移動に馬は必須であり、実習のために絞られた範囲であつても高原全体の何割を占める事か。

そういったわけで今回の実習では課題の範囲を高原の南側、北側で午前、午後と分けで行う事となっている。

ナギトらは午前前の課題を終わらせると、集落に戻り昼餉を摂る。休憩を挟んでから高原の北側に出た。

馬を走らせ、広がった視界の奥に見えるのは半ば岩壁に埋まった人型の巨像。

リインはこれを「巨人」と形容し、ユーシスは「巨いなる騎士」の伝承が頭に浮かんだと言う。

「ユーシスくんは相変わらずそういった伝承がお好きですなあ」

「さっきの仕返しも込めて嫌味つたらしく言ってみる。ユーシスはそれを受け取ると「ふん」と鼻を鳴らして、

「女の後ろで言われても全く響かんな」

「くう、こいつめ！」

「あつ、ちよつと揺らさないでつてば！」

ナギトは相変わらずアリサの後ろであり、それを笑われて歯を剥き出しにするも今度はアリサに締め上げられる。

その後、高原北側での課題をこなしてから集落に戻るとちよつとした事件が起きていた。

集落に1つしかない導力車が事故って動かなくなってしまったのだ。

これがないと色々と困ってしまうらしいため、湖畔に住んでいるという、機械に強いと噂のご隠居を迎えに行く事になった。

アリサは、そのご隠居とやらの正体に心当たりがありそうなそぶりを見せる。

アリサに心当たりがあるとすると、元はラインフォルトの技術者とかだったりするんだらうか。あるいは血縁者だったりして。

なんて思っていたらまさにその通りで、機械に強いご隠居はアリサの祖父であるグエン・ラインフォルトその人だった。

今回は「確信」ではなく予感のような感覚ではあったが、ここまでの的中率だと、もう徹底的に利用してやろうかという気分になってくる。

集落に戻ると導力車の故障にはグエンが対応した。それを見物していると良い時間帯になったため夕餉をいただく事になった。

食事も一段落した所で、アリサがゲルを抜け出した。それをエマがリインに追わせる。

青春イベントを予期したナギトはこつそりと跡をつけた。

アリサとリインが地面に寝そべって語り合っている。2人に倣ってナギトも空を見上げると、そこには満天の星空があつた。

この光景を、ラウラと一緒に見れたなら。

なんて不意に思った。もうさすがに認めるしかないらしい。薄くため息をついて、ナギトはようやくこめかみを揉んだ。

ナギトがそうしている間にリインとアリサの青春トークは佳境に入りつつあつた。

こうしてはいられない、こんな貴重なシーンはA班全員で共有しなくては！

ナギトは使命感に駆られるままにゲルで談笑するA班の元へ急ぐ。

「ユーシス、ガイウス、エマ……ちよ、ちよちよちよと来て」

「どうした、そんなに慌てて」

「しーっ！クワイエットだ、ユーシス」

「な、なに……？？」

A班のメンバーを連れてリインとアリサの元へ行く。アゴでくいつとリインたちを指し示すと、3人はナギトの意図を察したようで2人のやり取りを聞くために静かになった。

「でも、そんな風に言えるって事は、あなたも少しは前に進めるきつかけが掴めたって事なんじゃない？」

アリサはにこやかに、リインにそう言った。

「んんっ」

今世紀最大の名台詞に大爆笑しかけるが、何とかむせるだけに留めておく。

そして話し終えたリインとアリサだったが、そこでようやくナギトらの存在に気がつく。

表情が強張ったかと思うと、すぐに真っ赤になるアリサと、照れ笑いするリイン。

ユースにイジられたアリサは開き直ると「ああもう！こうなったらあなたたちも恥ずかしトークを暴露しなさい！」とあらぬ方に舵を切り始めた。

「断るー」も勢い良く目を逸らしたユースに、ガイウスとエマも倣う。

ならば次の矛先は当然ナギトで、

「ナギトはどうなのよ？あなたはいつも他人の事ばかり言っで、自分の事は何も言っていないじゃない？こんな時くらい、何か言ってみたらどうなの」

「え、もしかして俺の俺による俺のための今世紀最大の名言を期待してる？」

「なんでもいいから言いなさい」

「アリサさんやっぱ怖えわ」

赤い瞳の眼光がナギトを貫いたので減らず口はこれまでにして、名言を炸裂させる事とした。

「俺たちは今でこそ、こんな風に笑いあっちゃいるが、卒業後は道も違って行くだろう。もしかしたら敵対してしまうかもしれない。もう“仲間”ではいられなくなる時もあるかもしれない」

革新派と貴族派のやり合う帝国にあって、その話題はひどく現実味があった。

今は特科クラスⅦ組として仲良くやれているが、それは学生の時の間だけかもしれない。

「だが、それでも」とナギトは続けた。

「仲間」ではいられなくなっても。『友達』としてなら、また会えると思う」

そこでナギトは一呼吸置いて、横目でメンバーを見やる。

なんとなく雰囲気が前回の実習の終わりにサラが語った時のそれと似通っている気がしたが、気にしない事にして次を紡ぐ。

「例えば——、町でばったり会ったら酒を酌み交わすくらいはしたいよな」

はにかんで見せる。

「俺たちが卒業までに積み上げて行くのは『思い出』…… 例え敵対しても。例え遠くに行っても。例え同じ空の下に居なくても。積み上げた『思い出』を糧にして、人つてのは生きてくんじやないかな」

その思い出が欠落しているナギトだからこそその言葉だった。

記憶が人を形作る——それがすべてではないにせよ。

「——まあ、こんなところか？」

「ふっ」と笑ってナギトは締め括った。

「あ、あなたにしてはまともな事を言ったわね」

アリサは若干たじろぎながら感想を言った。

“あなたにしては”って完全に小馬鹿にした表現なのだが、自覚はあるため黙っておく。

「しかし……本当にその通りだろうか」

ガイウスは腕を組んでうんうんと唸るようにして言う。ナギトの名言を理解してくれるあたり、さすがガイウスと言う他ない。

「あはは……いつもこれくらい真面目ならいいんでしようけど」

そこでエマが申し訳なきそうに言う。

しかしそのオーダーには応えられないのだ。何故ならナギトは浮かれているから。Ⅶ組のみんなと出会えて、毎日が楽しくて、だから調子に乗っていらぬ事を言いたがる。

「思い出を糧にして生きていく、か。さすがに記憶の大切さを知るお前の言う事は違うな」

ユーシスは小馬鹿にしたような声色で会話に参入。言ってる内容はまともなのがポイントだ。この雰囲気って実は照れ隠しだったりするのだろうか。

「ユーシスお前マジでバカにすんなよ」

しかしナギトはあえていつも通りに釘を刺すが、ユーシスには逆効果だった。

「いや、バカになどしない。……しかし、卒業までに積み上げて行くのは『思い出』（キ

リツ) …とは、よく言えたものだな」

「キリッ!とか効果音入れないでくれますう!？」

あはははは、とみんなで笑い合つて。

しばらく円になって寝転んで星空を見上げながら話をした。会話のテンポと芝生の感覚が心地良く、このまま寝入っても構わない気持ちを感じた。

しかしそんな時間も長くは続かない。翌日の事も考えて早めに就寝する運びとなった。

ラカンに挨拶してゲルに入ろうとしたところで「ナギトさん」とエマに呼び止められる。

「うん?なんでしょ?」

いつもの調子で振り返ってみたが、エマの表情は真剣なもの。ナギトもさっきの名言を炸裂させて時並みの真面目を取り戻してみせた。

エマが不意に眼鏡を外す。いつもレンズ越しだった瞳がナギトに真っ直ぐに向けられ――

――それが、金色に煌めいて見えた。

「私は今からあなたに質問しますが、それは友人として当然の権利です。何も不自然な事はありません」

「友人としての権利……不自然な事はない……」

エマの言葉を復唱する。

「あなたは、何者ですか？」

「ナギト・シユバルツァー。シユバルツァー家に拾われるまでの記憶はない」

「思い出した事は？ 先月の実習で、結社の人間と会った事で何か――」

「かつて共和国にいた事。いくつかの事件に関わった」

エマは息を飲んで、少し考え込むと、次の…最後の質問に移った。

「あなたは、騎神の起動者ライザですか？」

「違う」

明確に、これ以上なくはつきりとNOと告げる。その意味を、エマが理解するより早く。

「騎神…？ 起動者…？」

ナギトが、呟く。

知らない、言葉のはずだ。

少なくとも、今はまだ。

灰の騎神なんて知らないし、蒼の騎神なんて知らないし。彼らの結末なんて、もう見たくもない。

「だから……………」

「ナギトさん? ……暗示が…」

ぶつぶつ言い始めたナギトに不信感を覚えたエマはまたナギトと視線を合わせると、

「ナギトさん、ここでの会話は忘れてくだ——」

何百、何千、何万と繰り返された悲劇が、脳裏を過つていく。ナギトの瞳に正気が灯つた。

「…っの魔女、が…!」

ナギトの手がエマの首を掴んだ。瞳が金色を失い、通常のそれに戻る。

急速に思考の靄が晴れていく。

「は、可愛い顔して誘惑か？ やる事がえげつねえのな」

エマは「暗示」と言っていたか。

「くっ…どう、して…?!？」

首を掴む手に力は込めてないナギトだが、エマは苦しそうにうめいた。

ナギトは乱雑にエマを振り解くと、軽く睨んでやった。エマはいくつか咳き込んでまた「どうしてですか？」と問いかける。

先程の「どうして」とはまた別の意味合いをもつ。今回ののは「どうして解放したのか？」という意味だった。

「俺に害意があるわけじゃないだろ。焦りが見えるぜ、エマ・ミルスティン」

「ッ！」

わかりやすい反応をしたエマにナギトは口角を上げて笑う。

「二個前の質問については、俺が特別なのか、お前が未熟なのか……あるいはどっちもかもな？」

エマの暗示が解けた理由については、エマ自身の未熟が招いた問題でもあるし、ナギトの特異性から生じたエラーかもしれない。

少なくともそれを説明できる存在はこの場にいない。

ナギトは警戒の続くエマにため息をついて見せた。

「別にさ、こんな事しなくても俺の知ってる事なら教えてやるよ。俺にとってエマは“友達”で“仲間”だと思ってるからな」

ナギトが《剣鬼》であつた過去などクラスメイトに教えたくはないものだが。

分別があるはずのエマがここまでした理由を考えると、ナギトの悩みが自分だけの問

題である事も明らかで……優先度から考えると、だ。

「ひとまず、俺の誠意はこんなところだよ」

ナギトはそう言って自身の警戒を解く。それでエマがナギトの言葉を吟味して警戒を解くのにたつぷり30秒はかかった。

「……わかりました」とエマは外していた眼鏡を再びかける。

「すみませんでした、ナギトさん。……こうした理由はまたいつか、話したいと思います」

エマは深々と頭を下げた。それが先の約束と合わせてエマの誠意であった。

そうしていたところで、いつまで経ってもゲルに入ってこない2人を怪訝に思ったラインが呼びに現れ、ナギトとエマは大人しく床に着く事にしたのだった。

☆★

特別実習3日目。

その日、起床するとすでに事は起こっていた。

否。すでに仕済まされていた。

今日の夜中、ほぼ同時刻にノルド高原にある帝国軍監視塔、共和国軍基地が何者かによつて襲撃。双方に壊滅的な被害が与えられた。

それにより帝国と共和国はノルドの地にて一触即発の状態となっているのだ。

A班のメンバーは状況把握のためゼンダー門と監視塔で聞き込みや調査を行い、両国に対して行われた攻撃は第三者によるものだと判明した。

しかし事ここに至り、その程度の事実で開戦を止められるなら帝国と共和国の関係は今のようには拗れていない。

最低でも犯人を確保しなければ、そもそも交渉すら始められないだろう。

移動の際にガイウスは語った。

雄大な自然と優しい家族に囲まれて愛する故郷で平和に暮らしていたが、ある時高原に共和区の基地とそれを帝国が監視するための監視塔が建てられる。

そうした中で巡回神父に歴史を学ぶ内に、故郷がいつまでも平和でいられる保証がないことに気づいてしまった。

導力革命によつて世界の技術は目覚ましい発展を遂げ、辺境の地であるノルド高原にも二大国の軍勢が攻めこむのが容易になる。

いずれ故郷が戦場になる可能性を恐れたガイウスは、外の世界を知つていずれ来るかもしれない脅威に備えることを決心し、それが士官学院の入学に繋がつたと。

その可能性が今まさに現実にならうとしているのに、すでに手詰まりと思える状況だ。俯きかけたA班メンバーだったが、「あれは何だ？」とユーススが空を指した。

発見したのは空を飛ぶ銀の傀儡。それは先月の実習でも見かけたオーロックス砦から逃走していた銀色の飛行物体だ。

今や糸口はそれだけだと感じたA班は、その銀色の傀儡とそれを操る人物を追つた。彼女は石柱群に降り立つた。そこに何の用があるとも思えないため、おそらくナギトらを待ち構えているものと思われる。

案の定と言うべきか、彼女——水色の髪をした幼い少女ミリアムはナギトらA班を待ち構えていた。すでに臨戦体制のようで、「試す」旨の独り言を呟くと問答無用で襲

いかかってきた。

傍らの白銀の傀儡は、実技テストで相手取る戦術殻と似ているが、おそらく性能は段違いなのだろう。

ミリアムの動作をなぞるように戦術殻——アガートラムの殴打が放たれ、それをガードしたガイウスが数アージュ吹き飛んだ。

「まだまだ、いつくよ〜！」

ミリアムは楽しそうに拳を振り上げる。

この手のタイプは調子付かせると、それが強さに直結するやつだ。

「調子に——」

ラインに視線をやる。戦術リンクと日頃の仲良し生活のおかげで意図は伝わったよ
うで、ナギトの台詞をラインが継ぐ。

「——乗るな！」

それと同時に2人の姿が霞む。疾風による斬撃がミリアムに襲いかかるが、それはア
ガートラムによって防がれる。

しかし、この疾風はあくまで防がせるためのもの。

「今よー！」

「くらえー！」

アリサとユースの駆動完了は同時。

火属性と空属性のアーツがミリアムを包み、炸裂した。

「わわっ?!」

ミリアムの驚き声は、隙を晒した合図。

「ガイウス！」とリインが呼びかける。ガイウスの方はすでに準備完了だった。

「カラミティホーク！」

風を纏う鷹を思わせるオーラをもって、ガイウスの槍がミリアムを貫く——事はなく。その手前の地面を穿っていた。それは殺意さえあればミリアムを殺せていたという意思表示に他ならず。

「俺の故郷を救うため、どうか力を貸してほしい」

故にこれは決着だった。ガイウスの言葉にミリアムも納得したようで戦闘態勢を解く。

少女はミリアム・オライオンと名乗り、戦術殻はアガートラム——通称ガーちゃんと教えてくれた。

ナギトは当然のようにそれを知っていた気がしたが——今は考えてる場合ではない。

ミリアムの話によると、共和国の基地と帝国の監視塔と襲撃したのは猟兵くずれの連中で、今は巨像の裏手にある石切り場に潜伏しているとの事。

そこに踏み込むのに、ナギトラに協力してほしいらしく、そのための腕試しに今さっき戦ったのだと。

A班はミリアムと共に石切り場に向かう。

巨像の裏手にひっそりとある石切り場は古代のもので、その入口たる石造りの門も堅固に見える。

しかしミリアムは「ガーちゃんならこんなラクショーだよ！」と自信満々。

そのまま腕を振り上げて、アガートラムもそれに追従する。

そして、振り下ろす――

「――オラアツ!!」

――より速く。

影が通り過ぎたかと思うと、それは裂帛と共に石切り場の門に激突――否。門を粉砕した。

門破壊の余波。突風が吹き荒れ、石片と粉塵が視界を塞ぐ。

「くっ……いったい何が…?」

「無事か、みんな!」

ユーシスを含む全員が何が起きたかわからず、狼狽える他ない。リインは努めて冷静で仲間の無事を確かめようとして。

この場でナギトだけが、この事態が、完全なイレギュラーだと理解できている。つまり、

「ミリアム! シールドを!」

防御全振り——!

ミリアムがアガートラムに指示を出して、シールドを形成する。青い、半透明の、亀の甲羅の模様に似たそれに、

「リアー!」

乱雑に、蹴りがぶち込まれる。シールドが碎ける事はない。碎ける事はない、が……勢いに押されてミリアムはアガートラムごと後退させられた。

一瞬遅れて石片や粉塵が吹き飛ぶ。

そこでようやく、相手の姿を視認した。

黒いスーツを着崩し、丸いサングラスをかけたチンピラのような外見だ。

しかし、その実力、思想がチンピラとは隔絶したものであるとナギトは知っている。

「ああ？手緩い歓迎じゃねえか……《剣鬼》？」

「《痩せ狼》ヴァルター……！」

そこにいたのは結社《身喰らう蛇》が執行者No. VIII 《痩せ狼》ヴァルターだった。

「久しぶりだなあ……探したぜ？」

ヴァルターの餓えた獣のような目つきと、嗜虐を思わせる吊り上がった口角はナギトに向けられていた。

殺気が充満している。誰かの唾を飲み込む音が聞こえた気がした。

ヴァルターの戦闘能力は折り紙付きだ。この人数差でもやられてしまう公算が高い。だから、ノルドの現状も踏まえて。この場の、最善は――

「みんな……先に行け。こいつは俺に……用があるようだ」

太刀を抜き、構えた。視線がヴァルターと交わる。

ヴァルターの興味はナギトだけに向けられている。ナギトを除くメンバーがその横を通り過ぎた所で、彼は一切の邪魔立てをしないだろう。

「ああ――」

事の重大さ、深刻さにおいて今はノルドの危機が優先される。それは、ナギトの生存と比較して、という意味で。

しかし一方で、一目で達人とわかるヴァルター相手でも、ナギトなら何とかしてくれるかも……という期待感もあって、リインらは返事と共に歩を進め——かけて。

「……用がある、ようだ？」

「ぎ・き・に・い・け！」

思わぬダジャレ——本人の自覚なし——に立ち止まったリインは横目で睨みつけられて苦笑。

「先に行く。……追いつけよ、ナギト」

「行けたら行くわ」

いつものように、軽々と答える。
その裏に、絶死の覚悟を隠して。

☆★

石切り場の遺跡の奥にリインたちの背中を見送って、ナギトはようやく口を開く。緊張が解けぬように、呼吸は短く。

「待つてくれたようで。悪いな」

予想通りと言うべきか、ヴァルターはリインらA班を見逃した。

退屈そうに煙草を燻らせながら、走っていくリインらに軽く視線をやって、ナギトの言葉を待つてから。

「ま、この程度待つくらいわけねえさ。こちとらずっと、お前にリベンジする機会を待つてただからな」

最後に、大きく煙草を吸った。じじじ、と葉と紙が焼けて灰となる。大仰に煙を吹き出して、地面に投げ捨てた煙草を踏みつけた。

「まずは誤解を——」

解きたいのだが、とは続けられない。ナギトが記憶喪失である事を伝えて、それで戦闘回避ないしは時間稼ぎをしようと思っていたのだが。

ヴァルターの闘気が爆発したかと思うと、その場から姿が消え失せた。

戦闘態勢だった。集中していた。一瞬たりとも目を離さなかった。

それでなお、見失う速度。

だからこれは反応でもなく、反射でもなく——

「しいっ—」

「ぐ、ううっ」

—— // 攻撃ここに来い！ // のお願いガードだ。

幸運な事にカンは当たり、ヴァルターの蹴りを太刀は受け止めた。いや、受け止めきれずにナギトは宙に浮いたが、それでも防御には成功した。

「いりやまずい……」

たった一撃ガードしただけで、太刀を持っていた両手が痺れた。この痺れそのものは一過性だろうが、ヴァルターの攻撃の威力は洒落にならない。

生身で受ければ一発でアウト。闘気で防護してようやく“一撃即死”から“一撃戦闘不能”くらいにダメージを抑えられるレベル。

つまり一撃喰らったらその時点でゲームオーバーというわけだ。

着地したナギトは蹴りを放ったヴァルターを見やる——いない。

「どこ見てんだ？」

ヴァルターはすでに、懐に入り込んでいた。

ためられた右拳によるアッパーが放たれる。

それは思いっきり仰け反る事で回避した。否、避け切れてはいない。アッパーに付随した拳圧——拳風が、ナギトの体勢を揺らす。

続く左脚による蹴りがナギトを捉えた。こちらもガードしているが、ナギトの防御力よりヴァルターの攻撃力が遙かに勝る。

蹴りを防いだ肘を浸透して衝撃が内臓をかき混ぜる。正気を失う痛みを感じながら、ナギトは闘気による防護を今度は左半身に集中させる。

ナギトの対面右の蹴りを受けたからには左に吹き飛ぶのが自然の摂理。岩壁に激突してもダメージが軽減されるための措置。

しかし、ヴァルターの行動はナギトの予想を上回る。

蹴り込み、吹き飛ばさずのナギト——その学生服を掴むと、地面に打ちつけた。

「がっ!？」

顔面が、胴体が、手足が地面を跳ねる。

地面に叩きつけられ、バウンドしたナギトの脚を掴むヴァルターは、そのまま今度は宙に投げた。

「手エ抜いてんじゃねえぞ、《劍鬼》い！」

足にオーラを纏い、放つ。　「レイザーバレット」——端的に言えば、斬撃を足技で放つもの。

それが、空中に投げられて無防備なナギトに迫る。

闘気による防護もなく、地面に打ちつけられたせいで、ナギトの意識は朦朧としていく。
る。

ヴァルターに投げられ、ほんの少しばかりの空中遊覧。それもすぐ終わり、挑発か嘆願か：投げかけられたヴァルターの言葉は意味を纏う前にナギトの耳を通り過ぎた。

——いや、《劍鬼》という音だけはしっかりと拾っていて。

落下するナギトにレイザーバレットが肉薄する。

それは紛れもない死の具現であり。死の象徴であり。生の終わりであった。

意識は白み、力が入らず、死は迫り――

「――」

――《劔鬼》が、覚醒する。

迫り来る死の具現を一太刀で霧散させて着地。同時に放たれた濃密な殺気――闘気――鬼気に、ヴァルターは《劔鬼》の本気を感じ取った。

ナギトが構える。

「緋空十字連斬」

瞬間四振。十字とX字の斬撃が同時に放たれる。広範囲をカバーする緋空斬を米字に放ったような戦技に、ヴァルターは迎撃を選ぶ。

「オオオ、ラアツ！」

それも、最も斬撃が重なる米字の中心点を。渾身の正拳突きで相殺した。

しかしそんなものは所詮お遊び。ヴァルターが次にナギトを視認したのは眼前。

「——迅雷」

雷速の斬り込み。疾風から更に速度と鋭さを追求した戦技。

“剣鬼七式、外ノ太刀 雷の型”に分類される、《剣鬼》が得意とした技であった。

迫る斬撃にヴァルターは防御しながら回避を試みる。ナギトの迅雷はヴァルターの頬に一条の傷をつけるに留まった。

「ハッ、調子が出てきたじゃ——」

落雷。それに見紛う雷の如き剣技がヴァルターに言葉を紡がせない。

放ったのはナギトではない。ヴァルターが宙を確認すると、そこにはほどけていく人影——ナギトの分け身による攻撃をもらったのだと理解。

「雷電収束。雷光確立」

地面に突き立てられた太刀から雷撃が放たれる。それは地面を伝ってヴァルターを狙い撃ちにした。

「ぐ……い……」

痺れた筋肉が動きを取り戻すまで一瞬。

しかし、ナギトには——否。《剣鬼》には充分すぎる時間だ。

同じく太刀から伝導し、地面から生えたいくつかの雷撃は人の形をとった。それぞれが不完全な、一瞬で消えるだけの分け身。しかし一撃を放てれば充分だ。

雷の分け身はヴァルターを円形に囲むと、同時に構え、同時に駆けた。

「迅雷・重」

幾重にも斬撃が刻まれ、しかしヴァルターは倒れない。
着崩したスーツは所々が破れ、サングラスは碎け散った。

「ぬるいぜ！ 《剣鬼》！」

震脚。地面は揺れ、ナギトは僅かに十全を失った。ヴァルターは踏み抜いた地面の反発さえ利用してナギトに肉薄する。

「破ッ！」

据えられた掌から、膨大なエネルギーが打ち出されたようにさえ感じた。
発勁、あるいは零勁と呼ばれる武術の極意の一端である。

ナギトはその衝撃に、今度こそどうしようもなく吹き飛んだ。

「チィ」

しかし舌打ちをしたのはヴァルターだ。

発勁の真価は、その威力、その衝撃を相手の内部で炸裂させる事になる。ダメージを浸透させるとも言い換えられる。すなわち防御不可の一撃であるが、相手が吹き飛んだという事は失敗だ。

だが、この場合ヴァルターに落ち度はない。

ただ単に《剣鬼》の技量が発勁さえ受け流したというだけだ。それでも自分が飛ばねば衝撃を殺せぬ事に本人は不服であろうが。

ヴァルターは追撃する。レイザーバレットをいくつか放ち着地の隙を狙うが、そのすべてが螺旋の応用で返報された。

当然のように避けて、ナギトを見る。あちらも一息ついた所のようにだ。

「《剣鬼》……弱くなったか？」

挑発か、本心か、ヴァルターの放った言葉がナギトの耳に入ったか否か。

迅雷。雷速の斬撃がヴァルターに刻まれる——事はなく。

太刀がヴァルターを切り裂くより速く、ヴァルターのカウンターがナギトの顔面を打ち抜いた。

——ように見えた。しかし、ヴァルターのカウンターに捉えられたかと思われたナギトの姿はかき消える。

残像だという理解に一瞬。回避と防御が間に合わない事実に覚悟を固めるのに一瞬。

「迅雷」

今度こそ本当に迅雷がヴァルターの胸板から腹部にかけて切り裂いていった。

「ぐっ……なかなか……だが、もう一度言うぜ。《剣鬼》：お前、弱くなったな」

血を流し、しかし致命傷にならぬダメージを負って、ヴァルターは再度挑発した。い

や、今度こそ——今度も本心なのだろう。

だからこそ《剣鬼》には逆鱗だった。

ナギトが知りえぬ《剣鬼》の生きる理由に直結する“強さ”を否定されたのだ。

「終わりだ」

トドメ、と言い換えていい。

膨大な、莫大な闘気が太刀に収束した。

「剣鬼七式、三ノ太刀」

対するヴァルターも奥義の構えをとる。

いつものように煙草を吸う暇はなく、呼吸を整えた。

一瞬の後、同時に動き出した。

「オラオラア！」

ヴァルターは気功を固めた弾丸を2つ放つ。

ナギトは瞬時に“虚空剣”を作り出すと、それで気功弾2つを薙ぎ払う。

刹那の後。

交錯、した。

「破空!!」

収束されていた闘気が一瞬で解放された。それは全方位に破壊を齎す剣圧の爆発だ。

「アルティメットブロー!!」

それを穿たんと進むのはヴァルターのスクラフト。右拳に秘められたエネルギーはナギトの破空に負けず劣らず、むしろ全方位に放つそれより一点突破のアルティメットブローのほうが威力は高い。

やがて双方のエネルギーが炸裂し、

「オ、ラアツ！」

「く、ぐうつ!？」

——決着は、ついた。

最後の最後、破空に打ち勝ったアルティメットブローであったが威力は相当に殺されておられ、吹き飛んだナギトもダメージと言うより疲労の蓄積が色濃い。それは対するヴァルターも同じだった。

「ハ……まだだ。立てや、《剣鬼》」

しかし、ヴァルターはこんな決着を良しとしない。ナギトに拳を向けてから、ファイティングポーズを取る。

対するナギトは「無我」モードが解けていた。すなわち、《剣鬼》の時間が終わっていた。

しかも身体を無茶に動かしたせいから、指一本動かすのすら難しく、ダメージも疲労も半端ない。

苦し紛れにヴァルターを睨みつけてみるが、逆効果。時間稼ぎも上手くいかず、ヴァルターは「ははあ」と合点がいったように頷いた。

「もう動けねえか、情けねえ話だな」

「そーなの。見逃してくれたり……？」

「しねえ。決着は互いの死か……あるいは勝者に委ねられる。この場合は俺だ」

「そこを何とか！見逃してくれるかなー？」

「いいとも、なんて言わねえぜ？」

ダメらしい。

「あばよ《剣鬼》。まあそこそこ…楽しめたぜ」

ヴァルターが拳を振り上げる。無理にでも防御しなければ、と身体に力を入れて「あひん！」と声漏れた。ああこそ、普段のボケ癖がこんな非日常にまで響く！

「待て！俺は——」

かくなる上は記憶喪失である事を明かそう。それで慈悲をくれるとも限らないが。そう決意して口を開くも、ヴァルターの拳がナギトを殺す方が早い。

「そこまででいいですよ」

糸が、ヴァルターの腕を縛りあげる。

高原側から石切り場に現れたのはシャロン・クルーガーだった。

「悪いけど、私の教え子なのよね。これ以上やるつもりなら、私が相手になるけど？」
それに加えてサラ・バレストインまでもが姿を現す。

「クク……《死線》に《紫電》か。いずれやり合ってみてえが……今回はやめとくか」

ヴァルターは自身のダメージを鑑み、サラとシャロンの相手をする事を避けた。

戦闘力だけを見ればサラやシャロンよりヴァルターが勝るだろう。しかし数的不利や負傷度合いを計算に入れば敗北は必至だ。

戦闘狂の気があるヴァルターとは言え、進んで負け戦をするつもりはない。

「あっさり退くわね……裏があつたり……」

「しない、と思いますわ。《痩せ狼》様は気まぐれなお方……今回もナギト様の話を聞きつけてこの地にやってきたのでしょうか？」

サラはあつさりと退いたヴァルターに疑念を抱くが、シャロンはその可能性を否定する。

「ああ。……つてか、そいつはそんな名前だったか……？」

ヴァルターはシャロンの推測を肯定しつつも、新たに生まれた疑問を問いかけた。それはつまり、《剣鬼》の名前だ。

「2回くらい言いかけたんですけれども」と前置愚痴きしてからナギトは立ち上がる。

痛みに「あひんあひん」言いかけた…半分くらい言いつつも、しっかりと両の足で立つ。

「ドーもはじめまして、ナギト・シユバルツァーです。どうやら《剣鬼》らしいんですが記憶はパーです！よろしくね！」

もうキャラがどうか言つてられず、自棄つぱちに自己紹介した。

「ああ？記憶喪失だと…？　んな馬鹿みてえな話…：…実際、俺の事もわかっただろうが？」

「会った事あるんでしょ、俺とアンタ。俺の中の《剣鬼》の記憶が、たぶんそれで反応して…ヴァルター…：…アンタの事がわかったんだと思う」

事実、ヴァルターの姿をナギトが視認した瞬間、前回会った時の記憶が脳裏に甦った。現実が大変だったため、その時点では「追憶をしますか？」に「No」と回答したわけだが。

ぶつちやけた話、《銀》やリーシャについて思い出した時と同じ感覚だった。それはきつと《剣鬼》の体験した事の証左でもある。

ヴァルターはしばらくナギトを睨みつけると「チツ」と舌打ちした。

どうやら《剣鬼》の記憶が失われた事に納得したようで、ボロボロになったスーツから煙草を取り出した。

火をつけて一口吸い、

「んじやアレか。てめえが弱くなってんのは記憶がねえからか？」

「そつすね。途中で俺の意識は薄れたから《剣鬼》の実力は出せたと思うけど」

ナギトが「自失無我」と呼ぶ現象——すなわち、肉体が記憶する《剣鬼》の動きを再現するもの。意識的にやれるものでもないため、戦闘で使えた試しはなく、今回のそれは意識が朦朧としてた事に加え、死の実感があったから発動したのだろう。

「あ？アレでか？」

しかし、ヴァルターの反応はナギトの予想とは違った。その語気からして——、否。戦闘中、すでにヴァルターは言っていたではないか。「弱くなったな」と。

「……………」

二の句を継げずにいると、気を使ったのか、サラが「それで？」と質問を始めた。

「どうしてアンタはここに居るのかしら？」

それはヴァルターがこのノルド高原に現れた事実を指している。すでに武装解除していたサラだったが、その視線は厳しい。

「ここに《剣鬼》が現れるって聞いたからだ」

ヴァルターの答えは簡潔。

このノルド高原に《剣鬼》が現れると知っていたから、自らも来たのだと。疑念は解消され、しかしてまた別の疑問が浮上する。

「誰に？」

サラの目つきがさらに鋭くなった。武器に手をかける、一歩手前。

それだけのインパクトのある答えだった。ヴァルターはここに《剣鬼》が現れると聞いた”と言った。それはつまり誰かが”話した”という事でもある。

しかしそれを話せる人物が極端に少ない事が、サラがヴァルターに噛み付く原因にも

なる。

ここに《劍鬼》——ナギトが来ると知っているのは学院の教官にⅦ組の生徒、それから理事に関わる者やその関係者くらいのもの。

それらの者たちの内に、結社の執行者と繋がりのある者がいるという事で——

「クク…そりゃあ、ウチの怪盗からだな」

そうした真面目な考察を繰り広げていたナギトはすっ転びたい気持ちになった。

いや、すっ転ぶモーシヨンをして立ち直るつもりがダメージや疲労に負けてそのまますっ転んだ。

確認の意味も込めて、下手人の名前を言い当てる。

「怪盗ってあいつか…ブルブラン？」

先月と先々月の実習で邂逅した、あの変人の姿を思い出した。なんならこの場をどこかで見て笑っている可能性すらあると思った。

ヴァルターの「ああ」という返事を聞き、サラは大きいため息をついた後、警戒を解

いた。

「つまりこういう事ね？ そちらの怪盗さんが学院に忍び込み、特別実習の情報を盗み出してアンタに流した。ただし《剣鬼》が記憶喪失である事は伏せたままで」

「ま、そういう事だ。……あいつがすんなり情報を渡すわけねえが…そこまでは思い至らなかったぜ」

ヴァルターは《《剣鬼》とリベンジマッチできるぜひやつほい！》と飛び出したのだろう。ブルブランは意地の悪い事にナギトが記憶喪失である事を話さずに。

その結果がこれだ。ナギトとヴァルターはぶつかり。ナギトは自信を粉微塵にされ、ヴァルターは肩透かし。

あまりの愉悦にくつくつと喉を鳴らしていそうだ。あるいは。

「試練のつもりかよ…」

誰に言うわけでもなく、ナギトは口の中だけで呟くのだった。天を仰ぐ。青空でブルブランの髪色を連想してしまったのは腹立たしい限りだった。

☆★

その後、ヴァルターは大人しく帰り、ナギトとサラ、シャロンは石切り場から戻ったリインらと合流した。

どうやら実行犯は捕獲したようで、それを手土産にゼンダー門へと向かう事となるが、ナギトは限界だったためサラやシャロンと共に一足先にノルドの集落に戻る事にした。

幾許か経過し、集落に戻ってきたリインたちの話によると、『鉄血の子供たち』の1人とされるレクター・アランドール情報局特務大尉の手腕により戦争は回避されたらしい。

話によると共和国軍も戦闘の準備をしていたそうだが、実行犯の引き渡しや再来月にクロスベルで行われる通商会議の存在もあり、事態は解決したと。

翌日、動ける程度には回復したナギトを連れてA班メンバーとサラ、シャロンはトリスタに帰還する事となった。

ゼンダー門の前で別れを惜しみつつ、列車の到着を待つ。

ノルドの人たちといつかまた会う約束を交わして——6月の特別実習は終わりを迎えた。

近似Ⅱ相違

「しっ——！」

大地を蹴る…否。地面を踏み抜く…否。天を翔ける…否。
そんなイメージではな
い。

簡単だ。初めから答えはわかっていたのに。

雷が落ちる——これだ。

ヂツ、と灼けるような音。雷電がまとわりつく。

「——迅雷」

無人の野を雷が疾る。落雷に見紛う速度で。雷光に迫る速さで。

それこそが剣鬼七式、外ノ太刀 雷の型『迅雷』——《剣鬼》たる男が生み出した速度と鋭さを追求した剣技である。

短距離を雷の如きスピードで斬り駆け抜けたナギトは構えを解くと「ふうっ」と息を吐き出した。

「うしっ、ひとまずこれでOKかな」

制服も夏仕様となる初夏——7月の自由行動日の出来事である。

☆★

毎月恒例となった旧校舎の探索も4度目……最初のオリエンテーリングを入れると5度目になるが、今回も最深部の魔物を何とか倒す事ができた。

段々と最深部の魔物が強くなっている事から「試されている」事実を話していると、地響きが鳴り響いた。

異常事態を察した旧校舎攻略メンバーが最初の部屋に戻ると、そこには赤い扉が出現していた。

中央に紋章が刻まれた馬鹿でかい扉だ、間違っても行きに見落としていたなんて事があるはずもなく。ナギトらはそれを調べてみる事にしたのだが。

どこをどうしても赤い扉はうんともすんとも言わず、武器を使つての強行突破すら受け付けない堅牢っぷり。

手出し無駄と理解した所で旧校舎を出る事になった。

その後、ナギトはリインと共に軽く学院を回つてから帰路に着く事になる。学院の入口でラウラとフィーを除くⅦ組メンバーと合流し、いざ帰宅という段になって、

「兄様……」

淑やかな声に振り返ると、そこには黒髪の可憐な少女がいた。リインとナギトの妹のエリゼ・シユバルツァーである。

エリゼはⅦ組のメンバーに挨拶すると、笑顔で言った。

「少し兄たちをお借りしてもよろしいでしょうか」

この時、ナギトは冗談じゃなく「ひっ」と声を漏らしたのだった。

校舎の屋上まで移動して、まずエリゼはナギトに詰め寄った。話の内容はリインに聞かれてはいけなかったため、屋上の端でキツとナギトを睨みつける。

「ナギト兄様……これはいったいどういうおつもりですか？」

そうやってエリゼが取り出したのは一枚の便箋。先月、エリゼから届いた手紙のお返しとして送ったものだ。ちなみに郵送料云々というケチくさい理由もあってリインの封筒に入れさせてもらったのだが……

「す、すみません……」

「どういうおつもりですか、と聞いているのですが？」

怖い！とナギトは内心で叫ぶ。エリゼの威圧はそれこそヴァルターにも劣らぬ。

丁寧な言葉遣いだからこそ、恐怖が際立つという事もある。エリゼの態度がまさにそれだった。

「ええつと……ちよつとした悪戯心と申しますか……」

「へえ……悪戯でナギト兄様はこんな嫌がらせをなさるんですね？」

「すみません！」

もう土下座したい。でもきつと許してくれないだろうから、手紙の内容に沿った説得をしたいと思う。

「でもですよ？ 手紙の内容は事実でありまして……私めの奔走がなければすでにリイ

ンの貞操は……」

「そんな事を言っているではありません！」

「うひいっ!?!」

縮こまったナギトを見てエリゼは「はあ」とため息をついて、視線を手紙に走らせる。
『前略、エリゼ・シユバルツアー様へ。

リインお兄ちゃんが天然ジゴロとしての才能を發揮しております。

私が日々火消しに奔走しておりますが、ハーレムを築くのも時間の問題かと思われ
ます。

トールズは士官学院ではあれど、今や名門高等学校としての側面も強く、各地から才
媛が集っており、魅力的な面々も揃い、リインお兄ちゃんの貞操が奪われる日も近いの
ではないかと存じます。

形ばかりの兄ですが忠告させていただきたく思います。

エリゼ、素直になれよ。

そうすれば、きっとリインは真摯に受け止めてくれる。

関係が悪化するかも、と思つて動かないと、全部終わった後で後悔する事になるはずだ。

最後に。リインはそつちには行かないと思うから会いたいならトリスタに来るといい』

半分以上冗談みたいな内容だが、その文面はエリゼがリインに懸想している事を示唆した内容であつた。

そんな便箋を、ナギトは「リイン、エリゼに手紙送るんだろ？ 俺のも一緒に封筒に入れといてよ」と託したのだ。

内容を読まれていたら、エリゼの想いがバレてしまう。もちろんリインがそんな輩ではないと知っているが、それにしてもリスクすぎる遊びだった。

「今回は許しますが、次はありません。……いいですね？」

「はいっー」

エリゼの慈悲にいい声で返事をして、ナギトは次の言葉を待つ。

ナギトがこうしてエリゼにへり下っているのは、何も恐怖の大王の如きオーラを放つエリゼが怖いから……というだけではない。ナギトがエリゼと会ったのは今回で三度目となるが、二度目―エリゼが冬季休暇でユミルに戻ってきた際にちよつとした事件が起きかけて、それで貸しが出来ているからといいのもあった。

「それで……ナギト兄様は……その、知っているのですか、リイン兄様の事……？」

おそらくこちらが本題だ。

エリゼの瞳が悲しげに揺れたのを見てとってナギトもまた目を逸らした。

「……知ってる、けども。それについて俺はどう言えた口じゃないしな」

「そう、ですよね……すみません」

「いや……俺も、すまん」

暗い雰囲気になった所で会話は終わりを迎えた。嫌な終わり方だった。

エリゼはペこりとお辞儀をすると、本命のラインとのお話に行くようで、ナギトは邪魔といか無粋というか：正直エリゼが怖いのでクールに去るぜ。

そう思つて屋上のドアノブに手をかける瞬間、急に制服の襟を掴まれて、引つ張られた。

「ぐをつぱ!？」

驚きに加えて喉が締まったせいで変な声が出てしまった。引つ張られた先にいたのはラウラとフィーを除くⅦ組メンバー。

「揃いも揃つて盗み聞きとか趣味悪いぞ」

「気になるものは気になるのよ」

「わかる」

「うぎっ」

アリスと小気味良いやり取りをして、ナギトも盗み聞きに参加した。

ラインとエリゼはしばらく話し合った。

だが、話し合いの途中でエリゼは走り去っていく。

ラインの「士官学院卒業後はシユバルツアー家を出るつもり」、「そのための道を探すために士官学院に来た」というセリフに、悪い意味で感極まったのだ。

ちなみにこれがエリゼがナギトに尋ねた本題でもあった。ナギトも卒業までには記憶が戻るといふ希望的観測もあり、シユバルツアー家を出るつもりだった。だから、同じく家を出るつもりラインを説得するのも筋違いだと感じているのだ。

ラインの、結局は「他所者」であるという自覚が、ラインを家族と思うシユバルツアー家の人たちの想いを無碍にしているようなものだからだ。

特にエリゼはその想いが強い。

賢いはずのエリゼが見ず知らずの場所を無策に走り迷うほどには。

エリゼが走り去ったのを見てナギト含むⅦ組メンバーはラインの前に姿を見せた。

「どうして……に？」という、ラインの質問を押しつけてエリゼ搜索を優先させるように言う。

みんなで手分けしてエリゼを捜す事となった。

考えてみる。最悪はなんだ？

街道に出て魔獣に襲われる——呆然自失のエリゼでも、そこまで命知らずな真似はしないだろう。

思春期の男子に密室に連れ込まれて「いやくん」な展開になる——規律ある士官学院だ、ないと信じたい。

この2つの可能性が排除できるなら、差し迫った危機はないのではなからうか。

そういう風に結論つけたいが、ナギトの心中に生じた不安は消えない。

「なんだ…？ なにか…見落としてる可能性が——」

その時、脳裏に閃いたイメージがあった。

「——旧校舎」

ありえない、と断じたい。探索の後、ラインが施錠したのは確認済みだ。万が一にも

一般生徒が入らないようにと。

しかし、生じた不安は留まることを知らずに膨れあがっていく。

それは「エリゼは旧校舎に行く」というのが正答だと知っているような。

「くそっ」

旧校舎に走ると、当然のように入口は開いていた。さらに奥へ、走る。エレベーター部屋に入る。

「なぜ」が積み重なる。

なぜここに。なぜエレベーターが。なぜ——

エリゼは、そこにいた。

「ナギト兄様——」

伸ばされた手が救いを求めているように見えて、ナギトも同じように手を伸ばす。

「エリツ——」

届くはずのない距離。エリゼと名前を呼ぶ時間さえ与えられず。エレベーターは地下へエリゼを連れ去っていった。

すぐさま中央まで行き、エレベーターがあつた空洞を見つめる。エレベーターの昇降速度は凄まじく、視界には暗闇が映るだけだ。

今、飛び降りたらただではすまない。

普通に考えれば数分後にはエレベーターでエリゼはここまで戻ってくるだろう。しかし、ここまで不自然な事が積み重なるとその展開も想像し難い。

ひとまずエレベーターが戻るのを待って、エリゼを迎えに行く事にした。エリゼがそれで戻ってくるならそれでよし。

ナギトはAROUSでラインの番号を呼び出した。

「どうしたナギト、エリゼは」

「旧校舎だ！ エリゼは旧校舎に入り込んだ！」

「なに？ それは本当か!？」

リインの声には焦りが滲んでいた。

確かに施錠したはずの旧校舎に、街道にいるのより強力な魔獣が徘徊する旧校舎に、妹が迷い込んだと知れば無理もない。

その時——

「きゃあああー！」

「——嘘だろ…?？」

悲鳴。すなわち危険。

嘘だろ、なんて心にもない言葉だった。

「今の悲鳴は」

「急げ！」

皆まで言うな、とばかりに通話口に叫んで通信を終える。
暗闇を見つめる。エレベーターはきつと第四層だ。

「あー、くそっ！」

今。行かねば。

「肚あ括れ、ナギト・シユバルツァー！」

ふるえる膝をぶん殴り、心を奮い立たせる。
次の瞬間、ナギトは空洞に身を投げ出した。

— 滞空時間は何秒？

— 落下した時の衝撃は？

— エリゼを救えるのか？

— 失敗すれば死ぬぞ？

湧いた不安は頭の片隅に追いやる。

落下と同時に、落下と同等の衝撃を叩きつける。きつとそれで、着地はできるはずだ。だが四層分の落下ダメージと相殺できるだけの衝撃を放つ技など——

「——あれが」

—— あった。

初めての實習でブルブランを退かせた戦技。それは八葉に属する剣技ではなく、《劍鬼》から出でた剣技でもなく、ナギトの内から生じたものでもない。

まるつきり他人の剣技。劣化コピー。

あの時も、劣化甚だしい模倣剣技だった。それであの威力だ。今ならもつと。記憶が甦ればもつと。

瞑目。

記憶を想像で補完しろ。強烈な記憶を想起しろ。引き出せ——底を！

風に揺れるアッシュブロンドの髪。

長身を覆う灰色のコート。

携えるは金色の魔剣。

「貴様ではこの《剣帝》に勝つ事はできない」

視線が低い。跪いている。生々しい傷と空気の灼ける匂いすら感じられるようだった。

「何故ならば《剣鬼》よ……貴様の剣は何にも至ってはいないからだ！」

きつとそれが、そのシーンの真実。

《剣鬼》に焼きついた、強烈で鮮烈な敗北の記憶。

これは、《剣鬼》に敗北を与えた彼の代名詞とも言える剣技——
床が見えた。剣を構える。炎が灯った。

「——鬼炎斬!!」

振り抜く。炸裂。着地。

ぶつつけ本番で成功した。俺すげえ。よく飛び降り自殺の真似事して無事で済んだな……と。少しばかり感慨に耽りかけたナギトだったが、飛び降り自殺の真似事をした理由を思い出して視線を走らせた。

旧校舎地下第四層では、開かずの間だったはずの紋章の赤い扉が開かれ、そこから首無しの甲冑が現れていた。

人の数倍はある体軀の甲冑は、それこそ人の大きさほどもある大剣をエリゼに向けて振りかぶっている。

「しっ——！」

雷が落ちる。そのイメージ。

剣鬼七式、外ノ太刀 雷の型・迅雷

ナギトはノルドでの実習を終えてから、雷のように直線を駆けるこの戦技を体得すべく日夜修行に明け暮れた。

完全にもにしたのは自由行動日たる今日だが、よもや当日に活躍の機会が訪れるとは。

雷速の斬撃はそのスピードで力も加算され、振り下ろされた甲冑の一撃を力任せに弾き返した。

「ナギト、兄様……？！」

「ふうっ！間に合ったな。エリゼ、下がって——っておい！」

甲冑の一撃を防げたまでは良かったが、エリゼは緊張のせいか気絶してしまった。
「いりやまずい」

しかもナギトの背後という最悪の位置取りで。

ナギトの戦闘スタイルはスピードで攪乱し技で翻弄し、勝利を篡奪していくもの。
「庇うべきものが背後にいる」というのはナギトにとって最悪の条件であった。
攻撃を受け流すにしても、方向はかなり限定される。

「早く来いよ……リイン」

呟いて、ナギトは太刀を正眼に構えた。

それから数分、ナギトは甲冑の重撃を何とか凌ぎつつあったがそれも限界を迎えた。
大振りの一撃が太刀の刃を押し潰しながら滑る。受け流しは成功したが、返す一撃で
ナギトの手から太刀は弾き飛ばされてしまった。

「ツッ」

両腕は痺れている——なんてもんじゃなく、骨身に歪みが齎されているとさえ思えるほどのものがナギトには蓄積していた。

甲冑は再び大剣を振り上げた。

ナギトとエリゼを2人まとめて両断するつもりの一撃だ。

振り下ろされる刹那、ナギトの方がはやく動いた。とは言っても甲冑に向かったわけではない。

退いたのだ、エリゼを抱えて。

疾風の歩法で距離を取って、エリゼを床に横たえた。

「……初めからこうすれば良かったのでは？」

ナギトが自らの焦りを自覚すると同時に、上層に消えたエレベーターが第四層に再び降下してきた。乗員3人を乗せて。その内の1人——リインは横たわったエリゼを見て——

「エリゼエー——ッ！」

——理性の糸が、切れたように叫んだ。

「シャアアアアアアアッ！」

ラインの姿が変貌した。

艶のある黒髪は刃を思わせる白銀に。落ち着いた雰囲気を纏う黒瞳は血炎を想起させる灼眼に。

凄まじい速度で甲冑に肉薄したラインは、力任せに太刀を振り抜き、それで甲冑を吹き飛ばした。

「おま、力でつて……」

いつものラインとは隔絶した膂力だった。

「オオオオオオオオオ！」

獣のように雄叫びをあげるとラインは甲冑に飛び掛かっていく。

その太刀筋にいつもの精彩はなく、しかし力押しで甲冑を圧倒するラインに言葉も出ない。

これが見つと、ラインが恐れていた“自らに潜む鬼”の正体だ。

なんとなく気づいてはいたが、ここまでの代物というのは……

リインが甲冑と戦っている間に、ナギトはエレベーターで降りてきた残り2人―クロウとパトリックと共にエリゼを安全な場所に避難させた。

直後、衝突音が響き渡る。リインの一撃が甲冑を吹き飛ばす。甲冑は壁と激突して動きを停止させた。

それを見届けるとリインは胸に手を当てて呻いた。そうすると放たれていた赤黒いオーラは鎮まり、髪も目もいつもの色を取り戻す。

「これ以上……呑み込まれてたまるか……」

リインは自らの力を拒絶していた。荒く息をつくリインにどう声をかけるべきか逡巡していたナギトは、その後ろで甲冑が再び動き出すのを見た。

「まだ終わってねえぞ！」

「助太刀するぜ、後輩！」

エリゼをパトリックに託し、クロウと共に参戦する。リインの感謝を受け取り、今度は3人で甲冑と相対した。

腕の痺れは取れていた。いける、という確信と共に甲冑の懐に潜り込む。

「業炎撃！」

叩きつける炎は、先程の“鬼炎斬”には遠く及ばない。しかし甲冑を揺るがす事はできたようで、その隙をクロウが銃撃で、さらなる好機へと変化させる。

名を呼ぶまでもなくリインは生じた隙に剣撃を叩き込んだ。甲冑から放たれる重々しい雰囲気揺らぐ。もう少しでも倒せる。

安全に倒すために、甲冑の隙を見極めたい所だが、おそらくリインはさっきの鬼化の影響で心身が摩耗している。エリゼの事があるおかげでアドレナリンがドパドパ……：自覚はないが、決壊してしまえばきつと致命的な隙を晒す事になるだろう。

「クロウ先輩！」

クロウもAROUSを持っていたらしく、戦術リンクで繋がった彼はナギトの意図を

瞬時に汲み取った。

「オーケーだ！……つたく、先輩使いが荒い後輩だぜ！」

クロウの意気のいい返事を受け取って、まずナギトが太刀を振るう。自らのエリアだと示すように斬撃を走らせる、孤月一閃。

怯んだ甲冑に、数十発の弾丸が一斉に叩き込まれた。

「決めるぜっ！クロスレイブナー！」

クロウのSクラフトが甲冑を貫き、ようやく戦闘も終わりを迎えたのだった。

☆★

その後、VII組メンバーやサラ、トワにジョルジュといった面子もエレベーターで登場し、エリゼも目覚める。

事情の整理や体調の事も考慮し、今日エリゼは第3学生寮に泊まってもらおう事となり

——翌日。

トリスタ駅で帝都行きの列車を待つ間、エリゼとVII組が別れの挨拶を交わす。少しばかりの言葉のやり取りをして、ナギトとリインを除いたメンバーは距離を取った。兄妹の会話をするようにとの気遣いだ。

「その…今回は助けて頂いたようで、ありがとうございました」

改めてエリゼはナギトに頭を垂れた。あの後、礼を言いそびれていたのを思い出したのだ。

「ああ…いや、別にいいさ」

その感謝を特に受け入れる事もなく、拒絶する事もなくナギトは「別にいい」と流した。

その反応に少しだけむっとしたエリゼはしたり顔で、次の言葉を紡いだ。

「今回助けて頂いたので、例の件は水に流す事にします」

「かつ」とナギトは困ったやら呆れたやらの笑みをこぼした。

「あー…いいのかよ。こんなのはノーカンだと…」

「命を助けてもらいましたから」

「兄は妹を助けるもんだからな」

「妹は兄を庇うものですから」

「かつー！」と今度こそナギトは快哉をあげた。その理屈なら借りを返した事実を受け入れるのは吝かではないと。

「何の話だ？」

ラインから聞かれるが、エリゼは目を逸らし、ナギトはニヤついて、

「お前の知らないナイシヨの話だよ」

と言った。ラインは眉根を寄せるが、そんな事は気にも留めずにナギトは距離を取った。

ここから先はナギトのような兄妹の新参者が口を挟む場面ではない。

それからリインとエリゼはいくつか言葉を交わして、にこやかに別れを迎えることとなった。

こうして、7月自由行動日とその後日談は終わりを迎えた。
ナギトの胸に、ほんのわずかな違和感を残して。

夢中

並行。分岐。類似。近似。

どれも近くて、どれも違う気がする。

どういった文字列が、自らに芽生えた違和感を解消／納得させるに足るものであるかわからない。

これは「確信」レベルの違和感だ。

未知⇨可能性ではある。しかし既知⇨確定であるなら、起こった事実の説明がつかない。

——「何が」とは言えないが、エリゼを助けてからナギトに生じたのはそういった感覚だった。

☆★

「じゃ、まずはリインとナギトのチームVSラウラとフィーのチームね」

今月の実技テストは2対2の形式をとっていた。その一戦目としてリインとナギトの二人組とラウラとフィーの二人組で戦う事となった。

リインとナギトについては言うまでもなく、Ⅶ組最高の連携力を誇る。対するラウラとフィーはお互い高い戦闘力を持ちながら連携はイマイチだ。

「これは……露骨な」

「しかし、戦闘力としては五分か」

「でも、連携になると……」

だから、こういう声漏れるのだ。

しかしこの組み合わせで始めたサラの狙いもわかる。戦闘において連携がいかに重要かⅦ組に再認識させるつもりなのだろう。

かくいうナギトも先月の実技テストではラウラとフィーと組んだ結果フォローが大変だった記憶がある。

「頼むぞ」

「……ああ」

リインにいつものように声をかけるが、返事は少しだけ重たい。先日、エリゼを助け

た際に力を解放した事が尾を引いているらしい。

ナギトはラインの背中を思いつきり平手打ちした。

「いつ…!?!」

「氣い張れよ。お前に何があるうが、この場には関係ない」

制服越しでも気合いの入る一撃のあと、ナギトはいつになく真面目に言い放つ。ラインはそれに気遣いならぬ気遣いを感じて、微笑すると太刀を抜いて構えた。

「ああ、わかってる。ありがとう」

その姿をナギトが確認すると、サラによる「始め」の合図はほぼ同時だった。

一瞬でフィーが駆け込む。ナギトの眼前で双銃剣による連撃が——止められる。一撃目は太刀で防ぎ、次に向けられた銃口を握る手首を掴んでぶん回した後、ラウラに投げ放った。

ラウラは避けるか受け止めるか逡巡した後、受け止める事を選択した。

しかしそれは悪手であり、その隙にリインは孤影斬を放っている。孤影斬が2人まとめて直撃するかと思つたのも束の間、フィーは空中で体勢を立て直すと、ふわりと着地。そのままリインの孤影斬を弾き消すと、懐から何かがこぼれ落ちた。

「フラッシュユ！」

それは周囲に閃光を撒き散らすフラッシュユグレネード。いつの間にやらピンも抜かれており、炸裂はすぐだった。

ナギトの掛け声に気づいたリインは慌てて目を塞ぎ、叫んだナギトは目を瞑つたまま踏み込むと孤月一閃を放つ。

手応えはなく、続いて聞こえたのはラウラの裂帛。

振り上げられた大剣が地面を砕く地裂斬。リインは「ナギト」と叫びつつその身にタツクル。ラウラの地裂斬を避ける事に成功した。

「無事か？」

「今、肘擦り剥いた」

「無事だな」

立ち上がりつつそんなやり取りを交わし、再び太刀を構えた。直後、フィーの制圧銃撃―クリアランスが繰り出される。

「お前は右！」

「任せろ！」

弾かれたように左右に分かれたナギトとリインはラウラとフィーを挟撃すべく同時に疾風を繰り出した。

ナギトの疾風をラウラが、リインの疾風をフィーが受け止める。鏑迫り合いの距離で、ラウラの瞳に闘志が灯ったのを見抜いたナギトだったが。

「おあずけだ」

ニヤリ。不敵に笑うと名を呼ぶまでもなく、再びリインと示し合わせて疾風を繰り出す。走り抜ける刃はスイツチの合図。

互いの相手が切り替わる。ナギトは矛先をラウラからフィーに変え、リインはフィーからラウラへ狙いを変える。

その動きについていけず、ラウラとフィーは標的を見失う。疾風が炸裂し、致命的な隙が生まれた。

「合わせるぞい！」

挟み込むようにポジションニングしたナギトとリインは、これまたいつものように笑みを交わす。

リインはナギトの言葉を受け取ると、祈るように太刀を構えた。

「焰よ……我が剣に集え！」

焰の太刀が振るわれる。一閃、二閃、三閃。

隙を晒したラウラとフィーに防ぐ手立てはなく、しかしまだ立っている。故にこそナギトが後詰めなのだ。

放たれた焰の剣閃を螺旋の技術で巻き取る。

「いりゃきつついわ」

さすがにリインのスクラフトともなると、螺旋の技術で巻き取って己の力とするのも

一苦勞だ。

しかし、留めるならばいざ知らず、たった一瞬だけ保って解放するならばやれない事はなく。

「螺旋―焔の太刀返し」

一閃。再び焔が炸裂し、今度こそラウラとファイは倒れたのだった。

その後、残るメンバーの実技テストも終了し、4回目となる特別実習の行き先が明らかされた。

行き先は帝都ヘイムダル。A班はリイン、ナギト、エリオット、マキアス、ラウラ、ファイの6名。

ちなみにB班も帝都が実習地で、大都市であるエレボニア帝国首都を手分けして実習を行う手筈となっているらしい。

前回のノルド高原やブリオニア島と違い、今回の列車旅は短いものになりそうだった

た。

☆★

「それじゃアンタたち、しつかりやって来るようにね」

特別実習の朝にしては珍しく、サラがⅦ組メンバーの見送りに寮の一階まで来ていた。

A、B班のメンバーは思い思いに返事をし、サラはナギトに視線をやった。

「特にナギト、アンタはいつも大事な所で離脱してるんだから…注意しなさいよね」

「それ俺のせいです？」

一度目はブルブランに拉致され、二度目は領邦軍に逮捕、ルーファスに目をつけられ、三度目はヴァルターに強襲され…どれもナギトの選択次第で回避できたかは怪しいものだ。

「おかげで残るメンバーの実習難易度が上ってるんだからね、まったく」

「いやー、俺がいなくて難易度は元通りだと思うんですけどねえ」

「どういう意味よ？」

口について出た言葉だったが、言ったナギト自身にも意味はわからない。ナギトがなくて実習の難易度は元通り。意味不明だが、しつくりくる。

「さあ？」と誤魔化してから会話を終えた。

A、B班揃って寮を出て駅に至る。帝都行きの切符を買って列車に乗り込んだ。

流れゆく景色を眺めつつ帝都出身の2人―マキアスとエリオットから帝都ヘイムダルについて簡単な説明がなされた。

帝都ヘイムダル―エレボニア帝国の首都であり、人口80万人を誇る巨大都市。現皇帝たるユーゲント・ライゼ・アルノールⅢ世の住まうバルフレイム宮がある。

…とまあ、ざつくりとこんな程度の説明で、後は肌で感じるのが特別実習の慣いだ。

奇しくも夏至祭に合わせた日程であり、色々騒がしい特別実習になりそうな予感

は、全員の胸中にあった。

隙間時間にブレード総当たり戦を行う事になったが、普通にナギトが全勝した。

その後、列車は帝都ヘイムダル駅に到着し、Ⅶ組は揃って降りる。

案内人、というのが迎えに来るといふ話だったが、果たして現れたのはTMPのクレア・リーヴェルトだった。

件の案内人とやらが彼女かと思いきや、クレアは場所を提供するだけだと言う。

「丁度良かった」

そんな言葉で姿を現したのは、仕立ての良いスーツを着こなす理知的な壮年の男性。

その人物こそは《鉄血宰相》の盟友であり、平民初の帝都知事、カール・レーグニッツ。つまりはマキアスの父親だった。

カールとクレアに先導されるまま鉄道憲兵隊の詰所の一室に案内される。

そこで改めてカールはトールズ士官学院の3人いる常任理事の最後の1人だと名乗り、実習課題の受け渡しと宿泊場所の提供を行う旨を告げた。

カールは帝都知事という立場もあつてか忙しいようで、足早に去っていく。しかしこ

れまでの実習で邂逅したユーシスの父やアリサの母と比べると、かなりいいイメージを残して行ったのだった。

事実、オズボーン宰相と比較しても貴族派との軋轢も少ないようで、それすらも擬態ではないかという話も持ち上がったが、長居するわけにもいかず、クレアに案内されて駅の出口まで向かった。

カールの話によると、今回の実習は広い帝都を東西に分けて担当するという事らしい。その東西の分かれ目となるのが、駅を出て真つ直ぐドライケルス広場まで続く目抜き通り……ヴァンクール大通りだ。

駅を出てクレアといくつか言葉を交わして、別れるかと思つたが。

クレアはナギトと目が合うと悪戯に微笑んだ。

「ナギトさん……連絡をいただけず、残念です。私、待っていたんですよ？」

乙女チックに肩を抱いて視線は斜め下。その様子は完全に「待ちぼうけの幸薄美人」であり、つまるところクレア・リーヴェルトの役者っぷりが際立ち、ナギトは崖っぷちというわけだ。

それにナギトは絶句。事情を知らぬ4月のB班メンバーは目を白黒させ、事情を知るA班も視線を逸らすのみ。

「……すみません。えつとお…その件につきましては…目下反省中でして……」

何も良い文句が思い浮かばず、その場凌ぎの言霊を紡ぐ。

言つてから気づく。そもARCUUSでの通信などまだまだ普及してないのだから、連絡しても通じないのが常のはずなのだ。それをクレアはいかにも「よよよ」と言わんばかりに演じて……

次の瞬間、クレアはくすりと笑うといつもの将校然とした佇まいに戻り、敬礼した。

「皆さんにとつてこの実習が実りあるものである事を祈ります」

そんな定型文のような挨拶をして去っていく。

クレアの姿が駅に消え、Ⅶ組だけが取り残される。クレアのエリート感というか、スマート感に圧倒されていたⅦ組はようやく自我を取り戻した。

まず一声をあげたのはナギト。

「せめて誤解を解いて行ってくればなあ！」

☆☆

その後、懇切丁寧に誤解を解いてからB班と別れ、宿泊施設のあるアルト通りにトラムで移動する。

アルト通りにはエリオットの実家があるという事で、先にそちらに行く方針となった。

クレイグ宅ではエリオットが姉フィオナに暖かく帰宅を迎え入れられたり、音楽一家である事が明かされたり、父親が《紅毛のクレイグ》と渾名される帝国正規軍最強の中将である事が判明したが、特筆すべき事はなく茶をいただいた。

フィオナによると、A班の宿泊施設となる住所はどうやら活動停止している遊撃士協会支部のようで、今回の実習ではそこを仮宿に予定されていた。

宿泊施設の前まで行くと、そこが遊撃士協会支部であった事がわかる。しかしすでに支える籠手のエンブレムは外されており、寂れた建物のように見えた。

しかし外見は整っていて、理由としては2年程前に火事だかテロだかで建物が焼失し

ており、立て直したのだが、結局1年以上前に遊撃士協会は撤退したのだと。

「ああ、帝国遊撃士協会支部連続襲撃事件か」

「知ってるのか？」

ふと口に出た言葉だったそれを、リインが追求した。

「あ……いや。なんだろうな……俺の失われた記憶が関係してるのかも」

ナギトはそれを適当に躲した。可能性としてはありえるだろう。しかし……

その事件がリベール王国でクーデターを起こす前準備としてカシウス・ブライトを誘き寄せるための《身喰らう蛇》の罠である事。

この事件を理由として宰相オズボーンが遊撃士であるカシウスを帝国に入国させる事由を封殺するために遊撃士協会を撤退に追い込んだ事など、どうして知っているのだ。

不思議に思い／思われながらも、A班は宿泊施設に荷物を置くと、本日分の実習課題に取り組む事になった。

さまざまな街区をトラムで移動し、課題―依頼を解決していく。地下に降りて手配魔獣を討伐する際にはやはりラウラとフィーの連携が上手くいかず、決して良い雰囲気とは言えないままに夜を迎えた。

ちなみに、その途中で有名なオペラ歌手であるヴィータ・クロチルダに遭遇したのだが、エリオットとマキアスが思わぬミーハーを發揮。ナギトは「また会いましたね」というナンパムーブをかましたのだが、ヴィータが覚えておらずリインに「夢と混同するな」とツツコミを入れられる始末だった。

夕飯はクレイグ宅で世話になり、そのあとはエリオットの部屋で駄弁る流れに。

エリオットの部屋には様々な楽器が飾っており、店でも開けそうなラインナップだ。実際、エリオットの姉フィオナはこのクレイグ宅で音楽教室をやっているらしい。亡くなった母も音楽をやっていたという話だ。

まさに音楽一家というやつだ。エリオットも本当は音楽院に通いたかったそうだが、軍人である父親オーラフ・クレイグの猛反対にあい断念。せめて吹奏楽部のあるトールズ士官学院に入学する事にしたのだと。

しかし、そんな妥協で選んだツールズ士官学院に入学した事を後悔する事はないとエリオットは語る。

特別実習というカリキュラムもあり、視野が広げられそうな事もあり、漠然と音楽院に進むより、自分自身で自分の進む道を決める事ができるからだ。

「それに君たち——Ⅶ組のみんなと出会えたからね」

聞いてるだけでも赤面もののセリフに騒然となるA班一同だったが、

「でもナギトも先月の実習で、良い事を言ったらしいね？」

エリオットの大物感を讃える流れだったはずなのに、矛先は突如としてナギトに向いた。

エリオットの言う事に心当たりはある。実習2日目、夜の出来事だ。ノルドの夜空に魅せられてらしくない事を口走った気がする。

「それを誰に——ユーシスカあのやろうコロス」

エリオットに情報をリークしたであろうユーススへの殺意を募らせる事で注意を逸らそうとしたが、興味深々な視線は止む事を知らず。ついにナギトは観念した。

「ま、思い出って大切だよねって話さ。それにエリオットじゃないけど、俺もⅦ組のみんなに出会えたのは幸福に感じてんだぜ？」

あまり深掘りされたくはないため、話をエリオットの名言に沿っていく事にした。

「幸福とはまた…大袈裟だな」

「ちつとも大袈裟なんかじゃないとも、マキアス。…前にリインには言ったかな。俺はお前らと出会えて嬉しいんだ、楽しいんだ。だから浮かれてるんだ。俺は本来クールなキャラなんだよ？それが浮かれてるせいで失言が多くなつてポケキャラみたいに認知されてるだけで」

「ナギト…それは無理がある」

「クール、とは物静かな者に使う言葉だったはずだが……？」

「君たちそういうとこばつか息びつたしだなコンチクショー！」

フィーとラウラの苦言にナギトがツツコミを入れる。こんな日常が幸福なのだ。こんなやり取りさえ幸福なのだとなギトは語つたのだ。

その後、しばらくやり取りをしてからクレイグ宅を出る。エリオットを除いて宿泊施設に戻り、レポートをまとめる時間だ。

しかし、物憂げに夜空を見つめるラウラとフィーは示し合わせたように「戦おう」と言い出した。

どうやらエリオットの名言に感化され、いつまでもこのままでいいわけがないと悟つたらしい。

それで一戦交える事にするというのが、どうしてもこの2人らしかった。

☆★

ラウラとフィーの立ち合いはマールテル公園で行う事になった。夜間ともなれば人気もなく、多少の騒音は許容できるだろうと。

フィーと10歩ほど距離を取ったラウラは言う。この勝負で勝ったらフィーの過去を教えてほしいと。自分がフィーを認められなかったのは、猟兵の在り方を邪道だと思っていたからだ。しかしそれは勘違いであり、すでに心ではフィーを信頼できる仲間として認めていたと。だが騎士の在り方を正道とするラウラの頭がそれを認められず、その矛盾がARCUUSでの戦術リンクが上手く行かなかった原因だと。

言い切ったラウラを正面に見据え、フィーは言う。ラウラの正道の在り方が、自分を受け容れられないと諦めていた事を。

続けてフィーは問う。どうして自分の過去が知りたいのかと。

ラウラはフィーの事が好きだからだと言った。

ラウラの自己分析によると、見込んだ相手や気に入った相手の事を理解しないと気が済まないらしい。

「あれ、俺ってあんまり詮索されてねーよーな」

「はいはい、黙りなさい」

小声でボケて小声で流される。ナギト的には少しシヨックである。そういう意味で、ラウラはあまりナギトを理解しようとしていない。

やがてリインを立ち合い人としてラウラとフィーの勝負は始まった。

互いに全力を尽くし、戦技も振り絞った結果——引き分けに終わる。

しかしフィーは自分の負けだと認めた。夜間戦闘は猟兵の十八番であり、フラツシユグレネードを使ってさえ引き分けだったからだと理由を語る。

そして、約束を果たした。

孤児だったフィーを拾ったのは『西風の旅団』という猟兵団で、そこで仕事をしている内に『西風の妖精』と呼ばれるようになった事。

団長《猟兵王》ルトガー・クラウゼルが、西風の旅団と双壁と言われる『赤い星座』の団長《闘神》と相討ち、団長という大黒柱を失った西風の旅団のメンバーはどこかへと去り、独りとなったフィーを、サラが拾って今に至る、と。

「聞かれなかったから黙ってた」なんて言ったフィーだったが、語り終えた後はどこか清々しい表情をしていた。過去でも何でも隠し事があるのはストレスがかかるのだから

う。

スッキリした表情をしていたのはフィーだけでなくラウラも一緒だ。2人は幾許かの後、立ち上がるとそれぞれ得物を構えた。

「はっ！いいね、追試といくか！」

その意図にまず気づいたのはナギト。ラウラとフィーが望むのは実技テストのリベンジだ。

「まったく、仕方がないな！」

そう言いつつもリインも乗り気であり、マキアスに審判を任せると、夜の公園で再び刃が閃いた。

最初に仕掛けたのはフィーだった。風のような軽やかさでナギトに肉薄する。それは実技テストの焼き直しのように思える。

「芸がない——」

芸がないな、と言うつもりだった口角が歪む。フィーの迎撃に走らせた太刀は空を切り、その先から現れたのはラウラ。

これは実技テストでナギトとラインがやってみせたスイッチ——その簡易版だ。

ラウラの鉄砕刃が打ちつけられる。フィーにつられた体勢では受け流す事も出来ずに体ごと弾き飛ばされた。

続けてラウラは豪快に剣を振り抜き地裂斬を放つ。

「そりゃ甘いでしょー!」

孤影斬を放って打ち消し、反撃に——

「ナギト!」

「うえ?」

閃光、炸裂。

——反撃に、移れない。

ラインもフラッシュだ、とか言ってくれれば良かったのに。なんて心の中で愚痴りつつ視界を灼かれたままに太刀を振るう。孤月一閃。

「それは前に見た」

フィーの声で気づく。フラッシュグレネードを投げられてから反撃までの流れが一緒だと。

「ラウラー！」

「任せるがよい！」

2人の攻撃が重なる。ナギトはそれでK.O.だ。

ラインも2人の攻勢には勝てず、制圧される。

実技テストの追試は、ラウラとフィーに軍配が上がった。

帝都の夜空を見上げながらため息をつく。

「はくあ。負けちつたよ」

実力が発揮できなかったなんて、言い訳だ。実力を発揮させる前にラウラとファイが勝つたのだ。

疲労のせいか、同じように寝転がっていたラウラは立ち上がると、ナギトに手を差し伸べる。

「ほら、いつまで寝転がっているつもりだ？」

「ああ、ありがとう」

ナギトはそう言ってラウラの手を借りて立ち上がる。それと同時に夜の公園に警笛が鳴り響いた。

騒ぎを聞きつけた衛兵が駆けつけたのだ。迷惑のかからない公園を選んだつもりだったが、それでも誰かが通報しているものなのだろう。

その後、ナギトらA班（エリオット除く）はこつてり2時間ほどしぼられてから宿泊

施設に戻るのだった。

《劍鬼》再臨

7月特別実習の2日目が始まる。

エリオットを除くA班メンバーは、エリオットが宿泊施設に合流を果たすまで徹睡みに身を委ねていた。

理由は言わずもがな、昨夜衛兵にこつてりしぼられた後にレポートをまとめる必要があったからで、座学に苦手意識を持つナギトは一際ひどい有様であった。

ラウラとフィーの仲直りについて軽くエリオットに説明した後、実習課題に取り組む事になった。

課題については先日のリベンジという事もあつてか、ラウラとフィーが獅子奮迅の活躍を見せて完了させ——

「ここが僕の家だ。さ、遠慮せず入ってくれ」

——レーグニッツ宅に招待される事となった。

そして、マキアスは語った。

マキアスが貴族を憎悪していた理由——かつてレーグニッツ家を襲った悲劇を。

マキアスには9つ年上の従姉妹——姉さんがいた。父カールにとつて姪にあたる彼女は、カールの紹介で知り合った伯爵家の跡取りと婚姻に至り、それが原因となり自殺した。

カイエン公爵家の横槍や嫌がらせ、果てには婚約者からの「愛妾として大切にすから我慢してくれ」というセリフが決定打となつたらしい。

マキアスが語つたそれは、貴族嫌いになるには十分なエピソードだった。

しかし、ツールズに入学しⅦ組のメンバーと出会えた事で、貴族・平民関係なく結局は「その人」だとわかつたらしい。

それを示したのが、貴族でありながら尊大な振る舞いを見せないリインやラウラであつたとマキアスは言い、感謝を告げる。

「ユーシスのやつはともかく」なんて照れ隠しした事をエリオットにつつかれ、逆ギレを果たすマキアスも見ものであり、ナギトも笑つて冗談を言つてしまふ。

「そーいやリインとラウラだけか、ありがとうは?…おう?俺も結構面倒かけられた気

がするんだけどなあ」

——それが余計な事であつたと悟るのは、すぐあと。

「まあ、君にも感謝してるさナギト。だけど君は貴族っぽくないからな。ライン以上に」

ナギトも一応はシュバルツアー男爵家の男子として貴族生徒ではある。しかし幼少の頃から貴族として育つたラインとは違い、ナギトが貴族として過ごしたのは一年と少し。普段の振る舞いからしてもマキアスが「貴族っぽくない」というのも納得である。

「それに——、ここで言及させてもらおう。君は貴族らしくない∴貴族の見え透いた傲慢さはないが、別の意味で傲慢だ」

ナギトの目が細められる。マキアスの声が強張った。部屋の温度が、雰囲気冷水をかけられたかのように冷えた気がした。

「ナギト、君は色々な問題を一人で抱えているな？ それに加えて僕とユーシスの諍いも

仲裁したし、ラウラやフィーの仲を取り持とうともした。∴自分の記憶が、たった一年だけしかないにも関わらずだ」

マキアスの発言の意味は、少しだけ難しい。ほんの僅かに沈黙が落ちて、それを破つたのはエリオットだった。

「それってつまり、ナギトは記憶喪失——自分の背景、足場さえはつきりしない不安の中のはずなのに、どうして他人の事まで気にしてられるのか、って事だよな？」

「ああ、そうだ。良い機会だと思ってな、この場で問い質させてもらう」

マキアスはエリオットの解釈にYESと答え、再び視線をナギトに向ける。

「君はなぜそんなに余裕がある？自らの過去——記憶すら判然としないはずなのに。

それに、何か隠し事——悩み事をしているように思える。どうかそれを話してみる気はないか？」

マキアスの推測に、その慧眼に賞賛を送りたい気分になる。

確かにナギトにはⅦ組のみんなに隠している事がある。悩んでいる事がある。それを隠しつつ他人の問題に口を挟むのが傲慢だというのもわかる。

だが――

「そんな事言われてもなあ。人間誰しも隠し事はあるだろ、なあリイン？」

「あ、ああ…：そうだな」

――言う気はない。

理由は単純、*“怖い”*からだ。

だから、こんな簡単な言葉で誤魔化そうとする。リインの賛同も得て、特別実習に戻るように誘導――

「確かに誰にでも秘密はある。だけど君のそれは隠すべきものか？…：悪辣にリインの賛成を得てまで」

「——へえ？」

さらに。部屋の温度が下がる。あくまで体感だ。この夏の日に寒いと感じるほどの——感じるだけの悪寒。

口角を上げたナギトは、マキアスにそう思った理由を尋ねていた。

「簡単な話だ、リインも易々とは話せない秘密を抱えている。君はそれを知っている。だから “誰にでも隠し事はある” という理屈を振られたらリインは肯定するしかない」

「そう思った根拠は？」

「…そう言っている時点で認めてるも同然だろうが…：…あえて言うなら、今月の自由行動日、君たちの妹——エリゼお嬢さん、だったか。彼女が旧校舎に迷い込む事件があっただろう。僕らも遅れて駆けつけたが、すでに首無しの甲冑は倒されていた。…：…見ただけでわかる、あの強敵をだ」

「それは——」

マキアスの言葉にリインが口を挟みかける。しかしナギトに制されて黙り、続きを促した。

リインが気にしたのはマキアスが言及した秘密についてだ。

「あれを倒すには、少なくともⅦ組の総力を結集しなければ無理だったろう。いくらナギト、君がいたと言え、クロウ先輩の実力が未知数とは言え……だ。そしてあの場でのリインの消耗した姿——リインが何らかの力を発揮して、あの首無しを圧倒したのは明らかだ」

マキアスの推測に、ナギトは背もたれに体重を預けると自らの顎を撫でた。

「……よく見てる。だけどそれだけじゃ弱いと思うぜ?」

「そうだな。これだけじゃまだ憶測——、それを確信したのは実技テストでの事だ。ナギトとリインが組み、ラウラとフィーと対峙した際……君はリインに声をかけた。お前に何があるうと、この場には関係ない」だったか——おそらく、君なりの気遣いだった

んだらう……それが旧校舎での一件を指してるのはすぐにわかった」

「これが決め手だ」とマキアスは締めた。

ナギトは内心で驚いていた。本当に良く見ている。そんな小さなエピソード、小さな疑念を追求して真実に至るとは。

「……やっぱりお前は天才だよ、マキアス」

ユーシスが物事を俯瞰し、大枠を掴む才覚を持つとしたら、マキアスは理詰めで細部を埋める天才だ。本当に、なんて相性の良い……

「僕が天才なら君は化け物だ、ナギト」

そんな、蔑称のような賞賛を受ける。マキアスは真つ直ぐにナギトを見つめている。その目には畏怖や侮蔑ではなく、憐憫と疑問があった。

「——どうして君は、自己の拠り所となる記憶がないまま、他人の面倒まで見ていられる

んだ」

こうして、最初の質問まで回帰した。しかし今度は逃げ道はない。ナギトは自嘲と諦観のため「はっ」と笑った。

「そりゃあ——俺が、弱いからだな」

そして、端的に回答した。

「それは——」

どういう意味だ、とマキアスが声を発する前に、リインのARBUSが着信音を鳴らした。

すかさず応答したリイン。相手はカールのようで、どうやら《怪盗B》案件でこちらに連絡したという話だ。

通話を終えたリインがその内容を告げると、ナギトは殊更いやらしく笑って立ち上がり、切り替えるようにパン、と掌同士を打ちつけた。

「じゃ、この件はここまでだな！続きはまたの機会つて事で。特別実習に戻りましょー！」

☆★

その後、《怪盗B》に盗まれたティアラを取り戻し、店に返還した所で再びリンのARCUSに通信が入る。今度はサラからだ。オスト地区にある「聖アストラリア女学院」に行つてほしいとの事。

女学院前でB班と合流し、女学院の案内人たるエリゼに先導されて、女学院内を歩く。女の園である女学院の女子たちは物珍しさかエリゼに案内されるⅦ組メンバーを見て、好意的な反応：「とうかミーハー的なそれを見せる。ナギトもサービス精神で手を振つてみるが当然のようにリンに手刀を入れられた。先程マキアスとぎすぎすしたやり取りを交わしたとは思えないほどのいつものナギトらしさが発揮されていた。

ややあつて案内された先にいたのは、帝国の至宝と呼ばれる片割れ——皇女アルフィン・ライゼ・アルノールだった。

可愛らしく、お転婆な様を垣間見せる彼女は、なるほど確かに皇子オリヴァルトの血

を分けた兄妹らしい。

アルフィンと会話している途中で、リユートの音が響く。噂をすれば影、オリヴァルトの登場だった。オリヴァルトの軽妙な自己紹介の後、皇族2人とⅦ組で会食を行う事になった。

会食の場で明かされたのは、Ⅶ組についての真実だった。

トールズ士官学院に特科クラス《Ⅶ組》を設立しようと提案したのは理事長たるオリヴァルト本人という事だった。しかし今やⅦ組の運用からオリヴァルトは外れており、常任理事の3人——ルーファス・アルバレア、カール・レーグニッツ、イリーナ・ラインフォルトが特別実習の行き先などを決定しているらしい。

そしてⅦ組が生み出された理由——すなわちオリヴァルトの狙いは、貴族派と革新の対立だけでなく、伝統や宗教と技術革新、帝国とそれ以外の国や自治州までも含めて。

この激動の事態に必ず現れる《壁》から目を背けず、自ら考えて主体的に行動する。

——そんな資質を、若い世代に期待したいのだと。

さらにオリヴァルトはⅦ組運用の強力な助っ人として、サラを雇えた事を僥倖と語る。Ⅶ組メンバーの反応は散々だったが、サラの前職が遊撃士である事が明かされた。

しかも、帝国で指折りの実力者、最年少A級遊撃士、《紫電のバレストアイン》…そんな美辞麗句でサラを飾り付け——会食は終わりを迎えたのだった。

その後、準備にもたつくフリをしてⅦ組のメンバーが出て行ったのを見計らってオリヴァルトに話しかけてみる。

「つかぬ事をお聞きしますが……ひよつとしてオリビエ・レンハイム？」

「おっ？ それは不世出の天才音楽家たる僕の名じゃないか。もしかしてラジオ聞いてくれてる？」

「ああ、やっぱり！ 声でわかったんですよ。ラジオ聞いてます、毎週楽しみで」

「おお、それは良かった。毎週毎週、危ない橋を渡っている甲斐があるね」

ナギトとオリヴァルトが言うラジオとは、ラジオ番組「オリビエ・レンハイムのリベール旅日記」というものだ。物語は漂白の天才音楽家オリビエがリベールで投獄さ

れている所から始まる。今は王都で武術大会に参加しているところだ。

「危ない橋つて…まさかとは思いますが…」

「それは言わぬが花つてやつさ。………そういえば君とは前に会ったね。覚えているかい？」

「はい、まさか学院の入学試験…面接を理事長自ら…オリヴァルト皇子がされるとは思いませんでしたよ」

「ふふ、サプライズになったようで何よりだ。……君はあの時、尋ねられた事を覚えているかい？」

オリヴァルトの顔は笑っていたし、声も和やかだった。しかし目がそうでない事をナギトは看破した。

オリヴァルトが言っているのは、あの面接の最後の質問の事だ。

「自分の答えは変わっていません。……むしろより強く、決意しました」

“もし君がツールズに入学したとして、卒業する頃には色々な力を持つ事になるだろう。個人の武、軍事に関する知識、ツールズ卒業生のコネクション……そういった力を、君はどう使う？”

“「自分の大切な人たちを守るために」”

記憶を反芻し、ゆっくりと瞬きをしてからナギトは答えた。それを受けてオリヴァルトもやんわりと微笑む。それから———少しだけ視線を下げた。瞳に陰が差す。それがいったい何の時間なのか———決意の時間だとナギトは受け取った。

一呼吸の空白があつて、オリヴァルトは開口した。

「……………実はね、僕は君の運命を変えてしまっているかもしれないんだ」

その発言の意図を、ナギトは読み取れない。それを考えるより先に、とんでもない衝撃を受けた気がしたからだ。

——運命を変える。

それはいつから聞こえた俺たちの声。

「それ、は……どういう………」

当然のように聞き返す。すでに意を決しているオリヴァルトはナギトとは対照的に、なんの淀みもなく回答した。

「Ⅶ組に所属する前提条件として、ARCSの適正が高い事は君も知っているだろう。そして、君のARCSの適正が低い事も。君のARCSへの適正の低さは、実はⅦ組へ入る基準値を下回っていたんだ。それだけじゃない。君は入学の筆記試験でも合格基準を下回っていた。…それでも君がツールズ士官学院に入学できた理由は——」

再びの空白。今度のそれは、きつとナギトに決意を固めさせるためのものだ。

「君という存在を、監視下に置いておきたかった…というものだ」

理解と、納得。

諦観と、恐怖。

「おーいナギト、早く来いよ」

沈黙を破ったのはドアからひよっこり顔を覗かせたリインだった。

オリヴァルトとナギトの重苦しい雰囲気は瞬時に霧散した。どちらもが道化ぶる事になれているが故の仮面だ。

「オリヴァルト殿下…もしかしてナギトが何かされましたか？」

「お前はなんで俺が失礼を働いた前提なの」

ナギトとリインの、そんな義兄弟漫才をオリヴァルトは優しく笑う。

「少し話をね。…なに、もう終わったところだ。引き止めて悪かったね、ナギトくん。それでは君たちは青春を謳歌するため、明日に向かって走り出したまえっ！」

ナギトを凌駕するオリヴァルトのお調子者の様子を今度はリインと2人で笑い、会食の場を離れた。

女学院の外でサラとクレアと出会い、明日の実習課題は中止である事が伝えられた。理由は、明日から始まる夏至祭——それをテロリストが狙う可能性を危惧してのものだった。

☆★

テロは起きた。

クレア・リーヴェルトの危惧の通りに。

やつらの思い通りに。

俺たちが観測してきた物語と狂いなく

昨夜の内にⅦ組はA班東、B班は西、と帝都を東西に分けて警備を行う手筈に決まった。

——と言っても所詮は遊撃という役回り：帝都憲兵隊や鉄道憲兵隊と比較すればあくまでおまけ程度のものだ。

だから、帝都各所で情報を得ても“テロリストが何か計画しているかもしれない”というくらいに感覚しか得られなかった。

最後にドライケルス広場に足を運んだナギトラA班は、そこでトワとアンゼリカ、さらには競馬見物に来ていたクロウと合流した。

9人で話していると、突如として広場の噴水から水が溢れ出した。

普通に考えれば、圧力の調整をミスった、あるいは夏至祭の余興などの可能性もあったが、

——続いてマンホールからも水が噴き出した。

「——釣りだな」

ナギトの発言を耳にして、状況理解に努めていた全員が合点がいった顔ををした。

この状況は、テロリストの仕掛け——つまりは本命から注意を逸らすための罠だと。

「囷って事か！」

わかりやすい答えをラインが提示し、A班のメンバーは何が起こるのかを予見した。役割分担という事でトワたち上級生とは分かれて行動する事になる。

テロリストの狙いはおそらく、夏至祭で警護の手薄になった皇族の身柄だろう。この帝国において最も尊き血族とされる者の命を救うためなら政府はどんな要求も呑まざるを得ないし、なによりテロリストにとって“皇族を誘拐できる手腕を持つ”という示威行為にもなる。

ナギトらA班は受け持ちである帝都東部…本日皇族であるアルフィンがイベントに参加する事になっているマーテル公園—クリスタルガーデンに急行した。

しかしテロリストの方が一手早い。

魔獣を市街に放ち、混乱を誘う。その対応のためにアルフィンの警護は更に手薄になる。そこを急襲し、アルフィンと——その付き人として行事に参加していたエリゼの身柄を押さえた。

テロリストたちは淀みない動作で爆弾を起爆させるとクリスタルガーデンに穴を開けた。その下には一昨日からナギトらが何度か足を運んだ帝都の地下道がある。

「用意は周到ってか！くそが！」

テロという行為は、言わば盤外からの一手。しかしそれは相手と同等の力量、勢力がないからこそその手段だ。

だからこそその一手で、相手を殺す——そんな気概が求められるのだ。このテロリストたちにはそれがあつた。後先を考えない突発的な行動ではない。おそらくは何ヶ月も前から入念に仕込まれていた……敵を死に至らしめる一手に繋がる作戦だ。

ナギトたちはテロリストを追って穴に飛び込んだ。

追手を見てテロリスト——リインらがノルドでも出会ったという《G》は笛を吹いた。

不気味な音色が奏でられたかと思うと、魔獣がナギトラA班の前に立ち塞がる。

これと似た場面がケルディックであった気がするし、おそらくはその時の下手人もこの《G》であると直感したナギトだったが、そういつた思考はすぐに隅に追いやられる。視界は明瞭。思考は重く、肚も重い。

反面、身体は軽く、足は素早く、太刀を握る手は力強く。歯はぎりぎりと言を立てている。

「——疾風」

殲滅。立ち塞がった魔獣は、しかしその役目を果たす事なく死に絶えた。

いやに身体の調子が良かった。

精神が肉体を凌駕する——否。精神の昂りが肉体にも影響を及ぼしている。

簡単に、簡潔に、陳腐に、表現すると——ナギト・シユバルツァーはキレていた。

それは昨夜、同じ釜の飯を食ったアルフィンやエリゼが攫われているからか。2人の命が奪われる可能性を恐れたからか。

そんな事はいえない、という「確信」があつた。しかし、不安が勝る。

それはきつと、エリゼを旧校舎で助けてから抱いている違和感のせいだった。

テロリストとの追走劇は続く。逃げるテロリストを幫助するかのように再び魔獣がA班の前に現れた。今度の魔獣は悪魔のような造形をした、先ほどとは比較にならないほど凶悪なオーラを纏っている。

「邪魔——だあ——！」

大いなる雷よ、我が太刀に宿れ。

「——雷神烈破——！」

刹那、こんな地下にはありえない雷鳴が轟いた。

光色のナギトの分け身が5体生まれたかと思うと、雷を引き連れて魔獣に突撃する。その間にナギトは太刀に雷を収束させると振り抜いた。

魔獣の肉体が砕け散った。太刀を納刀する。

「ナ……ナギト……？！」

尋常ならざる様子のナギトにリインは恐る恐る名前を呼んでみた。

「急ぐぞ」

ナギトは一瞬だけ目を合わせると、すぐに走り出す。問答は無用で無駄なのだ、その背中では言外に語っていた。

身体の調子がこれ以上ないほど軽い。自分が《劍鬼》と呼ばれていたらしい当時の実力を発揮できる無我の時に近いレベルだ。

その代わり、思考には靄がかかっている。無我の際に思考が白むよりはマシ。
——つまりナギト・シュバルツァー史上最高のコンディションだった。

ひとつ、ふたつ暗闇を超えてテロリストに追いつく。すでに地下道の広い場所に出つつあり、そこには何らかの死骸——骨が散らばっている。その横を通り過ぎようとするテロリストたちの小脇には眠らされたエリゼとアルフィンが抱えられていて、その姿を視認して、また思考が灼けついた。

雷が疾る。迅雷。雷速の斬撃がテロリストを直撃した。

「ぐあつ!？」

こぼれ落ちたエリゼの体をキャッチして、倒れ込んだテロリストの顔面に仮面越しに蹴りを入れる。首がいやな方向に曲がった。

「お前ら全員……殺すぞ……!」

ナギトから放たれた濃密なプレッシャー。それはまさしく鬼気であった。

「ひっ」

息を飲んだのはアルフィンを抱えたテロリストの1人。すでにそれが隙だった。再び雷が閃く。

腹部をバツサリと斬られたテロリストは倒れ込んで血を流した。

その血の海に沈む前にアルフィンを確保。疾風の歩法で退いて寝かせたエリゼも連れて下がる。

これであとは《G》だけ。リインたちも参戦して、本格的にテロリストを拘束するという段に至り――

――血を流して倒れていたはずのテロリストが、決死の形相で立ち上がるとナギトラに襲いかかってきた。

「今更――ッ、リイン！」

いつもならもつと早く、その狙いに気づいていただろう。しかしキレている――思考に霧がかかっているせいで、テロリストの狙いに気づくのが遅れた。

笛の音が鳴り響く。《G》の魔笛。魔獣を操る――おそらくはアーティファクト。

ナギトは向かってくるテロリストにトドメを刺し、リインは《G》の笛を斬る――が、すでに遅い。

魔笛はすでに効力を発揮していた。

それは最悪の敵を呼び覚ます。

帝都地下に打ち捨てられた、数百年前の厄災。時の帝都を死の都に変貌させた暗黒竜。討伐されてなお、呪いを宿した竜骨。

ゾロⅡアグルーガ——その死骸が、動き出す。

テロリストが逃走ルートにここを選んだのも、今のような状況に陥ってなお、ゾロⅡアグルーガという切札があったからだと推測される。

暗黒竜の脅威を語った《G》——ギデオンはすでに勝った気なのか、追手であるナギトたちから逃げる素振りも見せずに高みの見物に入っていた。

だが——

「だが、俺たちがこの実習で得られたものを考えれば、決して勝てない相手ではないはずだ！」

——リインの言う通り、勝てない敵ではない。

ゾロⅡアグルーガはすでに過去の遺物。例え史上の怪物であろうとも、今や骨だけの肉さえ持たぬ竜に、絶望する理由はなかった。

フィーとラウラの連撃に暗黒竜の巨軀が揺れる。マキアスの銃撃が脆くなった骨を砕き、エリオットのアーツが吹き飛ばす。ラインの焔の太刀が暗黒竜の骨を髓まで焦がし。

「三ノ太刀、破空！」

ナギトによる膨大な剣気の圧力をもって、その全身はバラバラとなった。

「——そんな馬鹿な……」

あり得ない、信じたくない光景を前にギデオンは立ちすくむ事しかできなかつた。

そんなギデオンにラインが太刀を突きつけた。ケルディックに始まり、ノルドを経て帝都に至った因縁も、これで終わり。「今度こそ終わりだ」と言つて。

一瞬の沈黙。それを破るかのように銃声が響いた。狙われたフィーは危なげなく避

けたが――

――間断なく、今度は人が降ってきた。

振るわれた剣が、しなる。

ファイを狙った剣をナギトが弾き返した。

その剣――蛇腹剣や法剣と呼ばれる武装を持つ女の横に巨体の男が着地した。

「同志《S》、それに同志《V》……」

ギデオンの「同志」という言葉から推測すると、新たに現れた男女は、テロリストの仲間のようだ。しかも、おそらくこの作戦を指揮していたと思われる《G》と同格の幹部。

しかし、現れたのは《S》と《V》だけではなかった。彼と彼女が飛び降りてきた階段を悠々と降りてくる、黒い仮面に黒い外套という黒づくめの男。

「《C》…君まで。私の作戦はそんなに頼りなく見えたかな？」

「いや、ほぼ完璧に見えた。しかし、作戦には常に不確定要素が入り込む。そこにいるVII組の諸君のようにな」

ギデオンの言葉に《C》は答える。当然のように合成音声が使われていた。

それだけじゃない。《C》を見てからというもの、ナギトの内に声が響いている。

——変えろ——

——運命を、変えろ——

響く、響く、声。

それは、それは、それは——

「来い、相手をしてやろう」

現れた《C》はリインとフィー、ラウラと同時に相手取るようだった。

「おつと、テメエはこつちだ」

当然のように参加しようとして、《V》と《S》に阻まれた。

「くつ、いかにも強そうだが…」

「やるしかない…！サポートするよ！」

ナギトの後ろにはマキアスとエリオットが回り、3人で《V》と《S》を相手取る算段だ。

「さがつてろ」

短い言葉。ナギトから思考が失われつつあった。

キレて思考に霧がかかっている事に加え、脳内に響く声が残った思考すらかき消す。短く発したそれは、自ら無思考状態になるのを阻害させないための措置。

つまり、《劍鬼》の全盛を取り戻すための――

「――雷光撃」

迅雷の速度を保ちながら疾風の如き柔軟性を有した戦技。雷速で刻まれる斬撃を《V》と《S》は辛うじて防ぐ。

《V》のガトリングガンが火を吹く。ナギトを捉えられない。《S》の法剣が変幻自在の斬撃を描く。ナギトを捉えられない。

「――遅い」

劍鬼七式、三ノ太刀改メ

「破空　：　突」

太刀に込められた剣気が一気に解放され、それは圧力となって敵を襲う――それが剣

鬼七式、三ノ太刀 破空だ。

この剣技はその改良バージョン。剣気を解放する方向を限定した技。放たれた圧力はそれこそ破壊的な質量を感じさせる。《V》と《S》は対応はできずに吹き飛ばされるのみだった。

ナギトが決着をつけたのと同じ頃、《C》もまたリインら3人を下していた。自ずと視線が交わった。

「フ…やるつもりかね？」

《C》の言葉にナギトは答える事もなく太刀を構え――

「――はああ！」

――それを、迎撃に回した。

またもや舞台の外からの攻撃――テロリストの更なる援軍だ。打ち付けられた斬撃は存外重く、ナギトは後退りをした。

「来たな、同志《R》——」

新たな仲間の登場を《C》は言祝ぐ。腕を広げて歓迎の意を表した。

《R》は白銀の髪を後ろに流し、顔面上部を鬼面で隠した男だ。

そして続く言葉に、ナギトは無我を奪われるほどの衝撃を受けた。

「——いや、《剣鬼》よ」

《C》の視線は新しく現れた《R》に向けられている。必然、先程の言葉も《R》に向けられたもので。

だからナギトは揺さぶられた。

《剣鬼》とは、己の過去と思っていたがゆえに。

《剣鬼》という過去から、逃れられるかもしれないと期待したがゆえに。

あるいは、《剣鬼》という過去が分離したのが《R》で、だから自分には記憶がないの

だ——そんなありえない考えさえ生まれて。

「どういう…事だ!？」 《剣鬼》とは…俺なんじゃないのか!？」

だから、そんな幻想を振り払うためにナギトは叫んだ。その問いに《C》は回答する。

「そもそも《剣鬼》の正体は誰も知らない。誰かに君の過去が《剣鬼》であると吹き込まれたのかな?」

《剣鬼》の正体は誰も知らない——?」

ナギトの思考はまとまらず、《C》は追い打ちをかけるように続けた。

「誰もが君を《剣鬼》と信じ、そう語る。…滑稽な話だ。本物の《剣鬼》…共和国要人100人殺しの英傑は、こちらにいると言うのに」

そしてここで、《剣鬼》の罪科さえ明かされた。

共和国の要人を100人も殺した男。それが《剣鬼》だと《C》は言う。

「聞いたことがある……当時の共和国大統領の反対派議員とその秘書、合わせて100名が10日の内に暗殺された事件……犯人は捕まらなかつたらしいが……まさかその男がそうだと言うのか……！」

詳らかに語つたのはマキアスだった。続いてエリオットやリイン、ラウラ、フィーまでもが「一時期騒ぎになつた」と覚えがあるらしい。

ナギトは押し黙つたままだつた。

言うべき言葉が見つからず。肯定は遠く、否定もまた遠い。

思考回路は働く事をやめ、同時に身体も戦う気力を失つていた。

そんなナギトに代わり、リインが《C》に。その隣に立つ《R》に、ダメージから復帰した《V》と《S》に、「お前たちは何者だ、何が目的だ」と問いかける。

「我々は《帝国解放戦線》——本日よりそう名乗らせてもらう。静かなる怒りの焔をたたえ、度し難き独裁者に鉄槌を下す——まあ、そういつた集団だ」

《C》はすでにナギトから視線を離していた。敵たり得ないと判じたからだ。そうして名乗りを上げる。《帝国解放戦線》と。独裁者を討ち倒すための組織であると。

サラとクレアが駆けつける。それと同時に《C》は懐からスイッチを取り出すと押し。爆音が鳴り響き、地下道が崩落を始める。

《帝国解放戦線》も離脱し、ナギトらも地下道を脱出した。

☆★

その後。A班は事情聴取を受ける事になったが、ナギトは上の空だった。

—— 運命を変えろという声。

—— 《剣鬼》の罪。

—— 《剣鬼》と呼ばれた男。

答えの出ないそれらが頭の中をぐるぐると回る。

そうしていつしか時間は過ぎ——Ⅶ組はバルフレイム宮に招かれていた。どうやら今回の功績——皇族をテロリストの手から救い出した事が評価されたらしい。

迎賓口にてオリヴァルトをはじめとした皇族—アルフィンと、その双子である皇太子セドリックにも礼を言われる。同席したエリゼやカールからも同じように感謝された。

その内、話は《帝国解放戦線》に移り、今回の件から彼らが単なる革命家気取りではなく、計画性と実行力から、本物のテロリストであるという認識に至った事を聞かされた。

そんな中でもナギトは思考に埋没していて——

「——どうやらお揃いのようですな」

——その声に、現実を引き戻された。

「オズボーン宰相！」とセドリックが喜色ばんだ声音で彼を迎え入れた。

体格の良い彼は、元は軍人だったという。

国民の安寧は鉄と血によるべし——そんな思想を掲げる事からついた渾名が《鉄血宰

相》。

皇帝からの信任を良い事に辣腕を振るう、帝国政府の代表者——ギリアス・オズボーンだ。

彼が宰相という地位についてからと言うもの、いったいどれだけの民が辛酸を舐めさせられた事だろう。涙を飲んだだろう。苦渋の決断を下したのだろう。しかし、そのように流れた血を帳消しにするかのようにはオズボーンは帝国に繁栄を齎している。

それでも歪みは絶対にある。それが顕在化したのが件の《帝国解放戦線》なのだ。彼らの言う「度し難き独裁者」というのはギリアス・オズボーンを指していた。

オズボーンは皇族への礼を示し、アルフィンが無事を喜ぶとオリヴァルトに《帝国解放戦線》を全国指命手配にした旨を伝えた後、VII組に向き直る。

「どうやら帝国全土を又にかける特別実習も手伝って興味深いなどと嘯いた。加えてサラ——遊撃士との因縁も深い事を感じさせる。」

「諸君らも……どうか健やかに、強き絆を育み、鋼の意志と肉体を養って欲しい」
オズボーンにとって、それはきつと何でもないのである。目蓋を閉じて、開くだけ。しかしそれだけの動作が圧力を感じさせるほどの風格が彼にはあった。

「——これからの『激動の時代』に備えてな」

革新派と貴族派の対立が深まる現状さえ、『激動の時代』の序曲であるという宣言に似た言葉をもって——帝都での実習は終わりを告げたのだった。

セルリアンブルーの

唐突ではあるが、ラウラ・S・アルゼイドは決意した。

準備は万端。建前も用意済み。どう切り出すか練習もした。

あとはバックンバックン鳴っている鼓動をどうにかして鎮めれば。

「すー…はー…」

深呼吸をして落ち着く。ノックをしようとして手を持ち上げる。そのままドアを叩こうとして、空振った。

「はわっ!?!」

ドアが開いたのだ。あまりの驚きに奇声をあげたラウラを、その部屋の主人——ナギトは「ぶっ」と吹き出した。

「な、なな…なぜ…?」

ナギトも退室しようとしていて、偶然ドアを開けたわけでもなさそうだった。ならばどうしてラウラの来訪に気づいたのか…そう問いたかったが、慌てたままでは言葉にならない。

「いやまあ、部屋の前でそんなにそわそわされたらわかるわ」

「そ…そうか、そうだな」と理解を示す。考えていたセリフはすべて吹っ飛んでいた。こうなった以上は直球勝負しかないというラウラは意気込んで「ごほん」と咳払い。

「…ところでナギト。今日は良い天気だぞ? どうだ、予定がないなら付き合っってはくれぬか?」

恐るべき話題の変わり方だった。わざとらしすぎる。その間にナギトの視線はラウラの全身を舐めるように流し見した。

こういう視線が、いやらしいと思う。

この視線は別にラウラを視姦——する意図も少しはあるかもしれないが——しているわけではなく、周りの事情を把握するための観察だ。

きつと今ので、ラウラが隠したかった指の絆創膏も見られてしまった。

ナギトは少しだけ考える素振りを見せると、らしくなく柔らかに微笑んで「ああ、付き合うよ」と言った。

☆★

8月の自由行動日。すでに制服も半袖シャツになってひと月以上経つと言うのに、体感温度は高まるばかり。

そんな中、ナギトはまんじりともせずベッドに寝転がって天井を眺めていた。

先月の実習では、いろんな事が起き過ぎた。

マキアスによるナギトの危うさへの追求——もう目を逸らす事のできない問題だ。

オリヴァルトから聞いたナギトがトールズに入学できた理由。

《C》が語る《剣鬼》の正体。

希望と絶望がごちゃ混ぜになって感情のパロメーターは最大値と最小値を行ったり

来たり。思考は常に渦を巻いてナギトを捕らえて離さない。

何の束縛もないはずなのに、雁字搦めの感覚だ。

「なんか、疲れたな……………」

呟いて、口を動かした感触で空虚だった現実感に色がついた。

思い立つ。せつかくの自由行動日だ、有意義に使わねば。

半ば義務感で起きあがろうとして、部屋の外に何者かの気配を感じた。ラウラだ。ナギトは何も考えずにドアを開いてラウラを出迎える事にした。

ドアを開く。そうしたらラウラの拳が空振りした。どうやらノックをしようとしていたらしい。奇跡的なタイミングでドアを開いてしまったようだった。

「はわっ!」とらしくない驚き方にナギトも思わず笑ってしまう。それからラウラは急に話題を変えて「付き合ってはくれぬか?」と尋ねてきた。

そこでナギトはラウラが手に持つバスケットと、指に巻かれた絆創膏を見つけた。察するに、料理を作ったから味見を頼むという所だろう。

「ああ、付き合うよ」

リンから毎度の如く頼まれる旧校舎の探索までは暇だし、昼食を馳走してくれるというなら否やはない。

ナギトは準備を手早く済ませると、ラウラと共に街道に出た。周囲の魔獣を掃討していたら丁度昼飯時になる。適当な場所に座るとラウラは持つてきていたバスケットを開けた。中身は弁当がはいっていた。

「どうやらいつぞや言っていた女子力云々という問題に対して『料理をする』という回答をラウラは出したようだ。」

「いただきます」と言って、頬を赤らめたラウラから弁当を受け取って食べ始めた。

「ど…どうだ…どう？」

もぐもぐぱくぱくと平らげて、不安げに眉根を寄せるラウラに笑顔を見せる。

「美味しいよ。…さては隠し味に愛情を込めたな？」

「ふふ。愛情は隠し味ではなく料理の基本だとシャロンさんは言っていた」

ナギトにつられるように、ではないがラウラも微笑んで冗談に付き合った。

「基本にして極意。料理において愛情とはそういうものらしい」

「基本にして極意、か……、ふ。剣にも通じそんな教えだな？」

「やはりそなたもそう思うか？ 何事も基本が大事という事だな」

ラウラはナギトの言葉に食いつく。そして己なりの納得を見つけたようだった。そして「動くな」と言ったかと思うと、ラウラの手はナギトに伸びてきた。

その手はナギトの頬にくっついた米粒を掴むと自らの口に運んだ。

ひよい、ぱく……つてやつですなこれ。

「んんっ」

ほんの少しだけ“ひよい、ぱくやつてくれねーかな”なんて考えがあつて米粒つけて

たのもわざとだったけど、まさか本当にやってくれるとは思わなかった。胸キyunがやばい。

しかし瞬時に7割方取り繕うと、ラウラから目を逸らして言う。

「あのね？ラウラ。さつきみたいなのはあんまりやっちゃいけないよ？」

じゃないと「あれ？ひよつとして脈アリ？」とかなってしまう可能性がある。

ラインとか、ラインとか。主にラインとか。

ラウラはそんな風にうろたえるナギトに、さして照れもせずと言った。

「私とて誰にでもするわけではないぞ。そなただからしたのだ」

「……………ヴェツ!？」

取り繕った7割の平静が瞬時に消し飛んだ。

「ど、どうしたナギト？」

「いや、え？え？ちよ、まって。まってまってまって」

え、なに？ひよつとして脈アリなの？

あれ、どう言う意味か尋ねるのは野暮なのかこれ。いつたいどうしちやつたんだラウラ。ナギトの心を揺さぶる試し事でもしているのか。

ナギトは立ち上がると、大仰に深呼吸をしてみせる。ようやく少し落ち着いたところで、先ほどと同じようにラウラの隣に座った。

沈黙が木霊する。

一陣の風が吹く。

沈黙の気まぜきは風が吹き飛ばしていた。

遠くの空を見つめるラウラの瞳は、出会った頃と変わらない輝きを湛えている。

「変わらない美しさ」でも形容しようか。人は変わる。それはラウラも然りだ。しかし、ラウラは目標に向かって進んでいる。

その変化は……目標に向かってただ進む強さは、出会った頃と変わっていない。

ナギトにとってラウラが眩しく見えるのは、きっとそれが理由だ。ラウラがいつまでも正道を歩む剣士だから、ナギトはそこに惹かれているのだ。

自問してみる。ナギトにその強さはあるだろうか？

ただリインに付いてツールズに入学しただけ。

目標もないし、将来の明確なビジョンもない。

そもそも、記憶のない己に目標を定めろというのが間違いなんだ、と日々自分を騙す毎日だけが続いている。

そんなやつが、果たして「強い」と言えるだろうか。

「……私たちがツールズに入学してから、もう半年近くも経つのか」

ラウラは空から視線を離さずに、突然語りかけてきた。ナギトもまた、一瞬だけラウラを見たがすぐ空に視線を戻す。

「そうだな。もう半年……か。早いもんだな」

学院での授業。特別実習。その他もろもろ、キツイ事はあったし、今だって辛い事は

ある。

でも楽しいのだ。浮かれているのだ。ラインと一緒に入学できて、Ⅶ組のみんなと出会って。明日に不安なんて抱かずに眠って、起きたらまた楽しい日々が始まると信じられる。

だから、誤魔化せていた問題がある。

ナギトの……ナギトの過去の物語から目を逸らせていた。

しかし、ツールズに入学し、特別実習を経て様々な記憶が甦りつつある。

——《剣鬼》であつた過去が、思い出された。

だが——、わからなくなつた。

ナギトは過去に《剣鬼》と呼ばれた剣士であつた。

——そこまでは、いい。受け入れられていた。

問題はその先だ。

《剣鬼》の犯した罪——隣国カルバードにおける大量殺人。しかもそのすべてが政治屋だつた事から、国政を乱した罪まで加算されている。この事からカルバード共和国は近隣諸国に《剣鬼》を指名手配している。

そんな男を、ツールズ士官学院は入学させた。オリヴァルト曰く「監視目的」らしいが、果たしてそんな人物を教育機関に入れていいものか。共和国に売り渡した方がよっぽど良いはずだ。

そして《帝国解放戦線》の《C》の言葉——《剣鬼》の正体は誰も知らず、しかし同志《R》こそが《剣鬼》なのだ。

——確かに、国の政治を乱す目的が《剣鬼》にあるのなら《帝国解放戦線》のメンバーである事は不自然ではないかもしれない。

ならば、ナギトの記憶はどうだ？ 過去の記憶で自分は《剣鬼》と呼ばれていた。しかし、強者感を演出するために、あえて否定しなかった説もある……。自分ならやりかねないと思ったのだ。

そうして、自分が《剣鬼》という殺人者であるか否か——そんな疑問に囚われている。

「この半年の間……友人としてナギトを見てきて——正直、私では敵わないと思ったよ」

「——え？」

ラウラの言葉に、反応が遅れた。いや正しく反応すらできていない。それがあまりにも予想外だったからだ。

ラウラが語るのは単に戦闘力の話ではない。だからこそ、その賞賛はありえないのだ。

「そなたは強い。…少し悲しくなるほどにな」

ラウラは言葉通りに悲しげな表情のまま——困ったように笑った。

「先月の実習でマキアスが言った通り、ナギト…そなたは記憶喪失というどうしようもない不安の中にあつてなお、我らⅦ組の面々を援けてくれている。…それは紛れもない“強さ”だ。対する私は先月までフィーとの事でうじうじと悩んだままだった。

——ほら、敵わないというのも納得できるである？」

その顔のまま、ラウラはナギトに視線を向けた。空はいやになるほど晴れていて、ラウラの琥珀色の瞳がやけに輝いて見えた。

「いいや。それは違うよ」

ナギトは一瞬だけラウラを目を合わせて、逃げるように視線を外した。

「俺は……自分の問題から逃げてヘラヘラしてただけ。……いや、ヘラヘラしてるフリをしてただけ。マキアスとユーシスの喧嘩の仲裁なんかをしたのも、自分の問題から目を逸らすためにした事だよ」

ナギトからラウラに初めて送られる、弱音。

いつもヘラヘラしていて、兄貴然としていて、頼り甲斐のある男はそこにはおらず。身の丈に合わない荷物を背負わされた、等身大の人間の姿がそこにはあった。

そんなナギトにラウラはかける言葉を見つけれない。思わず逃げ出したくなるほどの闇を見た気がした。

ぼしん、と乾いた音がした。

見ると、ラウラは自分の頬に手を打ち付けている。

突然の行動に絶句したナギトを、ラウラの琥珀色の視線が貫いた。

「何を言うかと思えば、そんな事はそなたの弱さの証明にはならぬ。事実、そなたのおかげでユーシスやマキアス、私やフィーはたすけられたのだからな」

ラウラは立ち上がるとナギトの前に仁王立ちした。そして何とも勝手な理屈をぶつける。

「だからそなたは強い。∴弱さを見せぬ強さ、強さを張り通す強さがそなたにはある。私はそう思う」

「だからそれは——」

「口を挟むでない！そなたにとってどうかなど知らぬ。私にとってナギト・シユバルツァーは、目標になるほど強い人物なのだ」

暴論だ。しかも、ナギトにとって弱ったのは、それがナギト好みの暴論であるから。

「ゆえにそなた……私の憧れる人物を貶すことは、いくら本人であつても許さぬ」

そんなトドメのセリフに、ナギトは天を仰いで大笑した。とんでもない暴論。現実
に幻想を押し付ける暴挙。理想に理想足りえろと叫ぶ若人。

空は晴れていて、太陽は眩しくて。でも今はそれ以上にラウラが――

ひとしきり笑ったナギトはラウラに視線を合わせた。どちらともなく沈黙が続く。
たっぷり呼吸ほど見つめ合ってから、「しかし」と声をあげたのはラウラだった。

「そなたがただの人である事もわかつているつもりだ。…特に先月の実習が終わってか
らというものは、わかりやすく悩んでいたな」

ナギトは苦笑いする。取り繕っていたつもりが見破られていたとは。

「…そんなにわかりやすかった？」

「うむ、そうだな……前までは狙ってスベっていたが、最近は素でスベっていた感じだ」

「めっちゃ言うやん」

狼狽えたナギトだったが、あくまで例え話として受け取る。素でスベっていたなんてキツすぎる。

そんな様子のナギトを可笑そうにくすくすとラウラは笑って。それから真剣な表情に戻った。

「先月の実習でマキアスはそなたを“化け物”と呼んだ。しかしそれは誤りだ。そなたはⅦ組の誰よりも善良な人間らしい感性をしている」

それこそリインやユーススやマキアスや——Ⅶ組の総意で反対されそうな言葉だったが、ナギトに否定する気はない。

「俺はⅦ組の誰よりも普通の善良な一般人の感性を持つし、誰よりも異常で異質な考え方をする冷めた奴だ」

普通で異常。その2つは本来両立しない。しかし、ナギトに限ってそんな事はありません

なかった。

「あるいは、そんな矛盾を孕む事実こそが霊長の証であると開き直る事も——今はできない。」

「……いつもながら、回りくどい言い方をする」

そんなナギトをラウラは嘆息した。それはまるで子をあやす母を思わせる微笑みと共に。

「悩みを言ってみるといい」と慈愛に満ちた瞳で、ラウラは真っ直ぐにナギトに問いかける。

「……………俺は、自分が怖いんだ」

ほんの少しの空白があつて、それからナギトは語り始めた。

「俺が——過去の俺が、命を軽んじていたのが、わかつたから」

そう思うようになったきつかけは、ケルディックでの実習の後だ。最終日のレポートを仕上げている途中に気づいた。

ナギトは領邦軍の連中に対して当然のように「殺す」という選択肢を考えていた。

いや、むしろその選択肢しか考えていなかった。

その時の事を思い出してみて、ナギトはなぜ「殺す」という選択肢を採用しようと思っただのか。

それはただ「その後が面倒ではなくなる」からだった。あの場における俺のベストアンサーが「殺す」という選択肢だった。——そういう風に、思考回路がまわっていた。

理由なんてただのそれだけで、命の重さなんてまるで考えていなかった。

それはまさしく殺人が癖になった者の思考だ。物事の解決法として「殺害」という選択肢を安易に選んでしまう、殺人鬼の性。

そんなナギトの話を手ウラは黙って聞き続けた。

疑問だつて多いだろうに、一言も口を挟まずに。

ナギトが自らを「弱い」と言った理由がこれだ。これを友人に聞かせて、拒絶される

のが恐ろしかった。

怯えた目で見られるのが。笑顔を向けてくれないのが。もう、話もできないのが。――
「怖い」。だから話せない。

しかし、ナギトが最も恐れているのはそれではない。

「でも、それはまだいい。『敵を殺す』……その意識は、士官学生である以上、避けては通らない問題——というの話を美化したな」

自嘲する。自嘲して、自嘲して、思考と言葉を再開する。

でも、これだけはいけない。

「一番……」

それだけは、絶対に。

「怖いのは……」

仲間に。

「記憶が戻った俺が……」

友達に。

「……俺の、大切な人たちに」

家族に。

「——剣を向ける事が、怖い」

ナギトの過去が《剣鬼》か否かはさておき、命の簞奪者で合った事は想像に難くない。そんな人物がどうして、彼ら彼女らに凶刃を突き立てないと思えよう。

本気で仲間を、友達を、家族を想うなら、ナギトはすぐにでもトリスタを去るべきだった。いつ記憶が戻って殺人鬼に変貌するかわからないのに。

だけどそうできないのだ。

ここで生まれた絆を、友情を、愛情を、捨て去るなんて、そんな勇氣を持つ事がナギトにはできなかつたから。

“ありえない”と断言できれば、どれだけ楽になれた事か。

だけどそれは無理な話だ。ナギトは己を信じる事ができない。記憶を失って、ツールズでふらふらして。問題から目を背けて、決断を先延ばしにして。

こんな弱い人間に、いったい何を期待できるのだろう。

「——私から見たナギト・シユバルツァーを語ろう」

視線を落としたナギトにかけられたのは、そんな言葉。

ナギトの語ったそれを肯定するでもなく否定するでもなく、ラウラはナギトに背を向けた。

「興味を持ったのは、そなたが八葉一刀流の使い手だと知った時だった。ケルディックでの実習では凄まじい實力を見せつけられ——そのあまりのまばゆさに、魅せられてしまったのだらうな……私は」

一呼吸の間があつた。

ナギトは視線を上げる。ラウラの後ろ姿に、すでに陽が沈みかけている事を知った。

「そなたの實力は、同年代にありえぬそれだった。だから私の目は眩み————そなた……ナギト・シユバルツァーではなく、そなたの劍技だけしか見えていなかったのだ」
ラウラは振り返った。その姿は逆光に包まれて、はつきりしたのは輪郭だけだ。

「それがなければ、そなたの悩みにももつと早く気づけたかもしれない。我が不明を許されよ」

毅然とした言葉に、ナギトは二の句を継げない。「いや…」と言いかけて、ラウラが発言する方が早い。

「私がそなたを、ナギト・シユバルツアーを『観た』のは先月の帝都地下が初めてだった。攫われたアルフィン殿下とエリゼ嬢を救わんと疾駆するそなたからは身震いする程の鬼気が放たれていてな……それに当てられて私はナギトという人物をこれまで見ていなかった事に気づいた」

「先陣を切つてテロリストと対峙してくれた時、正直どれほど心強かった事か」とラウラは続けた。

「そして、記憶を振り返って見て私はナギト・シユバルツアーが好きだと気づいた。私だけではない。ラインやエリオット、アリサやフィー、ユーシスにマキアス、エマ、ガイウス……サラ教官も、きつとそなたの事を好いているはずだ」

ラウラが近づいてきた。逆光でぼやけた造形が明らかになるにつれて、頬に赤みが差している事を、ナギトは気づけない。

「そんな私が断言しよう。半年間、そなたと級友をやつてきた私が」

さらに、距離が狭まる。ラウラの両手がナギトの頬を持ち上げた。

「そなたが私たちに剣を向けるだど？ —— そんな事はありません。絶対にな」

顔が近い。息がかかる距離だ。ナギトは気恥ずかしくなって目を逸らす。

「…わからんだろ。記憶が戻ったらどうなるかなんて——」

「私の目を見て言え」

琥珀色の輝きは、ナギトを射抜いていた。

その色に貫かれたナギトは、嘘を問いたただされる子供のような気分になった。そして、ようやく己の気持ちがかたちになった。

「斬れる……わけねえよなあ……」

涙が溢れた。記憶が甦る。かつてのそれではなく、記憶を失い、目覚めて、リインと共にツールズに入学して、みんなと出会って、幸せに過ごした日々を。思い出した。

「俺が……ラウラを、Ⅶ組のみんなを……斬れる、わけねえんだよ……、はは、なんでこんな……簡単な事がわかんねえんだよ、俺」

昔がどうか、そんな事は関係なかったのだ。大切なのは現在^{いま}だ。

例え記憶が戻ったとしても、Ⅶ組のみんなと過ごした時間は嘘にはならない。思い出はちやんと息づいてる。

—— 笑いあつたあいつらを。

—— 背中を預けたあいつを。

——こんなにも愛しいこの娘を。

「——殺すなんて、ありえない」

言い切ったナギトに、ラウラは得意げに「ふっ」と笑んだ。

「そうだろう。まったく、こんな事もわからぬとは、そなたもまだまだ修行が足りぬな」

ラウラの冗談のような言葉に「はは」と笑う。

しかし、ラウラの手はまだナギトの頬を持ち上げたままだ。

ナギトとしてはそろそろ離してくれないと息が臭いと言われぬか不安なところなのだが。

「——それにしても、情けない顔をしているぞナギト。どれ、私がついのを一発お見舞いしよう。それで気付けとすると良い」

ナギトがぼろぼろと溢した涙はラウラの手をも濡らしていた。なんとも無様な姿を

見せたようだ。

「目を瞑れ」

ラウラは右手をナギトから離して振り上げる。左手はそのまま顔をホールド。

大剣を振り回すラウラの膂力から放たれるビンタに戦々恐々としながらもナギトは指示通りに目を瞑った。

そして。一拍の間があり。

☆★

この男はひよつとして、とんでもないニブチンではないかとラウラは思った。

あんなにストレートに“好き”だと伝えたのに、「目を瞑れ」と言われてビンタを喰らうと身構えている。

いや、微妙に誤魔化した自分も悪いとは思うのだが、それにしても、これはない。

他人の事にはよく気づくのに、自分の事となったら途端に頭が悪くなるのだろうか。

少し本気で心配になる。

しかし、あまり目を閉じさせたまま待たせるのも悪いから。

ラウラはごくりと生唾を飲んで、覚悟を固め――

ナギトに唇を重ね――

こんな恥ずかしい事できるかあつ！

――唇を重ねない。覚悟は固まってなどいなかった。

内心で絶叫して、代替案を考える。

必死に考えるために手を口に当てたのが功を奏したのか、ラウラに天啓が舞い降りた。

ラウラは指の腹を、ナギトの唇にあてがった。

☆★

一拍の間があり。

——柔らかないものが、唇と重なった。

ナギトは驚愕と理解を一瞬で得ると、その時間が終わるまで目を瞑ったままにする事にした。

きつと5秒にも満たないキス。しかし刹那にも永遠にも感じられて。

口惜しくも、唇に当てられていた柔らかない感触は去っていった。

ゆっくりと目を開けると、紅潮したラウラがいる。その姿はとても可愛らしい少女でしかない。なんだか妙に右手を見つめているが。

「——確かに。きついの一発いただいた」

ニヤリと、笑えただろうか。

「ふつ、それで良い。——そなたはすでに《聖女》に代わり、我が目標となったのだ。いつまでもうじうじされては私が困るからな」

極めて穏やかに、ラウラは衝撃的な事を言った。ナギトは思わず「え!？」と聞き返す。

「そなたは私の目標だ、ナギト。——いつか必ず、そなたの隣に立つてみせる。いつの日かきつとその背中を預かる実力を身につけよう。ゆえにナギト……いつまでも、剣の道と共にあれ」

「ああ」と静かに、力強く答えてみせた。

それからナギトは思い立ったかのように立ち上がると、ラウラから距離をとって太刀を抜いた。

「——やるか、ラウラ! 今日が天気が良い……どうか付き合ってくれよ!」

「ふっ——、よかろう。この良き日にそなたと立ち合える事、誇りに思うぞ!」

斯くして、剣士2人の影は踊る。

言葉を交わすように刃を交わす。

互いに裸の心を交換するような斬り合いは。

陽が落ちるまで続くのだった。

☆★

「それで、本日のデートはいかがでしたか？」

寮での夕食後、皿洗いを手伝っている最中にシャロンが不意に聞いてきた。

「うえ!?ど、どとどうしてそれををを?」

しどろもどろ、どころではない慌てぶり。そのわざとらしさからリンなら嘘と思うだろうが、ナギトとしては本気の反応だった。

なにせ、今日起こった事はナギトのキャパシティを遥かにオーバーしていたからだ。

「ふふふ……いえ、ナギト様の部屋でラウラ様とお話するのを聞いてしまって」

ラウラによると、昼食の弁当はシャロンに手伝ってもらって作つたらしい。その後ナギトの部屋に向かった事を考えると、シャロンの「聞いてしまって」が確信犯だと思われる。

「……ちなみに、どこから?」

シャロンは困つたように「どこからと申されましても…」と眉根を寄せた。

「はわっ!?!…のところからでございます」

「最初じゃん!それめっちゃ最初じゃん!」

渾身の真似だった。完コピと言って差し支えないモノマネだった。相変わらずとんでもないメイドである。

「はあ」と一息ついて、

「弁当食べて、話をして、手合わせをしました」

起こった事実を端的に語る。

「あら、それだけですか？」

ニコニコと笑んだまま探りを入れてくるシャロン。全然そんな事はないのだが、ナギトは浮気を問い詰められる夫の気持ちを理解した気になる。

“全部わかってるんだからね” みたいな雰囲気シャロンからは溢れていた。

というかシャロンなら街道での一幕を記録していたとしても不思議ではないとすら思えた。

「それだけです」

しかし詳細を語るのではない。短く答えて、手の水気をタオルで拭う。

さつと立ち去りたかったが、シャロンはまた気になる事を言う。

「それなら、私の気の使い過ぎでしたでしょうか」

“困ったわ”と言う有閑マダムのように小首を傾げて、シャロンは続けた。

「いえ、リイン様に、ナギト様は本日ラウラ様とデートに行かれましたのでどうかご連絡なさらぬよう申したのですが……」

「まじファインプレーです、ありがとうございます！」

リインから旧校舎探索の通信がないから不思議には思っていた。しかし裏にそんな事情があったとは思わなかったが。

あんな状況で通信音が鳴れば雰囲気ぶち壊しだから、シャロンの活躍は著しいものだ。

「それで……本当はどこまで行ったんでしょう？ A?……それとも……？」

本当に街道まで着いてきたんじゃないかなろうか、この人。ナギトは自分の顔が引き攣っているのを自覚した。

「勘弁してくださいあい！」

そして、そんな敗北宣言をして自室に駆け戻るのがだった。

☆★

部屋にはすでにクロウが戻っていた。

クロウ・アームブラスト——トールズ士官学生の2年生で、ナギトラVII組の先輩だった人物だが。

「おう、おかえり」

先輩だった——と過去形なのは、今現在クロウがVII組に所属しているからだ。単位がどうかとかという話で、一時的にVII組に編入する事になったのだ。

ちなみにクロウと同時にミリアム・オライオン——ノルドで出会った《白兔》ホワイトラビットもVII組に編入したが、それについては問題ではなく。

クロウはナギトの姿を認めると気さくに腕を上げて迎え入れた。

クロウが、ナギトの自室で「おかえり」なんぞと言う理由は。

単純に、第三学生寮の部屋数が足りず、ナギトが「アンタ今日からクロウと同室ね」なんて指示されたからに他ならない。

「あー……どした？ やけに疲れた顔してるが」

クロウはナギトの憔悴っぷりを見てとったのか、苦笑しつつも心配の声をかけた。

ナギトはシャロンのスパーメイドっぷりを言って聞かせようかと思いましたが、そうすると連鎖的にラウラとの話も聞かせる事になるのでぐつと我慢した。

クロウには話したくなる魅力があるが、同時に彼の口が軽い事も知っている。

「クロウに知られた翌日には学生全員には知られてると思え」がクロウと同室になった時に肝に銘じた教えだ。

「なんでもない」と言っ
てベッドにダイブ。

良い夢が見られそ
うな気がした。

劍の頂き——その一端

盛者必衰——すなわち、調子に乗った者は痛い目を見る……この世の常である。

この日、ナギトはその言葉が頭をよぎった。同時に、過去の出来事も。

パトリックほ鼻っ柱を折ってやった事。

ケルディックでウハウハ気分の野盗を制圧した事。

帝都地下でギデオンの魔笛を叩き切った事。

そして今回は、いつにも増してうざい扱いを受けているナギト・シユバルツァー。

先月の実習以来、気分は落ち込むわ、ボケは空回るわ、思考はまとまらぬわで沈んでいたナギトであったが、今では前にも増して調子に乗っていた。なんならラインが引くレベルで。

というのも、先日ラウラとキスした——と思い込んでいる——からである。

ラウラの激励を受けてナギトは奮起した……奮起しすぎたのだ。何も解決はしていないが、とにかく心がエレクチオンしたのだ。

そして、ウザくなった。

例えばリインには、

「へいへーい、兄弟！元氣してるう？恋してるう？……俺はねー……フフっ、内緒！」

例えばサラには、

「サラ教かーん、なんでアレから微妙に目え合わせてくれんのですかア？もしかして意識しちゃってる？フウー！」

……とまあ、こんな感じでだいたいみんなに絡んで、とにかくウザがられる結果となった。

その報いが与えられたのは、実技テストでの事だ。

「んじゃ最後、ナギト対全員」

「ほわっつ!!」※なんで？の意。

いつかのように「忘れてた」扱いされるのかと思っていたが、現実には予想の斜め上。よもやⅦ組のメンバー全員を相手にしろとはサラも鬼畜な判断を下す。

「うるさいわねー、さっさと準備しなさい」

渾身の問いかけは軽く…：ぞんざいに流され、ナギトはしぶしぶながらも、Ⅶ組のみならず離れて太刀を抜いた。

対する面々は困惑の色が強い。確かに最近のナギトはちよおつとウザくてクラス外にも被害者（パトリック）が出たという話もあったが、それを実技テストにまで持ち込むか？と。

「ただし、開始の合図、タイミングはナギト…アンタに任せるわ」

それを聞いて理解したのは2人。ラインとラウラだ。他のメンバーは「？」である。抜刀。油断なくナギトを見つめ、サラの意図を語った。

「油断するな、みんな。…先月の実習でA班だったマキアスたちは知ってるだろうが…ナギトはすごく強くなる時がある」

「本人曰く、思考を捨てねばならぬらしいが…サラ教官の出した条件はそのための時間を与えるものであろう！」

VII組でも戦闘力においてトップクラスの2人の言葉に、他のメンバーも緊張を身に纏った。

それぞれが得物を構えて、ナギトの合図を待つ。

ナギトは瞑目していた。先月の実習で得たものはあつた。完全なる無我ではなく、キレた状態で陥った…半分無我で、半分思考有りのあのスタイル——言わば「夢我」。

前者に比べて戦闘力は落ちるが、ナギト本来の小狡さを発揮するには後者が適している。

だから今回は夢我でいこうと考えた。

夢我は無我より簡単に「入れる」。完全に思考を捨て去る必要はなく……簡単に言うと、ボーっとしてれば夢我ゾーンに入れるのだ。

ややあつて、ナギトの目が開かれたのをVII組の総員が確認した。

静謐なるナギトの姿はこれまでのお調子者のそれではない。
全員が武器を握り直し、生唾を飲み込んで――

「実技^{デユ}テスト開始^エイイイ！」

いや、やはり調子に乗っていた。

☆★

「実技^{デユ}テスト開始^エイイイ！」と、そんなふざけた合図をしたのも、こうしてⅦ組メンバーの油断を誘うため……と考えるのが過大評価であると言い切れないのがナギトの恐ろしい所だ。

そんな事をリインは胸中で考える。――それすら油断であると言うように、ナギトの姿がかき消えた。

雷音が迫る。

ラウラをすり抜け、フィーを弾いて、エマを狙った初撃。否、それだけで終わらぬ。

「——迅雷・叢雲」

斬撃が遅れてやってくる。

あまりの速度に目が眩む——目を奪われたⅦ組メンバーを後背から薙ぎ払う一撃。

「伏せろ！」

どちらの対応をするか、決断が早かったのはリインだ。この状態のナギトにはあらゆる迷いが致命的な隙になると知っていた。

仲間に表示すると、己の斬撃と挟み撃ちにしようとしているナギトに太刀を振るった。孤月一閃。

ナギトが仕掛けていた斬撃はラウラが打ち消す。

後衛だったエマはすでに気絶している。初撃としては上々とナギトは退く。

すでに意識のレベルを引き上げたⅦ組のメンバーは跳躍して距離を取るナギトに武器を向けた。

クロウの二丁拳銃が、フィーの双銃剣が、マキアスのショットガンが、アリサの導力弓が、一斉にナギトを狙撃する。一瞬遅れてエリオットとユーススのアーツが放たれた。

「三ノ太刀、破空」

剣圧爆発。縦横無尽に迫るコンビネーションはそれだけで相殺された。

そして、それだけで終わるわけがない。このナギトがただ距離を取るだけのわけがない。

「雷光確立——らいくわいらい雷軀来々」

雷の分け身が2体生み出される。それはⅦ組メンバーに呐喊すると、雷光を撒き散らして爆ぜた。

砂塵が巻き上がる。

一瞬の間もなく。砂塵を切り裂いて放たれた、神速の抜刀。

「神威残月」

ナギトの傍に分け身が現れた時点でありふり構わず逃げたりインとラウラ、マキアスとフィー、クロウは無傷でやり過ぎす。

少しでも立ち止まったエリオット、ユーシス、ガイウスはリタイア——しない。むしろ前に出たガイウスとミリアムは神速の斬撃を防ぎ切っていた。

とは言っても無傷では済むはずがなく、ダメージに意識が向いた瞬間にジ・エンドだ。

「疾風」

風のように踏み込んだ一振りで、ガイウスとミリアムも失神K.O.だ。

砂塵が晴れる——否、砂塵が爆ぜる。極光がナギトの視界を灼いた。フィーのフラッシュグレネードだ。

「おおおおっ！」

それと共に裂帛の声を上げたのはリンだ。焔の太刀をもってナギトに肉薄する。

「ぎ」

「……ここかな」

——斬、と炸裂させるはずだった一刀は、ナギトの素手に止められていた。焰も、威力も、すべてを螺旋で受け流されて、素手で、無傷で受け止められている。

あまりの現実に唾然としたリインの腹部を太刀が打ち据え、それでリインもリタイアだ。

「……はあああつ！」

しかし、そのチャンスをそれだけで終わらせるはずがない。

リインに続いてラウラまでもがSクラフトを発動。ナギトに肉薄する。

「2段構えか」

灼けた視界は未だ戻らず、しかし相手の狙いをそう看破したナギトの耳朵を打つ声。

「いいや、3段構えだ」

——クロウ・アームブラスト。

彼の二丁拳銃が火を噴き、指を鳴らす音と共に軌道を変える。

「決めるぜっ!」

「ああ!」

発動する斬撃と銃撃のコンビネーション。Sクラフトの乱れ打ち。

「クロスレイブン!」

「洗刃乱舞!」

なるほどこれは手強い。ナギトは思考の片隅でそういった感想を抱いた。この威力と範囲では螺旋で受け流す事も出来ず、破空で弾く事も不可能だ。では距離を取ったら? そちらも当然想定済みで、おそらくは残る後衛がすでにARCSを駆動させているだろう。

ナギトの脳裏に閃いたのは、かつての名残。記憶の残滓。攻撃そのものを斬り刻む、

刃の防壁。

その名を——

「劍鬼七式、二ノ太刀」

迫る、攻撃。そのすべてを——

「絶刃壁」

——斬り刻み、無へと帰す。

刹那で振り切られた斬撃は放たれず留まり、壁の形を成す。刃の防壁、斬撃の砦である。

クロウから放たれた銃弾は悉くが斬り刻まれて消え、ラウラの洗刃も弾かれる。あまりの強さに手から劍がこぼれ落ちて、それを拾う——隙。

ナギトの掌が、ラウラの腹部を支えた。その程度の勢いであつた。事実、ラウラも不

思議顔で——一瞬あと、衝撃が貫いた。

「掌破」

破甲拳に発勁を組み込んだ戦技だった。崩れ落ちる、ラウラの身体。これで残るはク
ロウ、フィー、エリオット、アリサ、ユーシスの5人。

「クリスタルフラッド！」

放たれた直線のアーツ。足場を凍らせるそれはエリオットの魔導杖から放たれた次
への布石だ。高速展開されるそれをナギトは跳んで躲す。

「馬鹿め、空中では——」

「——動けないだろう！」

ユーシスからはアーツが放たれ、マキアスからは散弾が放たれる。
確かに戦技を連発してナギトの闘気は枯渇気味だ。

しかし、空中で動けない……なんて冗談はナギトには通用しない。

ナギトは宙を踏むとさらに跳躍した。それでユースとマキアスの攻撃は惜しくも外れる事となる。

虚空剣の応用で、中空に足場を築いたのだ。しかしそれも役目を果たせば消えるのみ。再びナギトは落下して、それを狙うは2人の女。

「ロゼッタアロー！」

ナギトはめちやくちややる。なんなら空中で動くなんて無茶も。そんな冗談みたいな事を本気で考え、だからこそ後詰めだったアリサとフィー。

アリサの力強い一矢とフィーの乱射がナギトを襲う。

だが。

半透明の盾に防がれるようにしてフィーの攻撃はかき消えた。

「はっ。」

「残念でした」

アーツ「アダマスシールド」である。物理攻撃を一度無効化するという、固定効果が

ある。この男、しれつと開始前に自分にバフをかけていたのである。ちなみに「物理攻撃無効化」という固定効果のためナギトの「ARCS適正云々」アーツの出力が低い」はこのアーツに限り作用しない。

続いてアリサの一矢を流して返却してやる。

「螺旋——ロゼッタアロー返し」

自らのSクラフトを喰らい：アリサ、リタイア。

ナギトは着地と同時に剣を地面に突き立て、雷電を走らせる。それは身近な者たちに襲い掛かり、痺れと共に硬直を与える。

「迅雷・重」

雷鳴が走る。まずはエリオットに、続いてマキアスもリタイア。そしてクロウに——止められた。

二丁拳銃で太刀を受け止めたクロウと目が合う。思考の半分が沈んでいるナギトの怖気を呼び覚ますほど透徹した瞳だった。

くるりと二丁拳銃を回したクロウはその勢いで太刀を逸らしてナギトに蹴りを入れる。

否。蹴りは入らない。代わりに足を掴まれてユーシスに向かって投げ放たれた。

クロウを投げられたユーシスは一瞬だけ迷い、避ける事を選択。

しかし、その一瞬の迷いの内にナギトはフィーと数合切り結ぶと、拳を腹にめり込ませて気絶させる。

「くっ、こうなりや一か八かだ！」

「ああ、合わせるぞクロウ！」

どうやらクロウとユーシス——残った2人はタイミングを合わせて攻撃を仕掛けてきた。

クロウの銃撃がナギトを補足——できない。雷速で踏み込んだナギトは、剣を振り上げてSクラフトを放とうとしていたユーシスの懐に入り、顎をかすめるようにアッパーを放つ。脳が揺れてまともに立てず、ユーシスもリタイア。

「チー！」

「またも疾風の歩法で回り込んだナギトを、クロウの銃口は捉えられず、背後を取られる。」

「チャキ、と太刀を構えられてホールドアップだ。クロウは「クク」と笑うと手を挙げた。その手には変わらず銃はあつたものの。」

「こりや勝てねえな。まいった、降参だ——」

「そんな言葉と共にナギトは太刀を下げ——」

「——なんてな！」

「振り返り、銃を構える——その前に、太刀が喉元に据えられているのに気づく。」

「……やると思ったよ。50ミラ先輩」

「どうやらクロウがずる賢い事は過去の出来事から把握済みのようで、今度こそクロウ」

は敗北を受け入れるしかなかった。

これにて実技テストも終了。サラにその合図をしてもらおうと、納刀して視線を走らせたナギトだったが、サラの姿はない。

疑問に思ったのも束の間、背後で銃を構える音が。

「はい、これでアンタの負けね…ナギト」

言わずもがな、サラ・バレストアインである。

「…嘘でしょ？」

「ホントよ？ だって私は言ったわよ。『ナギト対全員』ってね。間違ってもナギト対VII組の生徒…なんて言っちゃいけないわよ」

確かにそうだが。しかし途中までナギトとVII組メンバーの対戦を見て評価つけてたふうだったのに。

つまり、この担任教官はこんなにもずるい手段でナギトから勝利を奪おうとしているわけだ。しかしナギトも「確かに」と思った事は認めざるを得ない。はじめに「サラ教官は参加しませんよね？」というように確認しておけば良かったのだ。

だからこそナギトはため息をついて、

「ないわー」

負けを認めるのだった。

☆★

実技テストの後、ナギトを含めた全員——サラ除く——が意気消沈したまま次の実習地が明かされた。

ナギトはA班。メンバーはリイン、ユース、ガイウス、ラウラ、エマ、ミリアムにナギトを加えた7人。行き先は湖畔の町レグラム——ラウラの故郷だ。

B班はアリサ、マキアス、フィー、エリオット、クロウの5人で、行き先はジュライ特区。

そして今回の特別実習は、2日間の実習の後、帝国東部ガレリア要塞に行く事も説明された。

A班の行き先であるレグラムは、ラウラの実家——つまりアルゼイド子爵家が統治する領邦だ。

一応はユーシスの実家であるアルバレア公爵家の領地を任されているいち領主であるのだが、ヴィクター・S・アルゼイド子爵本人の気質もあつてか独立独歩の気風が強いという事らしい。

このヴィクターは《光の剣匠》とも呼ばれる凄腕の剣士で、帝国軍の剣術指導などもやっている人物となる。ラウラの娘目線でも帝国三指に入る実力者とのこと。ただ自由過ぎるらしく、今回の実習で出会えるかはわからない……というのが残念なところだ。

アルゼイド子爵家のミドルネームであるSは、サンドロットの頭文字である……というのはすでにラウラから聞き及んでいたナギトだったが、またその事についてもラウラの口から語られる。

ドライケルス大帝が駆け抜けた獅子戦役にて、彼を支えた英雄——リアンヌ・サンドロット。《槍の聖女》とさえ評された馬上槍の腕前は凄まじく、歳若い女の身でありながら《鉄騎隊》と名乗る兵団を率いていた。彼女自身は獅子戦役の終わりに急死するが

…

リアンヌの腹心として《鉄騎隊》の副長を務めたのがアルゼイド家の祖先であるという話だった。

リアンヌが急死した事で断絶したサンドロット伯爵家の領地を継いだのがアルゼイド子爵家という筋書きらしい。

そんな話を列車で聞き、やはりすまし顔でブレードに全勝する。バリアハートで列車を乗り換えて揺らされる事数時間、湖畔の町レグラムに到着した。

列車に乗る前にリインらがノルド高原で出会ったというレクター・アランドール情報局特務大尉とトリスタ駅で遭遇する事になったが、ナギトはクレアと同じくどこかで出会った気がした。明確には覚えてないため口にする事はなかったが。

レグラムは一年の半分は霧のかかった風光明媚な土地として知られるが、今回ナギトらが到着した時もそうであり、早速土地柄のものを味わう事となった。

駅を出た所でナギトらA班を出迎えたのは、アルゼイド家の執事であるクラウド。どうやらアルゼイド流の師範代でもあるらしく、立ち居振る舞いに品がある。

そのクラウドに連れられてレグラムを巡る。そこでわかったのはレグラムにもノル

ドであつたような精霊信仰の名残があること、飾られた石像——中央の女性に傳く、大剣を持った人物——曰く、これがラウラの祖先である《鉄騎隊》の副長の姿であると。——それと対になるように斧槍を掲げた石造もあつた——。そして、霧と湖の向こうにはレグラムの喪われた主人、サンドロット家のかつての居城であるローエングリン城があると。

それからアルゼイド流の総本山たる道場の前を通り過ぎて、子爵邸に到着した。今回の実習では子爵邸を宿泊施設として利用させてもらう事となつていた。A班は子爵邸に荷物を置くと、実習課題を預かるといふ遊撃士協会支部への向かう。

帝国では活動を制限されている遊撃士だが、このレグラムでは例外らしい。どうやら領主ヴィクターの意向を反映したものだ。本人も爵位持ちでなければ遊撃士になりたかつたと言ふほどらしい。

そのレグラム支部にて一行はトヴァル・ランドナーと名乗る青年と出会う。ナギトは初対面だったが、リインらはバリアハートで何度か助けられたらしく、その彼から実習課題を受け取つてA班は課題に取り組んだ。

課題を終える頃には日も落ちかけていて、A班はレグラム支部に依頼達成の旨を伝えるべく。

レグラム支部では先に会つたトヴァルと、壮年の男性がいた。ラウラが「父上」と呼

ぶ彼こそがヴィクター・S・アルゼイド——ここレグラムの領主だ。

一行はヴィクターと挨拶を交わした後、アルゼイド子爵邸にて彼と夕食を共にする事になった。

夕食の場では談笑で和む。「娘は年の割に浮ついた話がない」——なんてヴィクターは嘆き笑んでいたが、その時視線がA班男子勢を走つたのを確認したナギトだったが、特に狼狽える素振りは見せず、自然とラウラに視線をやる。

ラウラも慌ててはいない。……ラウラの性格であれば、ナギトとの関係について多少は動じた様子を見せるかと思つたが、あちらもなかなか役者のようだ。

「それにしても……」

そこでヴィクターはわざとらしくナギトを値踏みした。視線が座つたナギトを舐めるようにしていく。

「初めて見たな……そなたのように剣に特化した者は」

「……私が、ですか？」

「うむ」とヴィクターは首肯した。

「多少は衰えているようだがな。ラウラもこれまで剣一筋で生きてきたが……正直そんなほどではないだろう。天稟だけではない……そなたを育てた人物はよほどそなたに剣を極めて欲しかったものと見える」

ナギトを育てた人物。

——八葉一刀流。

——劍聖に比肩する実力。

——劍に特化した肉体。

ピースは揃ってきた気がする。

黙したナギトを見てどう思ったのか、ヴィクターは「ああ……」と声を漏らした。

「そなたが娘の手紙にあった『記憶喪失の友人』か。これは悪い事を聞いてしまったよ

うだ」

どうやらラウラはナギトの事を手紙に書いていたらしい。その言い方から、やはりヴィクターはラウラとナギトの關係を友人止まりと考えているようだ……さつきボケて「実はキスしちやつたんですう！」なんて雰囲氣を出さなくて良かった。

ラウラの幼い時分に妻を亡くしてからは男手ひとつ——家人がいるから實際は違うだろうが——で育て上げたのだ。「悪い虫、排除」みたいな過激思想でもおかしくはない。

「いえ、構いません」

ナギトは微笑みでその謝罪を受け入れ、話が一段落した所で、自らの畏れを見抜かれたリインがヴィクターに手合わせを申し込んだのだった。

子爵邸を出てすぐ、アルゼイド流道場にてリインとヴィクターは向かい合っている。ヴィクターの手には家宝たる「宝剣ガランシヤール」があり、リインは瞬く間に敗北を喫する事になった。

手合わせ前にユースが言った通り「指南ならまだしも手合わせなど無謀だ」というのが実現されたかたちとなる。

しかし、それだけでは終わらない。

リインはヴィクターに看破されるままに、力を解放した。旧校舎地下でエリゼを救つた時に見せた、あの力を。

艶やかな黒髪は刃の如き白銀に染まり、穏やかな黒瞳は血の滲む赤となる。さらに赤黒く禍々しいオーラさえ纏っているように見えた。

雄叫び——否、獣声をあげてヴィクターに飛びかかるリイン。その膂力は先程とは比較にならず——しかし、ヴィクターの足元にさえ届かない。

ヴィクターは荒ぶるリインの太刀筋を綺麗に受け流すと、奥義を叩き込んで終いとした。

精魂を使い果たしてなお及ばぬ力量にリインが跪く。A班の面子は揃つてリインに駆け寄つた。皆がリインの心配をしたが、ヴィクターは手加減をしてくれたようで大事はない。

「力は所詮、力。使いこなせなければ意味はなく、ただ空しいだけのもの。だが——ある

ものを否定するのにもまた、「欺瞞」でしかない」

それはリインに向けられた言葉であったが、ナギトの胸中にも深く響いた。

ナギトの「力」と「畏れ」はリインのそれに近いものがある。《剣鬼》という過去。

《剣鬼》の実力。

ナギトは《剣鬼》という過去を畏れるあまり、《剣鬼》としての実力を封じてはいなかったか。《剣鬼》の過去は隠しつとも力だけは利用する——そんな器用な真似はできなかった。

だからこそ、《剣鬼》の過去が明らかにされた時は目に見えて憔悴したものだ。

だが、ここでのヴィクターの言葉を受けてナギトの意識には変革が齎された。

ナギトが《剣鬼》の力を扱うにはまず、《剣鬼》としての過去を受け入れる必要があるのだ。思考を無にして全てを忘却の彼方へと送る「無我」ではなく。思考を沈澱させて夢を見るように生きる「夢我」でもなく。

《剣鬼》もナギト・シユバルツァーの過去。ナギトの一部なのだから。

——今にして思えば、ナギトがこうして《剣鬼》を受け入れる土壌を作ってくれたのはラウラだ。今月の自由行動日では、ナギトが《剣鬼》の過去を取り戻してもナギトであると保証してくれた。ナギト自身もそう信じる事ができた。

ゆえにこそ感謝が溢れる。愛しさが零れる。

「ラウラ」

未だ話が続く中、ナギトはその流れをぶった斬るようにして告げた。

「愛してる」

なんのてらいもなく、あっけらかんと言い放ったナギト。周囲がしんと静まり返る。それはたった一瞬、ナギトの言葉を理解するだけの間だった。

次の瞬間、練武場が騒然となった。女性陣（ミアム除く）は総じて顔を赤らめ、男性陣は驚愕。

ちなみにヴィクターは納刀したはずの宝剣を再び抜いていた。ナギトはニヤついてヴィクターの前に立つ。

「さて………どういう意味か、尋ねてもよいか？」

肩をすくめて答えて見せる。「そのままの意味ですよ」と。

ヴィクターからほんの僅かに殺気が漏れた。ナギトはあげた口角を引き攣らせまいと努めて。

「ラウラ」

ナギトでは罅が明かないとヴィクターはラウラに事情を尋ねようとする。

「いえ、父上……その、何も無い……わけではない、のですが……」

ラウラからすれば、ナギトとは「何も無い」わけだが、今月の自由行動日に「キスをしたフリ」をして誤魔化している身としては、ここで真実を語るわけにもいかず。

口籠るラウラにナギトは「ふふん」と鼻を鳴らす。ヴィクターは静かに青筋を立てて

……

その後、ひどく下品な挑発ととんでもない勘違いにより、ナギトとヴィクターは試合う事となった。



リインはナギトの事を兄弟だと思っている。血は繋がっておらずとも、この絆は本物だと信じて疑わない。どちらが兄で弟なのかという議論はさておき。

そんなナギトと共にツールズに入学してからというもの——手合わせをしていない。郷にいた頃は毎日のようにやっていたのに。

入学したての頃は授業の予習復習で時間が取れず、余裕ができるようになってからも、避けていたと言える。

理由はひとえに、ナギトの成長が著しく、リイン自身が胸を張って彼の兄弟だと言えなくなってしまうから。ナギトが聞けば、それこそ鼻で笑うだろうが、今のリインにはナギトと肩を並べて戦う力はない。特別実習のたびにめきめきと頭角を現していくナギトに気後れしているわけだ。

そうしてナギトの実力を認めているリインだが、先日の実技テストでは胆を抜かれた。いくら成長著しいとは言え同年代。あの人数差で負けるわけがない。——そういう油断はあつたにしても。

それにしても、あの人数を相手にナギトは圧倒した。……結局はサラに一本取られたらしいが。ぶつくさ言うナギトにひとまず「お前が悪い」とは言ったが。

あれほどの驚愕は過去に例がなく。
それ以上の驚愕を、今、得ている。

ほんの少し「ナギトなら」という期待はあった。Ⅶ組の総員を相手取り圧倒したナギトならヴィクター相手でも一矢報いるくらいはしてくれないのではないかと。

ヴィクターにやられたほうほうの体で思索に耽っていたせいも、聞き逃した言葉があった。しかし確かにナギトの口はこう紡いだ。「キキゴウイツ」と。

刹那、ぶわりとナギトから鬨気が溢れ出た。血液を思わせる紅く緋い——。
始まったのは、達人同士の斬り合いだった。

兄弟と呼んだ男が。同年代の男児が。帝国最強に名を連ねる《光の剣匠》と切り結ぶ——そんな光景を目の当たりにする事になる。

☆★

「ゆくぞ——！」

リインの時と違い、先手をしかけたのはヴィクターだった。ナギトは絶招の後、剣を構えたまま動かず——

「はっ！」

——笑った。

“娘を盗られる父親”という役割をまんまと押しつけられたヴィクター。一撃目は大振りになると見込んだナギトはカウンターを狙っていた。

ヴィクターが怒りを原動力にナギトに切り掛かる。——瞬間、怒りを脱ぎ捨てた純粋な剣士に変貌した。

それは、笑うつてもんだ。確かに剣士にとって“剣を振るう”事以外は不純物と言えど。自らの感情を完全に制御し——怒りは原動力にするだけとは。

——これが帝国最強。

——これが《光の剣匠》。

——これがヴィクター・S・アルゼイド！

放たれた玄妙なる初撃は受け流す事叶わず、ナギトはカウンターから迎撃に意識を切り替える。刹那、太刀に業炎が灯る。

光と炎が弾けた。ナギトとヴィクターも弾かれるようにして距離を取る。

「ほう。よく受け止めたものだ」

「かーっ！まんまと挑発成功したと思っただんですがね！」

笑みを交換した。剣を構えて一拍、今度はナギトから仕掛ける。

「迅——」

音を置き去りに。雷の速度で迫る。

「——雷・」

何度でも。

「重——！」

雷速。まさしく落雷の速度で。稲光さえ発するように、ナギトは何度でも肉薄し。その都度当然のようにガードされる。

「ッー！」

だけではない。ヴィクターは反撃してきた。瞬時に宝剣に光を灯すとそれをナギトに叩きつける。

ただの一振りがラウラの奥義に比肩する。太刀を攻撃から防御に切り替えてなんとか受ける。あり得ないほどの衝撃で吹き飛ばされ練武場の壁に激突——しない。空中でぐるりと身を翻すと、壁に着地した。

「雷軀来々！」

——着地した、その姿が増殖する。

都合4体の分け身が出現した。雷で仕立て上げられたそれは、練度が低い——低くていい。たった一度、相手に突撃するだけでいいのだから。

現れた4人がヴィクターを取り囲むように跳躍して着地。同時に迅雷を放つ。

「はあっ！」

洗閃牙。回転切りで分け身のすべてを無へと帰す。

雷鳴が轟いた。雷撃の全てを剣に込めてナギトが跳んだ。

「——雷神烈破！」

ヴィクターの手にある宝剣が、さらに輝き極光を宿す。ヴィクターが《光の剣匠》と呼ばれる由縁。剣を光の翼と化すアルゼイドの奥義だ。

「——洗刃閃舞！」

突き出した雷神の刃に極光が放たれる。雷鳴と光で世界が塗り潰された。

——世界が色を取り戻す。刹那の静寂の後、ナギトとヴィクターは互いに感じてい

た。

——次が最後の一合になると。

ヴィクターは再び宝剣ガランシヤールに極光を灯す。ラインにやったのと同じように、アルゼイド流の奥義“洗風剣”を見舞うつもりだ。

対するナギトは瞑目し、——自らの内側で、ようやくイメージが出来上がった事を意識した。眩く。

ダブルブランド
「双交剣派」

合一するは八葉一刀流。そしてアルゼイド流。

「絶技」

ヴィクターが極光と共に奔る。

「緋技」

ナギトの太刀は緋色の輝きを宿す。幾重にも緋空斬が放たれ、ヴィクターの行動を阻害すると、空中でぶつかって互いに弾けた。

砕かれた緋空斬が舞い散る様はまるで紅葉のようで——

「まてんもみじ
摩天洗葉」

それが、ナギトの太刀に収束していく。

まずいと直観したヴィクターは宝剣を振り抜いた。

「洗鳳剣！」

太刀に収束した緋空の欠片と己のありつたけを、振り抜く。

「ひとふりのかさね
——振重」

極光が弾け、緋色が吹き飛ぶ。

——完全に、互角だった。

そしてそれが、この決着となった。

始まりの一太刀

「気づいてるみたいだけどあの城、何かあるわよ？」

夜半。ローエングリン城を望むアルゼイド子爵邸、テラスにて。

2人分の女性の声で会話が行われていた。1人はエマ・ミルスティン——VII組の一員。そしてもう1人の姿は……見えない。

ちらりとテラスを覗いたナギトの目に映った人影はエマ1人だけのものだ。ならばエマはテラスでいたい誰と会話しているのかという事になるが……当然、人ならぬモノという事になろう。

テラスにエマ以外の人影はない。——しかし、1匹の猫の姿ならあった。とても信じられないが、そういう事だろう。

「ええ……、ラウラさんにそれとなく伝えるしか——」

厳な雰囲気です話す2人の間にナギトが飛び込む。

「わっ!」

「きゃ!?!」

「ニヤッ!?!」

驚く、2人分の声。ナギトはそれに「ぶはははは」と笑い。すぐさま逃げようと試みた猫の首根っこを捕まえた。

「ちよ、今の人の動き!?!」

首根っこを掴まれてぶらんぶらんと揺れる黒猫は取り繕うのをやめてナギトを睨む。

「はっは。まあ一応人の技の範疇ですぜ」

からからと笑って流すと、黒猫をエマに預けた。

「ええつと……一応、はじめまして。…セリーヌ、だったかな？」

黒猫——セリーヌはエマの腕の中で諦めるようにため息をついた。月光を反射するほど光沢のある体毛は美しさの証か。

「ええ、はじめまして…ナギト・シユバルツァー。エマが世話になつてゐるわね」

どうやらセリーヌはエマのペットと言うよりお目付け役のような立場らしいとセリーヌから判明した。

ひとまずの挨拶を終えたナギトは視線をセリーヌからエマに移す。エマは困ったように笑いながらナギトに問いかけた。

「…ナギトさん、どうしてここに？」

「んー？…まあ、偶然というか必然というか、運命？——いや、軌跡か」

いつものように、誤魔化すように。言葉を紡いだナギトにエマの視線は厳しくなる。

のらりくらりとしたナギトらしい言動だが、おそらく本当に理由はわからないのだろう。

「そろそろ聞かせてほしい、ノルドでのこと。エマ——エマ・ミルスティン」

ナギトはエマにノルド高原での実習の際に「暗示」とやらにかけられた。その時は何の要因かナギトは自力で暗示を解いて、エマに詰め寄ったものだが。

エマはナギトの追求を先送りにする事で躲したが、その取り立てが今日というわけだ。思えば2ヶ月ほど経っている。今まで良く待つてくれたとも言えそうだ。

しかし、エマはうつむいた。それは「話さない」という意思表示のように感じられて、ナギトは嘆息する。

「……俺は、エマの事が好きだぜ」

だから、爆弾をぶっこんだ。

エマはすぐさま顔を上げてナギトを見つめる。その頬には赤みが差していて——少し顔を逸らして息を整えると、ジト目でナギトを睨んだ。

「先程、ラウラさんに『愛してる』と言った口で女の子を口説くのはどうかと思います」
「かつ！まったくもってその通り……でもアレだ。意味が違うの、わかるだろ？」

少しだけ言い訳臭くなったナギトの言葉。相手に答えを託したが、爆弾が効き過ぎたのかエマのジト目は止まない。

「……ノルドでも言ったけどさ、俺はエマを『仲間』で『友達』だと思ってる。だからエマが何者であろうが、受け入れられると思うよ。例えば……歴史から消えた一族の末裔でも、怪しげな黒猫を使い魔とする魔女でも」

それはただの例え話。しかしあまりにも的を射た推測にエマは絶句した。絶句した主人に代わって口を開いたのはセリーヌだった。

「なにそれ？もしかしてさっきの発言と関係あるのかしら？」

ナギトの口角が醜く歪む。ナギトの例え話と同じく当てずっぽうの牽制だろうが、とても――

「さあ？そうかも？」

――だから、誤魔化す。

「それに過去がどうこう言い出したら、俺の方がやばいだろうしな。たぶん獵兵ファイも真つ青の経歴だぞ」

そうして、そんなふうに適当に自虐してエマの次の言葉を待つ。しかしエマは苦い顔をしたまま答えなかった。

「ま、それは今はいいや」

ぱん、とナギトは笑顔を切り替えた。話題も。2ヶ月待った“エマの正体”という謎を解き明かす機会をさらに先延ばしにするつもりだ。

先延ばしにしても聞き出さねばならない、別の事が出来たから。

「で、ラインが『間に合う』云々って話は——前の『騎神』ってのとは関係あんの？」

どうしてそこが繋がるのか。どうしてそこを繋げられるのか。点と点をいつたいどうやって線で結んだのか。

今度こそ、エマとセリーヌは併せて絶句した。

その反応は凶星だと宣言しているようなもので——

「エマ、暗示で忘れさせるわよ！」

「……ええセリーヌ、お願い！」

だからこそ、強制的に忘却させようとした。狼狽えたエマと違いセリーヌの決断は速く。

エマとセリーヌの瞳がいつせいに金色に輝き——

「——無駄よ」

——妖艶な声が、その邪魔をした。

「この声、まさか……！」

「——姉さん!?!」

蒼い鳥が子爵邸のテラスに舞い降りた。「グリアノス！」とセリーヌが叫ぶ。その蒼鳥——グリアノスが翼を広げると同時に人影が空間に投影された。

映し出された人影はヴィータ・クロチルダのものだ。

「ヴィータ、あんたどうして……」

「……姉さん……」

エマとセリーヌはそろって悲しげで、ほんの少しだけ嬉しそうな顔をする。それにヴィータは困ったように笑った。

「久しぶりねエマ、セリーヌ。ナギトくんも」

ヴィータの久闊を叙する先にナギトがいた事にエマとセリーヌは何度目かの驚愕を宿す。そのナギトはやはり「はっ」と気が抜けるように笑った。

「なんだ、忘れられてたと思ってましたよ。この前、帝都で会った時も……」

無視された。およそ半年前、トールズの入試の帰りに帝都観光した際に邂逅したナギトとヴィータだったが、先月の実習で再会した時は知らない人扱いされた。

その事について言及したナギトに対してヴィータは艶然と微笑む。

「あら？ 私と貴方の関係は周りにバレちゃだめでしょう？」

帝都歌劇場の大スター、《蒼の歌姫》とも呼ばれる美女にそんな事を言われた日にはくらくらときてしまうものだ。ナギトもわざとらしく立ちくらみが起きたふりをした。

「くうっ……これが、魔性の女……！」

そんなコントにエマはやはり困ったように笑って……それから、真剣な眼差しを
ヴィータに向けた。

「姉さん。言いたい事は色々あるけど……それは次の機会にするわ。 ナギトさんに
“暗示”が無駄ってどういう事？」

ヴィータもナギトのボケにくすくすと笑っていたが、エマに問いかけられると真面目
な表情になる。

「ええ、それはナギトくんが—— “特異点” だからよ」

「“特異点”？」

エマは鸚鵡返しに問う。セリーヌとナギトは眉根を寄せた。

「そう、『特異点』……世界の歪み、あるいは御伽噺の変革者。……過去を改竄し未来を編纂し、既存の物語を剪定する者」

ヴィータは子供に言つて聞かせるように、丁寧に説明している。例え意味が聞き手に伝わらずとも。

「——そういうふうには、聞いているわ」

そんなヴィータもまた、ナギトが『特異点』である事を人伝てに聞いただけのようだった。

「——意味がわからないわ、姉さん」

おそらく与えられた情報はヴィータとエマで相違なく、しかしそれ以外で決定的に欠けているピースがある。

そしてナギトは、その欠けたピースを本能的に知っているが故にヴィータの説明に納得した。まったくどういった意味か理解できていないが、己が『特異点』であると納得

した。

「意味は…わからなくていいわ、少なくとも今は。それにしてもナギトくん、驚かないのね…私とエマが姉妹だと知っても。私の表しか知らないはずの貴方が、私の裏の顔を知っても」

ヴィータの試すような口調に、ナギトはようやくハツとした。ヴィータの言う通り、どうして自分はヴィータ・クロチルダとエマ・ミルステインが義姉妹だと何の疑問も持たず受け入れられたのか。どうして自分は《蒼の歌姫》ヴィータが、こんな魔女じみた技を使っているにも驚かないのか。

「自覚は薄かったようね。…それも特異点としての特別性かしら？」

少しだけ考えて、ヴィータの言うそれが、自己を悩ませてきた「確信」と根源を同じとするものだと結びつけた。

そういえば、セリーヌの名を知っていたのも。

そういえば、エマとヴィータが血の繋がりのない義姉妹だと知っていたのも。

—— 挙げればきりのない、 “そういえば” だ。

「さて、それで…どうして “暗示” が効きにくいか、だけど、それはナギトくんが特異点だから。そして特異点は、本来世界の干渉を受けない存在で、—— 器の自覚で効きが良くなるもの、悪くなるものがあるのよ。暗示は後者ね…自覚した事で概念的な防衛は淀んでしまったけど、逆に精神的な防衛が敷かれてしまった。常人ならそれでも暗示にかかる可能性はあるけど、特異点なら効果は望めないわね」

ヴィータの説明に、エマはまたも苦い顔だ。説明があまり理解できないし納得もしたくない…といった感じだ。

対するナギトは勉強になる、とばかりに聞き入っている。自身の存在を紐解かれる事に関しても、ほんのわずかな恐怖はあれど、むしろ感謝だ。

きつとそれは《剣鬼》という過去以上にナギトの起源に関わる事だから。

「こんなところかしら」とヴィータは締める。

「……理解も納得もできないけど、ひとまずは引つ込めるわ。…その上で、新しい問い

よ。どうして姉さんはここに現れたの？…グリアノス越しとは言え、音信不通だった姉さんが……」

セリーヌが「エマ…」と口籠る。それだけ痛々しい顔をエマはしていた。慕っていた姉がフラッと消え、再会はこんな唐突。

どうして出奔してしまったのか、なんて問い掛ければ姉の姿が幻のように消えてしまいう気がして、だからそんな問いに留まった。

「…近くで少し打ち合わせがあつてね。今はもう帰っている最中だけれど……」

「——打ち合わせ？」

エマと同じように鸚鵡返しでヴィータに問うナギト。 “それってまさか《幻焰計画》の？”とは続けられない。

どうして自分が知っているのか——きつとそれも “特異点だから” なのだろうか。ヴィータは「ふふ」と笑う。それはナギトたちの未来を予見したものであったか。

「ええ。あのひとね。あの人は本来、クロスベルに集中してもらおう手筈だったけれど、貴方——特異点が帝国にいる事も判明したし、こちらにも顔を出してもらおう事になったの」

“あのひと”——該当する人物を脳内で検索する。ヒットしたのは一件。まだ知らないはず、という謎も“特異点だから”で納得しておく。

「タイミングが合えば、今回の実習で会えるかもしれないわね」

ヴィータはそう言って柔らかく、しかし艶然と笑むと別れの挨拶を口にした「それじゃあまた」と。

蒼鳥グリアノスが広げていた翼を閉じる。ヴィータの姿がかき消えた。

「待って、姉さん——！」

羽ばたく鳥は、エマの伸ばされた手に応える事なく夜の闇に消えていった。

☆★

特別実習2日目。前日も濃い経験をしたナギトだったが、この日はさらにとんでもない事態に直面する事になった。

その一点目というのが、手配魔獣——街道に出現した“機械仕掛けの魔獣”とも言うべき存在だ。撃破そのものに難はあらずとも、存在そのものが不気味に感じられた一行はトヴァルに報告する。

二点目、A班が課題を達成してレグラムに戻ると波止場に水上定期船がいた。問題なのは、それを警護するように領邦軍——しかもラマール州の領邦軍が周囲をうろついていたからだ。

トヴァルの話によると、ヴィクターを訪ねて貴族のお偉いさんが来ているとのこと。A班はそのまま子爵邸に急行した。

子爵邸ではいかにも貴族らしい格好をした中年の男と対面する形でヴィクターが話をしていた。中年貴族の背後には黒いジャケットを着た戦士2人が控えていてどちらも只者ではない事が一見してわかる。

話を聞くに、中年貴族——カイエン公爵は近々催されるといふ貴族の大規模な会合にヴィクターを誘いに來たらしかった。加えて正規軍の軍事訓練についても控えるように言う。——要は貴族派に与した行動をせよ、と釘を刺しに來たわけだった。

しかしヴィクターは貴族でも中立を貫く人物であり、カイエン公爵の誘いは受け流していた。

ひとまずの話を終えたらしいカイエン公爵は短く挨拶を交わすと、子爵邸を出て行く素振りを見せた。そしてA班の貴族生徒——顔見知りらしいラウラとユースとも軽く会話し、護衛の男2人を引き連れて出て行く——、その護衛2人は一行がVII組であると看破した。どうやら縁があつて調べたのだから。

よく喋る胡散臭い細身の男を、寡黙で筋肉質な褐色の男が戒める。閣下——カイエン公がお待ちだと。

去りゆく2人にナギトは気づいたように声をかけた。

「ああ、フィーなら元気してますよ」

弾かれたように振り返る2人の男にナギトは微笑んで見せる。

「閣下がお待ちでは？」

肩まですくめて見せたナギトに痩せぎすの男が「ハッ」と笑った。

「ええ度胸やないか。ようわかつたな？」

「隠してないですからね」

とんとん、と胸のあたりを叩いて見せる。男2人の黒いジャケットの胸部には風を纏う鳥がエンブレムとしてあった。フィーの古巣《西風の旅団》のマークだ。
「よう見とる。それによう知つとる」

男は感心したように、あるいは嘘臭くうんうんと頷いた。

「俺はゼノ。こつちのでかいのはレオニダスや。坊主、お前は？」

それから、ゼノと名乗った男は興味殺気を隠せずにナギトに名を問いかけた。

「……………ナギト」

「ほう、お前がそうかい。…まさかこんなところで会うとはな」

「今回は挨拶でいいだろう。ゼノ、行くぞ」

「りょうかい、ほな…またな」

ゼノとレオニダスはナギトに鋭い視線をやりつつも、手を出すような事はなかった。それはカイエン公を待たせている事もあるし、この場にはヴィクターがいる事もあるし、何より機会ではないからだった。

子爵邸から出るゼノとレオニダスの背中を油断なく見送って「ふう」と一息つく。

同じように男2人を見送ったA班の面々も同じようにため息をついて、それからナギトを見た。

「知ってた、のか？」

代表してか、ラインがナギトに聞いただす。

「いやー、エンブレムも隠してなかったしな。それに少しフィーと雰囲気も似てたし」

なんて事ないようにナギトは語るが、ラインに、A班のメンバーにとっては恐るべき

事だ。

「それにしても『西風』のマークを良く知ってたな」

「あー、言われてみりやそうだな。なんでだろ」

「これもまた事もなげに言うナギト。」

「ナギト……お前、最近……なんだか……」

怖いぞ。とまでは言えなかった。ゼノとレオニダスと対峙したナギトには2人と同等の凄みがあった。昨日ヴィクターと引き分けた事も手伝って、ナギトの化け物じみた能力がどんどん覚醒していつて、遠い存在に感じられる。

その一言は、それを決定的なものにしてしまいそうな気がして、だから言えないリインだった。

☆★

カイエン公爵の去つた子爵邸でヴィクターはA班と話し、貴族でも中立派の者たちに結末を呼びかけるためにトヴァルと共に出発した。

残されたVII組A班の面々は遊撃士協会支部で書類仕事を片付ける事になる。

それからしばらくして夜になる。支部に相談が寄せられた。子供が夜になつても歸つてこない”と。

聞き取りの結果、件の子供2人は湖の向こう、ローエン格林城へ向かつたという事がわかつた。しかし、彼らがローエン格林城へ行くのは初めてでもないらしく、ボート転覆の可能性なども改めて調査する事になる。

A班は用意されたボートに乗り込むと、対岸のローエン格林城へ向かつた。

救国の聖女が本拠地とし、勇士が集つたローエン格林城はどこか不思議な光を帯びていて、今や立ち入り禁止となつている鐘楼から鐘の音が響き渡る。

城の船着場には子供が乗つてきたらしきボートもあり、こちらの岸には無事に到着していたようだ。それから一行は坂を登つてローエン格林城へ入場する。

A班の面子が城に入るのを待っていたかのように、ローエン格林城の扉は閉じられた。当然のように開かず、怯えるミリアムはアガートラムで扉を破壊しようとするも結

界に弾かれてしまう結果となった。つまりこの城に閉じ込められたのだと理解する。

霊感ありを自称するエマの導きによりA班はローエングリン城の探索を開始した。城内各所の結界に対応する宝珠を回収しつつ敵性霊体を相手にしながら進む。

途中でトールズ士官学院の旧校舎地下4階にあった扉と酷似した紋様が描かれた扉を発見した。調査してみるがうんともすんとも言わず、ひとまずは放置。このローエングリン城はトールズ士官学院を創設したドライケルスの盟友であるリアンヌの居城だ、何らかの関係があつてもおかしくはない。

さらに進み、敵性霊体に襲われている子供たちを保護するが、城の結界は未だ解けていないため、原因を探るべく奥を指す。

ローエングリン城の最奥部には一際大きい宝珠が設置されていた。エマによると、これが城の異変の原因という事だった。

破壊すべく近づくと宝珠を守るようにして大きな霊体が立ち塞がった。

不死の王ノスフェラトウとも呼ばれる魔物だ。A班一行は子供を守りながら、苦戦しつつも撃破する事に成功した。

そして宝珠を破壊するという段になって、A班の面々の身体はぴくりとも動かなくなった。宝珠の抵抗か、あるいはノスフェラトウの悪あがきか：不可思議な術で拘束されたのだ。誰も動けない中で、視界の端にノスフェラトウが復活したのを確認する。不

死の王というのは伊達ではないらしく、狂ったように笑い声をあげながらノスフェラトウは鎌を振り上げた。

死界へと誘うノスフェラトウの鎌が振り下ろされる——より速く。

宝珠が馬上槍ランスに貫かれる。それにより宝珠の破壊は成され、ローエングリン城に訪れた異変もノスフェラトウも消え去る事となった。

当然、A班の面々を縛っていた拘束も解除され、急死に一生を得た事を実感する。

「——デュバリイ、アイネス、エンネア」

「「はっ！」」

ナギトらを救ったランスはいつしか消えていて、それをやったと思われる人物の凜とした声が吹き抜けの上階から響く。それに従うようにして甲冑の女騎士3名がA班の前に着地した。

いずれも尋常ではない雰囲気雰囲気に身構えるA班の面々。その中心にいる栗毛の騎士が代表して口を開いた。

「ナギト・シユバルツァー、リイン・シユバルツァー、エマ・ミルステイン、ラウラ・アルゼイド、以上4人は上階に上がりなさい。マスターがお待ちです」

「馬鹿な……班を分けるわけがあるまい……!」

敵かもしれない。そんな相手の言に従って戦力を分散する事はできない。ユーシスの言う事は尤もであり、指名されなかつたガイウスとミリアムも同意を示す。

指名された4人は少なからず困惑しており、上手く理解が追いつかない。

「言う事を聞かないのなら、あなた方をここで倒し——、引きずって行つてもいいですわよ……?」

ナギトたちよりは少し年上……と見られる栗毛の騎士から放たれるプレツシャーは昼間に邂逅したゼノとレオニダスにも勝るとも劣らぬもの。それは横に並ぶ2人の女騎士からも。

この3人を相手取つてしまえば、おそらく栗毛の騎士の言う未来が実現される。

「どうする、乗ってみるか？」

初めに提案したのはナギトだった。警戒は続けているナギトだが太刀はすでに納刀していた。リインはナギトの様子を見て「そうだな…」と考え込む。

「俺たちに害をなす気なら、さつき助けなければよかつたはずだ。あの敵を前に俺たちは為す術もなかつた……助けてくれたからには、害意以外の何かがあると思う」

「一理あるが……子供たちはどうする？」

リインの理屈は通っていた。しかしここで保護対象の子供たちの扱いをラウラは問題とした。

「この者たちからは悪しき風は感じられない。俺たち残された3人で見ておこう」

「見るからに騎士っぽい出で立ちだしな、子供に手エ出すような事はないでしょ」
子供2人という懸念にはガイウスとナギトが応える事で解決とされる。

名指しされた4人は上階に登る事にしたが、階段に一步足をかけたところでナギトは振り返り女騎士たちに問いかける。

「上で待つてるマスターってのは何者です？あなたたち3人もそうだが…この夜のローエングリン城で出会ったのはあまりにもタイムミングが良い気がするんですけども」

この猛者の雰囲気を醸す3人を侍らせる人物とは。昨夜のヴィータの言葉が脳裏を掠めた。

「今宵、こちらにいらしたのは結社《身喰らう蛇》が《蛇アの使徒ンギス》…《鋼の聖女》様ですわ」

「結社…」ナギトは目を見開いた。リインらにも確かに緊張が走る。これまでの実習では《怪盗紳士》ブルブランや《痩せ狼》ヴァルターと刃を交えたナギトだけが経験している奴らのヤバさを共有してはいるが、所詮は情報のみで体験していないリインたちは「気をつけないと」程度の警戒だ。

しかも「執行者」ではなく「使徒」と言った。すなわち、単なるいちエージェントではなく《身喰らう蛇》の幹部であるという事だ。

ナギトはいつでも太刀を抜けるように気を引き締める。そのレベルの警戒すら油断であるとは、まだ知らぬまま。

☆★

階段を登る。上階はテラスにも繋がっていて、開け放たれた扉からは月光が差し込んでいる。その月光を一身に浴びるのは甲冑姿の女性。

「——来ましたか」

清廉で静謐なオーラを纏う彼女の声は慈愛に満ちた母のもののようにも感じられる。顔は兜面で隠されているが、その視線がラウラに向けられた事はわかった。

「シオンの子孫……ラウラ」

「我が父祖の事を……？」

視線はエマに。

「魔法の未裔^{すえ}……エマ」

「っ!？」

ラインに。

「あの人の子……ライン」

「…俺の、出自を……？」

ナギトに、向けられる。

「そして——特異点、ナギト」

「ツ——はじめまして、聖女様！ ナギト・シユバルツアーです、どうぞよろしく！」
 わざとらしく大声を出したナギト。それにより雰囲気に吞まれかけていたリインたちも現実に戻る。

「何者かは知らぬが、この城で《聖女》を名乗るとはな……サンドロットSの名を預かる者として捨て置けぬ」

剣を抜いたのはラウラ。かつての主人たるサンドロット家の居城で《聖女》を名乗る不埒者を成敗しようと、自らを奮い立てる。

そうする必要があるのは、その立ち姿だけで父を、《光の剣匠》ヴィクターと比肩…否、凌駕する実力を誇ると見て取ったゆえ。

リインはそんなラウラを制して、視線は離さないまま聖女に話しかけた。

「まずは…先程は助けていただきありがとうございます。……それで、俺たち4人に何の用件が？」

「……なに、少々縁のある者を見かけたので挨拶しようと思ったまで」

聖女はそう言つて居住まいをただすと名乗りをあげた。

「結社《身喰らう蛇》が使徒第七柱《鋼》のアリアンロード」

兜面は取らず、しかし美貌を思わせる声音で名乗った彼女に、いの一番に声をかけたのはナギトだった。

「アリアンロード殿。どうやら貴公は我々について良くご存知のようだ。そこにどんな背景があるかは知らないが、喋ってはもらえないですか？」

アルゼイド家の先祖について。エマの正体について。リインの出自について。ナギトの特異点という特殊性について。

これらすべてをハツタリと言うには、ナギトら4人にクリーンヒット過ぎた。

「いいえ、話しません」

聞き出そうとしたナギトに賛意を示したリイン、ラウラ、エマの意志を挫くアリアンロード。

「というよりは、聞かせたところで無意味でしょう。あの程度の魔物に苦戦するようでは、ここから先の『激動の時代』を生き抜く事は不可能……」

「『激動の時代』……!」

「宰相が言っていた言葉ですね……」

そのワードに反応したリインに、エマはオズボーンが同じ事を言っていたと言及する。

「……………そうか。では証を立てれば良いのだな?」

溢れ出す闘気。弾け飛ぶ烈気。剣を構えたまま、琥珀の瞳でアリアンロードを貫いたのはラウラだった。

「フフ……豪毅な事です。アルゼイドの娘よ」

つまりラウラはアリアンロードに挑み、その実力を認めさせる事で彼女に喋らせようとしているわけだ。

「くく……さつすが。それでこそラウラだ、男らしい！脳筋万歳！」

その発想にこみあげる笑いを抑え切れず、ラウラを賞賛したナギトにジト目が向けられる。

「男らしいなど……年頃の女子にいうセリフではあるまい」

「ごめんごめん、冗談だつてば。肩の力抜けよう、ラウラ！みんな！」

そして、いつものように受け流して皆に発破をかける。

「総員抜刀！ 目標《鋼の聖女》！ 全力を尽くすぞ！」

ナギトの冗談に過度の緊張から解放された4人はリインの号令で得物を構える。

「その意気やよし。——来なさい！」

いつの間にかアリアンロードの手には人の背丈をゆうに越すランスが握られていた。まるで虚空から引き抜いたようだった。

戦闘が開始される。

「しっしっ——！」

初手ナギト、迅雷。

意味は最速での奇襲、及び後続の仲間を奮い立たせるための——

「——遅い」

雷速で迫るナギトの姿を完全に捉えているアリアンロードはランスで太刀ごとナギトを叩き伏せる。

「ラウラっ！」

「ああ！」

次にリインとラウラが剣を持って駆け、挟撃を仕掛ける。

「剣よー！」

そして正面からはエマのクラフト「イセリアルエッジ」による攻撃。

「——甘い」

前と左右からの同時攻撃。それをランスで薙ぎ払う。リインとラウラは弾き飛ばさ

れ、エマは振られたランスの風圧だけで転倒した。

「荒ぶる神の雷よ……——戦場へ来たれ！」

アリアンロードが槍を掲げる。すると4人を落雷が襲った。アングリアハンマー。

「ぐっ……」

「かはっ」

「そん、な……」

リイン、ラウラ、エマはもろに喰らって戦闘不能だ。ナギトは何とか避けていた。

出し惜しみは死に直結すると理解したナギトはヴィクター戦で獲得した絶招を使おうと構える。

「鬼気——」

瞬間、眼前にランスが迫る。回避を選択した。

突き出された槍はナギトの頬を掠め、一条の傷を残している。

「戦場で常に十全の力を発揮できると思わぬ事です」

「く……！」

アリアンロードを相手に一瞬でも思考をぼやけさせる「夢我」は命取り。発動に時間のかかる「無我」なんてもつてのほかだった。

「来ないのなら——、こちらから行きますよ！」

ナギトの胸中にわずかに生じた迷い。それを看破したのかアリアンロードは畳み掛ける。

一合、二合、三合、太刀と槍が打ち合う。続く四合目、ナギトの手から太刀が弾き飛ばされた。

「終わりです——！」

迫る刺突に、ナギトは迷わず踏み込んだ。槍が脇腹を抉るのにも構わず、掌底をアリアンロードの甲冑に守られぬ腹部に押し当てた。

「掌破！」

発勁。力が炸裂する。アリアンロードは痛痒の声すら漏らさず、伶俐な視線はナギトを観察する。

その観察は隙ですらなかったが、ナギトが退いて太刀を拾い上げるだけの時間にはなった。

「思った以上に、保つものです……特異点よ。しかしその傷では戦闘の続行は不可能でしょう」

アリアンロードの槍撃は絶死のものだった。それを躲しつつ反撃に移った代償は大きい。脇腹から流れ出る血液は留まる事を知らず、内臓は今にもこぼれ落ちそうだ。

「ええ……だから、次が最後です」

「いいでしょう、終わらせます」

次が最後の激突——2人は示し合わせたように互いの得物を掲げた。

「荒ぶる神の雷よ……——我が槍へ宿れ！」

戦場全体を蹂躪する雷撃のクラフト“アングリアハンマー”の威力をランス一本に封じ込めたアリアンロードの新たな戦技。

それに対してナギトは何のアクションもせず、ただ大上段に太刀を構えただけ。

「それは？」

アリアンロードは純粋な疑問によりナギトに質問した。ナギトは苦しげながら「ふっ」と笑うと、

「少し語る」

「どうぞ」と槍に雷撃を宿したままアリアンロードはナギトの説明を聞く事にした。

「俺には記憶がない。…つまり八葉についての知識がなかった。だから、八葉を自分なりに紐解いてみた」

八葉一刀流。《剣仙》ユン・カーファイが興した、東方剣術の集大成。

アリアンロードの攻撃で気絶していたリインら3人もいつのまにか復帰していて、彼女と対峙するナギトを見守る姿勢であった。

「八葉とは即ち八要にして八用。つまりは、八つに分たれた武の極意…要である」

「………続けなさい」

呼吸を整えて、ナギトは続ける。

「これなる一太刀は、八つに分かれた極意をひとつにする事を目的としたもの。……つまり八葉が八葉となる以前の……『始まり』の太刀」

「ほう。……つまりその技は武の極意そのものであると?」

「然り」

アリアンロードの挑発的とも取れる問いにナギトは短く答える。すでに意識は朦朧としていて、本当にただ太刀を振り下ろすしかできなそうだ。

「その大言壮語、よくぞ言った。ならば我が一撃、見事撃ち破ってみせなさい——!」

アリアンロードは腕を引いて刺突を繰り返すタメをつくった。そして次の瞬間、引き絞られた矢が放たれるようにして、ランスは突き出される。

「グングニル
大神雷槍

——!」

戦場を蹂躪する雷撃が、一本の槍の大きさにまで凝縮され、それがナギトを指して撃ち放たれた。

誰の目にもわかる、必殺の一撃。

それに、ナギトは、ただ――

「――」

ただ、太刀を振り下ろした。

何の神秘もなく。

圧倒的な力もなく。

目も眩む速度もなく。

ただそれゆえに、完璧だった。

聖女の試し――聖技には及ばずとも必殺の一撃。雷撃を一条の光として放つそれ

は、一の太刀に相殺される結果となった。

本来、ナギトの知らぬ事ではあるが。

その一の太刀は『から』、あるいは零、もしくはは根源とされる概念を内包する。

すべての始まりであるがゆえに、すべてのものに対して絶対的な優先権がある。

有り体に言ってしまうえば、世界のすべてがジャンケンのグーで優劣を競っているのに、こいつだけパーを出しているようなものである。

「……見事です。果てなき道の果て——よもやこのような場で見ることになるとは」

自らの戦技を打ち消された事にほんの少し驚愕したアリアンロードだったが、微笑むとランスを虚空に帰す。

ナギトは太刀を振り切ったまま動かない。すでに半分は気絶しているような状態だった。

「特異点——この場で消すには惜しい器という事ですか」

アリアンロードはひとりで納得すると「先の問いに答えましょう」と告げた。勝負前の、ナギトの正体についての言及だ。

「特異点……それは、この世界において唯一、自由なる者。万物が軌跡を辿っている中で、あなただけが自由。そしてあなたの自由は他者にも影響する事になる……」

その言葉を聞いて、糸が切れたのか。ナギトの意識は暗転する事になる。

ナギトはアリアンロードから受けたダメージのせいで治療を余儀なくされ、ギャラリー要塞での特別実習を迎える事なくトリスタに帰還する事になったのだった。

絶不調の始まり

ただ一度だけでも、その領域に踏み入った。

それはとても価値のある事で――

ナギトは、あの時の感覚をずっと反芻している。

「ん？」

ずっとこけた。太刀は手からすっぽ抜ける。

それはあまりにもイメージとかけ離れた事で。転んだ本人から疑問の声が漏れた。

先月の特別実習でのダメージからナギトが復帰したのは実技テストの時期だった。級友たちは3人組、あるいは4人組でサラに挑み、勝ち星をあげていた。

ナギトは単独でサラと勝負する事になったが、これまでの事や先月ヴィクターといい勝負をした事実を加味しての差配だ。

身体は幾分かなまってはいたが、気合十分のナギトは太刀を抜いて勝負を仕掛け——
——ずっこけたのだ。

当然のように、サラの勝利で実技テストは終わる。

ナギト・シユバルツァー、絶不調の始まりである。

☆★

アリアンロードに受けた傷は思いの外深かった。アリアンロード配下の戦乙女による応急処置、エマによる「おまじない」……そしてトリスタにかつて《死人返しリヴァイバー》と呼ばれた教官ベアトリクスがいた事もあり、後遺症もなく復帰する事ができた。

復帰する事はできた、が。

「う、おおっ!？」

剣が弾き飛ばされる。気を取られた一瞬で鼻先に切っ先を突きつけられて敗北。

「あら」

「おお」

「パトリック……!」

「なん、だと……?」

「あ、はっ……勝った本人が一番驚いてどーすんのよ」

何の後遺症もなく復帰はしたのだが、あり得ないレベルの不調がナギトを襲っていた。

最初は剣を振らない期間……ブランクがあつたからだと思われたそれだが、ある程度時間が経つても一向に感覚が戻る気配はなかった。

「いや……それはそうだが……」

なんならフェンシング部でパトリックに負ける始末だ。パトリックは入学当初、ナギトに完敗したせいで後の部内戦では無自覚に萎縮して実力を発揮できずにいた。

そんな状態のパトリックにさえ負けてしまうのがナギトの現状だ。

「どうやら調子が悪いという噂は本当のようね」

「代わりなさい」とナギトの手から弾かれた模造剣を拾い上げたフリーデル。ナギトの調子が悪いという話は院内でもにわかには語られているようだ。

フリーデルはいつものようにパトリックに圧勝し、伸びかけた鼻っ柱を折ってやる。パトリックは慢心するにはまだ早いようだった。

フリーデルやロギンスからもアドバイスを受けるが、ナギトの不調は一向に良くはならず、部活も終了の時間を迎える。

寮に戻ったナギトは夕食を摂ると、授業の予習復習に取り掛かるが、集中できそうにない。

「露骨に焦ってやがんな。……実技テストがボロボロだったのがそんなにショックかよ？」

同室のクロウが唐突に声をかけてきた。ベッドの上でグラビア雑誌のページをめくりながら、だ。

「ん〜、シヨックとか何というか……」

クロウを向いたナギトは、自分の悩みが言語化できていない事に気づいた。それこそクロウの言う通り「焦っている」のだと自覚する。

「ま、気持ちにはわかるぜ。今まで当然にあったもんが煙のように消えちまった時の不安や焦りはな」

「嘘くせー含蓄」

「お前な……」

真面目くさった顔のクロウに「らしくない」とツツコミを入れてみる。

クロウはため息をつくが、その発言が虚勢だと看破していて、ナギトもそれは承知していた。

降参するように「はあ」と息を吐いて、言葉を続ける。

「確かに俺は不安だよ。……俺は記憶喪失になってから、なにもかも失ってゼロからのスタートだった」

それは、紛れもない独白であった。

「目覚めてから1年と9ヶ月……俺は多くの、大きな力を、得た」

クロウの視線はまっすぐにナギトを見ている。

「それはきつと、あり得ないレベルの成長の速さだった。……それに納得できるだけの背景はあったけど、こうなってしまうたからには、不安が芽生える」

ナギトは語る。己の不安、己の弱みを。

同級生には語れぬそれは、今は級友であれど先輩であった男には語れてしまう。

「——得るのが速いなら、失うのも速いんじゃないかって」

ナギト・シユバルツァーの価値は“強さ”にしかないから。

それを失ってしまえば、ナギトは生まれた意味を無くすも同然。

——そんな強迫観念が己の内側から滲み出している。

「……ま、そりゃ不安にもなるわな。積み上げるは難く、崩れるは易し……ナギト、お前は積み上げるスピードが尋常じゃなかった。だからそれが崩れるのも常人より速い。記憶がないから余計に不安は加速する。なんせ、自分の積み上げるスピードに、何の根拠も見出せないからだ」

クロウの指摘は的を得ていた。まさしくその通りだった。

ナギトは以前、自らの成長速度の速さを“《剣鬼》と呼ばれた以前の實力を取り戻しているから”だと思っていた。それは納得できる根拠だったが、《帝国解放戦線》の《R》……新たに《剣鬼》を名乗る人物が現れた事で揺らいでしまった。

ラウラに諭された事で自らの過去が《剣鬼》である事などどうでもいいと結論したが、それとはまた向きの違う話だ。

「んで、記憶はどうなんだよ。なんか思い出した事はあんのか？」

「まあ……ちよくちよくと。過去、会った事のある奴に出会おうとフラッシュバックみたいな
なんが起きる」

「へえ、例えばばどんなだ？」

「…《身喰らう蛇》とかって秘密結社の連中に関する記憶が多いな。たぶん記憶に残るイベントだったんだろうと思ってる」

「なるほどな。他には？」

「あとは……敗北の記憶」

思えば、ブルブランやヴァルターに関する記憶は本人に出会わないと思い出せなかった。プロマイドを見た《銀》——リーシャは例外として、本人の情報が一切なく思い出せたのは、記憶を失う前のナギトが敗北したらしいあいっただけだ。

クロウは続く言葉を待っていた。ナギトは苦い気持ちになりながらも口を開く。

「そいつも結社のやつなんだが——、確か《剣帝》とか言ったかな」

思い起こす、《剣帝》の姿。

しなびた銀髪。

血に濡れる黒衣。

閉じられる赤い瞳。

「——ッ!？」

頭が、痛い。

「おい、大丈夫か？」

急に頭部を押さえたナギトにクロウが寄る。ナギトの意識は急速に現実に回帰する。

「——クロ、ウ……？」

幻と現実の焦点があつた。

心配げなクロウに「大丈夫」と答える。《剣帝》の姿を思い出そうとして、誰か別の人物が脳裏をよぎった。

クロウはため息をつくど、肩をすくめた。

「ま、最近いろいろあつて疲れが溜まつてんだらうよ……さつさと休め。特別実習までもう時間がねえ……今のままだと先月みたいに怪我するかもだぜ？」

「……うん、そうだな。もう寝るわ」

クロウの諫言に従う事にしたナギトはノートを閉じてベッドに潜り込んだ。

「ああ、そうしろそうしろ。——なんせ今回の実習は頼れる兄弟分と離れ離れなんだから」

☆☆

第6回目となる特別実習、A班の行き先は鋼都ルーレ。B班の行き先は海都オルディスだ。

A班メンバーはリイン、アリサ、クロウ、ファイ、マキアス、エリオット。

B班のメンバーはエマ、ラウラ、ユース、ガイウス、ミリアム、ナギト。

シユバルツアー兄弟、初の別行動である。

サラ曰く、ナギトとリインのコンビネーションを全員が見ているし、クラスメイト間の軋轢も先々月の実習で解決して、それも先月の実習で確認できたためらしい。

ナギトとしては実習先でもリインにフォローしてもらえるなら心強かったわけだが、わがままをいうわけにもいかなかった。

そうして迎えた特別実習1日目の朝。

同室のクロウをニードロップで起こして準備をする。文化祭の出し物の件で昨夜は

遅くまでエリオットと激論をかわしていたのを知っていた手前、手荒な真似はしたくなかったが、これがナギトとクロウの正しい距離感だった。

現時刻8：30。9時に学院のグラウンドに集合するように言われているⅦ組は口ビーで集合した後、軽くトリストアを回ってから学院に向かった。

9：00——グラウンドに到着したⅦ組を待ち受けていたのは、空を駆ける大いなる影。上空に姿を見せたそれはやがてグラウンドに降り立つ。

リベールの異変を解決するのに協力したオリヴァルト皇子が帰国の際に搭乗した、リベールの白い翼「アルセイユ」——今グラウンドを占拠しているのはそれより巨大で、なおかつ紅い。

その飛空艇から姿を見せたのは皇子オリヴァルトとその護衛であるミュラー・ヴァンダール。さらにはヴィクターとトヴァルまでもが、その艦からⅦ組を見下ろしている。

驚愕するリインたちにオリヴァルトはにっこり笑って「これなら帝都でのお披露目も成功しそうだ」と言った。

どうやらⅦ組はこの飛空艇の処女飛行——帝国全土でのお披露目に同道させてもらう形でルーレとオルデイスに送り届けてもらう事になっていた。

そしてⅦ組の面々は搭乗する事になる。ラインフォルト社、ツアイス中央工房、エプスタイン財団が協力してつくり上げた皇族の船、アルセイユⅡ番艦——高速巡洋艦カレイジャスに。

全長75アージュ、最大船速3000CE/hに装甲、迎撃武装を備えるカレイジャスの艦長を務めるのはヴィクター・S・アルゼイド。

正規軍、領邦軍のいずれにも属さない第三の風たるこのカレイジャスの指揮をヴィクターに執ってもらう事で抑止力となってもらう狙いを説明される。

その後は見学という体でカレイジャス艦内を見て回る。文化祭の出し物について意見を交わすエリオットとクロウに若干の意見を挟みつつ。ナギトはラインと共に甲板に出た。

「おつ、やっぱ風があるな」

「さすがに防風はしてあるみたいだけどな」

カレイジャスの甲板では風が強い。空の上を高速で走っているのだ、是非もなしというもの。

ラインの言葉に適当に返事をして「で？」と切り出した。

「ナギト……大丈夫なのか？みんなも心配しているが……」

それは未だ治らぬナギトの不調を慮った発言であつた。

「んー、まあそうだよなー」

これまでの実習の調子であれば何の問題もなかった。しかし今は不調も不調……絶不調である。そこに義兄弟として意思の疎通も上手いリインのフォローもない。さらに言えば今回行くオルデイスは貴族派トップのカイエン公爵家の拠点である。《鉄血の子供たち》の一員であるミリアムを連れて行くには難しい場所である。その点については考えがあるとサラは言っていたが……

「まあ……なんとでもなるんじゃない？」

「随分楽観的だな……」

「明日にや明日の風が吹くってやつさな。何もB班は俺だけじゃない、頼れるお仲間がいる……何とかなるだろ」

「でも……今回の実習先はオルデイスだろう。ルーレもそうだが、四大名門の本拠地だ。迂闊な真似はくれぐれも控えてくれよ」

「わかってるって。それにこっちの班にはアルバレア公爵家の次男がいるし、なんなら《光の剣匠》アルゼイド子爵の娘もいる。貴族派も簡単に手出しはできないと思う」

加えて、今回はカレイジャスのお披露目もある。領邦軍には「悪い事したら空から《光の剣匠》がやってくるぞ」という脅しが効くようになるわけだ。

「……わかった。気をつけろよ、ナギト」

「おうよ、お前もな、リイン」

まだ色々と言いたい事はあつたリインだが、全部うまく躲かれそうな気がして引つ込める。ナギトの危うさについては帝都での実習でマキアスが指摘した通り。当時はナギトがⅦ組でもトップを張る実力があつたから良かったものの、今のナギトは正直クソ

雑魚である。前までのように振る舞っては痛い目を見るはずだ。

しかし、ナギトからすればそんな事は百も承知という所なのだろう。いつもと変わらず——否、いつもより兄貴然とした笑顔を見せるのは心配をかけさせまいとする心意気か。

カレイジャスがルーレに到着する。A班一行はB班の面子と言葉を交わすと振り返る事なく艦を降りた。

東から西へ。カレイジャスはルーレからオルデイスまで真っ直ぐに飛行する。やがてオルデイスの空港に着陸した。

ブリッジでヴィクターやオリヴァルトらと挨拶を済ませると、B班とサラは共にカレイジャスから降りる。

空港内を歩いていたところで、後ろから「ナギト」と声をかけられて振り返ると、ヴィクターが追ってきていた。

ラウラは不思議そうに「父上？」と呟くが、ヴィクターはサラに目配せすると、サラはナギトを除くB班一行を引き連れて先に進んだ。

「ナギト……すまぬな。先に謝っておくでしょう」

「え、なんですか？怖いんですけど」

「うむ。仔細は話せぬが、此度の実習…そなたを災難が襲う事だろう」

「え」

「うっかり口を滑らせてしまつてな……まあ、先月の意趣返しでも思つてくれれば幸いだ」

先月の意趣返しと言うと、ナギトがラウラに「愛してる」[〃]とか言つてヴィクターを感させた件だろう。カレイジャス艦内でも学生の内は云々と釘を刺されたものだったが。

「……正直わけわからんですけど了解です」

ナギトは唸りながらもヴィクターの言葉に理解を示す。ヴィクターは「では」と挨拶

すると踵を返してカレイジャスに戻って行った。

その後ナギトはサラたちと合流すると、その足でカイエン公爵家城館へと向かう。というのも、今回の実習ではカイエン公爵家城館を拠点として実習活動を行うからだ。

「どうやら学院の常任理事であるルーファスの口利きで公爵家城館を宿代わりにする事が決まったらしい。嘘か真かカイエン公爵——クロワール・ド・カイエンも快諾したのだとか。」

公爵家城館前に着く。壮麗華美なこの屋敷がナギトには魔窟に見えてならない。

「なんとも……難しい実習になりそうだ」

ナギト自身の不調。リインの不在。ヴィクターの予言する災難。カイエン公爵家城館を拠点とする意味。

悪条件の揃う特別実習の総決算が、今まさに幕を上げた。

カイエーン公爵のお膝元

紺碧の海都オルデイス——人口約40万人を擁する帝国第二の都市であり四大名門筆頭カイエーン公爵家の本拠地。大陸西部沿岸部に位置するこの都市は良港としても知られており、オルデイス港は帝国はもちろんだ陸でも最大規模の貨物取扱量を誇る。そのオルデイスの港湾区には当然のように船乗りのための施設が並び、ナギトラがいの船員酒場ミランダもそのひとつである。

「ところでアンタたち、気づいてる？」

カレイジャスから降りたB班一行はカイエーン公爵家城館で荷物を下ろすと、実習課題を受け取ってこの船員酒場で遅めのランチをしていた。

サラの言葉にB班の面々は顔を見合わせてから頷いた。

「監視がいますね」

窓の外の人影に視線をやる。目が合った気がしたが、お互いに気づかないふりだ。

「これまでの特別実習で俺たちは貴族派の目論見を挫く事が何度かあった」

ユーシスの語るそれ、ナギトとして明確に数えられるのは2回——ケルディックの盗難騒ぎとバリアハートでのマキアスの逮捕。その裏でナギトが随行していないもう一方の班も革新派貴族派の対立絡みでゴタゴタに巻き込まれたという話だ。

「それを考えるとカイエン公が我らを警戒するのも当然だ」

「警戒するからには対策もするだろう。それがつまり、この状況というわけだな」

「ええ、それが『監視』——、城館に私たちを招いたのも、その一環でしょう」

「監視されると大胆に動き難いよね。——そう思わせてボク達の行動を抑制するのが目的かな？」

ラウラ、ガイウス、エマ、ミアムも続けて同意し、サラはドリンク（珍しく酒ではない）を煽ったあと口元を拭って言った。

「そこまでわかつてるなら合格点をやれるわね。なかなか成長したじゃない」

B班一行が「カイエン公爵家から監視を付けられている」と気づくのも織り込み済み。カイエン公もなかなかの食わせ者のようだ。

それから昼食を終えて一行は実習課題に取り組む事にした。会計を済ませて船員酒場を出る面子の中にサラの姿はない。オルデイス内で独自に動くと言つて先に出て行つてしまったのだ。

船員酒場を出たナギトらの前を人混みが行き交う。さすがは帝国第二の都市と言わべき人口密度。あまりの人の多さに嫌気がさす。

「ふう」とため息をついたナギトの顔を横切る2人の姿。フードを目深に被り、体格を隠すローブを羽織っている。ちらりと見えたその横顔は――

「……ナギト、聞いているのか？」

今後の予定について話し合っていたB班の面々だったが、ナギトの注意が別に向けられている事に気づいて名前を呼んだ。

話しかけてきたユーシスに「ちよい待て」と制し、ローブの人物たちの行先を目で追う。

ローブの人物たちは人目を避けるように港湾区の隅にある扉に入って行った。

「……あの者らがどうかしたのか？」

ナギトの視線の先にいたローブの人物を同じく視線で追ったラウラは、ナギトの注意がどうしてそこまで注がれているのかを問う。

「気のせいならいいんだが……たぶん、2人のうち1人は《帝国解放戦線》の《S》だ」
邂逅したのは帝都地下の一度だけだが、あのエキゾチックな眼帯女は忘れられるわけがない。

「もう1人は見えなかったが……体格的に《V》以外の幹部じゃないかな」

つまりは《G》、《R》、《C》の誰かだとナギトは言う。

「なに…？ やつら、ガレリア要塞に続いてオルデイスでも何かするつもりか？」

先月の特別実習では、ナギトは参加できなかったガレリア要塞の見学だが、その際にクロスベルで行われている通商会議を狙ってガレリア要塞を《帝国解放戦線》が襲撃する事件があった。

VII組の活躍もあり、要塞に設置されてある列車砲の発射は食い止められたが。

「少し待って下さい。妙じゃありませんか？ 彼らの目的はオズボーン宰相の命のほずです。帝都から離れたこのオルデイスで戦線はいったい何を狙うというんですか？」

エマの指摘は尤もであった。《帝国解放戦線》の目的は、度し難き独裁者に鉄槌を下す事。その標的たるギリアス・オズボーンのいない海都で何を目的としているのか。

「ふむ……彼らがこの地を襲う合理的な理由は無さそうだが……」

エマに続いてガイウスも話の決着を、ナギトの気のせい”に持っていくつもりによ

うだったが、ミリアムは「んー？」と唸ると、

「むしろ逆なんじゃないかなー」

「逆だど？それはいつたい——」

ミリアムのその発言の意味をユーシスが問う前に、ナギトは柏手を打ち、B班の面々の視線を集める。

「ここでうだうだ言ってもしょうがねえだろ。奴らの目的がオルデイスを害する事でも、あるいはその逆でも……、とりあえず追うか追わねえか、さっさと決めよう」

若干の棘を感じさせるナギトの言葉に面々は視線を交わして「追おう」と口を合わせて言った。

2人の姿が消えた扉の前に立つ。鉄製の扉は施錠されていた。一般に公開してある施設ではないようだ。

「鍵がかかっているが……」

「どいてガイウス。ボクとガーちゃんで——」

「やめろ馬鹿者。騒ぎを起こす気か！」

施錠の確認をしたガイウスに、ミリアムが力づくで扉を突破しようとする。勿論そういうわけにはいかないのでユーシスが諫める。

「エマ、リインから聞いたんだけどピッキングができるんだって？ バリアハートでやったみたいにもここでもできない？」

そこでナギトはエマに話を向ける。バリアハートでの実習の際、逮捕されたナギトとマキアスを助けるために残されたA班一行は街の地下水道を通ったと聞かされたが、その地下水道の入口を解錠したのがエマだったらしい。

その時の言い訳——“本で読んだピッキングの技術”を信じているわけではないが、エマには施錠された扉を開く術があるとナギトは踏んでいた。

「……やってみますが、できなくても文句は受け付けませんからね！」

エマに裏がある事を知った上でのナギトの発言に、ぷりぷりと怒るエマだったが鍵穴を覗き込んでチヨチヨイとしているうちにガチャリと音が鳴った。

ヒュウ、と口笛を吹いて「さすがエマ」と芝居がかったように言うナギトに、エマは本気で腹を立てかけたが、それも暗示をかけた自分に落ち度があると怒りを引っ込めて「上手くいきました」と告げた。

解錠された扉を潜って進むと、そこにはオルデイスの地下水路が広がっていた。

「多少、魔獣の気配はあるが……」

「それに、かすかに戦闘音も聞こえるな……」

ラウラとガイウスが敏感に状況を感じ取り、警戒は全員に伝播した。

「我々は《帝国解放戦線》幹部と思しき人物を追跡中だ、音には注意が必要となる。各自、警戒を怠るな……！」

そして、ユーシスの号令で進む事になった。幸いにも先に進む《S》——スカーレットともう1人が魔獣を倒しているのか、B班一行が得物を抜く機会はない。

先に行く2人に気取られないように慎重に進み過ぎたためか、一行はスカーレットらに追いつかず出口に到達してしまう。

「……見失ったか」

「途中に脇道もあつたし……ここが本筋っぽいけど」

出口の扉を見つめて言うユーシスはナギトは自信なさげに言葉を紡ぐ。きつとスカーレットらはこの扉の向こうに行つたはずだ。

「ここが出口か……ふむ、この風は……」

「方角や歩数から考えると……」

扉を遠目に、その先に何かがあるのか思案するガイウスとエマ。その時、扉がゆつくりと開かれていく。

「下がれ、下がれ下がれ下がれ」

声は静かに、焦りを滲ませたナギトはB班一行を下がらせる。途中で見た脇道に急いで駆け込んで、扉から出てきた人物を見やった。

白を基調とした制服は先月にも見たもの。

「ラマール州の領邦軍だと…!？」

ユーシスの驚愕は相当なものだった。戦線幹部の消えたと思しき扉から領邦軍兵士が現れた意味、可能性について思索が働いてしまう。

「これは…どういふ事だ…!」

それはラウラも同じだ。理解してしまった可能性が、2人を激憤に駆り立てる。

「待て待て、まだそうと決まったわけじゃない。落ち着け」

現れた領邦軍兵士は2人。腕に覚えがあるようには見えないから制圧しようとするば可能だろう。

しかし、顔を見られるのは避けたい。特に今回の実習ではカイエーン公爵家城館を拠点とするのだ、領主の闇の顔を知っていると看破されれば、本当に命に関わる。

そもそもこの地下水道に入った時点で、監視には悪い印象を抱かせているだろうが、まだイエローカードのはず。

「とりあえずあの兵士2人をやり過ぎしたら地上に戻ろう。それでいいか」

問いかけというより確認のていのナギトの言葉にB班のメンバーは同意する。それを見たナギトがため息をついて、張り詰めていた雰囲気は僅かながら弛緩した。

「……いきなりやべーところを見ちゃったな」

わざと砕けた口調で語るナギトに他の面々も緊張を和らげる。

「貴様が追おうなどと言いだしたからだな」

「それ言う〜？」

ユーシスの鋭いツツコミにナギトが崩れ落ちて皆の笑いを誘った。乾いた笑いではあつたが、それでも笑いは笑い、人の心を活気づけるには必要なものだ。

一段落して、ミリアムが言い出した。

「そういえばさつききの兵士ってさー、なんなのかな？」

「何って、ラマール領邦軍の兵士ではないのか？」

「ラウラは返事をしたが、ミリアムは「いやいや、そうじゃなくってさ」と続ける。

「何の目的で、この地下水道に入ったのかなって？」

沈黙が落ちた。その点についてはナギトも考えていたが、答えは絞り切れていない。

「……俺たちには監視がついているという話だったな」

ガイウスが切り出す。

「ならば、その監視の報告を受けた領邦軍がこの地下水道に兵を寄越したのではないか？」

「ありえる話だ」とユーシスが肯定する。次いで視線はナギトとエマに向けられる。突飛な発想をするナギトと地頭の良いエマの意見が求められているのだ。

「…ガイウスの考える線もありと思うんだよ。でも、だからこそ領邦軍は兵士をここにはやらない気がする」

ナギトの言葉に目を細めたのはユーシス。その意味を吟味している。しかしいつもと違いもつたいぶる事なくナギトは続きを話した。

「…俺が見たのが《帝国解放戦線》のメンバーだったとして、やつらが通った扉から領邦軍兵士がやって来たら、それは貴族派と戦線が繋がっている証拠を見せるようなもの。」

……ガイウス、エマ、方角やら歩いてきた距離であの扉の先に何かがあるかわかるか？」

「……おそらくはカイエン公爵家城館、あるいはその周辺施設ではないかと」

「俺もエマと同意見だ。この先から感じる風は城館で感じたものと同じだからな」

ナギトの意見を補強するようにエマとガイウスが扉の向こうを推測する。

「貴様の言いたい事はわかった。つまり《帝国解放戦線》のメンバーが公爵家城館に出入りするのに使ったルートを領邦軍兵士も使用すれば、それはやつらの繋がりを示唆する。それを俺たちに目撃させるわけにはいかないから、あの兵士2名は俺たちの搜索に出てきたわけではない、と」

「そゆこと。だからあの兵士2人は巡回とかだと思う。本当に俺たちの搜索に来たのならもつと人数もかけるはずだし。希望的観測ではあるけどね」

ユーススが解釈したナギトの結論をもってミリアムの質問への返答となる。「なるほ

どねー」とやはり軽く受け止めたように見えるミリアムだが、問題提起は鋭い。今この場でB班一行が考えるべき問題を提示してくれる。さすがは《鉄血の子供たち》の一角と言うべきか。

「じゃあさ、あの兵士2人の役割が巡回だとして、ここまで巡視する事ってあるかな？」

「普通にあるとは思うけどな、こんな奥まった場所まで見るほど勤勉かな。普段は施錠してある場所だし、一般市民が特に入る理由もないだろう。∴水道を狙うテロとかなら侵入もあり得るけども、この部屋∴というか広間には水路もないし」

ナギトは可能性アリと診断しつつも、否定的な意見を述べる。

「ま、見られたら見られたでサクッと制圧してその足で荷物を回収、列車に飛び乗ってトリストタに帰ろう」

ナギトらが「カイエン公爵と《帝国解放戦線》の繋がりを知っている」と知られれば、それは一発でレッドカードだ。

監視からの報告で『《帝国解放戦線》のメンバーが公爵家城館に繋がる地下水路に入った所を見られたかもしれない』と思われる状態で実習を続けるのも危ない綱渡りではあるものの。

そんな説明をして特別実習を放棄する案にも一応は賛成してもらった。

「んでだ、ここは有事の際に公爵家の人間が逃げるための経路って解釈でいいのかな？」
ひとまず話が一段落したところで、ナギトはこの地下水路に話題を変えた。

「…そうだな。俺の…アルバレア家の城館にも非常時のために地下水道に降りる事ができるつくりになっている」

答えたのはユーシス。やはり帝国有数の貴族ともなれば非常時の逃走経路くらいは確保しているらしい。そう考えると、もしかしたら帝都ヘイムダルにある皇族が住まうバルフレイム宮も帝都地下のどこかに繋がっていると考えられるかもしれない。

「そーかそーか。で、そんなところに…なんでこの扉があるのかな？」

ナギトの視線はこの広間の最奥。通路の向かい側にある扉に向けられていた。そこにあるのはトールズ旧校舎やローエン格林城で見た、あの不思議な紋様付きの扉だ。

喫緊の話題のせいで後回しにしていたが、ナギトからすれば貴族派と《帝国解放戦線》の繋がりより興味のある代物だ。

皆と共に調査してみるが、うんともすんとも言わない。今はまだ動かないだけか、あるいはすでに役目を終えているか……

そうこうしている内に巡回の兵士が戻ってきて、B班一行の緊張は高まったが、2人の足音はそのまま城館に繋がる扉の向こうに消えていった。

どつとため息をついたナギトらは2人が戻ってこない事を確認して、元来た道を辿っていく。

やがて港湾区との出入口を通過して、エマのピッキング魔術で施錠をしてから実習課題に取り組む事にしたが……

「たぶん大丈夫だと思うけど、実習中はボロを出さないようにしような」

それは一行が《帝国解放戦線》幹部と思しき人物が公爵家城館に繋がる扉に入ったのを見た事実についてだ。

ユーシスを筆頭に全員が頷いた。ラウラの猪突猛進っぷりが心配なナギトは「忘れよう」と言つてエマをチラ見した。エマはその意図を理解して抗議の視線を送るが、ナギトはめげずにウインクを連打した。

挙動不審なナギトの見る先にエマがいる、とB班一行はエマに視線を集める。それがナギトの思惑とも知らずに。

お膳立てされたエマはため息をついて眼鏡を外した。

「皆さん、私の目を見て下さい——」

暗示、炸裂。

B班一行はそれで「実習が終わるまでここで見た事実」を忘れる事となった。

☆★

実習課題を片付けた頃にはもう夜に差ししかかる頃合いだった。夕食を済ませようと

オルデイスを彷徨っていると、ユーシスのARCSに連絡が来る。

カイエン公爵家執事からのようで、響応の準備ができたので城館に戻って来てくれるの事らしい。

公爵家城館に戻ると、執事の案内で広間に通される。そこには豪華な夕食が準備しており、上座にはカイエン公が待ち構えていた。

「やあやあ、よく来てくれた。私も執務が終わったのでね、こうして諸君らと食卓を囲みたいと思ったのだよ」

クロワール・ド・カイエン——カイエン公爵家の当主であり、貴族派の首魁とも言える人物だ。

カイエン公は人当たりの良い笑顔を見せると、ナギトラに着席を促した。

「ユーシス君。君の兄君と父君とは良くさせてもらっているよ。これからもよろしく頼む」

「はい、もちろんです、よろしくお願ひします」

カイエン公の視線はユーススからラウラに移る。

「ラウラ嬢、先月ぶりだね。フフ…結局私はアルゼイド子爵にはフラれてしまつてね、どうか君からもよろしく伝えてはくれないか？」

「父は自由な人ゆえ約束はできませんが……、承知しました」

ナギトへ。

「ナギト・シュバルツアー君。私はシュバルツアー男爵とはあまり縁はないが…どうやら鷹狩りがお上手なようだね？今度一緒に一緒に遊ばせてもらえれば嬉しいよ」

「伝えておきましょう」

ガイウスへ。

「ガイウス・ウォーゼル君だね。故郷を離れて学ぼうとする姿勢は実に素晴らしい事だ。かのドライケルス帝が盟友の子孫…会えて光栄だ」

「恐縮です、カイエーン公爵」

エマへ。

「君はエマ・ミルスティン嬢だね？ 辺境の生まれという事だが、そんな環境をものともせず、あの名門トールズを主席入学とは恐れ入る。これからもその調子で励むと良いだろう」

「ありがとうございます、閣下」

ミリアムへ、視線が向く。

「そして——《白兔》ミリアム・オライオン嬢。お噂はかねがね聞かせてもらっているよ、君の兄弟姉妹たちの分と一緒にね。いずれは彼らを交えてオズボーン宰相と話し合

いの場を持ちたいと思つているのだが……」

「話し合いなんてよく言うよね。これ以上ないほどオジサンを敵視してゐるつてのにさ」

かけられる言葉を遮るようにしてミリアムが毒を吐いた。ユーシスが「ミリアム……！」と咎めるが、カイエン公はとぼけるようにして続ける。

「敵視……とは穏やかではない表現だね。私を含む四大名門の目的は、オズボーン宰相と同じだと思つていたのだがね。——『帝国の未来をよりよくする』……方向性が違うだけで、目指す所は同じだ。敵視などともない。私は勝手にだが、彼の事を盟友だと思つているよ」

よくもまあつらつらと言葉を紡ぐ事ができるものだ。そんな感想をナギトは抱く。同時にナギトらについて調査が及んでいる事にも驚きを覚える。

「ふうん？ 盟友？ ね……各地の貴族派の要衝……例えばオーロックス砦なんかは急速に軍備を拡張してゐるみたいだけど、そこはどう説明するのさ？」

食事の場はにわかには舌戦の様相を呈していた。ミリアムの幼い風貌からは似つかわしくない視線が放たれ、カイエン公はそれを飄々と受け流す。

「ふむ、オーロックス砦か。かの地の管轄はアルバレア公のため私からは何とも言えないが……かの御仁は生粋の遊び人でもある。遊びだからこそ力も入ろうというもの……今、アルバレア公はそういった火遊びに夢中なだけで……いずれは落ち着くのではないかね？ ユーシス君もそう思うだろう？」

繰言ではある。しかしミリアムの挑戦状に見事に答えたカイエン公だ、おそらくあらゆる問題に対する答えは用意してあるものと思われる。そういう風に知恵や口が回らねば、ナギトラが帝都で邂逅したあの怪傑……ギリアス・オズボーンとはとても渡り合っていないからだ。

ユーシスは短く「はい」と答えた。そう答える以外にないのだ。カイエン公は満足気に頷くと両手を広げてにこやかに微笑む。

「さ、難しい話は終わりだ。料理が冷める前にいただきますではないか」

その後、公爵家の晩餐にふさわしい豪勢で美味な夕食を終える。席を立とうとするB班一行に「ああそうだ」とカイエン公が声をかけた。

「一応だが言っておこう。今回の実習ではブリオニア島には行かないようにしたまえ。胡乱な連中がたむろしていると専らの噂だ」

「は、胡乱な連中…ですか？」

「うむ。大規模ではないのだが、危険な事には変わらないだろう」

「領邦軍で鎮圧はされないのですか？」

「何度か軍を差し向けてはいるのだが、その度に上手く躲かれてしまっていてね。被害も出ていないため大軍を動かす名分もたたないのだよ」

ユーシスとラウラの質問にカイエン公は淀みなく答える。ナギトは思考を働かせる

が、今現在プリオニア島で何が起きているのかは知る由もない。

「わかりました」と告げて割り当てられた男子部屋に移動してレポートに勤しむ事となる。レポートをまとめた頃合いにはすでに夜中になる時刻で、そのまま床につく事になった。

「おいナギト、何をしている」

ベッドに腰掛け、太刀を脇に置いたナギトを見たユーシスが言葉を差し向ける。

「んー、いやあ……今回あんまり役に立ててないんで、寝ずの番でもしようかと」

昼間の実習課題に取り組んでいた際もナギトは足を引つ張ってしまった。この調子だと明日や明後日も同じだろう。ならばせめて、この公爵家城館というアウエーで警戒するくらいはすべきだと思ったナギト。

女子部屋は隣だし、もし刺客が現れても気づく事はできるだろう。そんな意味を込めて言ったのだが。

「馬鹿か貴様は。いや馬鹿だ貴様は」

「辛辣ウー」

「……やはり傲慢だな貴様は」

ユーシスの言葉にナギトはいつものようにぼやく。『傲慢』なんて言い草はマキアスと同じで、コイツら本当に仲良しだなと内心で呟いてみた。

助けを求めるようにガイウスを見てみるが「ユーシスの言う通りだナギト」と、むしろ反対の構えだ。

「役に立てなかつたなど、そんな事を気にする必要はないんだ。俺たちは持ちつ持たれつの協力関係……これまでナギトが助けてきてくれた分の恩返しだと思ってくれればいい」

「とは言ってもほら、ここってカイエン公爵家城館じゃん？ やっぱ一人くらいは警戒を

——」

「だから、その必要がないと言っているのだ」

警戒をした方がいい。そう続けようとしてユースィスが遮る。

“なんで？”というナギトの目線を受けてユースィスはごほんと咳払いした。

「ここがカイエン公爵家城館だからだ。ナギト…貴様なら俺の言葉の意味する所くらいはわかると思ったのだがな。それとも、こんな事もわからないほどその目は曇ったか？」

ユースィスの挑発じみた問いかけをナギトは吟味しない。その思考はナギトも通過したものだからだ。

「…この城館で問題が起きれば、それはこここの館の主人の…カイエン公の責任となる。だから問題は起きるはずがない。そういう事でしょ」

「その通りだ。わかっているなら馬鹿な真似はよして寝る事だ」

「わかってるけどさあ……それでも万が一って事が……」

相手はカイエン公爵だ。革新派と鎬を削る貴族派の首魁とも言える人物。そんな人物の膝下どころか掌中で警戒無用というほうが無茶というものだ。

「ないな。万が一など、絶対に」

しかし、ナギトの心配をユーススは容易く蹴散らした。

「革新派との緊張が高まる今は非常にデリケートな時期だ。そんな中で大した価値を見出されていない俺たちにカイエン公がちよっかいをかけるはずがなからう。ましてや俺はアルブレア家の、ラウラはアルゼイド家の、ついでに貴様はシュバルツアー家の人間だ。トールズからの客分である俺たちに手を出しては各所からの追及は免れず、最悪の場合は貴族派の内部崩壊に繋がる。……これが、我々が絶対に手を出されないという根拠だが……異論は？」

ユーシスの論にナギトは隙を見つける事は出来なかつた。「ありません」と負けを認め、太刀を横に置くとおとなしく寝る事にした。

こうして特別実習1日目は終わりを迎える。

この1日目が平和であつたと言える2日目、3日目の実習が目前に控えている予感を残して。

羅刹の教え

オルデイスでの特別実習2日目。

ナギトラB班一行は実習課題を受け取ると、それを確認して驚いた事がひとつ。

依頼の名称は「ラマルル州領邦軍訓練参加要請」。

内容は色んな背景を含めて長ったらしく書いてあったが、まとめると「ジュノー海上要塞に来て領邦軍兵士と手合わせしてね」という事である。しかも依頼者がオーレリア・ルグインだ。

オーレリア・ルグインと言えば《黄金の羅刹》の二つ名で知られる領邦軍きつての名将で、帝国の二大剣術——ヴァンダール流とアルゼイド流の双方を修めた達人。武の世界でも知らぬ者はいない程の傑物だ。

そんな人物がナギトラを名指しで、丁寧に時刻まで指定して訓練に参加しろなんて言っているわけだ。トールズのOGらしいが、後進の育成に力を入れるタイプなのだろうか。

どことなく嫌な予感のしたナギトだったが「必須」と注意書きされているため無視す

るわけにもいかず、B班一行は他の課題を手早く片付けると、昨日と同じく船員酒場でランチを済ませた。

船員酒場を出ると港の先に見える島——ブリオニア島が視界に入る。

わざわざ「行くな」とカイエン公が直々に釘を刺すくらいだ、何かあるのだろう。貴族派の隠したい何かが。

「腹ごしらえも済んだ。ジュノー海上要塞へ行くでしょう」

ラウラが音頭をとり、B班一行は海上要塞へ向かう事にした。

街道に出て海上要塞への道中に立ち塞がる魔獣たちを蹴散らす。その頃にはナギトも多少は復調し、連携を邪魔しない程度には回復していた。

「そういうえばラウラ。かの《黄金の羅刹》オーレリア・ルグインはアルゼイド流も修めているらしいが、面識はあるのか？」

剣を鞘に納めたユーススがラウラに問うた。

オーレリアはかつて《光の剣匠》ヴィクター・アルゼイドに師事していた。オーレリアの30代に差し掛かる年齢から考えてもヴィクターの娘であるラウラと面識があってもおかしくはない。

「そうだな、私の姉弟子に当たる。会うのは久々だが——並の御仁とは考えないほうがよからう」

「ほう、ラウラがそこまで言うほどなのか」

ラウラの戦慄した顔にガイウスが驚きを見せた。同年代では豪胆な方に組み分けされるラウラが会うまでもなく畏怖を隠せないでいるのだ。

「ああ。私は前に我が父を帝国三指に入る実力者と言ったが……オーレリア伯も間違はなくそうだろう」

「名高き《光の剣匠》と伍する実力者ですか……」

話を聞いていたエマも驚きを隠せないでいる。先月A班だったメンバーはあのヴィクターの隔絶した実力を垣間見たのだ。それと同等の人物など、それは恐れるに決まっている。

「確かに情報局のデータベースでも危険度ランクは高かったねー」

「またお前はそういう事を軽々しく…」

しれっと情報漏洩するミリアムにユーシスが咎めるような視線を送り。

ジュノー海上要塞に到着する。見ただけでわかる堅牢堅固な城はまさしく要塞と呼んでふさわしい雰囲気を出していた。皆が思わず生唾を飲み込む。

番兵に所属と用件を告げると当然だがあっさりを通され、ラマール領邦軍の白の制服を着込んだ男共の巣窟に入り込んだ。

海上要塞の入口を潜ったそこは広間であった。普段はここでも訓練が行われているようで、今回の課題をここで行われると説明がされた。

「そちらは6名か…」

対応する隊長らしき男はナギトらを値踏みし訓練の相手を選別した。五人一組の「伍」とB班一行は模擬戦を始める事となった。

相対する5人のうち1人は「伍長」——隊長で、サーベルとライフルを装備している。残る4人は一般兵で領邦軍で正式採用されているらしい銃剣を構えていた。

「ガイウスとラウラとミリアムが前衛、エマは後衛だ。俺は中盤で指示を出す。ナギト……お前は遊撃だ」

ユーススが前もって決めていた布陣を確認する。それぞれの得物や戦法からしても適切な配置だった。

「始め!」という声が響き、それぞれが集中する——より速く。

「撃て!」

すぐさま銃剣を構えた兵士たちが隊長の指示でトリガーを引く。放たれた四つの弾丸がナギトらに迫る。

「ガーちゃんー！」

ミリアムがアガートラムでシールドを展開して防ぐ。未知の傀儡に一瞬の驚愕に染まった兵士らにガイウスとラウラが突っ込んだ。

兵士らは一瞬遅れて立て直したが、ユーススとエマがアーツで牽制し、前衛2人の一撃は伍の連携を崩した。

そこにナギトは緋空斬を放つが、同じく弧状の斬撃を放った伍長によつて追撃は阻まれてしまう。

一息つく間もなくユーススが伍長に踊りかかった。兵士たちは伍長をフォローしようとするが、アガートラムの強烈なパンチによつて後退、伍長とは分断された形となる。兵士たちを抑え込むガイウスとラウラ、ミリアム、エマを尻目にナギトはユーススの狙いを今更ながら理解した。ユーススはまずもって伍長を撃破しようとしている。

「——疾風！」

切りかかったナギトだったが、その刃は伍長のサーベルに止められる。しかしユーススとの2人掛かりにさしもの現役領邦軍伍長も長くは保たずに倒された。

振り返ったナギトが見たのは兵士4人に押されるラウラとガイウス、ミリアムにエ

マ。さすがはジュノー海上要塞に詰める最精銳の領邦軍兵士と言うべきか。数的不利がなければ学生などに遅れは取らない。

しかし伍長が倒された事で兵士たちの連携や士気は下がり気味で、逆にナギトラは調子づいている。ユーススの激励が皆の背中を押して、勝利したのはそれから3分と経たない頃だった。

パチパチパチ、と拍手の音が聞こえて振り返る。同時に怪訝そうに振り返った領邦軍兵士たちの顔が驚愕に染まった。

視線の先にいたのは銀髪を靡かせる女性。

「フフ…我が軍の伍を倒すか。数で勝っていたとは言え見事なものだ、トールズVII組」

女性は肩で息をするB班一行に近づくと労いの言葉をかけた。

「オーレリア・ルグインだ。ここジュノー海上要塞…引いてはラマール州の領邦軍を統括している。よろしく頼むぞ、有角の若獅子たちよ」

☆★

「お久しぶりです、オーレリア伯爵閣下」

納刀して呼吸を整えたラウラが挨拶した。それにはオーレリアもにこやかに応える。

「ああ、久しいな。……かつての師の元に碌に挨拶にも行かず、その娘…我が妹弟子とも言葉を交わせていなかったのは心苦しい限りだったのでな。そなたらの特別実習とやらにかこつけて挨拶をさせてもらおうと思ったわけだ」

そしてオーレリアはナギトラをここに呼びつけた狙いを語る。

「模擬戦は途中から見せてもらったが、そなたらもなかなかの練度と言えるだろう。ARCCUSと言ったか…その戦術リンクとやらが要らしいな？」

「ご存じでしたか。このARCCUSはエプスタイン財団とラインフォルト社で合同開発された戦術オーブメントの最新型…その恩恵がなければ勝利するのは難しかったは

ずでしょう」

ラウラは懐からARCUUSを取り出すとオーレリアに見せた。

ラウラの言う通り、ARCUUSは戦術オーブメントとしての基本機能や短距離間の通信など出来る事は多いが、やはり最大の特徴は「戦術リンク」だ。

フィールドの味方の動きを察知できる機能は戦場で革命を起こす程の破格だ。実際に、はじめましてから半年程度で歴戦の領邦軍に連携で勝る事ができた。戦闘中にナギトがユースシスの意図を察する事ができたのも戦術リンクで切っ先の方向や目線の動きを理解できたからだ。

「そうだろうな——と言っておかねば我が部下たちの格好がつかぬか」

「ハハハ！」とオーレリアは景気良く笑って、それから剣を抜いた。真紅の剣だ。ガード——鐔の部分は黄金に染めあげられ、その中央部には翡翠の宝石が嵌められている。

「さて、若獅子たちよ。まだ体力は残っているな？ 我が部下たちの敵討ち——もとい、稽古をつけてやろう」

「真紅の宝剣を肩に担ぐように構えるオーレリアは挑発的に笑う。その背後で領邦軍兵士らが『ご愁傷様』という表情をしたのをナギトは横目でちらりと見えた。

「それは……」

「ん、名工に打たせたものでな。宝剣アーケディア：そう呼んでいる。して、どうだ？」

「恐れ多い事ですが……かの《黄金の羅刹》の剣を体験できるとあれば願ってもない……！」

その挑発に嬉々として剣を抜いたのはラウラだ。領邦軍の精鋭兵士と戦った事に加えて実習課題までやっているのだ。正直な話、すでに疲労困憊ではある。

「良い機会だ。胸をお貸しいただく……！」

しかし、帝国最強の一角であるオーレリア・ルグインが稽古をつけてくれると言うのだ。ラウラでなくとも血が滾るのは武に生きる者として当然の反応である。ユーシスも剣を抜くといつものように構え、それに倣うようにしてガイウス、ミリアム、エマも

それぞれ得物を取り出す。

「先月は《剣匠》で今月は《羅刹》か……何とも数奇——いや好機か」

ナギトも同じように太刀を抜いて、ほんの僅かの間、オーレリアと目が合った。その唇が弧を描き——

「——来るがいい！」

それが開戦の合図となった。

「行くぞ！陣形は先程と——ッ!？」

フォーメーションの確認。ユーススがそれをしようとしたのと同時。

オーレリアから圧力が放たれた。覇気と言いつい換えてもいい。その存在が放つ圧倒的な覇気に、先手をかけようとしたナギトらは一步も動けなかった。

「どうした、来ぬのか？ ではこちらから行くぞ！」

模擬戦が始まって意図的に覇気を放ったくせに、オーレリアは白々しく言う。宝剣に力をためてそれを放った。霸王剣。

「ガーちゃ——」

「避ける馬鹿！」

ミリアムはアガートラムでシールドを展開しようとしたが、おそらく破られるだろう予感にナギトは飛びついて回避行動を取った。

他のメンバーも覇気による重圧からは辛くも逃れており、左右に分かれる形で斬撃を躲す。

「援護を！」

そう言うところウラは大剣に光を灯してオーレリアに挑みかかる。洗刃乱舞——今ま

で幾多の魔獣を屠ってきた……それを目撃したナギトだったが、オーレリアはそれを軽くないです。

「ふむ、良い太刀筋だ。修練は積んでいるようだな」

一合、二合、三合と打ち合う。光の剣が正面から受け止められ、弾き返されている。ならば……とラウラは力を乗せた一撃を与えるべく大きく振りかぶった。

「——だがまだ甘いっ！」

そのほんの僅かな隙にオーレリアは宝剣を差し込んだ。ラウラが吹き飛ばされる。

ラウラを援護するはずだったエマのクラフトがようやく放たれたが、オーレリアはそれを容易く剣で掻き消した。

次いでミリアムとガイウスが突撃した。重撃と槍撃を宝剣が受け止める。微動だにしないオーレリアの身体。よほど力の逃し方が上手いのだ。

そこにユーシスの一撃が加わった。その攻撃は意図的に遅らせたもの。波状攻撃でオーレリアの足を止めるための作戦だ。

ラウラはたった今立ち上がった。間に合わない。

エマはARCUの駆動を始めたところ。間に合わない。

つまりこれは、ナギトを主攻に据えたコンビネーションだ。

VII組の全員を蹴散らし、《光の剣匠》と互角の勝負をしたナギトに託された勝機。ナギトはそれを掴み取る。

「迅ら——あいで?」

ただし、その調子が万全であつたらの話だ。

足がもつれて転倒した。無様に転んだナギトに気を取られるB班のメンバー。それを隙と捉えたオーレリアはアーケディアを一閃してユーススを弾き飛ばした。

エマのアーツが放たれたが、オーレリアは跳躍してそれを躲す。そして、

「四耀剣!」

着地と共にその宝剣が床に突き立てられる。同時に衝撃波が円形に広がった。それ

はB班一行を遠慮なく打ちのめし、それをもってこの模擬戦の終結となった。

☆★

「フツ……」

宝剣を軽々と肩に担ぎ、笑んだオーレリア。B班の面々はようよう立ち上がり、敗北を認めるようにして各々武器をしまう。

「まあ……ぼちぼちと言ったところか、Ⅶ組とやら。連携こそ上手いものだが、基礎となる個人の武力は学生レベルの範疇か」

「力不足は元より承知……將軍の稽古でそれがより明確になったのは我々にとつても幸いでした」

オーレリアの辛辣な評価だが、まともに勝負にならなかつたB班一行としては受け入れる他ない。せめてナギトの迅雷が決まっていれば、多少は評価されたやもしれぬが。

「特にそなた……黒髪の。ナギト・シユバルツァーで間違いないな？」

まさにそこでナギトに話が向けられた。武術や貴族繋がりでラウラとユーシスについては知っていたオーレリアだが、ナギトの存在まで認識しているとは。ナギトは「はい」と肯定し、オーレリアはそれを見届けると嘆息した。

「我が師ヴィクターより聞いてから期待していたのだが……よもや手を抜いていたわけではあるまいな？」

どうやらオーレリアはナギトの話をヴィクターから聞いていたらしい。言外に期待はずれだと言われたのは間違いない。

考えてみればアルゼイド流の師匠と弟子の関係だし、その縁もあって貴族派に加わらぬ中立派の誘いをしていたとしてもおかしくはない。その話の中でナギトの事について語る可能性も十分にありえるのだ。

「いえ、そんなことは」

ナギトはすぐさま否定した。武に生きる者にとって「手抜き」はこの上ない侮辱であり、自分より圧倒的な強者であるオーレリアに対してそんな挑発じみた事をする理由もないからだ。

「ふむ、そうか……であるなら、不調か？ 見たところ、色々と噛み合っておらぬようだな」

手抜きではないが、全力でもない。ヴィクターの話とナギトの様子を鑑みてオーレリアは看破した。加えて「噛み合わない」事実を見抜いたのもまた慧眼であった。

「……これは感服致しました、《黄金の羅刹》殿。まさか一度や二度見ただけで、そこまで把握されるとは」

これにはナギトも素直に——というには慇懃無礼なきらいがあるが——負けを認める。

「ふ。師の話と照らし合わせたまで。……その齢で2つの流派を融合させた術理を生み出すほどの鬼才と聞き及んでいたのにな」

「はっ。それは褒め過ぎですね」

2人は軽妙に笑みを交換して。

オーレリアは「ふむ…」と意味深にナギトを観察する。

「ナギト・シユバルツァー、謙遜などは無しで答えよ。そなたは自らを才人と思うか？」

唐突にそんな質問をされる。背後にB班の面々が控えている事もあり、普段なら否定する所ではあるが、今はオーレリアに散々持ち上げられた後だ。

「そうですね、少なくとも『剣』に関しては」

先月までは、確実にそうだった。今は見る影もないが。たった1ヶ月前が遠い過去のように思える。輝かしいからこそなのか、という自問を封じ込める。

「正直な事だ、今は自信なさげのようだが。それに記憶喪失であるとの事だが……まことか？」

「はい」と肯定。オーレリアは合点がいったようにくつくつと笑った。

「ならば今のそなたは間違いなく『感覚派』なのだろう。天才肌にはままある事だ、一度感覚が狂ってしまえば、これまで通りに動けなくなるのは。そなた……己が術理を言語化できておらぬだろう？」

言われてナギトはこれまでを振り返ってみる。

ユミルの郷でのリインとの修行。『疾風』や『緋空斬』は見て、何度か練習して感覚を掴んだ。

ツールズに入学して。これまでの剣技にアクセントを加えた。何となくその方が良いと感じたからだ。

強敵との対決を通じて。かつての剣技を身体が再現する。その感覚をなぞっただけ。新たな技を見出す。ふんわりとゴールが見えたからそれを掴んだだけ。

オーレリアの言う通り、ナギトは自らの術理を言語化できない。

どういう技なのか、なんとなく説明はできる。しかし『どういう手順』で発動していたかをマニュアル化できていない。

何故ならそれらすべては感覚に基づいたものだったからだ。

「あゝ……言われて、見れば……その通り、です……」

これ以上なく口ごもりながらナギトは言う。何故なら恥ずべき事であると思ったからだ。

「本来であれば、ちゃんとした師に教えを受けて術理を言語化して己の頭と体に叩き込むわけだが……そなたは記憶がなく頭で理解した術理を失い、これまで感覚だけで進めてしまったのだろう。天才性ゆえの悲劇と言うべきか」

ナギトはこれまで、本当の意味で『行き詰まる』事がなかった。

努力は必ず実るし、強敵との対峙では覚醒する。

だからその成長にあぐらをかいて、これまで通った道を振り返る事がなかった。

これまでに獲得したものを、感覚だけでなく言語化して得ようとしなかった。

その結果がこれだ。因果応報とでも言うべきか。……むしろ因がないからこそ果という応報が消えたのか。

「ふむ……しかし、あれほどの鈍化はそうはない。そうなった理由に心当たりはないか？」

「怪我でしばらく安静にしてみました」

「年単位のブランクではなからう。それは理由にはならぬ。他にないのか……例えば怪我をする前などは？」

オーレリアの言葉でナギトは再び記憶を探った。思い返すのは先月の実習。

ヴィクターとの対峙。《剣鬼》としての過去を受け入れ、その力を引き出した……全身全霊を尽くした戦い。

《鋼の聖女》との対決。ヴィクター戦で得た絶招も使えず、しかし最後は完璧な一の太刀を振るえた一戦。

「怪我をする前、ではないんですが……怪我をして、意識が朦朧としていた時に……何というか、最高の一撃を出せた気がするんです。それで何とか窮地を脱する事もできたようなんです、たぶん」

「……アレか」

「あの、聖女の雷撃を打ち消した……」

ラウラとエマはナギトの言う「最高の一撃」に心当たりがあった。それはアリアンロードの戦技、大神雷槍をかきつけた一太刀。

オーレリアが「聖女？」と反応した。

「ええ、先月の実習の折、異変が起きたローエングリン城に現れた甲冑の女性がそう名乗っております——《鋼の聖女》と」

「——ほう」

ラウラはアリアンロードが《身喰らう蛇》の使徒である事までは語らなかつた。しかし、それでもオーレリアの変化は絶大であった。

ヴィクターやアリアンロードといった常外の猛者と対峙したナギトでさえ身震いするほどの烈気。ただ眩いたオーレリアは口角を上げてそれを放った——いや漏らしたのだ。

「——おっと、すまぬな。聖女と聞いていきり立ってしまったな。我が野望はかの《槍の聖女》を超える武功……聖女と聞いては黙ってはおれんな、許せ」

オーレリアはその烈気をすぐに引つ込めると詫びた。それから再びナギトに視線を移した。

「では、つまり動けなくなる前はむしろ絶好調だったわけだ。最高の一撃とやらが放てるくらいには」

「…そうですね。とは言つても、アレはまぐれ……あの時以来、何をしても再現できないので」

あの時以降、ナギトはあの感覚を忘れないように怪我をしている間もずっと反芻していた。

怪我から復帰してまずやったのは、アレを再現できるかどうかだった。それがどうしても無理で、その後は不調が発覚してそれどころではなかった。

「ふむ……ではおそらくそれだな。それがそなたの不調の原因のひとつである事は間違いないだろう」

オーレリアは断定するように言った。しかしナギトはオーレリアの言う「それ」が何を指しているかわからず「え？」と聞き返した。

「そなたの言う『最高の一撃』とやら、私にも心当たりがある。剣で素振りをしていると方にひとつくらいで完璧と思えるものが振れる。実戦では使えず、とても狙って振れる一太刀ではない」

オーレリアが語る完璧な一太刀。きつとそれはナギトが垣間見た境地——武の極地

そのものの具現と同じだ。

アレが自分にしかできないと思うのはきつと驕りなのだろう。ナギトは少し反省してオーレリアの言葉に耳を傾ける。

「しかしそなたはそれを狙つてやろうとしている。試みる事は立派だが、そなたのように己が術理を言語化できておらぬ者がそれをやると、感覚がそちらに引つ張られて普段の実力すら発揮できぬようになる。今のそなたがまさにその状態であろう」

オーレリアの言った通りだ。ナギトは怪我から復帰してからこれまで、あの一の太刀を再現しようともがいていた。不調に陥り、実力が発揮できなくなつてなお「アレさえ使えれば」という考えが思考の端にあつた事は否めない。

届かず、しかし手を伸ばしたからこそ、本来この手にあつた感覚さえこぼれ落ちてしまった。

あの、力も速度も「最適」で、だからこそ「最高」だったあの一太刀を。

求めて、頭にあるイメージを身体は再現しようとして。だからこれまで使つていた戦技は……本来必要な力や速度が得られず、使えなくなつたわけだ。

それを矯正しようと下手に力を入れたりしていたものだから、余計に感覚は狂つてし

まった。本当にどうしようもない末路、結論、真相だった。

「そう、ですね……その通りです。何とも情けない話です。俺はあのまぐれに頼る心がいつまでも捨てられなかった……って事ですね」

「うむ。しかしそう気を落とすな。理想を求めるが武人の——人の性ゆえな」

ナギトは眦を下げて情けない顔をしたが、そんなナギトをオーレリアは肯定した。そして、その優しい顔のまま——

「それに……安心するが良い。この私が直々にそなたの面倒を見てやろう。もちろん、そこな級友もまとめてな」

「え？」

ふと芽生えた嫌な予感にナギトは——B班の面々は反論を考えた。

「もうこんな時間ですし……」

「うむ、カイエン公爵が今日もまた夕食を共にと……」

言ったエマとユーシスに「フツ」とオーレリアは笑んで見せる。

「大丈夫だ。カイエン公とはすでに話をつけてある。今夜はこのジュノー海上要塞に泊まっていくが良い。先月のガレリア要塞よりは良い食事を出すぞ？」

「し、しかし……明日の朝には列車に……」

「導力車でオルデイスまで送り届けてやろう」

食い下がったユーシスにあっさりと答えたオーレリア。どうやら逃げ道は完璧に塞がれているようだ。

「観念するしかなさそうだ、ユーシス」

「うんうん、こんな機会滅多にないだろうし！」

「フフ、かの《黄金の羅刹》に稽古をつけてもらえるのだ。これ以上はなかるう……」
そもそも乗り気らしいガイウス、ミリアム、ラウラに背を押される形でユースとエマも納得する。

「さあ、稽古の始まりだ……」

力強くオーレリアが呟く。

そしてほんの半日にも足らない地獄が始まった。

この件については皆が思い出すことを拒否するし、前述の通り地獄であるから後に語られる事もないであろうが。

この時ナギトは理解したのだった。

これがヴィクターの言っていた“災難”なのだ。

本物と偽物

何がとは言わないが、とりあえず地獄だった。

夕食という質素な時間を挟んでまた地獄だった。

地獄が終わったのは22:30それから汗を流してやや固いベッドに横になる23:00。レポートを書く体力はもうなく、泥のように眠りについた。

そして目覚めたのは5:12。海上要塞中に響き渡る緊急時のブザーが目覚ましとなった。

ブザーの後に放送が何かまくし立てるように何か言ったが、昨日集中的にしごきを受けて疲れ果てたナギトの耳には入らない。むしろ深く布団をかぶった。

ユーシスから揺らされてようやく意識を覚醒させる。

「早く起きろー！オルデイスでテロが起こったー！」

☆★

オルデイスから海上要塞に届けられた連絡によると、まず5時前に爆発があったらしい。爆弾は線路や公共施設、貴族邸宅などに仕掛けられていたらしく、少ないながらも人的被害は出たようだ。

その後、市街に人形兵器が放たれたれよう、こちらは市内に詰めていた領邦軍が相手をしているが手が足りないらしく、海上要塞に救援要請が来た流れとなる。

「さて、そろそろオルデイスだ。腹を括るが良いVII組！」

B班一行はオルデイスに向かうオーレリアの車に同乗させてもらっていた。海上要塞の領邦軍に先発してオルデイスに出発したが、領邦軍本隊もすでに出発してオルデイスへ向かっているらしい。

オルデイスに突入した車両を人形兵器が取り囲んだ。小型ならまだしも中型以上の人形兵器を車で突破するのは無茶という事で降りて対応する事になるが……

「霸王剣！」

オーレリアの戦技で人形兵器が一掃される。

昨日の「稽古」と銘打った模擬戦では本当に稽古をつけてくれていただけなのだという理解がナギトラを襲った。

しかし今はそれが心強く、オーレリアを中心としてB班一行はカイエン公爵家城館に向かった。

「おお、よく来てくれたオーレリア将軍！」

オーレリア・ルグインという破格の戦力もあり、一行は公爵家城館に時間をかけずに到着した。

城館に入ったオーレリアをカイエン公が諸手を広げて迎え入れる。

その背後には老若男女が所狭しとひしめいている。おそらく避難民たちだろう。

「カイエン公、状況は？」

「見ての通りひどい有様だ。今朝5時前に市内各所で爆発があつた。今は被害状況の確

認と事態の収集に当たらせている。加えてこの城館や教会を臨時の避難所と定めて防衛要員を送ったが……人手はその程度で限界だ。まだ避難できていないであろう市民たちの保護までできておらぬ」

オーレリアの問いにカイエン公はすらすらと答えてみせる。この辺はさすが為政者と言うべき把握能力か。

「線路が破壊されたと聞きましたが？」

「うむ、今はオルデイスに駐屯していたTMPが破壊された箇所や規模を確認しているそうだが……増援は見込めんだろうな」

「なるほど、承知しました。今しばらくすれば海上要塞の本隊も到着するでしょう。指揮は現場の隊長に一任していますがよろしいですか」

「ああ、我々が横から指示するよりよほど迅速に動けるだろう」

カイエン公とオーレリアの会話は早い。B班の面々が口を挟むまでもなく、オーレリアと共に避難できていない市民の救助に向かう事になった。

避難民でこつた返す城館ロビーを出る。

「避難場所になっているのは公爵家城館と七曜教会の聖堂だ。我々の仕事は逃げ遅れた市民たちの避難誘導——む？」

「オーレリア将軍」

状況と任務の確認をしているところにカイエン公が現れてオーレリアに声をかける。なにやら言い忘れていた事があるらしく、オーレリアはそちらに行く事になった。

「先に活動を始めようが良い、VII組よ。後で合流しよう」

オーレリアという強力なリーダーを欠く事となったB班一行だったが、それで闘志が萎びる事はない。

「将軍がいなくなつたが、我らのやる事は変わらぬ」

「テロという危機はすでに帝都で経験済み……あの時とは状況が違うが……市民の避難、何としても完遂させるぞ！」

ラウラとユーシスは特にその傾向が高い。『貴族の義務』というやつだろう。B班の皆もそれに続き、やけに熱気っぽくなっている事にナギトは気づいた。

熱くなっているのなら、冷やかすのがナギトの役目だ。これまでも、これからもきつとそうだ。

「滾んのはいいが、あんま逸るなよ。自分の命を守る事を第一に考えろ。経験があるとは言えテロ……マジで命に関わるからな。お兄さんとの約束だ」

神妙な顔をしたナギトにB班一堂は浮かされていた熱気に冷や水をかけられた気分になる。つまり冷静になった。

まず「フツ」と笑つたのがユーシス。

「誰がお兄さんだ……だが……」

「ああ、それでこそナギトだ」

ユーシスに続いたのはガイウス。真面目な事を言いつつも、最後にくだらないうーモアを挟むナギトの通常運転。ここ最近は見なくなつたものだ。

「やっぱり！最近のナギトおかしいと思ってたんだよ！」

「ふふ、ようやく戻りましたね」

そこにミリアム、エマも続く。どうやら不調で気落ちしていた事で心配をかけていた事実は今更気付かされる。

「……ああ、やはりそなたはその顔が似合うな」

最後に、ラウラにそんな事を言われた。

でも、自分がどんな顔をしているかなんてわからない。でもたぶん、こんな一幕すら幸福に感じているのだからきつと——

「——どんな顔だよ」

——とナギトは柔らかく微笑む。

それを見てB班の面々は本当に前までのナギトが戻って来た事を確信した。そしてナギトに倣ってユーモアを匂わせる口調で言った。

「ならば、アレはナギトに任せてもよさそうだな」

「そうですね。良い機会です」

「ああ、ナギトはいつもリインと同じ班だったからな」

「アレって何のことー？」

「どうやらナギトとミリアムを除く全員が、＼アレ＼とやらをナギトにやらせたらしい。ミリアムと同じように「？」としていたら、ラウラはしたり顔で教える。」

「リインがいつもやるアレだ。アレがなければ始まらないである」

それでナギトはピンときた。ミリアムは未だ「だからなにさー」もぼやいているが、教えるより実際にやってみた方が早い。

ニヤリ。ナギト・シュバルツァーは口角をわざとらしく歪めた。

「トールズ士官学院Ⅶ組B班！」

声を張り上げた。緩んでいた空気がピツと引き締まる。

「目的は市内に取り残された市民の救助！ 気合い入れろよお前らア！」

リインの代役にしては荒っぽく。しかしナギトらしい檄が飛ぶ。

「応ー」と声が重なるのを背中で感じて、さらに笑みを深めるナギト。
さあ、行動開始だ。

☆★

オルデイスの街を駆け抜け、人形兵器を駆逐し、市民の避難を誘導する。

市街に放たれた人形兵器の数は多い。しかしそのほとんどはラマル領邦軍が相手をしている。ナギトらが矛を交えるのは押し上げられた前線が撃ち漏らした20前後の数だけだ。

「迅雷……！」

この街区で最後の人形兵器を破壊する。ユースとラウラが率先して仮の避難所に隠れた市民たちに安全が確保されたと伝えにいく。

その後ろ姿を見守りながらナギトは太刀を納刀する。昨日のオーレリアのしごきのおかげで、何とか迅雷クラスの戦技までは再び使えるようになった。感覚が戻ったわけ

ではないが、これで多少はお兄さん面できる実力を取り戻したわけだ。

確認するように右手をにぎにぎしていると「ねえナギト」と声をかけられた。ミリアムだ。

その顔はいつもの童女のそれではなく、《白兔》としてのものだった。

「このテロの狙いつてさー、なんなんだろう？」

「……………さあな」

誤魔化すように言葉を返したが、ミリアムの呈した疑問はナギトも感じていたものだ。

「今この帝国でこんな大規模なテロを起こせるのは《帝国解放戦線》くらいだよ。一昨日もナギトが見たって言うし」

「そうだな」と言つて一昨日の出来事を思い返す。昼食後にたまたま戦線の幹部であるスカーレットを発見したナギトはB班の皆とともに後を追つたのだ。慎重にいき過ぎ

たため追いつけずに見失ってしまったが。

「アレで俺はてつきり戦線と貴族派に繋がりとあると思っただけ……こんなテロが起こったからには違うのかもな」

「うーん、わかんないね。地下水道にいたのがテロの下見にしては城館に被害がないのは気になるけど」

「ミリアムはなおも《帝国解放戦線》と貴族派——カイエン公爵家との繋がりを考えている。」

まあ、いつものように発想を逆転させると、今のナギトのように「戦線はオルデイスでもテロを起こしたのだから貴族派と戦線に繋がりはない」と思わせるための仕掛けなのかもしれないが。

「……さて。一昨日、戦線幹部を見たのは俺だけだし確証にはならない。地下水道の最奥が公爵家城館に繋がっているというのもエマとガイウスの推測に基づいたもの……いずれも戦線と貴族派の繋がりの証拠にはならない」

と、そこまで言つてナギトは会話が成立している事がそもそもおかしい事に気づいた。

「つてかミリアム、お前……記憶あんのか？」

船員酒場を出て、ナギトが戦線幹部を見たと言つて後をつけて地下水道に入り、その最奥の扉から領邦軍兵士が現れた事を目撃し、兵士らをやり過ごして港湾区に戻った。時点までの記憶はエマの暗示によつて封印されているはずだ。

だからB班で、地下水道云々、という会話が成立するのはナギトとエマの間だけのはずだ。しかしミリアムは当然のように話を振ってきたのだ。

「ボクにはガーちゃんがついてるから。いいんちよが何かして皆がどうにかなつちやつたのがわかつたから話は合わせておいたんだけど」

「……マジか」

ミリアムの有能ムーブにナギトは嘆息する。さすがは情報局所属のエージェントと
言うべきか。

「おい、何を話している。先に進むぞ、最後は港湾区だ！」

どうやら市民の避難誘導を終えたらしいユーシスが、暢気に話していたナギトとミリアムを注意する。次は港湾区だ。

☆★

港湾区を最後にするようにオルデイスを回ったのには理由が2つあった。

ひとつはこのオルデイスがバリアアハートと同じ“貴族の街”である事だ。ここオルデイスにおいて貴族は平民より優先されて、優遇されて当然の地位。このようにテロが起こったとしてもそれは同じで優先的に避難させるべきは貴族だ。そういった配慮がナギトたちにも期待されたのがひとつ。

あとのひとつは、単純に港湾区にある戦力が他の街区の追隨を許していないから。早朝にテロが起きた事もあり、今朝に出発するはずだった輸送船の護送船団——言わば用心棒連中が港湾区に集っていたからだ。

だが……

「これ、は……」

ガイウスが呟く。

「なんという事を……！」

ユーシスが怒りを露わにする。

港湾区の被害は他の街区の比にならなかつた。

B班一行の前に広がる光景は惨状そのもの。

港に面した建物は苛烈な銃撃に晒されたのか内部が見える有様で、そこらじゅうに人形兵器の残骸や人の死体が転がっている。

いくら戦力があると聞いていたとは言え、後回しにするべきではなかつた。そういう後悔が芽生えつつあった。ぎり、と歯噛みする音が聞こえた。

ぱん、と手を叩いて面々の視線を集めたのはナギト。

「落ち着け。気持ちはわかる。やれる事をやるぞ」

心は熱くていい。だが頭まではそうなるな。ナギトは自分にも言い聞かせつつB班一行に冷静を取り戻させる。

見ると、港湾区に集っていたらしい護衛船団の連中はすでにほとんどが斃れた後らしい。それ以上に転がる人形兵器の残骸が彼らが強者である事を物語っているが、数の暴力には勝てなかったようだ。

すでに領邦軍も到着しているが、やはり数で負けているため前線を押し上げる事はできずにいる。

不幸中の幸いなのは、領邦軍を相手にするために人形兵器の多くがナギトらとは街区の反対側に投入されている事だ。

人形兵器が蠢く港の間に《帝国解放戦線》のスカレットと《R》の姿を捉えた一行は手早く打ち合わせると突入する事にした。

駆け抜ける。会敵する人形兵器を切り伏せ、到達する。

「あらあら、こんなところで会うとはね。VII組の坊やたち」

「《帝国解放戦線》幹部スカーレット……！」

ウエーブがかった髪を振ってスカーレットは歓迎するように声をかけた。応ずるラウラの声は怒気を滲ませている。

「それに《R》……《剣鬼》と呼んだほうがよろしいか？」

白髪に鬼面で顔を隠した《R》に対峙するように立ったのはナギト。対して《R》は「フ……」と笑うのみ。

「何が狙いが知らんが即刻テロを止めてもらおう！　すぐに海上要塞の精兵が到着する……諦めて投降するがいい！」

睨み合いで膠着しかけた状況を嫌ったユースイスがしたのは降伏勧告。しかし、やはりそんな脅しに屈するならテロリストなどやってはいないのだろう。

「あら怖いわね。海上要塞と言えば名高き《黄金の羅刹》が直接指揮する部隊……とつとと目的を達成して帰らなくちゃ」

「……ああ、そうだなスカーレット。怖い《羅刹》が来る前に生意気なガキどもを片付けて進もう」

スカーレットが法剣を構え、《R》は長剣を抜く。周囲には人形兵器が侍る。

「……ッやるぞ！総員最大限連携して奴らを制圧する！」

ユースイスの指揮にフォーメーションを取るB班の面々。響く銃声と怒号、悲鳴を合図に戦闘は開始された。

「おおおっ！」

「はああっ！」

呐喊したガイウスとラウラを迎え撃つのはスカーレットの法剣。

「甘いわ！」

節ごとに分かれた刀身が鞭のようになって迫るガイウスとラウラをまとめて払い、押し返す。

「ガーちゃん！」

「迅雷——！」

続くのはミリアムとナギト。左右から挟み込むようにしてスカーレットに肉薄する。

「俺が右！」

「えええ！」

その連携に対応するのは、やはり連携。ナギトを迎撃する《R》と長剣越しに視線が

交わる。一瞬の均衡の後、弾き返される。ミリウムも同様だ。

さらに連撃を重ねようとしたB班だったが人形兵器によって邪魔されてしまう。

「チツ……」ユーシスが舌打ちする。周囲を見渡すと領邦軍に差し向けられている人形兵器以外のすべてがナギトらを囲むように配置されている。

この状況になるのを避けるために一気にスカーレットと《R》を制圧したかったのだが、そう易い相手ではないようだ。

スカーレットが艶然に微笑む。嗜虐性を湛えたそれは見る者が見れば悦楽的なのだろうが、ナギトはむしろそういう女は組み伏せてこそと思う人種だ。

そうするためにまずは。

「まずは数的不利を打ち消すぞ。倒せるやつから倒せ！……ここが山だぞ！」

そう指示したナギトは続けて「ラウラ！」と叫ぶ。呼びかけるより速く動き始めていたラウラはそれでも「任せるがよい！」と言って剣に光を宿した。

「やらせると思うか？」

「やらせんだよ！」

「俺たちはそのためにいる……！」

ラウラのSクラフトを阻止しようと動く《R》を止めたのはナギトとガイウス。

ユーシスのSクラフト発動にはスカーレットが詰め寄るがエマとミリアムで阻止する。

炸裂した2つのSクラフトは周囲の人形兵器を一掃した。後続に詰められるより速く、この刹那の数的有利でスカーレットと《R》を倒す。その狙いを――

「ここが山場なのは――」

「――こちらも同じよ！」

――通させない、戦線幹部。

《R》が構える。Sクラフトの気配。受けに回っていたB班の面々で対応できたのはミ

リアムとナギトだけ。

ミアムが皆の前に立ってアガートラムでシールドを展開する。ナギトは太刀に緋色を纏わせた。

「緋空十字斬——やばっ」

放つ直前、スカレットもスクラフトの体勢に入る。

十字に放たれた緋空斬は《R》のスクラフトを中断させる。しかしスカレットのスクラフトはそうではない。

Sクラフトとその補助に回ったB班の動きが鈍る事がわかっていた《R》は自分のスクラフトをチラつかせる事で意識を誘引した。本命であるスカレットのスクラフトの発動を阻止させないために。

B班の狙いを潰し、己の狙いを通す。《R》の策はまんまと成功した。

スカレットのスクラフトがナギトたちを打ちのめす。それでB班一行は彼らの前に膝をつく事となった。

「……ふう。少しはやるが……この数を相手にしてなお蹂躪できる程の強さではないな」

「ええ。先月、ガレリア要塞では遅れをとったけど……《紫電》に《剛撃》がいなければこんなものでしょう」

地に膝をつき、肩で息をするナギトラをこき下ろす戦線幹部の2人。言い返してやりたいが、それより今は回復に専念だ。少しでもダメージから回復しろ、呼吸を整えろ。そんな集中は現実逃避だ。あんな事を言いつつもスカーレットと《R》の視線はB班の面々から離れず、後続の人形兵器も詰めていて突破口どころか逃げ道もない有様だ。

絶体絶命——死が間近にあると理解できる。
死？

こんなところで？なぜ？おかしい。ありえない。

ユーススが、エマが、ガイウスが、ミアムが、ラウラが、死ぬ？

ありえない。そんな筋書きは許されない。整合しない。観測されたものではない。ならば何のせいだ。

ナギト・シユバルツァー俺のせいだ。

ナギトという存在があるから。特異点だから。軌跡はなぞられない。

間違いだ。

こんなものは。

間違いだった。

こんな物語は。

願いなんて抱いたから——

目の前が真っ暗になる。そんな感覚だった。絶望感が芽生えた、その時だった。

「——諦めるにはまだ早かろう。有角の獅子を背負う若者たちよ」

☆★

彼女は立っている。今にも崩壊しつつある建物を足場にして、眼下の全てを睥睨して

いる。

白を基調とした将校用の制服に紫紺のマントを靡かせて。光を反射する銀の髪が風に揺れて。

そんな風貌でどうして“黄金の”なんて呼ばれるのか。その由縁を、垣間見る。

黄金の闘気。金色の王氣。第一位を示す黄金こそが彼女に相応しい唯一の在り方だからだ。

真紅の宝剣が掲げられる。そこに凄まじい闘気が込められた。十字の斬撃が放たれる。ナギトの緋空十字斬などとは比較にならぬ規模のそれは人形兵器の群れを薙ぎ払った。

それを見届けるより早く彼女は跳躍した。宝剣アーケディアに先の斬撃を遥かに超える闘気が装填される。

「――王技・剣乱舞踏！」

着地と同時に宝剣を地面に突き立てる。その衝撃は大地を伝播して戦場そのものを串刺しにする。無数の剣が視界を埋め尽くしていた人形兵器の悉くを殲滅した。

「フツ」と不敵に笑って宝剣を肩に担ぐ様はさましく豪傑の在り方だ。

「オーレリア將軍……」

ラウラが名前を呼ぶとオーレリアは、まるで周囲の敵など視界に入っていないように無警戒にこちらを向いた。

「よくぞ……ここまで保つたと褒めるべきか、それとも我がしごきを受けておきながらこの程度かと詰るべきか……いささか悩むところだな」

やれやれといった体でナギトラに視線を向けるオーレリア。その姿に昨日の地獄を思い出したナギトは「前者で！」と言って立ち上がる。

ナギトに続いてB班の面々も併せて立ち上がった。

「フフ……冗談に應じるだけの余力があるなら十分だな」

「さて」と言つてオーレリアはB班一行を背中にテロリスト——スカーレットと《R》と

対峙する。

2人ともオーレリアの王技を避けていたが、その表情は先程までとは打って変わり強張っている。《黄金の羅刹》を、その剣技を目の当たりにしたのだから当然の反応ともとれた。

「女と人形兵器は私が受け持とう。男の方は任せるぞ。くれぐれも情けない姿を晒すなよ？」

オーレリアは担当を決めると霸王剣でスカレットと《R》の間を切り裂く。左右に飛び退いた2人は必然、分断された形となる。

再合流されないためにもB班の全員で《R》の前に立ち塞がった。

「……さすがは《黄金の羅刹》オーレリア・ルグインだ。たった1人でこうも戦況を変えてしまうとはな」

感心したように、あるいは諦めたように《R》はこぼした。

「海上要塞の部隊も到着したのか……こちらの戦力も失われつつある。……さてさて、困ったものだなこれは」

「フン……そう思うなら投降したらどうだ？」

「ぼやくように言う《R》にユーシスは再度降伏勧告をするが、それに素直に従うはずがなく。《R》は長剣を構えた。」

「それは止めておこう。国に楯突いた以上、死罪は免れないだろうからな。——しかしお前たち、まさか勝てると思っているのか？ ……この《剣鬼》を相手に」

そして、《R》はナギトたちに思い出させる。

目の前に立っている男こそ《剣鬼》——カルバード共和国にて要人1000人斬りを成した達人なのだ。

オーレリアという強力な助っ人が到着した事で勢いづいていたB班の面々に冷酷に突きつける現実。ほんの僅かに皆に緊張と恐怖が芽生える。

しかし――

「それさ、嘘だろ」

――ナギトだけがそうではない。

嘘だろ、と短く言った。鬼面に隠れて見えない顔の《R》が眉をひそめたようにすら感じられて、ナギトは続けた。

「お前が《剣鬼》だって話。嘘だろ。……なんつーか、感じないんだよな。お前から、
“凄み” ってやつが」

ナギトはこれまで特別実習を通して強敵たちと対峙してきた。

ブルブラン。ルーファス・アルバレア。ヴァルター・クロン。ヴィクター・S・アル
ゼイド。アリアンロード。オーレリア・ルグイン。

彼らは皆、独特の雰囲気があった。対峙しただけでわかる “凄み” が。

「ほう？」と《R》は反応する。それは余裕を感じさせるものであったが、ナギトはそれ

に嘯み付いたりはしない。

「《怪盗紳士》、《痩せ狼》、《光の剣匠》、《鋼の聖女》、《紫電》、《黄金の羅刹》——そういつた異名を持つ連中は全員、それに自信……いや、自負があつた。凄みつてのはたぶんそういう所から来てるんだらう」

これはナギト自身が組み立てた方程式だ。これまでナギトが経験してきた事を骨子として作り上げた論理。

「だがお前からはそれを感じない。《剣鬼》なんて大層な異名があるにも関わらず、それに対する自負がない。——それが、お前が《剣鬼》でないって証明だ」

だからこの理論はきつとナギトに近い感覚の者にしか通用しないのだから。現に《R》は鼻で笑つた。

「なんだそれは？ それってお前の感想だらう？ そんなものが俺が《剣鬼》でない証明にはならない」

全くもって《R》の言う通り。先の仮説はあくまでナギトの経験に基づいた論理から導き出したものに過ぎず、客観的な証拠　／　根拠にはならない。

「確かにそうだ。これは武や暴で生きる者にしかわからない感覚——一般人には効かない理論だろう。だが、それとは別にもっともらしい事なら言える」

そうしてナギトはニヤリと笑う。

「まず聞くが、お前ら《帝国解放戦線》の目的は《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンの打倒でいいな？」

「抹殺、だ」

「オーケー。じゃあ次……《剣鬼》って何者だ？」

《剣鬼》とは何者か？

その問いがどんな意味を持つのかわからず、しかし答えたのはラウラだった。帝都地下で聞いた《剣鬼》の概要を語る。

「…《剣鬼》とはカルバード共和国で1000人斬りをした殺人者の事だろうか？」

「惜しいね。正確には政治家とその秘書1000人殺しだ。そして《帝国解放戦線》が目の敵にするギリアス・オズボーンは政治家だ」

ナギトはそこで一度言葉を切る。B班の皆に考える猶予を与えたのだ。《R》を見るとその口角はわずかに歪んでいる。

「まさか」と始めに言ったのはユーシス。さすがこういう事には頭の回転が早い。

「《剣鬼》の目的が何にせよ、すでに共和国で政治家たちを斬った危険人物として知られている。そんな男が宰相を狙うと公言しているテロ組織に与みしているとすれば…当然、政治家として動き難くなる」

果たしてユーシスが導いた答えはナギトと同一のものだった。補足するようにナギ

トは口を開く。

「その通り。《剣鬼》を警戒して表舞台に出る数が減れば求心力は落ち込み、逆に臆してないアピールで表舞台に立つ機会が増えれば暗殺のチャンスもその分増える。……どちらでもオズボーンの敵対派閥からすれば得がある」

貴族派にとっても《帝国解放戦線》にとっても《剣鬼》の存在はありがたく、政治家にとってはこの上ない恐怖だ。

「つまり？」と先を促したのは意外にも《R》だった。

「つまりお前ら《帝国解放戦線》は宿敵ギリアス・オズボーンを牽制するため《剣鬼》というネームバリユーを使ったわけだ。……悲しい事に、未だその効果はないようだがね」

これがナギトの導き出した、一般人にも通用するであろう理論だ。証拠ではないが、もつともらしい仮説と言える。

そう言ったナギトの眼光に貫かれ、《R》を声も出さずに笑うと、顔面上部を隠してい

た黒い鬼面を取り外した。優男の風貌が明らかになる。

「正解だ。さすがは本物といったところか。では改めて。《帝国解放戦線》幹部《R》——リヴァアルだ」

《R》……リヴァアルは鬼面を放り捨てて名乗り上げる。その姿からはやはり威圧感が放たれたりはしないが、どこか余裕を感じさせてそれが不気味だった。

その風貌に、誰かを思い出しそうになる。苦い記憶が蘇りそうになってナギトはかぶりを振って幻想をかき消した。

リヴァアルはその余裕のある雰囲気のまま「いつから？」とナギトに尋ねた。リヴァアルが《剣鬼》でないと勘づいた時期を聞いているのだ。

「……俺は記憶喪失だけど、そうなる以前の《剣鬼》としての記憶もポツポツと思い出してる。その中で自分が《剣鬼》と呼ばれている事もあったし、さつき言ったように《剣鬼》の名前が政治家に効くって理屈も積み重ねた。……だが、確信したのは今しがた……リヴァアル、対峙したお前から凄みを感じなかったからだよ」

しかしナギトはすでに答えを言っている。

記憶の中で《剣鬼》と呼ばれる自分——そのネームバリューを使って自分の価値を上げただけかもしれない。

《剣鬼》の名前が政治家への牽制になる理屈——《剣鬼》の目的が国政を乱す事なら《帝国解放戦線》に与しても不思議ではない。

そういつた思考ではなく、ナギト自身が肌で感じたもの。それが確信に至る道筋であった。

つくづく自分が感覚派であると思う。オーレリアの言った通りだ。しかし今はそれらの感覚を言語化できている。

「なるほどな」と未だ余裕を崩さないリヴァルに対して、ナギトもいい加減やり返してやるタイミングを悟った。

「でだ、リヴァル……お前、勝てると思ってんのか、この《剣鬼》を相手に？」

太刀の峰を肩に担いで、余裕と威圧を見せつけるナギト。そのセリフは先のリヴァルのそれをなぞったものであった。

それにはリヴァルは「フフ」と笑い、腰の後ろに手を伸ばす。そこから出てきたのは

拳銃だった。リヴァルは長剣を右手に、拳銃を左手に構える。その様子はさっきの長剣ひとつの時より様になっていて。

「《剣鬼》を名乗る以上、剣に固執した戦い方をしてきたが……俺の本来のスタイルはこれだ。それにな……確かに俺は《剣鬼》の偽物だが、偽物だからと言って本物に劣る道理なんてない」

偽物が本物に劣る道理はない。

それはナギトが好む言い回しで、だから掛け値なしに「はっ！」と快哉した。

「いい啖呵じゃんかよ……じゃあいくぜ——偽物！」

リヴァルに太刀の鋒を向けるナギト。それに続くようにB班の仲間たちも声を上げる。

リヴァルも決意したように、長剣と拳銃を掲げた。

「——来い、本物っ！」

《劍鬼》だった男たちはこうして刃を交えた。

ナギトは昨日のオーレリアのしごきにより、術理の言語化ができるようになった。未だ言語化できないままの奥義級の戦技もあるが、術理が言語化できた事によって、技についてより深く理解が及び、その応用性はかつてを凌ぐほどとなっていた。

「――幻影疾風」

緩急をつけた疾風のステップで相手を欺きつつ斬り走り抜ける。

それはリヴァルに太刀傷をつけるが、ナギトの姿を追った銃口を避けたがために浅い。

追撃にガイウスとミリアムが迫る。リヴァルはまずガイウスの槍を受け流すと、それをアガートラムにぶつけて動きを阻害。続けて迫るユースとエマのアーツ。しかし左右から放たれたそれはあくまで助攻。本命は正面から肉薄するラウラの洗劍。

「——ツ黒影零風」

長剣から放たれた風圧は迫るアーツの威力を減衰し、奥義を発動しつつあつたらウラの行動を妨害する。

リヴアルは前後左右に挟まれた形となつたが、むしろ好都合というように長剣と拳銃に黒い闘気を纏わせた。

「——黒影剣鬼円斬！」

円形に振り巻かれた剣撃と銃撃はB班の面々を弾き飛ばす。

B班の面々が態勢を立て直す、一瞬の隙。リヴアルはさらに深く、剣に闘気を集約させた。スクラフト——先刻スカーレットと共に戦っていた時より数段速く準備が整い、それは放たれた。

「——黒影刻穢！」

扇状に広がった黒い斬撃はナギトラを打ちのめす。元は昨日の特訓で疲れ果ててい

た所を叩き起こされ、市街の人形兵器を掃討しつつ進み、スカーレットとリヴアルの2人にはやられた。

オーレリアが現れた事で士気は上がったが、体力が限界である事には間違いない。

リヴアルの必殺の技を受けたのはナギトとガイウス、ミリアムにラウラの4人だ。ユーシスとエマは後方でアーツを撃っていたためリヴアルの戦技の範囲外だった。

立ち上がる、手足に力が入らない。

リヴアルを見ると、その左手の銃口がナギトに向けられている事に気づいた。

その目にはやはり余裕があつて——、？

ナギトはそこで、抱いた違和感を追求する事にした。立ち上がる体力を回復するため
の時間稼ぎに舌先三寸を回す。

「……なるほど、なるほど。さすが…言うだけはある強さだなリヴアル」

しかし未だリヴアルからは威圧感というものを感じない。闘気の総量云々という話
ではなく、強者が持つ独特の雰囲気がないのだ。

「それ……余裕かと思つてたけど違うな。諦観……でもない。虚無、虚偽……」

リヴァルの拳銃と視線はナギトを捉えて離さない。しかしその引き金は未だ引かれない。

「いや——逆だな。偽りだから虚ろなのか」

“虚偽”と言つて、ピンと来た。あるいはこの表現も近いだけかもしれないが、あなたがち的外れというわけでもないはずだ。

その証拠に、リヴァルの銃口は下げられた。

「…虚ろか、俺は」

その答えを、リヴァル自身も求めているようで。ナギトは「ああ」と肯定する。

「どこか嘘クセーんだよな。何か……、他の戦線メンバーにあつて、リヴァル……お前にないものが……」

憤怒。憎悪。狂気。決意……………否、否、否、否。それらが不足しているわけではない。

「お前は、どこかで、自分の正しさを履き違えている……………のか？」

違う。近いが、違う。

ナギトは言いながら思ったが、受け取ったリヴァルは眉根を寄せた。

「正しさ……俺の正義……………鉄血への復讐……………それは——」

リヴァルは思考に飲み込まれつつあった自分を、かぶりを振って追い払う。

「繰言はここまでだ。ナギト・シユバルツァー……………立て、決着をつけるぞ」

「もうちょい時間稼がせてくれよな」とぼやきながらもナギトは立ち上がって得物を構える。

ラウラも、ガイウスもミリアムも続く。ユーシスとエマも決意を新たに武器を構え

た。

ナギトは瞑目して取れる手段を決定する。ナギトがこれまで得てきた絶招は、〃自失無我〃を除き基本的にナギトの意志ありきのものだ。つまり、奥義級の感覚を失った今では発動した所で宝の持ち腐れ。

しかし、ラウラとヴィクターの言葉でナギトが自らの《剣鬼》を受け入れてから体得したアレは少しだけ毛色が違う。

アレはナギトがかつて《剣鬼》と呼ばれた頃の力を取り戻すもの。今のナギトの意志ありきである点は、〃夢我〃と変わらないが、力を取り戻すという一点においては今現在も使用可能だ。

奥義級の感覚は失われたが、《剣鬼》時の闘気の総量を運用できるようになる。

要は——

「——鬼気解放！」

——世界級の剣客の気力リソースを使い放題というわけだ。

ぶわり、とナギトの肉体から緋色のオーラが湧き出した。文字通りそれはナギトの身体に収まり切らぬ闘気であり、可視化するほど濃密とは言えど漏れ出た以上は闘気の口スである。

しかし、それを感じさせないほどのものがナギトにはあった。

まるで波濤のように周囲を席卷する緋い闘気は、汲めども汲めども尽きぬ井戸のよう
で。

ごくりと生唾を飲むのは対峙しているリヴァルだけではない。肩を並べる級友たちすら首元に刃を突きつけられている幻視を覚えるほどの殺気を秘めている。

「援護する…全力でぶつかればいい！」

しかしそれでも声をかけるのが仲間というもの。ユーススのそれを皮切りに皆がナギトを応援する。

「そうだ！ やっっちゃえナギトー！」

「後ろは俺たちに任せろ！」

「お願いします、ナギトさん！」

ミリアムが、ガイウスが、エマが。垂れ流しの鬼気に飲まれつつあったとしても、声をあげてナギトの背を支えてくれている。

そして、ラウラが。

「格好良いところを見せてくれ、ナギト」

なんとという殺し文句だろうか。そんな事を言われてしまつては、ばっちり決めるしかあるまい。

ナギトの太刀に緋色のオーラが凝縮される。それはこれまでスピードとテクニクで相手を翻弄してきたナギトが行う力押しの特徴のように感じられた。

同じようにリヴアルの長剣にも黒き闘気が集約された。一瞬速く、リヴアルの奥義が放たれる。

「黒影刻穢！」

放たれた漆黒の斬撃がナギトに肉薄する。
納刀。

「緋劍——」

闇を孕む斬撃がナギトに到達する、刹那。

抜刀。

「——神威残月」

神速の斬撃が、迫る漆黒を斬り裂き霧散させて。

リヴァルを直撃した。

長剣と拳銃をクロスして受け止めるが、元よりナギトのSクラフトである。神威残月に《劍鬼》当時の劍圧を上乗せしたのだ、止められるはずもなく、リヴァルは弾き飛

ばされて港から海に消えた。

それと時を同じくしてオーレリアが受け持っていた相手であるスカーレットが吹き飛ばされるようにして港に着地する。

その表情には苦悶があつたが、あくまで言動はそのままだ。

「あらあら、リヴァルもやられちゃったみたいね」

リヴァルの沈んだ水面を見つめるスカーレットに宝剣をかついだオーレリアが悠々と近づいた。

「そなたもそうしてみせようか?…よくやったⅦ組にナギト・シユバルツァー。今度は褒めてやるぞ」

そう言うオーレリアの姿は傷ひとつなく、相手にしていた人形兵器はその背後に無数の廃棄物として転がっている。

冗談っぽく笑うオーレリアに戦慄しつつもナギトも追従して「はは」と笑う事しかで

きない。

そんな時、水面から手が伸びて、スカーレットはそれを掴んで引き上げた。

「……勝手に、殺すな……ゲホッ」

「生きてたのね、さすがだわ」

浮き上がってきたのはリヴァルだった。スカーレットは水を吐き出すリヴァルを背に指を鳴らす。

「予定とは少し違うけど……ここでお別れよ。VII組の坊やたちにオーレリア將軍」

先程リヴァルのように水面から浮上する影が多数。スカーレットらを庇うように囲んだそれは人形兵器だ。

「まだ隠していたのか!」

「フン……用心深い事だ」

ラウラとユースが限界を超えて、新たな敵に武器を向ける。

「だが……」

「ええ、こちらにはオーレリア将軍がいます」

ガイウスとエマも同じように、それぞれの得物を構えた。

「うーん、これは……」

ミリアムは憂いの声を漏らす。その視線は、港湾区で唯一無事だった船舶に向けられていた。

「また会いましょう、さよなら」

「さらばだ、Ⅶ組……《剣鬼》よ」

スカレットとリヴァルは船に乗り込むとそれを発進させる。人形兵器を壁にして退却するつもりだ。

B班の面々やオーレリア、領邦軍が協力して人形兵器を全滅させた頃にはすでに戦線

幹部を乗せた船は沖合に到達していた。

船のない現状では追いつく事もできない——そう思った時だった。戦線幹部を乗せた船が激しく炎上したかと思うと、そのまま爆発したのだ。

☆★

数日後——

トリスタに戻ったナギトラに調査報告が届く。オルデイス襲撃事件の関係者としてカイエン公がそうするよう取り計らったらしい。

オルデイスの沖合で戦線幹部を乗せた船が炎上、爆発した件に関しては原因不明。現在調査中ではあるが、マシントラブルという線が濃厚とのこと。

そして、爆散した船に乗っていた《帝国解放戦線》幹部のスカレットとリヴァルは死体があがったと報告された。

ひとまずこれで報告は終わりだった。事件解決に尽力した礼を添えて、報告員はトリスタから去っていく。

同時期にリインらA班の実習地だった鋼都ルーレでも《帝国解放戦線》絡みで一悶着あったそうで、オルデイス襲撃はその陽動であるというのが双方の事件を総括した見解となった。

加えてルーレでの事件では戦線幹部《V》——ヴァルカんと《C》を乗せた飛空艇が何者かにより撃墜され、先月クロスベルで《G》——ギデオンが戦死した事もあり、オルデイスの件と合わせて戦線幹部は全滅した事になる。

構成員は残っているだろうが幹部が死亡した事で《帝国解放戦線》は事実上壊滅した。

希望と、安堵と、ひとかけらの憂いを残して、6度目にして締め括りの特別実習は終わりを告げたのだった。

“通じない”こと

オルデイスでの特別実習が終わってからまず大変だったのは、エマの暗示で実習初日の記憶を封印されていたB班の追及を躲す事だった。

当然のように影響はエマにまで波及したが、ナギトとしては好都合——計画通り。

再びエマの暗示により、今度は“忘れていた事実を忘れて”もらった。エマ曰く暗示の重ねがけのようなもののためひょんな事で解けてしまう危険性があるらしいが、ある程度時間が稼げればそれでいいのだ。

ナギトらB班が遭遇したオルデイスのテロ、リインらA班が遭遇したルーレのテロ。双方の作戦で《帝国解放戦線》は幹部を失い事実上壊滅した。

だから時間が稼げれば“そんな前の話をしてどうするよ”と言えるのだ。

また暗示の件でつつつかれるだろうが……今から言い訳を考えておくべきか。あるいは素直に謝った方が効くだろうか。

どちらにせよまたエマを巻き込むだろうため、今から打ち合わせでもしておくのが良
いか。

そうした事がありつつも、ひとまず日常は戻ってきた。

そして今。

☆★

「——以上の功により、トールズ士官学院Ⅶ組にはユミルへの湯治に招待する」

Ⅶ組の面々はバルフレイム宮に招かれていた。理由は前回の実習でテロに狙われたガレリア要塞列車砲発射の阻止と今回の実習でルーレのザクセン鉄鉱山でのテロの壊滅の功績を讃えてのもの。

ガレリア要塞の列車砲は属州であるクロスベル自治州に向けられており、当時クロスベルでは通商会議のためゼムリア大陸西側諸国のVIPが集合していた。そこに自国の問題で戦術級兵器が打ち込まれてしまえば、エレボニア帝国は国際的に非難される……なんてレベルが可愛く思える事態になっていただろう。

ルーレ、ザクセン鉄鉱山でのテロの詳細は知らないナギトだったが、ザクセン鉄鉱山はログナー侯爵領内にありながら皇族の所有地だ。そこでのテロを解決したのだから

皇族から感謝されるのが筋なのは間違いない。

そのどちらにも参戦していないナギトは肩身狭い思いをしているわけだが、そんな事はおくびにも出さずに皇帝の前で跪いているのだから、面の皮の厚さはすでに一人前だ。

ちなみにオルデイスでのテロ解決には一役買ったナギトだが、オルデイスはカイエン公爵家の直轄地であるため皇族からの感謝は言葉だけで形は伴わない。

皇帝ユーゲント・ライゼ・アルノールⅢ世が座る玉座の前で跪くⅦ組一行と、テロ解決に尽力した者たち。事のあらましと功績を評し、感謝を述べたのは宰相オズボーンだ。

テロ解決感謝の印に皇族の金で温泉郷と名高きユミルへ湯治に行ける事となった。ナギトとリインには思わぬ帰郷となる。

その後、晩餐会があるという事でⅦ組と協力者らも招かれる運びとなったが。ユーゲントの前で立ち上がったⅦ組一行を尻目にオズボーンが切り出した。

「そっか、先月はオルデイスでもテロがあったとか。ルーレの本命はザクセン鉄鉱山

で市街の被害は重大ではないと聞き及んでいますが、オルデイスは市街地の各所に大きな被害が出たそうですか？」

先にも触れた、オルデイスでのテロにオズボーンが言及した。

「さすが宰相殿はお耳が早い。その通りで、今は市街の復旧に尽力しているところです。まったくテロには困ったものですな。壊れたものをなおすのには時間と費用がかかる。そして人の命、心はその最たるものです。いやはや…大した痛手をオルデイスは負いました」

オルデイスの惨状をカイエン公は吐き出した。

実際に目にしたナギトはもつと言葉を装飾していいのでは、と感じたが黙っているだけだ。

「ほう？……それにしては被害の出方に偏りがあるようですね。爆発が襲ったのはこの帝都とオルデイスを結ぶ主要線路、そして中立派の貴族邸宅…… いわゆる貴族派に属する者たちの財産には大した損害は与えられていないでしょう」

しかし、沈黙を決め込んだナギトであっても——その他の面子もそうだが——オズボーンの言葉には思わず反応してしまう。

それはオルデイスでのテロが自作自演であった可能性を示唆——否、露骨に自作自演であったと、この場の全員に言い聞かせているのだ。

「それはまったくの偶然です宰相。……——いや、必然かもしれないな？ どうやら我が海都を襲ったのは《帝国解放戦線》なる輩。彼らは……オズボーン宰相、あなたを標的にしてると言うではないか。ならばあなたに繋がりのある物を破壊しようと思うのは道理」

しかしカイエン公もさすがに老獪。追及を逸らし、その矛先は戦線の狙いであったオズボーンに向けた。

「私の本拠地であるこの帝都から遠く離れたオルデイスの地で？ フフ——」

まるで事前に打ち合わせをしていたかのような2人の言い争いは、

「そこまでにせよ、2人とも。此度は祝いと感謝の場だ」

しかし皇帝の仲裁で終息した。

《鉄血宰相》と呼ばれる怪物、ギリアス・オズボーン。

そのオズボーンと渡り合う四大名門筆頭クロワール・ド・カイエン。

その2人の論争は国家の頂点権力者によって諫められる。

どこか諦めたような目をしている皇帝ユーゲントの権威を振りかざすだけのそれに、面白い見せ物を止められた気分になったナギトは露骨に白けた顔をした。

「フフ、失礼しました」

「しかし陛下、これも帝国の現状を若人たちに知ってもらおう機会でしたゆえ」

オズボーンもカイエン公もすんなりと引き下がり、場の雰囲気は緊張から解き放たれた。
た。

それから少し時間が経過して、バルフレイム宮、翡翠庭園にて晚餐会が開催された。



華やかな翡翠庭園の一角で、グラスを揺らしながら「それにしても」と切り出したのはユーシスだった。

「意外だったな、愉快的な貴様の事だ……あちこちに顔を出しに行くものかと思っていたが」

その言葉はナギトに向けられたものだ。ユーシスはナギトの性格から勘案して、庭園の端っこで素直にドリンクを飲んでるのをからかっているのだ。冗談半分、本気半分だろうが。横にいたエマがくすりと笑う。

ナギトはわざとらしく眉根を寄せて

「言つとくけど俺、社交性低いからね。リンみたいな恐れ知らずでもないし」

リンはいつものように方々を歩き回り挨拶している。さすがに直接皇帝や宰相、四大名門やらには突撃していないみたいだが、特別実習などで知り合った著名人らとも話し合っているようだ。

ユーシスの冗談に乗っかって言ったナギトのセリフは話していた2人の笑みを引き出し、調子に乗ったナギトは続ける。

「嘘じゃねーぞ、最初の特別オリエンテーリングの時だって緊張を紛らわすためにわざと馬鹿やったしな。俺ってば内弁慶なのよ」

「お前は何を言っている」

ユーシスのツツコミにエマがまた笑って「そうですよ」と追従した。

そして。

「それにその、ウチベンケー…ですか？ ナギトさんってたまに知らない言葉を使いますよね」

「内弁慶」とは内部では強がっているが外に出ると意気地がない事だ。エマがそんな事も知らないとは——などとは思わない。

「ああ、そっか：そうだよな。次回からは気をつけるんで今回は勘弁してください！」

考えてみれば、こう言った言葉が通じない感覚は前にもあった。

大仰に頭を下げて深掘りを避ける。

言葉が通じない事実をナギトはとてすんなりと受け入れていた。気持ちが悪い。いつぞやの「確信」以来の気味の悪さだ。

その「確信」もオルデイスでの実習では一切顔を出す事はなかった。ああいう時こそ役立って欲しいものなのだが。

———？

ふと、芽生えた違和感。

オルデイスでの実習？　実習はルールで……いや、違う。ナギト・シユバルツァーが行ったのはオルデイスだ。

しかし、ルールに実習に行った記憶がある。違う——それはナギトの記憶ではない。ならば誰の記憶———？

「すまん、ドリンク注いでくるわ」

ナギトはグラスの残りを一気に呷るとコーシスとエマに告げてテーブルを離れる。少しでも考えを整理する時間が——否、思考を捨てる時間が欲しかった。

空のグラスにドリンクを注ぐ。もちろんノンアルコールだ。少しだけアルコールに興味をそそられはしたが、今はトールズの制服を着ているため自重した。

クロウなどは露骨に酒を飲みたがっているがサラが止めている。自他共に酒好きを認めるサラもアルコールを控えているのだから説得力もあるというもの。それだけここが油断ならない場という事なのだろう。

「ふう」とため息をついて再びグラスを煽った。

高級そうな瓶を驚掴みにしてグラスにドパドパとドリンクを注ぎ直す。

「やけ酒かね？」

話しかけられて振り返る。

「いえいえ、緊張しているもので…喉が渇くんです」

「フフ…そういうものかね。オルデイスの実習ぶりだねナギトくん。息災そうだなによりだ」

「恐縮です、カイエン公爵閣下」

ナギトに声をかけたのはカイエン公だった。この晩餐会でもトップクラスの重鎮だ。ナギトも態度には表さないが、意識 / 思考のレベルをよそ行きに切り替えた。

「実習の時はすまなかつたね、テロに巻き込んでしまつて」

「いえ……、ご愁傷様でした」

「そう言つてくれると助かるよ。……まったく、宰相殿には困つたものだ。そうは思わないかね？あのテロを私の自作自演などとは」

「おっしやる通りです」

などと言いつつナギトはオズボーンの意見にも一定の理解はあった。

オルデイスの被害分布や公爵家城館と繋がる地下水道に《帝国解放戦線》幹部が入る場面を目撃した事など、腑に落ちない事はある。

しかし、あの現場を知っているからこそ言えるのだが、オルデイスの惨状は惨憺たるものだった。もしあのテロを自身と《帝国解放戦線》の繋がりを否定するためのものだったとしたら、割に合わない。テロを防げなかったという点において求心力の低下は免れないだろう。テロの最中は城館を開放するなどして避難民を受け入れていたが……大きな目で見れば、皇帝から賜った領地の守護をできていないのだから総合評価はマイナスだろう。

「ところでナギトくん、卒業後の進路は決まっているのかね？」

ナギトがそう結論したところでカイエン公は話題を転換した。何となく意図は察せられたものの「いえ」とだけ答える。

「ならば我が領邦軍に所属するのはどうかね？ 実習でのテロ撃退の実績もあるし、オーレリア將軍も喜ぶ事だろう。佐官クラスの席を用意しよう」

士官学院を卒業すれば尉官クラスでの採用になるのが通例だが、佐官クラスとなるとさすがに前例は少ないはずだ。カイエン公も今のうちにナギトを懐柔しようとリップサービス多目に行っているのだろう。

そう理解したナギトは「ははは」と笑って続けた。

「それはそれは、なんとも大した話です。そう求められるのも悪い気はしませんね。進路のひとつとして検討させていただきます」

とりあえず社交辞令で返答。「よろしく頼むよ」とカイエン公は別れを告げて踵を返した。別の場所へ行くようだ。

その後、ハイアームズ侯爵からその息子であるパトリックとの付き合いを今後も頼まれたり、オリヴァルト皇子率いる皇太子、皇女と談笑する機会などがあつたりしたが、特に大過なく晩餐会は終わりを迎えた。

そして数日後、皇族からの礼——ユミルへの小旅行が幕を開けたのだった。

帰郷へ決意の果てにへ

「どうしたへ、リイン？」

皇族からの謝礼として与えられたユミルへの湯治。ユミルへ向かう道中、専用列車の中で黄昏ているリインへの気遣い係としてナギトが暗黙の内に決められた。

ナギトは一人で座席に着いて窓の外を眺めているリインにいつもの様子で話しかけた。

「ん……ナギトか」

視線が交わる。ナギトの目は優しく柔らかく、兄貴然としたもの。それでどの口でリインを兄貴扱いするわけか。

リインは黙秘を諦めたようにため息をひとつ。

「……少し憂鬱なんだ。ユミルに帰るのは自分の道を見つけた時だと思っていたから」

「はっ」

「笑ったな!？」

ナギトはリインの言葉が可笑しくて笑ってしまふ。すかさずツツコミを入れたリインに「悪い悪い」と悪びれつつ。

「妙に肩肘張ってんのな。家に帰るだけだろ、何も特別な事じゃない」

「でも俺は……」

「莫迦な事言うなよ。それ言うなら俺はもつとそうだぞ」

リインは「シユバルツアー家と血が繋がってないから」なんて事を言おうとしたの

だろう。それを言うならナギトのほうがもつと関係は薄い、一年余り世話になっただけだ。

リインは「そうだな」と目を伏せる。まだ気分は晴れないようで、ナギトもため息をひとつ吐いた。

「リイン、お前な……お前の帰りを喜ばない人があの家にいると思うのか？」

「それは……！　それは、ありえない。父さんも母さんも、エリゼだって……みんな優しく……暖かく迎えてくれるはずだ」

「だったらそれが答えでいいだろ。面倒臭い」

リインのそれはナギトから言わせてもらえば子供の駄々だ。あえて面倒臭いと明言したのはそういつた面を暗示する意味合いもあった。

が、それを内心わかりつつも見透かされたような心持ちのリインはジト目でナギトを睨め付ける。

「……たった半年程度の付き合いのⅦ組のやつらでさえ、一緒にいれば楽しいし、安らぐんだ。それが十数年共に過ごした家族なら尚更だろう。血縁だけが家族じゃない……そう思ってるのは俺だけかよ、お兄様？」

「それもそうだな……というか “お兄様” 呼びはやめろ」

リインは完全に子供扱いされていた。と言うよりもナギトの方が大人らしすぎる物言いだったのだ。

こんな風に他人を諭せるなんてのは、きつと自分の道を見つけている証拠だ。リインはほんの少しだけナギトを妬ましく思ってしまう。

しかしそんな気持ちを胸にしまい、「ありがとう」と席を立つナギトに声をかける。

「…気遣ってくれたんだろう？」

「みんなからの圧力が強くてな。…つたく、こんな時こそ好感度アップのチャンスだろうに」

やれやれと言うようにナギトは肩をすくめる。そしてそのまま元の席に戻るかと思いきや、一歩目で止まり、ラインに振り返る。

「自分の道がどうかかって話……一度原点に立ち返るのもええんでないの？　そういう意味でも今回の里帰り、多くのものを得られるかもな」

☆☆

列車とロープウェイを乗り継いでユミルに到着したⅦ組一行を出迎えたのは領主の娘、エリゼ・シユバルツアールだった。

ラインとナギトの妹に当たるエリゼと適当に挨拶を交わして宿泊先である鳳翼館に案内される。鳳翼館でそれぞれ部屋を割り当てられて荷物を置くと、Ⅶ組の面子は再び集まると士官学院祭での出し物——ミニコンサートの打ち合わせに入った。

今日はこれまで暖めていた具体的な内容の発表日だった。

ミニコンサートでやるのは二曲。一曲目はマキアスとユーススに加えてナギトが歌い、二曲目はエマが歌う。その他の面子は楽器やバックダンサーとなる。

「ちよつと待ったあ！」

声を揃えて異議を唱えたのはボーカルに指名されたマキアスとユーシスだ。

「こ、こいつと僕が二人組のボーカルだど!？」

「しかも同じ衣装を纏つてなどと!」

「ヒラヒラしてるぞ!」

マキアス、ユーシス、マキアスとセリフが続く。

「息びったりじゃねえか」

ナギトの感想に「うぐっ」と2人揃つて顔を歪める。その隙にエリオットやアリサ、ラインの追撃が決まり、マキアスとユーシスはボーカルに決定した。

二曲目のエマも決つたがアリサによって眼鏡を奪われ、髪を下ろされたエマの美人度合いに皆がベタ褒め。そしてやはりアリサがフオローという名の追撃をかまし、エマも折れた。二曲目のボーカルも決定。

なんだかんだアリサが二曲ともボーカルの決定を後押ししてるあたり戦慄を隠せないナギトであつた。

ちなみにナギトがボーカルとして歌う事に反対してないのは、エリオットやクロウといった企画組に一枚囁んでたからである。初めは気恥ずかしさから辞退しようとしていたが、校舎の屋上で熱唱している姿を生徒数十名以上に目撃されているらしく、コンサートでナギトの出番がなければ不自然だと言われるほどだ。

それに加えて楽器など弾けるわけがなく、またキレッキレのダンスを踊れるはずもなく。ボーカルで納得するしかない段まで追い詰められた事からその位置に収まった形となる。

閑話休題。

鳳翼館ロビーでの学院祭の打ち合わせを終えたナギトとリインはシユバルツァー男爵邸に帰宅していた。

父テオ、母ルシア、妹エリゼに暖かく迎えられ、茶を飲みながら会話に花を咲かせる。話が一段落したところでテオはリインとナギトに向き直った。

「そういえば2ヶ月ほど前に老師と会ったぞ」

老師——それはユン・カーファイを指す。ラインの剣の師だ。しかし語るテオの視線の先にナギトもいる事から、ユンの存在はナギトとも——否、ナギトがナギトになる以前の人物とも関わりがある事がわかる。

テオはナギトとラインにそれぞれユンから預かっていたという手紙を手渡した。

『馬鹿弟子へ』

なかなか帰らぬと思えば、記憶喪失とは愉快な事になっておるようだな。

しかしこれも機であろう。その剣力に見合うだけの強さを身につけよ。

テオ殿の厚意には儂からも礼をする故、おぬしも気兼ねなく今の生活を愉しむが良
い。

遠回りをせよ。おぬしに足らぬのはそれだけよ。

それでは達者で。またどこぞで会おう。ライン——おぬしの弟弟子にもよろしく頼
むぞ。兄弟子として、また友として、あるいは義兄弟として接するが良い。

また会える日を楽しみにしているぞ、我が息子よ。

ユン・カーファイより』

決して長くはない文面にどこか懐かしさを感じる。少し涙が出た。手紙の内容に気になった部分があったためテオに確認する。

「あの、親父殿。これ…俺がユン・カーファイの息子つてマジですか？」

“我が息子よ”という文面からそういう言葉が出た。

ユン現在70歳くらいらしいので、だとしたら年齢50〜60くらいでナギトを産ませた好色ジジイという事になるわけなのだが。

この事実にはリインも「えっ」と口に出して驚いた。

テオはナギトの言葉に鷹揚に頷いて、

「ああ、とは言っても養子らしいが」

「…はあ、なるほど？」

テオの説明で一応の理解はできた。

ユンからの手紙で新たに判明した事もある。予想はしていたが、ナギトは記憶を失う以前、ユンの元で八葉一刀流を学んでいたらしい事などがそうだ。

アレコレは後で考えるにして、リインに向けられた手紙にも何やらありがたい言葉があつたようだ。

リインへの手紙には近況報告と、リインの迷いに対する指摘、アドバイスなどがあつた。ナギトに宛てた手紙のように「記憶喪失が愉快」なんて文面はなく、あの表現は家族だからこそその距離感と理解する。

「ナギトはどう思う?」

リインは何気なく尋ねる。八葉一刀流を学ぶ際に一番初めに与えられた言葉——
“有る事と無い事は同じ” という意味について。

「元を辿れば全部同じって事だろ」

即答したせいで適当に回答したと思われたナギトだったが、本人からすればガチな答

えであつた。

☆★

その後、茶を飲み干したナギトとリインはシュバルツアー邸から引き上げて鳳翼館でⅦ組の皆、同道したトワやアンゼリカ等と共に食事をして、夜。

ナギト主催の「ドキッ！漢だらけの枕投げ祭！ポロリもあるよ」が開催される。男性陣の嬉しくないポロリが連発する中、ナギトは途中で退場しロビーをうろつくアンゼリカを発見した。

「おや、ナギトくんじゃないか。男連中は何やら騒がしいようだが…何か催し物でもやってるのかな？」

「枕投げやってんですよ。今ならポロリもありますけど、参加しますか？」

「ハハハ……いや、よしておこう。女子たちのポロリなら是非とも参加したいところだ

「がねっ！」

「それだったら俺も参加しますっ！」

「はははははは」と2人して笑う。クロウもこの小旅行に来ていたら同じように笑えただろうに、と頭の隅で考えた。

一段落したところでナギトは低頭する。

「アンゼリカ先輩、ありがとうございます」

「おいおいよしてくれ、なんだい急に」

「ルーレでの実習、リインたちを助けてくれたみたいで。随分無茶もなさったそうですね？」

「なに、無茶という程のことは……と、君の目は誤魔化せないか」

そう言つてアンゼリカは語る。ルーレでの実習、テロへの対応の違いで領邦軍とT M Pは対立し、リインらA班とアンゼリカは領邦軍を出し抜く形でザクセン鉄鉞山に立てこもつていた《帝国解放戦線》を制圧した。

それが領主であるログナー侯爵、すなわちアンゼリカの父親の逆鱗に触れて、本人の了承もなくツールズ士官学院に退学届を出されてしまったらしい。学院院长ヴァンダイクのはからいで休学扱いになるそうだが、実質は退学と変わらないのは間違いないかつた。

それを聞いてナギトは余計に申し訳ない気持ちになる。こうした事態を自分は防げたはずなのに、と筋違いの傲慢が顔を出した。

「まあ君が気にする事はない。私はもとから放蕩娘……遠からず父の怒りは買つていただろうからね。それが少し早くなつただけさ」

女性ながらライダースーツを着こなし、肩で風を切つて歩く普段の姿からは考えられないほど、今のアンゼリカは寂しげな雰囲気を纏つていた。それほどまでにツールズ士官学院という場所に愛着があつたのだ。

項垂れたままどうする事もできないナギトに、アンゼリカは肩を叩いて言った。

「そら、行った行った。何か用事があつて降りてきたんだらう？ 私なんかに構つてないで、それを済ませてくるといい」

アンゼリカに後押しされるままに鳳翼館を出てナギトは少し歩く。

日課である剣の稽古を終わらせて、空を見上げた。空は晴れていて星灯りが眩しいほどだ。

それなのに、

「…………降りそうだな」

ナギトはそう呟くのだった。

☆★

翌朝、ユミルの郷は季節外れの雪に見舞われていた。ユミルは北方にあり冬は雪が積もると言っても今の時期は降らないはず。

日課のあと、汗を流すべくリインと共に温泉につかうとしてアリサとラウラと遭遇し不埒魔と間違われるという珍事の最中に雪は降ってきた。

猛烈な勢いで降る雪は一晩でユミルを冬の景色に変え、今もまだやまない。

そんな状況から昼には帰るはずだったⅦ組一行もケーブルカーが運行中止になり困り果てていた。

そうしていた所に特別実習の封筒が届けられる。内容は特別実習の課題を与えるという文面。その課題とは「ユミル溪谷にて季節外れの積雪を阻止せよ」というもの。文末にはリイン・シユバルツァー、ナギト・シユバルツァー同行のこと、という注意書きまで添えてあった。

話し合いの結果、Ⅶ組のメンバーでユミル溪谷へ向かう事になった。8年前にも同じように季節外れの積雪があったようで、その日に嫌な思い出があるエリゼはリインを引き留めるが、リインの「帰る」という誓い、Ⅶ組のそれを支えるという約束に説得されてエリゼも引き下がる。

かくしてⅦ組一行はユミル溪谷道に足を運ぶ。

降り積もった雪に手こずりながらも一行は着実に前に進む。そんな中でリインは語った。

8年前の季節外れの雪の日の記憶を。

その日、エリゼと2人で渓谷で遊んでいたリインは突如として降ってきた大雪のためユミルの郷に帰る道中、熊のような魔獣に遭遇した。当時まだ10に満たない歳のリインが敵うはずもない相手だったが、リインはそれを枝払い用のナタでずたずたに引き裂いたようだ。

それはまさしく「暴走」と呼ぶべき状態で、ユンに師事した今ですらその力を制御できないでいると。

次に力が暴走した時にはⅦ組のみんなを傷つけてしまうかもしれないとリインを語った。

「……さすがに引いただろう?」

嘘臭い笑顔でそう言うリインは、まるでラウラに諭される前のナギトが記憶を取り戻す事を恐れていた様と重なって。

しかしリインに「そんなわけがない」とⅦ組の面々は言い放つ。

「ああ——、いやむしろドン引きだ。お前がそこまで自分を信じられてないってのがな。お前はこの俺の兄貴分なんだぜ?もつと堂々としてくれやい」

最後にナギトがそんな言葉をかけて。リインは本当の笑顔を見せた。目的地は目の前だった。

ユミル渓谷の上流。泉の湧き出るそこが最終地点だった。この異変の原因はこの渓谷上流にあった。正確には、そこに鎮座する石碑に。

石碑には不思議な紋様が浮かび上がっていて、リインはそれを見て「思い出した！」と言って説明する。8年前の大雪もリインがこの石碑に触れてから起きたものらしい。

VII組一行は周囲を調べようとした瞬間、石碑はより一層輝き、そこから魔獣が出現した。巨大な氷の魔獣だ。

どうやらこの石碑に封印されていたようだ。

氷の魔獣はVII組の足元を一瞬にして氷漬けにする。身動きが取れずピンチかと思いきや、

「——無念無想……まずは在るがままの自分を認める事からか……！」

リインはこの危機に何かを掴んだようで、その後、裂帛の氣勢と共に足元の氷を蒸発

させる。

溢れ出る闘気はこれまでのリインのそれと比較にならぬ力を秘めている。

これがリインの、本来の実力だ。これまで暴走を恐れて踏み込まなかつた一步を、ようやく踏み出したのだ。

拘束から自由になったVII組は氷の魔獣に総攻撃を仕掛ける。

「合わせるぞ！リイン！」

「頼む、ナギト！」

義兄弟の覚醒とも言うべき事態にナギトも高揚している。出し惜しみなしの闘気でリインをサポートする。

「——孤影燎原！」

ミニサイズの孤影斬が無数に撃ち放たれる。それは総攻撃でふらついていた氷の魔

獣の体勢を完全に崩した。それだけに留まらず、飛来する斬撃は氷の魔獣に肉薄する。リインの太刀に収束する。

「蒼焰よ——いや」

リインの太刀に灯る炎の色は烈火のそれではなく。またリインが到達する蒼焰のそれでもなく。

ナギトの斬撃によりブーストされた炎は。

「——灰焰よ！我が太刀を焦がせ!!」

むしろ燃やし尽くした後の灰色になっていた。

「うおおおおおっ!!」

リインのその一撃で氷の魔獣の命運は尽きる。その様を見ながらナギトは「はっ」と笑む。

「さしずめ——絶佳臨界・灰焔の太刀……ってどこか」

それが、過去の悪夢を振り払うシュバルツァー兄弟のコンビクラフトの名となった。

☆☆

氷の魔獣を倒した事で大雪という異変も解消され、一件落着かと思われたが「まだだ」とリインは言う。

その視線の先は——崖上。そこにはひとつの人影があった。怪盗B——リインは人影を指してそう呼ぶ。

怪盗B——ブルブランはVII組の前に着地すると改めて名乗りを上げる。結社《身喰らう蛇》執行者N o. X 《怪盗紳士》ブルブランだと。

まあこれに関してはナギトが情報共有していたため“だからなに？”的な反応になったのはブルブランにとっては予想外だった事だろう。

メンゴ！と声には出さず顔芸とハンドサインで伝えておく。

ナギトの顔芸ですっかり緩んだ空気をブルブランは咳払いで引き締めると、今回の事件の経緯を語った。

ブルブランは興味があるのだという。

ライバルでもあるオリヴァルト肝煎りの特科クラス《VII組》。そのメンバーの出自や秘密。

「とりわけリイン・シユバルツアー……君の真実には！」

陶醉感を漂わせながらブルブランは続ける。

12年前に吹雪の中、シユバルツアー男爵に拾われた男の子。出自が不明な事に加え、得体の知れない力を持ち《劍仙》の指南を受けた少年。それがリイン・シユバルツアーだ。

「——なんて魅力的で謎めいた真実……私はそれが知りたいのだよ……！」

いっそ倒錯的ですからあったブルブランの言はVII組総員から非難轟々だった。

しかし激する皆の横でリインは冷静に告げる。

「怪盗ブルブラン、はつきり言わせてもらおう。アンタには無理だ」

「『真実を知る』ことと『真実を得る』ことは同じじゃない」とリインは続けた。

真実とは単なる知識以上の事を経験や体験を通して初めて得られるもので、ブルブランが提示したリインの『謎』はリイン自身が向き合い、乗り越えるべきもの。その過程でしか真実は生まれず、それ以外のものに意味はないと。

「例えコソ泥風情が真実を見つけたところで、それは単なる真実で、俺にとっての真実じゃない。だから悪いが時間の無駄だ！」

そうはつきりと宣言したリインにブルブランは僅かにたじろぎ、「道理だ」と認めた上で話の矛先をナギトに変えた。

「では君はどうだ、ナギト・シユバルツァー。英雄にして大罪人…そうした過去を失って己の足場すら不確かな君よ」

話を向けられたナギトは少しだけ表情を歪めた。

「今の幸せを謳歌する若者よ。私は見たいのだよ……君が過去に追いつかれた時、その血塗られた人生を思い出した時、どういう風に顔を歪めるのかをね！」

ナギトの《剣鬼》という過去。《帝国解放戦線》のリヴァルが偽物で、ナギトを本物呼ばわりした事からも、その過去は確定したと言っても過言ではない。鬼とさえ渾名された過去が血と無縁でない事はわかっている。しかし、

「悪いがブルブラン……その問題はもう通り過ぎてんだよ」

しかし、その問題はすでに解決したものだ。

ラウラの言葉でナギトは自分の心を決めた。 “ナギト・シユバルツァー” を定義した。

「ほう……？」

「確かに…俺には《剣鬼》って後ろ暗い過去があるらしい。その所業についても聞いた…だけだな、それがどうしたって話だ！」

ナギトと《剣鬼》は分つ事のできない真実。しかし割り切る事は可能だ。

「俺の芯は《剣鬼》かもしれない。ナギト・シュバルツァーは偽りだったかもしれない」
なぜなら。

「だけど俺がナギト・シュバルツァーとして過ごした日々は本物だ！ その本物がある限り、俺はナギト・シュバルツァーを張り通せる——張り通す！ そう決めた！」

仲間と過ごした日々がこんなにも愛おしいから。

例え《剣鬼》という過去を取り戻しても、ナギトは“ナギト”を見失わない。そう断言できる。

「フフ……なんとも青臭いセリフだ。これがあの《剣鬼》とは……実に面白いではない

か。願わくばその決意、揺らがぬ事を」

こうしてナギトとリイン——呼びつけた2人の意志を垣間見た事でブルブランは大人しく撤退する。

いつぞやのように転移を使い跡形もなく去る姿にⅦ組は《身喰らう蛇》の底知れなさを感じつつもユミルへと帰っていくのだった。

☆★

雪が止んだ事もあり、予定よりは遅くなったもののⅦ組一行はトリスタに帰る運びとなる。

各々、別れを惜しみつつもリインの成長が見られた事で、テオはユンから託されていた八葉一刀流の中伝目録を手渡した。

曰く「剣の高みへの可能性を見せた」時に与えられるものだという。

ならば記憶を失う前の《剣鬼》はどこまでを授けられていたのだろうか。いくら強くても初伝を与えられるかすらわからないのが八葉一刀流のようだし。

若干複雑な気持ちになりながらも「やったな」とリインの肩を叩く。

「いや——やつとスタートラインだろう。今後とも精進させてもらおうとするさ。ナギトに負けないためにもな」

「はっ、お前つてやつは本当に……」

良い弟分だ、とは言わない。謙虚さを示しつつナギトを立てる姿勢は、まさしく質実剛健な帝国男児の姿だろう。

「本当に？」と横にいたアリサが続きを促した。

ナギトは一度大きく息を吐いて次のセリフを考える。

「本当に、小生意気なやつだよ。俺もせいぜい励むとするかね。お兄様についていけないきや弟分の立つ瀬がねえからな」

「だからお兄様と呼ぶなと——」

いつものやり取りに「かっかっかっ！」と上機嫌に笑ってナギトはケーブルカーに向

かう。それを見てⅦ組一行は微笑み、リインもまたはにかんだ。

リインは思う。ただ剣の強さだけではない。自分が迷っている間に、すでに決意を固めて進んでいるナギトという人間に引き離されないように、ついて行かねば。

やがてメンバーの全員を乗せたケーブカルカーはゆっくりと進み始め————こうしてユミルへの小旅行は終わりを迎えたのだった。

幸福を

6度目の特別実習から3週間が経過していた。

皇帝への謁見、ユミルでの湯治などといった出来事を終えて、VII組は士官学院祭に向けて穏やかな日常を過ごしていた。

「だからほら 顔を上げて まっすぐ前を向いて そうさ 行くよ 僕は そうさ
行こう 君と

未来へ 「」

歌い切る。

マキアスとユーシスのデュエットから始まり、ナギトもサビから歌い始める、学院祭

のステージのための練習だ。曲名は『明日への鼓動』。

歌い切って、途中から気づいてた違和感を指摘する。

「ラウラ、ちよつと走ってる」

「む、そうか？」

ドラム担当であるラウラ。

バンドにおいてドラムは非常に重要だ。

リズムを作る…ベルトコンベアのようなものだ。

ベルトコンベア、つまりドラムが早くなれば他の楽器もつられて早く演奏し唄もそれに続く。

逆に遅くても然りである。

「途中から入るから難しいのはわかるけど、もうちよつと歌を聴きながらゆっくり入っても大丈夫だよ」

少しだけ項垂れるラウラにエリオットがそうアドバイスする。こと音楽に至ってはあらゆる妥協を許さないエリオット。

その声音は優しく、顔は女神のそれを描いていても身から放つオーラを恐ろしく感じる。

それは「ミスしたら怒るよ？」ではなく「ミスしたらいつまでも続くよ？」という、最早慣れつつあるエリオット節とも言えるものだった。

「マキアス、ユーシスも最初にもっと勢いが欲しいかな。インパクト重視で、恥ずかしがらずにやってみよう！」

エリオットの注意は他にも飛ぶ。

学院祭まであと数日という時点で出し物と定めたミニコンサートの完成度は未だ合格点に達していないというのがエリオットの見立てであった。

昼間は授業を受けて放課後は学院祭の準備、練習をして——そんな日々を続けて、学院祭前日の夜となった。

「そこでゼリカのやつが横から現れやがってよ、なんて言ったと思う？　　〃大丈夫かい、私の仔猫ちゃん？　〃 だぜ!」

「ふはっ」

第三学生寮の自室で、同室のクロウと馬鹿話をしていたナギト。今はクロウが一年次の時のエピソードを聞かせてもらっていた。

今は休学しているアンゼリカは当時から破天荒だったらしく、学院中の女子に手を出していたらしい。

今度はナギトが話をする版になっていて、シュバルツァー男爵邸での出来事を語る。

「くでよ、そのダンボールを開けたら中からかつぴよいいい衣装が出てきたわけよ！　傍にあつた紙切れには文字列……この衣装の名前だと確信したね。そこにはこう書いてあつた。魔界おう——」

コンコン、と部屋のドアがノックされる。

「はいどうぞー」と声をかけるとドアは開かれてその向こうからリインの姿が現れた。
「名乗る前だったんだが…って、何の話をしてたんだ？」

「家のクローゼットの奥底に封印されてたお前の趣味の服装のお話」

「ちよ、え!? 言ったのか？」

「まだ全部は言ってない。タイミング良かったなリイン」

クソかつちよいい『魔界皇子』の秘密は本人さんの登場で未だ秘されたままだ。

「クロウ、ちよつとナギト借りていいか？」

「ああ、別に構わないが」

「俺に確認しねえのホント笑うわ」

リインの言葉に即答するクロウ。ナギトは「笑うわ」なんて言いつつ笑わないまま

リインに連れられて部屋を出る事になった。
そのまま一階に降りて食堂に入る。

「サラ教官にシャロンさん」

「お疲れさんです」

食堂ではサラが酒を飲みながらシャロンに絡んでいた。そんなサラを受け流しつつつまみを作るあたりシャロンもさすがである。

「あら、リイン様にナギト様」

「こんな時間に食堂に何の用よ、アンタら」

「リインが密会したいって言うので」

シャロンとサラの疑問にナギトはわざとらしくしなを作ってから言った。

「言い方。 ったくアンタらは……私はもう部屋に戻るからいいけど……管理人さんはどうするのかしら？」

「私もお皿洗いが終わったら戻るつもりでしたが……ナギト様、おつまみなどお作りいたしましょうか？」

「お願いします。 礼はカラダで」

またキリツと言い切ったナギトにサラもぎよつとした。

「え、アンタらそんな仲なの？」

「ウフフ……たまに買い物をお手伝いしていただいているだけです、何もふしだらな事はありません、サラ様」

「……………アリサもそうだけど、ホント息びったりよねアンタら。 ツツコミ不在のくせに

互いに腹の内がわかってるって言うか…」

ナギトとシャロンの匂わせる会話にサラは嘆息する。リインはついていけずにフリーズしていた。

「お待たせしました」と言つてシャロンがつまみを盛り付けた皿をテーブルに置いた。仕事の早さに驚愕しつつも着席。一口つまんで「美味しいです」と感想を告げる。

「ていうかアンタ……まだ懲りてなかったの？」

さっきの会話といい、ナギトは以前から「関係匂わせ発言」をまま行う。実際はそんな事実はないギャグなわけだが、それをサラに諫められた事もあった。

「いやまあサラ教官の愛の鞭は響きましたとも。これでも控えてる方で……今やってんのはギャグですよ」

「笑えないわよ」

「はは…ギヤグさるくつわつてのは本来黙らせるものですから」

ナギトの減らず口というか豆知識にサラは再び嘆息する思いだ。そこで水気を拭いたサラロンがくすくすと声を漏らした。

「お二人は本当に仲がよろしいのですね」

「良かないわ!」

「否定するなんて悲しいですよ教官!」

「ダメだ…收拾がつかない……」

サラロンの一言にサラがツツコミを入れてそこにナギトがボケを被せる。ようやく理性を取り戻したリインだったが、そう眩くしかなかったという。



そのあと、サラとシャロンと一緒に食堂を出て行つた。「夜ふかしするな」と小言付きだ。

ナギトとリインはシャロンが作ったつまみを食べ終えて、ナギトは皿洗い、リインはホットミルクを飲んでゐる。

カップを傾けてミルクを嚙下し、唇を舌で湿らせる。皿洗いをするナギトの背中に向けてリインは話しかけた。

「ナギトはさ、すごいよな」

ナギトは皿洗いをするまま振り返る事なく「いきなりどうした？」と返した。

「…最近こーやって腹を据えて話す機会がなかったと思つてな」

しんみりと真面目なトーンで語るリインにナギトは微笑みつつ。

「確かにな。　んで、俺の何がすごいって？もつと褒めろ」

「そういう所だぞ。すぐ調子に乗る……だから皆、表立ってナギトを褒めない………
まあそれが狙いだって事はもうわかっているけどな」

「そりゃ恥ずかしい」と皿洗いを終えたナギトは自らもホットミルクを準備してリインの対面に座る。

「俺だけじゃない。もう半年以上の付き合いになるんだ。Ⅶ組の皆も……もうナギトの性格はわかってるはずだ。ナギトが恥ずかしがり屋で、だから褒められないように調子に乗るフリをしてるって」

「はは……それは買い被りもあるなあ。俺は本当に調子に乗ってる時もあるんだぜ？」

「それはそうだろうけどな」とリインは困り顔で言う。やはりこの義兄弟は素直に褒め

させてくれないと。

「皆、ナギトを頼りにしてる」

「それはお互い様だわな」

“お互い様”と言うナギトが思う以上に、ナギトはⅦ組の仲間たちから信頼されている。リインはそれを伝えたくて、しかしどうするか悩んでいる内にナギトが口を開いた。

「エマやマキアスは頭が良いし、ユーススやアリサは大局が見えてる。ラウラやガイウスは頼もしいし、エリオットはあれで強か……フィーやミリアムはかわいいしな！」

「……俺とクロウが入ってないが？」

フィーとミリアムをかわいいで纏めた事もそうだが、まずは自分とクロウの名前が出されてない事を不満げに言ってみる。

「そうだなあ……お前やクロウが一緒なら負ける気がしない——つてのは褒め過ぎかあ！」

「かつかつか！」と景気良く笑うナギトにリインもつられて笑んでしまう。ひとしきり笑ってからリインは話題を最初のものに戻す事にした。

「でもさ、やっぱりナギトは本当にすごいと思うんだ」

「おお……そうだな、知ってる」

やはり図に乗ったナギトにリインはツツコミを入れたい気持ちを抑えて続けた。

「ユミルでの事だつて…、俺が迷っていた間にナギトはもう覚悟を決めて進んでいるんだってわかったし」

「あー、ブルブランのあれか」

特別実習でテロリストを撃退した事で皇帝から賜ったユミルへの湯治。その最中にブルブランによって引き起こされた異変を解決する際に、リインとナギトは覚悟を示した。

リインは以前のトラウマを乗り越える事で成長を見せたが、ナギトはその前にもうすでに決意を固めていたのだ。リインが迷っている間にナギトはすでに決意して前進している。リインが「すごい」と褒めるのはナギトのそういう所だ。

「まああの決意だって俺一人で出来てりゃ胸も張れたんだがな。俺がああやってブルブランに啖呵切れたのも人の助けあつての事なのよ」

リインは「人の助け？」とおうむ返しに聞く。

リインがエリゼとの約束や老師の言葉、Ⅶ組の皆に助けられて迷いを振り払ったように、ナギトもまた――。

「8月の自由行動日だったかな、ラウラと出かけてよ。俺が《剣鬼》だろうと、その過去を思い出そうと、俺はナギト・シユバルツァーで居続けられる――そんな当たり前の

事を、思い知らされた」

今でも鮮明に目蓋に浮かぶ。夕日を背負ったラウラの瞳。琥珀色の輝き。あれに射抜かれてようやくナギトは、自分の心を理解できたのだ。

「好きな子に慰められて元気になるってなあ、なんて単純なんだって話なんだが」

ナギトは照れ臭そうに話を締めくくる。

「そうだったのか。——…って、え？ すまない、聞き逃した。ラウラがなんだって？」

全然聞き逃していない。スルーしてくれるかと思ったナギトだったが、リインとて年頃の男なのだ。色恋の話には興味津々なものも当然の話。ナギトは気恥ずかしさを抑え込んでニヤリと笑う。

「お、恋バナする？ 俺はラウラが好きなんだけど、リインは？」

「ちよ、ちよつと待つてくれ！ 情報量が多すぎて整理が……！」

戸惑う様子のリインに、ナギトはまた呵々大笑し。こうして夜は更けていく。なんて事はない義兄弟の語らい。士官学院祭前日の夜的一幕である。

☆★

そうして迎えた士官学院祭当日。

「ヒヤッハー！学院祭だぜえ！」

と意気込んだのも束の間。そこら中にカップルが湧いていてげんなりするナギト。

「リア充爆発しろ」なんて呟きながら廊下を歩いていると、側のドアが開き、見覚えのある人影が出てきた。

「あ」

教室から出てきた2人組。パツと見カツプルにしか見えない男女。男は黒髪の人、良さそうな顔つきで、女は陽の光を反射する金髪に強い意志を秘めたような赤い瞳を持つている。

「「あ」」

その2人組——リインとアリサはナギトの姿を認めると声を揃え、次の瞬間には同時に青ざめた。

一言目が大事。それがわかっているリイン&アリサとナギトは数瞬思考する。先に最善手を叩き出したのはナギトだった。

「へえ〜〜（渾身のニヤケ面）」

こうなつてしまえばもうナギトは強い。リインとアリサはいかにもカツプルな雰囲気を出していた弁明を始めるが、ナギトはそのすべてを「へえ〜〜（ニヤニヤ）」で受け

流すとわざとらしく腕時計を確認して、

「あ、俺クロウと約束があるんだった。それじゃ」

“クロウに知られたら学院全体に知られたと思え”

それは、ナギトがクロウとルームシェアする際に肝に銘じた教えである。

そして、その教えはⅦ組の全員に浸透している教訓でもあった。

スタスタとこの場を去ろうとする俺をラインとアリサが揃って呼び止める。クロウに言うのだけは勘弁してくれ、といった様子だ。

「あ、そうだなギト。これ」

ラインがそう言ってポケットから取り出したのは何かのチケットのようだった。

「これは学院祭のチケットだ。アトラクションに入るときに使えばちよつとしたサービ
スが受けられるんだ。俺だけじゃ使い切れないから」

リインは押し付けるようにしてチケットをナギトに手渡す。ナギトはニヤついた表情のままそれを受け取って、

「なるほど賄賂ね。受け取っておきましょう」

チケットをひらひらさせながら、ナギトは2人を見やる。アリサもリインと共に苦笑を浮かべている。

そんな2人の様子に吐息を漏らして、ナギトはチケットをポケットに押し込んだ。

「仕方ないから汚職に手を染めるとするとして……ここ、どうだったの?」

俺の視線の先にあるのは先程、リインとアリサが出てきた扉。

このクラスの出し物は《ステラガルテン》。《プラネタリウムによる人工の星空の元、美しい庭園を歩く巡回式のパビリオン》というのが知人に聞いたこの出し物の説明だ。ちよつと横文字が多くてナギトには難解だった。

リインとアリサはナギトに弱味を握られているも同然で、そのため不敵な態度のナギ

トの質問に渋々ながら答える事にする。

「プラネタリウム……人工の星空だったけど思わずため息でちゃった」

「そうだな……ノルドの夜空を思い出したよ」

2人の感想を聞いたナギトは「ふくん」と素っ気ない返事をするが、このステラガルテンがなかなかのロケーションである事を理解した。

「んじゃ、俺はクロウと約束があるから」

そうして2人が用済みになった所でナギトは踵を返す。リインは慌てて「ちょ、クロウには」とナギトの背中に声をかける。

「言わないよ、共犯だろう？　クロウと会う約束あるのはマジだよ」

そもそもの話、実は昨夜リインとした恋バナで、この士官学院祭中の空いた時間はアリスと過ごすと聞いていた。もちろんナギトもラウラと合流する約束を取り付けてい

るが、その前にクロウとの用事を済ませる算段だった。

階段を登り、廊下を抜けて、その部屋にたどり着く。

「ゲート・オブ・アヴァロン」——やたらカッコいい装飾が施された看板とその名称。出し物はカードゲーム「ブレード」だ。

その教室で待っていたクロウと合流して何回かプレイ（問題なく勝利）した頃、クロウから《ブレードマスター》を拝命したという人物が姿を現した。

薄紫の髪に、優しげな目つきをした特別仕立てのメイド服に身を包む、我らが第3学生寮の管理人。言わずと知れたスーパーメイド、シャロン・クルーガーのお出ました。

クロウが何気なしにシャロンに勧めたブレードだったが、メチャクチャ強いらしい。

「俺の見立てではナギトに勝るとも劣らねえ腕前だぜ、シャロンさんはよ」

クロウの宣言に教室は沸き立つ。ナギトもブレードでは無類の強さを誇る。特別実習の目的地に行く列車旅の中でやっつけても全勝するし、なんなら放課後に有志でまれに開催されるブレードトーナメントでも負けなしだ。

つかぶつちやけイカれた強さで、全戦無敗という伝説的な記録を更新中だ。

そんなナギトにつけられた渾名が《パーフェクト・オブ・ブレード》だ。そのナギトと《ブレードマスター》たるシャロンの激突……ブレードプレーヤーからすれば世紀の一戦に等しい勝負だった。

熱狂の渦の中で2人のゲームは始まった。カードがシャッフルされて2人の手札が配られる。

静かな立ち上がりを見せる序盤、白熱する中盤を経て勝負は最終局面に持ち込まれた。

「7!」

「ボルトですわ」

「読んでいたぞ、1!」

「さらに、ボルトです」

「織り込み済みよ、さらに1!」

「ミラーですわ」

「ミラー返し！」

「ここで、ボルトですわ！」

「なにい!? だがしかし、甘い…ミラーだ！」

白熱したブレード対決は、互いの手札が尽きても終わる事はなかった。

つまり、山札から引いたカードの大小で競う完全な運勝負に持ち越されたのだ。

こうなれば勝利は空の女神に祈るしかない。

「来れ、我が相棒! 運命のドロー！」

無駄にカッコつけるナギトのアクションに周囲がさらにヒートアップする。

外から見れば “なんだこのノリ…” とドン引きものなのだが、そんなものを感じてい

てはブレードプレイヤーはつとまらぬ。

しゅぱあー、という擬音を鳴らしたように引かれたカードの鼓動を感じ取り。

「感じたぜ、お前の意思を！俺は、このモンスターを召喚する!!」

ナギトはカードを見ないままテーブルに叩きつけた。

ブレードにおける、最強のカード——それは直前のカードを封殺するボルトでもなく、相手のカードと自分のカードを入れ替えるミラーでもない。

ましてや、ボルトに封殺されたカードを蘇らせる1であるわけがない。

最後の最後で、1番頼りになるのはやはり純然たる力。力こそパワー！

「7のカードだ！」

ナギトは勝利を確信した面構えで数字を宣言する。

シャロンも山札から1枚カードを引いて、微笑みを浮かべた。

「負けましたわ」

そうやって出したのはミラーのカード。数比べになった時、それは最弱の1と化する。

「ブレード最強決定戦、ここに閉幕！勝ったのは、ナギト・シユバルツァーだ!!」

マイクを持ったクロウが高らかに勝者の名を読み上げる。イスから立ち上がったナギトは右手を天に突き上げて絶叫した。

「ツそおおおおおい！」

それを間近で見ていた観客たちは際限なしに沸き立つ。ナギトは勝利を噛み締めつつ教室に集っていた者たちとハイタッチを終わって、吐息して。

「なんだこのノリ」

意味不明過ぎる謎の宗教を見ているようでちよつとどこるかドン引きし、勝者そつちのけで騒ぐブレード愛好者たちを尻目にナギトは教室を出た。

☆★

不可解な宗教団体と別れを告げてからしばらくすると懐のARCSが着信音を鳴らした。

「はい、ナギト・シユバルツァー」

「あ、ナギト？私、アリサだけど」

相手はアリサだった。

おそらくすでにリインとは別行動だろう。ナギトに連絡なんかしてきて、男を取っ替え引っ替えして遊び倒すつもりなのだろうか。

「ラウラなら、ギムナジウムにいたわよ」

そして、放たれたセリフに硬直する。というか本気で大口を開けて驚いた。

「……………っは!?え、おま……………なんなのアリサ?」

「ふふ、やっとあなたに一泡吹かせた気分になれたわ。だって、リインに貰ったチケットでラウラと一緒に《ステラガルテン》に行くんでしょ？ あ、もしかしてもう行っちゃったあと？」

まさかあの「ここ、どうだった？」の質問からここまで予想したのか。全く、思春期の女子ときたらこれだから油断ならない。

「いや、まだチケットはポケットの中。もしかして顔に出てた？」

よもやリインが喋ったという事も——うっかりありえるかもしれないなあ、と思う。

「いいえ、半分くらいはカマかけよ」

アリサの返答を耳にして安堵しつつも肝を冷やす。自分はその内、アリサに隠し事ができなくなるのではないかと。

「お前：大したやつだよなあ」

「まだまだナギトには及ばないけどね」

「そんな褒めるな照れるだろ」

「褒めてません！ ラウラはギムナジウムにいたから。用件はそれだけ、じゃあね！」

確かにこの通信におけるアリサのムーブはナギトのそれに近いものを感じられた。いつものように対応しつつ、通信を切る様子のアリサに「あー、アリサ」と声をかける。

「何？余計な事だったら——」

「ありがとう」

激おこプンプン丸状態のアリサに不意打ちで礼をして、すぐに接続を切る。

ナギトはそれからすぐにジムナジウムに向かって歩き出した。

ジムナジウム、そのフェンシング部の部室で練り広げられるのは、[〃]みっしいパニックだ。

簡単な説明をすると、等身大のモグラ叩き。

そこにラウラはいた。フィーと一緒に。

ちよつとアリサさん!? 情報漏れがあるんですけどお!?!と内心で冷や汗&ツツコミを入れつつ2人に「おーっす」と声をかけた。

「あ、ナギト」

「む、そろそろ約束の時間だったか。よくここがわかったな?」

「おう、アリサに聞いてさ」

と談笑の雰囲気を持ち込む。さてさてどうやってラウラを単独で連れ出すかと思考する。

あの帝都での喧嘩以降、ラウラとフィーはすっかり親友になっていて、今のよう一緒に行動する事が多い。

確かに昨日ラウラと一緒に学院祭を回る約束はしたが「2人で」とは言わなかった。フィーまで着いてきてはナギトのデートプランが破綻してしまうだろう。

さんざ悩んだ挙句、ナギトはフィーと話をつける事にした。

「ちよつといいかな」とフィーを呼びつけてラウラからは聞こえない距離、聞こえない音量で話す。

「あの一、ちよつとラウラと行きたい所あるんで、少しだけラウラ連れてつていいかな？」

「あたしは邪魔？」

お邪魔虫という意味では全く相違ない。

「いや、そういう意味じゃないんだが」

「あ、そつか。ナギトはラウラの事が好——」

「しー！声がでかい！」

ラウラに聞こえる音量で合点がいったという様子のフイーの口を慌てて塞ぐ。

「ナギトの方こそ声が大きい」

ラウラを見ると怪訝そうな表情をしていたが、話の内容が漏れたわけではないようなので愛想笑いで誤魔化しておく。

「んー、まあ別にいいけど。ラウラが変にそわそわしてると思ったらそんな理由があつたんだね」

「え、それマジ？」

「ホント。でもその前にあたしとも遊んで、ナギト」

というわけで、フィーと遊ぶ事になったナギト。何で遊ぶかというところのギムナジウムで開催されている『みっしいパニック』だ。

まずはフィーからゲームスタート。

さすがは西風の妖精と呼ばれるだけあつてか尋常ではないスピードで舞台上を駆け抜け、ポイントを重ねていく。

ゲームが終わり、ポイントが公開される。

それは『みっしいパニック』史上最高得点であつたらしく、フィーもたまらずガッツポーズ。

程なくしてナギトも舞台上にスタンバイする。

確かにフィーは速い——が、ナギトもまたスピードが売りの剣士だ。

「負けてやらねえぞフィー！——士官学院で得た成果——ここで見せてやる！」

宣言と同時にゲームスタート。

ぴよこつと出てきたみっしいにピコピコハンマーを叩きつける。

「あ」と、声を漏らした誰かになど気にかけて、脚力を爆発させた。

「八葉一刀流、二の型 疾風！」

ナギトはそれで出てくるみっしいの着ぐるみたちのことごとくを1つの例外もなく沈めていく。

これは明らかにフィーより叩いた数が多い。

勝利を確信しながら、ゲーム終了。

ドヤ顔のナギトに公開されたのは、フィーより低い点数だった。

「あれっ!？」

「当然。ナギトは黒いの以外も全部叩いたからマイナスポイントが加算されたんだよ」

得意げな表情でフィーはそう説明した。

そう言えば、なんか良い奴っぽい顔したマスコットまで叩くなんて心が痛むなあ、な

んて思ってたんだが、あれは叩かなくてもよかったのか!と納得。

それに、最初に出てきたみっしいを叩いた時に誰かが漏らした「あ」——あれはマイナスポイントをキメ顔で叩いたから出た言葉だったのか。

「ぬ、ぬかったわ……」

けっこう本気で肩を落とすナギトにファイは「フフツ」と笑う。そんなファイを見てナギトも「かっかっか!」と景気良く笑った。

「楽しかった、ありがとナギト、ラウラも。それじゃあ私は退散するから。お二人さん、ごゆっくり」

「ファイ、どこかに行くのか?」

「ん、デート楽しんでね」

「で、ででデ…デートだど!?!」

「バイバイ」と手を振ってギムナジウムを出て行くフィーにナギトは感謝と共に見送る。
あわあわと慌てるラウラに微笑みを向けつつ、次の言葉を待った。

「……はかったな？」

ラウラの赤面は未だ止まず、ジト目でナギトを睨んでくる。ナギトは余裕の表情だが、内心はラウラの可愛さでどうにかなりそうだった。

「大した事はなにも。まあフィーの気遣いを無駄にするのもなんだ、デートしようぜラウラ」

「……そなたは、まったく……」

ラウラはナギトの企みに嘆息しつつ、とうとう観念した。

「わかった。そなたの誘いに乗るとしよう」



という感じでラウラを口説き落としたりナギトは、2人で学院祭の出し物を回る。手を繋ぐとかは正直恥ずかしくて無理だったが、雰囲気は悪くない。

ナギトはタイミングを見計らってアリサおすすめの《ステラガルテン》にラウラを誘う。

扉を開けて入ると、そこは星の輝く綺麗な庭園だった。

「おお、すげえなこれ。本物の夜空みたいだ」

「さすがは貴族クラスの出し物といったところか」

ラウラの第一印象は好感触。

ナギトは内心ガッツポーズを連打しつつも、ラウラを伴って先に進む。

《ステラガルテン星の庭園》——まさしくその名の通りの庭園を。

「それにしても、もう10月だな」

作り物の夜空を見上げながら、ナギトは話しかける。2人の間に沈黙はあったが、それに耐えきれなかったわけではなく、話さない時間がもったいなく感じて話しかけたのだ。

「そうだな、もう我らが出会ってから半年だ。——と、前にもこのような話をしたな？」

「そーいやそーうだな。はは、思い出してみればついこの前みてーに感じるな？」

「ああ、まさしく光陰矢のごとし…だな」

「楽しい時間は過ぎるのが速いと言うが、まさにこれだな。…いや、座学の時間は長いわ」

ナギトの小ボケにラウラは「ふふ」と笑った。それだけで救われた気持ちになる。2

人して笑って、そのままラウラの顔を見ていたら「どうした？」と聞かれる。

「いや」

“なんでもない”と言おうとしてその言葉を飲み込んだ。そう言うのは簡単だ。

だが、それよりももっと相応しい言葉があるのではないか？言うべき事があるのではないか？

そんな思いが胸中で渦巻いた。

しかし“この時間がずっと続けばいいのに”と感じていた事なんか口が裂けても言えない。

「楽しい時間だった。 リインがいて、アリサがいて、エリオットがいて、エマがいて、ガイウスがいて、フィーがいて、ユースがいて、マキアスがいて、クロウとミリアムが途中から入ってきて、ついでにサラ教官もいて」

思い出を振り返るように、名前を呼んだ人物を頭に浮かべる。

「みんな、俺の空っぽだった器に大切な思い出を注いでくれて……」

約一年、ユミルで過ごした日々。

ラインがいて、シュバルツアー男爵がいて、シュバルツアー夫人がいて。たまにエリゼが帰ってきて。

たったそれだけで完結してた生活。

記憶がなかったナギトには新鮮な楽しさに満ちた日々だった。

でもそれは、ラウラがナギトの前に現れる前の話で。

「でも、そんな日々の中で一際輝くのが、ラウラと過ごした時間で」

ラウラと出会ってから、ナギトの世界は一気に色が満ちた。

これまでの日々がまるで、これからのための序章であったかのように思えた。

トールズズに入学し、Ⅶ組に所属し、ラウラと出会い、色鮮やかな日々が幕を開けた。

それはこれまでも、そしてこれからも決して色褪せる事のないだろう強烈な記憶の始まりになった。

「Ⅶ組に入ってラウラに出会えたのは、俺の人生で最大の幸運だった」

伝えたい事が頭の中でまとまらない。

それでも、これだけは言っておかなければならない。

「だからラウラ。出会ってくれてありがとう」

言つて。言い切つて。平静に戻つた。

あれ、なんかマジ告白して返事待ちみたいな雰囲気!?

そんな風に内心ドツキドキしながら横目でちらりとラウラの様子を窺つた。

ステラガルテンの暗さに紛れて、その表情は読めない。

「お、これが装置かな」

ステラガルテンの最奥部に半球状の装置を発見した。

傍にあるスイッチを押してみると、半球状の装置から光が溢れ、ステラガルテンの星空を一層鮮やかに染め上げた。

それはまるで天の川。

夜空に煌めく星々が天を埋め尽くさんばかりに出現し、見る者を魅了する。

ノルド高原の夜空を想起させるに足る壮麗な景色にナギトは「おお……」と稚児のように口を開けたままだ。

「これは……言葉を失うな」

ラウラもまたナギトと似た反応であった。

近くのベンチに腰掛ける。視線は未だ天井に投影された星空に釘付けだ。

星空を眺め初めてから幾許か経った頃、ラウラがぽつりと溢す。

「(イ)ち(イ)そ、だ」

横目に見るラウラの表情は真剣そのもので、聞き返す事すら躊躇わせるものがあつた。

ナギトは一言一句聞き漏らさないように耳をすませる。

「このツールズに入学してからと言うもの、私の狭かった世界は大いに押し広げられた。世界はこうも広がったのだ、と頭ではわかつていたものを心で理解する事ができた。VII組のみんな、それに元猟兵であるフイーに出会えた事で私は成長する事ができたと思う。——中でも、剣を握る一人の男子に、私の心は揺すぶられた。本当の意味での強さを感じさせられた気分になった。私はいつしか、目標を《槍の聖女》からその人物へと上書きしていた。今では伝承にしか残らぬはずの《槍の聖女》とその人物とではどちらが武の頂きにあるのか私にはわからぬ。しかし、近くて遠いその目標があるからこそ、今の私はこうあると思うのだ」

ラウラはそこで一旦言葉を区切り、こちらを向いた。

視線が交わり、溶け合い、一つに重なる。

ラウラは薄く微笑んだ。

「だからナギト、目標をありがとう」

「~~~~~ツ」

これはやばい。ガチで、マジでやばい。語彙力が消失し赤面するナギトにラウラが「どうしたのだ？」と声をかけてくる。

どうしたもこうしたもない。

そんな優しく微笑みかけられたら、そりや惚れるというもの。

「いやお前そんな……よくそんな事を言えるよな？聞いてるこっちが赤面もんだぞ、今のセリフ」

「フフ、さっきのお返しだ」

そう言つてさつきとは違う種類の笑みを浮かべるラウラがまた可愛く感じる。

しかも「お返し」という事はさつき、暗くて見えなかったラウラの顔は赤くなつてい

たというわけだ。

そんな結論に達すると、またさらにラウラを愛しく思うので、本当に惚れているのだと自覚する。

この雰囲気のまま見つめ合っていると、抑えが利かなくなりそうなので視線を星空に戻す。

それからまた数分が経過し、静謐な空間を切り裂いてラウラが問いを発した。

「ナギト、そなた……剣の道は好きか？」

それはケルディックでの実習の際、ラインが問われた言葉。これについてナギトは自らの答えをひねり出していた。

それを言葉にする前に、今一度自分の内で反芻する。

剣とは。剣の道とは。

剣とは、いくら美辞麗句で飾ろうと人を傷つけるための道具に他ならない……暴力だ。ならば剣の道とは？ 暴力の道か？ それはきつと人類が歩んではいけない道程

だ。

とまあ、ここまでがナギトの秘める「劍」に対する否定的な意見。対して肯定的な意見は、それこそ山のようにあった。

誰かを守る力にもなるだとか、かつこいいだとか。そんな些細な事でさえ劍のチャームポイントに思えるのだから、きつとナギトは劍が大好きで、劍の道に生きているのだ。確かに劍は暴力の形のひとつである事は否定できず、その道が血に塗れている事は間違いない。

それでも、そんな一側面だけで判断するのはもつたいたいではないか。

——なんて思考がそもそも「劍の道大好きマン」のそれなのだから笑えてくる。だから言うべき言葉はひとつだけ。

「好きだよ、ラウラ」

ラウラの問いに、一瞬の間もなくナギトはそう答えていた。

「そうか。理由は聞いてもいいだろうか？」

そしてラウラは当然のようにその理由を問いたです。しかしナギトは理由のすべてを語るつもりはない。冗長になると思ったからだ。

「剣は力。剣は誰かを傷つける道具にもなるし、誰かを守る武器にもなる。……なんつーかな、理屈はそんなもんだけど、それだけじゃない。言葉にできねえもんはある」

ナギトの答えを受け取って、ラウラは目を丸くした。よつほど予想外だったのだろうか。

できるだけ簡潔に答えたつもりだが、難解だったかもしれない。

そんな風に考えたナギトだったが、ラウラが「ふつ」と笑った事で杞憂だったと知る。

「そんな風に言ったのはそなたが初めてだ。それとも、好きに理由はいらない……というやつか？」

「ん、忘れろ忘れろ。変な事言った気がする。そも質問に答えてなかったか？」

「いや、忘れまいよ。そなたの答えは私の胸に刻んでおこう」

「光荣だ」とナギトの当たり障りのない返事を受けて、ラウラは会話を終えたと感じたのか視線を足下に向けた。

対するナギトはラウラとは対極に星空を見上げた。

沈黙は嫌いじゃない。

しかし、今のナギトとラウラの間にある沈黙は居心地の良いものではなかった。

ギクシヤク、という音が聞こえそうなほど空々しいというべき空気とでも表現すべきか。

ラウラは唐突に顔を上げ、体ごとナギトに向き直った。

「しかし、好きだよ、ラウラ」とはいささか不意打ちの告白のような印象を受けたな」

会話のリセット、雰囲気のリセット。それが唐突に行われて、ナギトも意識を切り替えた。

「一応言っとくけど、剣の道は好きか？」って問いに対しての答えだからな？」

「フフ、わかっている。だが——」

「ラウラちゃんはトキメキを感じちやつたかな？」

言いつつ、ナギトは顔が熱くなるのを自覚した。今のはストレートではない。ジャブだ。自分で自分にそう言い聞かせつつ。

実はこのステラガルトンの雰囲気当てられて本心が漏れ出た事も理解している。

ここはもうたたみかけるべきだろうか？そんな風に思考して腹を決める。

「しかしまあ、力みすぎた感はあるかな」

「力みすぎた……とは？」

顔を赤らめていたラウラが、それを誤魔化すように疑問を投げかけてくる。

しかし、ここで追い打ちをかけるのがナギトクオリティ。その追い打ちで自分が羞恥

ダメージをくらうのはご愛嬌だ。

「うん、ちよつと質問の答えに本心が混じっちゃった」

てへ、と舌でも出さんばかりの気軽さで愛の告白紛いの事をする。

「――」

口調の軽さとは裏腹の重い内容に、ラウラの視線が一瞬だけ明後日の方向へ。

刹那の後に、耳まで真っ赤にしたラウラがしどろもどろになりながらも言葉を紡ぐ。

「それは、つまり……その、そなたが私の事を」

いつも超然としているラウラの慌てぶりに、薄く微笑みを浮かべて、言葉を遮る。

それはたぶん、男の意地とか役目とか。あるいは今、何も終わってない状況で幸せになるべきでないという思考だ。

「そうだね。ただアレだ。全部が無事に終わってから、俺の方から正式に言わせてほしい」

心の準備が必要だ。ラウラにも、ナギト自身にも。

「う、うむ。わかった、心の準備をしておこう」

まさしく予想通りの返答を受け取り、ナギトは頷く。

「よし。そしたら出ようか」

「うん、そうしよう」

これ以上の言葉は、この場では必要ない。

ナギトの言葉にラウラは同意して、二人でステラガルテンを出る。

「じゃあまた」

「ああ、また寮で」

ラウラに別れを告げて、その背中を見送る。

その背中が妙にもじもじしているようで可愛らしくて、喉の奥からくつくつと笑いがこみ上げてくる。

ラウラの姿が角に消えると、ナギトは大きいため息を漏らした。意識して見ると、背中と掌にじんわりと汗が滲んでいる。

「リンがいたら『ガラじゃない』と笑われるだろうか。」

「ははは………しかしまあなんだ。良い緊張感だ」

眩きは喧騒に飲まれ、誰の耳にも届かない。ナギトはにやついたまま廊下を歩き出す。

こうして、学院祭1日目は平和に過ぎ去っていく。

そして、夜。不吉な鐘は鳴り響いた。

偽・夢現界廊

「——現在、19:40。24:00までの探索を許可しよう。それ以上はさすがに明日に障りがあるうからな」

そう言つて学院長ヴァンダイクはウインクをした。

それは、この旧校舎の異変を解決すれば明日の学院祭が行われるという約束を取り付けた事実にはならないものであつた。

☆★

不気味な鐘の音がトールズ士官学院の旧校舎からのものであると判断したⅦ組一行は第三生寮を飛び出して学院の旧校舎へ急いだ。

《暗黒時代》の産物。ドライケルス大帝の「来る日まで残せ」という言葉。レグラムのローエングリン城に似て青白く発光する威容。

「……やっぱ、6層の先があつたか」

ナギトはそう呟いた。

VII組は先月、旧校舎第6層までの探索を終えていた。昇降機が表示する階層は第6層までであり、そこで探索も打ち止めかと思われていたが、士官学院祭1日目の夜になって、これまで以上の異変を引き起こしていた。

侵入者を拒む障壁に守られた旧校舎は薄く光を放っており、その目に見える異常以上にどんな危険を秘めているか測り知れない。

そのため教官陣は明日の——学院祭2日目を中止にすべきだと結論を急ぐ。

旧校舎の脅威が如何程のものかわからないため、来場客や生徒を危険に晒すわけにはいかないからだ。その言い分は理解できる。一分の隙もなく合理的で論理的な判断だ。

しかし、そんな事実なんてすべて無視して言わせてもらおうと、

「ふざけるなって話だな」

あえて小声で言ったそれに、VII組全員が共鳴した。

堰を切ったように教官らに詰め寄って旧校舎の探索、引いては学院祭の続行を嘆願する。

「自分からもお願いします。来年にはどうなってしまうかわからないクラス……それにクロウは来月には元のクラスに戻ってしまう。俺たちの……今の俺たちだけにしか残せないものを、残したいんです」

ラインの言葉、ラインの願いはⅦ組総員の願いでもあった。

この学院祭に向けてⅦ組は日々を忙しく過ごしてきた。皆でやると決めたミニコンサート、それ以外にも楽しみにしていた事はたくさんある。

その思い描いていた明日を取り戻すために、願う。

それに呼応するようにラインの——否、Ⅶ組全員の懐から淡い光が漏れ出した。皆が取り出したそれはARCU Sだ。

時ハ来タ

サア、示スガヨイ

“運命を変えろ”とは違う脳内に直接語りかけるような声が聞こえ――

「リイン」

「ああ」

ナギトはリインと短いやり取りを交わすと旧校舎を包む障壁の目の前に立ち、ARCUSを片手に、もう片方の手を障壁に当てた。

ARCUSの輝きと、旧校舎を包む障壁の光が溶け合った。

居合わせたジョルジュは“ARCUSが旧校舎自体と共鳴している”と見解を述べる。

「ええ、どうやらそのようです。そして、俺たちⅦ組メンバーなら旧校舎に入る事ができる」

リインの言葉をナギトは首肯する。それでⅦ組全員の願いは決意へと変貌した。この異変を解決し、学院祭2日目を取り戻す覚悟を決めた。

教官らの決定を受け入れないⅦ組の姿勢にサラは育て方を間違えたと言わなければならない。謝罪するが、謝罪されたヴァンダイクは「よくやってくれた」とそれを受け入れない。そうして、設立理念を体現した今のⅦ組に旧校舎の探索が——学院祭2日目が託された。

☆★

旧校舎に新たに現れた第7層——そこはこれまでの階層とは違い、光る歯車のついた扉が一行を出迎える。

第6層まででもそうだったが、この第7層は殊更非常識な場所であると認識できた。

第六拘束マデノ解除ヲ確認——

《起動者》候補ノ来訪ヲ感知——

再びどこからか声が聞こえてくる。耳朶を打つ音ではなく、頭に直接響くような感覚だ。

刻八至レリ——

ガチャンと音を立てて光る歯車が回転し、扉が開かれていく。開いた扉の先には光りが渦巻いていて、何があるかわからない。

コレヨリ『第二ノ試シ』ヲ執行スル——

“第二の試し”……第4層でエリゼを襲ったアレが第一の試しだと思えるべきなのだろうか。

VII組のみんながそれぞれ予想を口に出していく。

最後にラウラが皆の心境を代弁するかのように言った。

「——これだけは確かなようだ。今宵、我らは導かれるべくして、ここに導かれたのだと」

一瞬、静寂が満ちた。

士官学院に入学してから今日まで、VII組は他の学院生以上に旧校舎と縁があった。そ

れこそ運命と呼んで良いほどに。

それが収束したのが今この瞬間なのだという実感が皆の胸に落ち————エマが扉の前でⅦ組のメンバーと対面するように立った。

そして語る。

ここから先は尋常ではない場所だと。覚悟はできているのかと。

その姿はいつもの優しい委員長然としたものではなく、エマ・ミルステインという存在の背景を感じさせるものがあつた。ナギトの脳裏には「魔女」の文字が浮かぶ。

しかしそれに気圧される事なくⅦ組の皆は覚悟ができている事を告げる。それはもちろんナギトもだ。

しかし——

「とつづくに覚悟はできてるさ。明日の学院祭で喉を潰す覚悟をさ。お前はどのようなよエマ……俺と同じでボーカルだろうよ」

——しかし、それはあくまで明日の学院祭、明日のミニコンサートで歌い尽くすためのもの。

いつもの……否、いつも以上に不敵に笑むナギトにエマも不意を突かれたのか微笑みをこぼして観念した。

「……そうですね。エリオットさんのしごきにも耐えましたし、本番は迎えたいです。…そのための覚悟なんて、みなさんはこの旧校舎に入る前から決まっていたんですね。およそ、クラス分けには縁がなかった私ですけど、Ⅶ組が最高なのは胸を張って言えます」

「——だったら行こう、この先に」

Ⅶ組全員の決意をその背にリインが語る。

「俺たちのクラスが最高だと、俺たち自身に証明するために。この異変を食い止めて、明日」を引き寄せるために」

Ⅶ組の決意と覚悟を受け取ったエマは扉の前から退いた。半端な覚悟なら止めるつもりだったのだろうか、それはこのⅦ組にとってありえない事だった。

そうしてⅦ組一行は扉の向こう——白光渦巻く異空間に足を踏み入れた。

ほんの一瞬、視界がホワイトアウトする。しかしそれ以外の感覚器官は通常通りに働いているように感じられて拍子抜け——する間もなく。

眼下に広がる光景に圧倒された。

およそ常識では考えられない構造の……そこそダンジョンと呼ぶべき異空間。まるで空間の法則が捻じ曲がり、無理やり繋ぎとめられたような場所。

Ⅶ組はそんな場所に空間を超えて移動させられたわけだが、その胸中に一切の不安を感じさせない。仲間と共にいる安心感、明日を取り戻す決意と覚悟が、それを上回っているのだ。

探索を開始する前に、Ⅶ組の一同はラインにいつものあれを頼む。

ラインもそれは理解したようである。

「それはいいな」

とガイウスが同意し。

「作戦開始の号令は大事」

とフィーが建前か本音かわからない言葉を口にして。

「そうだね。これも僕たちの特別実習みたいなもんだし」

とエリオットがたまに見せる優しさを含んだ狡猾さを見せて。

「よっ、我らがリーダー！」

クロウはそう言つてリインを担ぎ、

「フツ、囁むんじゃないぞ」

ユーススがプレッシャーをかける。

「頼むぜ、お兄様」

最後にナギトがウインクすると、リインは「プレッシャーをかけないでくれ」と肩を落とす。

「まあ別にいいんだが……ならナギト、明日の号令は頼んだぞ」

「え」と固まるナギトを無視してリインは一步、前に出てⅦ組のメンバーに振り返る。一瞬の瞑目の後、拳を握りしめて言った。

「トールズ士官学院、Ⅶ組総員——旧校舎の異変を食い止めるべく、これより第7層の探索を開始する。各自、全力を尽くしてくれ！」

こうして旧校舎第7層の探索は始まった。

☆★

「――迅雷・叢雲」

雷速の踏み込み、斬撃。それに遅れてやってくる斬撃による2段攻撃が敵性魔獣を斬り伏せる。しっかりと残心をしてから太刀を納刀した。

「相変わらずキレッキレだなナギト。感覚は取り戻したかよ？」

第7層を皆が進む中、その最後尾を守るクロウがナギトの肩を叩く。
歩きながら会話を始めた。

「いやあ、まだまだ感覚は戻ってねーな」

その話題はナギトの現状についてだった。レグラムでの実習で大怪我をしたナギト、怪我が治って復帰したがかったの感覚は失われて戦闘力が大幅ダウンしていた。その際に寮で同室のクロウにポロツと弱音を漏らしてしまっていたのだ。

「そうか？動きはもう前と遜色ないように見えるが。……さすがに実技テストでⅦ組全員を相手したときとは比べられねえが」

「まあオルデイスでの実習であの《黄金の羅刹》に鍛えられたからな。…スーパーきつかったけど自分の戦技の理解度が深まったし、その影響である程度は元通りさな。それにあの実技テストの時ののはちよつと話が違つて……あれは相性が悪くてな」

己が思考を捨て去り《剣鬼》の感覚に身を任せる『自失無我』、思考をぼやけさせ夢を見るように駆ける『夢我』。

これらの絶招はナギト・シユバルツァーの思考が停止、ないしは鈍らなければ発動できず、思考がしつかりとしていない中では頭で理解している術理を身体で実行する事ができない。

「……そうなのか。しかしまあお前が気を持ち直してくれてこっちは助かるぜ。クラスのやつらもみんな心配してたしな」

「その節は、迷惑を」

マキアスの貴族嫌いやラウラとフィーの仲違いの仲裁をしていた当のナギトが問題になっていたのだ。しかも相手が自分自身となれば碌に手伝ってやる事もできず、VII組の皆はさぞ気を揉んだ事だろう。ルームメイトのクロウであれば尚更だ。

「ハッ、いいって事よ。……俺はお前カリインだと思ってるぜ」

クロウのセリフを吟味して何を言っているのか考えたナギトだったが答えは「？」だ。

「何の話？」

小首を傾げたナギトを見たクロウは「さてな」と露骨に誤魔化して先に進んでいく。

クロウと入れ替わるようにナギトの隣にやって来たのはエマだ。クロウはどうやらエマの様子を見て先に行ったようだ。

「クロウさんとは何の話を？」

「ん、うーん……色々？」

挨拶代わりだったのだろう。煮え切らないナギトに「そうですか」と返してエマは本題に入った。

「この先に眠っているはずの騎神についてなんですが」

「え？」

「えっ？」

沈黙。エマはナギトの反応を見て自らの失策を悟った。

「では」と足早にナギトの隣から離脱しようとするエマの肩を掴んで引き止める。

「待て待て。知ってる、知ってるよ？ この先の騎神の話だよな？」

「それは知らない人の反応です！ 離して下さい！」

エマはナギトが自らの、魔女としての事情に精通していると誤解して話を振ってきていた。もちろんナギトはエマの事情なんて知るはずがなく、この旧校舎に騎神が封印されているなど知っているはずがない。——本来なら。

しかしエマの言葉でナギトの記憶は励起された。

押し問答するナギトとエマを見てかⅦ組一行の足は止まり、ラインが「なにしてるんだ？」と問いかけてきた。

これにかこつけてエマはナギトの隣から逃げるつもりだろうが、そうは問屋が卸さない。

「《灰の騎神》の話だろ？」

エマが皆に助けを求める前に、そつと耳打ちする。振り向いたエマは目を見開いてい

て少し怖く、張り詰めた雰囲気を出している。

余裕のなさそうなエマに代わり「なんでもなくい」と手をひらひらさせてリンへの返事とする。

リンらは怪訝に思いつつもエマからの反論がない事から問題なしと判断して第7層の攻略を再開した。

皆から距離を取りつつ最後尾で密談を始めた。

「ナギトさん……あなたはどこまで知っているんですか？」

「さあ？ ……誤魔化してるわけじゃないぞ？ 俺は本気で自分が何をどこまで知っているのかわからん」

騎神にしても、エマの正体にしても。

現時点で知っているはずのない情報だ。

「……………とりあえず信じますが。それもあなたが「特異点」だからなのでしょうか？」

「かもな。もしかすつと俺の失われた記憶が関係してるかもだけど」

「それがありましたね」とエマは再び考え込む。ナギトは普段の態度がおちやらけているせいで、たまに記憶喪失だと忘れられている事もあるが今回のエマもそうだったのだろうか。

「ナギトさん……騎神の起動者になるつもりはありますか？」

“騎神の起動者”……その意味を、ぼんやりと理解する。理解している。

「なれんの？」

「わかりません。騎神の起動者には資質のある者しか選ばれないそうですが……私はそれがナギトさんかリインさんだと感じています」

ナギトかリインか。それはついさつきクロウにも言われた事だ。彼が騎神の事情に

精通しているわけがないから、単なる偶然であろうが。

「……そうか。それで？」

「もしもナギトさんが騎神の起動者に選ばれたら、私に力を貸して欲しいんです」

「具体的には？」と続きを促す。

エマは「激動の時代への対応」と「姉探し」に協力を求めた。

ギリアス・オズボーンの唱える「激動の時代」は何を指すのか不透明で、「ヴィータ・クロチルダの搜索」はエマの個人的な願いだ。

「無理な話なのは承知しています。しかし騎神とはこの帝国に昔から存在していて、その力を得たなら争い事は不可避になります。そして姉さん——ヴィータ・クロチルダは一族でもお祖母ちゃんを除けば最も力ある人物で博識です……協力できれば大きな助けになってくれるはずですよ」

エマはこれでもかと運命と利点を説く。

「うんうん、とりあえず保留でいいかな。ひとまず俺が起動者になったらまた話をしようぜ」

しかしナギトはそれを軽く聞き流した。

正直な話をすれば『激動の時代への対応』も『ヴィータ・クロチルダの搜索』もまっぴらごめんというのがナギトの感想だ。

だがクラスメイトのエマからの頼みなら引き受けるのも吝かではないのもまた事実。

そんな2点を踏まえつつも、まずは『騎神の起動者になる』のが先だ。

この先に封印されている『灰の騎神』の起動者になるのが。

——なんて考えつつも、『自分が起動者になるなんてのはやり過ぎだ』と、どこかで感じているナギトだった。

「ほら、もうすぐ終点じゃないか？」

はぐらかすようなナギトの返答に眉根を寄せたエマだったが、今はまだその話をする段でない事を悟り、第7層ダンジョンの終着点に向かっていくのだった。

☆★

辿り着いた空間は、たった今VII組が攻略した異空間のような場所ではなく、旧校舎らしさを残した部屋だった。

視線の先には、門。

第4層やローエン格林城で見たものと酷似した中央に宝珠が嵌められた扉だ。

調査をする間もなく扉の宝珠が赤く輝く。

《起動者》候補二告ゲル——

コレナルハ“巨イナルチカラ”ノ欠片——

手ニスル資格ガ汝ラニアリシカ——

コレヨリ『最後ノ試シ』ヲ実行スル——

それと同時に頭に声が響いた。第7層攻略前にも聞いた、あの声が。

「気をつけて……取り込まれます……！」

エマが皆に忠告する。次の瞬間、視界が歪んだ——否。空間そのものが捻じ曲がった。

「——ん」

気がつくとなギトは1人で、そこにいた。

灰色の砂原にいくつもの剣や槍が突き刺さり、どよめく雲は視界のすべてを覆い尽くし、蒼穹はどこにも見当たらない。

灰の戦場か、あるいはこの物悲しさから灰の墓場と呼ぶべきかもしれない。

周囲を見渡して自らが1人である事を再確認。VII組の皆はおらず、それぞれ別々に飛ばされたか——なんて思考が凍りつく。

「おこ」

と声をかけられた。正面からだ。どうして今までその存在に気づかなかったのか。風景に溶け込むにしては目立つなり形をしているように見えない見える。ナギトは一気に臨戦態勢に入った。太刀の柄に手をかける。

「お前は何をしているんだ」

「——なんだって？」

声はちゃんと聞こえている、はずだ。それなのに正しく認識できていない気がする。とても奇妙な表現になるが、声にモザイクがかかっている。——そう表現できた。

「お前は、なにを、しているんだ」

今度は、それはわかりやすいように区切って言葉を放つ。

しかし問いかけの意味がわからなかった。だからナギトは正しく今の状況を説明する。

「明日の学院祭を開催させるため、Ⅶ組全員で旧校舎第7層に挑んで……でいいか？
というかその前に……お前、なんだ？」

「なんだ？」という曖昧な問い。これまでそういう言い方をする時は、何かしらの意味を持たせて言っていたナギトだったが、今回はその曖昧な表現のままの質問だった。

なにせ、その姿が霧に包まれるようでとても、とても見にくいのだ。

輪郭ははっきりとしていて、顔も見慣れたそれに見えて——見えないはずなのに——まるで毎朝、歯を磨くときに顔を合わせているような親近感。

「なんだ？何を言ってる、俺はお前だ……俺たちだ」

その答えに眼前のその霧が急速に晴れていく。しかしそれでも正しく姿を認識できな

やはりぼやけている声に、やたらと聞き取れなかったフレーズがあった。だが、この存在がナギトに敵意がない事は理解できた。太刀の柄から手を離して正面から向き合う。

そのまま無言のナギトを見て「？」を悟ったそれは長く息を吐いた。

「やっぱまだわからねえか。……つたくシステムの強制力も大したもんだな、記憶喪失も然りだが」

なにか今、めちやくちや重要な事を言われた気がする。それを当然のように受け入れている自分に納得している。

それはとても歪だとナギト・シユバルツァーの思考回路は回答する。

「……一人で訳知り顔で話されてもわからんのだが？　まずここどこだよ？」

ナギトは努めてフレンドリーにそれに話を振る。この灰の戦場跡は、こういう使い方をされるものではないという確信——違和感があった。

「ここは…そうだな、異空間…あるいは異次元か。だからここなら俺たちの声が届きやすい……つてのも俺たちが想像してるからなんだけどな」

まったくもって理解不能な言い分だった。しかし何故か本能的に意味がわかる。それが既知のワードと合致した。

「特異点……？」

「…そこ繋げるかよ、思ったよりやるなナギト・シユバルツァーは」

“特異点”——それは世界で唯一の自由な者。または世界の歪みとも。

結社の連中の言い分を借りて表現すれば、だが。

どうやらそれは的を射ていたようで、それはナギトを褒め称えるようにして肯定する。

と、そこで急に世界が白み始めた。

「ちつ、もうタイムリミットか。　　いいか、お前よ…残された時間はあまりに少ない」

どうやら時間制限があったらしい。その口ぶりから推測するに、この邂逅はイレギュラー。

特異点^{ナギト}という存在が在る事についてはもう否定のしようもないが、その影響を最小限に留めようとするシステムの強制力というやつなのだろう。

当然のように、そう理解できた。

この意味不明な空間で、ぼやけた野郎の話を聞いて、そんなわけのわからないはずの状況をこれ以上なく正確に読み取れている。

しかしそんなナギトであっても、その言う“残された時間”についてはわからないらしい。

灰の戦場跡が白に沈んでいく。ナギトの全身も光に包まれて、その声ももう聞こえず

——ただ。視界が白く染まる直前に、その唇はこう動いた。

——運命を変えろ、と。

☆★

「——ナギト！」

「お？」

「お、じゃないわよ……ポーっとして、心配させないでよね」

「あ、すみません」

リインに呼びかけられるようにしてナギトの意識は回帰した。傍らのアリサに怒られて反射的に謝罪する。普段の力関係はこういう所に出るのだ。

「(トト)は……」

ナギトは周囲を見渡す。眼前に広がる風景に変わりはない。先程と同じ。灰の戦場跡だ。

さっきのアレは白昼夢を見ていたとでも言うべきなのだろうか。そんな風にナギトが考えていると、エマが皆に忠告した。

「気を確かに。…来ます……！」

思い出す。そうだ、ここは「最後ノ試シ」の場。

この場に現れる「ロア・エレボニウス」を打倒する事で《灰の騎神》の起動者たる資格を得られる。

気持ちの悪い、理解。本来知らないはずの情報を知っていると、という無理解。だが今はそんなものにかかずらっている場合ではなかった。

灰色の地面に影が渦巻く。その影はやがて立体に伸びて四肢を持つ怪物となった。

それこそがロア・エレボニウス——焔の残滓、巨いなる影。

圧倒的な存在感から放たれる重圧に、しかしⅦ組メンバーはひるまない。皆がそれぞれ決意と共に得物を構える。

それに続くようにしてナギトも櫛を飛ばした。それはなにより、自分に向けて。

「やってやろう——俺たちの青春のいちページに！明日という日を刻み込むためにも！！」

リインは二、三步前に出て太刀の切っ先を影に向けた。

「これが『最後の試し』だ……！俺たちの全力をもって、あの『巨大な影』を撃破する！」

「「「「おおっ！」」」」

それにⅦ組全員の声が、意識が、決意が重なり、影はまた吼えた。

戦闘が、始まる。

この巨体を相手に出し惜しみする理由はない。

「——鬼気解放」

ぶわり、とナギトの全身から緋色の闘気が溢れ出した。《剣鬼》当時の闘気を引き出す絶招、それは仲間に援護を任せる合図でもあった。

呐喊するはガイウスとラウラ。エマがアーツでナギトの身体能力をブーストし、ユーシスとミリアムが脇を固めた。

さすが、先月の実習で肩を並べた者どもはナギトの意図を察するのが早い。

「緋剣——」

闘気が納刀された太刀に集約される。

その他の面々もロア・エレボニウスとナギトの直線上から退いた。

「――神威残月！」

刹那、放たれる神速の斬撃。

“緋劍”は《劍鬼》の鬨気でナギトの戦技を撃ち出す術技。威力、規模共に普段とは桁違いに飛躍する。

弧状の斬撃は影―ロア・エレボニウスを大いに揺らした。しかしそれでは致命に至らない。

よろめいたロア・エレボニウスに手から雫が落ちたかと思うと、それは地面と接触した瞬間、360度にとつともない勢いで波及した。

衝撃が戦場を吹き抜ける。幸いにして多数のサポートを受けていたナギトのダメージは軽微だったが、他の面子のダメージは推して知るべしだ。

「ホーリーブレス！」

そのダメージを見てとつたエリオットが範囲回復アーツで皆を癒やす。

VII組メンバーが傷を癒す時間を稼ぐ、そのためにナギトはロア・エレボニウスを見上げたが、遅い。

口腔から闇が吐き出される。それはきつと先程の雫よりも強い攻撃だ。

ほんの一瞬、壁を作るだけでいい。その思いともにナギトは闇の前に躍り出た。

剣鬼七式、三ノ太刀——

「——破空!!」

空間を攻撃する斬撃——否、もはや打撃に近いそれで闇を押し潰すが、それも焼け石に水というもの。

「盾!」

しかし稼いだ一瞬。それが皆を救う猶予時間となった。

飛び出したナギトの考えを読み取った数名がそれぞれ展開できるだけシールドを重ねる。

それにより今度は被害は少なく済んだ。——それに守られなかったナギトを除けばだが。

闇色の炎に焼かれ、ナギトの意識は少し飛ぶ。

「——おい、無事か？」

「…クロ、う……………」

視界にアップで映るのはクロウの顔。どうやら介抱してくれたらしい事がわかった。

「まだ動くな。けつこうやべえダメージだぞ」

「戦い…は、まだ終わってない、だろ…………？」

クロウの背後でⅦ組メンバーとロア・エレボニウスの激戦が繰り広げられているのが見える。

「ああ、だが優勢だ。お前のおかげだぜナギト……ちよいとばかりし体を張りすぎだがな」

クロウの言う通りだった。いくら《剣鬼》当時の闘気が扱えるとは言え、その闘気で防御していたとは言え、破空で攻撃の威力を減衰していたとは言え、ロア・エレボニウスの必殺に1人で立ち向かうのは蛮勇が過ぎた。

いや、思ったよりガード出来てて少し笑える。

気絶してなお手放さなかったらしい太刀を杖に立ち上がる。よろめいてクロウに肩を貸された。

「……まあMVP賞は貰うとしてだ、決着の時くらい立つとかねえと格好つかんよな。あんな啖呵も切ったしよ」

いつものように冗談混じりに強がるナギトにクロウは「はっ」と笑う。その肩を押しつけて「行ってこいよ」と言った。

「ああ、最後の一押し……して来んぜ！」

ナギトは見届ける。各人のスクラフトがロア・エレボニウスを貫くのを。その巨体が揺れ、崩れ落ちる——最後の一撃。

「うおおおおー！」

リインの咆哮が灰の戦場に響き渡る。その蒼焰の太刀が、灰色に染まる。ナギトは太刀を振るい、リインのスクラフトに自らの斬撃を上乗せした。

「いけ、リイン。これが俺たちのコンピクラフト……絶佳臨界——」

「——灰焰の太刀！」

灰の焰を纏った太刀がロア・エレボニウスを一閃した。

☆★

コレニテ『最後ノ試シ』ヲ終了スル――

《起動者》ヨ、心セヨ――

コレナルハ“巨イナルチカラ”ノ欠片――

世界ヲ吞ミ込ム“焰”ニシテ“顎”ナリ――

V
A
L
I
M
A
R

☆★

その文字が脳に、魂に焼き付けられたのは理解できた。

ロア・エレボニウスを撃破するとⅦ組メンバーに聞こえたのは、旧校舎で何度か耳にしたあの声。その通知が終わると急速に視界が青光に包まれて――

Ⅶ組一行は気がつくのと元の場所で倒れていた。

あの中央に宝珠が嵌められた門のあつた部屋だ。

この場にはサラヤトワ、ジョルジュなどが集っていた。これはつまり、旧校舎を覆っていた障壁の消失、ひいては異変の終息を意味する。

そこまで理解して、先程までのダメーჯが体から消えている事にナギトは気づいた。リインも同じ事を考えたようで、それをエマに尋ねる。

「委員長、さっきのは」

「私にもわかりません。おそらくは“幻視”——現実ではなかったんでしょう。ですが、皆さんが“試練”に打ち勝つたのは確かみたいです。教官たちがこの場にいるのが何よりの証拠でしょう」

エマがそう予想した通り、鐘の音も障壁もなくなったとトワは語る。これにて明日——もとい今日（時刻は0：20だったため）の学院祭が予定通り行われる事となり、一件落着——かに思われた。

いつの間にか輝きを失った宝珠の門が、開かれるまでは、門の先に鎮座していたのは騎士だった。

灰色の騎士人形だった。

風雲急告

トールズ士官学院祭2日目は当初の予定通りに開催された。

昨夜のひと騒動などなかったかように、周囲には笑顔が溢れている。人混みをかき分け、雑踏から遠ざかっていく。

「……差し入れでも持つてくか？」

ナギトはそう独りごちた。構堂で出し物の打ち合わせを終えて旧校舎に入ろうとした矢先のことである。

昨日、旧校舎第七層で灰色の騎士人形を発見したⅦ組だったが夜遅かった事もあり、その後の事は教官らに任せて退散していた。

その場にはジョルジュもいたので、彼の性格的に徹夜で灰色の騎士人形について調べたいそうだと思ったナギトは旧校舎から踵を返して学院祭の出店で売っている食い物

でも差し入れるべきかと考えたのだ。

そうしてパイを売っている出店に並んでいるとリインと遭遇する。話してみるとどうやら考えは同じだったようで、リインの奢りでパイを買おうと旧校舎へ向かった。

旧校舎第七層には2人分の影があった。1人は言わずもがなジョルジュ。もう1人はクロウだ。

「うーす、お疲れさんでーす」

適当に挨拶してジョルジュに差し入れを渡し、一晩でわかった事について聞いた。

どうやらこの騎士人形はこだわりのある職人の手により製造された可能性が高いらしい。関節部や装飾などにそれらを感じるようだ。

加えて、騎士人形の胸のあたりに人ひとり入れるような空洞があるとのこと。

「てかクロウ、なんでいんの？」

とりあえずの説明を聞き終えて、クロウに尋ねる。

「ん、まあ俺も気になってたからな」

クロウの言い分はナギトにもわかる。この騎士人形はかちよいい造形をしているのだ。年頃の男子なら揃って目を輝かせるだろう。

特にリインなど「魔界皇子」などという衣装を自作するくらいだ、内心ワクワクが止まらないはずだ。

灰色の騎士人形をまじまじと見つめる。ナギトは感動している自分に気づいた。

「まだいるつもりか？」

「もう少しいるわ」

やがて他の3人は第七層を出て行く。ナギトの返事を受け取ったクロウは「出し物に遅れるなよ」と忠告を残して去って行く。

見上げる巨体。この灰色の騎士人形こそが――

「――《灰の騎神》ヴァリマール」

目覚めを待つ灰色の巨体。その脚部に触れた瞬間。
脳内に映像が溢れた。

対峙する灰と蒼。

裂帛の咆哮の後、交わる太刀と双刃剣。

「――」

現実に回帰する。

灰色の巨体は動いていない。当然だ、これはまだ動かない。ナギト・シユバルツァーはこれが動く所を見た事がない。

「……今のは……お前の記憶か？」

フラッシュバックのように脳内に流れた映像はきつと——

「なにを見たのかしら？」

柔らかい——妖艶な——甘い毒のような声音。太刀の柄に手をかけ、振り返る。

☆★

誰もいない。何も無い。

「気のせいか？」

きつとそうだ。直前まで気配はなかったし、昨夜の件で疲れてるし。一応周辺の気配を探ってみるが、何ら異常はない。

腕時計を確認すると、そろそろステージの準備に向かうべき頃合いだ。ナギトは一度だけ騎士人形に振り返ると旧校舎を出た。

構堂に向かっていている最中に学院祭のゲストと遭遇した。オリヴァルト、アルフィン、エリゼ、クレアの4人だ。

「おっと、ナギトくんじゃないか」

「殿下。いらっしやっただんですね」

オリヴァルトはこのツールズ士官学院の理事長だ。学院祭に来るのも当然と言えた。ならばその妹であるアルフィンは……きつと遊びに来ただけだろう。エリゼはアルフィンと懇意にしている事もあり、その付き添い——リインの顔でも見に来たと解釈できる。クレアは3人の護衛だろう、なんせ皇族2名と貴族の子女だ。

「うむ、なにやら面白そうな催し物があると耳にしてね」

オリヴァルトは暗にⅦ組のミニコンサートを聞きつけてやってきたと言う。しかし、それにしてもやけに神妙な顔つきだった。ナギトは一瞬だけ思考を巡らせる。

「……なるほど」

実のところ、帝国は今揺れている。というのも、8月にクロスベルで開催された西ゼムリア通商会議にてクロスベル市長であるデーター・クロイスがクロスベルの独立を宣言したのだ。

「教団事件」とされるクロスベル全土を巻き込んだ事件に早期対応できなかつた事から宗主国であるエレボニア、カルバード両国に詰められた矢先の事であつたらしいが……

ひとまずは「属州の戯言」として宗主国二国は宣言を受け入れる事などなかつた、
が。

そんな事もありエレボニア帝国は今、静かに不安が蔓延していた。

しかし、そんな時に皇族であるオリヴァルトが市井のイベントに参加すればどうだ。

「殿下が来たのは安全の示威ですね？」

「うむっ！ それに私がいなくても帝国の政治は安泰だからね」

例え仮初でも国民は安心を覚える。そういった意味でオリヴァルトが学院祭に来るのは間違いない。本人に楽しむ気持ちがあるからなお良しだ。

「もうっ、お二人とも：何をニヤニヤしているんですか！」

と、そんな風に腹の探り合いごっこをしていると、そばにいるアルフィンからお叱りの言を受けた。

「ははは、申し訳ない。アルフィン殿下も、どうぞお楽しみください。エリゼもな」

低頭してそれぞれに声をかける。「それでは」と最後にクレアに会釈して、踵を返した所で、思い出した事があって再び向き直る。

「あ、そうだ。両殿下、我々のステージですが、ちよつとした余興がありました……期待

しています」

そうしてやや意味のわからない言葉にオリヴァルトやアルフィンは「？」を浮かべつつも返事をした。

それを聞き届けたナギトは今度こそ構堂へ向かった。

構堂ではすでに他のメンバーが集まっていた。

I組の演劇を見てから舞台のセッティング。

その途中にトワとジョルジュ先輩が入室してきた。しかも休学中のアンゼリカを連れての激励だった。

前までと変わらぬ様子のアンゼリカに呆れながらも励まされ、準備は完了した。

「よし、じゃああれやるか」

言い出したのはクロウだった。それはつい昨日もやったVII組行動前の号令の事を言っている。

「そうだな、じゃあ——」

とナギトがいつものようにリインをからかおうと視線を上げると、Ⅶ組全員が自分を
見ている事に気づいた。

「うん？え、なにごと？」

「昨日、旧校舎で探索を始める前に言っただろ。明日はナギトだって」

「……言ってたな。あれってそういう意味だったのね。…ではなく！え、俺がやんの？」

「うん」と皆が首肯する。

「待て待て、何で俺が。いつも通りリインの方が良くないか？それかこのミニコンサー
トのために頑張ってきたクロウかエリオットとか」

「うーん、頑張ってきたのはナギトも同じだと思っけど」

「そうさ。それに聞いてるぜ、オルデイスでの実習じゃお前が号令かけたみてえじゃねえか」

エリオットとクロウによる追撃。何かもう八方塞がりな気がした。それでも何か役割を回避するために言い訳を考えていると、

「たまにはいいんじゃないか」とガイウス。

「年貢の納め時だな」

「ああ、僕も君の号令が聞いてみたいと思っていたんだ」
ユーシスとマキアスも続く。

「ナギト、往生際が悪い」
フィーまで。

そんな風に総攻撃を食らって観念したナギトは「嘔んでも知らんぞ」と吐き捨てて。円陣を組む。深呼吸してから、紡ぐべき言葉を紡ぎ始めた。

「このツールズに入学してから半年が経った。俺はリインがオトしかけた女子の火消しに奔走した」

「おい」

リインの声が聞こえた気がした。

——たぶん、気がしたただけだろう。

「みんなも、それぞれの思い出を築いてきただろう。それはお前の、お前だけの思い出だ。だが、このミニコンサートのためにかけてきた時間はみんなで共有した思い出だ」

思い返す。およそ一ヶ月程度の練習期間だったが、とても濃密で充実した……青春だった。

「俺たちは昨日、どうして旧校舎の異変を収めた？」

もちろん、旧校舎探索の任を受けていた責任感もあるだろう。

「どうして皆が一丸となってあの強大な影に立ち向かえた？」

それは、皆の気持ちが一致していたからだ。

「今日この日！ この学院祭を、ミニコンサートを！やるためだろ!!」

皆の顔を見る。その表情の色は揃っている。きつとナギトも同じだ。

「さあ、ハッピーエンドは目の前だ！ 俺たちの唄で！演奏で!!学院祭を締めやろうぜ!!!行くぞVII組!!!」

☆★

暗い。静か。息遣い。鼓動。

幕があがる。まだ暗い。

マイクを口元に近づける。まだ静か。

そつと息を飲む。息遣い。

暗い講堂で、静かな雰囲気の中、観衆の息遣いすら聞こえるような静寂。鼓動。

鼓動、鼓動、鼓動。——鼓動鼓動鼓動鼓動鼓動鼓動。

一斉に照明が点灯する。それはステージを明るく照らし、白い衣装を纏ったユーシスとマキアスが歌い始める。

インパクトのある初手。それぞれ貴族派と革新派の重鎮を父に持つ彼らの息のあつた歌い出しは観客に相応の衝撃を与える。

そこにサビから加わるナギトの声。貴族と平民の確執が取り除かれたⅦ組の姿が体現されていた。

観客の心を掴んだまま一曲目は終わり、二曲目のボーカルであるエマにバトンタッチ。

それも無事大盛況で終わり、Ⅶ組のミニコンサートは終了——かと思いきや。

舞台裏に下がったⅦ組に聞こえてきたのはアンコールだった。実はこれも想定内で、三曲目も用意してあった。

Ⅶ組は再び舞台上がって演奏を始める。

その曲は昔からある、誰でも知っているような歌、 “I swear”。

“I swear : I wanna steer my way 空を巡り行けば
Will be there : …きつと会えるから 約束の場所へ”

ナギトとエマをボーカルとした三曲目だが、真の狙いは別にある。

クロウが「さあ、皆さんご一緒に！」と言うと、ナギトの期待通りオリヴァルトがいの一番に歌に参加した。それを見てほかの観衆も唄い始める。三曲目は観客参加型のものを選出していた。

“I swear : …どんな遠くにいても 巡り行けば きつと奏でられるから 青
い歌 I’ll be there : … 歩み進む道は 七色の輪 ずっと忘れない

ように また青い空仰ぐ」

VII組と観衆が唄い終わり今度こそ俺たちの舞台は終了した。

☆★

後夜祭。

VII組がグラウンドに足を踏み入れるのとほぼ同時に中央に設置されていたキャンプファイヤーが燃え上がった。

それぞれ知人が来ているようで、行動しようとした所で、ナギト、リイン、エリオットがクロウに呼び止められた。

話の内容は今日のステージに関する感謝と労いだった。

やがてエリオットは父親に呼ばれて去り、リインは少しだけ話すと気恥ずかしくなったのか、皆の元へ走って行く。

その背中を見てナギトとクロウは揃って「は」と息を吐く。その後、顔を見合わせて苦笑した。

「なんだかんだで良かったぜ、俺はお前と同室だよ」

「別れ話みてーだな」

クロウが切り出した話題にいつものようにボケを挟む。やはりいつものようにスルーされたナギトだったが気にも留めない。

だって実際にこれは別れ話なのだから。

通常ならクラスはそのまま持ち上がりで2年生になる。

しかしⅧ組はとことん例外であり、来年度はどうなってしまうかわからない。それにクロウは予定通りなら今月いっぱいクラスを去ってしまうのだ。

だからこれはルームシェアをしていたナギトとクロウの別離の話だった。

「男の同室なんざうぜーだけかと思ってたが、あんまり悪くなかったぜ」

「だな。満足に自分を慰める事すらできなかつたが」

「そりゃこつちのセリフだ」

2人は軽快に言葉を交わす。笑つて拳をぶつけ合った。ささやかな友情の確認である。

皆に合流すべく歩き始める。一步先を行くクロウの背中が、とても儂く感じられて。

「クロウ」

思わず呼び止めた。クロウは何気なしに「ん？」と振り返る。

その顔に、何と声をかければいいのかわからなかつた。

だけど、なにか、とても、重要な、場面の、気がして。

「どっにも、行くなよっ」

ようやくひり出したのは、それこそ別れ話を告げられる男のようなセリフだった。

その言葉にクロウは何故か目を瞬かせて驚いた後、嘘臭い柔らかな笑みで「ああ」と優しく答えた。

その後、クロウと別れたナギトは後夜祭の様子を眺めていた。

後夜祭ではキャンプファイヤーを囲うように男女がゆるりとダンスをしている。溶け合うような視線を交わし、心を交換するように、ゆつくりステップを踏む。

参加しているのは少数だが、そいつらは全校生徒公認のバカップル共である。

ナギトとしてはラウラを誘いたい気持ちもあったが、そんなの自分の想いを周囲にカミングアウトするようなものである。正直気恥ずかしい。

しかし、ラウラには昨日「全部が無事に終わったら俺から告白する」というような事を言ってしまったため、そのうち隙を見てダンスに誘わなければいけないのだが。

なんて、自分に言い訳している内にオリヴァルトとアルフィンが「景気付け」という事で踊り始める。

オリヴァルトの声で、みんなが踊り始める。

グエン・ラインフォルトとシャロン・クルーガー、帝都知事カール・レーグニッツとイリーナ・ラインフォルト会長。サラ・バレスタイン教官とヴィクター・S・アルゼイ

ド子爵。果てにはアンゼリカ・ログナーとジヨルジュ・ノームまで。

集結しつつあつたⅦ組も、踊りを始めた面々の行動の早さに舌を巻きつつ、また一旦バラける事となる。

オリヴァルトとアルフィンのおかげで、まだ幾分かダンスに誘い易くなりはしたが、それでもまだ覚悟が決まらない。

そんなナギトの元に現れたのはアルフィンだった。エリゼも伴っている。

「あら、ナギトさん。こんなところにいたんですね」

「皇女殿下。後夜祭は楽しんで頂けているようで」

「今夜は無礼講よ。そんなに固苦しくしなくても大丈夫です」

「はは、気遣い、痛み入ります」

変わらぬ態度のナギトに腹を据えかねたのか、アルフィンは少しだけイタズラっぽい顔を覗かせた。

「ナギトさん、もし良かったらなのですけど。私のダンスのお相手をしてはもらえませんか？」

「姫様……」

そのイタズラっぽい顔のアルフィンを諷めるようにエリゼが声を出す。

対するナギトは、この誘いが本気であれからかいであれ、対処に困る。

所詮はいち士官学院の学院祭、後夜祭での事ではあるが、*「帝国の至宝」*とさえ謳われるアルフィンと踊ったとなれば、明日から少なくとも学院での話題をかつさらつてしまふ事請け合いだ。

さすがにそれは面倒だし、何よりラウラに勘違いされては参る。

助け舟を求めてエリゼを見てみるが、肩を竦めるだけ。どうやら自分で乗り切るしかなさそうだった。

「アルフィン皇女殿下、お気を使わせたようで申し訳ありません。さすがはあのオリヴァルト殿下の妹君だ、良く人を見ていらつしやる。私が想い人がいるにも関わらず踊りに誘えていないのを見かねて発破をかけたのでしよう？ 殿下にそこまでさ

れては男ナギト・シユバルツァー、腹を括らねば。それでは、アルフィン殿下……ありがとうございまして」

一口で、早口で捲し立てるとナギトはアルフィンの前から逃亡した。適当にでつちあげた理由ではあったが、アルフィンなら本当にそうした理由でナギトをダンスに誘つてもおかしくないと感じた。なんせあのオリヴァルト・ライゼ・アルノールの血縁だ。

「……うん？」

ちよつとした違和感。どうして自分はオリヴァルトに対してそこまで信頼を置いているのか。確かに、これまでの短い付き合いでオリヴァルトが信頼に足る人物とは思っている。しかし、それはⅦ組の仲間たちと同程度ではないはずだ。苦楽、寝食を共にしたⅦ組の友たちとは違うはずだ。

ラジオで彼の冒険譚を聞いているから……そんな訳がない。ただ、その場面を鮮明に想像する事ができて、他のラジオ番組より面白くて、彼を、オリビエ・レンハイムを信頼している。

エステル・ブライトがそうであるように。

「それは俺じゃないのに……」

「ナギト？」

思考の沼からナギトを掬い上げたのはラウラだった。柔らかい声音でナギトの名を呼ぶ。

「ラウラか。どうだ後夜祭、楽しんでるか？」

ナギトは寄せていた眉根を一瞬で元の位置に戻すと笑顔を作り出す。ラウラはそんな様子を訝しんだが、ある意味いつも通りのナギトであり、さして気にするでもなく会話を前に進める。

「うん、見てるだけでもなかなかから楽しいものだ。まさか我が父がサラ教官と踊るとは思わなかったが」

「その内教官がラウラの母親になつたりしてな——と、さすがにデリカシーがなかったな、悪い」

軽口が弾み過ぎてついいらぬ事まで言うナギトの悪癖が出た。しかしラウラは「構わぬ」と器の大きさを見せる。

「して、そなたはどうだナギト。後夜祭は楽しんでるか？」

「え、うー、あーつと……はい、いや、いいえ」

「ふつ、どちらだ？」

ラウラの問いにこれ以上なく返答に困つたナギト。ラウラの追撃はすぐだ。こうなつては覚悟を決めるしかない。

せいぜい格好良くダンスに誘つてみるとする。

「楽しむさ、これからな。ラウラもどうだ？」

「ふむっ？」

ここまで言えば伝わるかと思っていたナギトだったが、ラウラのニブチンにも困ったものだ。昨日の「ステラガルテン」での約束を忘れてしまったのか。あるいは小悪魔らしさを演出しているのか。

ナギトは紳士らしくお辞儀をして手を差し出した。

「Shall we dance?」

微笑^{苦笑}みと共に差し出された手を、ラウラも笑って取る。

キャンプファイヤーに揺れる影の列に加わる。ダンスの作法は特に知らないが、鳴っている音楽もゆったりしたものでゆっくり揺れているだけで良さそうなのは幸いだっ

ゆつくりと、ゆつたりと、ステップを踏む。

手を腰に、視線はずっと交わったままで、雰囲気揺られて、ゆらり、ゆらり。時間が溶けていくようで。

世界には音楽があり、ナギトとラウラがいて——それだけで完結しているようにさえ感じられる。

ゆつくり、拙く、ステップを踏む。

たまに足を踏みそうになって、慌てて避けるとそれでバランスを崩したりして——、とても、楽しい時間。

音楽も佳境に入る。

ナギトとラウラはダンスを中断して、両手を重ねてただ見つめ合う。

「ラウラ」

今はその音の並びさえ愛おしい。

「なんだ、ナギト」

そう名前を呼ばれるだけで嬉しい。

この関係を、これからも続けていくために。2人で前に進んでいくために、言葉を紡ぐ。

「俺さ、お前のこと好きなんだ」

そこまで言うと、世界を沸騰させていた熱が一気に引いていく。まさしく熱に浮かされた気分だったが、冷水をかけられたようだ。

側から見ても告白真つ最中だよな、なんて思考が一瞬で思考を駆け抜けていく。

最後は「勢い」とか、「熱に浮かされて」とかじゃなくてちゃんと俺の心で言えつて事かよ女神様。ナギトはらしくなく女神の存在を肯定し――。

「ああ、それは昨日聞いたばかりだ」

ラウラはナギトの言葉を待っているようだった。しかして急かすわけでもなく、ナギ

トが昨日の誓い「俺の方から言わせて欲しい」という我儘を。

「だから——」

不意に、音楽が途切れた。

グラウンドから、後夜祭から去る者がいた。

オリヴァルト、アルフィンを始めとするそうそうたる顔ぶれが、揃って尋常ではない
雰囲気のまま去って行くのだ。

クレアも、オーラフ・クレイグも、カールやイリーナ、ヴィクターや、ルーファスで
すら例外ではなく、険しい表情を見せる。

いい所で邪魔されたナギトだったが、どうやらそんな場合ではない雰囲気を悟り、
VII

組メンバーで集合する。アンゼリカやジョルジュも一緒だ。

オリヴァルトを筆頭とする有名人が去ったその場から学院長ヴァンダイクが数名を引き連れて現れた。ヴァンダイクは短く学院祭の終了を宣言すると、信じられない事を口にした。

「先程、帝国政府より正式な通達がありました。帝国東部国境にある『ガレリア要塞』が壊滅……いや、原因不明の異変により『消滅』したそうです」

日常の崩壊の足音はすぐそこまで迫っていた。

☆★

ガレリア要塞と言えば、帝国東部国境を守る要塞だ。クロスベルを挟んだ隣国カルバード共和国を牽制するための列車砲がある事でも有名だ。

そのガレリア要塞はつい先日テロリストに狙われた事から警戒を強めていたはず

だが、そんな要塞が壊滅した。

「いや、消滅か……」

ヴァンダイクは確かにそう言っていた。「消滅」とは何なのか。いや、ナギトはそれを知っている。ガレリア要塞を消滅せしめた存在を。

「――神機アイオーン」

どうして知っているのかはわからない。しかしナギトはこの段に至って認めた。己に《剣鬼》以外の過去存在がある事を。

そして、神機アイオーンを含むクロスベルの問題は自らが関知しなくても良いと。

クロウと「おやすみ」と言い合って布団に潜る。

時刻が0：00を回ったその時、ナギトに思い出された記憶があった。

☆★

「なにを見たのかしら？」

柔らかい——妖艶な——甘い毒のような声音。太刀の柄に手をかけ、振り返る。

「はい、動かない」

周囲に魔剣が展開されている時点で——否、先手を取られた時点で負けていた。

記憶を見ていたナギトはそれほど無防備だっただろうか、こんなに容易く背後を取られてしまうとは。

制圧を諦めたナギトはゆるりとした動作で得物を手放すとそのまま両手を上げて白旗アピールだ。

「…お久しぶりですね、ヴィータ・クロチルダさん」

「あら、この格好なのにわかつちやうのね」

そこにいたのはヴィータ・クロチルダ。ただ、私服なのか変装なのか帝都歌劇場で見たドレスではなくパンツスタイルだ。美女は何を着せても似合うのだからずるい。

「そんな仰々しい杖を持つてたらそりやね。この剣も魔力やらで編んだ作り物——殺傷力高そうなのが冗談きついですけど」

ヴィータは蒼い石を核とする杖を装備していた。きつと彼女の得物なのだろう。ナギトは周囲に浮く魔剣をコツンと指で弾いた。その様子に今度はヴィータがくすりと笑んで、

「さすがの洞察力ね。まだ本調子じゃないというのが信じられないわね……ナギトくん」

「お褒めに預かりども」と軽く返事をしてヴィータの続く言葉を待つ。わざわざこんな場所に潜り込んで接触してくるくらいだ。何らかの用があるに違いない。

「さて、じゃあ本題だけど……少しだけ、君の手助けをしてあげようかと思ってるの」

「手助け…？」

「そう、手助け。なにやらエマに言い寄られて困ってるみたいじゃない？」

ヴィータの言い方にナギトは「はっ」と笑った。

「それは確かですがね。…内容が物騒なもんで」

昨夜、第七層を攻略中にエマから持ちかけられた話は、ナギトが《灰の騎神》の起動者になったらエマと協力する”というものだ。

そして昨夜は攻略後即解散だったため問い詰められる事はなかったものの、学院祭が終われば詰問される事は目に見えていた。なんせ出し物の打ち合わせをしている時からちよくちよく目が合うのだ。

「妹が苦勞をかけるみたいね。だからこれは姉としての尻拭い…：少なくとも1ヶ月、エマからナギトくん…：君に騎神について話が振られる事はないわ」

「ほう」とナギトは眉を上げる。ヴィータの言い草から察するに、きつとあれだ。

「お得意の暗示ってやつですか？」

「ええ、便利なものよ。もう先にエマに接触して暗示をかけてきたからこれは事後報告なのだけども」

「なんとまあ」ナギトは嘆息する。仕事が早いなんて所の話ではない。

「つーかエマにも暗示って効くんですね」

「あの子、まだ未熟者だから」

ヴィータの回答はシンプルなものだった。

“姉の捜索”なんて目的を掲げていたエマがちよっぴり可哀想に思うナギトだった。

「で、その代わりに俺に何をさせようってんです？」

そんな思考を切り捨ててナギトは真面目な己を取り戻す。

ヴィータはナギトに取引をしに来たはずなのだ。エマという面倒事を先延ばしにしてやったのだから、〇〇をどうしろ、というような指示が来るはずだ。相手は蛇の使徒、油断などはあつてはならず——

「何も求めないわ」

——だから本当に怪訝に思う。その答えに。

その態度を表情に出す事でヴィータから続きを引き出す。

「だってあなた……私の事が嫌いでしょう？」

ヴィータの言いたい事はわかった。ナギトはヴィータの事が嫌いだから、その言い分に従うわけがないと思っっているのだ。

「いや、そんな事はありませんが。むしろ美女なんて大好きです」

「嘘よ。だってあなたの目には温度がないんだもの」

「なに？」とヴィータの導いた答えに眉を顰めた。

「あなたにある好悪は上っ面……そうね、愛着はあつても愛情がないと言うべきかしら。
——この世界に対して」

それは——それは、決して聞き捨てならない言葉だった。

「ふざけるなっ！ 愛がないだと……俺が、俺たちが、どんな願いで——！！」

かん、とヴィータの杖が床を打った。その音でナギトの沸点を超えていたはずの感情は一気に落ち着く。

ナギトはどうしてあんな挑発でいきなり自分がキレてしまったのか検討もつかず、感

情の揺れ幅に驚くばかり。

ヴィータがもう一度杖で床を打ち鳴らすと、今度はナギトの周囲に展開してあつた魔劍が消え去る。

「とりあえず、私からはそれだけよナギトくん」

ヴィータは1ヶ月だけナギトから「エマからの詰問」という問題を取り上げただけ、それを伝えに来ただけだった。

「そうですか」とナギトは受け取り、ヴィータは踵を返そうとしたが、その足で振り返りナギトに言った。

「その様子で大丈夫?……今の出来事を今日の間だけ忘れる事もできるんだけど、する?」

エマへの暗示が何らかの意図によるものだとしたら、今回のこれは氣遣いだ。

ナギトはこれから学院祭のステージ。この心境のままでは十全なパフォーマンスなど望むべくもない。

「俺に暗示は効かないって話じゃありませんでしたか」

「本来ならね。でも本人の同意があれば別。こういう魔術は本人の同意の有無で効き目
がかなり変わってくるのよ」

しかしと考えたナギトの杞憂はヴィータの説明で氷解する。

「……お願いします」

こうしてナギトは翌日0時——今この時まで、この記憶を忘れる事になったのだっ
た。

未来への軌跡

七曜歴1204年10月30日

その一発の銃声が、帝国の運命を変えた。

その事を、俺は誰より知っているはずなのに。

忘れてしまっている。

覚えていなきやいけないのに、忘れてしまっている。

☆★

「クロウ、もう起きて準備しろよ」

学院へ出発する時刻になってもクロウはベッドから起き上がらない。ナギトは制服のボタンを留めてため息をつく。

「ん、どうせ今日は鉄血の演説つてんで自習だろ。そんな日くらいはゆっくりさせろつてんだ」

クロウはまだ枕に頭を埋めたままだ。ここまでだらしないクロウは久しぶりだ。

しかし鉄血——《鉄血宰相》の演説があるとは初耳だ。

「《鉄血宰相》はお嫌いかな？」

ナギトの言葉にクロウはパチッと目を開けると上半身を起こした。

「さあな。俺は貴族派でも革新派でもねえからな。お前はどなんだよ？」

「俺もお前と同じだよ」

ナギトとしては《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンに対して好悪の感情はない。// 好きの対義語は無関心”とはこの事だろうか。大した人物だとは思うが、それだけだ。ナギトの答えにクロウの目が細められる。まだ眠いのか。

「単位落としても知らんぞ」

そんな風に話を切り上げてナギトは寮の自室を出る。学院に着いたのはHRが始まる直前だった。

☆★

学院祭から数日——帝国はこれまでにない緊張感に包まれていた。

ガレリア要塞が巨大な球状にくり抜かれた報道写真は、あの列車砲の威容を知る国民たちを戦慄させるに充分過ぎるものだった。

噂に過ぎないがクロスベルに進行した機甲師団がその都度呆気なく撃退された、などという話もあった。また、これこそ眉唾が過ぎるといふものだが、クロスベルが帝国の宿敵であるカルバード共和国と組み、ガレリア要塞という防壁を失った帝国を侵略して

くるのでは、という噂もまことしやかに囁かれていた。

「あると思うか、ナギト？」

HRギリギリに教室に到着したナギトだったが、担任教官であるサラは未だ来ず、組メンバーは円になって話し込んでいた。

話題は現在の帝国を取り巻く情勢についてだ。

「いやあ、ないと思うけどなあ……」

ナギトからリインに問いかけられたのは帝国に蔓延している噂——カルバードとクロスベルが手を組んで帝国を侵略するという想像についてだ。

否定的なナギトの意見にユーススが「なぜだ」と問う。

「西ゼムリア通商会議でクロスベルが提唱したのは『独立』……カルバードの力を借りてちやほほ傀儡政権になるだろうよ」

また「ふむ」と考え込むⅦ組メンバー。そこは大前提なのだ。それでも人間、悪い想像はやめられないものだ。

と、そこでようやくサラが現れて、今日の授業が中止になる事を伝えた。

そして、今日の正午から帝都のドライケルス広場にてオズボーン宰相による声明が出される、という事も。クロウが言っていたのはこの事だと思い至る。

ひとまず、各教室でラジオを流す事になったので気になるようなら正午までに教室に来ておけ、とのこと。

クロウはまだ来ない。

暇になったⅦ組はそれぞれ別行動を取る事になった。ナギトはフェンシング部に顔を出す事にした。

「お、パトリックじゃん。おつかれ〜」

「む、ナギトか。珍しいな、最近顔を出してなかったのに」

「学院祭の準備とかあったし。一応フリーデル先輩には言っといたけど」

などと会話しながら部室に入る。部室ではフリーデルとロギンスが試合をしていた。フリーデルはロギンスを吹き飛ばすと、

「あら、来たのね2人とも。やる？」

「パトリックと約束してたんで！」

すぐに剣を合わせたがるフリーデルを前にナギトはパトリックと肩を組む。もちろんそんな約束はないが、パトリックもフリーデルの餌食になるのは嫌なようで、すぐに呼応した。

実は、8月中にナギトは一度フリーデルに勝利している。あの時は感覚を失う前で絶好調だったための勝利（それでも辛勝だったが）だ。

その月の特別実習で大怪我を負って、復帰後は絶不調。多少復調したが、それ以降は

ずっと敗北続きだ。『鬼気解放』を使えばあるいは——と思うが、部室でそんな殺傷力の高いモードを使うのもどうかと思うので自重しているナギトである。

パトリックとの試合が始まる。

先手を打ったパトリックの刺突をヘッドスリップで躲す。次撃の振り下ろしを半身になつて避け、反撃の横薙ぎ。

「くっ！」

パトリックは苦悶の声を漏らしつつもガード。攻撃から防御への転身がパトリックは上達していた。

「おっと、今ので決まると思ってたんだが」

「ふっ、君の想像通りに動くほど、このパトリック・ハイアームズは安っぽくないという事だ！」

強めた語尾と共に強撃を放つ。勢いに押されて後退したナギトにさらに追撃するパ

トリック。

「は、成長したのはお前だけじゃないぜ！」

迫る横一文字を力強くかち上げてパトリックの体勢を崩す。しかしこれだけでは攻撃↓防御の切り替えが上達したパトリックの致命的な隙にはならない。ナギトも剣を振り切った体勢だ、ゆえにそこから放てる蹴りでパトリックの腹部を打った。

「うぐ」と息を漏らし、たたらを踏むパトリック。そこに、

「疾風——！」

ナギトは脚力を爆発させて模造剣でパトリックの腹を痛烈に打ち据えた。ナギトの勝利である。

膝をついたパトリックだったが数秒後には立ち上がり、ナギトと向き合う。どうやら直前に闘気でガードしていたらしく、ダメージは少ないようだ。

「ふう、まだ君には勝てないか」

「でもまあなかなか上達したんちゃう？」

「……………今は」勝てないだけだ。だが、今に見ている。僕は君なんてあつという間に抜き去ってみせる！」

ナギトの賞賛とも言えぬフォローに、パトリックは調子を崩されつつも、さらなる飛躍を宣言した。

「ああうん、がんばってね」

「何でそんな他人事みたいに!？」

それを心地良く思いつつも顔には出さず、ナギトはあえてつれない態度を取る。それにパトリックがツッコミを入れて——、これがこの2人の距離感だった。

その後、まだ部屋に留まるらしい先輩方に挨拶をしてナギトとパトリックはフェンシ

ング部から退場した。

当て所もなく学院の敷地内を歩く。

「……………これから帝国はどうなるんだろうな」

四大名門の一角を占めるハイアームズ侯爵家の子息として思う所があるのか、パトリックはいやに深刻そうな顔で問いかけてきた。

「どうだろうなあ……………。帝国の武力はクロスベルやカルバードを圧倒しているとは思いますが、クロスベルにはガレリア要塞を消滅させた超常の兵器があるからな」

「ああ、もし戦争になったらこの学院はどうなると思う?」

「安全策をとって無期限の休学……………が濃厚だと思う。さすがに学徒動員するほど人手不足じゃあるまいしな」

それは当然の帰結だった。如何に帝都近郊とは言え、このトリスタの町に戦火が降り

注がないとも限らない。

ナギトの答えを受け取って「そうだな」とパトリックも同意する。しかし、その瞳には再び闘志が宿った。

「だが、僕は君との勝負は諦めないぞ。君が僕に負けたと言うその時まで、僕たちはライバルだ！」

やはりパトリックの決意はナギトにとって心地良い。こんな真っ直ぐな精神はとて
も好ましい。

だから、そんな気持ちは素直に伝えてやらない。

「うわああ、すごい理論持ち出してきたな。じゃあ俺たちは死ぬまでライバルだな」

「くっ、慢心は身を滅ぼすぞ」

「実体験かな？」

軽快に会話する2人。先程までの沈鬱な雰囲気は消え去っていた。くだらない言い争いに付き合えば敗色濃厚なパトリックは「口の減らないやつめ」と打ち切る。

「だがまあ、了解だ。お前が俺をライバルと呼んでくれる限り、俺もお前をライバルと呼ぼう」

そしてナギトはパトリックの言葉を受け入れた。ここでシリアスなのもやめ時だと定めたナギトはいつもの調子に戻る。

「つかー！名言キタねこれ。『ライバル』以外にも使える汎用性の高そうな名台詞ですよコイツあ」

「仲間、などと寒い事を言い出すのではないだろうな?」

「お前、時々俺に対して酷いよね」

どうやらパトリックもナギトの扱いを熟知してきたらしい。

やがて校門まで来た2人はそこで別れる事にした。パトリックは正午の演説まで寮で休むつもりらしい。

ナギトも読みかけの本を寮で読む事にして、第三学生寮の自室に戻る。さすがにもうクロウの姿もなく出発したのだと思われる。ナギトはベッドで寝転がりながら“カーネリア”を読み始めた。

☆★

ナギトが“カーネリア”を全巻読み終えた頃にはすでに時刻は11:30を回っていた。適当に支度して学院の教室に向かうと、同じようにⅦ組のメンバーは揃いつつあった。

クロウはまだ来ない。

正午になり、ラジオの音が現場アナウンサーに変わると告げる。教室ではラジオを中心に円になっており、ただならぬ緊張感に息を呑む者もいた。

「はい、こちら帝都ヘイムダル。ドライケルス広場のミスティです」

「——あ？」

ラジオから聞こえたアナウンサーの声に、聞き覚えがある。つい先日、生で聞いた声だ。

しかし、ナギトとは違う意味で反応するのが数名。

「おおつ、ミスティさんか」

「ああ、アーベントタイムの」

「うーん、相変わらず良い声だねえ」

マキアス、アリサ、エリオット。どうやらアナウンサーのミスティとやはら「アーベントタイム」というラジオ番組の出演者らしく、クラスメイトの間でも何度か話されて

いた内容だったらしい。

しかしそれにナギト以上に驚愕を示したのはエマ。

エマは慌てて、この声の主を知っているのかと皆に問い質した。マキアスは、アーベントタイムというラジオ番組のパーソナリティを務めている人だと言い、エリオットは、その容姿とたまにトリスタで見かける事を説明した。

「は、ははは………やられたなエマ。俺もお前も…馬鹿にされてんぜ、こりやあよ」

レグラムでグリアノス越しに会話した時も、学院祭2日目旧校舎で会った時も、世俗からは隔絶した雰囲気だったから。

「お前らも、ファンと名乗ってながら気づかないか、マキアスにエリオットよ。お前らは帝都の特別実習でもこのミスティさんに会ってるぜ」

「なに、それは——」

「え、どういうこと？」

マキアスとエリオットに言いつつもナギトの胸中は「やられた」の四文字だけだ。

「ヴィータ・クロチルダ——帝都が誇る《蒼の歌姫》様だよ」

「ええ!?!」と驚愕するマキアスとエリオットに、「知ってたのか!?!」と別ベクトルで驚くリイン。そんなリインにファンたる2人が詰め寄るが、リインは「演説が始まるから」と宥める。

「ああ、ミステイって響きが似てると思ったけどミルステインから取ってんのかな」

そこにナギトが更なる爆弾をぶっこんだが、ファンたちは宰相の演説と比較して後者を選んでようでラジオに聞き入る体勢をとった。

「帝都市民、並びに帝国の全国民の皆さん——ご機嫌よう。エレボニア帝国政府代表、ギリアス・オズボーンである」

ゴクリと、無意識のうちに喉を鳴らす。

警戒しろ、と本能が訴えかけてくる。

この男に飲まれるな、と。

「——諸君も、ここ数日の信じがたい凶報はご存知かと思う。れつきとした帝国の属州であるクロスベルが『独立』などという愚にも付かない宣言を行い……あろうことが帝国が預けていた資産を凍結したのである！ 当然——我々はそれを正すために行動した。それは侵略ではない。『宗主国』としての権利であり義務ですらあるといえよう。

——しかし『彼ら』は余りに信じがたい暴挙に出た！ 《ガレリア要塞》——帝国の誇る鉄壁の守りを、謎の大量破壊兵器をもって攻撃……これを『消滅』せしめたのである！」

ラジオ越しですら迫力は満点だ。間の取り方も完璧だ。これが国家の頂点に立つ為政者の持つべきカリスマだと思ひ知らされる。

もしナギトも帝都で生でオズボーンの演説を聞けば他の聴衆と同じ反応をしていたかもしれない、そう思わせるだけのものがあつた。

「諸君——果たしてそのような『悪意』を許していいのか!? 偉大なる帝国の誇りと栄光を、傷付けさせたままでいいのか!？」

そしてその内容も、誇り高き帝国国民の心を揺さぶって余りある。

「否——断じて否! 鉄と血を贖つてでも正義は執行されなくてはならない!」

わあああ! とラジオから聴衆の声が聞こえてきた。

オズボーンを《鉄血宰相》と言わしめる決意と覚悟が示された事でより一層盛り上がっている。本拠地である帝都とは言え、民衆の支持は熱狂的過ぎた。

しかし、この教室ではそんな支持を得られようはずもなく。

ユーシスは「やはり、予想通りの方向に持っていくつもりのようなだな」と言い——、そこでARCSUを手にとこかに通信しようとしていたミリアムに、サラ教官がつつこむ。

ミリアムは「やっぱ繋がらないや」と言つてARCSUをしまう。何の話かと聞くと。

「ボクが引き受けてた一番重要だった任務のお話」

「だった」——それは過去形。しかし、それを今、通信でどこかに伝えようとした事は——

「ん、もうちよつと早く気付けばなあ。

でもまあ、クレアもレクターも、オジサンの読みすら上回ってたし」

「クレア」——クレア・リーヴェルト。

鉄道憲兵隊の大尉にして《氷の乙女》の異名をとる導力演算機並みの処理能力を持つ女。

「レクター」——レクター・アランドール。

情報局特務大尉であり、事交渉なら負け知らずの《かかし男》。ノルドで勃発しかけた帝国と共和国の戦争はこの男によって回避されたと言える。

そして「オジサン」——ミリアムがそう呼ぶのは、たった一人。ギリアス・オズボー

ンのみ。

クレア・リーヴェルト

レクター・アランドール

ギリアス・オズボーン

この3人を出し抜ける人物が、いたのだ。

それは――

「――今回ばかりはクロウの勝ちでも仕方ないよね」

――あ。

帝都地下、ガレリア要塞、ザクセン鉄鉱山、1番重要[〃]だった[〃]任務、同時期の編入、
『運命を変える』の声――

《C》
— C R O W
クロウ

カチリ、何かが嵌まる音がした。

もう、クロウは来ない。

「そういうことね。ミリアム、あんたの目的の1つは《C》の調査だったってわけね」
ミリアムの言葉で理解したサラが、それをVII組のメンバーに伝えていく。
ナギトにとっては、その声が遠い。

クロウ。クロウ・アームブラスト。《C》。

そうだ、あいつが《C》だったんだ。《帝国解放戦線》のリーダー。幾度もⅦ組と対峙し、死んだはずの男。

その全てが、きつとここに至るための布石だった。今日この日——ギリアス・オズボーンを暗殺するための。

ナギトは、気づかなきやいけなかった。誰より近くクロウのそばにいたのに。誰より長くクロウと一緒にいたのに。何より強くクロウを救わねばと願っていたのに。

「これは、紛う事なき『国難』である！」

そんなナギトを現実に戻したのはラジオから聞こえるオズボーンの声だった。

「そして『国難』を前にあらゆる対立は乗り越えられるべきものであろう。『革新派』に『貴族派』——俗に言われるそのような名前のなんと空々しい事か！ 既に皇帝陛下からも心強いお言葉を頂いている——。このギリアス・オズボーン、帝国政府代表として、

陛下の許しを頂き、今ここに宣言させていただきます」

やはり、この演説による目的はクロスベル独立という『国難』を乗り越えるために、という名目のもとで正規軍と領邦軍を合併し貴族派の勢力を削ぐ事。

「正規軍、領邦軍を問わず帝国内すべての『力』を結集し……クロスベルの悪を正し、東からの脅威に備えんことを——」

——「言わせるかよ」——

そう、聞こえた気がした。

次いで、銃声。

オズボーンの眩くような声が漏れて、倒れる音が聞こえた。

ギリアス・オズボーンは撃たれたのだ、《C》^{クロウ}に。

観衆の騒ぐ声だけがラジオから聞こえたかと思うと——、ミステイの慌てながらも状

況を伝えようとする意思が見られて——

途端に、ミステイの声に変貌する。

帝都のホテルで会った時の声に。グリアノス越しに会話した時の声に。旧校舎で話した時の声に。ヴィータ・クロチルダの声に。

「——と言つても音だけだと、ロクにわからないでしょうね。なら、士官学院の皆さんには学院祭で愉しませてくれた『お礼』をしちやおうかしら？」

鳥肌がたつた。このラジオ越しにでも伝わるような、肌が粟立つような感覚は、まさしく『魔女』に対して感じるそれだ。

「響け 響け とこしえに——」

それは、まさしく響いていた。《蒼の歌姫》と呼ばれるに値する美声。学院祭で歌ったナギトとはそれこそ次元が違う。

「夜のしじまを破り—— すべてのを 美しき世界へ——」

ラジオの上、黒板に映写されるようにして、その窓は開いた。エマが絶叫する。

「《蒼の深淵》の秘術——『ファンタズマゴリア幻想の唄』！」

それは、その術の名だ。しかし、そんな事を気にしている場面ではなかった。なにせ、その映像はこれまでにない急展開を描いていたのだから。

銀色の飛行艦から降下した機械仕掛けの騎士——《機甲兵》とも呼ばれる有人人型の兵器によって、あのアハツエンを擁する機甲師団が為す術もなく破れていく様を。帝都
が占領される瞬間を。

仮面を割られた《C》の正体がクロウである事を。

そのクロウがクレア大尉に銃を突きつけられた状態で蒼い騎士人形に乗って帝都から去る様子を。

それはまさしく、このエレボニア帝国で内戦が勃発した事を如実に示す現実だった。

唐突に唄は止み、同時に映像も終わる。

サラはナイトハルトからの通信に応え、Ⅶ組の面々に「絶対に学院から出るな」と釘を刺した上で正門へ——おそらくは帝都近郊であるこのトリスタを陥しに来るであろう『貴族派』——《機甲兵》の対処へ向かった。

確かに帝都を押さえたのなら、その近郊も押さえるのは戦略として定石だ。加えてこのトリスタにはトールズ士官学院があり、そこには各方面の重要人物の子息が在籍している。彼らの身柄を押さえれば事を有利に運べるのだから、ある意味でトリスタは帝国で内戦を起こす上で重要な拠点とも言えた。

サラたちの背中を見送った後、しばらくしてリインが新たに声を上げた。

「俺たちの力がどこまで通用するか判らないが——みんな、せめて助太刀くらいさせてもらわないか……!」

それには皆が賛成の意を示す。

しかしナギトだけは苦渋の表情だった。どうすればいいかわからない。

ここから先、絶望が待ち受けている確信があるから。例え再会できるとしても、それは各人の心に深い傷を残すだろうから。

しかしナギトは同時に同室だったクロウの正体に気づけなかった己の無能にも嫌気が差しており、皆と迎合する答えを出した。

「無茶だ無謀だ——と言った所でお前らは止まらないんだろうな。だから、俺も行く。つっても、教官たちからしたら足手まといになるだけだろうし………クロウの——《C》の性格からして、東にも兵を伏せてるだろうし、俺たちはそいつらを叩こう」

「ナギト……ああ、行こう！」

学院正門で、Ⅶ組を制止するトワとジョルジュをなんとか説得してトリスタの町に出る。
トリスタの西口が見える位置まで来て、教官たちと《機甲兵》の戦いを見て、絶句した。

その場にいたのはサラ、ナイトハルト、トマス、マカロフ、ベアトリクス、ヴァンダイクの6人だ。

一分隊にさえ達せぬ人数にしかし、西門は守られている。すでに装甲車数台が中破な

いしは小破させられていた。

伝説の元軍人2名に、最年少A級遊撃士、第四機甲師団の若きエースに高位アーツを連発する中年2人が相手ではさもありなん。

事実、敵領邦軍兵士は「もう無理です！」なんて言い出す始末だ。

だが、そこにあの帝都を占領した《機甲兵》がやってくる。

その数5機……されどその装甲は厚く対アーツ防御も兼ね備えている。

しかし、それでも教官たちは怯まずに《機甲兵》に向かっていく。

が、さすがに分が悪い。相手に余力があるのに対して教官たちには決め手がない。

そこで満を持して現れたのは我らが第三学生寮の管理人にしてスーパーマイド、シャロン・クルーガーだった。

「ここは私にお任せを。サラ様たちの突破口、必ずや開いて見せましょう」

教官らに助太刀しようとしていたVII組に恭しく礼をすると、その頭上を易々と飛び越えて行く。

シャロンは舞うように戦場を飛び跳ねると、鋼糸で《機甲兵》を縛りあげた。

おそらくこれで西側の戦力差は拮抗した。ならば次は東口だ。周到な《C》の事だから東側にも兵を伏せているはず。しかし伏兵は兵を伏せてなければ意味がないため、おそらく数はあまりいないとナギトは踏んでいた。

ガイウスとファイが東口から気配を感じたようで、VII組総員で急行した。

トリスタ東口に接近してきている機甲兵は2機。

内一機はスカーレットが駆る隊長機シユピーゲルだ。

「あらあら、まさか《剣鬼》まで出張つて来るなんて。2機がかりじゃ大人気ないと言ってる場合じゃないかしら」

トリスタ東口に陣取るVII組を前にスカーレットはそう言い放つ。どうやら生身の人間が相手だからと言って手加減するつもりはないらしい。

「先頭の機甲兵は任せる。俺は《S》の方を相手にするが……まあ、早くやってくれたらうれしいかなー、なんて」

いつものように冗談めかして言うナギトに厳しい視線が集まるが、きつとⅦ組全員がそれを最善手と信じた。

「わかった。——状況開始。Ⅶ組、全戦力を持ってトリスタ東口の防衛を開始する！」

ラインの号令にみんなが「応」と答えるのを背中で聞きながら、ナギトはスカーレットの機甲兵の前に立った。

「さあ、踊ろうぜ《S》……存分に！」

「せいぜい愉しませてちょうだい！」

最新の騎士を前にナギトは吼えた。

「——鬼気解放！」

溢れ出す闘気はしかし、機甲兵の前には頼りない規模。だからこそ己を鼓舞する。心はホツトに、頭はクールに。

振り下ろされた巨剣——機甲兵用のブレードをステップで避け、闘気を太刀に集約する。瞬間二撃。

「緋空十字斬！」

十字を象る斬撃はブレードを振るった機甲兵の手首にヒットしたが、その剣を取りこぼす事すらなかった。

「ちいっ！」

次なるブレードの横撃を避けながら舌打ち。ブレードに着地して機甲兵の腕を駆け上がった。狙うは機甲兵の顔面部——おそらくそこに何らかのセンサーがあるとナギトは踏んでいた。

「龍炎撃！」

それは強かに機甲兵の顔を打ち据える。

しかし。

「鬱陶しいわね！」

スカレットの駆るシュピーゲルには何の痛痒もないようだった。乱雑にナギトを振り払ったスカレットは「悪いわね」と言った。

「リアクティブアーマー」——操縦者の意思で展開できる防御結界のようなものね。一定以下の攻撃を完全に無効化するわ」

「はっ、チートかよ」

どうやら並の攻撃では機甲兵シュピーゲルを傷つける事すらできないらしい。さすがに完全無効化は話を盛ったはずだが、確かに防御力が見た目以上に高いのは理解できた。

ならば、より攻撃力の高い攻撃をすれば良い。スカーレットがその隙を見逃すとは思えないが、リンたちがもう一機の機甲兵ドラッケン（こちらにはリアクティブアーマーはなさそうだ）を倒してこちらに合流するまでに、シュピーゲルのアーマーが如何程か探っておく必要性があると感じたナギト。

「つたく、ハードモードだな」

愚痴るようにして、太刀にいつも以上に鬨気を押し込みつつ守勢に回る事を決意した。

シュピーゲルのブレードを避ける、躲す。必要最小限の動きで、それを続ける。

幸いにして機甲兵の動きは人のそれと比べて鈍重だ。きちんと初期動作を見ていれば避ける事は難しくなかった。気をつけねばならないのは、それと並行して太刀に鬨気を注ぎ続ける作業を行なっている事だ。

こちらは風船に空気を入れ続けるようなもので、いつ破裂するかわからない。よもやゼムリアストーン製の武器が壊れるとは思わないが、ナギトの太刀に鬨気を押し込む速度と太刀の鬨気を抑え込む技術の釣り合いが取れなくなつた途端、鬨気そのものが質量

となつてあらぬ方向に放たれる事になるだろう。

それが敵に向かえば良いのだが、味方に向かえば即死の可能性もあつた。故に一分の隙も油断もなく、作業に臨む。

「じれつたい——」

シユピーゲルが振り上げたブレードに闘気が纏われた。どうやら攻撃を避け続けられた事で業を煮やしたスカーレットは戦場そのものを薙ぎ払う暴挙に出た。

「——わねっ!」

シユピーゲル渾身の袈裟斬り。しかしそれはナギトにとって隙でしかなかった。

跳躍してそれを躲したナギトは空中で太刀を構えた。

「限定集束」

溢れ出す闘気。それは強さの証明になる。身体に収まらぬほど強大な闘気。可視化するほど濃密なそれ。

すべて、くだらない。

溢れたそれは。漏れ出たそれは。ただの闘気のロスだ。

——そんな思想を基に生み出された絶招。

未だ実戦で使えるほどの練度ではなく、しかしそれでしか勝機を見出せぬ相手。

「——真気統一」

ただ《剣鬼》当時の剣圧を上乗せするだけの“緋剣”ではない。《剣鬼》当時の闘気をたった一刀に込める破滅的な術技。

「破甲剣——！」

それが、振り下ろされる。

シユピーゲルは左手の盾で、ナギトの攻撃を受け止め——られない。バターを熱した

ナイフで切るように、盾は切り裂かれる。盾を構えていた左手を肘まで切り裂いて、ナギトは着地した。

「は、……はあつ、くつ」

とんでもない消耗だった。叶うならすぐにでも倒れ込みたい。そんな衝動を抑えてシユピーゲルを見上げる。

左腕を半壊させただけとは言え、リアクティブアーマーを突破されたショックがあつてスカーレットはほんの少しフリーズする——ナギトのそんな見立てを、

「——甘いわッ!」

粉碎する《帝国解放戦線》幹部の意地。振られたブレードをナギトはまともに受けた。辛うじてガードはできたが、突き抜けた衝撃は全身の骨を砕かれたかのようなイメージを与える。

「かつ」

吹き飛ばされたナギトは派手に吹き飛び、背中を強かに岩にぶつけてしまう。肺から酸素を吐き出して、意識が遠のくのを感じた。

視界の端でラインたちが機甲兵を下したのを見て、若干の安堵を覚えながら――

☆★

意識の覚醒と同時に目に飛び込んできたのは、スカーレットの操るシユピーゲルに敗北したクラスメイトの姿だった。

立ち上がったラインは胸に手を当て、その奥底に眠る鬼の力を解放させようとしていた。

違う。

「ち、が……」

そうじゃない。

「そうじゃ、ない……い！」

掠れる声を、咳き込む喉を酷使して伝える。

「そうじゃないリイン！ 彼を、呼べえっ！！」

彼を。この状況を覆せる灰の騎神を。

——VALIMARを。

その言葉が届いたか否か——刹那の時間、リインの動きが止まる。

眩くように。囁くように。

「来い——」

手を挙げて、その名を叫ぶ。

「《灰の騎神》ヴァリマール！」

それは、VII組が旧校舎の第7層で発見した騎士人形の事だ。あの『最後の試し』を乗り越えた先に得た、巨いなるチカラ。

ヴァリマールは空を飛んでやって来てリインの前に着地した。

スカレットはその登場に驚いている。まだ動かせないはずではなかったのか、と。

光に包まれたリインはいつの間にか来ていたセリーヌと共にヴァリマールに乗り込み——

八葉一刀流 八の型をもって《S》の操る隊長機シュピーゲルを倒したのだった。

これで東口の防衛は成功——かと思いきや、そうではなかった。後詰めが、それも最強の、最悪の後詰めが来てしまったのだ。

——運命を変えろ——

それはヴィータ・クロチルダの幻想の唄で見た、蒼い機体。《機甲兵》とは似て非なるもの。

それは、それは、それは——

「来い——《蒼の騎神》オルディーネ！」

「まさか生身の人間相手に“奥の手”を使う事になるとはな」

「あばよ、《劍鬼》」

——それは、《蒼の騎神》。

ユミルの地にて、《劍鬼》を倒したクロウの騎神だ。

ナギトは思い出した。自らが記憶を失った直前の出来事を。

ナギトは何らかの理由でユミルに向かう道中に《帝国解放戦線》の幹部たちと刃を交えた。

《G》《V》《S》《C》——その4人を相手にして一步も劣らぬ——否。圧倒する力を見せつけた《劍鬼》に対して《C》がとった手は《蒼の騎神》の使用だった。

呼び出した《蒼の騎神》に乗り込んだクロウだが《劍鬼》の力はそれすらも凌駕し——
——《蒼の騎神》の奥の手をクロウは発動させた。

さすがの《劍鬼》も奥の手を出した《蒼の騎神》には勝てず、追い詰められた崖から転落するに至ったのだ。

その崖からの転落で奇跡的に助かりながらも、記憶を失って生まれたのが「ナギト・シユバルツァー」だった。

リインの乗る《灰の騎神》とクロウの操る《蒼の騎神》が対峙する。

リインの叫びはクロウには届かない。

学院生クロウ・アームブラストはただのフェイクだと。学院で築いた思い出のすべてが、偽物だと。嘘だと。そう宣言した。

偶然か必然か。リインとクロウ。

この2人は対峙する運命だった。

VII組の残された皆は2騎の騎神が刃を交えるのを黙って見ているしかなかった。

軍配は、クロウにあがった。

ヴァリマールがオルディーネを破ったかと思いきや、クロウが奥の手を出し、一振り

でヴァリマールを戦闘不能に陥れたのだ。

倒れこんだヴァリマールの前に、VII組は立つ。たった今ヴァリマールを倒したオルディーネから庇うように。

無論、このオルディーネに今の自分達が勝てる可能性がない事は承知の上で、VII組はヴァリマールを——リインを守る。

リインとヴァリマールは、これから混沌の国と化すだろうエレボニア帝国にとり、必要不可欠な存在だ。だから、守らなければならない。

た、た、そう……ほんの少しだけ、弟のように思うリインだからこそ守りたいと思う意思がない事もない。いつもは「お兄ちゃん、お兄様」と茶化すが、たぶん実年齢はナギトの方が上だろうし、弟みたいに思ってた節はあった。

ナギトは倒れ伏したヴァリマールの核に向かって話しかける。

「リイン……強くなったよ、お前は。ツールズに入学してから、VII組の皆さんと出会ってから、力だけじゃなく、精神的な意味でも。だからもう、俺のお守りは必要ないよな」

「ナギト……まさか!？」

「はっ、一応言うが死ぬつもりはねえぞ。まあ、お前のお守りをする必要がないなら俺は俺の好きなように動くさ」

“運命を変えろ”——その声の意味も、なんとなく理解できた事だ。

「だから。だからリイン——俺のその信頼を裏切るなよ?」

それは、例えナギトという存在がなくなっても強く生きろという意味だ。

死ぬつもりはさらさらないが、死ぬ可能性はある。クロウがオルディーネで、本気で向かってくれば死ぬだろうと思うくらいにはまだ現実を見れている。

「行けっ!」

ナギトが叫ぶと、ヴァリマールは立ち上がり、空を駆けるようにしてこの場を離脱していく。

「やめろ、やめてくれええええッ！」

離脱する直前、リインの悲痛な叫びが聞こえて来た。それでもⅦ組メンバーは振り返らずにオルディーネに——クロウに武器を向ける。

「さて、離脱した兄リインに代わり、いつものをやらせてもらいたいのだが、いいだろうか？」

「フン、さっさとやれ」

「ええ、景気いいのをー発頼むわ」

ユーシスとアリサの同意は得られた。

他のクラスメイトたちも同じ気持ちのようだ。

「トールズ士官学院、Ⅶ組総員——

——希望を未来に繋げ！

——絶対に死ぬな!!」

かくして戦闘は開始された。

☆★

どれだけ意気込んでも現実には厳しいもので、オルディーネを前にⅦ組の力は通用しなかった。

しかし、そんなピンチは唐突に終わりを迎えた。『紅い翼』——カレイジャスがやってきて囷を買って出たのだ。

木端士官学生とカレイジャスを駆る皇子オリヴァルト、《光の剣匠》ヴィクター、どちらの優先順位が上かなんて明白である——

——そんなクロウの意思が感じられて、散り散りに逃げるメンバーとは別に、ナギトは“紅い翼”を追うクロウを追った。

「チツ、逃げられちゃったか」

そう漏らしたのはオルディーネに乗るクロウだ。

“紅い翼”が視界から消え去ったのを確認してそう呟いた。

「逃した、の間違いだろ」

木陰から身を出しつつナギトは言う。

「……ナギトか。どうして追って来た」

呆れと警戒が混ざったような声。騎神の装甲に遮られて見えないが、その眼光はいつかナギトを見ていた鋭いものになっているだろう。

あの鋭い視線はナギトが《剣鬼》の記憶を本当に失っているかどうか、見極めるためのものだったと今更ながら理解する。

「まだ、余地があるんじゃないかと思ってな」

「説得の余地なら、とうにねーぞ」

クロウは聞く耳を持たない構えだった。今はそれすら痛々しく思えた。

「まあ聞けよ。お前は士官学院で築いてきた思い出のすべてが嘘だと言ったな？」

「ああ。何度も言うようだがクロウ・アームブラストはただのフェイクだったってわけだ」

思わず「は」と息が出た。

「嘘だな。……クロウ、お前が学院で過ごしてきた時間は本物だ。例えお前の本分が

《C》でも、クロウ・アームブラストとして過ごしてきた時間は嘘じゃない」

そんな当たり前の事を言う。失った記憶が戻ったとしてもナギト・シユバルツァーとして過ごした時間は偽りじゃないと教えてもらったから。

「お前がそれを認めて、それでも割り切って俺たちと相對するのなら、もうお前は敵でしかなかっただろう。だが、お前は思い出が嘘だと言った。それは、お前はあの思い出が本物だと認めてしまったら《C》ではなく俺たちの友人であるクロウになってしまいうからだ」

だからそんな当然の真実を、ナギトはクロウに伝える。

そうして、間があつた。

永遠とも思える間が。それはナギトの思いを正しくクロウが受け取るための時間のように思えた。

「——だったら、なんだったんだ」

クロウはそう言った。

おそらくは自分でもわかっていたであろう事を他人から指摘されて、まだ否定したいけど実はもう肯定してしまっているような……そんな矛盾したような感情が表出していた。

「大人しく戻って来い……ってのは無理だよな」

「ああ、当然だな。あれだけの事をやらかしたんだ。そう簡単に戻れるわけがねえ。それをリインの野郎……後輩になれだの言う事聞けだの……」

それはナギトも理解している事だ。あのギリアス・オズボーンを暗殺したのだ。それだけの大罪を犯してただの学院生に戻れるわけがない。

「だったら贅沢は言わねえよ」

だったら、クロウを仲間に戻すのではなく、逆に、クロウの仲間になればいいのだ。

「どうだクロウ——俺をスカウトしてみないか」

運命を変える。そのために。

断章

トールズ士官学院

「俺をスカウトしてみないか？」

ナギト・シュバルツァーがそう言うってから、3日という時間が経過した。時間にしてわずか72時間。

その短い間に貴族派——貴族連合はエレボニア帝国の約6割を統治下に置いた。

貴族連合の前に未だ膝を屈さぬ者共もない事はないが、このままでは帝国は貴族派の手に落ちるのは時間の問題かと思えた。

貴族派と敵対する革新派——そのリーダーである《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンは演説中に狙撃され胸に風穴が開き、その盟友である帝都知事カール・レーグニッツは皇族と共にカレル離宮へと軟禁された。

このまま内乱は貴族派の勝利で終わるのか——と、言われたらそうでもない。

《放蕩皇子》オリヴァルト・ライゼ・アルノール

《光の剣匠》ヴィクター・S・アルゼイド

この帝国において未だ貴族派に“保護”されていない皇族と、最強の剣士と謳われる達人の操る《紅き翼》カレイジャスが残っているのだ。

それだけではなく、オリヴァルト皇子と同じく未だ貴族派に“保護”されていない皇族として皇位継承権第2位の皇女アルフィン・ライゼ・アルノールもいる。

動きの取れない革新派や機甲師団に代わり、それらが『第三の風』としてどう動くかが、今後の帝国の運命を左右すると言っても過言ではない。

そして、ほんの僅かな希望ではあるが。

これまで特別実習と称して帝国各地を回り、現地の人と交流をしながらも着実に力をつけていった若者たちにも、戦乱に怯える者たちから静かな期待が寄せられていた。

貴族連合からすれば、カレイジャスや未だ保護できていない皇族と比べれば、優先順位は限りなく低い。しかし警戒には値する。

その者らは、トールズ士官学院一年VII組に所属する学生たちだった。

☆★

貴族派による帝都占領の電撃作戦——それは帝都近郊都市であるトリスタにも及んだ。

トリスタはかのドライケルス大帝の創設したとされるトールズ士官学院のある街として有名である。

その士官学院は何人もの有名な人物を輩出しており、教師陣にも名の売れた者が多かった。

例えば、ヴァンダイク。

正規軍の名誉元帥という肩書を持つ身長2アージュ以上ある古強者。

例えば、ベアトリクス。

《^{リヴァイパー}死人返し》の異名を持つスナイパーライフルの使い手。

例えば、ナイトハルト。

帝国最強と囃される第四機甲師団の若きエースにして《剛撃》の異名を持ち、《放蕩皇子》の付き人たるミュラー・ヴァンダールと双璧とされる武人。

例えば、サラ・バレストアイン。

元最年少A級遊撃士にして、《^{エカレル}紫電》の異名を大陸に轟かせる若き女教官。

その他にも、とある組織の第二位を拝命する男がいるのだ——それは割愛しよう。

それらの武人たちとかつて《死線》を名乗った女性が帝都を占領した《機甲兵》を迎え撃つも、東口を守るⅦ組が崩れた事でトリスタは貴族派に占領される事となった。

それから時は3日経ち、その間に士官学院の関係者の大半はトリスタから逃走し、貴族連合を打倒するため各地で息を潜めている。

トールズ士官学院には貴族生徒も多く存在する。

そのため、平民生徒の大半がトリスタから逃走した今、トールズを統治下に置くのは貴族連合にとり容易いかと思われたが、他にもない貴族生徒——それも四大名門の子息パトリック・T・ハイアームズを始めとする者たちに大きく反対の意を示されていた。

ヴァンダイクやベアトリクスと言った重鎮クラスの者は軟禁しているとは言え、このままトールズの学院生たちを放置しておくのはまずい。

何とか学院生たちを指揮下に置き、あわよくば貴族連合の兵としてトールズ士官学院の管理を任せたい。

そう思ったのは貴族連合のトップの1人であるカイエン公爵。

帝国における最高の爵位「公爵」家の当主であり、同じく公爵であるヘルムート・アルバレアを抑えて貴族連合の総主権となった人物である。

カイエン公はその任を士官学院生にして唯一、貴族連合に与している人物に任せる事にした。

ナギト・シユバルツァー

トールズ士官学院一年VII組に所属する、記憶を失う以前は《剣鬼》の二つ名を持った、貴族連合においても有数の実力を持つ達人。

ナギトは静かに、しかし確かに学院の敷地へと足を踏み入れた。

実に3日ぶりの帰還だが、学院に蔓延る雰囲気は3日前とは隔絶したものだ。

「はは、クロウじゃないが随分と遠くに来ちまった感じはする」

彼のそれはもちろん独り言ではなく、隣を歩く兵士へ向かってのものである。

「学院生に同情などをしても裏切るな。俺はそのための監視だ。わかってるな？」

それは《帝国解放戦線》の幹部だ。

《R》の隠し名で幾度かVII組と対峙し、《剣鬼》と偽った事でナギトの心を大きく掻き乱した存在。名をリヴァル。

「わかってますよ。同情するなど言わない分だけマシなのか酷なのか……」

「俺にはお前の心を縛る術はないからな」

リヴァルの返答にナギトはため息を吐く。生真面目なのか、あるいはツツコミ待ちか。おそらく前者だろうと思いつつ、目の前に立っていた学院生に「よう」と声をかけた。

それで、ようやく固まっていたその人物は動き出した。学院を守る意思を見せつつも、眼前の光景が理解できていなかった。それは戦闘においては致命的。しかしナギトは武器を向ける事はしなかった。

それは偏に貴族連合の使者として来た身で、問答無用で貴族生徒を傷つけるわけにはいかなかったからである。

「ナ…ナギト・シユバルツァー…どうして、君がそこに…？」

腰に騎士剣を提げ金髪を中央でわけて、整った顔つきに冷や汗を——嘘だと言つてくれと表情で表しながら、言った。

それにナギトは乾いた笑いをこぼしながら返事をする。

「は。わかりきつてる答えを聞くのは、あんまりお前らしくないんじゃないか、パトリック？」

カイエン公がナギトにこの任を与えた理由はいくつかある。

まず一つは信用のため。

《剣鬼》であった彼を“不確定要素”と断じて《帝国解放戦線》に始末するよう依頼したのはカイエン公であった。

すでにその事実は露見し、それでも「気にしてない」と口ではそう言うナギトを信用するためのものだ。

それでは何故、この任務でナギトを信用する事ができるようになるのか、という点。

それはナギトの居場所であったトールズ士官学院を、彼自らの手で貴族連合の元に帰順させるからである。

彼自らの手で居場所を、敵として見ている貴族連合に売り渡す行為はまさに裏切りであり、居場所を失わせる事で、帰る場所を取り除こうとする打算だ。

しかしカイエン公の誤算は、たった3日前にナギトとパトリックが交わした言葉にあった。

「……嘘、ではなさそうだな。では、君は貴族連合の手の者としてここを陥落させに来たのか」

「まさしくその通り。あえて反論するなら、陥落とは人聞きの悪い。話し合いで解決できそうな問題を、お前たちが拗らせてるから俺が出張るハメになったんだよ」

「フン、悪いが貴族連合に与する気はない。貴族の誇りを蔑ろにするようなやり方に僕は、僕たちは賛同できない」

「そう言うだろうって思ったからさ、お前たちが貴族連合の元でツールズを管理できるだけの名分は考えて来た」

“名分”——その言葉に青筋を立てるパトリック。ナギトの——貴族連合の言い分

はつまり、ハリボテの反逆などせずとも、君たちが我らの側に立つだけの理由を用意してある」という事だ。

「今のこの情勢において各地は混乱の極みにあり、このトリスタの地も例外ではなく、いつ暴徒が襲つて来るかわからない状況である。

しからば貴族連合はそれに対応すべく学院に兵を置きたいのだが、何せまだ機甲師団などの襲撃にも気をつけねばならず、いざと言う時に動けない可能性もなきにしもあらず。

なれば士官学院の生徒による、卓越した技量にてトールズ、ひいてはトリスタを守る騎士団として動いてもらいたい」

眼前で冷や汗を垂らす少年を値踏みするように「どうか？」と問うナギト。

その様子は紛れもなく貴族連合の一員であり、隣のリヴァルもその身の翻しように舌を巻く思いだった。

それに対して、パトリックは憤慨する。

「ふざけるのもいい加減にしたまえ！僕らが貴族連合に与する大義名分に尻尾を振ってついて来るとでも思っていたのか!？」

ナギト・シユバルツァーの、貴族連合の、人を虚仮にする言い分にパトリックはN.Oと答える。

そう返されたナギトは驚くように顔を伏せ—俺を悪巧みする時の顔で「グッド」と呟く。

「良い啖呵だよパトリック。なら、いつものやり方でいこう」

「ああ、いいだろう。ここで勝ってライバルは解消だ」

売り言葉に買い言葉。ナギトの言葉にパトリックは当然のようにその言葉を返した。

十数分後、グラウンドに学院に残ったほぼ全員が集った。

その中でも特に腕に自信のある——と言うか実技の成績の良い者たちがナギトの前

で構えた。

パトリックは騎士剣を。

ヴァインセントは槍を。

フェリスは弓を。

ランベルトは大剣を。

エーデルは魔導杖を。

フリーデルもまた騎士剣を。

その6人は学院でも有数の強者である。

幼少の頃から英才教育を施されて来た。パトリック。

そのふざけた言動からは想像もつかない華麗な槍さばきをみせるヴァインセント。

良きライバルを持ち、自身も努力を怠らぬフェリス。

大きな体格から繰り出される剣技は大地を抉るとまで言われるランベルト。

おっとりとした性格ながらも苛烈なアーツ使いである事で有名エーデル。名門と謳われるトールズの最高学年に於いて最強の剣士とされるフリーデル。

間違いなく、間違いようもなくこの6人は学院の誇る強者である。それこそ、この6人がやられたのならトールズ残留組は貴族連合に降つても仕方ないと思わせるほどに。《帝国解放戦線》の幹部クラスの実力者でさえ、この6人を同時に相手取るとなると手傷を負うことは間違いがない。

「アンタは見てろ。これは俺のケジメのはずだろ」

ただでさえ多勢に無勢。6対1という状況で、助力しようとしたリヴァルを押し留める暴挙。

リヴァルは「そうか」と抜きかけた剣を納める。

「改めて聞くが——いいんだな？」

問うパトリック。その意味は当然、6対1という状況を良しとするのか、という事だ。さらに付け加えるなら、この6人は学院でも有数の実力者。本来ならナギトは1対1でも苦戦するような相手だ。少なくとも、3日前までのナギトなら。

「むしろ願ったり叶ったりさ。名門トールズの実力者6名を蹂躪し従属させる。俺という価値のプレゼンと、貴族連合に服従する手土産としてな」

しかし、この状況はむしろナギトが願ったものだった。

もしパトリックがサシの勝負でナギトに負けても、トールズにはまだフリーデルがいる。フリーデルが負けても誰かはある。——そうした希望を摘み取るための、トールズの学院生たちの反逆の芽を摘むための、実力者をまとめて叩き潰すというパフォーマンスだ。

「君は……!?!」

と言いかけたパトリックを遮ったのはフリーデルだ。キツと眼光でナギトを貫く。

「残念だわ、ナギトくん。君とこんな形で相對する事になるなんて」

「俺もですよ先輩。しかしまあ、こうなっちゃまったもんは仕方ない。俺の願いのために、ここは大人しくやられて下さいな」

抜く。ぬらりとした動作。霧囲気。剣呑―ではない、獲物を前に舌なめずりする蛇のような。

そんなナギトの問題無用な霧囲気を感じ取った6人も得物を構えた。

「アリサの学友……聞いていた話とずいぶん違いますのね」

呟いたのはフェリス。魔導杖を構える彼女はナギトのクラスメイトであるアリサの部活動仲間だ。

「ああ、君がフェリスか。…アリサはああ見えて寂しがり屋だからな。これからも良き友人であってやってほしい」

「どの口で……！」

その他の面子も、Ⅶ組のクラスメイトを通じて縁のある者ばかりだ。しかし、ナギトに憐憫の情はなく、リヴアルの無機質な「始め」の合図に続く言葉はかき消された。

「——鬼気解放」

ぶわりと溢れ出す緋色の闘気。それは殺気を伴って、ナギトと相對する6人を一瞬だけ硬直させる。

「迅雷」

そこに、雷速の斬り込み。対象とされたエーデルは迫る刃を魔導杖で防ぐが、続く蹴りに腹筋を穿たれて吹き飛んでいく。

舞うように太刀を回転させたナギトが打ったのはエーデルの隣にいたランベルトの首筋。峰打ちしてその意識を奪う。——否、奪えていない。踏ん張って耐えたランベルトの耐久性をナギトは侮っていた。

一瞬遅れてパトリック、フリーデル、ヴィンセントの突きがナギトを貫いた——かと思われたが、その姿は揺らめいて消える。残像だ。

「剣鬼七式、三ノ太刀」

声が聞こえたのは上。ナギトは3者の突きを跳躍して躲していた。そして、

「破空」

圧縮。解放される闘気の波動。ナギトを中心に広がるエネルギーは周囲を圧殺する力そのものだ。

それは地に這う虫を踏み潰すが如き一撃だった。それを。

「ぬ、うおおおおおおおおお！」

首筋への一撃で昏倒寸前だったランベルトが受け止める。大剣を振り抜いて、圧力という打撃を相殺し——それでようやくリタイアした。

着地したナギトは「やるな」とランベルトを賞賛。迫るヴァインセントの槍撃を掴み取り、螺旋の技術で使用者ごと回転させる。背中から地面に激突したヴァインセントは受け身さえ取れず、咳き込んだところにナギトの殴打が腹部にめり込む。気絶。

「はい、これで半分」

30秒にも満たぬやり取りである。このままトールズの実力者たちがなす術もなくナギトの前に屈するのか——と、問われればそうでもない。

残った3人はエーデルとランベルトを瞬殺したナギトの手腕を見て作戦を変えていた。

「フォルテ、クレスト、クロノドライブ。ひとまずこれだけあれば十分ね」

3人は互いに補助アーツを掛け合っていた。攻撃力、防御力、速度を向上させるアーツ。おそらくヴァインセントはそうするための時間稼ぎを買ってたのだろう。

「よろしくお願ひします！」

「任せたまえ！」

フェリスの言葉にパトリックが猛々しく答え、フリーデルとタイミングを合わせてナギトに肉薄する。

「劍鬼七式、外ノ太刀 早贄」

劍鬼七式とは、そもそも《劍鬼》が八葉一刀流を超えるべく考案した七つの劍技。

外ノ太刀とは、七式に数えられなかつたもの。《迅雷》や《雷神烈破》を含む《雷の型》も、この外ノ太刀になる。

そしてこの《早贄》は。

「気をつけろ。そこには罠があるぞ」

「——ッ!？」

斬撃を、その場に留まらせる技だった。

斬撃を放つのではなく、罨としてその場に留める。惜しくも七式から選考漏れしてしまった「早贄」であつたが、守る分には使い勝手の良い戦技だった。

ナギトの忠告で踏み留まったパトリックより一足先にフリーデルが騎士剣を振り下ろす。力の乗った一撃を、同じく力を乗せた一撃で力チ上げる。パワーなら《剣鬼》当時の力を出せるナギトに分があつた。

——しかし、それを読んでいたフリーデルは宙返りして勢いを逃すに留まらず、サマーソルトでナギトの顎を蹴り上げていく。

一瞬、明滅する視界と意識。そこに、

「はああああ！」

切り込む、パトリックの剣。

誰が見ても致命的なそれを、その刃を、ナギトは素手で掴み取った。

「な——素手で……っ!？」

「——掌破」

驚愕するパトリックに、無情にも炸裂する衝撃。それは容易くパトリックの意識を刈り取り——

「あー、痛って……血い出てるじゃん」

パトリックの騎士剣を放り捨てて、それを受け止めた自らの手を眺めるナギト。掌からはうっすら血が出ていた。

「…今、何をしたの?」

しかし、本来なら血が出るどころでは済まない。指が飛んでなお止まらぬはずの威力があった。故にフリーデルの疑問はそこにあった。

「別に普通の事ですよ。闘気を纏って防御とした。まあ」

瞬間、左手から解放された緋色のそれは。

凡百の武人が生涯でようやく到達できる闘気の総量をゆうに超えていた。

「これくらい、ですがね」

それだけの闘気を纏えば、そりゃあ並の攻撃なんて通じない。

「んで、これを攻撃に転用すれば」

アーツを発動させようと駆動していたフェリスに向かって左手を振る。それだけで。

「きゃあっ!」

地面を抉る闘気の波動がフェリスを直撃して吹き飛ばす。

「こうなります。……もうおわかりですよね、フリーデル先輩。…幕です」

ナギトが示したのは圧倒的な力の差だった。闘気の総量がそのまま戦闘の結果に直

結するわけではないが、今のナギトには勝利するビジョンが浮かばないフリーデルであつた。

「……今まで手を抜かれてたつて事かしら？」

「いやいや。ただ、力の使い方を思い出してきただけです。たぶん技量だけならまだ俺が負けてますよ」

「そう」とナギトの戯言を受け取ったフリーデルは己の騎士剣にありつただけの力を込める。

「私の全力、受け止めてちょうだい」

白く立ち昇る闘気を、斬撃に乗せて飛ばす。

白鳥が翼を広げるようにしてナギトに迫る。

「三ノ太刀改メ 破空 : 突」

闘気が太刀に装填される。一瞬あとに撃ち放たれた圧力は斬撃の白鳥をかき消してフリーデルを直撃した。

大きく威力は減衰されたものの、フリーデルは倒れ伏し——この勝負は、ナギト・シユバルツアーの勝利で閉幕した。

☆★

未だ気絶から覚めぬライバルに、バケツに汲んで来た水をぶっかけて強制的に覚醒させる。

「プハッ!? な、なにをする!?!」

寝耳に水、ならぬ寝顔に水だ。

まさしく飛び起きたパトリックにナギトは軽く笑みを浮かべた。

「寝起きで悪いけど、約束は守ってね」

それは勝負前に行われた取り決めだ。

ナギト・シュバルツアーがパトリック・ハイアームズ含む学院生に勝利した際にはパトリック含む学院生が『騎士団』として貴族連合からツールズ士官学院の管理を任せられる、というものだ。

「く……ナギト、貴様はそんな人間だったのか？趨勢を見て勝ちそうな方に尻尾を振るような、そんな人間だったのか!? 答える、ナギト・シュバルツアー!!」

這い蹲り、ナギトを見上げるようにしてパトリックは叫ぶ。

貴様はそんな人間じゃないはずだ。

いかなる時でも不敵に笑い、自分の信念を貫くような、そんな男のはずだ。

なにより、自分が認めたライバルは断じて貴族連合に尻尾を振るような人間ではない。

そんな悲痛な叫びだ。自分が認めた男はそんな奴では断じてない、とパトリックはそう叫んでいる。

それを、嘲笑う。

「お前は、俺を仲間だとも思ってたのか？」

見下すように。ナギトは嘲笑を浮かべて言い放った。

「その足りない頭で考えろよ。今、この状況で俺がどの勢力に属しているのか、お前にとって俺が仲間なのか敵なのか……考えたその答えが、正解だからよ」

それは、明確な敵対宣言ではない。

しかし、〃これ以上言わなければわからないのか〃と相手を馬鹿にした言葉であり、同時にこれ以上敵としての発言をさせるな、という友情を慮った欺瞞であった。

リヴァルはその言葉に友情を感じられた。

しかしそれは、この場で何ら作用するものでなく、例え友情があろうとも〃敵〃ならば容赦なく斬る——という割り切ったプロの考えを見せつけられた気分になった。

身震いを覚える豹変である。

《剣鬼》と呼ばれたこの男がするぶんには何も問題はない。

しかし、目の前にいるのは《剣鬼》の記憶を失ったただの〃ナギト・シユバルツァー〃だ。

それが、半年とはいえ友情を築いた学友を、その友情など関係なしに斬るといふ心構えに身震いする。

ナギトとパトリックの間に確かな友情は存在するだろう。それでも、友情を感じながらでも〃敵〃ならば容赦しない、そういうスタンスをナギトは取ったのだ。

それは明確な敵対宣言ではない故の、これ以上ない明確な敵対宣言だ。
リヴァルは少なくともそう受け取り、ナギトの裏切りの監視の任は見届けた思いになった。

ナギトが裏切るタイミングと言えば、今ここのトールズ士官学院に踏み入った瞬間であり、残った学院生と腕っ節の立つ教官たちを引き連れて、守備の薄くなった帝都を電撃作戦をもって解放する——そのタイミングは今ここのでしかありえなかった。

しかし、それは当然ながら危惧されており、帝国全土へ広げていた戦力を一時的に帝都に呼び戻す事をカイエン公は行っていた。

ナギトはここでトールズを真の意味で占領するしかなかったのだ。そういう選択肢しか、取れないようにされていた。

ナギトはリヴァルを連れて士官学院を出る。

パトリックは約束は守るだろう。

貴族の誇りと矜恃にかけて騎士団として、貴族連合の下でトールズ士官学院の管理をする事だろう。

それは、いい事だ。

学院生が蜂起して貴族連合に牙を剥き、犠牲になるよりは。

カイエン公爵によるトールズ士官学院の占領命令。

その命が下されたからここまですべてがナギト・シユバルツァーの思い描いた通りであつた事は誰も知る由もない。

☆★

戦艦 “パンタグリユエル” —— 250アージュという破格の大きさを持つ、貴族連合の飛行戦艦だ。

外装は白銀にて光を反射し、金色の線がいくつ走っている。内装はやはり、貴族趣味なだけはある。調度品も見ることから高級なもので揃えられており、これだけでいくらミラがかかっているのか想像もつかない。

ナギトは、そんな場所をあまり好ましくは思っていないかった。

内装はいい。調度品も揃ってる。食事も美味い。ただ、乗艦しているメンバーが曲者揃いなのだ。

まず《帝国解放戦線》の幹部。

《R》——リヴァル

《V》——ヴァルカン

《S》——スカーレット

《C》——クロウ・アームブラスト

《西風の旅団》の連隊長。

《罨使い》ゼノ

《破壊獣》レオニダス

ミリアムに似た謎の傀儡使い。

《黒兎》アルティナ・オライオン

結社《身喰らう蛇》。

《鉄機隊》筆頭隊士《神速》のデユバリイ

《執行者》No. X 《怪盗紳士》ブルブラン

《執行者》No. I 《劫焰》のマクバーン

《蛇の使徒》第二柱《蒼の深淵》ヴィータ・クロチルダ

貴族連合総参謀、ルーファス・アルバレア

そして、それらを束ねる貴族連合の総主権、クロワール・ド・カイエン。

強烈過ぎる面子に目眩を覚えるほどである。ヴァルカンやスカレットがまだとつつき易いと言えるレベルだ。

しかしだからと言ってコミュニケーションを欠くわけにもいかず、ちよくちよく喋るのだが、まあどいつもこいつもキャラが濃い。

特にぶっ飛んでるのが結社の執行者No. 1のマクバードだ。話をしていると意外にも教養は感じられるのだが、それを上塗りするだけの威圧感、違和感、異物感が凄い。さすがは結社最強などと言われているだけはあった。

軽く聞いた話によると、結社はクロスベルの問題にも首を突っ込んでいるらしく、そちらを担当する使徒は《鋼の聖女》で、一段落したら帝国入りするそう。結社最強の男と女が揃うとは、中々大掛かりな物語になってきた。

「すでに通信で報告はしている。が、口頭で再度報告を求められるだろう」

パンダグリユエルのデッキに通じる扉の前でリヴァルはそう言った。「了解」とナギトは答えて、その扉を開ける。

その一室に足を踏み入れると、そこで待っていたのはクロウとルーファス、それにカイエン公だった。

「フフフ……よくぞ戻った、ナギトくん。それでは報告を聞こう」

《劍鬼》の自陣への参入の確信にこみ上げる笑いを抑えきれないカイエン公はナギトを歓迎するように両腕を開いた。

このカイエン公とは「わかりあえない」とナギトは結論していた。というのも、オルデイスでの実習の際に遭遇したテロ。あれも要は貴族派と《帝国解放戦線》に繋がらない事を示唆するためだけのものだった。

ナギトとしてはそのカモフラージュよりも、テロを未然に防げなかった不明の方が費用対効果として大きいと思っていたため、カイエン公爵家と《帝国解放戦線》に繋がりはないと考えていたのだ。

しかし、事実としてカイエン公はただ戦線との繋がりの否定——というカモフラージュのためにあのテロを起こした。それはカイエン公としてはタダ同然で実行できる攪乱だったのだ。なんせ費用なんてものはない。街の破壊も市民からの税収で賄える。市民の反発など公爵家様には何の痛痒もない。——そんな、平民を税収の道具としてか見ない視点を、ナギトは理解できても納得できなかつた。嫌悪が勝るのだ。が、そんな嫌悪感をおくびにも出さず、ナギトは薄く笑んで敬礼の姿勢を取る。

「はい、報告します。我らが貴族連合総主催、カイエン公爵殿。トールズ士官学院は我ら

に帰順しました。貴族生徒の大半が残る学院で「騎士団」として指揮を取るのはハイアームズ侯爵家四男パトリック・ハイアームズとなります」

恭しく報告するナギトにカイエン公はますます笑みを深めた。《剣鬼》が自らの配下となつた実感が、その全能感を助長している。

「よく私の信頼に伝えてくれた。ささやかだが、贈り物を用意してある。受け取りたまえ」

信頼には褒賞を——という事か、カイエン公が指示すると、室内の兵士が箱を持ってきて、それをナギトの前で開ける。丁寧に梱包されていたものは導力器——次世代戦術オーブメント「ARCUS」であつた。

それを見た瞬間、ナギトにはカイエン公の考えが読めた。

この新しいARCUSを与える事でナギトのARCUS——クラスメイトの連絡先の登録してあるそれを回収し破棄。あわよくばⅦ組の誰かを釣ろうという魂胆だろう。

「戦術オーブメントARCCUS。それは君たちが試験運用していたものとは違う、言わば『製品版』ARCCUSだ。とは言っても性能は変わらないがね。しかし、君の今使っているARCCUSは戦術リンクの効果を発揮するためにアーツの効果が下がっていると聞いた」

それは、ナギトのARCCUSの適合の低さのデメリットだ。ARCCUSの適合が低ければ戦術リンクは使えず、それを強引に使えるよう作ったため、アーツの効果が低くなってしまっている。

それはすでに聞き及んだ話であったが、ならばこの製品版ARCCUSは適正が低くとも使用になんら不都合はないのだろう。

「この製品版ARCCUSは、そのような欠点はなく誰でも使えるようになっていた。君の旧ARCCUSにあったアーツの効果が薄くなる…などという事はない。これを機に変えてみてはどうかね？」

それは提案のようでもあるが、その実は強制的なものだった。

この提案により、ナギトにはなんらデメリットはない。せいぜい、袂を分かった仲間

との連絡が途絶えるくらいだ。今のナギトには痛手はない——そう振る舞わなくてはならない。

ここでこの提案を跳ね除ければカイエン公はナギトへの警戒を高めるだろう。

故にナギトは。

「喜んで頂きます、カイエン公爵」

そう言つて低頭した。

「なによりだ。では君の旧ARCU Sだが、こちらで処理しておこう」

そら来た。とナギトは思った。ここで旧ARCU Sをカイエン公に渡すと、ロクでもない事が起こるのは目に見えている。

さてどうしたものか——と、悩む一瞬。

「私の方で処分しておきましょう。カイエン公爵も、それでよろしいですか？」

カイエン公が次のセリフを紡ぐ前に口を挟んだのはルーファスだった。「うむ」と認めめたカイエン公を尻目に、ナギトは目を細めてその真意を推し測ろうとするが、どうにもわからない。

「さあ、渡したまえ」

手を伸ばすルーファスに、にこやかに。ただ含みを持たせるようにして、旧ARCU Sを手渡した。

「ええ、よろしく願います。ルーファス理事」

ルーファス・アルバレアはツールズ士官学院の常任理事だ。今回はその縁に賭けてみる事にした。

「おっと、つい前の癖で」と自らの「理事」と呼んだ事にフォローする。

「構わないさ。しかし今の私は貴族連合の総参謀——今後はそう呼んでくれ」

「承知いたしました、ルーファス・アルバレア総参謀殿」

これまた恭しく礼をして三文芝居を切り上げる。ルーファスは預かったナギトの旧 ARCCUS を懐に仕舞い込むと。

「それと、ARCCUS の他にも褒美がある。それについては——」

「それについては、私が案内させてもらいます」

ルーファスの言葉を継いだのはリヴァルだった。

ナギトの監視の命令は、トールズ占領だけでなく、その命令を下したカイエン公が「もういい」と言うまで続くのだ。

ナギトは貴族連合にスカウトされてからと言うもの、このリヴァルと最も長い時間を過ごしていた。

「俺が着いてくぜ。説明には俺がいた方が楽だと思っからな」

そう言ったのはクロウだ。それらの言葉から騎神関係なのではないかと、ナギトは思案を巡らせる。

「ではよろしく頼むよ」

ルーファスに見送られて、ナギトは部屋を出る。

前には案内人兼監視人のリヴアル。横には元学友のクロウだ。

「案内って事はあんまり安易に持ち出せるものじゃないと見た。もしかして機甲兵か？」

「それについちゃ、見てからのお楽しみってやつだ」

クロウのはぐらかした答えに、ナギトは「ふう」と吐息した。

トールズ士官学院のクロウ・アームブラストと《帝国解放戦線》の《C》ではキャラクターとして大差ない。もう《C》の仮面を被る必要がないとは言え、学院でのクロウの道化師のような表情は失っていないのだ。

「それにしても、俺は《灰の騎神》の《起動者》になるのはお前だと思ってたぜ、ナギト」
「そう？ キャラクター的にはリインがピツタシだと思うけど」

「はっ、よく言うぜ。あの異界の戦場で、お前にも《灰の騎神》の名前は見えてたくせに
よ」

「それ、お前にも見えてたのかよ」

「一応、俺も騎神の《起動者》だからな。はつきりとは見えてなくても、お前とリインに名前が見えてたって事はわかってた」

「そうか。まあ、俺が《起動者》になる未来もあつたんだろうがよ……なんとなく、それはやり過ぎだと思つたんだ」

「やり過ぎか?」

「直感だよ。あの場面でそこまで歯車をズラすのはまずい。そう思つただけ」

「そりゃ、いつたい——」

「到着だ、クロウ、ナギト」

2人の会話に割つて入つたのはリヴァルだった。

同時にエレベーターの扉が開き、パンタグリユエルの最下層区画——機甲兵の降下装置のある場所へと足を踏み入れた。

その奥に、それは安置されていた。

埃が積もらないように布が被せてあり、動かないようにワイヤーで各所が止められている。

ワイヤーを外し、布を一息に引き取り——その威容は現れた。

それはクロウの《蒼の騎神》に酷似した機体。

色が塗られておらず、また飛翔ユニットが取り外された《蒼の騎神》がそこにいた。

「こいつは、オルディーネ・イミテーション。正式な名称がねえからそう呼んでるだけだが。機甲兵プロジェクトが立ち上がった際にオルディーネにできるだけ性能を近づけようとしてできた機甲兵がこいつだ」

オルディーネ・イミテーション

《蒼の騎神》——機甲兵の元となった伝説の巨いなる騎士。そのコピーを作ろうとして、できたのがこいつ。

しかしそれが量産されず、この場で眠っている事には理由があるのだろう。

「性能自体はオルディーネと互角——とは言え『奥の手』を出したオルディーネには敵わないが——そのオーバースペックに乗りこなせるやつが一人もいなくてな」

「クロウもか？」

「んにや、俺は除く、だ。性能としては近々開発の終わるヴァルカンとスカーレットの専用機以上のパワーとスピードを備え持つ」

クロウ以外には乗りこなせない——、それは少なからずナギトに衝撃を与えた。

《身喰らう蛇》の面々は機甲兵に乗りそうにないとはいえ、他にも貴族連合には強力なメンツが揃ってるはずだ。それこそ《剣鬼》時代のナギトでも対決に尻込みするような強者が。

そんな連中でさえ、乗りこなせない機甲兵——、とそこでナギトはふと疑問を覚えた。

貴族連合の強力な面子——例を挙げれば《黄金の羅刹》や《黒旋風》など。

彼ら彼女らの強さはおそらくクロウを上回る。

達人級になればなるほど機甲兵を乗りこなすの法則から考えれば、彼らが乗りこなせない機甲兵をクロウが操れる——というのは違和感がある。

となると——、導き出される結論は限られる。

「操縦方法まで騎神に近づけちまいましたでござる——つて所かな」

「ご明察。なにしろモデルがオルディーネしかなかったからな。まあ、このオルディーネ・イミテーションの教訓を活かして、その後の機甲兵の操縦方法はわりと簡易なものになったんだが」

クロウが動かさせた理由は、やはりそれだった。

《蒼の騎神》に似通った操縦方法のオルディーネ・イミテーション。そのオーバースペック／操縦方法ゆえに他の操縦士を寄せ付けない暴れ馬……と言った所か。

「で、さつきも言った通りお前は騎神の《起動者》の資格を持つてる。起動者になった瞬間に騎神の操縦方法は頭にぶち込まれるから、このオルディーネ・イミテーションも操れるんじゃないか？——つてのが今回の本題なわけだ」

起動者になった瞬間に騎神の操縦方法を頭にぶち込まれる——クロウのその言葉に、ナギトは脳内で《騎神の操縦方法》の検索をかける。

するとその知識はあっさり見つかった。

異界の戦場から今までどうして思い浮かばなかったのかわからないくらい、あっさりと。

「そうは言っても…俺の知識にある騎神の操縦方法は《灰の騎神》のものだぞ」

「騎神の操縦方法は《灰》だろうが《蒼》だろうがたいして変わりやしねえ。とりあえず、

お前が乗るって言っちゃえばこいつはお前のもんだ」

クロウのその言葉にナギトは幾分か悩む。

たしかにオルディーネ・イミテーションは強大な力だ。得れば多大な恩恵をナギトに齎すだろう。

しかし、これを得てしまえば《蒼の騎士》クロウと並んで貴族連合の広告塔としてカイエン公に利用されるだろう。

そうなれば、仲間の元に戻るのは今より少し難儀になる。

しかし、《剣鬼》を正しく運用するなら、その役割は「暗殺者」としてのもの。

広告塔の方がイメージはマシだろう。

「ちなみにナギトが乗らなかつた場合、オルディーネ・イミテーションの操縦士は俺になる」

唐突にそう告げたのはリヴァルだ。

その声音から判断するに、もうすぐ実戦で使えるレベルまでオルディーネ・イミテーションを操縦できるようになっている事が理解できた。

急かせるようなタイミングの発言にしかし、ナギトは焦らない。すでに結論は出てい
る。

「乗るよ、こいつに。オルディーネ・イミテーションに」

《蒼の騎神》のコピーであるオルディーネ・イミテーション。

そのオーバースペックと操縦方法の難解さに幾人もの達人たちが匙を投げてきた色
無しの機甲兵。

そのパイロットとなる事をナギトは決意したのだった。

これを機にナギトの異名は《蒼の騎士》と並ぶ双壁として帝国全土に広まっていく事
になる。

追憶
～
《劍鬼》
誕生の時～

しとしと。しとしと。雨が降っている。
ぼたぼた。ぼたぼた。血が滴っている。

「本降りになる前に帰れるかな？」

彼はそう呟くと、眼前の許しを請う男に向かって太刀を振り下ろした。

☆★

?カルバード共和国大統領から、ある組織に依頼が入った。
内容は要約すると、”邪魔者の排除”。

ある組織の通信士は、通信の終わりにこう言った。

？「あなたの願いは果たされるでしょう」

？事の起こりは、6日前。

ある組織からカルバード共和国に派遣されたのは、太刀を携えた男だった。

男は大統領府に入ると、サミュエル・ロックスマスと面会し、その依頼を承った。

大統領ロックスマスは男に説明する。？長年の宿敵たるエレゴニア帝国の情報局に、我が国の情報は筒抜けになり、このスパイ天国のままでは国民の安全までが脅かされるだろう。？故に情報機関を設けようと思うのだが、反対派の連中がうるさい。そいつらを秘書共々、消してはくれないか。と。

前半部分は単なるおべんちゃらだ。男は表向きは正義の味方。そのため、正義の味方が正義を執行するのに必要な理由を並べてやったのだ。

ロックスミスは普通、相手の顔色を見る事でその人間がどんな人間性を持つのかある程度理解できるのだが、この太刀を携えた男は人間性を見てなお、理解しても理解しきれないと表現するしかなかった。

？命は大事だ。それはわかつている。？だが、奪うと決めた時は容赦はしない。？しかし命を奪うのに理由はいらない。

？ロックスミスは男の根底が何を表しているのかまでは理解できなかったし、理解する必要もないと思った。ただ歪んでいると、それだけわかれば十分だった。

大切なのは最後の一文。？『邪魔な政治家をそいつらの秘書たちと共に排除してくれ』という部分のみだ。

？ロックスミスは、その邪魔者を排除する期間を一年でどうだと言う。男に渡された資料に並ぶ名前は百を少し超えたくらいだ。この者らを排除するとなると、一年では短い。

？しかし男は10日あれば充分だと言い、席を立つ。

ロックスミス大統領は、席を立った男に言う。

？「依頼を達成した暁には、君に個人的な贈り物をしたい」

ロックスミス大統領は飾ってあった太刀に目をやった。男もつられてその太刀に視線を移す。

「ゼムリアストーン製の太刀だ。最近、加工方法がわかってね。無理なお願いの正当な報酬として用意させてもらったんだ」

男は目を見開いた後、ロックスミス大統領に一礼し立ち去ろうとした。部屋を出ようとする男にロックスミス大統領は疑問を投げかける。

？「君は本当に、その……」

？歯切れの悪いロックスミスだが、男は彼が何を言いたいのか理解し、微笑みながら言った。

「ええ、遊撃士協会の者です」



《遊撃士協会》

? ゼムリア大陸各地にその支部を置き、民間人の保護を第一とする民間組織。

? 誰もが知る正義の味方である。

? それがどうして、暗殺などという依頼を引き受けるのかと言えば。

肥大化した組織を運営するにはミラがいる。

しかしエプスタイン財団から寄付される金額をもつてしても、全遊撃士に払うミラなどなかった。? そのために始めたのが、いわゆる裏の顔。

情報の奪取、要人暗殺、国家転覆まで、あらゆる依頼を達成するべく発足したのが《裏の遊撃士協会》だ。ちなみに最後のはまだ入った事のない依頼である。? 《裏》などと大袈裟に言っても正式な組織として運営されているわけではない。? あくまで《遊撃士協会》の裏の顔として存在するだけの組織だ。

? しかし、その裏の顔を世間に知られていけない。? 正義の味方として存在する《遊撃士》が人殺しなど株の大暴落もいとところだからだ。

そのためその存在を知っているのは本部の一部人員と、各国のトップくらいである。

? 裏の遊撃士は、その秘匿性故に能力の高い者が選ばれる。? と言っても現役の遊撃士

を裏で仕事させるわけにはいかない。いざという時のスケープゴートにできないからだ。？そのため、いわゆる新入社員を裏の遊撃士に誘うわけなのだが、そう実力のある者は簡単には見つからない。

？今回、カルバード共和国に派遣された太刀を携えた男も、遊撃士協会が久々に見つけた実力のある裏でも生きられる人間だったのである。

？裏の遊撃士になるための条件としてはまず、最低でもA級でも中位に入るくらいの戦闘力が求められる。？その他にも交渉術や状況を丸く収める術などが求められるのだが……その太刀を携えた男は、戦闘力のみで裏の遊撃士に選抜された。？彼が納めたという剣術は、今やS級遊撃士として活躍する《剣聖》やS級に穴ができれば次はこの者と目される《風の剣聖》と同じものだ。

？それに、この剣術で皆伝に至った者は「理」に身を置くとされ、各方面で活躍しているのだ。

？そういう意味でも太刀を携えた男は期待され、初仕事に共和国の要人暗殺を与えられたのだった。



男はホテルのベッドから窓を見つめる。降り出した雨は今や土砂降りだ。？本格的に降り始める前に帰れてよかった、と思う。

？今回の狩りで、数は68。？この分だと9日で終わりそうだ、なんて思考しながら男は眠りについた。

？暗殺を初めてから今日で7日目。？基本的に仕事は陽が沈んでから登るまでの間で行なっていて、完全に昼夜逆転している。

ホテルの従業員などには不審に思われるかもしれないがそこはそれ、夜の仕事——と言うには男は若過ぎたが——と誤魔化そう。

？男が目を覚ますと、すでに陽は傾きかけていた。

活動時間——夜——にはまだ早い。まずはルームサービスで腹に物を入れる。陽が沈んでから昇るまでほとんど不休で暗殺業務を果たすのだ。何か腹に入れておかないと体力が保たない。なにしろ、朝と昼は何も食べずに寝ているのだ。この早めのディナーだけでも食べておかねば。

洗面台の前に立ち顔を洗うと自然、鏡の中の自分と目が合う。手で頬を触ると、数日

前より幾らか肉が削げ落ちていた。

？「少し痩せたか？ 我ながら細い神経だ」

？なにしろすでに68人も殺している。？この仕事を請けるまで殺人など未経験だった。

しかし、6日で68人も殺しておいて夕食をガツツリ摂るあたり、細い神経ではない。？仕事から帰って来て朝から夕方まで寝てる間、夢にうなされる事もないのだ。殺した相手の事に思いを馳せる事もある。？家族はいただろうし、その当然の明日を奪ったんだ、などと考える。しかし、考えるだけ。？罪悪感などもあるが、それは剣を鈍らせる要因にはならない。剣を止める理由にはならない。

男は割り切っていた。目的のためなら、今はどんな魔道でも歩もうと。

それが単なる愛であるとは、まだ知らぬままに。

やがて陽が落ち、今日も仕事が始まる。

☆★

? 変化は2日目からだった。

? 1日目で23人殺害して変化は起こった。当然だ。議員が、それも大統領に弓引く可能性のある者が暗殺されたのだ。警戒して護衛を雇うのは目に見えている。

? それでも太刀を携えた男は議員たちを斬って?きた。護衛らは気絶で済ませるほどの腕前だ。

並の護衛など太刀を携えた男の前ではないに等しい。

故に、一流の護衛が雇われるのも時間の問題だったわけだ。

しかし、一流の護衛など数が少ないし、仮に雇えたとしても暗殺者が現れるとも限らない。?暗殺者と一流の護衛がかち合う可能性はそれこそごく僅かだ。

? だからこそ、この出会いは奇跡的だったと表現せざるを得ない。

? 7日目、11件目の標的の寝室に足を踏み入れた時だった。

? ピリ、と張り詰めた空気を男は感じ取り、太刀の柄に手をかけた。

? 瞬間、殺気を感じ取り太刀を防御に回す。

ギーン！と音が室内に響き、太刀に受けた衝撃で部屋の端まで弾かれるように飛んだ。

？男はガードに回した太刀がたわんでいるのを見て目を細める。？安物の太刀である事は否めないが、それでも一打で変形させるほどの威力……

？男は拳を打ち出してきた敵を見据える。？筋骨隆々たる肉体を東方風の衣装で包むは無精髭を生やした拳士。

「お、おい……遊撃士！一撃で仕留めるといふ話だったじゃないか!」

？寝台から体を起こしたのは、拳士を護衛として雇った議員だ。？暗殺者を不意打ちで仕留めきれなかったのを見て議員は焦っていた。しかし、その焦りこそが部屋をピリつかせていた要因であり、暗殺者——太刀を携えた男が不意打ちを防御できた理由でもあった。

「そう言われてもなあ。できればという話だったはずだぜ。どうやらやつこさん、暗殺は失敗だと言うのに逃げる素振りさえ見せやしねえ。相当腕に自信があるようだ」

? 「そんな事はどうでもいい! 協会に依頼したは私の護衛だ! 経過はどうでもいい、私を守ったという結果を出してくれ」

? 議員の言葉に拳士はやれやれと肩をすくめる。? 頭は回るのだから後は器量が備われば議員としての格も上がるだろうに、と。

? 「という事だ。俺はA級遊撃士のジン・ヴァセックだ。お前さんは……と、訊いても答えてくれるわけねえよな」

? 暗殺者は当然のように答えず、ただ武器を構えるのみ。ただ、静かに警戒のレベルを上げていた。

? ジン・ヴァセック——数少ないA級遊撃士の1人にして《泰斗流》を修めた拳士。《不動》の異名を持つ共和国全体を見ても指折りの強者。油断する道理などない。

? 部屋の電灯が点くのと同時に非常ベルが鳴った。外に待機させていた護衛たちがここに来るまで長くて2分という所。あまりモタモタしてられない。

? 男は太刀を構えたまま、その身をゆらりと揺らす。特殊な歩法によつて生まれたのは男の幻影。? それらがいくつも重なり、どれが本物なのか外見的にはわからない。

? 幻影が一斉にジンに斬りかかる。? ジンは一瞬の内に幻影に混じる本体を見つけ出し、それを回し蹴りをもって迎撃した。

? 男はその回し蹴りを、太刀の腹で受け止める。? そこは、先ほど拳を受けた場所と寸分も違わぬ。たわんでいた刃はそこで折れる。

蹴りと刃の衝突音の後に撃断された刃が宙を舞う。蹴りの勢いで吹き飛ばされる前に男はそれをキャッチした。

? 再び、壁に叩きつけられた男。? しかし、その顔を隠す覆面の下には笑みが浮かぶ。? この位置取りを狙っていた。? だからこそ、わざと蹴りを喰らい、太刀を折らせたのだ。男は左手にある太刀であったものの柄をジンに投げる。? それはジンが避けるまでに、内部に込められた力が暴走し、爆ぜる。? ジンに隙ができた一瞬に右手にある折れた先の刃を議員に投擲。? その喉に突き刺さり、呆けた顔をしている間に男に接近され、突き刺さった刃で喉笛を切り裂かれた。

? 近づいて来る足音を聞き、男は無手の状態で窓を破って飛び降りる。

今夜の狩りは、まだ続く。

☆★

追っ手は来なかった。？おそらくは既に護衛対象の死亡が確認された事と、ジン・ヴァセックが諫めたであろう事が予想できる。

？共和国きつての実力者であるジンは、対峙した相手の戦闘力を読み取ったのだろう。だからこそ、追撃はなかった。

夜明けは近く、男の手は血に濡れていた。？得物を失った男は素手でターゲットである議員を殺めていた。男の使う剣術『八葉一刀流』には、無手の型がある。八葉一刀流を学ぶ者に、まず初めに叩き込まれる八の型だ。

？当然のようにそれは殺人を目的とされたものではないが、男が使えばそれは人を容易く殺める事ができる必殺の型となる。

血に濡れた腕を見られるのは御免だ。？男はいつもより少し早く、今回の仕事を終え

る事にした。

? ホテルのシャワーで血を洗い流し、昼まで睡眠をとった後、男の足は大統領府へと向かった。

? 見張りの兵たちをやり過ぎし、ロックスミス大統領の執務室をノックする。? 訝しがる彼に扉越しに自分だと告げると「入ってくれ」と入室の許可をもらう。

「失礼します」と入ると、ロックスミス大統領は執務机の奥にある椅子に座り、こちらを柔らかい視線で迎える。

? 「やあ、よく来てくれた。今日あたり、来るんじゃないかと思っていたよ」

? その言葉に、男は納得する。? なるほど、道理で一見して強者とわかるような連中にも呼び止められなかったわけだ。

? それなら話は簡単だ。

男はロックスミス大統領を見据え、その願いを口にした。

抹殺対象の護衛、遊撃士《不動》のジンにより武器を破壊された。得物を新調しようにも珍しい武器のため、そこから足がつく可能性がある。そのため、報酬を前倒しして貰えないか。

ロックスミスは男の望みに応えた。

依頼は必ず果たされる。ならば報酬の前倒しなど考えるまでもなく許可できる。

男は部屋を出る間際、首だけを動かしてロックスミス大統領に視線を向けた。

？「失礼します、次に会う時には吉報をお届けします」

☆★

それから2日後、そのドアはノックされた。

太刀を携えた男——《剣鬼》によって。

？《剣鬼》——それは、議員暗殺者の下手人につけられた異名だ。10日間に100人

の要人を殺した人物。遺体が刃物で斬り裂かれていた事、対峙したジンの印象からそう名付けられたのだった。

そして、その存在はロックスミス大統領へのさらなる集権化へと繋がる。？ロックスミスに表立って反対すると《剣鬼》に殺される、という噂が立ったためだ。？《剣鬼》はおそらくロックスミスが集権化を狙って雇った殺し屋だが、証拠が一切出なかつたため糾弾する事はできない。

？こうしてカルバード共和国は大統領ロックスミスの国に変貌していくのだった。

？事を終えた《剣鬼》は速やかに首都を出る。

次の依頼が入るまでは、共和国の辺境で準遊撃士として働く事になっていた。

追憶 ～今はただ～

《剣鬼》が共和国辺境で準遊撃士として活動を始めてから3ヶ月が経過していた。

先輩遊撃士に引っ付いて回り……真新しく、そしてぬるい日々を送っていた。

《剣鬼》の本来の実力ではなく、新米遊撃士としての振る舞いが求められる日常に、《剣鬼》は剣の腕が錆びつかないか気が気ではない。

しかも先輩遊撃士の透徹した瞳は《剣鬼》の事情を見抜かれているような気がして、なかなかお腹の据わりが悪い。

そんな《剣鬼》の穏やかな日々は唐突に終わりを迎える。

その日も、なんて事はない依頼を終わらせて先輩遊撃士アルジュナと共に町に戻る最中だった。

強大な魔獣が姿を現したのだ。それは本来クロスベルに生息するはずの多頭大蛇――

「ケツアルコアトル」。その亜種だった。

クロスベルの地においてもあらゆる魔獣の上位に位置するケツアルコアトルが、より強力に進化した個体が、かつてこの地に存在していた。

クロスベルから国境を超えてカルバードに渡ったその個体は通常種より強力で、それゆえに周囲の環境にも適応できた。紛れもない手配魔獣クラスのケツアルコアトルが生態系を荒らす前にアルジュナはそいつを討伐した。

その功績をもってアルジュナはD級からC級遊撃士へと昇格したのだ。

「まずいな……逃げる体力は残っているか」

《剣鬼》とアルジュナの前で巨体を広げるケツアルコアトル。アルジュナはそれと対峙しつつ《剣鬼》を逃すつもりだ。

今、《剣鬼》らの前にいるケツアルコアトルはきつと、かつてアルジュナが討伐した個体から産み落とされた子なのだろう。その威容はクロスベルのケツアルコアトル通常種を遥かに上回る威圧感を発している。

かつて強力な通常種でさえ討ち取るのに工夫をして、それでも死闘だったのだ。

カルバードの地に適応し進化したケツアルコアトル亜種を討伐するのに、どれだけの戦力が必要になるかなど見当がつかない。まさしく幻獣一步手前の脅威度である。

今日の業務で疲弊していることに加えて後輩というハンデを背負ったアルジュナには荷が重い相手であった。

ケツアルコアトルの前で槍を構えて、《剣鬼》を庇うようにして立つ《槍弓》のアルジュナ。

？彼の得物は異名の通り、槍と弓である。？基本的な戦い方は弓による射撃で相手を弱らせた後、槍で確実にトドメを刺す。

だからこそ、本来の戦い方が実践できない今は苦戦を強いられている。あまつさえ敗北を喫しようとしているのだ。？しかし、アルジュナが弱いわけでは決してない。？彼の強さは折り紙つきであり、敵の撃破能力だけならリベールの《重剣》を凌ぐ程だ。

？そのアルジュナが《剣鬼》に逃げろと言う。？足手まといがいなくなれば、自分も何とか逃げ切れるかもしれない。そんな淡い期待を抱いての事だった。

しかし《剣鬼》はそれを跳ね除けて、全身生傷だらけのアルジュナの前に立った。

如何程の葛藤があつたのだろうか。？《劍鬼》の表情は迷いを吹っ切つたように晴れやかだった。

ここで自分が《劍鬼》たる実力を發揮すれば、その話はその男の耳にも届くだろう。？
そうなれば自分が百人斬りの下手人だと露見する危険性がある。

最善手はここでアルジュナとケツアルコアトルを斃す事だ。アルジュナとケツアルコアトルが相討つた事にして今後、この地域で自分が《劍鬼》としての実力を振るう必要を無くす。同時に自分の実力を見抜きつつあるアルジュナの排除も実行できる。それが最善手。

しかし《劍鬼》にその手が打てるはずがなかった。？3ヶ月——実に3ヶ月という間、遊撃士の先輩としてイロハを叩き込んでくれたのだ。《劍鬼》はアルジュナに恩と情を感じていた。救ける理由はそれだけで充分だった。

？だから、今はただ遊撃士として。

「なにを……逃げろと言っている」

「いえ、大丈夫です。先輩」

《劍鬼》がそう言つて太刀を抜き放つと、アルジュナの感じていたものが軒並み知覚できなくなつた。五頭蛇から放たれる圧迫感、死の恐怖、絶望——それらの一切が消え去る。？目の前の少年がそれらをすべてシャットアウトしたのだ。アルジュナは薄々感じていたものを確信する。

即ち、この太刀を携えた男が自分より遙かな高みにいる実力者である事を。？《劍鬼》は半身に構え、刀身を自己の半身に隠すように構えると。

「劍……ゴニョ七式、外ノ太刀」

危ない。普通に劍鬼七式と言ひそうになる。何とか抑えて、気持ちを高めた。次の瞬間《劍鬼》の残像は消え、ケツアルコアトルの後方に出現する。

「雷の型」

音は、その後聞こえた。？それは、雷の走る音。神の声。神鳴。

「迅雷」

振り切った刀身。一瞬の後にケツアルコアトルの5つある内の首の3本がずるりと落ちた。

さすがは幻獣一步手前の魔獣、《剣鬼》の一撃で沈む事はなかった。

残った2本の首で《剣鬼》を挟み込むように締め付ける——事などできはしない。跳躍して躲した《剣鬼》は太刀に炎を宿し、眼下の大蛇に向かってそれを放つ。

「龍炎撃」

龍炎はケツアルコアトル亜種を呑み込んで丸焼きにする。絶命まで10秒足らず、やがて大蛇は動かなくなった。

その事実は噂になり、肥大化し——、それは巡り巡って《不動》の耳に届いたのだつた。

☆★

それから僅か一週間後、A級遊撃士《不動》のジンがアルジュナと《剣鬼》のいる遊撃士支部に来訪した。

「おう、お前さんか…外来種の魔獣を退治したというのは」

？ そう言うジンの視線が一瞬だけ太刀に行ったのを《剣鬼》は見逃さない。

「ええまあ……」

軽くぼかすように答えると、ジンは直球で言葉をぶつけてきた。

「それは……太刀か？ 大陸西部ではあまり見ない武器だな」

？ 「あ、はい。よくご存知ですね、共和国では東方からの移民が多いとは言え、珍しい得物だと思っんですけど」

？「む……まあ俺も東方由来の武術の末端に身を置く端くれだからな。それと、ちよつと昔に助けになってくれた人の前の得物が太刀だったって話を聞いた事がある」

ジン・ヴァアセックの助けになれる人物であり且つ、前の得物が太刀だった——といえ
ば、かの《劍聖》だろうか。？カシウス・ブライトが劍を捨てたのを老師が嘆いていた
のを知っている。

……………だから。

？「そう言えば、ジンさんはどうしてここに？」

？「強力に進化した魔獣を準遊撃士が倒したと聞けば誰でも興味を持って当然だろう。そんな有望な人材を辺境で燻らせておくのはもったいないしな」

「ふ、確かにな。どうする、これを機に首都の総支部に異動するというのは？」

ジンの言葉に乗っかり、アルジュナも《剣鬼》の栄転を促す。《剣鬼》は「いやあ」と後頭部を掻いて、

「激務なんでしょう？俺はきついのも無理ですよ。そもそもこういう事態を避けるために辺境で実力を隠してたんですから」

口から出まかせだったが、なかなかどうして誤魔化せそうな性格を演じられた気がする。

「ははは、こいつはまた出世欲のないやつだ。……そういうのは師匠譲りなのかな？」

スツとジンの目が細められる。《剣鬼》の師匠——ユン・カーファイ。『八葉一刀流』

の開祖。《劍仙》。

ケツアルコアトル亜種を倒した《劍鬼》は実力を偽っていた事も含めてアルジュナから聴取を受けていた。その際に自らの剣術を八葉一刀流と明かしたのだ。

このジンの探りは、その情報からのものだろう。

「そうかもですね。老師が世捨て人なもんですから。まあ、それだけじゃイカンと思っただから、こうしてここで遊撃士をやってるんですけど」

？「ほう、経験を積むためか。そりゃあ大切な事だ……しかし激務は嫌だと」

「へへへ…我儘なのは承知してるんですけどね」

本音らしきものを交えつつ社交辞令で切り抜けようとする《劍鬼》の姿はいつそ滑稽だった。しかしだからこそ真実味も増すというもの。

ジンがアルジュナに目配せする。アルジュナは頷く事もなく察すると、「君は知らないかもしれないが」と《劍鬼》に向かって話しかける。

「ジンさんはA級遊撃士——共和国全体で見ても有数の実力者だ。しかも流派は」

「泰斗流——ですよね。存じてますとも」

その流れを察知した《剣鬼》はアルジュナの言葉を引き継ぐ。

「カルバード共和国A級遊撃士、《不動》のジン——ジン・ヴァセック。有名ですよね」

「とは言っても俺なんかA級じゃ下っ端の方さ」

「ご謙遜を。——というか、この茶番いつまで続けるんです？」

瞬間、剣呑。

目をスツと細めた《剣鬼》にアルジュナは瞠目し、ジンは口角を上げる。

「どういうことだ？」と尚とぼけるジンに《剣鬼》は告げる。

「何が目的か知りませんが、ジンさんはどうやら俺と一本、勝負がしたいようだ。泰斗流——大陸東部の流派……八葉との共通項を話題にしてまで。つーかアルジュナさんに

も根回ししてるでしょ」

「ふむ、そこまで見抜くとはな」

「八葉一刀流の『観の眼』というやつだな」

アルジュナとジンが認める。《剣鬼》は「何が目的か知りません」とは言ったが、ジンが己の正体を見極めに来たと理解できている。

すなわち首都要人100人殺しの下手人——《剣鬼》であるか否かを。

「いえいえ。アルジュナ先輩の薫陶の賜物ですよ」

言つて、席を立つ。くいつと太刀を持ち上げた。試合を受ける合図だった。

こうして仕組まれた《剣鬼》と《不動》の勝負は始められる事となった。

☆★

? 八葉の剣士と泰斗の拳士が闘えるほどの規模の広場で対峙する2人は気を高めあっていた。

? 《不動》のジンは相手の正体を見極めるため。

《剣鬼》は自分の実力を如何程のものとして発揮するか決めかねていた。

? 実力が伯仲するのはいけない。? 対峙する時間が長ければそれだけ正体を見破られる可能性が高まる。

? あっさり負けるのは??アルジュナが倒せなかった魔獣を容易く仕留めておいてそれは怪し過ぎる。

それならば。《剣鬼》は《不動》に圧勝しなければならぬ。? 相手に実力の片鱗すら感じさせる時すら与えず、勝利する。

試合開始と同時に《剣鬼》の姿がゆらりとぶれる。

? 「舞い散る木の葉、遊覧すべし」

? それは自己暗示の一種だ。? 言葉を紡ぐ事で、その言葉と共に体に染み込ませた動き

を再現する。

?? ゆらゆらと揺れてそのまま体がいくつかに分かれた。

「分け身」——戦技の中でも上位に位置するそれを、《剣鬼》は躊躇う事なく発動する。

「落」

「葉」

「舞」

「曲」

分身となった《剣鬼》の姿それぞれが音を紡いで技の名を告げる。

ゆらりと揺れる分け身の気配は恐ろしいほど希薄だ。それ以上に異常なのは、本物がどれかわからない事。

「こりゃあ…凄まじいな………」

それは《不動》のジンさえ目を剥く技術だ。ここまで気配を——殺気を、闘気を、コントロールできるのは《劍聖》の業だ。

ゆらり。ひらり。

落ち葉が舞うようにゆれる《劍鬼》の姿がジンに殺到する。

「だが——」

跳躍。《劍鬼》のその分け身の刃の重なる地点に蹴りを見舞う。雷神脚。

「まだ甘いつー！」

巻き上がる粉煙と共に分け身は軒並み消滅する。

「はっ」

笑う、《劍鬼》。

「どつちが!?!」

ジンに迫るは龍を象る炎。

「龍炎―」

「むっ!？」

「―三連―」

敵を食い破る龍の顎。ケツアルコアトル亜種を撃破せしめた炎が、3つ。ジンに向かって放たれている。

甘く見ていたのは自分の方だとジンは自戒する。

どれだけ強くても所詮は世を知らぬ子供だと。そう思っていた。気を引き締めると共に自らの全霊を引き出す。

《不動》を食い潰すべく迫る龍炎の顎を蹴り上げる。

「龍閃——」

掌中に闘気を集約する。

「——雷神掌!!」

雷のエネルギーは弾かれた龍炎を掻き消すと、次は《劍鬼》へと矛先を変える。

「無想霸斬」

一刀両断——否。瞬間七閃。

《劍鬼》に肉薄していた暴力は霧散している。

この攻防で、1セット。互いに一息つく。《劍鬼》は太刀に闘気を集約させ——《不
動》はファイティングポーズを崩した。

「いやあ、参った。強いな、お前さん」

☆★

拍子抜けした。「へ？」と声を漏らしたほどだ。あるいは何かの作戦かと勘繰るレベル。

それほどジンの降参は唐突だった。

《剣鬼》の体感としては、ようやく前哨戦が終わったくらい。全力の5割も出してないのはお互い様のはずだ。

今からが楽しくなってくる頃合いだったのに——と思考して、この試合の趣旨を忘れていた事に気づく。

そも、この手合わせはジンが仕組んだもの。その狙いは相手が《剣鬼》かどうか探るものだったはずだ。それを一瞬で忘れて戦いに興じたのは——何とも言えない。

ピリついた雰囲気消しとばすジンの朗らかな笑い声。ずかずかと無遠慮に近づいてくるジンに思わず《剣鬼》も臨戦体勢を解く。ばしばしと背中を叩いて大笑。

親しげに肩を抱いて、耳元で告げる。

「今度は折れなくて良かったな」

それを聞いた《剣鬼》が心中で悪態をついたのは間違いない。しかしそれを表情に出す事はしない。降参のタイミングから怪しかった事もあり、心構えが出来ていたと言える。

首都でジンを相手に太刀を折られた事を引き合いに出されても痛痒はない、どころか何もわからない。そんな風に振る舞う。

？わずかに強張った《剣鬼》にしかし、ジンは追求する事はなかった。さっきのような牽制で《剣鬼》の表情が崩れればいいのだが、どうやらこいつ、演技は上手いらしい。

誰がどう見ても「わけのわからない事を聞いた奴」の顔を作っている。それに証拠もないのだ。

それに有望な若者をムシヨにぶち込むのは気が引ける。

ジンは自分にそう言い聞かせ、《剣鬼》と肩を組んで僅かばかりの観衆に向け、歩いて行くのだった。

追憶　　く煌都、暗殺者2人く

「まさか、伝説の《銀》^イ殿とこうして肩を並べて歩く事になろうとは」

? 《劍鬼》がそう言うのと《銀》も同じように笑う。

? 「ふふ……私も今、共和国で話題の《劍鬼》殿と目的を同じにしてるとは思わなんだ」
? どうやら同じ事を考えていたらしい。

片や《劍鬼》。

片や《銀》。

今やカルバード共和国の裏側で最もホットな話題として知られる正体不明の劍客と、
東方人街でまことしやかに囁かれる不老不死とも称される伝説の人物。

? 「……それで、救出対象は《銀》殿の娘さんだったかな」

「否。その友人……時折遊ぶ子供らよ。人攫いか……趣味の悪い教団の残党でなければ良

いのだが」

横を歩く男のフードと覆面に隠れた顔をチラと見やる。

その人物こそは《銀》——共和国における伝説の凶手だ。

?なぜ《剣鬼》が共和国に生きる伝説と共に歩いているのかは理由がある。

事の起こりは数時間前だった。

☆★

?《剣鬼》は準遊撃士から正遊撃士に昇格するために共和国中の遊撃士協会支部を巡る必要がある、現在は煌都ラングポートで遊撃士の活動をしていた。

その日は依頼の報告を終えて、二階で一息ついていたところで、支部の入口の扉が勢い良く開かれた音が聞こえた。

やけに慌てた依頼人だと思いつながら二階の階段から一階を覗くと数人の子供が受付に依頼をしている様子だった。

聞こえた限り、かなり慌てており要領を得ない。

子供の一人が階段から様子を見ていた《剣鬼》に気づく。

？「遊撃士さん！」

？「あつ、カタナの兄ちゃん！」

それに続いて子供たちは続々と《剣鬼》に気づき、子供たちは受付から《剣鬼》に詰め寄った。

「何があつたのかな？」

？子供たちの余裕のない行動から、よほどの事が起きたのかと思いつつ、《剣鬼》は努めて冷静に訊く。

「あのね、リーシャちゃんが誘拐されちゃったの！」

「ちがう！誘拐されたのは別の子！リーシャちゃんはそれを追いかけたの！」

子供たちの話を整理すると、かくれんぼをして遊んでいる最中に、ひとりがいなくなった事が発覚。搜索する間に何人も消えていき、ついには誘拐の現場を目撃する。

? その場はお姉ちゃん格であったリーシヤが誘拐犯を撃退して事なき得たが、それ以前に姿が消えた子供は戻らず、リーシヤが単独で捜索に出たという。

? 残された子供たちがこぞって遊撃士協会支部に駆け込んできたというわけだ。

? 《剣鬼》はまず子供たちの目撃情報を聞き、リーシヤの捜索を開始。

「あつちに走っていった」と子供が指したのは、港に繋がる道だった。

? 港には倉庫区画がある。人や物を隠すにはうってつけだ。? 港という事実には《剣鬼》は冷や汗を流す思いだった。港という袋小路に立て籠もっている以上、陸路での逃走は難しいだろう。ならば、海路で逃げるつもりか。すでに逃走されている可能性もあった。

《剣鬼》は港に到着すると、周囲の気配を探り始める。より集中するべく、目を閉じようとした瞬間、視界の端を黒い影が横切った。? 構わず目を瞑ろうとするが、本能が警鐘を鳴らす。

? —— 危険。

? 共和国首都での議員暗殺の仕事をしていたからこそ、それを直感できた。

——後ろから首。

? 太刀に手をかけるのと同時に振り返りつつ防御の構え。

? 鉄と鉄との衝突音が響き、《剣鬼》は与えられた衝撃に後ずさりをした。

「ほう、我が一撃を防ぐか……」

眼前にいたのは、まさしく影と呼ぶべき存在。? 目の前にいるのに気配を感じない。

? すぐそこにいるのに何の音も発さない。? 視界に捉えているはずなのに存在が揺らいでいる。

? 認識する事が困難。

漆黒のローブに身を包むそいつは、一流を越えた所にいる暗殺者だ。

というのに、その手にある武器は大剣だった。? およそ暗殺者には似つかない得物。?
? なのにどうして、勝つビジョンが見えないのか。

《劍鬼》は冷や汗を垂らす。？開けた場所で、ヨーイドンで戦えばおそらく勝てる。？しかし、この倉庫区画という遮蔽物のある場所で気配を漏らさないこいつと戦ったらどうなるか。

考えるだに恐ろしい想像を振り払い、《劍鬼》は努めて冷静に太刀を構える。

？「どちら様ですかね？命を狙われる覚えはないつもりですが」

議員暗殺の件は問題ないはず。隠蔽はできているし、今の議会はもうロックスミス大統領の指揮下にある。《劍鬼》を狙う輩はいないはずだし、暗殺リストに載らないような三下議員が、眼前にいる凄腕暗殺者を雇えるとは思えない。

「その胸のバッジは……なるほど、そういう事か」

？《劍鬼》の胸に光る遊撃士の証明を見ると黒衣の暗殺者は大剣を納刀し、低頭した。

？「申し訳ない。どうやら私は勘違いしていたようだ。我が名は《銀》。攫われた子ら取り戻しにここにやって来た者だ」

——《銀》

その名は共和国に来て日が浅い《剣鬼》ですら知っていた。カルバード共和国における伝説の凶手。曰く、その身は不死身であるとか。

その《銀》が攫われた子供たちを取り戻しに来た、と。？何故《銀》がこんな案件に首を突っ込んでいるのか推測する。攫われた子供たちの中に《銀》の子供でも混じっているのだろうか。

確かにそれなら、焦って《剣鬼》に攻撃したのも納得できる。

？「私は子供らに依頼されて、誘拐された人たちを救出に向かっている遊撃士です」

？次いで名を告げようとするが、それは《銀》に止められる。

「いや、その得物と直前とは言え私の気配に気づく実力、その身のこなしから、今話題の《剣鬼》殿と推測するが如何に？」



?こうして、《劍鬼》と《銀》は知り合った。?現在、共和国で名の有る暗殺者2人。

2人はその後、若き才を目の当たりにする事になる。

一段落した所で《銀》と話をすり合わせて状況を確認する。

どうやら誘拐犯を追ったリーシャは《銀》の娘らしく、これで彼女の不自然なムーブにも理由が見ついた。ただの少女が誘拐犯を撃退し、あまつさえそれを追ったなどあまりにもおかしいと思っていたところだ。

ならば、この件はすでに解決されているのではないかとすら《劍鬼》は想像した。《銀》の後継がたかだかチンピラに遅れを取るとは思えない。

「ふむ……」

しかし《銀》はそうは思わないらしい。歩を進めながら沈黙考する彼の姿に《劍鬼》は想像を改める。

「もつと嫌なのは、件のリーシャさんが貴方：《銀》の娘だと知って誘拐を実行した場合……ですわね？」

《剣鬼》が現在遊撃士業務に励んでいる煌都ラングポートは共和国最大のマフィア《黒月》の本拠地だ。所属していないチンピラさえその影響下にある。

今回の誘拐犯は話を聞くだけに手練れではない。ただのチンピラが相手なら話は簡単なのだが、リーシャを《銀》の娘と知って誘い出したのなら、事はかなり複雑になってくる。

そもそも《銀》とリーシャが親子である事を知っている人間が限られてくるのだ。最悪の場合、《黒月》内部のゴタゴタに巻き込まれる可能性すらあった。

「私もそう思っていた所だ」と《銀》が言った所で、目的地に到着する。港の倉庫区画だ。気配を探ると、その中のひとつからわずかに人の気配を感じ取れた。

「……ですね」

「うむ」

《劍鬼》と《銀》は倉庫に足を踏み入れた。

倉庫内部は所狭しとコンテナが積んであり、一見すると迷路に見える。道順に沿って行動すれば相応の時間を割く事になるはずだ。

進入した2人の判断は早かった。積まれたコンテナの上を進む。双方が超人的な身体能力を持っていたからこそ執れた選択肢だった。

コンテナの上を駆けて倉庫の最奥部に到着する。

そこではたったひとりだけが立っている。

少女——

その人影をリーシャ・マオだと理解した瞬間だった。少女の腕がぶれる。

刹那の後、《劍鬼》の眼前には符を括り付けたクナイが迫っていた。太刀で弾く。背後で符が爆発した。

さらに次の瞬間、空中の《劍鬼》にリーシャが肉薄している。その貫手が《劍鬼》の

内臓を食い破るより早く、その腕を捕らえる。

「硬気功か。速度も合格点だが」

リーシャの腕を掴んだ《剣鬼》はそのまま少女の鳩尾に蹴りを入れ、地面に向かって投げ放った。

「かはっ」

辛うじて受け身をとったリーシャだが、それは致命的な隙となる一瞬。

「はい詰み」

《剣鬼》はリーシャの首筋に太刀を突き付けていた。

眼前の白刃を見て自らの敗北と死を悟る。しかし、その奥から現れた人影を見て、リーシャは息を飲んだ。

「お父さん？」

「うむ、無事なようで何より」

《剣鬼》は嘆息しつつも太刀を引き、「見てたなら止めてくださいよ」なんて言う。

「ふ。噂の《剣鬼》殿と比較し我が娘の力量を測っておきたかったゆえ。許されよ」

《剣鬼》は太刀を鞘に納めつつ肩を竦めた。

この年頃で、これだけの力量があるのなら、身体の完成された数年後には、いったいどれほど隔絶した実力者になっている事かと。

「末恐ろしいな……」

ひとまずリーシャが落ち着いた所で状況を確認した。誘拐された子供たちは無事で、誘拐犯は全滅。これでナギトの不安は杞憂となった。《黒月》のゴタゴタ云々もすべては誘拐が成功している事が前提となるからだ。

ちなみに《銀》の正体とリーシャがその娘である事について《剣鬼》が知った事実

ついでには、《銀》側も《劍鬼》の正体を知っているため互いに弱味を握り合っている状態になるため不問となった。

そして、いくつか短く言葉を交わすと《劍鬼》と《銀》は別れる。この邂逅が後の時代に何を齎すのかは未だ誰も知る由もなく——そして。

そして、蛇が動き出す。

追憶 　　く鬼とBとCatとく

煌都ラングポートから辺境へと《剣鬼》が戻った。地道な活動が認められて準遊撃士から正遊撃士へと一歩近づき——一度、慣れ親しんだ辺境へ戻る事になったのだった。

共和国北西部にあるこの町はアルマイル市より北に位置し、はつきり言つて田舎である。そのため大した問題もなく、アルジュナー人で業務を回せる支部だった。

そこに《剣鬼》が来て、その育成もある程度は終わり、ぶつちやけ人手は充分過ぎるほどであった。

「ああ、今度準遊撃士がこちらに研修に来る事になった」

帰つて来て一息ついていた《剣鬼》にアルジュナが言う。興味のない話題だ。強いて言うなら「どうしてこんな辺鄙な場所に？」だ。

「リベール王国からで、名をアネラス・エルフィードという」

「はあっ!?!」

危うくコーヒーを吹きかけた《剣鬼》。興味のないはずの話題が急に現実的な危機感を伴ってきた。

「アネラス……アネラス・エルフィードって言いました?」

確認するがアルジュナは「ああ」と答えるだけ。よもや同姓同名の別人という事もなかろう。今度この辺境に来るらしいアネラスは《剣鬼》の知人だった。というか兄弟同然に育った女の子だった。

☆★

その日の業務を早めに終わらせて《剣鬼》は遊撃士協会支部でアネラスの到着を待っていた。微妙に落ち着かないのは後ろめたいからだ。ほとんど何も言わずに師の元を

出奔した。手紙で共和国で遊撃士をやっている事実は伝えたが、おそらくその情報を辿ってアネラスはここまでやってくるのだろう。

「ぬーん……………」

時計を確認する。すでにアネラスの到着予定時刻から1時間が経過しようとしている。時計を確認する。すでにアネラスの到着予定時刻から1時間が経過しようとしている。

遅れている理由はいくらでも考えられた。乗り物の遅延や何らかのアクシデントが起きたなど。可愛いものが好きなアネラスだ、単に道草を食っている可能性すらあった。

ぬいぐるみを抱きしめて目をハートにしたアネラスを想像すると、こうして構えているのが馬鹿らしくなる。ため息をひとつした所でアルジュナが支部に帰還した。

「今戻った。…………おや？」

「お疲れ様です」と声をかけた《剣鬼》だが、アルジュナの視線は支部内の掲示板に向けられている。

「これは……依頼か？」

その視線の先にあつたのは封筒だ。《剣鬼》が業務を終わらせて支部に戻つて来た時はなかつた。気づかなかつたのは掲示板が死角にあつたせいだ。

アルジュナは封筒を掲示板から引き剥がすと、中から便箋を取り出した。

「む、これは……!？」

素早く視線を走らせたアルジュナは顔をしかめ、その便箋を封筒ごと《剣鬼》に手渡す。

「これはお前への依頼……いや、挑戦状と言つたところか」

“挑戦状”という物騒なワードに《剣鬼》も眉根を寄せ——、そして便箋を読む。

「——ッ」

最悪の想像に息を飲む。便箋の——挑戦状の内容をまとめるところだ。

準遊撃士アネラス・エルフィードの身柄は預かった。返して欲しくば謎を解け。なお《剣鬼》以外が謎解きに参加した場合、人質の命はない。《怪盗B》より。

実際はもつとキザったらしい文面だったが、要点はそこだ。これは《怪盗B》から《剣鬼》への挑戦。本来付き合う義理はないが、人質がいるとなれば話は別だ。

「《怪盗B》と云えば大陸西部で暗躍する泥棒だな。どうするつもりだ？」

アルジュナは端的に以降の動きを《剣鬼》に訊ねる。

「誘いに乗るしかないでしょう」とわずかに怒りを滲ませながら《剣鬼》は決意を言葉にする。封筒に残った凝ったつくりのカードを抜き出し、《怪盗B》の繰り出す「謎」とやらを拝見した。

そこには次の場所に繋がるヒントが書かれている。謎を解けば、行くべき場所がわかるという仕組みだった。

「行つてきます。アルジュナさんは支部で待つててください。ハツタリの可能性もある」

「ああ。もしアネラス・エルフィードが何事もなく到着したらお前に知らせよう」

アルジュナに礼を言つて支部を出る。行き先はカードが暗示した場所だ。



《怪盗B》——主にゼムリア大陸西部で活動する怪盗だ。その盗みの技術は卓越したもので、エレボニア帝国から戦車を盗み出した事もあるという。その鮮やかな手並みから熱狂的なファンまでいるとか。

「…これで7つ……」

《剣鬼》は順調に謎解きを進めていた。〃B〃の文字が刻まれたカードの謎かけを読み解き、次の場所へ。アルジュナに遊撃士として扱われなければこうもスムーズに謎は解けなかっただろう。

「おや、それはもしかや怪盗Bのカードではないかね？」

新たなカードをポケットにしまう直前、すれ違う男が《剣鬼》に声をかけた。

いかにも貴族という風体の男だ。このカルバード共和国も90年以上前は王国だった。今も爵位を失った元貴族がいるとは聞くが、この男はどことなく胡散臭い。

「ええ、よくご存知ですね。この件は遊撃士協会に届けられたものです。すぐに解決いたしますのでどうかご安心を」

「遊撃士協会に？なるほど、かの怪盗も思い切った事をするものだ。いや、実は私は彼のファンだね。よければカードを見せてもらえないか」

？《剣鬼》は訝しみつつも貴族風の男に怪盗Bのカードを見せた。

？怪盗Bの情報は遊撃士協会にもいくらか出回っている。正体こそ掴めていないものの、今まで集めたカードは回ってきた情報に記されていたものと相違ない外観と内容であった。？どこぞの暇人がカードを複製し遊撃士協会に喧嘩を売るわけもなし、これは怪盗Bからの挑戦に違いないと思っていた。

？「なるほど……やってくれたな、あの仔猫」

その、妙な呟きを聞くまでは。

「ふむ、妙だな……私の記憶によれば怪盗Bは人の心は盗んでも人そのものを盗む事はなかったのだが」

？怪盗Bのファンを自称する貴族風の男によれば怪盗Bは人は盗まないらしい。

しかし、今回は実際に遊撃士とは言え人を誘拐している。そんな手腕を持つ人物が怪盗B以外にいるとは思いたくないものだが。

？「頑張ってくれたまえ。私は怪盗Bのファンだが、人が盗まれたと言われればさすがに応援するわけにはいかないからな」

貴族風の男はそう言って《剣鬼》にカードを返すと足早に去っていった。

《剣鬼》は貴族風の男に不信任を抱きつつも、カードに示された場所に進む。

？10枚目のカードには「最後」の文字が記されていた。文言が示す先はこの辺境の町を見下ろす丘陵地だ。絶壁になっていて町から頂上は死角になっており、登頂するには反対側から回り込むしかない。

なるほど、この狭い辺境で人や物を隠すにはうつつけだと《剣鬼》は思った。

果たして丘陵地にアネラスの姿はあった。どうやら気絶しているようで早めに回収して戻りたい所だが。

「隠れているのはわかっている。さっさと出て来る事だ、怪盗B。……いや、その模倣犯かな？」

丘陵地の頂上には大小様々な岩が転がっている。その中のひとつから気配を感じ取った《剣鬼》は殺気を放った。

すると岩の影から出てきたのは年端もいかない少女だ。

「あらあ、気づいてたのね。さすが《剣鬼》とまで呼ばれる遊撃士さんだわ」
「楽しそうに笑いながら、スミレ色の髪をした少女が黄金色の大鎌を揺らす。それだけで感じ取る、常外の雰囲気。」

「……こっちの素性も筒抜けか。とつとつアネラスを置いて帰りな。さすがにお前ほどの

幼女の首を落とすのは気が引ける」

およそ齡10程の少女から放たれる殺気ではないそれを《劍鬼》はその倍する殺気で打ち返す。

？「うふふ、素敵だわ。あなたを倒したらレーヴェは褒めてくれるかしら？」

「背伸びした言葉遣いをしてても所詮は褒められたいだけの子供かよ。くだらない事に巻き込んでくれてよ」

《劍鬼》は太刀を抜く。？迸る殺気は、相手を恐怖させるもの。相手が年相応にビビツてくれるなら儲けものだが、どうやらこの少女には効果はないようだ。

「結社《身喰らう蛇》《執行者候補生》レンよ」

レンと名乗る幼い少女は、名乗りをあげると鎌を持って《劍鬼》に向かって駆け出した。

ここちらの素性はどうかやら結社とやらに知れているらしい。ここで、このレンという少

女を抹殺した所で何にもならないだろう。

?しかし、だからと言ってそれらの理由が《剣鬼》の剣を鈍らせる要因にはならなかった。少女を殺すのは気が引ける。しかしそれだけだ。1ヶ月も経てば顔も思い出せなくなる。

振られた鎌をバックステップで躲すと、今度は鎌の軌跡をなぞるように逆方向に大鎌が振られる。? 2撃目で鎌の柄を掴み、次はこちらの番とばかりに太刀を振るうと、レンは《剣鬼》と同じようにバックステップで避ける。

得物である大鎌を手放す選択を一瞬の内にやってのけたのは見事だと思うが、武器を失ってはなにもできない。

?かと思いきや、レンはニヤリと笑いながら右腕をあげた。

?「《パテルⅡマテル》!」

その呼び声に応えるようにスマレ色の巨体が姿を現した。

「いんなの、どいこ…!?!」

隠していたのか。人の体軀などをゆうに越すその人形兵器。現代科学の粋を超えたテクノロジーで製造されたそれを前にしかし、《剣鬼》は臆さない。

パテルⅡマテルは肩部に備え付けた砲口を《剣鬼》に向ける。莫大なエネルギーが充填され発射される——前に、《剣鬼》はレンから奪い取った大鎌を投擲した。

黄金色の鎌はパテルⅡマテルの肩の砲口に突き刺さる。暴発を防ぐためか集中していたエネルギーは消失した。

続いてパテルⅡマテルは《剣鬼》を薙ぎ払うべく腕を大きく振り上げたが。

「剣鬼七式」

剣鬼七式とは、《剣鬼》が八葉一刀流を超越する剣術を生み出さんとし、考案した七つの技である。なんとなくカツコいいから七式にしたわけだが、今現在で4つまでしか具体案が出ていない。

「二ノ太刀」

中でも「一ノ太刀」は相手を両断する事を主目的に開発した威力重視の新戦技。厚い装甲に守られたゴルディアス級は良い試金石となる。

瞬間二振り。上下から挟み込むように放たれた斬撃はまるで敵を食い破る顎だ。

「——天地喰閃！」
てんちくわうひらめき

それは《剣鬼》に迫っていたパテルⅡマテルの右腕を斬り断った。多少以上の抵抗はあったものの、クルダレゴン合金で出来た装甲を切り裂く威力には《剣鬼》もご満悦。笑みに歯を食いしばったまま《剣鬼》は落ちたパテルⅡマテルの右腕を足場にして跳び上がる。

振り上げた一太刀には先程の天地喰閃と同等の闘気が込められていて。

「ダメ！ やめて!!」

それを振り下ろすだけで、

「このガラクタも終い——ッ!？」

振り下ろすだけで、終わるはずだったのに。

《剣鬼》の身体は空中で止まっていた。それは人の成せる業ではないが、《剣鬼》自身の意思によるものでもない。

驚愕すると同時に何者かがこの場に來た事を《剣鬼》とレンは悟った。

？「やれやれ、どうなるかと思ひ、見学させてもらっていたが……そろそろ潮時ではないかね？ 我が名を借りた仔猫よ」

？現れたのは、白い衣装を纏った紳士風の男だった。？淡い青色の髪をなびかせて、目の部分を覆う羽根つきの仮面を着けたそいつは、先刻《剣鬼》と会話した男だ。

「ブルブラン……今回ばかりは助かったわ。あと、名前を借りた事は謝っておくわ」

？「次はないぞ、可憐なる少女。そろそろ《執行者》になる頃合いだろうか？あまりお伊太が過ぎぬように注意しておこう」

レンはブルブランの注意には俯くばかりで、次の瞬間、「パテルIIマテル」と巨体を呼ぶとその手に残って飛んでいってしまった。

「むん…つと。さて、ようやく真打登場って所かな？」

？《剣鬼》が力を込めると、ブルブランの投げたナイフが《剣鬼》の影から弾かれる。それで《剣鬼》身を縛っていた影縫いは解けた。

空中に縫い止められていた《剣鬼》が着地するのを待つてブルブランは自己紹介した。

「いかにも。結社《身喰らう蛇》が《執行者》No. X《怪盗紳士》ブルブラン。世間を騒がす怪盗Bとは私の事で間違いはないよ。此度は我が名を騙る偽者がそちらのお嬢さんを誘拐してしまったことは誠に遺憾に思う。こちらに戦う意思はない…：…：どうか刃を納めてはもらえないだろうか？」

「悪いが国際指名手配されている犯罪者を逃すわけにはいかないな、遊撃士としては。

まあ、お話次第にはよるが。幸い、見物者はいないしな」

《剣鬼》は自分でも不思議なほど、結社《身喰らう蛇》とやりに興味を覚えていた。そのため、こんな下手な取引に乗り気になっているのだ。

“情報をくれれば見逃す事もやぶさかではない”——《剣鬼》が暗にそう言うのと、ブルブランは「よかろう」と杖をくるりと手の中で弄ぶ。

「まず……結社《身喰らう蛇》とはなんなのか？その目的は？構成員は？《執行者》とは？その候補生とは？あの機械は結社の技術力によるものなのか？さて、どれからでも答えてくれていいぞ？」

ブルブランは仮面の奥で「ふむ…」と唸ると、言葉を選ぶように慎重に口を開く。

「それでは順番に答えていくとしよう。まずは結社《身喰らう蛇》とはなんなのか…だったか。我等は盟主の元に集う集団だ。目的は七至宝の行く末を見届ける事だと聞いている。次に組織の構成だが、まず盟主があり、その下に《蛇の使徒》、《執行者》となる。《執行者》にはあらゆる自由が盟主により認められており、命令違反もその範囲内だ。《執行者候補生》とは聞いた通りだな。スカウトもしくは志願して来た者を《執行者》候補として育てている過程というわけだ。その他にも強化猟兵などの部隊がある。そ

してあの機体《パテルⅡマテル》だが、未だ未完成ながら結社に連なる組織の技術力の賜物、とすべきだろうな」

ぺらぺらと、やけに簡単に話すブルブラン。《剣鬼》は疑念を抱くが、こういったやり取りではブルブランの方が一枚上手であった。

ブルブランの体が淡く光に包まれる。風が巻き起こると同時に真紅の花びらが舞った。

お喋りは何かをするための時間稼ぎだったのだ。《剣鬼》はそう見ると同時にブルブランに斬りかかるが、太刀は空を切るのみ。

「またの邂逅に期待しよう、《剣鬼》よ！ さらばだ！」

姿の消えたブルブランの声だけが木霊する。

「……逃げられたか。情報は知れたし良しとしよう」

しかし《剣鬼》に悔しさはなく、むしろこの決着を順当とすら感じていた。

未知の組織に対して多少の知識は得られたし、本命であるアネラスの身柄も確保できた。犯人を捕らえる事はできなかったが、結果としては充分であった。

《剣鬼》は気絶しているアネラスに近寄ると声をかける。

「おい、おーい…アネラス？　アネラスさんよう」

「んふう、あと五分……」

誘拐された彼女は可愛らしげなぬいぐるみを抱いたまま縛られもせず転がっていた。その様子は気絶というよりは安眠である。

「あと五分」などと寝言を言う彼女を連れ帰るのが、遺憾ながら今回の依頼だ。依頼じゃなければこのまま放置して帰った所だがそれもいくまい。

？「おいこら、アネラス・エルフィード！」

？「うひゃい！すみませんクルツ先輩！寝坊しま………つてあれ？」

？「おはようございます、アネラス・エルフィードさん。あなたは誘拐されていたのですが、身に覚えは？」

飛び起きたアネラスに質問を投げかけるが、当の本人はポカンとした表情をしている。

「あれ、お兄ちゃん、何でここにいるの？ 私は可愛い女の子と遊んでいたはずんだけど……… あつ、今日つてお兄ちゃんが遊撃士になったつて聞いて共和国まで来た日だっけ!？」

可愛い女の子と来た。十中八九、あのレンという少女の事だろう。レンがそういった手管に長けているだろうと《剣鬼》は確信している。

「おう、今日はその日だ。その女の子の事は覚えてるか？ あとお兄ちゃんつて呼ぶな」

「いいじゃんお兄ちゃんです。……あれ、良く思い出せない。確かあの女の子が一人でいたから話しかけて、お茶会を開いて、それから……」

「お茶会ね……」

察するに一服盛られたという所か。遊撃士になった所で脇が甘いのは相変わらぬアネラスだ。しかし《剣鬼》もレンが無垢な少女のふりをしていたら見抜ける自信はなかった。

それゆえあまり突っ込んで話を聞かず、手を貸してアネラスを立ち上がらせる。

「よし、したら支部に案内すつぜー」

「うんー！」

そして2人は肩を並べて遊撃士協会支部に向かって歩いていくのだった。

追憶
（鬼と狼）

アネラス・エルフィードはリベール王国で活動する準遊撃士だ。？ 《劍仙》 ユン・カー
ファイを祖父に持ち、その祖父から「技は全て教えた」と言われる剣士である。

？ まあ、教えられた技をすべて習得しているかと言われればそうでもなく、兄弟弟子の
《劍聖》たち並みの練度でもないわけだが。？ しかし、その血筋は本物である。？ 東方劍
術の集大成とさえ呼ばれる『八葉一刀流』。一の型から八の型までがあり、どれかの型で
皆伝した者は《理》に至るとされ、《劍聖》と呼ばれるようになる、まさに世界でも最高
峰に位置する劍術の開祖が実の祖父なのだ。？ 《劍聖》たちに劣るとは言え、その実力
は準遊撃士としては充分と評価されていた。

？ 「それじゃあ、五の型で」

「オツケー、んじゃ合図はそっちでいいぞ」

そこはいつか《劍鬼》と《不動》が立ち合った場所だ。そこに八葉の劍士2人が互いの得物を構えて対峙していた。簡単な話だ。？《劍鬼》がアネラスを《怪盜紳士》が所属する組織から救い出した翌日、アネラスが《劍鬼》に「久しぶりに試合しない？」と持ちかけて来たのだ。？幸か不幸か、今日達成すべき依頼はすべてアルジュナ単独で片付けられる量と内容だったため、アルジュナの「今日の依頼は俺に任せておけ。試合をして来るが良い」の言葉がトドメとなり、《劍鬼》はアネラスと試合をする事になったのだ。

？そして、アネラスが言い、《劍鬼》が了解した「五の型で」というのは《劍鬼》がアネラスとの試合で使う型の事である。？要は型の縛りだ。アネラスとの試合で《劍鬼》は五の型しか使つてはいけない。

数年前、《劍鬼》が師の立会いの元でアネラスと模擬戦をした結果、完勝という言葉が可愛く聞こえるほど完勝してしまったため、師から「次からおぬしは型を1つだけしか使つてはならぬ」と言われ、それが次も、その次も続き、今に至るまでずっと1つの型の縛りでアネラスと模擬戦をしているわけだが。？と、言うのも数年前から今日に至るまでアネラスが《劍鬼》に一勝もしていないからだ。？師から聞いた話によると、アネ

ラスが一勝する毎に《剣鬼》の型の縛りが1つずつ緩くなる予定だったのだが、その一勝の遠い事、遠い事。

? 「じゃあ行くよ!」

アネラスが太刀を抜いて駆け出す。

ダダダダダッ、とダツシユしその勢いを利用して一瞬のうちに加速した。傍目には消えた様に写っただろう。

「疾風!」

? しかし、《剣鬼》には見えていた。? すれ違いざまに斬りつけようとするアネラスの剣を躲す。

? 「いち」

? 躲しながら1、とカウントする《剣鬼》。

? 「やあつ!」

? 《剣鬼》に躲されたのを認めると、アネラスはすぐに体を捻りながらそれを力へと変換しながら太刀を振り抜く。? 刃から放たれるのは疾風から派生する“裏疾風”によ

る鎌馳の風。

直後、キンツ！という音と共に風の刃が消え去った。アネラスは見えなかったが、何をされたのかはわかった。？アネラスの太刀から生まれた風の刃は《剣鬼》が振り抜いた太刀にかき消されたのだ。？しかもその振り抜いた太刀はすでに鞘に納められている。

？五の型の基本である「残月」。カウンター向きの残月は居合だ。？《剣鬼》のそれが見えぬレベルの速さである事はアネラスにとり百も承知の事実だ。故に、試合開始からここまではアネラスの予想通り。

？「はああああ」

？太刀を振り抜いた勢いのまま、アネラスが回る、回る。？回転により発生した気流は周囲のものを引き寄せる「独楽舞踊」。

？「おっ」

？巻き込む風に引き寄せられた《剣鬼》は驚きの声を出す。？続いて振られた太刀を避けるのは不可能と判断してガードする。

？「に……い!？」

? 1に続き2とカウントする。否、カウントした瞬間、本当に想定外の事が起きた。

アネラスの姿が消える。一瞬の後に残像が《剣鬼》の背後で収束した。

? 「くっ……」

? 反応が遅れた《剣鬼》の体から血が滴る。

? 振り返るアネラスに笑顔の花が咲く。

「よしっ、まずは一太刀!」

? 初めてだ。アネラスが《剣鬼》に一撃を当てたのはこれまでは迎撃され、躲され、防御される。? そのどれかだった。しかし今回、初めてダメージを与える事ができた。これは小さな一歩だが私にとっては大きな一歩だ。? あのカウントは謎だが、それでもアネラスが辛うじてとは言えダメージを与えたのは紛れも無い現実。

「驚いたな……成長したなアネラス。最初の疾風はスピードを加減してたのか」

「まあね、いつまでもお兄ちゃんには負けてられないから」

「だからお兄ちゃんはやめろと言うに……だいたい同い年だろ」

「うーん、でもなあ。私にとってお兄ちゃんはお兄ちゃんだし。ほら、そんな事より今は集中、集中！今日は太刀記念に勝っちゃうんだから」

「はいはい。………いいか、あと3回だぞ？」

？ 《剣鬼》がニヤリと笑うが早いか、アネラスが再び太刀を構える。

絶倒の気迫を込めて、必殺の技を解禁する。

「はああああー！」

？ その刃に光が灯る。？ 光は刃そのものとなり、《剣鬼》に放たれる。

？ 「せいっ！」

？ 中円をカバーする一条の光の刃。

？ 「これで終わりだよっ！」

？ それだけでも必殺の威力を持つと言うのに、もう一条の光の刃が追加された。

十字を描き《剣鬼》に殺到する光の刃。？ それはまさにアネラス・エルフィードのSクラフト。

？「光破斬！」

？驚く。ただ驚く。《劍鬼》は驚愕すると同時にいつまでも子供扱いは失礼だな、と思つた。？アネラスが選択した五の型縛りにちなみ、五回だけ勝てる瞬間を見逃してやろうかと思つていたが……しかし、あと3回と言つた手前、今回ばかりは見逃してやるしかない。

本気を出す。ただ全力で太刀を振り抜いた。？それは後に“神威残月”と名付けられるただの居合。

？「五の型、残月」

？エネルギーの衝突はなかった。？アネラスによる『光破斬』。？《劍鬼》を倒さんと放たれた光の刃は、ただの“残月”に、斬られた。

神速の斬撃により生まれた斬撃は光破斬を斬り消すとアネラスの真横を通過した。

「さん、だ」

？「うそ、だよね……？」

? 現実を認めたくないアネラスに、《劍鬼》はニコツと笑った。

「ガチでえーす」

? それからは早かった。? 光破斬で試合を決めるつもりだったアネラスに次手はなく、繰り出される太刀を「よん、ご」と見逃し、続く「ろく」をいう代わりに己が太刀をアネラスに突きつけ試合終了。

もう何回も前から続く結果は今回もまた、変わる事はなかった。

☆★

遊撃士とは、正義の味方である。? 基本的に、体的に、社会的に。

人々からの視線には期待や信頼、憧れが込められている。

? そういった光が大きくなれば、必然的に影の部分もより深くなる。

今回、《劍鬼》に下された命は1つ。

? “蛇を駆逐せよ”

遊撃士協会本部から《劍鬼》の住む家に書簡が届いた。
封を切れば、そこには“裏”の符牒が。

? 「……仕事か」

はつきり言つて気が思い《劍鬼》。この辺境で遊撃士として活動して、人々から感謝される喜びを覚えてしまつては、誰にも誇れず、むしろ後ろ指を指される“裏”の仕事は嫌に思う。

しかし、“何でもやる”と息巻いて師の元を離れた以上、ここで退くわけにはいかない。
い。

? 書面にはわずかに、蛇を駆逐せよ。としかなかつた。? 眉を寄せる《劍鬼》だったが、

支部に行くとは自分を指名した依頼が入っていると受付に知らされる。
? 「なるほど」と呟く《剣鬼》に依頼人が近づくと。

「近々、この町に家族と観光に来るつもりなんです。だから、事前にはどんな場所か知っておこうと思ひまして。噂の遊撃士さんに街案内なんて恐れ多いのですが、本日はよろしくお願ひします」

につこりと柔和に微笑む男性。? 《剣鬼》もわずかに見覚えがあるこの男は裏遊撃士の事情に連なる者だ。

観光案内と称して男を支部から連れ出し、人気のない道を歩く。歩きながら、観光するように男は語り出した。

「私の事はわかるかな?」

「裏の人、ですよ。名前までは……すみませんが」

? 「いいんだよ。書簡は見たかい? 正直なところ、意味不明だったと思うのだが」

「蛇を駆逐せよ、でしたか」

「ああ。君は《身喰らう蛇》という秘密結社を知っているかな？」

「少し前、戦闘になりました。確か、執行者N o. Xのブルブラン……と候補生のレンという少女と」

「ふむ、ならば話は早い。実は昔から遊撃士協会はかの結社とあまり良くない関係にある」

「その男は《身喰らう蛇》について語った。」

曰く、大陸各地で奇妙な事件を起こしたりしているらしい……が、現実的な意味ではあまり脅威度は高くはないそうだ。？しかし、構成員は非常に興味深い面々が揃っているとの事。

遊撃士協会が掴んでいるだけでも、剣の達人や殺人拳の使い手、奇術師など。？様々な分野に秀でた人材を多く獲得しており、その技術力は世界水準を大きく上回るという

話だ。

……たしかに、あの《パテルⅡマテル》というロボットも既存の技術力によるものはなかった。

その結社の構成員が、この共和国国境に降り立ったとの情報を遊撃士協会は掴んだ。
? 偶然にもその場にいる《剣鬼》にその構成員と接触してもらい、情報を得る。あわよくば捕虜として本部に移送する……というのが《剣鬼》に下された命令だ。

? 「そこで君には蛇の構成員に接触してもらいたい。その構成員の性別は男。年齢は20代後半〜30代。髪は茶髪で黒のスーツとサングラスを身につけている、と情報員より伝えられている。しかし、情報員による情報はここまでだ。情報員は蛇の構成員に発見されたと報せを入れるなり、音信不通となっている」

? 音信不通。《剣鬼》は思案する。? 情報員は蛇の一員に捕らわれたと考えるべきか。
? となれば、こちらがしようとしてたように蛇がこちらの情報を得ている可能性があ

る。

？「わかりました。それじゃあ今からその人物についての情報を集めます。……観光案内の依頼は達成ということですか？」

「いいとも。これからは自分で回ってみるさ。？家族と観光に来るとするのは本当なんですね。ふふ、仕事で来るといふ名目だと領収書が切れていいものだよ」

大人の笑みを見せた男性に別れを告げると《剣鬼》は支部へと戻った。

？すると、依頼で支部を離れたアルジュナとアネラスが戻って来ていない事を確認した。街道の魔獣の掃討が本日の業務で、いつも通りならもう帰って来ていてもおかしくはない時間だ。

アネラスの研修という側面があるにしても、遅過ぎると判断した《剣鬼》は街道に向く事にした。

予感は、すでにあつた。

☆★

街道から脇に逸れて小道を抜けた先の広場で、《剣鬼》は目的／対象を発見した。

「おお？意外と早かったじゃねえか」

そう言って、男は手に掴んでいたものを離れた。

？「ぐっ……」

？アルジュナは男から胸ぐらを放された事によって地面に衝突し、苦悶の声を漏らした。？その側には半ばから折れた槍と弦の切れた弓が転がっている。？少し離れた所には、アネラスが刀を握ったまま気絶していた。

「——お前が、蛇の一員か」

？言いたい事をすべて飲み込んで、確認するように、自分を納得させるように《剣鬼》は口にした。

黒のスーツとサングラス。聞いていた通りの風体だ。

「そうだ。執行者N.O. VIII《痩せ狼》ヴァルター」

男はそう名乗ると、倒れ伏すアルジユナの背中に足に乗せた。

？「ハッ、それにしてもなんだあ？ 《剣鬼》がいるとこの遊撃士協会のメンツはこんなに弱いのか!? まったく、拍子抜けしちまったぜ……、だがまあ、てめえは楽しませてくれるんだろ？」

？ヴァルターはアルジユナを蹴って《剣鬼》の目の前まで寄越した。？《剣鬼》は戦術オーブメントを駆動させ、癒しの力を秘めたアーツをアルジユナへと施す。

？「先輩、少しだけ待っててもらえますか」

「…すまない。頼む」

？短いやり取りを終えるとアルジユナも気絶した。

それを見届けた《剣鬼》は顔を上げる前までに、すでに戦闘態勢を整えていた。

静かな怒りと好奇心を滲ませて——

？「いくぞ《瘦せ狼》。斬られる覚悟はいいな」

「ぬかせ《剣鬼》い！」

——戦いは、始まる。

？疾駆。2人は同時に大地を蹴る。それで地面は抉れ、爆発的な推進力と共に初めの一撃を見舞う。

——剣と拳。？そのどちらもが紙一重で躲され、掠めた剣圧と拳圧が両者の頬に一条の傷を生み出した。

2人が2人とも、瞬時に理解する。？この敵の攻撃はすべて必殺の威力を持っている。一撃一撃が常に必殺。故に受けるわけにはいかない。一手間違えれば、それだけでデッドエンド。行き止まりならぬ、生き止まりだ。？これぞまさしく、達人級同士の殺し合いだ。

《劍鬼》は振り切った体勢から袈裟気味に太刀を振るった。？《痩せ狼》は右の正拳を突き出す。

最短距離を走った《痩せ狼》の拳が僅かに速い。《劍鬼》は太刀を振りかぶった分だけ遅れている。

《劍鬼》は攻撃を中断し、突き出された拳を上体を逸らして避ける。？拳にまわりついてきた風が《劍鬼》のバランスを崩した。《痩せ狼》は好機とばかりに回し蹴りを放つ。

？「オラア！」

？豪風を纏って襲来してきた蹴撃に、《劍鬼》は体を捻り、足裏でそれを受けてその勢いを利用して至近距離から離脱する。

？《劍鬼》は太刀を構え直しつつ、敵の戦闘力を分析する。パワーはある。全体的なスピードならまだしも、ハンドスピードも相手が上手。

「なら、ギアチェンジだ」

結論に達した《劍鬼》は、全身に闘気を漲らせ——爆発させる。

? これこそ八葉一刀流における絶招の基本にして王道。

「八葉功・一の型」

? 回り、廻り、巡り、繞る。これこそ螺旋の渦。果てなき回天。

? この絶招は身体能力が向上するわけではない。ただ、身体に染み込ませた動きを言霊と共に思い出すだけ。要はバランス重視だったものが防御重視に変わったようなものだ。

? この「八葉功」により《剣鬼》の身体の性質が螺旋へと変換される。これより先《剣鬼》が受ける攻撃はすべて螺旋により受け流される事になる。

「ハツ……大した功夫だな、《剣鬼》。期待はずれじゃねえ事を祈るぜ」
? 「その祈りは届かない」

消失。《剣鬼》の姿が消え去った。? 少なくともヴァルターの目にはそう写った。

怖気を感じた。ゾクリとする感覚。久しく感じていなかった、生死の境を行き来するスリル。

半ば本能的にヴァルターは裏拳を繰り出した。

?それは、背後へと移動していた《剣鬼》の胴体を穿つ——かに思えた。

が、打点はずらされ、ヴァルターの裏拳は《剣鬼》の太刀の刀身を捉えた。?達人級の一撃は武器に当たればそれを破壊し、持っていた者の手を痺れさせる。?《剣鬼》の太刀はゼムリアストーン製のために破壊される事こそないものの、手を痺れさせるには有り余る威力を秘めた裏拳だった。

?しかし、ヴァルターの裏拳にはまるで手応えはなかった。刀身を捉えた裏拳には、まるで太刀の勢いを後押ししたような感覚が残った。
?くるり、と回る。

?マズい。《痩せ狼》ヴァルターの思考は《剣鬼》による斬撃と同時だった。

☆★

?「期待外れだったろ…?予想より上という意味で」

?「チツ…:てめえ、わざとだな…?」

膝を着くヴァルターに《剣鬼》は太刀の鋒を突きつけたまま話しかける。?それに対し、ヴァルターは悪態を吐くように《剣鬼》を睨みつけた。

？「まあね。上からのオーダーは情報収集だから殺しちや意味がないし——」
？《剣鬼》は確かにヴァルターを斬った。？達人級の殺し合いなら当然のように絶命に到るはずの斬撃を受けるはずだったが、《剣鬼》は寸前で威力を弱めた。それは、依頼の内容—蛇の人間と接触し、情報を得る。あわよくば身柄を確保し遊撃士協会本部に移送する—のためだ。殺しては情報が得られない。

「気絶させて運ぶにしろ、そこからは俺の管轄外だし、《身喰らう蛇》って面白そうな情報を俺自身を知りたいって事もあるんだよね」

だからこそ、生かさず殺さず、ギリギリ気絶させない程度のパワーで斬ったのだ。
？「さて、それじゃあお話タイムと洒落込みますか」

太刀を肩に担ぎ、余裕を醸す《剣鬼》。すでにヴァルターは戦闘不能な程のダメージを負っている。その余裕は正しいはずだった。

その場に、新たに敵が現れる事さえなければ。

「そこまでだ、
《劍鬼》」

追憶　　く鬼と修羅く

街道から逸れた小道の先にある広場は、周囲を小高い崖に囲まれている。一種の袋小路のようなものと言えるだろう。

「そこまでだ、《剣鬼》」

そこに一人の男が立っていた。眼下の戦闘の決着を見届けた彼はそうして横槍を入れる。

《剣鬼》からその男は沈み行く太陽から逆光となっていて、姿形がよくわからない。《剣鬼》が目を凝らした一瞬で、男は崖から跳びたち《剣鬼》に一撃を浴びせる。

黄金の刃をゼムリアストーンの太刀で受け止める。想像以上に重い一撃に《剣鬼》は大きく後退した。

「来やがったのか」

守られるような立ち位置にいる自分に苦虫を噛む思いをしながらヴァルターは立ち上がる。

「ああ、お前と彼の戦いは見させてもらった。油断があつたとは思わんが、一瞬の隙を突かれたな」

「ああ、こいつは大当たりだぜ」

男を押し退けて前に出ようとするヴァルターだったが、制止される。

「すでに決着はついたはずだ。この先は俺が引き受けよう」

男の短い言い分にヴァルターは悔しさを滲ませてながらも納得し、自らのダメージも鑑みて引く事にした。

「チツ……、譲つてやるよ。これで貸し借りはなしだぜ」

「俺とお前の間に貸し借りなどなかったはずだが？」

男の言葉にヴァルターはもう一度舌打ちして、その姿を消した。足元に何らかの紋様が浮かぶ様はブルブランが消えた時と同じものだ。

《剣鬼》はブルブランに逃げられた事を思い出し、転移なんてものがあるなら、そもそも拘束は不可能であったと考え——その思考を隅に追いやった。

立ち姿だけでわかる。眼前の男の隔絶した実力を。一見した伶俐な態度はしかし、内に秘める炎熱を感じさせる。まるで冷たい炎だ。

その有り様を何と呼ぶべきか。鬼か、羅刹か、あるいは——

「名乗りが遅れてしまったな」

ヴァルターの姿が消え去り、男は《剣鬼》に向き直る。すでに臨戦にある《剣鬼》とは対照的に泰然とした佇まいのまま。

「結社《身喰らう蛇》執行者N.O. II 《劍帝》レオンハルトだ」

《劍帝》レオンハルト。そう名乗った彼は黄金の魔剣を構えた。灰色のコートとアツシユブロンドの髪が風に揺れる。

「盟主の命により、《劍鬼》……貴様を試す」

「……試す……?」

その言葉通りならレオンハルト——レーヴェ、引いては結社の連中がこの辺境に来たのは《劍鬼》が目的だったわけだ。

“相手の目的”という情報を得つつも、その内容が自己であった事に《劍鬼》は怒りすら覚えた。アルジュナやアネラスが今こうして倒れているのは自分のせいだと、筋違いの憤怒を燃やす。

「……そうかよ。……わかった、来いよ《劍帝》」

太刀を握る手の力を抜く。怒りで太刀筋を狂わせるわけにはいかない。心は熱くていい。頭さえ冴えているのなら。

「俺を、試してみろ」

突きつける鋒は、意志の表れである。

☆★

「言われずとも——！」

疾駆か跳躍か。一瞬で距離を詰めたレーヴエは横一閃に魔剣を振るう。それを紙一重で避ける——受け流す《剣鬼》。

螺旋の技術で受け流した威力をそのまま叩きつけるが、レーヴエは涼しい顔で防御した。

力を逃がすため、わざと後ろに跳んだレーヴエ。離れた距離は戦技を繰り出す絶好の

機会だった。

「迅雷——」

レーヴェの着地を待たずして《剣鬼》は雷速で斬りかかる。すれ違う刹那、視線が交わる。このスピードを視認できているのだ。これも当然のように防御された。しかし、元から一撃で決まるとは《剣鬼》も考えてはいない。

「重——！」

ゆえに、重なる。残像さえ置き去りにする速さを、何度も。『迅雷』——雷の速度で敵を斬る戦技を。

落雷の速度で何度も、何度も斬りかかる《剣鬼》だったが、レーヴェはそのすべてを防いだ。反撃こそないものの、業を煮やした《剣鬼》は次の手を打つ。

跳び上がった《剣鬼》は太刀に雷の力を込める。これは八葉一刀流の三の型と剣鬼七式の雷の型の複合戦技。

「龍雷撃——」

「遅いつー！」

力をためる一瞬。その隙間にレーヴェは魔剣を突き出した。闘気の奔流が《剣鬼》の体勢を崩す。新戦技「龍雷撃」はお披露目を邪魔されて不発。

危なげながら空中でバランスを取ろうとする《剣鬼》にレーヴェは追撃した。打ち合う太刀と魔剣。2度、3度と剣を合わせるたびに《剣鬼》は体勢を崩していき、やがてバランスを失った《剣鬼》はレーヴェの一撃で地面に撃ち落とされた。

魔剣での斬撃こそ防いだものの、地面に激突した《剣鬼》のダメージは相応のものだった。舞う土煙の中でふと冷静になった。

レーヴェが現れたのはヴァルターを倒した後だと思っていたが、おそらくそうではない。きつとあの戦いは観察されていた。だからこうも容易く対応されているのだ。

ならば再び、ギアチェンジする必要がある。

「八葉功・五の型」

立ち上がった《劍鬼》は力の入れ方を変化させる。納刀。直後、抜刀居合。斬撃が土煙を裂いて《劍帝》に飛来する。

迫る斬撃を魔劍で打ち消して、レーヴェは《劍鬼》に肉薄した。

「見切れるかな？」

破碎劍。素早く振り下ろされる魔劍は威力を伴ったもの。しかし《劍鬼》はレーヴェの挑発の通りに、それを見切っていた。

打ち下ろす劍撃を文字通り紙一重で避ける。『破碎劍』は地面を砕く。当然《劍鬼》の足場も不安定になる。――が、それを悪条件をもものもしない、居合一閃『残月』がレーヴェの胸板を大きく切り裂いた。

地を扶るほどの一撃を放つために踏み込んでいたレーヴェは刃を躲す事ができず、大きくダメージを追ってしまう。

後退したレーヴェは胸元の傷から流れる血を手で掬うと、それを眺めた。深い傷だ。苦笑んだレーヴェは魔劍を構え直して《劍鬼》と対峙する。

「その若さで凄まじい剣技だ。素直に賞賛しよう」

対する《剣鬼》は残月のために再び納刀したところだ。

「お前こそ。正しく『我流』——その歳で、自らの剣技を確立している」

レーヴェの剣技の骨子は西方剣術だ。荒々しいながらも機能美を感じさせる直裁な剣。それを独自に昇華している。

未だ『剣鬼七式』などと嘯かねば『己の剣』を認められない《剣鬼》とは大きな差であつた。

「ふ、かの八葉一刀流の者にそう言われるとこそばゆいな。しかし《剣鬼》よ……その才器、満たすのはここではなからう」

「なにを……?」

「わからんか。ならばこの戦い、俺の勝ちだ」

レーヴェの言葉の意味が、意図がわからず困惑した《剣鬼》。それに追い討ちするように《剣帝》は勝負の行く末を予言した。

「戯言だ」

「それを今から証明してみせよう」

次の瞬間、レーヴェの身体が二つに増えた。『分け身』のクラフトだ。しかも超スピードによる残像などとは違い、きちんと質量を持ち、本人の動きを再現できるほどの完成度を誇る分身体。高等戦技の代表格だ。

弾かれたように左右に分かれた2人のレーヴェが互いに違うリズムで《剣鬼》に襲いかかる。いくら迎撃に長けた五の型であっても、そのすべてに対応できるわけがなく、《剣鬼》は斬撃に押されるままに後退した。

五の型で対応できないなら、再び戦い方を変えるまで。

「雷身功」

我が身は雷光。我が身は雷鳴。我が身は雷撃。そういった自己暗示の元、《剣鬼》三度のギアチェンジ。今度は「八葉功」ではなく、雷の型に特化した絶招。

「雷電収束、雷光確立——」

闘気を練り上げて、人の形とする。

「——雷軀来々」

レーヴェの分け身を見たおかげで、それがどういう仕組みか理解できた。それは《剣鬼》なりの分け身だった。

「分け身——、模倣だけでなく、己の質も込めるか」

これまで《剣鬼》の分け身は吹けば飛ぶような脆弱なものだった。しかし今回のこれ

は違う。レーヴェエのものと同じように質量と再現性を兼ね備えた、正真正銘の分け身だ。そこにちよつとした性質も加えてある。

「迅雷・双^{ふたえ}」

レーヴェエに落雷と同等の速度で迫る2つの影。その片方を分け身に任せる事で対処しようとする。

「飛雷針」

が、レーヴェエの分け身は《剣鬼》の分け身が雷槍となり貫かれて消え、雷槍はそのまま《剣鬼》に向かって奔り、太刀に帯電された。

レーヴェエはその様子を見てとると、《剣鬼》とまともに打ち合わずに距離を取った。

「分け身に雷の性質……見抜いていたつもりだったが、存外厄介だな」

レーヴェエは《剣鬼》の分け身の仕掛けを見抜いてはいたが、その精度——人型と雷型

の切り替えの速さを見誤っていた。

《剣鬼》は帯電した太刀を振り抜き、雷を刃として飛ばす。レーヴェはそれを避けたが――

「雷軀遠来」

避けられた雷撃は瞬時に人型に変化すると、レーヴェの背中を斬りつける。その斬りつけた太刀も当然雷の性質を持ち、そのためかレーヴェの身体が硬直した。

「雷軀来々――」

その隙に。

「――来々」

《剣鬼》は、己の分け身を増殖させる。

「――来々！」

3体の分け身が、

「行け」

レーヴエに向かつて突撃する。

迅雷の速度でレーヴエに迫った分け身は接触と同時に炸裂する。

舞う砂埃で視界は塞がれるが、闘気でレーヴエの位置を見失う事はない。

跳躍した《剣鬼》は太刀にありつたけを込める。強大に過ぎる力を秘めた雷撃を、レーヴエに向けて振り下ろした。

「——雷神烈破！」

放たれた力は疑い様もなくレーヴエを直撃した。しかし、土煙の中のレーヴエの闘気は未だ健在。どういう事か、目を凝らす《剣鬼》に——

「見事だ」

《剣鬼》に向かつて放たれる賞賛。レーヴェは剣風で土煙を吹き飛ばすと、雷神烈破を受ける以前と変わらぬ姿で現れた。

「この俺にアーツを使わせるとはな」

アーツ——導力魔法。戦術オーブメントにクオーツをセットする事で様々な効果を発揮する、科学による魔法だ。《剣鬼》もその存在を知ってはいるし、使った事もあったが、馴染みは薄い。これまであらゆる敵は剣技のみで事足りたからだ。

しかもアーツは発動するまでに駆動という工程があり、戦闘中にそんな悠長な事をしていられないという事情もあった。

しかし、《剣帝》レオンハルトは最高峰とも言える戦闘の最中にアーツを使ってみせたのだ。《剣鬼》は驚くしかなかった。

今回、雷神烈破を防いだのは完全防御とかそういうアーツなのだろう。

「そら、足元に注意した方がいい」

《剣鬼》の足元に広がる紋様。周囲にはいつの間にか剣が突き刺さっており、それを軸に魔法陣は構築されている。発動する“シルバーゾーン”。受けたダメージはそこそこ、しかし一瞬思考がぼやけたのが致命的。

距離を詰めたレーヴェの剣撃をなんとか防ぐが、次いで放たれた回し蹴りには対応できずにたたらを踏んで後退した。

「くっ……」

かぶりを振って自己を再認識。シルバーゾーンによる混乱効果は解ける。

目を前に向けるとレーヴェはゆっくりと《剣鬼》に向かって歩いて来ている。左手の魔剣には炎が灯っていた。

「受けてみよ……《剣帝》の一撃を……!」

灯った炎が、轟々と煌々と燃え盛る。

確信できた、《剣帝》はこの一撃でこの戦いを終幕にするつもりだと。

「劍鬼七式……」

ならば《劍鬼》もそれに応えるのみ。

もう互いに余力は少なく、全力の一撃が放てる機会もないだろう。

放つ劍技は劍鬼七式、四ノ太刀。

拡大した刃で上下から挟み込み両断する一ノ太刀《天地喰閃》

込めた鬨気を解放する事で圧力を放つ三ノ太刀《破空》

四ノ太刀は、その中間を狙った劍技だ。

「——鬼炎斬!!」

「——大刀鍊!!」

互いに振り抜く刃は絶倒のもの。

《劍帝》の《鬼炎斬》は鬨気と共に周囲を炎で斬り薙ぎ払うSクラフト。

《劍鬼》の《大刀鍊》は太刀に鬨気の刃を幾層か纏わせて斬撃を拡張、一振りでも数回の斬

撃を刻むSクラフト。

《劍鬼》の刃が《劍帝》の炎を斬り消していく。《劍帝》の炎が《劍鬼》の刃を焼き薙ぎ払う。

それは拮抗していた。それは完全に互角。

「は、あああああああ！」

「ッ!?!」

互角のはずだった。

しかしその拮抗も、《劍帝》の裂帛と共に破られる。

鎬を削る刃を焼き斬り消して、鬼を斬る炎が《劍鬼》を打ち飛ばした。

吹き飛んだ《劍鬼》は絶壁に背中を強かにぶつけて倒れ伏す。立ちあがろうとするが、膝が折れて上手く立てない。

太刀を杖にして再度倒れるのを拒否するが、それだけだ。戦闘不能という表現が最も正しかった。

その《劍鬼》に、近づくレーヴエ。傷もダメージも《劍鬼》とそう変わらないはずだが、足取りはしつかりしている。

「貴様ではこの《劍帝》に勝つ事はできない」

それは先の予言と同じ内容だった。

「なぜなら《劍鬼》よ……貴様の剣は何にも至ってないからだ」

膝をつく《劍鬼》に、《劍帝》が魔剣を突きつける。

「何かに至った者とそうでない者とは地力が同じでも勝敗が分かれる。それが俺と貴様の差だ」

語るレーヴエに《劍鬼》は顔を歪めて忸怩たる思いだ。

「そんなこと……言われなくてもわかってる。俺は……それに至るために……ここにい

るつてのに……！」

顔を上げた《劍鬼》はレーヴエを睨みつける。それは如何なる感情だったのか。

「じゃあお前は！ 至ってるつて言うのか!？」

絶叫に似た問いかけ。吐き出した心は、意識を繋いでいた鎖を断ち切るに十分だった。

朦朧とする意識。揺らぐ視界の中で魔劍の鋒が降ろされる。

「——ああ。だが俺の至ったそこは貴様の目指す所とは対極にある」

倒れ行く《劍鬼》の視界に、悲しみを湛えた表情に釣り合わない炎のような決意を帯びた瞳の《劍帝》が映った。

「——修羅の道だ」

コートを翻し、《劍帝》が去っていく。？《劍鬼》はついに崩れ落ちる。顔から地面に突っ込みながら意識を手放した。

追憶　　く斯くして、《劍鬼》はく

「貴様ではこの《劍帝》に勝つ事はできない」

ゆら、ゆら。

「なぜなら《劍鬼》よ……」

ゆら、ゆら、ゆら。

？「貴様の剣は何にも至ってないからだ」

揺れる視界。歪む意識。

ひゆう、と息を吸い込んで目覚めた。

「…くそ…」

わかってる。

「わかってんだよ……んな事は…！」

あれからすでに100日が経過した。

今でも《剣帝》を名乗った男の言葉が耳から離れない。？わかっている。わかっているとも。

あの男と自分の実力はほとんど同じ。？だが戦えば10回中10回負ける。それは100回やつても1000回やつても変わらない。？それは何故か??《剣鬼》の剣が”至って”いないからだ。

？何かに至った者とそうでない者とは最後の最後で発揮できる力が違う。

わかっている。わかっているからこそ自分は遊撃士になつたんだ。



《劍鬼》は森を彷徨っていた。と言うのも、師を見つげるためだ。どこか浮き世離れた師は山や森などにいる事が多い。師に会って話がしたかった。

だから《劍鬼》は共和国から逃げてきたのだ。？誰もいない支部で目覚めた《劍鬼》は、わずかな文言を綴った手紙を残して共和国から逃げてきた。

わからなくなったのだ。？今まで自分が辿ってきた道が正しかったのかどうか。？《劍鬼》は今まで自分の道は正しいと思っていた。万人にとつての悪であっても自分にとってはそれが正しいのだと。

しかし、《劍帝》に負けた事によりその道が正しかったのかわからなくなった。？至るために何でもやってきた《劍鬼》だった。殺しもすれば救いもする。そうやってすべてを飲み込んで行けばやがて “至る” ことができると思っていた。そうやって愚直に進んだ末、負けてしまった。

？負けた事で自分を構成した何かが根本からぐらついた。道は途絶えた。？途端に《劍

鬼》は自責の念に押し潰されそうになった。これまで自分のせいで被害を被った者たちの怨嗟が聞こえてきた気がした。

？ 《剣鬼》は焦っていたのだ。

焦って、自分の道しか見えてなかった。？その道を進む事が正しいのだと、
“至る”
ために必要な事なんだと自分に言い聞かせていた。

そもそも、何故《剣鬼》が“至る”事を重要視しているのかという理由は、
師が、カシウス・ブライトが剣を捨てたと聞いて悲しい顔をしたからだ。

だから、《剣鬼》は——

？ 「捜しましたよ、老師」

森の半ばにある滝を石の上から眺めている己が師に声をかけた。

？「帰ってきおったか、馬鹿弟子。やけに沈んだ声じやが、何も見えなくなったと言った所かの？」

わずかばかり視線を寄越した老師の声はどこまでも優しげに感じた。

？「どこまでもお見通しですね……」

「当たり前じゃ。オヌシの事は赤ん坊の頃から見てきておる」

？「それもそうですね。……老師、俺は」

そこから先の言葉は続かなかった。？言わなくてもわかってくれるという信頼と、これ以上は言いたくないという感情がごちゃ混ぜになったからだ。

「言わずとも良い。オヌシほどにもものを知らぬ年頃じやと道に迷う事もあるう」

何もかも見通したような師の言葉は深く感じた。？それ以上に《剣鬼》の心に染み込んでいくようだった。

《剣鬼》は事情を話した。？老師はただ頷くだけで口は挟まない。

すべて語り終えた。？語り終えて、数日してから《剣仙》ユン・カーファイは己が弟子とまともに話した。

「今のワシにはオヌシに語る言葉を持たぬ。故にちとお使いを頼まれてはくれんか？」

「へあ？」

一言目と二言目の声のトーンが違いすぎて《剣鬼》はおかしな反応をしてしまう。

「いや、実はオヌシがあちこち彷徨っている間に少し弟子をとつていてな。底力はあるそうなんじやが、とにかく他人優先の阿呆での。多少目処がついたんで修行はそこで打ち切つてやつたわい！」

？ハツハツハ、と豪快に笑う師に苦笑する《剣鬼》。？我ながらとんでもない師匠に師事

したものだと思う。とは言っても選択肢は最初からなかったわけだが。

「名をリイン・シユバルツァーと言つての。エレボニア帝国にあるユミルの領主の息子でな」

☆★

? 数日後、《剣鬼》は雪道を歩いていた。

「あゝ、寒っ!」

? 「とりあえず初伝は授けたんだが、すでに中伝クラスの实力はあるのでな。〃中伝を授ける〃という旨の巻物を届けて欲しいのじゃ。リインも今のオヌシと同じで心の問題を抱えているようでの……会つて話でもすれば何か得られるものがあるかもしれんぞで?」

? 《剣鬼》は師のお使いに応じる事にした。? やる事もなく、今はこれ以上剣技も磨ける気がしない。要するに手持ち無沙汰だったのだ。? それに師の言う通り、何か得られ

るかもしれない。

？ 僅かな期待と、幾許かの無力感と、自分への猜疑心を抱いたまま《剣鬼》はユミルに向かった。

向かった、のはいい。？しかし、師の言葉はそこで終わりではなかった。

「あ、そうじゃ。修業がてらユミルまでは徒歩だけで行く事じゃな」

？ カチカチカチ、と齒が鳴る。

？ 「いや、マジありえねえ。なんだここ寒すぎ」

山道は雪に埋もれている。わずかばかりの除雪の跡が見て取れる程度で、目に入るよう光景からしても寒い。

あの老師（じし）は弟子がこうして困る事も含めて考え、「修行がてらく」と言ったのだろう。積雪は戦技をぶっぱなして排除しているが、寒さだけは如何ともしがたく、《剣鬼》が鼻を吸った瞬間だった。

敵意——殺気を感じした。

? 直後、銃声。どこからかひっそりと聞こえる笛の音。

? 「ほいつ、と」

? 太刀を抜き、頭部を防御すると弾丸がそれに衝撃を与えた。地面に落下した弾丸を見て機関銃のものだと判断する。

《剣鬼》が気配を察知しようと感覚を強化すると、自分に向かって魔獣の群れが向かってきている事に気づいた。

それも1つではなく3つもの群れが、だ。? 明らかに偶然ではない。敵の画策によるものと考えるべきか。

? いずれにせよ、敵は自分の命を狙っているようなら撃退するのみ。

? 機関銃による狙撃に気を払いながら殺到してきた魔獣の群れの相手をする。

? 魔獣の群れによる攪乱と銃撃……なるほど。なかなか厄介だが。本命は——

？「——こつちかな」

襲い来る魔獣の一匹を貫いて《剣鬼》の顔面に刃が迫る。？しかし、それを読んでいた《剣鬼》は首をひねるだけでそれを躲した。

魔獣を目くらましに《剣鬼》を刺し貫かんとした剣は、節ごとに分かれた刃をワイヤーで繋いだもの。法剣と呼ばれる武装だ。

「狙いは悪くない」

？だが、相手が悪かった。？そう言う代わりに太刀を振るった。

？すると魔獣が細切れになり、引き抜かれる前だった法剣の刃を繋いでいたワイヤーも切り裂かれた。

魔獣の影からの襲撃者と目が合う。？片目に眼帯をつけた麗しい女性。飛びつきたいくらいのプロポーションだ。

？「嘘でしょ？」

手元に戻った法剣を見て女が呟く。

「マジです」

? 《剣鬼》はにこやかに笑ってその女に蹴りを食らわせた。? その勢いのまま吹き飛ばす女を余所に、《剣鬼》は群がる魔獣を倒しにかかる。

「逆巻く風よ、廻り巡り剣と成れ」

? 回転する。《剣鬼》の姿が高速で回る。? まるで独楽のように。風の刃を引き連れて。
? それはやがて《剣鬼》を守る鉄壁の城ならぬ、風刃のドームとなり外からの一切を遮断する壁となる。

? 狙えば刻まれ、当たれば砕け、触れようものなら全ては消える。? 風の刃をドーム状に展開する触れたものを切り刻む防壁。

「剣鬼七式、二ノ太刀 絶刃壁」

これにより《剣鬼》の周囲に群がっていた魔獣たちは切り飛ばされた。? 返り血すらも切り刻み、《剣鬼》の足元には回転の摩擦で溶けた雪だけがある。

? 静かになった雪山で《剣鬼》はようやく機関銃の銃手を発見する。

? そこに向かって疾駆すると、その男は《剣鬼》の接近に気づいたようであり起き上がる。?

迎撃に、と機関銃を持ち上げてそれで殴ろうと構える——が。

「遅い」

? 振られた機関銃の横をすり抜けて、機関銃を片手で振り回す大男の後ろに回るとその襟を掴んで木の幹にぶん投げる。

「がはっ」

背中を強かにぶつけて咳き込む大男に蹴りをぶち込む。

「寝てろ」

気絶する大男を見て、《剣鬼》が自嘲気味に笑みを浮かべた。

? 少し前までなら間違いないと心臓を一突きにしていた。なのに、ちよつと迷っただけでこれだ。? 何でもいから自分を肯定するものがなければ人も殺せない。

「弱いな、俺は。いや、だがこの弱さこそ人の——」

「なんてこと……《V》が瞬殺された!？」

そこに法劍を持った眼帯の女が現れた。？蹴りにもさほど力を入れてなかったからすぐに起き上がってくるのは予想内だ。

？「殺しちやいない。ちよい前までなら間違はなくやってただけだね。今の俺には迷いがある。だから、迷いが晴れるまではとりあえず、不殺の誓いを立てる事にした」

《劍鬼》は眼帯の女ににこやかにそう告げる。

眼帯の女——《S》は後日、あの時は死神に笑いかけられたような気がした、と語った。

？「だから………っ!？」

風切り音。

それはまるで剣が振られているような音だ。？容赦無く首を狙ってきたそれを《剣鬼》は紙一重で避ける。

間もなく《剣鬼》の首のあつた所を刃が通過する。しかし、その刃の持ち主はいない。その刃は飛んできたのだ。

旋回する刃はまるでブーメランのような動きを見せて、持ち主であろう男の手にキャッチされた。

？———運命を、変えろ———

どこかで、声が聞こえた気がした。

「チツ、やっぱそう簡単にやらせてはくれねえか」

かの刃の持ち主は銀髪の青年。？《剣鬼》と同じくらいの年齢に見える。

？だが、放たれる気迫はあの《瘦せ狼》にも匹敵するもの。いや、その種類で言えば《剣帝》の方が近いか。

「迅雷」

？《剣鬼》は雷速でもって青年に肉薄した。しかし、その太刀は青年の双刃剣に受け止められる。

？刃越しに2人は互いの実力を測る。？《剣鬼》は不敵に笑い、青年もそれに応えるように笑みを浮かべた。

弾かれるように2人は距離を取り、《剣鬼》は勝負を決めにかかる。

？鋒を接地したまま雷のスピードを見せつける。？刃と地面の摩擦で火が吹き上がる。雷の速度で迫る炎熱を纏った刃。vs《剣帝》の際に不発に終わった龍雷撃と同じ、三の型と雷の型を交ぜた剣技。その名を“灰燼雷”。

？「だらあっ！」

空気を焦がしながらの切り上げを、青年は余裕を持って躲す。

「それはさつき見たぜ」

それは迅雷の事を言っているのか。？《剣鬼》は驚愕した。たった一度体験しただけでこのスピードに対応してみせるとは。

？しかし、驚きはそれだけに留まらない。？青年は慣れた手つきで懐から銃を取り出すと、引き金を絞った。

？《剣鬼》の防御は間に合わない。回避も同様。？切り上げた後の死に体を狙われた。？それでも頭から胴体を狙われたのなら間に合っていた。？《剣鬼》の対応が間に合わないのは、青年の銃口が足元を狙っていたからだ。

《剣鬼》はそれでも銃弾を避けようとした。？死に体の体勢から体をねじりながら無理に足をひよいと動かし。これで被弾はしない。

そう、被弾は。

？青年の狙いはこの銃撃で《剣鬼》を仕留める事ではなかった。

「凍っちまいな！」

その弾丸は地面に当たったかと思うと、そこから《剣鬼》の脚を凍りつかせるように氷が伸びてきた。

? 「な——!」

? 《剣鬼》の脚は凍結し止まった。? しかし、それでもそれは一瞬だ。この程度の強度、《剣鬼》ならば一瞬で砕く事ができる。

しかし、それは一瞬の間ができるという事。? そして、その一瞬はこの相手にとって——この領域に達している者たちにとって——は致命的な一瞬だ。

? 《剣鬼》が氷を砕く一瞬に青年は必殺の構えに入っていた。双刃剣に漆黒の闘気が注ぎ込まれる。

「喰らえ、終焉の十字……!」

青年の姿が漆黒の影となって《剣鬼》を襲う。? 通り抜けた黒い閃光は、さらなる力を込めてそれを《剣鬼》に向けて放った。

? 「デッドリークロス!!」

《劍鬼》は太刀を正眼に構えた。？氷を砕く一瞬を狙われるというのなら、氷を砕く一瞬を別の事に使えばいい。

脚が氷で動けない以上、受け流す系統の技は使用不可。かといってこの体勢からだど他の技もいつもより格段に威力が落ちる。

？で、あるならば。

「斬撃そのものを、切り裂く」

？発想は以前からあった。それにパワーはいらない。必要なのは鋭さだ。ただ鋭くあればいい。そのためには圧倒的なスピードがなければいけない。

？《劍鬼》は納刀する。？溜めがいる。

鞘走り。速く。鋭く。

？抜刀と同時に剣を振り抜く。それは居合と呼ばれる剣技。

放たれた斬撃は青年の必殺劍技を切り裂き霧散させ、直線上にいた青年をも襲う。

青年は自らの劍でそれを受けるが、力に押されて吹き飛び《V》同様に木の幹に背中を強かにぶつけた。

「ぐっ……かはっ」

咳き込んで吐血する青年を見ながら《劍鬼》は足元の氷を砕く。

？「伍の型 残月改式……名前は後で考えるか」

？そして、まだ立とうとする青年を見て言った。

「さすがにひやつとした……なかなかやるな、お前。A級遊撃士より強いんじゃないか？」

青年は劍を杖代わりに立ちながら《劍鬼》を睨む。

？「ハッ、もう勝った気かよ《劍鬼》」

？「まあな。もうまともに戦える体じゃないはずだ。悪い事言わねえから、とんずらした方がいいんじゃない？」

「追わないからよ」と続ける《剣鬼》。先程軽く言葉にした「不殺の誓い」はどうやら本気のように、襲撃者でも撃退するだけのつもりだ。

？「それはどうかな……」

臨戦体制を解きつつある《剣鬼》に対して、青年は剣を納めると、静かに気の波長を変えた。

眉根を寄せる《剣鬼》だが、それが何を意味するのかわからない。

？「来い——」

？青年が空に手を伸ばす。？いや、それは空に手を伸ばすというよりも、どこかにいる誰かに自分はここにいるぞ、と示しているように思えた。

「――《蒼の騎神》オルディーネー！」

？青年の声に応えるかのように、それは空からやってきた。地上に降り立ち、青年はその中に入る。

？それは、今まで感じた事がないほど、圧倒的な力の具現だった。

これまでやばい相手とはそれなりに戦ってきた。老師。兄弟弟子。《不動》、《痩せ狼》、《剣帝》。その全てを上回るだけの、現実的な脅威。

？蒼いものが近づいてきたかと思うと、それは敵意をもつて攻撃を仕掛けてきた。

あまりに突然の出来事に、体が反応できていない。すでに避けられる距離ではなかった。

？その巨大な刃を太刀で受け流して威力を殺す。？追撃してくる蒼のそれを、《剣鬼》は何度も受け流す。

《剣鬼》が一旦距離を置くと、蒼いその全容がわかった。

頭がある。胴体がある。四肢がある。？その形はまるで人のそれだ。しかし、それは明らかに人ではない。人型の兵器と言うべき、蒼色に染められた機体。

? 形容するなら、そう。それは蒼の騎士人形だ。

「俺は《帝国解放戦線》の《C》。俺にこのカードを切らせたあんたに敬意を表して名乗っておくぜ」

? 「《帝国解放戦線》……? 聞かない組織の名だが……あんまり穏やかなニュアンスではないな」

? 「まだ正式に名乗ってるわけじゃねえからな。……さて、《剣鬼》。悪いがウチのスポンサーからの依頼でな、あんたをここで葬らせてもらう」

? 「言ってる。俺はここで死ぬわけにはいかん」

? 戦闘開始。

こうして、《剣鬼》と呼ばれる男の最後の戦いが幕を開けた。

☆★

? まずはこちらの有利な条件の確認だ。? 蒼の騎士人形は人より大きい。? 自らより小さいのを狙うのは難儀だろう。しかも動くのだ。スピードで攪乱するのが良策か。? 2点目として、ここが森であるという事。? 蒼の騎士人形は木々に動きを制限されるだろう。

? 「ふん!」

蒼の騎士人形が双刃剣を振ると、その一撃で木々は容易く薙ぎ倒された。

「はいアウト。なんだこのハイパワー」

? 現実逃避した目の色をして《剣鬼》が有利な条件の一つを潰された事を嘆く。? 《剣鬼》とて木を倒すことはできるが、それは技の鋭さによるものだ。力技でやれと言われたらそれなりに難しい。

「喰らいやがれ!」

? 連続して振られるダブルセイバー。? それが《剣鬼》を捉えたかと思うが――、手応えがない。? 《剣鬼》の姿が消失する。

「残像か！」

それを理解した《C》は周囲の気配を探る。

？「まずは一発！」

気配は背後から。？大きく太刀を振り上げた《剣鬼》。

放つ戦技は、

「裂甲断！」

大きな衝撃が《C》を襲う。装甲を斬られてはいないものの、負ったダメージは軽くない。

「チィ！」

振り返りつつ剣を振る蒼い機体。？しかし、そこにはもう《剣鬼》の姿はない。

「遅い——！」

縦横無尽。？それはまさしくそう表現すべき動きであった。

《劍鬼》の姿はとも見えない。？その影すら追う事もできず、辛うじてできるのは残像を見て次の動きの予想をするくらいだ。？しかし、その予想も《劍鬼》のスピードには追いつけない。？風のように速く雷のように鋭い劍撃がオルディーネを襲う。

装甲の傷は軽微。されどダメージは蓄積されていく。？いや、何よりまずいのはこれから体勢を崩される事だ。

《C》の予想は的中した。？予想はできてもそれを回避することはできない。なんという歯痒さか。これではまるで祖父の無念を見届けたあの時のようではないか。

こんな所で終わるわけにはいかない。

やっと始められるんだ。同志をまとめ上げ、力を手にして、ようやく。入念に準備した。？知恵を振り絞り計画を立てた。

？「こんな所で…カイエン公のくだらない命令なんかで！ まだ始まってもないのに

終われるわけがねえだろうが！」

？「剣鬼七式」

？体勢を崩したオルディーネを眼前に《剣鬼》が太刀を構える。その体から発される力は、太古の地精が鍛えたとされるオルディーネの装甲を破るだけの力を備えていた。

「二ノ太刀」

？気で形成された刃は、二振り。？天から振り下ろされる刃と、地から切り上げられる刃。

「——天地喰閃!!」

振り下ろされた／振り上げられた刃は、確かにオルディーネを捉えた。

しかし予想は外れて装甲を両断する事は出来なかった。

？蒼の機体は立ち上がる。？それから感じ取れる覇気は先程より膨れ上がっているように思えた。

「まさか生身の人間相手に『奥の手』を使う事になるとはな」

機体から発される声は《C》のものだ。？その声音に《劍鬼》は絶対の自信を感じた。？気が付けばオルディーネの機体は装甲が展開されていた。放たれるオーラは、およそ人間では到達する事ができない域にある。

？《C》にとってこの『奥の手』は本来、使う予定のない切り札だった。？生身同士で勝てるとは思っていなかった。《帝国解放戦線》の全戦力を結集しても生身同士なら良くて引き分けくらいだと目していた。？しかし、予想は裏切られた。

生身同士では歯牙にもかけられず、《蒼の騎神》を持ち出しても押される。？ならば、もはや『奥の手』を使うしかない。

始まる前に終わるわけにはいかないのだから。

それからは一方的だった。

“奥の手”により段違いの力を得たオルディーネに《剣鬼》は追い詰められていく。防戦一方だ。あらゆる攻撃は通じず、ガードして受け流しても手に痺れが残るだけの威力。？加えてスピードもある。この巨体でどれだけ速く動けるのか。

？《剣鬼》はついに崖際まで追い詰められた。

？否。崖際まで誘導した。

？自分の力が通じないのなら、それ以外の力で倒すしかない。崖から下を見下ろすが地面は見えない。これだけの高さから落ちればオルディーネと言えどもただではすまないはずだ。？空を飛べるのは厄介だが、そこは《剣鬼》も一緒に飛び降りて剣撃で飛行を阻止。？そのまま地面と己でオルディーネをサンドイッチ。ぶった斬る。？それが《剣鬼》の作戦だった。

が。

「あばよ、《劍鬼》」

？ 《C》はそう言うのと剣を地面に突き立てた。
すると崖際まで亀裂が入り、地面が崩れる。

崩壊した崖際と共に《劍鬼》は落ちていく。

「くっそおお！ぬかった！マジぬかった!!」

《劍鬼》は何とか空中で体勢を整え、着地の衝撃に備えようとするが――

？ 飛んで来た雪塊だか岩だかが頭に当たり、意識を持つていかれてしまう。？ オル
ディーネとの戦闘でポロポロだったのだ。？ あと一撃でも貫えばやられていた。だか
らあんな分の悪い賭けをする他になかったのだ。

そして《剣鬼》は、意識と共に記憶まで失い——ナギト・シユバルツァーとなった。

☆★

? およそ1年後。

リインは少女の背中を見送るとぼりぼりと頬を搔く。

「名前聞いとけばよかったなー、とか考えてるんですよ? わかります。駅前ですぶつか
るってどういうこと? テンプレ過ぎて死ぬよって感じなんだが」

? かつて《剣鬼》であった男のスクールライフが始まる。

第二部 蝶の羽ばたき、荒野の嵐 其は閃光の如く

「すー……はー……」

深呼吸する。

モニターに映る光景を直視した。

人類の悪性の象徴。愚かしさの、暴力の化身の姿を。

国家が到達した武力の有様。戦場を走り長大な砲口で蹂躪する、戦車を。

「つつても大した事はない、かな」

そんな風に敵を大きく見ようとしても、どうにも湧き上がるものはなかった。相手が
“戦車” という鉄の塊、無機質な鋼だからだろうか。

あるいは、自己が機甲兵を駆って戦おうとしているからなのか。

生身で機甲兵隊長機シユピーゲルと対峙した時ほどの危機感はなく、しかし程よい緊張感は保っている。

それは機甲兵を操って実戦に臨むのが初めてだからだと自己分析する。

自信はなく、確信もなく。しかし「勝てるだろ」となんとなく思っている。それは各地から貴族連合の勝報がもたらされ、自陣の士気が高いせいかもしれない。

士気が高いのは相手も同じなのだが。なにせ「囚われた皇族の救出」に向かうのが今回の敵——正規軍第一機甲師団残党の目的だからだ。帝都の守りを司る彼らが敗北した事は記憶に新しいが、わずか2週間で貴族連合が皇族を軟禁している場所を特定したのはさすがと言える。

貴族連合が皇帝ユーгентを始めとする皇族や要人を軟禁しているのは帝都に程近いカレル離宮だ。帝国各所で正規軍による逆襲が激化している事もあり、今は必要最低限の守りしか敷いていない場所だった。

とは言ってもこのエレボニア帝国において皇帝という地位は絶対であり、対峙する正規軍残党と比較してもおよそ2倍の戦力差があった。

加えて、貴族連合側には英雄《蒼の騎士》が駆る機体ど酷似した機甲兵が前線に仁王立ちしている。言わずもがな機甲兵プロトタイプ——オルディーネ・イミテーション。

通称「プロト」だった。

今回はこのプロトの初陣。つまりはナギト・シユバルツァーの機甲兵戦デビュー当日であった。

戦端が開かれるまでとわずか。ナギトは機甲兵の訓練の日々を思い返す。

☆★

ナギトがツールズ士官学院を貴族連合に帰属させた褒美として受け取ったオルディーネ・イミテーション——プロト。ナギトは当日の内にオルディス湾の沖合に浮かぶブリオニア島に降り立っていた。プロトの操縦訓練のためである。

いくらプロトがオルディーネの模造品とは言え、操縦方法さえもを真似て造られたとは言え、完全に騎神と同一でない事はわかっていた事実だ。

操縦にしてもそうで、騎神の操縦よりも多少はアナログチックに操作が必要となる。

騎神の起動者となった際に会得したその操縦技術を持つナギトであってもプロトの操縦訓練は欠かせないものだった。

「予備のパーツはあるから存分に訓練をしてくれ」というのはカイエン公の言だ。その言葉に甘える事にしたナギトは10日間、思うがままにブリオニア島をプロトで駆け巡った。

ナギトの機甲兵操縦訓練の指導者に領邦軍兵士が数名と付き添いとしてリヴアルが随行していた。

訓練が最終日に差し掛かる頃には、機体性能もあつてか他の機甲兵を寄せ付けられない程には習熟した。

そして訓練が終わり、オルデイスに向かう船を待つ間にナギトはブリオニア島を探索してみる事にした。機甲兵の訓練中にも島のあちこちを見て回つたが、モニター越しでは味気ない。

3度目の特別実習——ナギトがラインたちと共にノルド高原にいた頃、B班だったラウラたちはこの潮騒を聞いていたと考えると感慨深いものがあつた。

「やっぱり徒歩だと遠いな」

言いつつ、目的地を視界の先に捉える。プロトを乗り回していた時に観光スポットはピックアップしていたナギトだったが、そんな彼の興味を一番引いたのは巨像だった。

ブリオニア島の巨像——ノルドの巨像とも雰囲気の似たそれは島に埋まる形で存在していた。

ノルドで巨像を見た際にユースが言った「巨いなる騎士の伝承が頭に浮かんだ」という言葉。その伝承についてはナギトも少し調べてみた。

曰く、帝国の乱にたびたび現れては超常的な力を振るう存在——との事だ。これが歴史でなく伝承として伝わる事から作り話の類いであると思われていたが、騎神の姿を見て考えは一変した。

おそらく伝承の「巨いなる騎士」とは「騎神」のこと。ドライケルス帝の「旧校舎は来る日まで残せ」という言葉も、彼が獅子戦役で騎神を駆って戦ったからだとなぎトは考えた。

それがどうして歴史として残っていないのかは不明だが、そも騎神という超常の存在があるのだ。人々から忘れ去られる——なんて不思議な仕組みがあってもおかしくはない。

「巨いなる騎士が騎神なら、こいつはなんなんだ、って話だな」

声に出して疑問を再確認。ノルド高原とブリオニア島にある巨像はなんなのか。対

になっている様にも見えないが、どことなく意匠は似ている気がする。

巨像の下まで行ってその巨像を見上げる。

騎神と比較してもかなりでかい。いったいいつから埋まっているのか。そもそもどのような存在なのか。

疑問は尽きず、解消せず。様々な角度から巨像を観察する。

崖を登り、頭部を見る。でかい。頭だけで騎神ほどの大きさがありそうだった。そんな風にジロジロと見ていて――

ふと、目が合った気がした。

☆★

燃える家屋、村に放たれた火。？武装した野盗が逃げ惑う人々を斬り、或いは撃ち、その命を奪っていく。

？「ああ、なんということだ。カーシャ……リイン……」

？阿鼻叫喚の図の中で、家族の心配をしているのだろうか。精悍な顔立ちの男性が最悪

の想像をして嘆く。

? やがてその男性の前にも武装した野盗が現れ、凶刃を振るおうとする。

が、しかしそれはアッシュブロンドの髪を返り血で濡らした青年に止められた。野盗は青年に斬られて崩れ落ちる。

「あ、ありがとう、助かったよ」

? 礼を言う男性を青年は一瞥し、それが誰かを判別する。

「あなたは旅行者の……」

「あ、ああ。息子を知らないか? 最近、遊んでくれていただろう!？」

男性の方も青年に見覚えがあったのか、息子の居場所を青年に尋ねる。しかし反応は芳しくなかった。

? 「今は俺の友人と一緒に逃げさせている」

「どい!？」

？「ついでこい、案内する」

焦りを滲ませながらも勤めて冷静であろうとする青年。しかし、青年も不安は感じていた。そんな不安を打ち消すように、願いを込めて呟く。

「無事でいてくれよ……カリン、ヨシユア……」

☆★

—— 我が名はクロノギア。我に触れしは特異点、貴様か——

—— そうだ、特異点。貴様でなければ我が声は届かず。空の女神のみが僅かに我が残滓に触れる事ができる程度——

—— 我はクロノギア。世界の『時』を支配する者して唯一絶対の神——

——あの忌々しいマクバーンのせいだ。彼奴が在ればこそ我らが後に二柱の神などと呼ばれるのだ——

☆★

「——っ!？」

意識が戻る。白昼夢を見ていた——まさしくそんな感覚で、しかしそうじゃない確信はあった。

先程の光景の意味を考えるが、当然答えは出ない。この巨像が何かを見せたのかもしれないが、そこにどんな意図や意味があったのかも。

それに、映像の後には何か巨いなる存在と邂逅した気さえする。記憶は定かではないが——それこそ、人々の記憶から騎神の存在が忘れ去られているような感じだろうか。

興味はそそられたが、再び巨像に目を向けても何も起きず、迎いの船が来る時刻も

追っていたためナギトは巨像から——ブリオニア島から離れる事となった。

☆★

「うーん、あれ…なんだったんだ…？」

訓練の日々を思い出していたはずのナギトだったが、想起したのは島の巨像の事だった。それだけインパクトがあつたという事だろう。

コックピットで「うーん」と唸っていると、モニターに髭面が映し出された。

「剣士殿、そろそろ始まります」

彼はこの戦場において貴族連合兵士を取りまとめる役目の指揮官だった。ナギトに對して敬語なのはナギトの立場がカイエン公の客将だからだ。

「はい。作戦の変更はなく？」

「ええ、あなたの活躍を公爵閣下は望んでおられます」

指揮官の返事を受けてナギトは薄くため息をつく。指揮官はそんなナギトの様子を見て「ご武運を」と告げると通信を切断した。

この戦闘におけるナギトの役目は一番槍だ。ナギト及びプロトの華々しいデビューを飾るべくカイエン公がセツティングした。

このカレル離宮攻防戦は貴族連合にとつて「勝てる戦」であり、どれだけ活躍できるかが問題であった。そんな所に見ず知らずの若造がやってきて、自分たちの上官はそいつに手柄を譲れと言う。それは面白くない話だろう。ナギトは若干煙たがられていた。

しかしナギトはめげる事なく戦場を見渡す。敵の構成は戦車アハツエンが3台に旧式装甲車が5台というもの。単騎で撃破できるとは言わないが、貴族連合兵士からの援護は期待できるのだろうか。

まさか背後から撃たれるなんて事は――、なんて考えている内に戦闘は始まった。

アハツエンの砲口が火を吹く。味方の近くの地面を抉った。あまりの威力に「ひえ」と呟く。今からあれと戦うのだ。少し前の自分を殴りたい気分になった。怖気付きそうになる自分を叱咤して機甲兵用ブレードを掲げる。

「オルディーネ・イミテーション——機甲兵プロトタイプ、出る！ 一番槍は任された！」

飛行ユニットがあればそれで接近するつもりだったナギトだが、オルディーネのそれは再現出来なかつたらしく、移動は歩行——踵部のローラーに推進器をつけたもので行

う。

アハツエンと装甲車に接敵する。

装甲車による銃撃は牽制で、アハツエンによる砲撃こそを本命とした正規軍残党の戦術は見事なもので、動きを誘導されたプロトはすでに盾を——それを持つ左手の関節部は破壊された。

このままでは距離を詰める前に砲撃をもらうだろう。そんな思考に、かつて《剣鬼》と呼ばれた男は嗤う。

砲撃を避ける、躲す。それが無理なら叩き斬る。

「ぜえええええええい！」

そうして距離を詰めたプロトは戦車と装甲車の陣形を切り裂いた。

しかしいずれも戦闘続行は可能——

「剣鬼七式——」

機甲兵用ブレードに莫大な闘気を集約させる。

「——三ノ太刀、破空」

それを一瞬で解放し、破壊的な爆風は圧力となって戦車や装甲車の半数を横転させた。

周囲を探るプロトを装甲車の銃撃が襲う。あくまで牽制にしかない威力だったが、それに気を取られたナギトは、肉薄するアハツエンの存在に気づくのが遅れた。

折れ曲がった砲口から放たれない砲弾は爆散してアハツエン一台とプロトの左脚部を根こそぎ奪っていった。

崩れ落ちるプロトに、これを好機とアハツエンと装甲車が詰め寄った。

だが。

「虚空装填——“幻造”」

幻想が質量を持つて現実を上書きする。これはかつてナギトが“虚空剣”と呼んだ戦技の発展型。《剣鬼》の膨大な闘気をリソースとして想像を創造する、新たな技。

生えるようにして出現したプロトの左脚は緋色の闘気で編まれていた。折り畳まれた膝を伸ばして跳躍する。

飛び上がった勢いのままブレードを地面に突き立てた。

「緋耀剣」

衝撃は地面を伝って、接近していた戦車と装甲車をまとめて打ちのめした。

オルデイスでの実習の際に見たオーレリアの『四耀剣』のコピー戦技だったが――、衝撃波に様々な特性を乗せる以外は上手く模倣できた様だ。

満足げに地面からブレードを引き抜くプロト。すでに敵は全滅していた。戦車及び装甲車はすべて大破ないしは中破。

帝国の未来を占う第一機甲師団の最後のアタックは、こうしてたった一騎の機甲兵の前に阻まれた。

これには与力として待機していた貴族連合兵士たちも驚嘆を隠せない。化けの皮が剥がれるどころか、化け物が現れた。

「嵐だ……」

誰かが言った。それはプロトが正規軍残党と戦う様をこれ以上なく正確に表しているように思われた。

奇しくもこれを機としてプロトの異名は決定する。『嵐』の、あるいは。

閃光の様に現れ、嵐のように去っていく姿から『閃嵐の騎士』と、呼ばれるようにな

る。

貴族連合の英雄が誕生した瞬間だった。

そして、この会戦を皮切りにプロト——《閃嵐の騎士》の異名は帝国全土に轟いていく事となる。

《羅刹》、《聖女》、《騎士》、《神速》、

《閃嵐の騎士》の運用は、基本的に強襲艇から降下、着陸して敵陣を木っ端微塵に荒らしまくる——というものになった。

飛行能力のある《蒼の騎神》と併せて貴族連合の二枚看板であると帝国時報は報じる。

当然、それ以外にも貴族連合に英傑はいる。《黄金の羅刹》や《黒旋風》などがそうだが、非公式ながら結社《身喰らう蛇》から《却炎》や《蒼の深淵》なども助力していて、層の厚い面子となっている。

しかしながら機甲兵という真新しくインパクトのある新兵器の、最新鋭機体という触れ込みの《蒼の騎神》と《閃嵐の騎士》は貴族連合の良い広告塔になる。

そういった意味で、ナギトはオーレリアにからかわれていた。

「《閃嵐の騎士》殿は東部戦線でも獅子奮迅の大活躍だったとか。我らもその恩恵にあや

かりたいものだ」

「よしてくださいよう」

あらやだ奥さん、とでも言うような気安さでナギトはおべつかを躲す。貴族連合旗艦パンタグリユエル内での事である。

東部戦線——双龍橋での正規軍との激闘を制したナギトは回収され、同時期に西部の戦況が落ち着いた報告をしにオーレリアはパンタグリユエルに乗艦した。

互いにカイエン公に報告を終えて、そのまま雑談然とした会話に突入している。

「ふ。そうは言っても戦場で《閃嵐の騎士》の名が与える影響力については否定せんだろ
うっ。」

オーレリアの言葉にナギトは思考を巡らせる。《閃嵐の騎士》の名——すなわち英雄の存在。それは味方の希望、敵の絶望だ。

「そうですね。しかし所詮は偶像です。あくまで精神の拠り所でしかない」

英雄という偶像。しかしそれは単騎で戦局を覆せるだけの破格ではない。英雄が局地的な勝利を得たところで戦場全体で勝利しなければ意味は薄く、故に味方の戦意を高揚させる英雄の存在は大きい。

しかし、だ。

「兵士たちは誇りと忠誠を貴族連合に、命を將軍に預けています。現実的な戦場に英雄の居場所はない」

ラインのヴァリマールやクロウのオルディーネと違い、ナギトは——《閃嵐の騎士》は、偽物の英雄だ。結局のところ、そんなやつはいてもいなくても良い。いや、敗北した時のリスクを考えるとハリボテの英雄はいない方がいいかもしれない。

なんて考えるのも、ナギト自身が貴族連合の「英雄」として担がれている状況を良く思っていないからだろう。

幸いな事に実名報道されていないため、まだ取り返しはつくが、それでも相当な綱渡りをしている気分だった。

「なるほどな。それがそなたの理屈か。∴それらしくなってきたものだ」

返すオーレリアの言葉は嫌味であった。確かに今のナギトの発言は貴族らしく迂遠な物言いだった。

以前オーレリアと会った時とは違う、不自然さのない貴族らしさとも言うべきなのだろうか。

そんな指摘にナギトは返す言葉もなく。オーレリアは「ときにナギト」と話を転換させた。

「調子は戻ったか？」

「いえ、まだですね」

即答する。まだ当時の――5度目の特別実習でヴィクターと戦った際の感覚は戻ら

ない。今はまだ頭で理解している術理を体で再現しているだけだ。

《劍鬼》の時の記憶が戻った事もあり、思い出した戦技も多く、言わば常に「鬼気解放」並の闘気を使えるようにはなったが、そこに感覚は付随しない。

「ふむ、そうか。前に会った時より研ぎ澄まされていると感じたものでな」

研ぎ澄まさせているのだ。鉛筆をカッターナイフで研ぐように、神経を尖らせているのだ。

でなきや、この人外魔境のパンタグリユエルでやっていけない。この環境で気を抜けるほどナギトは成熟していないのだ。

それはある種、抜き身のナイフのような無様さではあったが、背に腹は変えられぬ保身でもあった。

「恐縮です」

そんな心中を吐露するわけにもいかず、ナギトは言葉少なに笑っただけだ。そんなナギトを見て、オーレリアは、

「……どれ、ひとつ稽古でも——と、思ったが」

オーレリアが振り返ったドアが開け放たれ、兵士が入室する。そのまま片膝をついて報告した。

「報告します！ 西部方面にて正規軍に動きあり！」

聞いたオーレリアはニヤリと笑い。

「どうやら鼠がかかったようだ」

「どういう事だね、オーレリア將軍」

その言葉を不可解に思ったのか、同じく話を聞いていたカイエン公がオーレリアに意味を尋ねた。

「なに、総参謀殿の罨ですよ。カイエン公…本当に私がわざわざ報告のためだけにパンタグリユエルに乗艦したとお思いか？」

どうやらオーレリアがパンタグリユエルに乗艦したのは西部戦線安定の報告のためではなく、オーレリアが西部を離れる事で生じる貴族連合の隙をエサに正規軍を釣り出すという作戦だったようだ。

「なに、ルーファスくんの？」

「ええ。前線にはウオレスを配置していますが、私もすぐに戻らねば。戦略的優位があるとは言え、大陸で勇名を轟かすエレボニア帝国正規軍が相手だ、油断はできないでしょう」

それも含めて貴族連合総参謀ルーファスの指示だったようで、ナギトとしてはこんな紙一重の作戦を実行する胆力に舌を巻く思いだ。

「ナギト、送ってくれるな？」

「え」

そして何やら、オーレリアからナギトに話があるようだった。

☆☆

パンタグリユエルのデッキを出て、飛行艇の発着フロアに向かう道中、オーレリアは本題に入った。

「そなた、どういふつもりでここにいる？よもや本気で貴族派に未来を賭けたわけではあるまい」

「詳細は伏せますけど、仲間のためです」

わざわざ秘密の話をするくらいだ。外には漏らさないだろうと判断してナギトは言った。

ナギトを名指しし、且つ付いてこようとするリヴァルを「愛弟子との逢瀬を邪魔するな」と突き放してだ。

これでナギトの本音を探るための芝居だったらもう諦めるしかない。

「それがそなたの貴族連合に潜入している理由か。しかし機は誤らぬ事だ、この船はそう遠くない内に沈む」

「はっ、泥舟だと?」

「然りだ。総主催があれではな。頼りになる総参謀殿も腹に一物あると見える」

「……………」

ナギトはオーレリアの慧眼に驚嘆する他なく、言葉を紡げない。

「今だから話すが、あのオルディスでのテロの際、あやつは私にこう言った——『テロリストは我が手の内のものだから、そうとはわからないよう追い払え』とな。まったく愚

物にも程があらうというものだ」

ナギトらB班がオルディスでの実習の際に遭遇した《帝国解放戦線》によるテロ。オーレリアがカイエン公に呼び出されたため学生だけで動いていた時間があつたが、そんな裏があつたようだった。

「愚物、ですか」

「ああ。無能とは言わんが、統治者としての器がない」

オーレリアの忌憚のない厳しい評価にナギトも自然と背筋が伸びる。オーレリアが当主を務めるルグイン家は伯爵。その上に位置する公爵家の当主であるカイエン公をこうも貶めるとは、オーレリアも中々にご立腹の様子。

「…ふん、愚痴のようになっていたな」

「忘れろ」とオーレリアはため息をついた。

「しかし、やつのおかげで私は今、充実しているよ。我が剣がどこまで通用するのか、この巨大帝国で試せている」

「剛毅な事です」

「ふ、諫めるような言い口だな？ 確かにやや不謹慎な自覚はある」

「……いえ、それも現代倫理によるものです。戦場は武功を立てる絶好の機会ですから」

戦場を知らない者と平和を知らない者の価値観は違う。そのどちらもを体験したナギトの価値観はオーレリアのそれと似通っていた。

言葉にせずとも伝わる命の尊さと儚さ。その価値を認めた上で、救い奪う傲慢を、しかしそれを感じさせない高潔と醜悪を。

小難しい顔をしたナギトを見てオーレリアは笑う。視界の先に飛空艇が映った。

「では今日はここまでだな。次に会う時まで感覚を取り戻しておく事だ。……私は今、武人としてのそなたに興味がある」

「光栄です、我が恩師。武運を祈ります」

飛空艇に乗り込むオーレリアを見送る。やがてオーレリアを乗せた飛空艇はパンタグリユエルから出発していく。

大空に飛び立ったそれと入れ替わるようにして、一艘の飛空艇がパンタグリユエルの発着所に停泊した。

いつのまにか《神速》のデュバリイがそれを迎えるように準備しており、ナギトはまさかと思った。

「出迎えありがとう、デュバリイ。おや、ナギト・シユバルツァーではありませんか」

飛空艇から現れたのは《鋼の聖女》と名乗った至高の武人、アリアンロードだった。

それに戦慄するナギト。彼女の存在にもそうだが、《聖女》に対抗心を燃やす《黄金の羅刹》とニアミスした事実、心底ホツとしたし残念にも感じた。

「…………ふむ、少しお茶でもどうでしょう?」

そして、その提案に長い一日はまだ終わらないと、ナギトは覚悟を決めたのだった。

☆☆

「あなたが今ここにいるという事は、クロスベルの方は一段落したんですか? もっと遅くなると思ってたんですけど」

パンタグリユエルでデュバリイに貸し与えられた客室にて小規模ながらお茶会は開かれていた。

参加者は4名。ナギトとその監視のリヴアル、アリアンロードと従者のデュバリイ。リヴアルとデュバリイが紅茶を用意したが、思ったより手際が良くて驚いたのは秘密だ。

お茶会のため当然兜面を外したアリアンロードだったが、その顔は綺麗だとか玲瓏だとか、そんな月並みな感想しか出ないほど整ったものであった。

「いえ、あくまで一息吐く暇ができた、というだけです。盟主からの頼みもありますし、またすぐにクロスベルに戻ります」

一息吐く暇。確かに今、物語は動かない期間だ。世界の時間は進むが、主人公を欠く間隙だ。

「私が帝国入りしたのはデュバリイの顔を見に来たのと……あなたに会うためです、ナギト・シユバルツァー」

「俺に、ですか」

「ええ。デュバリイから記憶が戻ったと聞きました。《剣鬼》の間の記憶だけ、取り戻したと」

アリアンロードの話にナギトはデュバリイに視線を向ける。

「クロウ・アームブラストから聞きました。彼、けっこうあちこちで言いふらしてますわよ」

「マジかあいつ。別に口止めはしてねえけどさ」

ナギトはクロウの過去を聞き出す代わりに、《剣鬼》当時の記憶を取り戻した事をクロウに話していた。

自らが《剣鬼》と呼ばれるようになる事件から、ユミル溪谷でクロウとオルディーネにやられるまでの間の記憶。その内容までを。

「その様子だと、未だ剣力は戻っていないようですね。かつてレオンハルトと対峙した時ほどの力は失ったままですか」

「そうですね……ぼちぼち取り戻しつつはあるんですが」

「そうでしたか。彼が言っていました…自分より強かった、と」

レオンハルト——《剣鬼》が唯一敗北した人間。戦いの記憶においては実力は伍していたが、結局は負けてしまった。

「あの《剣帝》がですか？」

その事実が以外だったのかデユバリイがアリアンロードに聞き直す。

「ええ。《剣帝》レオンハルト：福音計画で命を落とした彼が、です」

命を落とした。そうはつきりと言葉として受け取って、ようやく腑に落ちる。もうリベンジマッチの機会はないのだと。

「しかし、俺は負けました」

「勝敗と強弱の因果関係はとても強い。ですが絶対ではありません。そのような事、あなたなら言われずともわかっているでしょう？」

強いから勝った。弱いから負けた。それは当然の摂理。強くても負ける。弱くても勝つ。それもまた当然の摂理だった。

「…はっ」

ナギトの返事を見届けたアリアンロードは「して」と続けた。

「その後、どうですか。あの一刀……自在に扱えるようになってるのなら驚きますが」

話題は転換された。アリアンロードの言う「あの一刀」とは、レグラムでの実習の際にローエングリン城でアリアンロードと対決した際に振った一太刀の事だろう。

「正直まったく駄目ですね。あの時は朦朧としてましたし、あの感覚を常に体が追い求めるものだから、他の戦技の感覚がおかしくなる始末でした」

「未熟ですわね。例え感覚を失っても戦技は放てるようではなくては」

「ええ。なのでその後術理を頭で理解して、今は何とか戦えるレベルまで持ち直ししました」

情けないナギトに苦言を呈したデュバリイだったが、続く立て直しの早さに「ぐぬぬ」と唸る。

「そうですか……あの一刀、驚くべき技でした。いや、技ですらないのかもしれないかもしれませんが」

技ですらない——アリアンロードのその理解に、ナギトは頷く。

「はい、あれは技ではなく、それ以前のもの。故に後に派生する技のすべてを内包し、故にすべてに勝る。なので威力や防御力なんて概念すら、あの一太刀の前には何の意味もない」

それが、ナギトのあの一刀に対する理解だ。きつとそれこそ《剣仙》ユン・カーファイが目指した境地。

技は無限。しかし始まりはひとつ。

故に始まりのひとは無限そのものである。

そういつた屁理屈じみた理不尽だ。

「聞いていけばいかにも傲慢な言い方ですわね……あの一刀は私も見ていました。見事とは思いますが、それほど大した代物とは思えません」

アリアンロードはナギトの言葉を咀嚼するために黙し、デュバリイは噛み付く。

「はは。確かに大言壮語でしたね。しかしまあ、今のは理想理論。現実はもつとしょっぱいかもだし、俺もまだ未熟です」

ナギトの、あの一刀に対する理解はあくまで幻想だ。そうであつたらいいな、程度のもの。

「あなたが成熟する時が楽しみですよ、ナギト。果てなき道の果て——いえ、果てなき道の根源に至る日が」

未熟だと卑下したナギトにアリアンロードが発破をかける。未熟なら成熟すれば良いと。その結果が楽しみだと。

「恐縮です」

ナギトはそれを受け入れた。今日は「恐縮」だの「光栄」だの言う機会が多い事、少し笑いそうになる。

話が一段落した所で皆が一口紅茶を飲んだ。「ふう」と一息ついて、アリアンロードは再びナギトに話しかける。

「ところでひとつ聞きたいのですが。レオンハルトと戦った際に見せたという戦技——確か「大刀錬」と聞き及んでいます、あれはどういった仕組みで斬撃を多重化していたのですか？」

恐るべき事にレオンハルトはあの戦いの最中に《剣鬼》の技の性質を見抜いていたらしい。それをアリアンロードに伝え、今こうしてナギトが尋ねられているわけだ。

「ん、あれは…剣に常に闘気を送って、刃から斬撃を断続的に発生させる技でして。言わば剣をタンクにして蛇口を連続で開閉させるみたいなもので…」

という感じで剣談義、もとい武の談義は始まり——、いつの間にかナギトはデュバリイと試合をする事になったのだった。

☆★

パンタグリユエルの甲板で向かい合うナギトとデュバリイ。

上空を飛ぶパンタグリユエル、頬を撫ぜる風がぴりぴりと灼けついて感じられるほどの緊張感をナギトは覚えていた。

しかしそれはおくびにも出さず、太刀を鞘から引き抜いて構えた。

周囲にはどこで聞き及んだのか見物客がいる。ブルブランにマクバーン、ヴァルカンにスカレットにリヴァル、アルティナにカイエン公と、解説には豪華な面子だ。この試合の発案者であるアリアンロードも一緒だ。

西風の連中やクロウは前線に出ているためいない。

そもそもこの試合は「思ったより武に対する造詣が深いようですね。デュバリイ、彼と立ち合ってみませんか、きっと得るものがあるでしょう」というアリアンロードの無茶振りからだ。

特にナギトにはメリットの提示されない試合だったが、「これに応じてくれるのなら、試合後にあなたの改善点を教えてあげましょう」と、これまたアリアンロードの言葉でメリットも挙げられ、退路はなくなったわけだ。

軽く呼吸をして、スイツチを入れる。眼前の相手——《神速》のデュバリイ。結社《身喰らう蛇》《鉄機隊》筆頭隊士。大層な肩書きだが、それに見合うだけの風格は感じられない。

そのいでたちはかつて湖畔の城で出会った時と同じ戦乙女装束だ。右手には剣、左手には盾を構える隙のない戦闘スタイル。

はてさてどう攻略するか——、考えがまとまらない内に「始め！」とアリアンロードの合図が降った。

「行きます——」

たん、とステップを踏むような気軽さで、

「——わよっ！」

デユバリイは距離を潰す。

振られる剣をスウエーで避け、そのままバックステップで距離を取る。

退がるナギトの顔には貼り付けた笑み——、軽い踏み込みでナギトの疾風ほどのスピード。《神速》の渾名は伊達ではないらしい。

「せえい！」

デユバリイはそのまま一步踏み込み、剣に炎が灯った。豪炎剣。

「づっ！」

振り回された剣がナギトの表皮を焦がす。普段なら退がるナギトだが、ここはあえて踏み込んだ。

「疾風！」

交わる視線。受け止められる斬撃。死に体と思ったが、とんだ勘違い。やはりデユバリイはナギトより格上だ。

「九十九疾風——！」

続く攻撃は、敵を尽滅するまで止まらぬ疾風の連続。

しかし——

「遅いですわ——！」

残像を残す速度で駆けるナギトに追いつくデユバリイ。疾風で繰り出す斬撃のすべに対応しつつ反撃さえしてみせた。

疾風の速度を《神速》が力強く弾き返す。空中で体勢を整えて何とか着地。

その着地を狩るべく肉薄するデユバリイに、

「破空！」

近づくな！の破空をかます。

放たれた爆圧にはさしものデュバライも逆らわず後退する。

一息つく合間、デュバライは剣の切先をナギトに向けた。

「その程度ですか？あの《劍帝》が認めたという実力とは到底思えません」

挑発するような口調に「はっ」とため息か笑みかわからぬ息が漏れる。

「手厳しい事で。……うーん」

何か二の句を継ごうと考えたが、どうしても言い訳臭くなるし、なんだつたら相手の警戒を促す事にもなる。

ならば黙った方が良いと結論して、太刀を構え直す。

「鬼気解放——、とりあえず負けるのは嫌なんで蛇口全開しますけど、そっちは手加減

よろびです」

瞬間、ナギトの全身から溢れ出す鬨気。緋色のそれは血を思わせ、《剣鬼》の異名を想起させる。

「無茶苦茶言いますわね、この——ッ!？」

濃密な鬨気——気配はそのままに分身に先行させる。

「疾風・双」

それに初めて、デュバリイの反応が遅れた。しかしさすがは《神速》と言うべきか、それでも分け身の一撃を盾で防いでいる。

だが、それだけだ。続くナギト本人の疾風には対応できず、すれ違い様に脇腹を打ち据えられた。

「ぐっ」と唸るデュバリイにナギトは追撃する。疾風の勢いそのまま飛び上がり——

「孤影燎原」

斬撃の雨を降らせる。デュバリイはナギトの分け身を素早く切り消すと、盾で斬撃の雨を防ぐ。

「龍炎撃」

その最後に放たれる龍炎さえ盾で防いで見せたが、拡散する炎で視界は塞がれた。

「小癩な！」

デュバリイは瞬時に分け身を2体つくりだすと、それぞれ豪炎剣、劫氷剣、剛雷剣を繰り出した。上下左右前後、すべてに対応する攻撃性の防御だった。

しかし手応えはなく——、

「剣鬼七式、外ノ太刀——」

晴れた爆炎の向こうには、掌に闘気を集約させるナギトの姿。

「――衝刀練！」

投げ放たれるは小刀三本。デユバリイはそれを分け身ともに打ち消して、分け身はそれで消え去る。《劍帝》に教わった分け身だが、彼ほどの精度ではない。

そして次の瞬間、デユバリイの手から劍が弾かれた。今この時、ナギトは何もしていない。それなのにデユバリイの右手から確かに劍は弾き飛ばされた。

「なっ」と驚くデユバリイに、ナギトは最速で距離を詰める。

「迅雷――！」

首筋に太刀を置く。それでこの試合は決着となった。

「うぐぐ……負けを認めます、ナギト・シユバルツァー……」

悔しさを滲ませ……もとい、前面に押し出しつつもデュバリイもそれを認める。

観客もまた勝者への賛辞を惜しまず、ナギトはそれでようやく緊張を解いて太刀を納めた。

「おつかれ」と飲み物を差し出したのはリヴァル。ナギトは「さんきゅ」と受け取って一気に呷った。同時にデュバリイにはアリアンロードが声をかけている。

「デュバリイ、此度の敗因はわかりますね？」

「はい、マスター。私が彼の……ナギト・シユバルツァーの実力を見誤りました」

「その通りです。そしてそれは彼の狙い通りだった。……そうですね、ナギト？」

話を振られたナギトは内心で唸る。この面子に自らの勝因を語らせられるのは中々に恥ずかしいものがある。

「そうですね……、まあ意図的にスピードは抑えてました。最初の攻防で、速さじゃ敵わないと思つたので」

「ゆえにあなたは自らのスピードを制限して戦った。……すべては最後の一瞬、相手の隙を突くために」

セリフを奪うアリアンロードの言葉はまさしくナギトの狙いを言い当てたものだった。お見通しというやつだ。

ナギトは肩を竦めてそれを表し、デュバリイは悔しそうに眉根を寄せた。

ややあつてデュバリイは未だ悔しさを滲ませながらも「見事でした」と言う。

「あなたが未だ《剣鬼》と呼ばれたかつての力を取り戻していない事はわかっていました。それでもなお私から一本取るほどの実力……いえ、戦いに対する姿勢とでも言いましょうか……、とにかく勉強になりました」

次いで握手を求めるデュバリイにナギトも間髪入れずに応じる。

「いえ、こちらこそ。格上に対する立ち回りを学ばせてもらいました」

嫌味っぽくなつたが、デユバリーの事だし素直に受け取つてくれるだろうと思つてナギトは発言する。

そう、デユバリーは素直なのだ。良くも悪くも。元の性根がそうなのか、それがさつきの試合では裏目に出たと言えよう。技の繰り出し方が単調なのだ、動きが読み易いとも言えた。

だから「隙を突く」なんて事ができたのだ。もしデユバリーがこれほど素直でなければナギトは負けていたはずだ。なにせまだデユバリーは全力を——全速を出していなかった。

固い握手を終え、デユバリーが「ごほん」と咳払いする。

「ところでシユバルツァー、私の剣を弾いたのは何でしたの？何かされたようには思えませんでしたが」

それはデユバリーの隙が生まれた原因——あの瞬間、デユバリーの右手から剣が弾き飛ばされた理由だ。

「何も無い所に衝撃が生まれて私の手から剣は弾かれました。あれのタネを教えてくださいな」

デュバリイはそれをナギトの戦技によるものだと確信している。そうじゃなきゃ、あそこで生じた刹那の隙を突く事なんてできるはずがないからだ。

「『衝刀練』って戦技でして。直前に小刀を投げたでしょう？」

「ええ。剣で弾いたら消えましたわね。闘気を固めてつくったものでしょう。あれに目眩し以上の意味があったと？」

「はい。あの展開だとデュバリイさんは『避ける』より『防ぐ』を選択すると思ったので……あれは、当たった箇所が遅れて衝撃を発生する技です」

デュバリイは説明を受けて更に驚嘆する。『衝刀練』という戦技ではなく、その時点から自分の行動をコントロールされていたという点に対してだ。

「なるほど、遅れて衝撃を……色々と思いつくものですね」

「はっは、そうでもしないと勝てないバトルが多過ぎましてね。ホントは衝撃じゃなくて斬撃を発生させたいんですけど修行不足ですな！」

衝刀練は本来、闘気で形作った小刀が当たった箇所が遅れて斬撃を発生させるのを目的とした戦技だ。

今はまだそれはできず、笑ってはいるが力不足を体感しているナギトだった。

快活に笑うナギトにデュバリイは何とも言えない感情を抱く。そんな風に難しい顔をするデュバリイの前にアリアンロードが立った。

「では約束を果たしましょう」

約束と聞いてナギトは自らがこの試合に応じた理由を思い出す。アリアンロードからアドバイスがもらえるのだ。

「タンクと蛇口の話はしましたね？」

「はい」とナギト。タンクとは闘気が貯まる己という器。蛇口とはそれを解放するもの。己の肉体か太刀。

「あなたの剣はゼムリアストーン製ですね。粗いつくりですが、強度は信用してもいいでしょう」

ナギトの扱う太刀はかつて《剣鬼》が共和国で入手したものだ。ゼムリアストーンの加工法が確立されたのは1202年。それ以前の品のため、つくりは粗い。しかしアリアンロードが言う通り、強度は大陸最硬度のゼムリアストーンの名に恥じないものだ。

「あなたは戦闘中、何度も武器に闘気を流しては解放していますね。それは剣そのものを一時的にタンクにするのと同じ事です」

武器に闘気を流し、放つ。それは戦技の基本だ。確かにそれは剣を闘気のタンクにしているのと同義。

「どうしてそれを常からやらぬのです」

そして、その言葉に戦慄する。

常に行く。太刀を闘気のタンクとする事を。

その意味を考えて、冷や汗すら滲む思いだ。

「…それって、難しくないですか？」

なにせそれは、常に「破空」待機状態を保つような暴挙だ。気が緩んだ瞬間に闘気大暴発でナギトの五体が不満足になる可能性すらあった。

「だからこそやる価値があるのでしょう」

そんなナギトの懸念を理解してなお艶然と、不敵に微笑むアリアンロード。
ナギトは観念して「ご助言感謝します」と低頭した。

「ええ。それを続けければ、いずれその鈍も業物へと成るでしょう」

アリアンロードが踵を返し——、「忘れるところでした」と振り返る。ナギトにはなく、その隣にいるリヴァルに向けてだ。

「あなたがリヴァル・アルヴァンスですね」

リヴァルは一瞬鋭い眼光を放つが、すぐにそれを引つ込めて「ええ」と返す。

「復讐を成し遂げたいのなら、己を偽らぬ事です」

アリアンロードはそれだけ言うと、デユバリイを引き連れて今度こそ甲板を離れていく。試合を見ていた者たちもまばらに去っていく。

蒼穹を臨むパンダグリユエルにナギトとリヴァルの2人を残して。

“リヴァル・アルヴァンス”——その名が持つ意味を、ナギトは未だ知らぬままに。

《灰の騎神》と《閃嵐の騎士》

11月30日。パンタグリュエル船内、貸し与えられた客室でリヴアルとカードゲム ブレードに興じるナギトの元にある一報が届けられた。

それはエリゼ・シユバルツァーとアルフィン・ライゼ・アルノールの身柄を貴族連合が押さえたという事実だ。

「……そうか」

長く息を吐いて瞼を落とす。

「お前の妹分の方はカレル離宮に送られたそうだ。んで皇女殿下サマは今この艦にいるぜ」

それをナギトに伝えたのはクロウだった。「驚かねーんだな」と続けて椅子に座る。

もう11月も末。内戦が始まっておよそ1ヶ月が経過している。物語が動き始める時期に突入したのだ。

「貴族連合は帝都を中心に帝国の約6割を掌握してる。こうなるのも時間の問題だった」

「ま、正規軍の庇護下に逃げられる前に捕まえられて良かった……つてのがカイエン公のオッサンの本音だろうな」

皇帝と皇太子を軟禁している貴族連合としては、皇女の身柄は是が非でも押さえておきたいはずだ。

もし正規軍に保護され、貴族連合の非道を説かれてもしたら、この内戦——クーデターの正当性がなくなる。

格マスコミを押さえているとは言え、この専制君主国家では皇族の発言力が大き過ぎるものがある。そういった意味で、行方知れずの皇族の残り1人——皇子オリヴァルトに対しても捜索命令が出されていた。

「誰がやった？どこで捕まえたんだ？」

リヴァルがクロウに問いたです。

「やったのはこの艦にいるチビ兎——アルティナだ。ユミルの郷で捕らえたらしいが、
猟兵が郷を襲ったどさくさ紛れだったようだぜ」

それはナギトにとって既知の情報だったにも関わらず、こうして耳にすると心臓が重
くなつた感覚を覚えた。

ナギトがシュバルツアー家に迎え入れられてから一年余り世話になつた人たちの顔
が思い浮かぶのだ。

そんな沈鬱な顔のナギトにクロウは提案した。

「さつきも言ったがお姫様はこの艦の貴賓室にいるぜ。ナギト……会つて来たらどうだ
？」

「今更どのツラ下げて……だろ」

「はっ、甘ったれた事を。お前まだ嫌われる覚悟ができてねーのかよ」

クロウの言葉が胸に突き刺さる。嫌われる覚悟。ナギトは今現在、貴族連合に従っている。言わば内戦を起こし、帝国を混乱に陥れた側の人間だ。

それによって被害を受けた者に対して、とりわけ知己に対して、会う事を躊躇っている。軽蔑された目で見られるのが怖いのだと、ナギトは実感した。

「…せめて顔を見せるのが最低限の義理ってもんか」

しかしその恐怖を抑え込んででも、ナギトはアルフィンに会うべき義理があると考えた。

そう決めるとすぐに立ち上がったナギトはクロウに礼だけ言うと言った貴賓室に向かった。客室よりなお豪華な装飾の施された貴賓室の扉をノックする。

「どちらさまですか？」

室内からは可憐な声。ほんの少し逡巡して、ナギトは名乗った。一拍の間があり、入室を許可される。

監視役としてついて来ていたリヴァルに目配せした。

「(トク)で待つ」

そう言ったリヴァルに頷いてナギトは入室する。

真紅のドレス、金砂の髪、海色の瞳。帝国の至宝、その片割れたる皇女アルフィンがそこにはいた。

「お久しぶりです、アルフィン皇女殿下」

ナギトは貴族然とした礼をして顔を上げる。

「ええ、お久しぶりですね。ナギトさん、どうしてこちらに？」

冷たい声音だった。アルフィンにはどうやらナギトがパンタグリユエルに乗っている理由がすでに見当がついているようだ。

しかしナギトはめげずに、いつもの態度を貫き通す。

「そりやまあ俺が貴族連合に与してるからですよ」

あつけらかんと言いつつナギトにアルフィンは険しい顔を見せる。

ラインを始めとしたVII組メンバーは各地で奮闘しているだろうに、この男だけ裏切っているのだから当然だ。

「殿下、皺が寄ってますよ」

とナギトは眉間を叩いて見せる。アルフィンはため息を吐くと寄せていた眉根を緩めた。ナギトの様子がどこまでも記憶と一致したからだ。ふざけているのかふざけていないのか判然としない態度、それで周囲を煙に巻いたり巻き込んだり。

「どうしてです?」

率直に聞く謎は、ナギトがどうしても貴族連合の側に立っているのか。

「それは答えられませんな」

しかしナギトは悩むまでもなく即答した。答えられない、と。それは後ろめたい事があるからか、迂闊には話せない深謀遠慮があるからか、アルフィンの目では見抜けなかった。

「その代わり」とナギトは続ける。

「――逃がしてあげましょうか？」

その言葉に思考が灼かれた。叫びそうになって、それを押し留めて深く呼吸する。声のポリュームを一段下げてアルフィンは確認した。

「できるのですか？」

「可能か不可能かで言えば可能です。相当やばい逃避行になるのは間違いありませんが」
淡々と起伏なく伝える——わけではない。いつも通り、アルフィンが知っている通りの様子のナギトだからこそ恐怖さえ覚えた。

「どうして…?」

そこまでやってくれるのか。アルフィンは自らの立場を理解している。皇族——帝国で最も尊い血筋である自分の存在は例え賊軍であっても正当性を主張できる程に強い。

そんな影響力を持つアルフィンを逃がす——それはナギトにとって、これまで貴族連合で築いてきた全てを台無しにして余りある咎になるはずだ。

「学院祭……、後夜祭で発破かけてくれた時の礼がまだだったと思いませんか」

今度の問いには普通に答えたナギト。思い返したアルフィンは「そんな事で」と呟いた。

ナギトは懐かしげに微笑むだけでアルフィンの葛藤と苦悩を慮らない。俯いていたアルフィンはやがて顔をあげてナギトをキツと見据えた。

「いいえ、結構です」

そうしてナギトの提案を跳ね除けた。きつとこれで正しいのだと思う事にした。

「………そうですか」

ナギトはほんの少しだけ残念そうに笑って。そして、互いが黙る一拍の間。

「リインさんから聞いた通りですね、ナギトさんは」

「…：そういうユミルにいたとか。リインから何か悪口でも聞きましたか」

「悪口なんて。……うーん、よく考えればあれって悪口だったのかしら？」

可愛らしげに首を傾げるアルフィン。2人の間の雰囲気は弛緩し、会話は雑談然としてきた。

そうしてナギトは兄貴分について思いを馳せる。

☆★

そうしてリインは兄貴分について思いを馳せる。

心配だった。Ⅶ組全員の安否もそうだが、クロウとオルディーネに敗れたリインを逃がすために、《蒼の騎神》に立ち塞がったナギトの言葉が頭から離れない。

——「だからもう、俺のお守りは必要ないよな」

——「だからリイン——俺のその信頼を裏切るなよ？」

「死ぬつもりはない」とは言っていたが、合流したマキアス、エリオット、フィーから聞いた話では、あの後——《紅き翼》の救援のおかげでオルディーネから逃げおおせた際に、ナギトだけ単独で動いていたという。

本来なら一番心配がいらぬはずなのに、一番心配してしまうムーブを平然とするのもナギトらしくはあるもの。

ナギトは、傲慢で危うい。

VII組メンバーからもたびたび指摘されていたが、ナギトは他人の問題に首を突っ込む割に自分の問題には人を関わらせようとしない。

ナギトが聞いたなら「なにそれ自己紹介してんのライン」と返す事間違いなしだが、リンは実際そう感じていた。

トールズに入学してからも自分は助けられるばかりで、ナギトの助けになれた事なんてない。

そんな思考をしたのは、眼前の敵にナギトの影を見たからだ。

12月1日。

この日、《灰の騎神》と《閃嵐の騎士》が相見える事となった。

リイン・シュバルツアーは騎神の機能である“精霊の道”を使い、トヴァル・ランドナーと共にユミルからルナリア自然公園へと空間を跳躍した。

そしてケルディックの外れでマキアスとエリオット、フィーと再会を果たし、そのままガレリア要塞へと向かった。

しかしガレリア要塞跡地でリインたちを出迎えたのは《西風の旅団》の連隊長2人、《罨使い》ゼノと《破壊獣》レオニダスだった。

フィーの古巣でもある《西風の旅団》は大陸西部でも《赤い星座》と双壁を成す最強格。その連隊長を相手に互角の戦いを繰り広げたリインたちの目の前に現れたのは機甲兵。

ガレリア要塞跡地を拠点とする第四機甲師団を撃滅しに来た機甲兵部隊だった。そんな機甲兵を相手にリインは《灰の騎神》ヴァリマールを呼び出し応戦する。

機甲兵部隊が《灰の騎神》に手こずっている間に第四機甲師団は陽動の部隊を撃破してガレリア要塞跡地に帰還——ヴァリマールと共に機甲兵部隊と対峙した。

空に影が走る。陽光が遮られた一瞬。

「避けるよー」

そんな間延びした声と共に強襲艇から降下したのは全身を白く染めた機甲兵。そのプロトタイプ。

機甲兵プロトタイプ——プロトは降下際に近くの柱を斬りつけた。その斬撃から辛くも逃れたのは水色の髪を揺らす鉄道憲兵隊将校のクレア・リーヴェルトだ。

彼女は機甲兵部隊の指揮官の乗るシュピーゲルのメインカメラを狙撃しようとしていて、それをプロトに阻止されたのだ。

着地したプロトは悠々とヴァリマールに向き直る。その外見、威容はオルディーネを想起させた。

その周囲に続々と機甲兵が降下、着地していく。あつという間に部隊が揃った。この部隊こそが帝国各地で活躍する《閃嵐の騎士》の部隊だった。

「——リヴァル」

「わかってる」

「まだ手は出すなよ」

「ああ」

プロトは横のシユピーゲルに短く指示を出すと、先にクレアに忠告した時と同じように、ボイスチェンジャーをオンにして話しかけた。

「灰色の騎士よ、決闘がしたい」

「……………なに……………?」

その発言の意図を理解できないのは刀の切先を向けられたリインだけではない。《氷の乙女》と呼ばれる演算機並みの頭脳を持つクレアも、《紅毛のクレイグ》と呼ばれる第四機甲師団の長オーラフも、《零駆動》と呼ばれる遊撃士協会のトヴァルですら、理解できていない。

その意図を察したのは高みの見物を決め込んでいるゼノとレオニダスだけだった。《閃嵐の騎士》の正体、リインとの関係性、獵兵としての思考回路が、プロトの操縦者——ナギトの意図を見抜いていた。

「戦力は五分、戦闘が始まればお友達が巻き込まれるのは避けられず、ここで多くの死者が出る事も間違いないだろう。しかし……」

「お前との決闘に乗れば避けられる……とでも言うつもりか!? 帝都をあんな形で乗っ取っておいて……貴族連合の言い分なんて信じられるわけがないだろう!」

「だったらどうする……ここで全面戦争か? わかっているのか、決闘に乗れば少なくともお友達を逃がす時間はあるぞ」

決闘を拒否したリインに《閃嵐の騎士》は折れずに決闘を持ちかける。その言葉にはさすがのリインも視界の端に同行者の姿を捉えた。

「……いいだろう。賭けるものはなんだ?」

少しの沈黙の後、リインは決闘を受けた。

口を挟みたいオーラフも強襲艇から着地した機甲兵部隊の事は知っており、牽制されては動けなかった。

「誇りやプライドじゃダメか？……くく、冗談だ」

リインの視線がキツくなったのを察したのか《閃嵐の騎士》はモニターを前に苦笑する。

「俺が勝つたら…：そうだな、その機体をもらおうか。……知っているぞ、それは貴族連合の英雄《蒼の騎士》の駆る《蒼の騎神》と同型機だろう」

「——わかった。俺が勝つたら、ここの部隊を引き上げてもらうが、構わないな！」

《閃嵐の騎士》のふっかけに、しかしリインは動じない。それどころか逆に相手を気押しほどの闘気を漲らせている。

「……………騎士殿」

そのラインの要求に、機甲兵部隊の指揮官は苦言を呈したくなる。そんな要求が通れば、今回の作戦は失敗になる。そう思って《閃嵐の騎士》の名を呼ぶが、

「まあまあ指揮官殿、ここは私に任せて下さい」

軽々に言う白色の機体に荒げた声を発しかけて――

「それとも、英雄の言葉を信じられないと?」

そんな、圧を持った発言に封殺される。

そうして、第四機甲師団の指揮官と機甲兵部隊の指揮官は沈黙し、《閃嵐の騎士》と《灰の騎神》は向き直った。

戦闘が始まる前、クレアがヴァリマールに駆け寄って来た。

「注意してください！ 相手はおそらく《閃嵐の騎士》——この内戦で正規軍を何度も打ち破った貴族連合の英雄です！」

「…………——わかりました！クレア大尉は退がっていてください！」

クレアが退がり、トヴァルやⅦ組メンバーと共に観戦の構えに入る。マキアスらⅦ組の面子は「ラインが戦うのに僕たちが逃げられるか！」という理屈で退避を拒否していた。

ヴァリマールが構えたのを見て、プロトも構える。武器は機甲兵用ブレードを改造した太刀と左腕部を覆う細身の盾だ。

ヴァリマールの武装は機甲兵ドラッケンから奪った機甲兵用ブレードのみだったが、負ける気はさらさらない。

やがて、呼吸の合致を理解したのか。何の合図もなく戦闘は開始され、先手を打った

のはリインだった。

「はああああっ！」

騎神脚部のブースターが火を噴き、瞬時に距離を詰める。そこから放たれる八葉一刀流の鋭い袈裟斬り――

「甘い」

それを左腕の盾で力強く弾き返す。ブレードを取りこぼしこそしていないものの、ヴァリマールの体勢は大きく崩れる。

プロトは回転切りを繰り出し、ヴァリマールはそれを受けて大きく後退した。

「ぐっ……」

「は、さすがに装甲は硬いな。だが……」

今度はプロトが攻める。膝をつくヴァリマールに振り下ろしの一撃。

「ッ……………」

それをヴァリマールはブレードで受け止めるが、押さえ込まれるようなポジションになっただ。

「まだ騎神戦には慣れてない。もっと気を使え、生身じゃないんだぞ」

「……余計な……お世話だ！」

リインは叫ぶと同時に背面のブースターを点火。空に登る勢いで靈力を放出してプロトを弾き返した。

騎神の恐るべきパワーに弾き飛ばされたプロトもまた背面のユニットを起動して危なげなく着地する。新しく開発された滑空ユニットで飛行とはいかないものの、滑空や大ジャンプくらいはできるようになっていた。

ヴァリマールは立ち上がり、プロトもまた悠々と構える。仕切り直した。

しかし今度はリインは動かない。考え得る限り、最高の初撃だった。またあのパリイで体勢を崩されては敵わない。

「戦場で迷いを見せるな、有角の若獅子」

そんなリインを見抜いたのか、忠告じみた言葉とともに次はプロトから仕掛けた。

振るわれた太刀から弧状の斬撃が飛来する。それをブレードで打ち消したリインは眼前に迫る白い機体を見た。次いで放たれる袈裟斬りを紙一重で躲し、八葉一刀流、五の型「残月」でカウンター。

しかしそのカウンターをするりと避けると、プロトもまた反撃の居合斬り——残月。

今度もまた防げずに後退するヴァリマールに追撃するプロト。鋭い斬撃、瞬間二振り

——閃光斬。

致命の一撃はブレードで受けたヴァリマールだったが、勢いに負けてブレードはその手から弾き飛ばされてしまった。

両膝を地に、崩れ落ちるヴァリマールの眼前に太刀を突きつけて、

「俺の——」

勝利宣言を行う、まさにその時。

響く轟音。飛来する砲撃はヴァリマールとプロトの中間を引き裂く軌道。

誰もが機甲兵のバトルに気を取られていて、反応できなかつたそれは、第四機甲師団の駆る戦車アハツェンによるものだった。

「ええい、黙って見てはおられん！決闘を邪魔するのは帝国流ではないが——息子の級友、守らせてもらおうぞ！」

放たれた砲弾は後退する事で避けたプロト。そのコックピットで《閃嵐の騎士》は自身の部隊の副隊長の名を呼んだ。

「リヴァール？」

「すまん、決闘に見惚れてた」

「このあほ」

どンドン放たれるアハツエンの砲撃に晒されながら、強襲部隊の隊長副隊長は軽快なやり取りを交わす。

「どうする?」

「んー」と《閃風の騎士》が悩む一瞬で、クレアが先程しくじった仕事を果たした。機甲兵部隊指揮官の乗るシュピーゲルのカメラを撃ち抜いたのだ。

「こうなれば後詰め部隊も投入して——」と言っていた指揮官は視界の消失に慌てている。

そこに《閃風の騎士》が無線で通信を繋いだ。

「指揮官殿、撤退しましょう」

「しかし騎士殿、それでは作戦失敗です！後詰め部隊を投入すれば戦力は互角以上に持ち込めます！」

「陽動部隊を瞬殺した第四相手じゃ後詰めを投入してもせいぜい互角です。それに……いいんですよ、この作戦は失敗するように練られている」

「え？」と驚く指揮官に《閃嵐の騎士》は記憶を想起させる。

このガレリア要塞攻略戦はルーファスが考案したものだ。作戦自体は単純で、陽動部隊がガレリア要塞の第四機甲師団を引き付けている間に本命の機甲兵部隊がガレリア要塞を占拠、第四機甲師団の補給を断ち、陽動部隊と挟撃するというもの。

戦力そのものは充分に思えた。相手が正規軍最強とされる第四機甲師団でなければだが。

その点まで踏まえて《閃嵐の騎士》はこの作戦は失敗を前提に練られたものであると言っていた。

総参謀であるルーファスがそんな事を認めるわけがないから、機甲兵部隊の指揮官はある程度責任が問われるだろうが、そこは言わない。

わずかな沈黙の後、指揮官は決心したよう部下に撤退を指示する。《閃嵐の騎士》の騎士も同じように部隊の者たちに「撤退！」と告げた。

「今回は引き分けだな、灰色の騎士。決着は次回に持ち越した。……その時まで腕を磨いておけよ」

《閃嵐の騎士》はそんな事を言うのと背面のユニットを使って大ジャンプ。宙に待機していた強襲艇に飛び乗った。

やがてすべての機甲兵がガレリア要塞跡地を去り、戦闘は終結する。

リインは敗北の悔しさに歯を食いしばりつつ、騎神を降りたのだった。

☆★

「おし、今回もお疲れ様でした！次の出撃までしっかりとお休みしてくださいね！」

強襲艇に飛び乗り、戦地を離脱した《閃嵐の騎士》——ナギトは部下たちに指示を出していた。

この後、強襲艇はパンタグリユエルに帰艦し、部下らは下部スペースで休息をとる事になった。

「おつかれ」という言葉と共にリヴァルがドリンクを手渡す。礼を言って受け取り、それを呷った。

「あれで良かったんだな？」

「うん、まー……そうだな！」

リヴァルは先程の事を思い出しながらナギトに問うた。ナギトは若干悩みつつも自身の選択を肯定している。

「作戦が失敗前提ってのはホントにそう思うし、あの展開の削り合いは嫌だろ」

それは、ナギトがあの場合であの決断をした理由だ。しかしリヴァルに語ったのも貴族連合の英雄としての建前。

本音は同級生やその親を手にかけてはなかつたから、あの選択は大前提だつたわけだ。

この内戦で数々の命を奪ってきた——《剣鬼》として共和国で1000人斬りをしたナギトだが、友人やその肉親を殺すのは無理だつた。

本来それはふざけた理屈だが、ナギトとしては飲み込むしかない矛盾でもあつた。

「……そうだな」

怪訝な顔は表に出さずに、リヴァルはナギトの言い訳を聞き届ける。「ところで」と話を転換した。

「兄弟分到手加減なしだったな？」

それはナギトの駆るプロトがリインのヴァリマールを圧倒した様を言っていた。事実、あの決闘でプロトはダメージを負っていない。

「手加減はしたさ。アレはカイエン公が欲しがってるしな」

カイエン公は《蒼の騎神》のみならず《灰の騎神》すら手駒にしようとしていた。確かに騎神は強力な兵器なのだから気持ちにはわからんでもないが、起動者付きとならば、反旗を翻された時に困った事になるだろう。

「教導しているようにも見えたが？」

「あー、そうか？ 自覚はねーけど。兄弟分があんまり情けないと自然とそうなっちゃうのかも？」

ナギトの紡ぐインチキ臭いセリフにリヴァルはため息を吐く。

「怪しい動きも大概にしておけよ、ナギト。でないと俺も監視役として上に報告せざるを得なくなる」

「……ああ、悪いなリヴァル」

リヴァルは——というか、このパンタグリユエルにいる一定のメンバーはナギトがスパイをするために乗艦している事を察していた。

それでもカイエン公に報告されてないのは、ひとえにナギトの人徳——というわけもなく、様々な思惑が絡まり合っているからだが。

謝意もあり、床に向けた視線をリヴァルに戻す。「怪しいと言えば」とナギトは続けた。

「お前も最近なんか変だぞ。……リヴァル・アルヴァンス」

リヴァル・アルヴァンス——それがリヴァルのフルネームであり、またこの場ではアリアンロードと会話してから「変」だと指摘するものでもあった。

そうした指摘をしたナギトをリヴァルは殺意すら籠った目で睨みつける。

「その名で呼ぶな……！」

「すまん」と両手をあげて降参の意を示す。するとリヴァルもまた殺気を引つ込め、目を逸らした。

「それは……捨てた名だ。もう俺には関係ないし、もう終わった復讐だ」

言葉の意味と背景がわからないナギト。しかし「もう終わった復讐」——とはオズボーンの死を意味する事だけはわかる。

彼の死によって内戦は始まり、《帝国解放戦線》の宿願は果たされたのだから。

リヴァルにかける言葉が見つからないナギトは「そうか」と受け取り会話を終わらせる。

2人でパンタグリユエルの上部フロアへ向かうエレベーターに乗り込んだ。

未だ陰鬱な雰囲気纏う友に、それが晴れる日が来る事を願いながら。

湧き上がったもの

「すごいやガレリア要塞じゃ愉しそうやったなあ。一芝居打った甲斐はあったかあ、ナギト？」

ゼノのいきなりの問いかけにナギトは口に含んだコーヒーをぶちまけてやろうかと考えたが、そのまま嚙下した。

「なんの事ですかね」と一応とぼけてみるが、この2人の前には無駄だろうと感じていた。

ガレリア要塞跡地での《灰の騎神》とのバトルから数日が経過したパンタグリユエル客室内での事だった。

「言っとったやんか。『決闘がしたい』——これ、本音そのままやろ？」

見透かすように言うゼノの横でレオニダスが腕組みをしつつうんうんと唸る。

「できるだけ嘘は吐かない……そんなお前さんのやり口そのままやったわ」

ナギトの思考をどこまでも見通すようなゼノの言い分に両手をあげて降参する。

ゼノが指摘したのはガレリア要塞跡地でナギトがリインに対して決闘を持ちかけた理由だった。

あの場では建前を口にしたが、本音はゼノが見破った通り、ただリイン——ヴァリマールと戦ってみたかったからだ。

「そんなわかりやすいかな……？」

「心配の必要はない。おそらくあの場で貴様の目的を見抜けたのは我らだけだ」

そのために一芝居打ったナギトだったが、それがバレていれば世話はない。数日前り

ヴァルにも釘を刺された所だ。

しかしレオニダスの言葉で一応の安心を得たナギトは最初の質問に答える事にした。

「……ええまあ。芝居を打った甲斐はありましたとも。あいつの今の実力も知れましたね」

「まるで大人と子供やったで。ちよつとあのボンがかわいそなつたもん」

涙がちよちよ切れる…そんな仕草をしたゼノに「ウソつけ」としつかりツツコミを入れてからナギトは続ける。

「そりや大人と子供でしょうよ。片や英雄に成り果てた俺。片やひと月眠りこけてたあいつ。……まあ今からまくつてくれるはずです」

「ほう、ずいぶん信頼しているのだな?」

「騎神のポテンシャルは凄まじいですし……少し危ない場面もあった。本気こそ出しま

せんでしたけど、油断もなかったですからね、あの時は」

残月でのカウンターには目を見張るものがあつた。それにもカウンターで返したが、ナギトがうっかり八葉一刀流の剣技で対応しちゃうくらいには研ぎ澄まされた一閃だつたと言える。

加えて、騎神そのものの潜在能力は計り知れない。クロウ——オルディーネの「奥の手」に近い秘密をヴァリマールも持っていると思うべきだ。

所詮はオルディーネの模倣機体であるプロトでは太刀打ちできないスペックに成長する可能性も十二分にあつた。

「……お前がそこまで言うほどとはな。俺らも気合いが入るってもんや。なあレオ？」

「ああ。次に会つた時こそ西風の神髓を見せてやろう」

ゼノとレオニダスが生身で騎神に対抗しようとしているのを見てナギトは苦笑してしまうが、自身が2年前オルディーネと戦つた事を思い出してさらに苦笑は深まつてしまふのであつた。

「しんと静まった客室が何となく居心地が悪く、やはり監視役として同席していたリヴァルに話を振る。」

「そういえば、リヴァルは良かったのかよ。新型の機甲兵の受け取りに行かなくて」

《帝国解放戦線》の幹部《V》——ヴァルカント《S》——スカーレットは竣工した新しい機甲兵を受け取りにパンタグリユエルを降りていた。

「別に構わない。ゴライアスもケストレルもまだ量産体制は整わず、俺もシユピーゲルで充分だからな」

「はっ、まあそやろな。ブリオニア島での訓練中も可愛げがないくらい乗り回しとったし」

「ああ、操縦機体が変わったにも関わらず、腕前を上げているのはさすがと言えるだろう」

“シユピーゲルで充分”と言ったりヴァルをゼノとレオニダスが褒め称えた。どう

やらかって行われたというブリオニア島での機甲兵教練の際にリヴァルは操縦で非凡な才を見せつけたらしい。

しかしナギトは「ホントに？」と食い下がる。それはリヴァルの操縦技術を疑うものではなく、「シユピーゲルで充分」と言った部分に係る。

「……なにが言いたい？」

目を細めたりリヴァルにナギトは「はっ」と鼻を鳴らす。

「本来ならオルディーネ・イミテーションはお前が乗るはずだったんだろ。それにあれは換えのパーツが揃ってる。……だからもし俺がプロトと一緒に——」

得意げに推測を語るナギトに「やめろ」と短くりヴァルが告げる。鼻白むナギトに、リヴァルは再三の忠告をした。

「お前がその先を言えば——、それを知っていると、俺が明確に把握できてしまえば、俺

も監視役の任を全うするしかない」

「…そうだな、すまん。調子に乗った」

ナギトは謝ると憶測語りをやめた。わかっていたはずの事だ、リヴァルは監視役である。

だが、あまりにも身近にいたせいで「監視役」というより「お友達」感覚が強くなっていた。

ナギトの悪い癖だ、調子に乗っていらぬ事まで口走ってしまうのは。

しかしそれを忠告してくれるあたり、リヴァルもまた監視役としてよりお友達としてナギトに接したいと感じているのかもしれない。

「仲良しさんやな、まったく」

そんなナギトとリヴァルの様子をゼノはからかう。レオニダスも微笑ましげに鼻を鳴らした。

「アンタらほどじゃねーよ」

しかし常に2人で一緒にいるゼノとレオニダスほどではないはずだ。そう指摘すると「それもそうやな」と楽しげにゼノは笑い、

「それはそうと、その話を俺らに聞かれても良かったんか？」

その話、とはナギトが言いかけた仮定の話。つまりこの先ナギトが貴族連合を離反するつもりであるという話だ。

「別に言いふらさないでしょ、あなたたち2人」

しかしナギトに動揺はない。貴族連合の首魁であるカイエン公に報告されたらまずい状況になるが、この西風の2人がそれをやるとは思えなかった。

「俺はそもそも西風の連隊長がカイエン公に従ってるのを不思議に思ってる。忠誠心なんてものはないだろうし……もしかして金？」

《西風の旅団》は獵兵团だ。金さえもらえばなんでもするのが流儀。しかし、団長が死んでほぼ解散状態の西風の連隊長が、それだけのために帝国最高峰の貴族に取り入っているとは考えられない。

案の定ゼノは「いやあ、どうやらなあ」と誤魔化す。

「なにか別の狙いがある、のかな？」

にやり、笑ってカマをかけるがゼノも同じように笑って細目をギラつかせる。

「そつちこそどうなんや、貴族連合に入つとる理由は？」

「友達を取り戻すためっすよ」

「ほう、それはあの蒼の男の事か？」

ゼノとレオニダスの息のあつた問いかけに答えるナギト。その蒼の男が誰かを名指

ししてしまうと、リヴァルが監視役の仕事をする必要が出てくるため言わない。「さて、どうでしょう」とゼノと似たセリフで誤魔化す。

にやり、にやり。胡散臭い2人が胡散臭い笑みを交わし、会話は一段落。ややあつて解散という流れになり、ナギトとリヴァルが客室を出る間際、ゼノは言った。

「俺らもお前と似たようなもんや。ここにゐる理由はな」

それはきつと、ナギトが質問に答えた事へのせめてもの対価であった。

こんな風に、ナギトは貴族連合で役に立つかわからない情報を集めていく。次はマクバーン。12月9日、翡翠の都で共に行動する予定だった。

☆★

厭な考えが頭をよぎる。

マキアス、エリオット、フィー、ガイウス、アリサ、ミリアム、エマ、ラウラ、ユー

シス。言わずと知れたⅦ組の仲間たち。

クロウとナギトを除き、すべての級友と合流できた。

そう、クロウとナギトを除く……だ。

あの2人は第三学生寮で同じ部屋だった。もしかすると裏で結託していたかもしれない。そんな考えが、思考の端から肥大していく気がする。

そもそも、そう考えるきっかけになったのはガレリア要塞跡地で《閃嵐の騎士》と呼ばれる機甲兵と戦ってからだ。

あれの武装は太刀で、しかも八葉の技を扱っているように思えた。今思えば、やけ引き際も良かった気がする。

「よう、ガレリア要塞、ぶりだな」

そんな雑念が生まれたのは、やはり件の《閃嵐の騎士》が眼前に現れたからだだった。

バリアハートの街道でユーシスを仲間として取り戻したりインたちは、その場に来ていた《身喰らう蛇》のマクバードとデユバリーと対峙していた。

結果はマクバーンとデュバリイの勝利であったが、そこでアルバレア公爵による横槍が入る。《灰の騎神》を手に入れようと装甲車や新型の重装機甲兵ヘクトルで勝負を挑むもヴァリマールに敗れてしまう。領邦軍が意気消沈した隙にリインは「精霊の道」で逃れようとしたが、そこに待ったをかけたのが《閃嵐の騎士》だった。

突如小刀が飛来し、それは着弾すると数秒後に炸裂した。崖を抉り取る威力。小刀と言つても機甲兵サイズなので人間ほどの大きさだ。

「ぐっ……！」

ヴァリマール——リインはその炸裂から身を挺して仲間を守っている。《閃嵐の騎士》も威力を抑えたのかダメージは軽微だ。

「連戦で悪いが——、あの時の続きだ。やろうや、灰色の」

そして、変わらず《閃嵐の騎士》は悠然とした雰囲気ですべての決闘の続きを所望したのだつた。

「い……いいぞ《閃嵐の騎士》よ、このまま我が軍と共に取り囲めば勝利は必然だ！」

しかしそこに横槍をさすのは、またしてもアルバレア公だ。同じ公爵という身分にも関わらずカイエン公に貴族連合の総主催という立場を取られた彼は躍起になっていた。

そんなアルバレア公に《閃嵐の騎士》は冷たく声をかける。

「口を挟むな手を出すな不埒者。これ以上家名に泥を塗りなされるな、アルバレア公」

やはりボイスチェンジャー越したが、それが拒絶の声音である事は確かである。

そんな英雄の言葉に畏怖を覚えたのか、アルバレア公は怒りに震えつつも黙する事を選んだ。

「——受けよう、貴族連合の英雄。大人しく撤退させてくれる気もないんだろう？」

「そりゃあな。では行くぞ、《灰の騎神》」

「——来い、《閃嵐の騎士》！」

リインと《閃嵐の騎士》は息の合った会話で戦闘を開始する。ヴァリマールはブレードを構え、プロトは突進する。

それは凄まじい速度で距離を詰めるとヴァリマールに向けて太刀を振り下ろした。しかしリインは、あえて一拍遅れて残月を繰り出した。

迫る刃は消失し、振り切ったブレードからは斬撃が飛ぶ。

それは肉薄していたプロトの分身をかき消し、本物へと直撃した。

「子供騙しだな」

「言うねえ」

それを左手の盾で易々と防ぐプロトだったが、《閃嵐の騎士》は内心でリインの成長ぶりに驚いている。

初撃でヴァリマールに呐喊させたのは闘気で形作ったハリボテのプロト。慌てて対

応してくれば良かったが、残月で一刀両断。ついでに本物のプロトにまで攻撃を与え、るとは大したものだ。

街道は直線だ。騎神と機甲兵が戦うに十分なスペースがあるとは言い難く、それで重装機甲兵ヘクトルもヴァリマールに敗北していた。

こんな直線でものを言うのは単純に出力だ。その点においてヴァリマールはプロトを上回っていた。

「はあっ！」

裂帛と共に放たれる閃光斬。距離を詰めたヴァリマールの攻撃だ。素早い連撃にプロトは防御を選んだ。

そこから更にヴァリマールは攻勢に出る。プロトは横に逃げる事もできずに避けるか防御するしかの選択肢しかない。

やがて盾の耐久力が限界を迎えたのか砕け散る。両者の意識に一瞬の空白が生まれ、先に動いたのは《閃嵐の騎士》だった。

機甲兵用ブレードを改修した機甲兵用太刀がヴァリマールに迫る。しかしリンも負けじとブレードで迎え撃った。

巨大な質量の鏑迫り合いに比喻でなく火花が散る。

「成長したようだ。甘く見ていた事は詫びようか」

「戯言を……っ！」

《閃嵐の騎士》は瞬間的に闘気を解放すると、ヴァリマールを弾き飛ばして跳躍した。

滑空ユニットが火を吹き大ジャンプ。そのまま反転して大地のヴァリマールに向けて突撃した。

そんな馬鹿げた攻撃を受けるわけにも行かず、リンもまたヴァリマールの背面ユニットから霊力を噴射して空に逃げる。

プロトが地面に激突し、街道の舗装をぶち破って土煙を上げる。空中に留まり様子を伺うヴァリマールに、土煙を裂いて迫る斬撃が放たれた。

それを打ち消すと同時に再びプロトが大地を蹴ったのが見えた。ブースターを噴出し、空中のヴァリマールに肉薄する。

迫る斬撃を交わし、防ぎ、ついには弾き飛ばしたヴァリマール。

「空中戦ではこちらに分があるようだな！」

言つて、一瞬の間。ラインにはプロトの装甲に隠れて見えない《閃嵐の騎士》が嗤つたような気がした。

「八卦、」

聞こえた刹那、空中で体勢を立て直したプロトの太刀から闘気が溢れ出た。

「四象、」

それは靄のようであつたが、8つの球体になり、すぐに4つに凝縮された。その密度と言つたら、これほど単純な力を感じたのはクロウがオルディーネの“奥の手”を見せ

た時以来だ。

続けさせてはいけない。そう思ったリインは仕掛ける。なりふり構わず奥義を発動する。『無想霸斬』——一太刀で7つの斬撃を刻む、それを、

「四象絶矢」

撃ち抜く、闘気の矢。とてつもない密度のそれは二矢で無想霸斬を打ち消し、残る二矢でヴァリマールの装甲を掠めていった。左脇腹と右肩を打たれて墜落するヴァリマール。

背中から地面に落ちて、立ち上がれない。周囲に仲間がやってくる様はかつてオルディーネに敗北した瞬間を彷彿とさせる。

「エマ、手伝いなさい！『精霊の道』を開くわよ！」

騎神の操縦席から黒猫セリーヌがエマに向けて言い放つ。先程邪魔された撤退を敢行するつもりだ。エマが魔力を練り上げ、騎神もまたそれに呼応して光に包まれる。

騎神の受けたダメージのフィードバックで朦朧とする意識の中、リインはモニターに映る白い機体を見た。

「わざと……、外したな……？」

自身の奥義を打ち消し、さらに余力を残していた戦技。あれをまともに受ければ、それこそオルディーネにやられた時程のダメージを受けていた確信があった。

それを、《閃嵐の騎士》がやらなかつた理由。かねてより思考の端にあつた疑念が膨れ上がる。

「……ナギト……なのか……？」

《閃嵐の騎士》の正体は。未だ姿を現さぬ最後の仲間。苦楽を共にした兄弟分。ナギト・シユバルツァー。お前なのか、《閃嵐の騎士》は。

しかし答えは得られる事はなく。

精霊の道は開かれ、空間を跳躍して見慣れたユミルの渓谷に帰還した。

取り戻した4人の仲間と共に、最悪の余韻を残して。

幕間。離反の時

——「…ナギト……なのか……?」

ラインの言葉が耳から離れない。ヴァリマールの核から聞こえた息も絶え絶えの聲は、容易に悲痛な面持ちを想像させた。

立場を逆転して考えると、確かに最悪の気分を味わえた。

思い返せば、かなり好き勝手していた気がする。それがすべて“運命を変える”ために必要な事だったわけじゃない。

楽しんでいた自覚はある。愉しんでいた自覚はある。やはり自分は浮かれているのだと、自覚した。

「ふう〜」

深く、深く息を吐く。悔恨も愉悅も運命も、すべてため息と共に消えてしまえばいいのに。

そう思うナギト・シユバルツァー。パンタグリユエル客室、便所での事である。

☆☆

やけに元気の良い《帝国解放戦線》メンバーがクロウと話し終えて去っていく。

「どちらさん?」

それを一緒に眺めていたリヴァルにその人物について聞いてみる。

「ゼネフォード…だったか。確かクロウと同じ名前だとかで懐いてた奴だ」

それを「ふうん」と聞き流すナギト。たぶんこれまで出会った事はないが、パンタグリユエルに乗艦しているという事はそこそこできるのだろうと思った。

「悪い、待たせちゃったか? で、頼みってなんだ?」

しかしナギトの興味は件のゼネフォード何某ではなく、クロウにある。

「ああ、リインには俺のことを黙っててほしい」

これから貴族連合——パンタグリユエルはユミルへ向かう。リイン——ヴァリマー
ルを迎えに行くのだ。仲間を引き込むのに脅すため——もとい、勧誘するために。

「そりゃ別に構わねえが」とクロウは若干呆れ顔でナギトを見た。

「いいのか？ 後で面倒な事になっても知らねえぞ」

「まあなんとかなるっしょ」

それをいつもの調子で受け流し「じゃあ頼んだ」と会話を終わらせる。

「ああ、あとリヴァル。俺はしばらくトイレに籠るから配慮よろしく」

「……わかった」

リヴァルもため息まじりにナギトの頼みを聞くスタンスだ。

ナギトの「監視役」であるリヴァルだが、いかに監視すると言っても、ナギトに一定の配慮はしていた。それこそ風呂やトイレなどが該当する。

要はこういう事だ。

ナギトはリインがパンタグリユエルにいる間はトイレにいるから、リヴァルは別行動をしてくれ、と。

これでリインがパンタグリユエル乗艦中にナギトの存在がバレる事はなくなったはずだ。

根回しはもう済んでいる。？このパンタグリユエルにいるメンバーにはナギトがここにいる事は言わないように口止めた。？カイエン公にもヴェイターの魔術でリインの前ではナギトの事を思い出せないようにしてもらったし、万全だ。

去り行く背中に「ナギト」とクロウが声をかけた。

？「今、各地に幻獣が現れてるのは知ってるか？幻獣どもはお前たちが倒せ。できるだけ《灰》の力は使わずにな。後の楔になるかもしれない」

ナギトはかけられた言葉の意味を咀嚼して理解する。

「……………なるほど。つーかバレてんだな」

? クロウの頭の良さに舌を巻かされながらも、ナギトもその言葉の意味を正しく理解できていた。? それよりも、クロウには自分がここでパンタグリュエルから逃亡するのがバレてるようなのが問題だ。クロウの性格上、誰かに話すのではないと思うが。

? それでもここが限界だ。? これ以上、貴族連合にいたら本当に旗頭にされかねない。?
? 今は《蒼の騎士》や《黄金の羅刹》がマスメディアの注目を集めているが《閃嵐の騎士》の操縦者としてナギトに光が当たるのもそう遠くはない。? これまでは《蒼の騎士》に酷似している、という点のために機体に注目が集まっていたが、そろそろ頃合いだ。
? そうなったらナギトはどこへ行っても貴族連合の尖兵と見られるだろう。? 故に、ここが限界。貴族連合からどこかに寝返る最後のチャンス。

? そのためには、まずこの艦内でリインとは会わない方がいい。話がややこしくなる。

? 事が荒立ってるならまだしも落ち着いた状態で話したら、余計な事まで喋りそうだな。

? 「よし、じゃあトイレに隠れるか!」

? ひとまず結論に至ったナギトは勢いよくそう言って、トイレに隠れるのだった。



それから幾許かの時間が経過して、ラインが部屋に入ってきたのがわかった。

おいしいい! 確かに客室埋まってんのになりにライン招いてどこの部屋に入れるのかなー、とか思ってたけど、まさか俺の部屋かよ!?

内心で絶叫するナギト。早速の計画破綻の危機に冷や汗がダラダラだ。

「ん、誰かいるのか?」

? 頭を抱えて嘆くナギトの気配に気づいたのか、リインはトイレに近づいていく。

「おい、誰が入っているのか」

? 敵艦に強制的に連れてこられて、気が立っているのか、やや乱暴にリインはトイレのドアをノックした。? ナギトは祈るような気持ちで気配を抑える。

? 「……誰もいないのか?」

リインはノックをやめてドアを開けようとするが、当然のように鍵がかかっていて開かない。

? 「開かないな。鍵がかかっているのか? それとも、立て付けが悪いか……」

リインがトイレのドアをがちやがちややってる時に、クロウが部屋にやってきた。

? 「よう。……って何やってんだよ、リイン」

クロウの登場でなんとか危機は過ぎ去った。？リインが聞くクロウの過去。クロウがギリアス・オズボーンに復讐を誓った理由。

？ナギトは《剣鬼》であった頃の話を伝えるのと引き換えにクロウの過去を聞き出していたが、2度聞いてもやはり壮絶だと思わざるを得ない過去。

要約すると、クロウの祖国がオズボーンの策により帝国に併合され、国を治めていた祖父がそれが原因で死亡した、という話だ。

クロウは意味深な言葉を残すと、部屋を出ていく。その言葉にナギトはある人物を思い浮かべる。

アルフィン・ライゼ・アルノール

帝国皇帝 ユーゲント・ライゼ・アルノールの実子であり、皇位継承権第2位の女子。？その可憐さは“帝国の至宝”と呼ばれる程であり、現在はリインとナギトの義妹であるエリゼ・シュバルツァーと同じ聖アストライア女学院に在籍している。

内戦勃発の際に遊撃士トヴァル・ランドナーの助力で帝都を脱出するも、ユミルの地にてヴィータ・クロチルダとアルティナ・オライオンの手により貴族連合に拉致された。？その後、アルフィンはパンタグリユエル内に軟禁状態となっている。

クロウとの会話を終えたリインは艦内を自由に歩き回る。ナギトが気配で探る限りだと、このパンタグリユエルに集う強者たちと言葉を交わしているようだ。相変わらずリインの恐れ知らずのコミュニケーション能力には舌を巻く。

? そうしている内に、リインとアルフィンが逃げたのをナギトは察知した。

ナギトはトイレから出て軽く伸びをしながら――、その笑顔が引きつった。

? 「はっはっは。メンドくせえー」

気配感知の索敵範囲を広げてみたら、なんとマクバーンがリインの近くにいないか。ここは弟として兄を支える場面だと、ナギトはコキコキと首を鳴らしたあと、走った。

☆★

? 「よう、マクバーン」

？「ああ、《劍鬼》じゃねえか。どうした——なんて聞くまでもねえか」

？対峙する強者と強者。？2人ともが笑みを浮かべながらその身には劍呑な雰囲気を纏う。

パンタグリユエル吹き抜けの回廊で2人は対峙していた。

？両者共に全力で戦えば数分もせずはこの白銀の巨艦は沈む。その事はすでに理解していて、それでも手を抜けば艦の前に自らが沈む事はそれより深く理解していた。

「話が早くて全然助からねえ。もうちよつとくらい時間を稼がせてくれよ」

？「お断りだな。おおよそ、あのラインとかいうガキのための時間稼ぎだろうか……俺に勝つつもりか？」

マクバーンの問いにナギトは数瞬目を瞑り、開眼して視線をぶつける。？その問いに対する答えは分かりきっていた。

「いや？ 今の俺じゃお前相手には時間稼ぎくらいしかできん。逆に言うなら時間稼ぎ程度ならできるってわけだが」

太刀を抜く。くるりくるりと弄んで、構えた。

「ま、カツコよく言えば、勝てる勝てないの話じゃない。俺は今ここでお前に立ち向かわなきやいけないんだよ、未来のためにな」

「ハッ、大層な物言いだな。いいだろう。さあ、始めようや！」

？マクバーンが掌をかざすとそこから炎で象られた犬がナギトを襲う。戦技「ヘルハウンド」だ。地を蹴る地獄の猛犬の数は3。

ナギトは踏み込みながら太刀を横に薙いでヘルハウンド三匹を消滅させると、さらに踏み込みマクバーンに斬りかかった。マクバーンはスライドするようなナギトの動きを紙一重で避ける。赤いコートの手端が斬られてしまう。

？「風よ」

？すれ違うように通り過ぎたナギトがそう唱えると、艦内で風が発生した。？それは切

り裂く風の刃ではなく、風の圧で押し出すものだ。即ち突風。

「チツ」

？マクバーンは舌打ちをしながら風に押されるようにして距離をとった。

着地したマクバーンの目に映ったのは、雷を纏う、分身したナギトの姿。？半身だけ振り返り、横目でマクバーンを睨むナギト。それを本体だとマクバーンは判断し、すべを侵食する。『ギルティフレイム』を投げつける。

迫る焔を紙一重で避けながら、ナギトはバリアハートでマクバーンと交わした会話を思い出していた。

マクバーンの強さは、その異能にある。念じれば焔が出せる——そんな理不尽な理屈でマクバーンは《却炎》の異名を取っている。

問題なのはその総量。無尽蔵とも思える焔に、それを一度に放出できる器の強度。

要はリアンロードとも話したタンクと蛇口が馬鹿みたいにデカいわけだ。

これには闘気の総量に自信のあるナギトも、それを粉々に粉碎された。

しかし、とナギトは思考を切り替える。

? 「迅雷——!」

? 雷鳴。疾るは雷を纏う分身。? 雷の残滓が艦の床にこびり付いている。

? 分身すべての「迅雷」がマクバーンを襲う。? 雷撃の速度で襲ってくるそれらにマクバーンは対応できない。? 一体二体ならまだしも、それより多い数が一斉に襲ってくるのだ。全開の状態なら、剣の一振りでも分身すべてを焼失させる事も可能だが、マクバーンは未だそこまでアツくなつてはいなかった。

しかし、とナギトは思考を切り替える。

力で勝てなければ、技とスピードで圧倒すればいいだけだ。

? 続く分身たちの雷速の斬撃にマクバーンはただ防御するのみ。しかし、マクバーンの体表を覆う炎で見た目ほどのダメージを負つてはいない。? ナギトもそれをわかつているため、その炎の殻を貫くクラフトを使いたいのだが、それをやると艦を沈めてしまう可能性があるために、使うのを渋っていた。

? 「剣鬼七式、外の太刀」

？だがそれは一瞬だ。？ただの一撃でこの艦が落ちるわけがない、と考えたナギトは、
雷神烈破”に込めるだけの雷撃の力を自らの太刀に閉じ込めた。

？凝縮された雷が赤熱を放ち、刀身からは千の鳥が鳴くような音が鳴る。赤雷が火花を
散らしたかと思うと、ナギトの姿が消える。

すべての分身が本体の動きに合わせてるように斬撃を重ねた。

「雷の型——」

これもまた、アリアンロードから助言を受けた闘気運用の応用。

「弾ける、神鳴刃——！」

？その瞬間、極大の雷鳴と共に凝縮された雷撃がマクバーンの全身を包み込んだ。

？「チツ、やるじゃねえか……。あの阿呆並みにアツくさせてくれる奴だとはな……」

ナギトの去ったその場で、マクバーンは傷を修復させた。並の人間なら——否、準達人級の猛者でも戦闘不能に追い込む「神鳴刃」を受けてなお、マクバーンは健在であった。

それでもしばらくは動けなかったためにナギトを逃してしまったのだが、この程度の傷なら混じっている力を発揮すればたちまちの内に修復する。

マクバーンは今しがた膨れ上がった力を感知した。自分と同じ力——規模こそ違いますが、自分と同じ力を持つ青年の気配を。

「このスピードなら……甲板で追いつくな」

？マクバーンがラインに追いつけばナギトの時間稼ぎは無駄になる。

だが——

「ハッ、なるほどな……」

? マクバーンが追いつくと予想した地点にはクロウがいた。? 「なるほどな」とマクバーンは嗤う。? 確かにリインとクロウの戦いを遮るのは野暮と言うものだ。おそらく《剣鬼》はバリアハートで交わした言葉でマクバーンの人間性を見抜いていたのだ。だからこそ、この絶妙な足止めを実行した。

ナギトの未だ見えぬ最奥にマクバーンは口角を釣り上げる。せいぜい俺をアツくさせてくれよ、と。

☆★

? 数々の機体が安置されるその場所は、パンタグリユエルの最下層にある。

? パチ、とスイッチを入れると、その部屋の最奥を照らす電灯に光が灯った。

? ナギトはそれを固定するワイヤーを断ち切り、それを隠していたブルーシートを剥ぎ取った。

現れた躯体は、銀色に輝く。

それは《閃嵐の騎士》と呼ばれていた機甲兵。

？「さてさて…悪いがまだ付き合ってもらおうよ、プロト…いや、ジークフリート」

ナギト・シユバルツァーが駆る《閃嵐の騎士》プロト。それはクロウの相棒である《蒼の騎神》オルディーネを模倣して造られた、機甲兵試作機第1号だ。？しかし、そのスペックの高さとその操縦技術習得の難しさから、クロウと同じ《起動者》のナギトにお鉢が回ってきたのだ。

？プロトを駆り、ナギトはこれまでに帝国正規軍を蹴散らしてきた。しかし、これからはVII組のメンバーたちと共に、貴族連合と矛を交える事となるだろう。

その際に正規軍と協力する事もあるはずだ。？故に、プロトが《閃嵐の騎士》であった痕跡をできるだけ消しておく。外部の装甲の形を変え、無色だった機体を銀色に塗装する。

気分を変えるのに名前もプロトからジークフリートへと変更。これからは貴族連合と戦う機甲兵として注目を集めさせてもらう。

？「行くのか？」

声に振り返る。機甲兵の影から出てきたのはリヴァルだった。

「……ああ。止めるか？」

「いや……、俺じゃお前に勝てないのは証明されてる。下手に足止めして負傷するより、これからも貴族連合のために戦うほうが有益だ」

そんな表向き理由にナギトは笑ってしまう。それと同時にリヴァルが真の意味で絆されていない事も理解した。

ナギトとの友情を偽んで、一緒に来てくれる事を期待したが、現実には甘くない。

「……しかし、かなり形を変えたな」

リヴァルは機甲兵ジークフリートを見上げていく。その姿はオルディーネのそっくりさんだった頃とは変わってしまったている。

頭部の角もどきなんかは真ん中から割れて左右でアンテナのようにそそり立ってい

た。

「ガンダムみたいだろ？」

言つて笑うが「何言つてるのかわからん」と返されるだけ。そりや通じない。

「んじゃあね、マイフレンド。また会う日まで」

「ああ、さよならだ、ナギト・シユバルツア―」

ひと月ばかりの友情に別れを告げる。こつんとぶつけた拳は、別れの挨拶だ。

それは友人が交わすような「また明日」となら変わらぬ声音で交わされた決別の言葉。

今日の敵は明日の友。今日の友は明日の敵。？《帝国解放戦線》のリヴァルとツールズ士官学院特科クラスⅦ組のナギトではあり得なかつた友情。貴族連合のリヴァルと第三の風のナギトではあり得なかつた友情。

ここでリヴァルとナギトが友情を育めたのは、ひとえに奇跡であるしか言いようがな

い。？例え明日、戦場で見えるとしても、この奇跡に感謝を。そして、これからの軌跡に闘争を。

交わした言葉はそういう誓いであつた。

ナギトはコックピットに乗り込むと、ゆっくり起動キーを回す。

そしてパンタグリユエル艦内の気配を探った。

？ブルブランとデュバリイを突破済み。西風の2人とアルティナも同様。ヴァルカんとスカーレットはすでに追いかけるのを諦めてる。

問題のマクバーンはもう甲板に先回りしているが、クロウがいる以上は2人の決闘に手を出しはしないだろう。

？ナギトが感知していたのはパンタグリユエル内部の状況そのものだ。？それによれば、すでにリインは貴族連合に与する猛者どもを抜き去り——ついでに姫殿下と連れ立って——甲板に到着していた。

「くく……それにしてもリインめ。ようやく鬼の力をモノにしたか。まったく現金なお兄様だぜ」



ナギトがほくそ笑み、船倉から発進する頃、パンタグリユエルの甲板では、リインとクロウが対峙していた。

? 「おおおおお!!」

「らああああ!!」

? 頬を撫ぜるのは風。? 身体を照らすのは陽の光。

この場にナギトがいたらシリアスブレイクに「今日は絶好の日向ぼっこ日和ですね!」?と言わんばかりの天気。地上より遥かに高い空。雲と並び、地上を睥睨する白銀の艦。?その甲板でぶつけられるのは、圧倒的なほどの剣気だ。

? 2つの刃は重なり、互いに弾けるように距離をとった。

「さあ、決着をつけるでしょうぜ！」

？そう言つて双刃剣を構えたのはクロウだ。

？「ああ、望むところだ！」

それに応えるのはリイン。？その手に握る太刀にはこれまでにない力が込められていた。

“鬼の力”——ブルブランにそう揶揄された力は、幼き日よりリインを苛んできた悪夢だ。

幼い子供がナタで魔獣を惨殺できる、それほどの力をリインは己の意志で制御出来ずにいた。それは言わば、触れるもの皆を傷つける抜き身の刃。

目覚めさせたが最後、親しい人を傷つけてしまう恐怖にリインは囚われていた。

？だが今はそれを、鬼の力を自ら発動し、それを自在に扱っている。？アルフィンと言葉のおかげで……否。これまでに出会ったすべての人物のおかげでようやく鬼の力を制御下に置く事ができた。

ならば、こんなにも頼もしいものはない。

？再び、2つの刃が重なる。

押されたのはクロウだった。？体勢を崩し、後ずさりしたクロウをリインは追撃する。？振り上げられた太刀になんとかクロウは双刃剣を合わせて防御する。

「なかなかやるじゃねえか。これはどうだ!？」

クロウは双刃剣を投げた。？腕全体を使ってしなる鞭のように剣をリインに向かって投げるそれはブレードスローなるクラフトだ。クロウの十八番の戦技の一つであり

？「こんなもの！」

リインは回転しながら迫る双刃剣を叩き落とすように太刀を振ると、そこでようやくクロウの意図が把握できた。

?——瞬間的な囿としての効果があるという事。

? 「スパークアロー」

クロウはAROUSを駆動させると、瞬時にアーツを発動した。? 短い駆動時間で発動できるアーツ “スパークアロー” —— 雷の矢がラインへ飛来する。

ラインはスパークアローを薙ぎ払って消し去る。? その一瞬にクロウは弾き飛ばされた双刃剣を拾い上げ、そのまま跳躍した。大上段からの振り下ろし。? リインは太刀で防御しながらも、後ずさりをする。力で押された形だ。そしてリインが太刀を構え直す一瞬の内にクロウはタメを終えていた。

「喰らいやがれ!」

双刃剣を淡いオーラが包む。? リインは再び太刀を立てて防御するも、今度は大きく吹き飛ばされてしまった。

? 「く……っ！」

「これで終わらせるぜ……！」

? 視界に映るクロウのコート。その色は黒。その黒より深い漆黒のオーラが双刃剣に纏わりついていた。

? あれは《C》のSクラフト。これまで幾度となくVII組の前に立ち塞がり、その度に強大な力を奮ったクロウの奥義。

? 「受けてみる……終焉の十字！」

? 黒い閃光が奔る。

その光景に敗北の二文字が頭を過ぎる。鉄鉾山では勝利した。しかしそれは仲間の存在あつてこそ。

自分一人ではまだ勝てないのか。——そんな情けない思考を斬り払うのは、未だ見つ

からぬ最後の仲間、今は遠き兄弟分の言葉だ。

——「だから、俺のその期待を裏切るなよ？」

なんだってこんな時に、そんな事を思い出すのか。

——わかつている。わかつていた。いつか盗み聞きした、父テオとナギトの会話。〃
リインを見守る〃 そんな名目でナギトはツールズ入学を決意し、そしてそれは実行されていた。

いつも自分を見守るナギトは、いつだって暖かな兄の姿そのもので。いつまでも半人前扱いされてる悔しさを見て見ぬふりをしていた。

そのナギトが「お前は強くなつた」と言ってくれた。一人前だと認めてくれた。「期待を裏切るな」と言った。

だったらその期待に応えるのは弟分の役目だろう！

「——クロウ！」

? その叫びに力を込める。? その太刀は焔を帯びる。? その焔は蒼色に染まる。

「――届かせてもらおう!!」

ぶつかって、弾ける黒と蒼。? そのパワーバランスは釣り合っていた。

力だけなら鬼の力をものにしたリインが勝っているはずだった。? しかし、準備ができていたクロウと、咄嗟に戦技を用いたリインとではいち戦技としての完成度が違った。

だが、互角。? リインの鬼の力とは、万全ならばA級遊撃士に勝るとも劣らないパワーを発揮する。

しかしクロウとて、これまでの人生のすべてをギリアス・オズボーンへの復讐へ捧げた猛者。

? 故に、互角。

視界がホワイトアウトする。

それでも、ただ走った。

? 見えているのか、いないのか。? 聞こえているのか、いないのか。? 感じているのか、いないのか。

確かなのは、すでに目的を達成している者と、未だ目的を達成していない者の覚悟の差が出たという事だけだった。

? ホワイトアウトした視界を現実が上書きすると同時にクロウの視界に映ったのはラインの姿だ。? 五感もまともに働かない中でここまで来たと言うのか。

思ったのはそれだけで、ほぼ無意識の内に防御に回した双刃剣が、ラインの太刀に弾かれ飛んだ。



「勝ったか、ライン」

? 呟いたナギト。その姿はパンタグリュエルより上……宙空にあつた。

? 銀色に輝く装甲に身を纏いしは名を変えた《閃嵐の騎士》。その背面にある滑空ユニットはフル稼働で、その場にジークフリートの姿を留めさせていた。

宙空に浮遊する銀の機甲兵ジークフリートは目立つものではあるが、ラインとクロウは戦いに集中していて気づかない様子だった。

ただ、その戦いのもう一人の観覧者であるマクバーンには睨みつけられたのだが。

? リインとクロウの戦闘は終わった。? あとはリインにはヴァリマールに乗つてもらつて空に離脱してもらおう。? その間、マクバーンの相手はナギトがして、リインが逃げた後にナギトも逃げおこせるつもりだったが。

ラインが急に床面に膝をついた。

そして、その髪は白から黒へ。禍々しい力を象徴していたオーラは消失した。一目見てナギトはそれが何を表しているのか理解した。

？「鬼の力のタイムリミットか！ マジかよ、なんつータイミング……」

しかし、事態はそれだけには留まらない。？艦内でラインに抜かれた連中が甲板に出て来たのだ。これはまずい。考えられる最悪のシナリオだ。

しかし、そういう理解より何故か安心感が勝っていた。それはきつとナギトにたびたび訪れる妙な「確信」のせいだった。

目を細めた視界の端を紅いなにかが横切った。ナギトはそれに焦点を合わせる。？見る見る内に近づいてくるその姿は、まさに高速巡洋艦の名に相応しい。それは現在の帝国における、反貴族派の最大にして最高の希望。
？帝国最強の剣士が艦長を務めるその艦の名は。

？「カレイジャス——！」

? パンタグリユエルの上を横切ったカレイジャスから数人の猛者が降りて来た。

トヴァル・ランドナー?

クレア・リーヴェルト?

シャロン・クルーガー?

サラ・バレストアイン

ヴィクター・S・アルゼイド

その顔触れは、この艦にいる強者たちにも決して見劣りしないものだ。

「おお、豪華な面子……」

ヴィクターが艦に降り立った直後、その近くに幾何学的な紋様が描かれた。? 淡く発光するそれは、まさしく魔法陣と形容すべきもの。魔法陣が一際大きく光を放つと、そこからは今は若き有角の獅子たちが現れた。VII組のクラスメイトたちだ。トールズの制服こそ着てないものの、あいつらを見間違ふことはありえなかった。そして、その先頭にいるのは学院の理事長たるオリヴァルトだ。

? 込み上げて来た懐かしさを、ナギトは自嘲する。? 別れてたのはたった一月半なのに、懐かしいと感じるなんて。自分はそんなに奴らが恋しかったのかと。

?この場の猛者たちと比較すれば矮小な存在であるはずのⅦ組メンバーだが、全員の身体から立ち上る意思の力は、あのトールズ防衛戦の時と比しても見違える程のものとなっている。内戦の波に揉まれ、強くなったようだ。

今度こそ場は膠着した。? 貴族連合の戦力とカレイジャスから降りてきた戦力はつり合っている。故に今が登場の好機だ。

ナギトは操縦桿に力を込めた。滑空ユニットが唸りを上げる。そうして銀色の機体はパンタグリユエルの甲板に降り立つ。

「ハッハー! 出遅れた感あるけどナギト・シユバルツァー見参!! 悪いがここで貴族連合からは抜けさせてもらうぜ!」

その登場に、ある者は困惑しある者は呆れる。?ある者は口笛を吹き、ある者は溜息を漏らす。?総じて「もうちよつとなんか、場に相応しいセリフなかったの?」という雰囲気になった頃、誰かが呟く。

「グダグダですね」

？おい聞こえてるぞ、そこの黒兔。

？その後、使い魔越しに現れたヴィータ・クロチルダの言により、緊張は解かれた。

対面する二勢力の間にはすでに殺気は渦巻いていない。？ここでドンパチやってパンタグリユエル墜落。からの全員道連れ——なんていうルートは回避できた。

ラインとクロウはそれぞれの騎神に乗り込み、いくつか言葉を交わす。クロウはラインから視線をジークフリート、それに乗るナギトに向けると小さく笑った。

「見違えたじゃねえか、戦場の嵐。リヴァルとは話したか？」

？「ああ、別れは済んでる。次に会う時は敵同士だと」

？ナギトは瞬時に回想する。リヴァルとの別れ。友情の終わり。

？「ハッ、相変わらずリヴァルの奴：律儀なもんだ」

どこか悲しさを孕んだクロウの声。？当然のようにクロウは《帝国解放戦線》のメンバーであるリヴァルの過去を知っているのだろう。今の言葉はそれを意識したもの

だったのだろうか。

その真意を問いたです暇もなく、カレイジャスのメンバーの離艦は始まっていく。

? ジークフリートの足元にエマの転移のための魔法陣が広がり、目を覆う光量が溢れたかと思うと、次の瞬間にはカレイジャスの甲板にいた。

機甲兵ほどの質量のものをここまで正確に転移させるとは。? ヴイータの言っていた通り、エマも成長しているようだった。

その後、リインと共に機甲兵をカレイジャスの最下層にある格納庫に納めに行き、そこを出る所でナギトのポケットから何かが舞い落ちた。

? 「ん?」

それは見覚えのないものだった。蒼い羽に見える。? なんとはなしにそれを拾い上げようと触れた所で――

――「ナギトくん、あなたはこの世界で唯一無二の存在よ。誰にも許されないはずの特権を、あなたは持っている。それは運命への反逆。……この世界で唯一、運命に縛られる事はない存在。故にあなたは特異点と呼ばれるのよ。ただ、それだけに他人より苦

勞するのも知れないのだけど。あなたの描く軌跡……愉しみにさせてもらうわ——
？それは聴くものを蕩けさせる絶世の美声——？ナギトの伸ばした手の先にすでに
蒼い羽はなかった。？今のが何なのかわかったナギトは大きく溜息をつく。リインが
「どうしたんだ？」と聞いてきたが「なんでもない」と返す。

？エレベーターに乗った所で鼻息を大きく出して悪戯の主人に呪いをかけるように、そ
の二つ名を唱えた。

？「《深淵》め」

ナギトが貴族連合にいる間はあまり接点はなかったが、ここに来てあの魔女はナギト
の心に楔を打ち込んだのだった。

再会 / 再開

カレイジヤスの運用による、パンタグリユエルからのリイン奪還作戦は成功した。

? 結果として救出対象であるリインに目立った外傷は無く、カレイジヤスから降下してきたメンバーも同様。その代わりに、相手方にもなんらダメージはない。

しかし、ナギトにとってはこれが望むべくもない結果であった。なんと言っても高速巡洋艦カレイジヤス。その存在が大きい。カレイジヤスは貴族派でも革新派でもない、皇族の艦。故に自分たちがどちらの勢力にも属さず、義を持つて悪を正す存在として喧伝しながら活動するのにもってこいの物と言えよう。

? 惜しむべくは、トヴァル、クレア、シャロン、ヴィクター、そして皇族であるオリヴァルトが、戦況の激化した帝国西部に向かうために離艦した事だ。

これで戦力は激減したわけだが、オリヴァルトと同じ皇族であるアルフィンは艦に残ったので、なんとかそのご威光に与る事はできるわけだ。

? カレイジヤスのブリーフィングルームにて、今後自分たちがどう動いていくかを決定する。? 最終目標は言わずもがな、ツールズ士官学院の奪還。小目標として、各地に散

らばっているツールズ士官学院生の回収。

?これらの事を決めた後に、気を効かせたのか艦長代理を任されたトワと、技師である
ジオルジユが退室した。

張り詰めた空気が弛緩し、皆の注目はナギトへと寄せられた。言いたい事はたくさんある。聞かなきやいけない事も多い。とにかく話がしたかった。

?ナギトは視線が集まった事に「まあ予想通りだ」と言わんばかりに微笑んで、第一声を発した。

?「皆さま方、久しぶりですな。覚えてるかなっ!ナギト・シユバルツァーだよ☆」

?沈黙。それはとても重い沈黙だった。静寂が場を支配下に置く。そう、それはダダ滑りという人という人が忌避する最大のタブーである。

?しかし、その沈黙がウケたのか誰かが吹き出した。皆もそれにつられて笑う。

全員が思う事は同じだった。ナギト・シユバルツァーは変わりなく、ナギト・シユバルツァーなのだ。あのふざけたお調子者が帰って来たのだと実感した。

?全員がナギトと対面するように立ち並ぶ。?どうやら再会を祝して一人に一言ずつメッセージをどうぞ。という系統の罰ゲームらしい。?何の罰かと言うと、ついさつき

のダダ滑りの罰ゲームである。嘘だ。

? 今までどうして連絡を寄越さなかったのか、だとか貴族連合と一緒にいたのはどうしてだ、とかそれらを聞く前にまず罰を与えなければ、口八丁で逃げられるかもしれない、どこかの強かな金髪の女子が思ったからである。? さりげなく会話を誘導する技術は、さすがRFグループの次期会長候補なだけはあると言わざるを得ない。

まず一番最初にナギトが声をかけたのは、こうなるように事を運んだ、きんぱつのあくま——アリサ・ラインフォルトだ。

? 「お久しぶりです! アリサさん!」

? 大仰に礼をしてみせるナギト。普段の力関係はこういう所に出るのだと思う。しかし、ただ罰を受けるだけのナギトではない。せめてこのきんぱつのあくまには一矢報いらねばならない。

? 「ところでその服装、寒くないの?」

? それは誰も聞かないでいた質問だった。? 布そのものは厚手だが、やけに露出してる部分の多いアリサの服装。今は12月だ。それで寒くないわけがない。

「これはファッションよ！」

いつもの調子でツツコミを入れるアリサ。？そのアリサに、当人だけにしか聞こえない音量で耳打ちする。

「リインに見せるためかな？」

？「なっ……!?!」

？耳まで真っ赤に染めるアリサ。？それを見てナギトは「ふはははは！」と高笑いする。一矢報いる事はできたと判断したようで、次のメンバーへ。

？ガイウス・ウオーゼル。？褐色で長身の彼はリインと並びⅦ組の精神的支柱であった。その落ち着いた物腰は完成された人間性を思わせ、つい頼りたくなるものがある。

「ガイウス、久しぶりだな……どうやらまた腕を上げたらしい」

？「それでもまだまだナギトには及ばんさ。無事でいてくれて良かった」

？やはり落ち着いた声音のガイウスだが、故郷が危険に晒された時は誰より勇猛に、果敢に戦った事を知っている。

「ありがとう。事が落ち着いたら手合わせでもしてみるか？」

？「それもいいな」

笑うガイウスはどこまでも優しげだ。？それは兄貴のようなイメージを湧き上がらせる。？そう思いながら、次の人物に視線を向ける。

？「久しぶり。一ヶ月半の内に、中々どうしていい顔つきになったねえ、エマ？」

視線の先にはⅦ組の委員長エマ・ミルステイン。？その姿は憑き物が落ちたように見えるほどに見違えた。

「はい、お久しぶりです。ナギトさん。私もようやく、秘密を打ち明けてⅦ組の一員だつて自覚できましたから。これまで、秘密を守ってくれてありがとうございます」

「気にすんなって。友達なんだから。これからもよろしく頼むよ」

エマの感謝がこそばゆく感じて、なんとなくで受け流す。？ナギトはこれまでの特別実習でエマの正体を知っていた。？それを秘密にしていた事を感謝されても、これまで色々と助けられた事を考えるとおあいこなのでそう言ったのだ。

？「フィーも、久しぶり」

「ん、久しぶり。ナギト」

次の相手はフィー・クラウゼルだ。？銀髪の小柄な女子だが、ただの可愛らしいだけの存在ではない。その昔は《西風の旅団》という一流の猟兵団で《西風の妖精》と異名で呼ばれた程の戦闘のエキスパートだ。

「もう、あの二人とは会ったらしいな」

？ナギトが言う二人とは、パンタグリユエルで共に過ごした西風の二人の連隊長。レオニダスとゼノの事だ。

？「うん。会ったって言うより戦った、の方が正しいけど」

「まあ、あの二人も仕事だし。不安がらなくても、お前は愛されてるから心配しなくていいよ、フィー。あの二人、口を開けばフィーの事ばかりだよ、親バカもいい加減にしろ、と言いかけたわ！いやマジで」

？ナギトの一人芝居に笑みをこぼすフィー。？猫のように可愛らしい彼女は確かに庇

護欲をそそられる。親バカになるのもわかる気がした。

「なんとなく、想像できる」

？お次はマキアス・レーグニッツだ。

「久しぶりマキアス。…お前は帝都知事の息子だからな…他のメンバーよりマークされてたと思うんだが、まあ無事で良かった」

「ああ、君こそな。ナギト。僕は変装してたから大丈夫だった。とは言っても眼鏡を外すだけなんだがな」

？スツと眼鏡を外すマキアス。？なるほど印象は変わるが、それほどでもない。

？「子供騙しか！良くバレなかったな」

「僕の場合は、潜伏してたケルディックの人たちに良くしてもらったからな。あの人たちには感謝してもし足りないくらいだ」

? 「そうか、これも縁だな。とにかく無事でいてくれて何よりだ」

安心の表情を浮かべたナギトは次の人物に視線を走らせる。? マキアスの次はユーシスだった。? 予想通りと言えばそうだが、番狂わせと言つてもその通り。普段、いがみ合つて二人が仲良く並んでるのはなかなか面白い。

? 「ようユーシス」

? 「久しいな、ナギト」

ユーシス・アルバレア。貴族連合の総主宰たるカイエン公には劣るがそれに次ぐ権力を持つヘルムート・アルバレア公爵の実子であるユーシス。? 少し前に貴族連合から離反したと話を聞いていたが…

「お前は一時期、貴族連合に与してたようだが、今は元鞘なわけか。まあ、それにも深謀遠慮があつたわけだろうけどさ」

? ニヤニヤと笑うナギトにユーシスは苦笑いする。

? 「貴様を見ると、ただ責任感だけで貴族連合に収まっていた自分が阿呆のように思えるな」

? やれやれと肩を竦めるユーシス。その反応もナギトは予想済みだ。? 故に想定通りにナギトは事を進める。アリサの時と同じように、ユーシスにそつと耳打ちする。

「後で二人で話したい」

? ナギトが顔を引くと、ユーシスはそつと頷く。? どういう話題が提供されるのか、予想はできているようだった。

続いてはミリアム・オライオンだ。? 情報局からの回し者だけど素直すぎるまだ子供。? されど《鉄血の子供達》に名を連ねるだけはある洞察力を持つ少女。

だが、警戒するにはちよつと邪気がなさすぎる。? それ故に警戒に値するのだと、思しながら「やつほー」と声をかける。

「やつほー! やつぱり、思ってた通り無事だったんだね、ナギト。まあ、ナギトなら大丈夫だつて信じてたけど!」

? にこつと笑うミリアムは年頃の少女にしか見えない。このセリフもまた、何の含みもないものだと思いたいものだ。

「そーかそーか。よし、ならいい子にはアメちゃんをやるう」

ナギトはミリアムの頭をなでながら、ポケットをこそそと探る。出てきたのはパンタグリユエルからくすねておいたアメ玉だ。

ナギトはそれをミリアムの手に乗せると、頭をポンポンと叩いて、次の人物へ――

「つて、え!?!それだけなの!?!」

声を上げたのはミリアム。?まさかこれだけの会話だとは予想外だったようで、驚いて目が点になっている。?振り返るナギトは笑いながら「冗談だよ」と告げた。

「俺もミリアムは無事だつて信じてたよ。そういや、あのオッサンは無事なのか?」

?その問いを発するナギトは、笑みを浮かべてながらも、目は笑っていない。?問いの意味をわかるのが、いったいこの中にどれだけいるのだろうか?もし意味がわかってる者がいるとすれば、その者にとってナギトは嫌な人物に見えるはずだ。

なんとと言ってもこれは、ミリアムに嫌疑をかけてると同様なのだから。

「んー、それってオジサンの事？」

「……ああ。いや、すまん。こんな所で聞く事じゃねえとはわかってるんだけど」

？その狙いは当のミリアムによつて明るみに晒される。場の空気が一気に固いものになる。？それならそれで、全員がいるこの場ではつきりとした事を言ってもらうのも良し、とナギトは腹をくくる。

ラインとアリサが何か言いかけるが、ナギトの表情を見て口を噤む。柔らかでありながら剣呑。そう表現すべき雰囲気纏っている男の姿を見て、ラインの口は自然と異名を呟いていた。

「《剣鬼》……」

？「んー、僕は……というか、ここにいる全員があの日、クロウに撃たれて倒れたオジサンを見てるよね？」

その答えに、ナギトは目を瞑る。？そうか、そう答えるのか。ミリアム。

困ったような、寂しいような。そんな笑顔が面に映る。しかし、それは一瞬だ。

？「まあそうだわな。いや、変な質問してすまん」

「別にいいよー」

ナギトはこれだけの会話で確信した。？ミアムは何かわかつてる。ただ、それを話す気はないらしい。もしくは言葉にできないものなのか。？それを追及した所で、得られるものは仲間間の不和だけだと思つたナギトは、今度こそ次の人物に向かった。

「いよう、久しぶりだな。エリオット。？なんだ、ちよいと遅しくなつたんじゃない？」
？次の人物は、エリオット・クレイグ。？Ⅶ組でもエマに次ぐアーツ使い。事、治療アーツに限りエマをも凌駕する腕前を持つ。

？「アハハ、そう言ってもらえると嬉しいよ。久しぶりだね、ナギト。相変わらずで安心したよ」

柔和な表情を浮かべるエリオットはまさに癒やしだ。伊達に女子から筋肉モリモリのエリオットは見たくない、なんて言われるだけはある穏やかさの象徴だった。

? 「……それは褒められてると受け取るぞ? よく無事でいてくれた。再会できて嬉しい」

? 「僕もだよ。まあ、みんなと同じようにナギトなら大丈夫って謎の確信はあったけどね」

? エリオットの切り返しに「ははっ」と笑う。? VII組の奴らは何故かナギト死亡説を立てる事がなかったらしい。

「なーんか、変な信頼だなあ。もっと心配してくれても良かった……とは言えないけど。まあ、また今度語り明かそうぜ。三人でな」

ああでもない、こうでもないと士官学院祭の時に話し合っただけの記憶に刻まれている良い思い出だ。気づけば徹夜してた、なんて事もあった。それだけ熱中していたのだ。? だから言うのだ。「また今度語り明かそう。俺とお前とクロウの三人で」と。

? 「うん!」

? エリオットの笑顔が弾ける。? どうやらナギトの思いは伝わったようだ。? また今

度、また語り明かそう。三人で。？だから、この内戦をさっさと終結させてしまおう。無言の約束は交わされたのだった。

？向かい合う二人はニツと同時に笑い合う。？どちらともなく拳を、二人の間でぶつけ合った。

「よう兄弟。パンタグリユエルでのクロウとの一騎打ちは見事だった」

「見てたのか。俺なんてまだまだただけだな。でも、確実に一步は進んだよ」

？それは、謙虚なリインにしては珍しいセリフのように思えた。？しかし、それだけの自信がついたのだろう。鬼の力を制御できるようになった事が。クロウに届いた事が。

？「そりや良かった。アルフィン殿下に慰められたのが効いたのかな？」

？ナギトは悪戯な笑みのまま言い放つ。？すると、きんぱつのあくまからリインに熱視線が注がれた。？「これであいつ、隠してるつもりなんだぜ？」と肩を竦めても良かったのだが、それをしたらきんぱつのあくまにやられる事は目に見えてるのでやめておこう。

？「そんなんじゃないって。……ナギト、また会えて良かった。これで後はクロウだけだな」

？「ああ、それでⅦ組全員集合だ。ハッピーエンドに向けて動き出すとするか！」

「ああー」

？Ⅶ組の総意であるツールズ士官学院の奪還。？それには当然、学院生も含まれる。？それならば、またしても当然のように学院生であるクロウも含まれるわけだ。クロウを取り戻す。それがクロウの意思でなくとも。必ず、自分たちの先輩として卒業してもらうのだと、そう決意した。

さて、お次は最後にして本命。？この並びにしたきんぱつのあくまには悪意があったとしか思えない。

横目でアリサを見ると、ほくそ笑んでいるのがわかった。ナギトが慌てふためく様を想像するのがそんなに楽しいらしい。？ナギトは頬をびくびくさせつつ、その人物に視

線を送った。

？ 途端に、その表情が無になる。？ 何を言おうとしたのか忘れ、何をしようとしたのか忘れ、最後に言葉すら忘れた。

《剣鬼》であった頃の記憶を取り戻し、この少女への想いも薄れたかと思つたがとんでもない。むしろ、会えなかつた分だけ想いは募つていた。

「久しいな、ナギト。そなたにまた会えた事、嬉しく思うぞ」

？ 先に言葉を発したのはナギトではなかつた。？ 言葉を忘れたナギトに代わつて、先に言葉をかけてくれたのだと理解する。

それではようやく言葉を思い出して、しどろもどろになりながらも再会を言祝ぐ。

？ 「あー……、俺もだよラウラ。生きててくれて良かった。らしくないがエイドスに感謝だな」

ラウラ・S・アルゼイド。帝国最強の剣士の一角であるヴィクターの娘にしてツールズ新入生最強の名を恣にする少女。ナギトの懸想する女。

貴族連合に所属していた時から、その生存は確信していたが、得られる情報はあまりに少なかつたため気が気ではなかつた。

周囲からは「もつとやれ、つーか告白しろ」という視線を感じるが無視。？というか何故に自分の好意がバレているのか？士官学院祭の後夜祭で踊ってたんだから当然の露見と言えばそうなのだが。

「ふむ、そなたがそう言うとはな。ならば私も空の女神に感謝を。ナギト、そなたとはまた共に剣で語り合いたいと思っていた」

あれ!?なんかラブリーな雰囲気じゃなくね?と首を傾げるのを必死に耐えるナギト。
?その様子を、腹でも痛いのか「ひーっ、ひーっ」と過呼吸気味になりながらも見つめるきんぱつのあくま。

?おいそこ。笑い過ぎて腹が痛いとか隣で心配してるガイウスに悪いとか思わねえのか。

「まあそれは機会があれば…と言う事で頼む」

「そうだな。では今度はそなたとの手合わせでも女神に祈るとしよう」

「はは……」とラウラの手合わせ好きに渴いた笑いを零しながら、ナギトは天井を仰ぐ。
さて、これで再会の挨拶は終了だ——と、思ったが、

「あら、私にはないの?」

? サラから声がかけられる。? 挨拶の列に並んでこそいないなものの、サラもⅦ組の仲間
と言える。ならば再会の挨拶をするのもまた当然だった。

? 「ありますとも、サラ教官。相変わらずいいカラダしてますね、今夜あたり一発どう
です?」

「ちよつ! 何を変な事口走つてんのよ、アンタ!」

? グッドサインのまま笑顔で放たれたお誘いに、サラは年甲斐もなく紅潮する。これは
さすがに不意打ち過ぎる。? 当然のように女子勢からは白い目で見られるナギトは、
焦ったように次のセリフを続ける。

? 「ジョークですよ、ジョーク! 教官も真に受けなくてください」

下品なジョークを言ったナギトへの軽蔑の視線はしばらく止む事はなかったと言う
……

やがてトワとジョルジュが部屋に戻り、いよいよお話タイムとなる。？とは言っても、本筋の会議からは外れた、貴族連合に潜入していたナギトからの情報提供のための会議だ。

？席に着いたⅦ組のメンバーと+α。

？「さてと、んじやまあ。まずは俺が得た情報を開示していきますが、質問は随時受け付けるので、気になる事があつたら聞いてください」

とナギトは告げて、それは始まった。

？「現在、貴族連合は帝国の領土の約六割強を手中に収めてますが、その貴族連合の主戦力と言えば機甲兵。これの登場で正規軍はまともに戦術を組み立てる間もありません、ほとんどの戦場で敗北を重ねていきました」

クーデターの日。ヴィータの秘術で中継された帝都の蹂躞劇が思い出される。

人型有人機動兵器の登場は人々に大きな衝撃を与え、戦術に革命を齎した。

？「そして、その機甲兵の中でも特に英雄視されているのが《蒼の騎士》……クロウの操る《蒼の騎神》オルディーネだな。次いで《黄金の羅刹》ことオーレリア・ルグイン將軍や《黒旋風》ウオレス・バルディアス准将の特殊型機甲兵も半端なく強いって噂だけど、こっちは今のところ帝国西部にいるんで割愛する」

領邦軍の中でも英雄と呼ばれる二人の名前を出すと、ラウラが顎に手を当てた。

？「そうか。あの二人は今は西部にいるのか。実は、少し前に我が邸宅で対面したのだが、凄まじい気を放っていたのを覚えていてな」

「会ったのか……、そうだな……もし戦場で会う事があれば迷わず逃げろ。生身でもクロウ以上に強いし、機甲兵でとなると、クロウとオルディーネには及ばんだろうが、正直な話、今のリインとヴァリマールでも勝てる相手じゃないだろうからな」

ナギトは記憶を遡る。？パンタグリュエルで久しぶりに言葉を交わしたが、一応「貴族連合」という仲間だったから威圧感はあまり感じられなかったものの、「武人として

のそなたに興味がある」と言われた時の怖気は——オルデイスでしごかれた悪夢が甦ったからだけではないだろう。

「話を続けます。さつき言ったのは、あくまでも表舞台の話。パンタグリユエルでリインも会っただろうが、今回の内戦、《身喰らう蛇》の連中が絡んでる。俺が確認したのは5人。《神速》のデュバリイ、《怪盗紳士》ブルブラン、《劫炎》のマクバーン、《蒼の深淵》ヴィータ・クロチルダ。《鋼の聖女》アリアンロード。確か、もう全員会ってるんだっただか？」

？ナギトの言葉にはリインが答える。？リインはナギトが貴族連合にいる間、仲間と合流するためにヴァリマールと共に動いていた。？《身喰らう蛇》の面子と対峙したのはリイン一人だ。

「ああ。全員が全員とも、厄介な能力の持ち主だった。特にマクバーン……あいつだけは別格だ。正直な話、勝てる気がしない。それに《鋼の聖女》と言ったか？パンタグリユエルでは見かけなかったが」

「ああ、あの人は今はクロスベルをメインに活動してるらしいからな。あつちが一段落

したら帝国入りするんだと。俺もパンタグリユエルで会ったのは一回だけ」

なんならアドバイスを貰ったりしたが、そこは言う必要もないので言わないナギト。

「あとマクバーンだな、あいつはかなーりヤバイ。生物の強度としての次元が違う感じだな。一回バトったけど一瞬の隙を突いて逃げるので精一杯だったわ」

その言葉は少なからず全員を震撼させるに足るものだった。？全力になれば味方内で最強クラスに強い男が保証するほどのマクバーンの脅威度。特にそれを体感した顔触れは表情を強張らせた。

「それ以外にもやべー奴らが勢揃いしてる。結社の他の連中はもちろん、《西風の旅団》の連隊長のゼノとレオニダス。ミリアムと同じような傀儡を使うコードネーム《黒兎》のアルティナ・オライオン。《帝国解放戦線》の幹部、ヴァルカンとスカレット、リヴァル。そしてクロウ・アームブラスト。あとは……」

「——ルーファス・アルバレア」

と、ナギトの言葉を継いだのはユーシスだった。口にした名は兄と慕う男のもの。ナギトは頷いて、その肩書きと共に語る。

「そう、貴族連合総参謀ルーファス・アルバレア。今、貴族連合は実質あの人が動かしている。トップはカイエン公だけど、ルーファスさんが指揮官みたいな感じだな。言わば皇帝と宰相みたいなものだ」

彼の采配のおかげで貴族連合は優勢を得ている。

しかしナギトはそれでも疑念を抱いていた。

“この程度なのか？”——と。この内戦が始まった日。あの帝都での電撃作戦は成功した。皇帝はカイエン公の手に落ち、宰相は心臓を撃ち抜かれた。軍の高官も軟禁し、今や各地で孤立した正規軍の中將が己の師団を率いて貴族連合と戦っているような状況だ。

それを、妙だと思っている。確かに見事な手腕だが、ルーファスの能力はこの程度ではないと思っっているからだ。

帝都を占領したのと呼応して各地の領邦軍が一斉に動き出し、正規軍の行動を抑止出

来ていれば、この内戦はそもそも起きず、クーデター——政変で終わっていたはずなのだ。

それをもうだらだらと一ヶ月以上、自国内で国力を削り合っている。それがなければ今頃、クロスベルのゴタゴタの影響で金融恐慌に陥ったカルバード共和国の領土を切り取れていた可能性すらあったと言えるのに。

“確信”に霧がかかっている。

蓋がされている。ロックがかかっている。——そんな感覚がナギトにはあった。

「ひとまず、こんなもんかな…俺たちが戦う可能性のある連中については」

ナギトは瞑目し、一度雰囲気を入れ替える。

「それで、ここからは結構重要な話になるんだけど」

？「これまでは前座だと言うように、雰囲気を変えたナギト。その表情に自ずと全員の顔も強張る。

？「貴族連合に保護という名目で捕らえられてる皇族は全員がカレル離宮にいる。レー

グニツツ帝都知事や、きつとエリゼもそこだ」

？「なら、お助けしなきゃ！」

？机を叩いて立ち上がったのはトワだ。？皆の目も、高い志に燃えている。特に肉親が囚われているリインとマキアスは顕著だ。

しかしそれでも、皆がそれを内に秘めるに留まっているのは理由がある。

？「それは結構厳しいです、トワ会長。皇族を軟禁してるカレル離宮には多くの兵が配備されています。実際の話、皇族奪還のために動いた第一機甲師団も全滅、現状の戦力じゃ突破はほぼ不可能……そも、これは俺が貴族連合にいた時点の話ですし、その事実を知ってる俺が離反した事で軟禁場所を移された可能性もあります」

「そっか…、そうだよね、ごめんね。熱くなっちゃって」

それは愛国心によるものだ。？トワ会長のそれが人一倍だっただけで、すぐに冷静を取り戻す様はさすがは士官学院の生徒会長なだけはあると言える。

「いえ。それじゃあ話を続けますけど。あとはツールズの現状について、これも俺の知ってる範囲じゃあ、今はパトリックを頂点とした『騎士団』が統治してるようです。学院長とか教官らは学院内に軟禁されて、まあ何とか治安はそんな悪いわけじゃないそうですね」

？ナギトが開示できる情報はここまでだった。？極一部を除き、仲間として信用されていなかったせいで情報を漏らされなかったのが原因だ。？記憶を掘り起こせば、まだまだ眠っている財宝はありそうだが、今のところはこんなもんだと伝えたと、皆が席を立つ。

誰かが部屋から出ようとした所で、ナギトは思い出したワードを使って皆に問いかけた。

？「みんな、『黒の史書』って聞いたことあるか？」

？しかし、全員は首を横に振るのみ。？唯一、エマだけが何か思い出しそうな表情だったが、結局は皆と同様に首を横に振った。

？リン、アリサ、エリオット、マキアス……と部屋を出て行き、室内にはナギトとユー

シスだけが残った。

？「それで、話とは何だ？」

単刀直入に聞くユーシス。相変わらずだな、と言おうとして、それを制するようにユーシスは続けた。

？「まあ、大方のあたりはついているが。《閃嵐の騎士》についてだろうか？」

ナギトはその鋭さに瞠目し、言いかけていた言葉に褒め言葉を付け足した。

「相変わらず、冴えてるなユーシス。さすがだよ」

？《閃嵐の騎士》。それは閃きのように戦場で踊り、嵐のように去っていくとある機甲兵につけられた渾名だ。情け容赦のない戦術。他の追隨を許さぬ戦闘力。そのために正規軍の間で畏怖されているのが《閃嵐の騎士》。そして、そのパイロットであるナギトにつけられた渾名。

尤も、ナギトがパイロットである事知っているのは貴族連合の中でも一部だけだ。？しかし、それでも少し前まで貴族連合に帰属していたユーシスならば知っている可能性もあると考慮して、話をもちかけたのだった。

「俺に頼みたいのは《閃嵐の騎士》の正体についてだろうか？」

ユーシスはまっすぐな眼差しをナギトに向ける。目を逸らしたくなる衝動に駆られるも何とか耐えて、視線を合わせる。

「ああ。《閃嵐の騎士》の正体について、みんなには話さないでいてくれると助かる」

「承知した。だが、貴族連合が黙っているとも限るまい。そこはどう思ってるんだ？」

「不安な所だが……まあ、今は大丈夫のはず。カイエン公はすぐにでも公表して俺の居場所を奪いたいだろうが、ルーファスさんに止められるだろうし」

「ほう。その心は？」

「今、バラされた所でお前たちは俺を受け入れるだろう？ルーファスさんはそこまで読む。だから暴露するにしても、もっと効果的な場面でバラすはずだ」

ナギトの推測に、一理あると頷くユーシス。？しかし、その言葉に一つの矛盾が孕んでいる事に気づき指摘する。

「兄上なら確かにそうするだろうが……ならば、今の内にみんなに明かした方がいいのではないか？」

《閃嵐の騎士》であった事を秘密にしてくれと言うナギト。しかし、その言葉は《閃嵐の騎士》ナギトの正規軍への殺戮行為という情報の開示のタイミングについて貴族連合側に任せると言っているのと相違ない。

ならば、仲間内にだけでもナギトが《閃嵐の騎士》として戦場を蹂躪してきた事を明かせば、貴族連合に秘密を明かされた時でも、仲間との絆はそのままでもいられるはずだ。とそれがユーシスの言い分だ。

「まあ、できるだけ面倒事は避けたいんだよね。？まだルーファスさんが秘密を明かすなんて決まったわけでもないし……それに、どの道お前らは俺を受け入れるだろう？」

ナギトの発言に鳥肌が立つ。ユーシスは今の言葉に空恐ろしいものを感じた。？ど

こか壊れてる。と感情が叫ぶ。だがそれはナギトの強みのようにも思えて、指摘できなかった。

「……………わかった。みんなには黙っておこう。だが、もしバレてしまっても俺は庇わんぞで?」

「ああ、助かるよユーシス」

ナギトは笑みを浮かべて部屋を出る。手をひらつかせながら。ユーシスは一人となった室内にて呟いた。

? 「面倒事は避けたい……………か。まったく、貴様は本当にあのナギト・シユバルツアーなのか?」

☆★

全員がブリッジに集まった所で、まずはどうするかという話になった。

明確な目標はあるにしても、それは先の話であり、自分たちがそのために今は何をす

るのか、きちんと決めていないための悩みだった。

しかし、それについてはオリヴァルトが手を打っていたようで、ブリッジにある端末に各地からの依頼をまとめて随時送ってくれるしてくれるらしい。

試しにオリヴァルトと通信してみると、感度は良好。さすがは皇族の船カレイジャスだと唸る。

オリヴァルトから届けられた依頼によって、行き先はノルド高原に決定された。？なにやらノルド高原になにやら大型魔獣が出現したらしく、それを退治してくれという依頼だ。？そこで降りるメンバーを決めようとした所でナギトが口を挟んだ。

？「あー、すまんが俺は別行動とつていいかな？」

「別行動つて……どうしたんだ？」

？聞いたのはリインだ。？突然の発言に驚きつつも、一番に平静を取り戻したのは、長い間一緒にいたリインだった。

「んー、まあ、ちよつとね。心配しなくても、お前たちの……いや、俺たち VII組の不利益になる

事はしない」

わざわざ言い直すあたり、自分たちは仲間だと言外に伝える。？すると、リインはまんまと了承した。他のみんなもリインと同様だ。

「それにしても、Ⅶ組がようやく揃ったって言うのにいきなり別行動なんて感心しないわね」

別行動を了承しつつも辛辣な言葉を投げかけるのはアリサだ。さつき一矢報いたのがよほど根を張っているらしい。ナギトは苦笑いを浮かべる。

「ホント、ごめんだって。でも、本当の意味でⅦ組が全員揃うために、揃っていられたために必要な事なんだよ」

全員、頭のどこかでは理解している。？Ⅶ組が本当の意味で揃う事などないだろうと。この内戦、今は貴族連合が優勢だがこの後はどうなるかわからない。？そして内戦終結の折、もし貴族連合が敗北してしまった場合は、その英雄として活躍していたクロ

ウは、当然のように罰に対してでも矢面に立たなければいけない。？貴族連合が勝利した場合でも、クロウは英雄として、やはり遠い存在になるだろう。それ以前に貴族連合に敵対するように動いてる自分たちが生きている保証もない。

理解している。だが、諦める事はない。？誰よりもその意思が強いのがナギトだ。クロウを助けたい。クロウを救ける。

それを己が存在意義のように感じているのだから。

だから、これはそのための別行動。？言うなれば内戦終結後のための行動。クロウ風に言うならば後の楔だ。

？「ガイウスも、悪いな。ノルドが危機かも知んないって時に力になれなくて」

「いいさ。ナギトがそう動くのは俺たちのためなんだろうからな」

？ガイウスの気遣いに感謝しながら、ナギトは自分の降下地点を艦長代理であるトワに伝えた。



? キーを回すと、途端に振動を感じた。心地の良い重低音が響き渡る。

「本当に一人で行くのか?」

心配そうに聞いてきたのはリインだ。? 心配された当のナギトはリインから借り受けた導力バイクに跨ったままそっけなく答える。

「ああ。これが二人乗りならラウラでも連れて行きたいくらいだけど。生憎と一人乗りだし」

? 場所はガレリア要塞の跡地。? クロスベルの謎の超常兵器により消滅した、国境の守りの、残り滓である。? とは言っても、現在は帝国最強と名高い、赤毛のクレイグが率いる機甲師団の駐屯地となっていて、まったくのもぬけの殻というわけではない。

そこがナギトの指定した降下地点であった。? それと同時に「各地に動き回るから」という理由で足としてリインの導力バイクを拝借した。

ナギトが語った1人で行く理由の半分は語ったものの通りであり、もう半分は後ろ暗いからである。

? 故にナギトはわざわざ一人乗りの導力バイクをリンから借りたのだ。

尚も心配するリンだったが、ナギトは大丈夫だと念押ししてカレイジャスに戻らせる。? 遠く空を行くカレイジャスを見送って、ナギトは導力バイクのハンドルを握りしめる。

リラックスするように首を回すと、骨がコキコキと鳴った。? ナギトは視線を真っ直ぐに向けると、不敵な笑みを浮かべる。

「さあって、と………悪巧みを始めるかねえ」

正義の在り処

“正義”とは何ぞや？

そんな事を考える。？ “正義”とは。そして “正義の味方”とは。思うに、それは自らを称するために使つてはいけないものだ。

？—— “正義は我らにあり！”

？その言葉で、いったいどれだけの人を殺した？

？—— “俺たちは正義の味方だ”

？その認識が、いったい他のどれだけの正義を穢した？

“正義”とは。 “正義の味方”とは。？決して自称してはならない。

自分を正義だと言えば、自分に対する者は “悪”になる。極自然に、そう思えるのだ。自分は正義だ。だから、自分に敵対するのは悪だと断じる事ができてしまう。その敵対者が自らの正義を成そうとしていると、考えもせずに。？自分だけの正義を振りかざす。敵を悪と罵り、勝利した暁には「正義は勝つ」などと抜かす。？それだけで、気持

ち良く自分に酔える。

“正義”とは、常に自分を疑い続ける者に与えられるべきもの。？自分の行動は、思考は正しいのか？敵が本当に悪なのか？疑い続けて、本当に正しいものを掴み続けていくように努力する。？それが正義を成そうとするために為すべき事だ。

そうしていつて、ようやく誰かから言われるようになる。あの者こそが正義の味方だと。

それが、普遍的な正義を追うために必要な事だ。

ナギト・シユバルツァーが成そうとしている事は自らの正義である。？それが例え普遍的な視点から悪だと称されても、ナギト自身が悪だとわかっていても。

ナギトは自分の正義を貫くと決めていた。？後悔をしないと決めていた。悪を為しても、己が正義を成すと。

正義の味方になるためには、悪が必要不可欠である。？正義の味方になりたいと思つている者がいるとすれば、それは悪を求めているのと同義。なれば、それは紛れも無い

悪である。

正義を成すために、悪を求めるのは「悪」。？ならば、ナギト・シユバルツァーの行為もまた、悪であると断じられる。

「ガレリア要塞跡地に一匹。ルナリア自然公園に一匹。ノルド高原の石柱群に一匹。ノルティア街道に一匹。アイゼンガルド連峰に一匹。計五匹。見逃しがないや、帝国東部にはこれだけのはず」

カレイジャスを見送つてから二日後。？ナギトはそう呟いてメモを懐に収めた。

コートを着込んでなお寒いその場所はアイゼンガルド連峰だ。雪の積もるユミルより先。？険しい山道を登った先に、それは存在していた。

凶悪な爪牙に、万物を睥睨する双眸。翼がないにしても、あの姿形は竜と見て間違いない。？背中には不可思議な突起が生えている。あれで招雷でもするのだろうか。どの道、厄介な敵である事は確実だ。

「さて、後はあれをどこまで誘導するかだが——と」

と、そこまで思考した所で、懐のARCSUが着信音を鳴らした。

？アイゼンガルド連峰などという辺境において、何故ARCSUが電波を送受信できるのかというには理由がある。

それはカレイジャスにある設備のためだ。カレイジャスの端末は帝国西部にいるオリヴァルトとでさえ通信が可能だ。？その通信設備を経由すればアイゼンガルド連峰と、どこを飛んでいるかもわからないカレイジャスでも通信ができるのである。

とは言っても試したのは今回が初めてなのだが。？どこにいても通信できる。というのがナギトの単独行動が許された一つの理由でもある。？今回でそれが実証されたのは僥倖であると言えた。

ナギトが通話をONにすると、聞こえてきたのはリインの声だ。

「ああ。……そうか、わかった。すぐに合流する。……ユミルにいるのか。俺もそんな遠くないから今から向かう」

ARCSU越しにでもわかる緊急性。

要件はこうだった。？エリオットの姉フィオナが、その父である《紅毛のクレイグ》への牽制のための人質として双龍橋に連れ込まれた、と。

しかし、《紅毛のクレイグ》——オーラフ・クレイグ中將は軍人としての職務を全うするだろうと推測されるため、その行く末は目に見えている。？ならば、俺たちがフィオナさんを助けよう！という事らしい。

フィオナ・クレイグの命の危機。？それはナギトにとつて見過ごせるものではなかった。前に特別実習で帝都に赴いた際に受けた恩がある。それもまだ返せていない。？なにより、知人を死なせたくはない。

？それだけで充分だった。？フィオナ・クレイグを助ける理由は。

ナギトは素早くバイクに跨ると、ハンドルを回した。

☆★

ナギトがカレイジャスに搭乗し、そのブリッジにて皆と合流した所で作戦会議は開始された。

まずはカレイジャスで双龍橋に接近し、アルフィンの宣言でこちらの行動が皇族に保障されたものであることを示し、ヴァリマールとジークフリートで敵の防衛ラインを突破。

?ジークフリートはそのまま待機し、敵の増援（があつた場合）の撃退。また敵の撤退の阻止。?ナギト以外の人員は双龍橋内部に潜入し二手に分かれる。フィオナの救出隊と橋内部の攪乱隊だ。救出隊は速やかにフィオナを救出し、ついでに双龍橋を陥落させて作戦は終了。

今回の作戦に合わせて———というか、クレイグ中將が率いる機甲師団の双龍橋攻略と時を同じくして第三の風もフィオナの救出を開始する。?そも、機甲師団の双龍橋攻略作戦を恐れた貴族連合がクレイグへの盾としてフィオナを人質にしたのだ。

?故に機甲師団と第三の風による双龍橋攻略は同時刻になるのが必然であつた。

?カレイジャスの最下層で、ナギトがジークフリートに乗り込もうとした時、不意に扉が開き、金髪的美丈夫が姿を現わす。その顔は申し訳なさに歪んでいるようにナギトは見えた。

ユーシスはナギトの目の前に立つなり、僅かに顎を引いた。彼にしては珍しい本気の謝罪の意を表していた。

「すまない……ナギト。もう皆には話しているのだが今回の事件、俺の——」
「お前が謝る事じゃないだろ。どうせまたアルバレア公の独断だろ？この状況でこんな下策を打ってくるのはあの公爵くらいだ」

ナギトの言葉に驚いたのか、そこでようやく両者の視線は交わった。

「だから、お前は謝るなよ。謝るくらいなら今回の作戦で活躍してくれたまえ、つて話」

？ナギトはフツと笑い、再び視線を落としそうになるユーシスの背中を軽く叩いてから機甲兵ジークフリートに乗り込んだ。

ナギトはコックピットの中で瞑目し、深く息を吐く。

やはり、今回の騒動の原因はアルバレア公にあったようだ。まあ、こんなあと先を考えない程に焦っているのは彼くらいだ。貴族連合ではカイエン公に総主宰の座を独占され、猟兵を運用して失敗した事もある。アルバレア公は内乱が始まって以来、何も戦

果を挙げていない。？息子であるルーファスが貴族連合の参謀の地位についているが、それを己が功として誇れる程にはまだ毫碌してはいないらしい。それ故の、今回の行動だ。

フィオナ・クレイグを人質とする。？それで勝利したとして、後に何が起こるかなど容易に想像できるはずなのに、それもできないくらい追い込まれているのだろう。

？ナギトは目を開けて、その思考を停止させる。？そしてすぐに目の前にあるものに視線を走らせる。

？モニターに写るのはカレイジャスを通して得られた情報だ。？それを目にしてナギトは少しばかり大仰に「ハッ！」と笑う。

？「こりやすごいな。見事な挟み撃ちだわ。これじゃ俺たちが正規軍よりだと思われるも仕方ないわな」

？ただ呟いただけのつもりの言葉はマイクに拾われて機甲兵の拡声機能を十全に發揮して隣にいたヴァリマール操縦席のラインに届いてしまう。

？「……ナギト。わかつてると思うが、今回の作戦はあくまでもフィオナさんの救出の名目の元に行われるものだ」

「わかってるとも。ただなあ、内戦には干渉せず、あくまで民間人の救出を目的とした……なんて言ってもだな、今回の言い訳できないレベルでバツチリ正規軍のお仲間だぞ、俺たち」

「今回ばかりは仕方ないさ。たまたま救出対象が正規軍の親族で、正規軍の進行を恐れた貴族連合が人質をとったために俺たちが動く事になった」

リインの言葉は的を射ていた。？当然の事だ。VII組の内戦への介入への動機は人質の救出。？人質がとられなければ第三の風が内戦に介入する道理はない。人質がとられる、という事は第三の風の内戦への介入を意味し、人質をとった側への敵対を意味する。

それは理解できるし、納得も可能だ。

？だが。しかし。だからこそ。？甘いと言わざるを得ない。

ナギトは過程を飛ばして、本題を告げた。

？「リイン。俺は、今回の内戦……第三の風なんて言わず、正規軍側として動いた方が良いと思う」

? その言葉は、まるまるⅦ組の否定だ。? 貴族派と革新派の対立深まる帝国で第三の風として動く事。それがⅦ組が生み出された理由だからだ。

「なっ……!? どういう意味だ、ナギト!」

「……………今回の内戦、正規軍側の勝利で終わる。? なら、勝つ方に身を置くのは当然の事だろう? 勝てば官軍だ」

「何を……………どうして正規軍が勝つなんて言い切れる? それに、ナギト……………何を言っているのかわかってるのか!? 今の言葉は俺たちⅦ組のこれまでの否定だぞ!」

? 「わかってるよ。どうせ俺の考えは否定されるだろうなって思ってたよ、言ってみただけだよ。もう忘れろ」

? やや早口に、拗ねた子供のようになギトは矢継ぎ早に呟いた。そして会話を終了させる。? 「もう作戦開始だぞ」などとやって。その質問に、答えぬまま。

? 今回の内戦、正規軍側が勝利する。? それはもはや半ば決定事項だ。? 何せ、貴族連合は第三の風の敵だ。貴族連合はこれから強力な機甲師団と空を舞うカレイジャスを敵に回す事になる。? 帝国にカレイジャスを上回る機動性を持つ艦は存在しない。制空権はこちらにあるのだ。

確たる事実を挙げればこの程度だが、ナギトの中には確信に似た推測が渦巻いていた。

そもそも、今回の内戦……タイミングが良過ぎる。？それに、あの怪物が心臓をぶち抜かれた程度で死ぬとは思えない。

前者はまだしも後者は考え過ぎだとかぶりを振る。心臓をぶち抜かれれば誰でも死ぬさ。

☆★

《灰の騎神》ヴァリマール？

《閃嵐の騎士》ジークフリート

古き時代にて地精と魔女が協力して造り上げた人型の有人駆動兵器と、その贗作。？《騎神》という兵器を、扱い易さと引き換えにスペックダウンした量産型の機甲兵では相手にならぬのが道理と言えた。

如何に日々の訓練で鍛えられた領邦軍の兵士と言えど、今回ばかりは相手が悪かった。

機甲兵に搭乗して戦うのは少しばかり久しく、それ以上にリインと肩を並べて戦うのが久しかった。？ナギトの口角が歪む。「いいな、これは」と唄うように口ずさむ。

リヴァルら《閃嵐の騎士》部隊の面々を指揮する戦いも乙ではあったが、兄弟分と肩を並べて戦うのはそれ以上に胸が熱くなる。

これも時間が空いたからで、きつと幻想の一種だと頭の片隅で考えつつも、ナギトは衝動のままに太刀を振るった。

間も無く双龍橋の守備部隊は突破され、作戦は第二段階に移った。

作戦は大まかに二段階に分けられた。

第一段階はナギトとリインの騎神及び機甲兵による敵守衛の突破。第二段階は双龍橋内部に侵入し、人質とされたフィオナの奪還だ。

第二段階におけるナギトの役割は、双龍橋の外部に構え、敵の増援があつた場合の対処、敵部隊撤退の阻止だ。

「ふわああ……」

字面としてはたいへん重要な任務だが、実際は敵の増援なぞ来やしないし、撤退するにもまだ早く、ナギトは機甲兵ジークフリートの操縦席で暇をしていた。

ここ2日間の寝不足のせいであつて、つい出てしまふ欠伸を噛み殺す事なく——モニターに写る危機に気がついた。

軍刀を大きく振り上げた、紫金の外套を纏う軍人。

軍刀に込められた闘気はジークフリートの装甲を切り裂くに足る力を秘めているのもさる事ながら、接近を直前まで悟らせない隠形も見事と言えた。

欠伸さえしていたナギトは不意を突かれた形になり——、不意を突かれる事など想定内だった。

油断、慢心はあつても有事に備える矛盾を平然とこなすナギトの異常性が、この危機を脱せしめた。

左腕の盾で斬撃を受け止める。盾に一撃で亀裂が入る。人の身で恐ろしい威力の一

撃である。

「つぶねえ！——つて、ナイトハルト教官!？」

着地した軍人を見やると、それは見慣れたツールズの教官だった。？第四機甲師団より出向してきていた若きエース《剛撃》のナイトハルト。

「——む、その声はナギト・シユバルツアールか。敵かと思つたぞ。それで、状況は？」
？ナイトハルトもさすがに軍人で、無駄のない会話だと思いつながらナギトは簡潔に第三の風の作戦概要を説明してナイトハルトを双龍橋内部に通した。

双龍橋に詰められる人員からしてラインたちだけでも作戦は十分に成功していただろう。？そこにナイトハルトを投入すればまさに鬼に金棒。作戦失敗の余地などないように思えた。

ナイトハルトが双龍橋内部に突入し、僅かばかりの時間が経過した頃、ジークフリートのセンサーが反応した。？敵増援を防ぐ目的で向いていたケルディック方向とは逆——つまり双龍橋内部からの反応だ。識別はすべて敵性。

ナギトは「さて、本番か」とジークフリートを反転させ、双龍橋内部から撤退して行く貴族連合双龍橋部隊の残存勢力を見据えた。

戦車が大砲を発射した。？双龍橋を出た所で仁王立ちする機甲兵は敵であると判断したからだ。

それに対して「判断早いね」なんて呟きながら迫り来る砲弾をジークフリートは真つ二つにした。

？戦車の内部では指示を出した指揮官があんぐりとしている事だろう、そんな事を考えながらナギトはジ操縦桿を動かした。ジークフリートが太刀を振るう。

？刃の向かった先は地面だ。双龍橋、その敷き詰めたタイルを削って一本の線ができた。

「はい、この線はあなたたちの生命線です。これを越えれば俺とバトルしてもらいます。越えない、攻撃しないのであれば手は出しません。……まー要するに俺と戦って死ぬ

か、背後から迫る正規軍にとつ捕まるかの二択ですね。さ、どうする?」

ふざけた二択だった。ナギトの語り口もそうだが、退却する貴族連合側に利点がない時点で、第三の選択肢を取るのがあたりまえであった。

「突破せよ!」

指揮官の檄で、引かれた線を越えて機甲兵ドラッケンがジークフリートに迫る。

「判断が早い!……間違ってるけど」

大振りの一撃をパリイしてドラッケンの体勢を崩す。そこに回転切りを見舞い、ドラッケンを一刀両断した。

コックピットから上が切り取られたパイロットはジークフリートを見上げて瞠目している。

「せ、《閃嵐の騎士》か……?」

そして、それを見ていた貴族連合兵に浮かび上がったのは、眼前の敵が英雄《閃嵐の騎士》ではないか、という疑問。

ありえない話だ。《閃嵐の騎士》は貴族連合の英雄。離反したという話は聞いた事がないし、機甲兵の姿形も以前見たものと違っている。

しかし、と兵士は思うのだ。

汎用とは言え機甲兵、ドラツケンのその上半身を斬り飛ばすなど。それこそ英雄の力量ではないのかと。

この双龍橋に詰めいてた貴族連合の兵士の面々は第四機甲師団を相手取る事が多く、《閃嵐の騎士》とも共に戦った事がある。

だから彼の強さも知っている。あの、まさしく英雄と呼ぶべき破格を。

戦意の喪失は早かった。？《蒼の騎士》と並ぶ貴族連合の英雄。それを相手に勝てるわけがないと。例えそうでないとしても、相手は英雄級の実力者。命を惜しむわけではないが犬死には御免だとして、貴族連合の兵は降伏を受け入れた。

?ここに作戦は成った。

?第三の風によるファイオナ・クレイグの救出作戦は成功。?機甲師団による双龍橋の奪還作戦も成功。

?その報せにケルディックに詰めていた貴族連合兵士がバリアアハートまで退却したとナギトたちの耳に届くまで時間はそうかからなかった。

ケルディック寄港日

第三の風の人質解放と正規軍による双龍橋奪還の後、カレイジャスは貴族連合の退いたケルディックへ物資の補給も兼ねてやって来ていた。

？「ここのお酒飲むのも久しぶりね〜」

そう言いながらジョッキを空にするのはサラ・バレスタイン。？真つ昼間から酒をかっくらう駄肉ではあるが、これでも元は最年少A級遊撃士。《紫電》のバレスタインと恐れられた猛者だ。

そんな彼女は酒が入れば独り言も増えるが、今回はちゃんと相席する青年と会話をしていた。

「ほどほどにしておいてくださいよ、教官」

? 呆れ顔をしながらもサラと同じくジョッキを空にするナギト。? 「ぷは〜」とまったく説得力のない呼気を吐き出した。

? 「わかってるわよ、うるさいわね……、それでナギト…アンタ、記憶の方はどうなの? 少しは取り戻した?」

? ナギトの諫言に「うるさいわね」と愚痴をこぼすようにに呟き、再会してから思っていた事を聞いた。

? 「あー、それすか……まあ、それなりに、ですかね」

「へえ。思い出した事もあるのね。いいじゃない、ちよつと聞かせなさいよ」

? カウンター席の隣からぐいつと身を寄せてくるサラ。残念だが腕に乳が当たるなんてラツキースケベは起こらなかった。

「酒が不味くなくても知らんすよ? それに主観だし?」

《剣鬼》の人斬りの記憶を語り聞かせるのは決して気持ちの良い話ではないだろう。そういう意味合いの断りを入れてからナギトは語った。? 自らが《剣鬼》として駆け抜けた共和国時代の事を。

「——そして、目覚めた男は拾ってくれた男爵にナギト・シユバルツァーと名付けられましたとき。と、こんな感じですね」

語り終えたナギトはグラスをカウンターに置いた。自分の過去を話すのにビールでは格好がつかない、とワインを注文したのだ。

語りの中でサラが口を挟む事はなかった。聞き入ったのか、気を効かせてくれたのか、それとも眠っていたのか、ただグラスに揺れるワインを眺めて語っていたナギトには分からなかった。？ちらりと横目でサラを見やると、その両の瞼は閉じていた。

？人に語らせといて寝てんじやねえ！とその頭をはたきそうになるも、サラの瞼は重々しく開かれる。どうやら眠っていたわけではなく瞑目して思いを馳せていたらしい。

どうやら《剣鬼》の物語は酒の肴程度にはなるようだ。

？「そうだったのね……文章として見ると、本人から語られるのではやっぱりかなり印象が違ってくるわね」

やはりと言うべきか、サラはナギトの過去——《剣鬼》についてある程度知っていたようだ。

情報源はどこかと問いたいが、おそらくジン↓オリヴァルト↓学院といった感じなのだろう。

「それにしても、まさか共和国で蛇の連中とまで知り合ってるとは思わなかったわ。？それも、あの《剣帝》レオンハルトと」

「《剣帝》をお知りで？」

「過去、《剣鬼》であつた自分を倒した男の名を出されれば気になる。？サラが元遊撃士という事を考えれば《剣帝》の存在を知っているのも理解できるが。」

「ええ。《剣帝》レオンハルト……曲者揃いの執行者の中でも一、二を争う剣の達人。知ってるのはこれくらいだけ。確か、もう故人だったわよね？」

「サラの言葉にナギトは目を伏せる。？《剣帝》は《剣鬼》を倒した猛者だ。いずれりベンジするつもりだったが、故人ではどうしようもない。」

「らしいですね。どうもリベールでの異変の時に……って聞きました。これでもうり

ベンジマツチはできませんね」

重苦しい雰囲気と言葉に、サラはわざと「そうねー」などと軽く返事をしながら女将に追加のビールを注文する。しかし、それは拒否された。？聞けば、大市の大規模な縮小によつて酒の入荷もままならないのだと言う。

それでもサラが酒を飲みたいと言うので、ナギトとサラで大市に酒を買いに店のお使いに出る事になった。

？「ちよつと……、ちよつと待つべし」

両脇に抱えていた酒樽を下ろしながら、ナギトはサラに声をかけた。？当のサラはと言うと、上機嫌で鼻唄混じりに店に戻っていた気分を害されたのか「なによおく？」と拗ねたように言った。

「ちよつと待つべし」と「待ちやがれこの酔っ払い」で迷ったのだが、後者を選んでおけばよかつたと反省したナギト。オブラートに包む事を一旦忘却の彼方に消し去つて、ジ

ト目でサラを見た。

「なぜに俺が酒樽二個も持つてんですかね？ビール飲み尽くしたの教官つすよね？サラ教官が持つのが筋つてもんじやないのかと思うんですが。つーかぶつちやけお使いとか言つて出たにも関わらず何もしてないとか駄肉ここに極まったな！」

？「誰が駄肉よ！見なさい、この完璧なプロポーズ！世の男どもが見惚れるのも無理はないこの肉体美を！それにねえ、アンタ。女の子に荷物持たせるなんて男が廢るわよ」

？ナギトの言葉に青筋を立てて、艶いたポーズをとりながら流し目でナギトを見るサラだったが、それは鼻で笑われる。

？「ハッ！ナリは見事でも使つてないから駄肉つてんですよ。それに時代はレディファースト。荷物を持つのも女が先だ！」

？注意　：　二人は酔つてます

？「使つてないって何よ！使つてるわよ、素敵なオジサマをこの肉体で次々と籠絡してきたわよ！」

? 「嘘乙!」

? なんてひどい会話だ。二人のやりとりを通行がてら見物していたケルディックの住民たちは皆一様にそう思った。

ナギトとサラがやいやいと騒いでいるのは大市の出入口。人通りの多いそこで騒げるくらいには二人は酔っていた。

? そこに通りがかったリインが何とか二人を言いくるめて、店に戻る。そこでもう、リインは「付き合いきれない」と呟いて店から退散した。

女将に酒樽を渡すと同時にサラは再びビールを注文する。

? 「駄肉め」

? 「聞こえたわよ、このチンチクリン!」

「はあくあん? チンチクリンなあ? もつとマシな言葉チョイスできなかったのか駄肉」

? 「アンタこそずっとそればかりね。《剣鬼》つてのは脳みそまで剣で出来てるのかしら? 語彙力がなさ過ぎよ!」

? 「語彙力だと? チンチクリンなんて今どき——」

? 「そこまでにするが良い。二人とも」

? ヒートアップする二人を見兼ねた誰かが口を挟んだ。? エプロンをつけ給仕をするその女子はラウラだ。事情を聞くとここの店員のルイセが出かけているそうなので、その間だけ手伝いをしているのだと。

「他の客に迷惑だ。サラ教官、貴方もここは先達として懐の深さを見せつける時でしょう」

? 珍しいお説教モードのラウラの迫力に縮こまるサラ。それを見て「ああ、これヤバイやつだ」と逃げようとするナギトの襟を掴んで強制的に着席させるラウラ。

? 「ナギト、そなたもそなただ。酒の席とは言え、見苦しいぞ。それに学生の身分で飲酒とは何事か」

? 「あ、はい。いやですね：俺ってば実はもう二十歳過ぎてまして……」

《剣鬼》の記憶から推測するにナギトは今現在で二十歳だ。たぶん、きつと、おそらく、メイビー。

? 「黙って聞く!」

「はい。」

「有無を言わさぬ迫力。説教モードのラウラは怖い。と身を竦めていた所を隣のサラに嘲笑されて「ああん？」と睨みつける。？ラウラからのゲンコツをいただきました。」

☆★

？ラウラの説教が終わり、ヘロヘロになったナギトは店から出てベンチで休んでいた。？酒で火照った体を冷ますにはいい冷たさの風。しかしそれも数分で寒く感じ、カレイジャスに戻ろうかとした所でリインと出くわした。

？「ナギト、酔いは覚めたのか？」

「んー、いや、そもそもあんなま酔ってなかったしな、酒には。場の雰囲気と言いますか、それに酔ってた感があるわ」

「そ、そうか……カレイジャスに戻るか？」

？「ああ。お前は？」

？「俺も一緒に戻るよ」

ナギトとリインは二人で並んでカレイジャスに戻る事にした。

? カレイジャスを停めてある街道に出ようとした所で、不意に声をかけられた。
ナギトは即座に振り向きながら臨戦態勢に入る。

? ——この俺が、気づかなかった?

太刀の柄に手をかける。? 眼前のフードの男に敵意はない。それ故に不気味に感じる。

? ——なんだこいつ……目の前にいるのにまだ気配を感知できない。

? 不審な動きを見せれば即座に斬り捨てるくらいに精神を研ぎ澄ませる。

? 「フフ……そう殺気立つな。ナギト・シユバルツァー」

? 名前まで——!

? とりあえずフードを切り裂いて素顔を見ようとするが、それをリインが制した。

? 「あなたは……」

「覚えていてくれたようだね。光栄だよ——リイン・シユバルツァー君」

「俺の名前まで……あなたはいつたいたい何者なんですか? 俺たちや少佐を陰ながら助けてくれていたようですが……何が目的なんですか?」

? リインも一応警戒はしているようだが、ナギトからすればそれでもまだ不十分に思え

た。？ナギトの「確信」が告げていた。この男は、その気になれば自分やリインを寄せ付けない特別な何かを持っている、と。

？「フフ……そう焦るものじゃない。今こそ、私の正体を明かすとしようじゃないか——」

？何やら男はもったいつける事もなく、そのフードを取り払った。

そのフードの奥から現れた素顔は、マヌケを演じるような瓶底眼鏡と人の良さそうな笑顔だった。

？「ジャジャ、ジャーン！なんと、正解はこの私だったのでした〜！」

？「はあああああ!？」

？フードの男の正体はツールズ士官学院で歴史を担当していたトマス・ライサンダー教官だった。？ちなみに素っ頓狂な叫び声を出したのはナギトだ。学院でのイメージとフードをしていた時の雰囲気合わなさ過ぎてあんな声を挙げてしまったのだ。

？話を聞くと、ヴァンダイク学院長の依頼でツールズから脱出した後、各地の学院生をそれとなく手助けしていたらしい。？正体を隠していたのはツールズの教官だとバレたら面倒な事になりそうだったらしいからだ。

こうして、Ⅶ組の面々は新たな人員を加えながらカレイジャスに戻る。

? 空に舞うは紅き翼。? 第三の風の名乗りは済んだ。? 次の行先は何処になるか。

蝶の羽ばたきは既に為された。

「強くなった」

双龍橋での人質救出から数日後、カレイジャスはユミルの地に停泊していた。

と言うのも、温泉郷と名高いユミルの温泉で不気味な出来事が起こっているため、その解決を依頼されて向かった次第である。

が、「ひとまず調査は僕たちでやっておくから、君たち2人は家に帰るといい」というVII組の総意によってナギトとリインは一時の休息を得る事となった。

シユバルツァー邸宅に帰り、テーブルを囲んで茶を飲む。そこでナギトは義父テオと話をした。聞かれたのは貴族連合の狙いだ。

しかし、これについては貴族連合潜入中に得た情報はカレイジャスの皆と共有した以上のものではない。

やがて邸宅を出てVII組の面子と合流しようとした所で、リインがおもむろにナギトに向き直った。

「どうだ、ナギト……久しぶりに」

かちやりと太刀を持ち上げてみせる。

それはツールズ入学前のように手合わせをしないかという意味だ。

「はっ。いいね。じゃあみんなに——」

「実はもう話はしてあるんだ。依頼はみんなに任せよう」

「……周到だな。いいぜ、やろう」

ARCUSを取り出してⅦ組の連中に連絡しようとしたナギトだったが、それはすでにリインが済ませていたようで、この手合わせを実現させるために準備をしていたのがわかる。

そうして2人は向かう。ユミル溪谷道を登り、いつもの場所へと。



この手合わせにはいくつかの目的があった。

まず前提として、この手合わせそのものが目的だ。楽しみだ。

次に、自身の今の実力をナギトに見せるため。トリスタ防衛戦の時にナギトが言った「お前は強くなった」——あのセリフを、再びナギト自身に納得させるための。

3つ目はナギトの実力を測るため。ナギトはかつて超人的な強さを誇ったが、5度目の特別実習で大怪我を負ってからは調子を崩してしまっていた。トリスタ防衛戦の時にはある程度は戻っていたが、今はどうなのか。単独行動を許してもいい強さがあるのか。

最後に、ナギトが《閃嵐の騎士》かどうかを判断するためのものだ。

ラインがヴァリマールを駆って戦っていた際に2度会敵した貴族連合の英雄。《閃嵐の騎士》の戦いっぷりは八葉の剣士を思わせ、敵ながら導くような言動はナギトらしさを感じさせた。

以上の4点が、この手合わせでラインが確かめるべきものだ。

そういう確認を終えて顔を上げると、ナギトと目が合った。

「ん、どうかしたのか？」

言われたナギトはわざとらしく目玉をぎよろつかせると、肩を竦めて「べっつにー」と答えた。

やがて溪谷道も終点に差し掛かり、いつかの帰郷の際に氷の魔獣と対峙した広場に出た。

ここがツールズに入学するまで毎日のようにナギトとリインが剣を比べ合っていた場所だ。

日が暮れるまでそうしていたと思わせるような心地の良い時間だった。

今回は様々な疑念を抱いての立ち会いになるが——一時、それを忘れる事にするリイン。

決意を固めたリインの、十歩先でナギトが振り返った。

「華は持たせてやらねえぞ？」

にやり、笑って太刀を抜く。

それはラインの知っているナギトそのものの姿で、疑念を忘れたいラインを後押しした。

「望むところだ！」

ラインもまた太刀を抜いて構えた。

そして――

「――神気合一！」

解き放つ、鬼の力。パンタグリュエルでようやく自己のものとした、かつて恐れていた力。

黒髪は白銀に変化し黒瞳は灼熱に染まる。

漲る力は烈火の如く、溢れる闘気は燃え盛り、いずれ青年が高みに届く事を想像させ

るに足るものだ。

「人と人は互いに影響し合つて、生かし合う——そんな当然の事を、俺はわかつてなかつた。でも、アルフィン殿下のおかげで気づけたんだ、その事に。とりわけ……ナギト、君の影響は大きなものだぞ？」

柔らかく、しかし挑発的に笑んだリインに、ナギトは「はっ」快哉をあげた。

「それはうれしいね。しかし……見事なものだな……その理は《剣鬼》が終ぞ至れなかつた領域だ」

リインの語つた“人と人が影響し合い、生かし合う”——そんな当然の道理を、当時《剣鬼》は理解していなかつた。

「《剣鬼》……過去のナギト自身がか。だが、その様子だと今はそうじゃないみたいだな？」

ナギトの言葉の内容をリインは素早く理解する。

人の影響、生かし合う道理は、Ⅶ組の中でもナギトが最も理解していたものだった。体現者と言つてもいいほどに。

だからこそ、リインは思う。

この兄弟分はやはり、自分の一歩先を進んでいるのだと。

「——鬼気解放」

ナギトもまた解放する。かつて恐れた過去の自分、《剣鬼》と呼ばれた男の闘気。もはや発動に言葉を発する必要もなかったが、言う方が雰囲気も出ようというもの。

にやりと笑つたナギトは言つた。

「その問いには我が剣をもつて答えるとしよう」

悪辣に笑む、剣呑を隠さないナギトの放つ闘気はリインのそれに倍する。その事実
リインは臆さず。

「いくぞ、ナギトっ！」

「こいつー！リイン！」

斯くして、2人の試合は始まった。

☆★

宣言の通り、先に仕掛けたのはリイン。構えた太刀から放たれるのは鬼の力を手にして強大化した緋空斬。

迫るそれをナギトは難なく巻き取って放つ——より早く、リインが距離を詰めている。

風で速度で切り抜ける、八葉一刀流は二の型疾風。その秘技。

「裏疾風！」

弧状の斬撃が飛来する。ナギトはそれを跳んで躲し、地上のリインへ向けて緋空斬を

放つ。

が、地面に立っていたリインの姿がぼやけて消えた。

「分け身!？」

ただ気配をそこに残すためだけの分身。しかしナギトのように闘気——気配を感知して戦うタイプには効果抜群の囷だ。

そして、それが囷だと気づいた時にはもう遅い。

跳躍したナギトの頭上で闘気が膨れ上がる。

「孤影燎原」

ナギトより高く跳んだリインが選んだ戦技はナギトが得意とする、小孤影斬を数多に撃ち出すもの。必殺の威力はないが、その攻撃範囲は防御を選択させるもの。

必然ナギトも防御せざるを得ず、勢いのままに地面に叩きつけられた。

好機。そう見たリインは太刀に業炎を纏って突撃する。

勝負が決着する。そんな当然の未来を、ナギトは受け入れない。

神気合一したリインの、さらに倍する闘気。それを固めて刃と成す。急造のそれは太刀のような流麗はなく、しかし人ひとりを挟み込んで胴体を千切るくらいには力を秘めている。ナギトが「幻造」と呼ぶ、闘気でものを構築する戦技によるものだ。

その暴威に、リインはナギトにぶつけるはずだった業炎撃を、己に迫る長大な刃を相殺するのに使った。

その間にナギトは立ち上がり態勢を立て直し、リインもまた着地していつものように太刀を構えた。

勝負は仕切り直しの様相を見せる。

「……いや、正直ナメてたみたいだわ。お前のこと」

ナギトは己の苦戦を鑑みて率直な感想を述べる。話しかけられたリインは、警戒を解かず言葉返す。

「そうだろうな。ナギト…君は口では良いように言うが、芯の所では俺たちⅦ組を信じていない。——今回はその傲慢を突かせてもらった」

毅然とした言動はナギトが思い知るに充分だった。数瞬、瞑目したナギト。

「そんな事ない——とは言えないらしい。俺はどこかでお前らを過小評価してたみたいだな。……オーケー、認識を改めるわ。……本気でいく」

いつだったか、実技テストでⅦ組の連中をまとめて打ち倒した事があった。きつとあの時からナギトはリインたちを格下だと、庇護すべき対象だと思っていたのだ。どこかで兄貴面していたのだ。

しかしリインは——Ⅶ組の奴らはそうじゃないと。俺たちは仲間なのだと主張している。

それはとても喜ばしくて、ナギトを奮い立たせるのに充分過ぎた。

「雷電収束、雷光確立——」

全力を出す。その誠意を。

「——雷軀来々」

ナギトの周囲に帯電した分身が3体侍る。それらはナギトの指示でリインへ呐喊する。

「蒼き焰よ、我が太刀に集え……！」

リインは素早く太刀に蒼炎を宿すと肉薄するナギトの分け身を斬り払う。散り際に放つ雷電すら焼き払い、ナギトの次撃に備えた。

「雷神裂破！」

そして放たれた雷撃に蒼炎の太刀で対抗する。

宙空で激突した雷と蒼炎は互いを喰らい合い——結果、相殺という形で終わる。

「破空　：　薙」

しかし、奥義を撃った後の立て直しはナギトの方が早かった。闘気総量によるものもあるが、ラインが鬼の力にまだ慣れていない事が大きい。

放たれた闘気の圧力に吹き飛ばされたラインは岩壁に叩きつけられ、衝撃で周囲に積もった雪が崩れ去る。

ラインの姿もまた雪に埋もれてしまった。

「神威残月」

そこに容赦なく放たれる神速の斬撃。

訪れるはずの決着をしかし、ラインも許容しない。

「——蒼焰よ!!」

瞬間、太刀の蒼焰が膨れ上がり、ラインの全身を包んだ。周囲の雪は蒸発し、迫る斬撃の威力を大きく減衰させ、太刀の一振りでかき消した。

岩壁を蹴って着地したライン。周囲の雪が瞬く間に蒸発していく。

「蒼焰の鎧か……考えたな……」

太刀に宿して破壊力を高める蒼焰を、鎧として用いる。それは並の敵では近付く事すら叶わない上等な防御だ。

消費する闘気C.Pも推して知るべし、だが鬼の力を我がものとしたリインなら数分は展開可能だろう。

「さくどわ」

短く言うと、リインは突撃を始めた。次が最後の攻防になるという予感にはナギトにもあり、だからこそ全霊で受けて立つ。

「緋技——」

迫るリインに緋空斬を放つ。いくつも、いくつも。それはリインに直撃する軌道ではないが、その動きを阻害するものであり、

それらは空中で互いにぶつかりと砕けた。舞い散る緋空の欠片は紅葉の如く――

「――まてんもみじ摩天洗葉・」

それが、ナギトの太刀に集束していく。

「蒼焰よ、我が太刀を焦がせ……！」

ラインの全身を包んでいた蒼焰もまた、太刀に集束する。

そして2つの太刀が激突する――刹那。

「――ふりつり振――あつ」

「――斬――！」

ナギトの太刀に集束しつつあった緋空斬の欠片、すなわち闘気が拡散した。

「はああああああ！」

ナギトが吼える。リインも同じように雄叫びをあげた。

鏑迫り合い、拮抗する力。交わる視線、互いの熱量は同等で――、

「――ははっ」

――それが嬉しくてナギトは笑ってしまった。

脱力。ナギトの手から太刀が弾き飛ばされる。

リインの太刀から蒼焰も消え失せた。ナギトと同じくリインも限界だったのだ。これでは、返す太刀を突きつけて試合は終わる。

しかし、やはりナギトがそんな敗北を甘受するわけがなかった。

リインが太刀を返すより速く、ナギトは鉄山靠を決め、戦技を放つ距離を確保。

「——破甲拳！」

そして、八の型を打ち込み、勝負を決するのだった。

☆★

「——納得できない」

「はいはい。ほら起きなさい」

破甲拳をくらって仰向けに倒れたリイン。すでに神気合一は解けている。一息ついて回復を図った後、ナギトの手を借りて立ち上がった。

リインが「納得できない」と言うのは、試合に負けた事に対してではない。

この勝負、太刀を弾き飛ばされた時点でナギトは剣士として敗北していた。しかし、即座に八の型を用いて試合には勝利した。

ナギトとしては試合に勝って勝負に負けた心持ちだ。

そしてリインは、剣士としての勝負に勝利した事に対して納得できないと言っているのだ。

「ナギト、どうして手を抜いた？」

「手を抜いたわけじゃない。俺は最善と思う行動をして、失敗しただけ」

先にもリインが指摘した通り、ナギトには慢心があったし、なによりリインの実力がナギトの想定を上回っていた。

「お前は強かったよ、本当に。試合運びもずっとそつちが上手だった」

「…それを互角に持ち込んでいたんだから、ナギトには恐れ入るよ。闘気の総量と出力…共に底が知れないな」

試合運びそのものはリインが常にイニシアチブを握っていた。ナギトは力押しでトドメを先延ばしにしていたに過ぎない。

「特に最後の……新しい蒼焰の太刀はやばいな」

「でもナギトなら打ち破れたはずだろう？」

確かに、あの場面でナギトの緋技が成功していたらリインの奥義を打ち破れていた可能性は充分にあった。だが逆に『摩天洗葉・一振重』でなければあれには対抗できないと踏んでいたのだ。

だからこそあの戦技を選択し、失敗した。《剣鬼》時代の記憶を取り戻した事で実力は底上げされたが、実習でヴィクターと戦った際の感覚は未だ取り戻せていないようだ。

それにもし戦技が成功していたとしても、鏢迫り合いで負けていた公算はある。

「そうかもな」

あの蒼焰は、ナギトの闘気を燃やしていた。ただの力ではない。相手の耐性を貫いて火傷状態にする、そんな蒼焰の太刀の側面の顕現。

あれは単なる火の特性ではない。仮にナギトが真似して「焰の太刀」を使っても、ただ威力が高いだけの技になるだろう。火傷耐性がある者に対しては火傷状態にする事はできないはずだ。

だからきつと、リインの焰は特別なのだ。

ナギトが最後、笑って力が抜けたのもあるが、あれは純粹に限界に近いのもあった。そういった面もあり、ナギトは剣士としての負けを受け入れたのだ。

「でも負けは負け、勝ちも勝ちだ。俺は慢心してたし、お前はそれを突いた。そつちは新技を成功させたし、こつちは奥義発動に失敗した。……あんまりぐたぐだ言ってる、ギヤラリーから見損なわれるぞ?」

「ギヤラリーって……あ」

ナギトに指摘されて、ようやくリインは気づく。この手合わせの広場にⅦ組のメン

バーが集っている事に。

「みんな……いつから？」

「最初からだ。貴様らが溪谷道に入るのを見てな」

「ええ、悪いとは思ったのだけど、跡をつけさせてもらったわ」

ユースとアリサがナギトらについて来た経緯を説明する。

「ああ。依頼の方も調査は一段落したしな」

「うん、合流しようかって話してた時にリンたちの姿を見かけたんだ」

「ええ、ナギトさんの方は気づいていたみたいですけど……」

マキアスとエリオット、エマがそれに捕捉する。

「黙ってついて来たのは謝るけど……でも、すつごかったねー！」

「リインも、もちろんナギトも……凄まじい強さだった」

「2人とも楽しそうだった」

「良い物を見させてもらったぞ」

ミリアム、ガイウス、フィー、ラウラはこの立ち会いの感想を述べた。

リインはポカンとしたあと、むくれっ面でナギトを見た。

「気づいてたなら言ってくれば良かったのに」

「まあ雑音だろ。溪谷を登る時から作戦考えてたみたいだし……集中切らしちゃいかんでしようよ」

リインも思い返してみればそうだと納得する。溪谷道でナギトが自分を見ていたのは暗に「追跡者に気づいてないのか？」と言っていたのかもしれない。「べつつにー」とはぐらかされたのがそうだろう。

となればナギトは、曰くその「雑音」とかねてより続く不調がありながら、鬼の力を制御したリインを上回った事になる。

「……敵わないな」

本当に、そう思った。

義兄弟として肩を並べて戦うに、未だ自分の格が足りないとリインは考える。
しかし——

「何言ってるんだ、こっちのセリフだぜリイン」

——しかし。

「お前はちよつと俺に幻想を抱き過ぎだ。剣で上回られてそれを言われちゃ俺も立つ瀬がない」

それは違うと言われたナギトが棄却する。そして。

「……やっぱ強いよ、お前は。さすがは俺のお兄様だ」

言った。リインがずっと望んでいた言葉を。

からかうような時と同じように「お兄様」と呼ぶ。それもまた、失われた日常を想起させて。

潤んだ瞳を気合いで悟られないように努める。

そしてまた、リインもいつものように言うのだ。

「だから、お兄様って呼ぶな！」

覚悟を問う

温泉郷。皇族と所縁のあるシユバルツァー男爵家が治める領地ユミルの別称である。
？ユミルには鳳翼館という温泉宿があり、その温泉は皇族御用達——そんな決まり文句がナギトの頭に浮かんだ。

？というのも、温泉に浸かってからすぐに、疲れが抜ける。癒されていく感覚を覚えたからだ。

？思えば、あのトリスタ防衛からずっと気を張りっぱなしだったのかもしれない。

その自覚と宣伝文句とが「癒されている」と身体が反応する理由なのではないか。などと考えてみたりもした。要は幸運の御守りを持った瞬間から幸運を感じてるようなものだ。プラーシーボ効果とも言う。

湯に浸かり背中を石に預けて、大きく息を吐く。

「ふはー」

目を瞑り、だらしなく口を開けて空を仰いだ。

そんな様子に、Ⅶ組の男たちは苦笑しつつも、ナギト・シユバルツァーの帰還を実感

した。

ナギトとリインの手合わせの後、ユミルに戻ったⅦ組一行は手配されていた依頼の解決に取り掛かった。

鳳翼館で起こる不可思議な事件。それを解決するために——Ⅶ組一行は温泉に入っていた。囹捜査というやつだ。事件が発生するのは露天風呂らしく、男子と女子に分かれて交互に温泉に入り、犯人の出方を見る事になったわけだ。

いつものように談笑する。その最中に生じた間隙を縫うようにしてエリオットが口を開いた。

？「そういえばナギトはトリスタでリインを逃してからずっと貴族連合にいたんだよね。何をしていたの？」

それは何気ない疑問だったのだろう。何気ない疑問だったかもしれない。？だが、それに対する答えは致命的だ。Ⅶ組の絆に亀裂を入れるに足るものだ。少なくともナギトはそう思っている。

「秘密」

? だからナギトは笑つてごまかした。

「わざわざ隠す程の事なのか?」

? それにマキアスが突つ込んで来る。? ナギトはゆっくり瞬きをすると大きく息を吐いて、それから真剣な目で対面する男たちを見た。

「そうだよ。わかるだろ?」

ナギトの短い言葉に僅かに表情が硬くなつたのはユーシスだ。彼はこの中で唯一、ナギトが貴族連合にいた頃の活躍を知っている。

「ここに聞きたいなら聞かせてやる。だが、その前に覚悟してもらふ必要がある」
? 湯に浸かつて気が抜けた表情から一転、聞き返す事すら躊躇わせる迫力がその言葉にはあつた。? “覚悟” —— そのワードが意味する所を皆が少なからず理解した。

ナギトは貴族連合でスパイをしていた。Ⅶ組に戻つた時に有益な情報をもたらすた

めだ。しかし有益な情報というのは信用されなければ得る事はできない。

ならば、ナギトが信用を勝ち取るためにやった事柄とは。想像は容易だ。

全員の沈黙を確認してナギトは続ける。その「覚悟」の重さが如何なるものなのか、語る。

「聞けば、俺とお前たちの関係は変わるだろう。少なくとも、お前たちの中にある「ナギト・シユバルツァー」という男の顔が変わるはず。これまでと同じように接する事が出来なくなるかもしれない。それでも良いなら、語ろうか」

「詳細は何一つ口にはしていない。？ただ話すだけで、自分たちの中にあるナギトへの認識が変わるという事を告げられただけだ。？Ⅶ組としてこのメンバーが集まってからすでに九ヶ月程が経過している。その間に培った絆が、育んだ友情が、ナギトが貴族連合にいたたった一ヶ月半の出来事を語るだけで壊れてしまうかもしれない、と。そう言われたのだ。」

「湯に浸かっているはずなのに、なぜか薄ら寒く感じた。裸の付き合いをしているはずなのに、どこか衣服を着ているより壁があるように思えた。」

淡い期待は打ち砕かれ、希望は是正された。「ナギトならば」というⅦ組の抱く期待

が現実の上塗りされる。

しん、と静まり返った場で次に口を開いたのはマキアスだった。

「やはり……君は傲慢だな。帝都の実習の時も言わせてもらったが。………何でもひ
とりで決め過ぎ、背負い過ぎだ」

その言葉に、全員が呆気にとられた。いち早く正気を取り戻したのはユーシスだ。

「その通りだ、この阿呆が。ふざけるな……という話だな。他人の問題には軽々しく踏み
込むくせに、自分の問題にはそうやって踏み込むに躊躇わせるハードルを設ける」

「そうだよ。特に僕なんかは父親が《紅毛》のクレイグなんだよ？ ナギトがもし仮にそ
れをやっていたとしても軽蔑なんてするもんか」

ユーシスに続き、エリオットまでもがナギトにそう言う。

「ナギトの背負う重荷……どうか俺たちにも分けてくれないか」

そして、ガイウスがそう締め括った。

そんなⅦ組男子の総意にナギトはくつくつと笑った後、「オーケー」と顔を上げた。

「わかったよ。そのうち話させてもらうよ。Ⅶ組のみんなの前で」

やはり自分はⅦ組の連中を侮っていたのだとナギトは自戒する。武でも、智でも、心でも。

マキアスにユーシス、エリオットにガイウス……もちろんリインだってナギトの想像を簡単に超えてくる。面白い程に、嬉しい程に、いとも容易くナギトの想定を飛び越える。

「俺の、軌跡をさ」

そう言ったナギトの表情は晴れやかに見えた。憑き物は落ちずとも、陰は薄まった。それを見てとったリインは義兄弟の喜びに、己もまた頬を緩ませるのだった。

?やがて露天風呂にミアムが恥ずかしげもなく入って来て「そろそろ交代」などと抜かす。?どうやら長く入っていたらしく、女子連中が痺れを切らしたようだった。

その後、鳳翼館の事件は犯人は魔獣ヒツジンだったという事が判明。

悲鳴が上がった露天風呂に急行したナギトとリインに風呂桶がぶん投げられるなどという珍事はあったものの、ヒツジンは退治されて依頼は無事解決されたのであった。

そしてまた、ナギトは単独行動にカレイジャスを降りた。

☆★

“善”と“正義”の違いを考えてみる。

“善”とは——簡単だ。善いこと、善い行いだ。

人を助ける。生き物を助ける。それらが例え、許されざる悪だとしても。その善性をもって助ける。それが“善”。

ならば「正義」とは——正しきを助け、悪を誅する。それが正義——正しい行いだ。

許されざる悪を斃し、裁き、誅する。

善と正義の違いは、悪を赦すか裁くか。——そう定義する。

「——ふう」

なんて、冗長な思考は現実から目を背けるための麻薬だ。

畢竟、善と正義の違いなどどうでもいい。自分が正義でも悪でもいい。

ただ、そう。

VII組は悪であってはならない。VII組は正義の味方でなければならぬ。VII組は英雄にならなければいけない。

それが、ナギトの出した答えだ。

しかし、それでも良心の呵責はある。なんせ自分のやつてる事は無辜の民の血を流させる事に繋がるからだ。いくら自分たちのためだと言っても、さすがに心は痛みもする。しかし、それを押ししてもやらなければならぬ。？Ⅶ組が全員で笑っていられためにも。

「俺たちは、正義の味方になる」

思考がぼそりと漏れ出る。すれ違った男性がぎよつとしてナギトを見た。「いえ何も」と会釈して、帝国時報社を出た。

また、眩きながら。

「正義の味方になるために、悪を為す」

確信は知識。知識は経験。経験は過去。

「——全軍、これより黒竜関への進軍を開始する！ノルティアの勇士たちよ、どうか力を貸してくれたたまえ！我が父の目を覚まし、領邦の未来を勝ち取るためにも！」

機甲兵、隊長機シユピーゲルの中から檄を飛ばすのはアンゼリカ・ログナー。？ログナー侯爵家の娘にしてトールズ士官学院を休学中の女拳士だ。素手の喧嘩ではトールズで頂点に位置すると誰かが言っていた。？ライダースーツに身を包む男装の麗人で、女好きである事も相まって今のトールズ二年の男子勢はかなり寂しい思いをしている、というのはクロウの談。

そんな彼女の演説を、ナギトは付近の高台から聞いていた。

「……………さて、どうすつべ」

この場にナギトが居合わせたのはまったくの偶然だった。悪巧みを終えてユミルに戻る際に通ったルーレ市外で、決起するアンゼリカの隊を発見したのだ。

ナギトが悩むのは、このままアンゼリカ——《第三の風》に合流して親子喧嘩を見届けるか、あるいは単独で黒竜関に潜入するか、だ。

「……確か」

ナギトは数瞬考え込むと、後者を選択した。黒竜関に単独潜入。とは言っても無茶をやるつもりはない。せいぜいが“お話をする”程度の目的だった。

☆★

黒竜関の格納庫で巨大機甲兵“ゴライアス”を見上げるヴァルカンは、暗がりから出て来た人物に振り返って「よう」と声をかけた。

「誰かと思えば《剣鬼》じゃねえか。パンタグリユエル以来だな」

「ああ、こんにちはヴァルカン。今日は死ぬには良い日だな」

「フツ……どうやら俺の考えはお見通しってわけか」

《帝国解放戦線》幹部《V》——ヴァルカンは今日、この黒竜関で死ぬ。

少なくとも本人はその気で、ナギトはそれを言い当てた。

ヴァルカンは天井を仰ぐと、またすぐにナギトに向き直った。

「だが《剣鬼》に斃されて終わるのも悪かねえ。どうだ、ここで一戦交えるか？」

「冗談」

「……………はっ。確かに最期に焔を燃え上がらせるんなら、ある程度拮抗した相手じゃねえとな」

「あんたが望むんなら、してやってもいいぜ…介錯」

「それこそ冗談だろ。最期の最後は派手に散りてえのが男つてもんだ。お前とやり合えばそれこそ『戦闘』じゃなくて『介錯』になっちまう」

2人の会話は、軽快だ。互いに思考というフィルターを通していいのか疑問さえ覚えられない。

「んで、そろそろ本題に入れや『剣鬼』。どうしてここに来た？ 表の親子喧嘩で黒竜関の守りはいつもより薄い。お前さんなら1人でも落とせちまうかもな。…そういうわけじゃなさそうだが」

「まあ…あんたに聞きたい事があってね。リヴアルの事だ」

「リヴアルか…パンタグリユエルじゃ仲良さげだったが。何が知りてえ？」

「過去。リヴァルが《帝国解放戦線》に入った理由。友人として、知っておきたい」

「は。友人か……そりゃいいが。俺も詳しくは知らねえぞ」

ナギトが黒竜関に潜入したのはヴァルカンに合ってリヴァルの過去について知るためだった。どこかおかしい友人の、そうなったであろう理由をナギトは求めていた。

そしてナギトの求めるままにヴァルカンは語った。

《帝国解放戦線》に加入するメンバーは、程度の差こそあれ、誰もが《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンに憎しみを抱く者だ。

「クロウは故国を併呑され、スカールレットは故郷を鉄道線路に潰された。ギデオンの旦那はデイストピアに向かう帝国を憂い、俺は猟兵団を殲滅された。リヴァルは——真実を奪われた」

「真実を……奪われた……？」

「ああ。元は貴族らしくてな……どうやら領内で起きた異変について調べていた両親が

殺されたらしい」

リヴァルが元は貴族。これにナギトは衝撃を受けはしたが、同時に納得もした。ア
ルヴァンス」というリヴァルの家名はどこか貴族らしい風雅を感じていたからだ。

「領内で起きた異変……」

「詳細は知らねえ。だが確か……南部とか言ってたな」

帝国南部の領地で起きた異変。それを調べていた両親が殺された事でリヴァルは《帝
国解放戦線》に身を投じたらしい。

「……《鉄血》の野郎にやられたって意味合いじゃ、リヴァルは俺と同じで最古参らしい
ぜ。……当時まだ年端もいかねえガキが、復讐を決意するなんざ……やっぱ碌でもねえ
世の中だぜ」

「相当前の事なのか？」

「俺が団を潰された時期と被るってんなら、野郎が宰相に就任したあたり……百日戦役が終結した頃合いか」

百日戦役——エレボニア帝国とリベール王国の間で起きた戦争だ。戦力で勝る帝国が優位に戦局を進めていたが、王国の大佐カシウス・ブライトの作戦により各地を奪還され、ついには停戦した戦。1192年の出来事だ。

そう考えると、今から12年前にリヴァルは家族を失い、オズボーンに復讐を誓った事になる。

ヴァルカンの言う通り、リヴァルはナギトとそう変わらない年齢であろうから、当時はまだ子供だった事がわかる。

ナギトの思考が完結したのを見てとったのか、ヴァルカンは「俺が知ってるのはこんなもんだ」と話を締め括った。そして。

「あんたも、もう出てきてもらって構わねえぜ」

再び、格納庫の暗がりには声をかける。わずかな沈黙のあと、痩せぎすの男が姿を現した。

「なんや、真面目な話しとつたから隠れてたけど、もうええんか？」

《西風の旅団》連隊長《毘使い》ゼノ。

どうやら隠れていたのは彼だけのようで、めずらしくレオニダスを連れていない。

「こつちの話は終わりだ。そろそろ良い時間みてえだしな」

「俺も構わない。……ところで、どうしてここに？ てつきり西部にでも行つてるかと思つてただけども」

ナギトはここでゼノが黒竜関にいる理由について尋ねた。何故か心底から、それを疑問に——不自然に思う自分があることをナギトは自覚した。

「まあ、なんや。そのヴァルカンが率いとつた獵兵団《アルンガルン》はうちの団長も

認めとつてな。…そんな男が最期に一花咲かせるってんなら、見届けたいのが獵兵って生き物なんや」

「……クロウにでも言われて来たか？…何にせよ、西風の連隊長を勤める程の男に看取つてもらえるなら悪くない最期だぜ」

ヴァルカンはゴライアスに乗り込んだ。巨大に過ぎる質量は、自重を支え切れるのか怪しいものだが、ヴァルカンとしてはそれもまた良しなのであろう。

やがて格納庫からヴァルカンの乗ったゴライアスが立ち去り――、

「――んで、ずっと殺気を飛ばしてるのは何の意図かな？」

ナギトは、ゼノに向き直った。

「そんなん決まつとるやろ」にへら、とゼノが口角を緩める。次の瞬間、得物を抜いた。獵兵が好んで使うブレードライフル――その改造品。

「俺とお前は敵同士――、会ったその場でバトるのが筋つてもんや」

劍呑。そう評すべき雰囲気。最高峰の獵兵が放つ殺氣——闘気が、色をもって周囲に溢れ出した。

「は」

笑う。そしてナギトは太刀を抜いた。

「別にいいんだけどさ。やめといた方が身のためだよ？」

挑発。直後、闘気を解放する。身体から漏れ出る闘気はゼノに倍し、身体に漲る闘気はさらにその倍以上だ。

ごくりと生唾を飲んだゼノに、ナギトは挑発を繰り返す。

「だってあんた、俺と相性悪いし」

ゼノはブレードライフルを構えると、ナギトに呐喊した。

「そんなん戦ってみてわかる事や！」

戦闘開始。

ナギトへ突っ込んだはずのゼノは急にブレーキをかけ、罨を投げた。それをブレードライフルで撃ち抜き、爆発を目眩しとする——前に。

「大龍炎撃」

ナギトの太刀から放たれた大規模の龍炎が、ゼノの投げた罨を喰らい爆ぜる。

「ぐっ！」

爆発を目眩しにするつもりが、逆に利用された。ゼノは瞬時に理解し、ナギトの次のアクションを読む。

爆炎を裂いて迫る斬撃。緋空斬をブレードライフルで打ち消し、次いで迫るナギト自身への攻撃を受け止めた。

鏢迫り合い。拮抗はしない。肉体に込められた闘気の総量がゼノとナギトでは段違い。瞬く間に力負けしたゼノは吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたゼノが体勢を立て直すより早く、ナギトはゼノに追いついて、その頭部を床に叩きつけ押さえ込んだ。

「虚空装填…：幻造」

ゼノの意識が暗転した一瞬。宙に複数の剣が形造られた。ナギトの闘気を固めて造り出された偽物の刃だが、その機能は本物以上だ。

宙に浮いていた剣が射出されるようにしてゼノの五体を床に縫い付けた。

ゼノの口から漏れるのは痛みによる苦悶だ。それをもって戦闘は終了した。

「ほら、言った通り」

したり顔でナギトは言う。一拍おいてゼノに突き刺さっていた剣が霧散した。

「あんたの畏は俺の火力で押し潰される。あんたのスピードじゃ俺は上回れない。技も然り。……相性悪いでしょ？」

ゼノは呻きつつ立ち上がると「腹立つわ」と言った。

「急所もわざと外したみたいやし……手抜きが過ぎるわ」

「そりやお互い様」

ナギトが幻造で形造った剣はゼノの身体を薄皮一枚裂くに留まった。そしてナギトもゼノが本気でなかったからそう出来たのだと言外に伝える。

「ま、ここは俺の負けやな。あんま時間もないし、そろそろ行こか」

ゼノはブレードライフルをしまうと、昇降機に向かう。先の約束——ヴァルカンの最期を見届けるという約束を果たすために。

ナギトもそれに追従する。ゼノは追ってくる若き男に戦慄せずにはいられなかった。

相性が悪い……なんて話じゃない。

ナギト・シユバルツァーに勝つためには、彼の馬鹿みたいな闘気の総量・出力に支えられたパワーとスピードを上回らなければいけない。それが無理なら卓越した八葉の技術を手玉に取らなければいけない。

パワー、スピード、テクニク……これらの要素がすべて高水準にあるのがナギト・シユバルツァーという男だった。

それは単に相性とかいう話ではなく、純然たる強さの話だ。

内戦が始まったあの日から、徐々に記憶を取り戻していき、それに伴い実力も《剣鬼》の当時に近づいたと本人は語ったが、それは今も、加速度的に、取り戻しているのではないだろうか。《剣鬼》当時の——否、それを上回る剣聖としての力を。

ゼノは顔をしかめた。背後の男の実力が、自分が最強だと、最高だと信じる男に勝るとも劣らぬかもしれないと想像してしまったからだった。



「……そういや、いつからアイツらと通じてたんや？」

昇降機が黒竜関の上部までにナギトラを運ぶ合間の時間に、ゼノが問いかける。

「？」

ナギトは数瞬考えたが、意味がわからず首を傾げた。

「覚えとらんか？ パンタグリユエルで話したやろ…ガレリア要塞でお前が《灰の騎神》と戦った後」

「ああ、はいはい。俺とリヴァルとアンタとレオニダスの4人で話したやつすね」

ゼノは「せや」と肯定する。

「あん時言うとしたよな……英雄に成り果てた俺と、ひと月眠りこけてたりイン……つてな」

ゼノの言葉に唸りながら「言ったかな？ 言った気がするな……」と記憶を掘り返してみる。

「なんでリイン・シユバルツァーがひと月眠りこけてたって知ってたんや？……そりやお前がⅦ組の連中と連絡とってたからやないんか」

「……おお、マジか……マジだな」

「騎神には起動者を癒す機能があるつてのはクロウに聞いてな」とゼノは語る。ナギトはそれを聞きながら若干の戦慄を覚えていた。

まさか自分がそんな“犯人しか知らない事を失言した”みたいな展開に陥るとは。

というかそれ以上に、何故自分が“リインがひと月眠りこけてた”事実を知っていたのか。もちろんⅦ組のやつらとは連絡なんてとってはいなかった。

「リヴアルに聞いてみても、ナギトが仲間と通じてた素振りなんてなかったって言うてたし……そこだけ疑問なんや」

ナギトは仲間と連絡を取っていないかった。監視役であつたリヴアルはそう証言する。しかし事実ナギトはリンが「ひと月眠りこけてた」と知っていた。それは確かに奇妙だ。

ゼノはナギトに答えを求める。もはやそれは単なる答え合わせでしかない。ナギトが貴族連合を離反した今、それは意味のない確認だった。

しかしナギトにとっては非常に重大な意味がもたらされた。

「『ナギト』は知らなかったよ。でも『俺』は知ってた——いや『俺たち』か。たぶんそれだけ」

ナギトの回答に今度はゼノが首を傾げる。しかしゼノは疑問を引つ込めた。すでに終わつた問題だったからだ。

これが、この事実が重要なのは今やナギトにとってだけなのだから。

やがて昇降機が屋上に到達した。眼下……黒竜関の前ではリインの《灰の騎神》とヴァルカンのゴライアスが戦っている。

アンゼリカとログナー侯爵の親子喧嘩はアンゼリカに軍配が上がり、そこにヴァルカ
ンが横槍を入れたのだろう。

「……………」

そんな『確信』にナギトは目を瞑り、理解を納得に深化させる。

「——やはり、俺は」

いつだったか、リインも言及していたではないか。

——「ナギトっておかしな性格だよな」

——「実は多重人格だったりしないか？」

ナギトはかぶりを振って思考を追い払う。

今はそれよりもⅦ組全員で内戦を乗り越える事が先決だ。自分の正体など、後回しにして。

それが逃避である事はナギト自身理解しつつ――。

リインとヴァルカンの戦いに決着がついた。勝ったのはリインだった。ヴァルカン――ゴライアスは巨体を動かす負荷に耐えきれず爆散した。

「派手な散り様や……」

「……どデカい花火だな」

それにゼノとナギトはそれぞれ感想を口にする。

そしてどちらともなく別れの言葉を交わし、別離した。

ナギトはそのあとⅦ組：《第三の風》、カレイジャスに合流した。

その後、アンゼリカとログナー侯によつて戦後処理が行われ、黒竜関は一触即発の状況から脱した。？ログナー侯は一騎討ちでの敗北を受け止め、アルフィン皇女に誓う形

で、*“貴族連合からの脱退”*、*“内戦への不干渉”*を宣言した。

ラインフォルト社にはイリーナ会長が復帰し、貴族連合の支配によって混乱していた各地のグループを再び統括、コントロールしていく事になった。

そして、カレイジヤスは解放されたルールに降り立ち、ラインフォルト社の協力を受けてカレイジヤスは整備を受ける事になった。

続く言葉は、終わったあとで。

《第三の風》に合流したナギトを待っていたのは仲間たちからの詰問だった。

ルーレ空港でカレイジャスを降りるなりⅦ組の者たちに連行されて空港の端にある談話スペースに着席させられた。

対面に座ったリインは真剣な、慎重な面持ちで問いかける。

「誤魔化さないで答えてほしい。ヴァルカンから聞いた……ナギト、君が《閃嵐の騎士》だと。これは……本当か？」

……どうやらヴァルカンの野郎が死に際に爆弾を投下していったらしい。

さて、どう伝えたものか……とナギトはしばし瞑目する。事情を知っているユーシスをちらりと見るが、深く息を吐くだけで助け舟は出してくれないようだ。

そんなナギトの沈黙は肯定を思わせたが、Ⅶ組の面子はあえて言葉を待つ。

——《閃嵐の騎士》とは、貴族連合の英雄だ。

現在、トワ・ハーシエルが代理艦長を務めるカレイジヤスは第三の風——つまり第三勢力を嘯いているわけだが、その実態は正規軍寄りであると言える。正規軍と協力して双龍橋を陥落させ、先程はログナー侯爵家を貴族連合から離脱させた。？これらの行いは正規軍によつた行動だ。では、なぜカレイジヤスは正規軍よりの行動をとるのか？それに対する解は貴族連合を悪だと認識しているからである。

？貴族連合はテロリスト《帝国解放戦線》を運用し、宰相の殺害を決行した。その後、機甲兵部隊で帝都を武力で支配下に置いた挙句、皇族を軟禁した。まさに国賊と呼ぶに値する行いである。

その国賊の英雄こそが《閃嵐の騎士》——ナギト・シユバルツァーである。

そんな事実を、ナギト自身に否定してほしかった。その態度が、雰囲気肯定を示していたとしても。

「——本当の事だよ。俺は貴族連合にいた頃、《閃嵐の騎士》と呼ばれていた」

しかし、ナギトはVII組のそんな期待を裏切る。事実を語る事が救いになるわけではない。しかし嘘で誤魔化しても救われない。

「どういう……ことなんだ。説明してくれ……！」

「そうよ……私たちには聞く権利があるわ……！」

リインの沈鬱な声にアリサが続く。

「俺たちはナギトと共にこれからも歩んで行きたい。だから、頼む」

穏やかな声音にしかし、確固たる意志が宿る。ガイウスの言葉は最早、VII組の総意だった。

こいつらは、いったいどんな展開を期待しているのだろう。思考の端で、ふとそんな考えがはじけた。

“やむにやまれぬ事情があつて”、 “どうしようもない事柄で”、 “仕方なく”、 ナギトが英雄——虐殺者を演じていたと、そう言つて欲しいのだろうか。

——思い出す。戦乱の記憶。閃嵐の記録。

確かに、貴族連合のスパイとして活動するためには信頼を得る必要があった。信頼を得るには活躍するしかなかった。活躍するには暴力しかなかった。

それは確かに、仕方ない。クソ食らえ

《閃嵐の騎士》として振る舞う事に、享楽を覚えなかったと言えば嘘になる。ナギトの裡に巣くう凡人性が名声に酔いしれてなかったと言えば嘘になる。

あの日々は暗黒ではなかった。それが結論だ。

前と同じようにクロウと笑い、リヴァルと友情を育み。ヴァルカンやスカーレット、ルーファスやヴィータ、アルティナ、ゼノとレオニダス、ブルブラン、デユバリイ、マクバーン、アリアンロード。彼らと話し合った日々は。《剣鬼》としての力を取り戻していった日々は。愉しかったのだ。

事ここに至り、ナギトは話す決意をした。

だが、まだ話す段ではない。話はする。だが、まだだ。

「……そうか。そうだな。それなら隠すわけにもいかないか。だけどアレだ、その前に

時間をくれ」

だから、なんとかして時間を稼ぐしかない。誰かが何かを言いかけたが、機先を制するようにナギトは沈鬱な表情を作って言った。

「——わかってほしい。俺だって、軽々しく話せる内容じゃないんだよ……」

☆★

果たしてナギトの願いは聞き届けられ、その場は解散となった。？カレイジャスに戻った所で話すよう確約させられるが「それでもまだ早いなあ」とコーヒーを買って近場のベンチに腰掛けた。

別に《閃嵐の騎士》についてだけなら語るのに支障はない。しかし、それを語ってしまふとその他の事まで芋づる式に聞き出されそうな気がする。Ⅶ組の連中はなんだかんだ押しが強いから。

「うーむ」とベンチで唸りつつ、どうやって説明を先延ばしにするか思案していたナギトの目の前に二人の人物が現れた。

？「あれ、どうした？」

疑問を口にするナギトに答えたのはラウラだった。

？「私がナギトと話したいと思ったのでな。ラインにここまで付き添ってもらったのだ」

？ラウラ・S・アルゼイド——長い青色の髪を風に揺らす、剛剣の使い手。琥珀色の瞳はやはり、出会った頃と変わらぬ輝きを湛えている。

？「話、か？」

「うむ。ただの話だ。大切なものじゃない。学院にいた頃のように他愛ない話をしたいたいと思ったのだ」

ナギトはその言葉に少しだけ驚く。？他愛ない話。実りのない時間。ラウラはそういったものをあまり好まないと思っていた。？あらゆる物事を自らの糧として取り込むラウラだが、そのラウラが特に意味のない他愛ない話をしたと言ったのだ。

この内戦中という特殊な状況下では尚更だ。

ラウラがベンチに座つたのを見て「じゃあ、俺はここで」と立ち去ろうとするリーンの腕をナギトが掴む。

「まあまあ。お兄ちゃんも一緒に話そうぜ」

こうして三人はベンチに座つて話す事になった。

ナギトを中心に右にリーン、左にラウラが着席し、間違つてもナギトを逃さない構えになっていた。

ラウラがリーンと共にやって来た理由は何となく察していたナギト。自身を《閃嵐の騎士》だと明かしたのだ。人殺しの英雄だと。そんな人物と話そうと思えば恐怖が先立つのもわかる。頼りになる人物を側に置きたいと思うのが人情だろう。

会話が、始まらない。

巻き込まれたリーンはどこか気まずさを感じていた。解放したルーレの町の人々は

どこか晴れやかさすら感じる表情をしているというのに、その解放に一役買った自分たちは未だ圧政下にあるかのような重圧を感じていだ。

ここで口を開くのがⅦ組の重心としての役目——意を決したリインは話題を提供した。

「ナギトが《閃嵐の騎士》だって事は、あのガレリア要塞やバリアハートの街道の時、俺と戦ったのもナギトだって事でいいのか？」

「おう、俺だ。どうだった、正体隠せてたかな？」

「正直、微妙だな。言動とか戦技とか、ナギトらしきがあって……だから俺は、ナギトが《閃嵐の騎士》だったって聞いてむしろ納得さえしてるよ」

確かにリインは当時「ナギトなのか？」とバリアハートの街道で問いかけていた。無論、答える事はしなかったが、内心焦っていたのは言うまでもない。

「そうだ、戦技と言えば最後の——ヴァリマールを撃ち落としたアレはいったい何だっ

「たんだ？」

「アレか……。アレについては私も気になっていた。是非話を聞かせてくれ！」

一度会話を始めればこの通り。剣術に傾倒する3人が集まれば、それに近い談議が始まるのは物の道理だった。さつきまでの雰囲気悪さはどこへやら、年頃の少年少女がするにはやや幼い瞳がナギトに向けられた。

「ありや『超過式』だ」

ナギトは短く言った。説明不足が過ぎるが、そのネーミングにリインのラウラの2人は惹かれる所があったようで、さらに話にのめり込む。

「俺が貴族連合にいた時、ほんの一時だけだったが『鋼の聖女』さんに教えを受ける機会があつてな、その時に教えてもらったのが『超過式』だ」

実際は得物に普段から闘気を注ぎ込んでおくように言われただけで、そこからはナギ

トの発展だが、そこは言うまい。

2人は《鋼の聖女》の名が出た事に驚きつつも、同時に納得している。レグラムでの特別実習の際に対峙した時に味わったアリアンロードの隔絶した実力を思い出していた。

「タネは簡単。非戦闘時から武器に闘気を注ぎ込んでおくだけ。それを有事の際にああして解放する。……そうする事で瞬間的にだが、自己の最大出力を超過した技を出せる」

ナギトはアリアンロードと話した時のようにタンクと蛇口に例えて説明した。

戦闘において非常に重要な要素となる「闘気」。その総量が多ければ継戦能力は高くなり、最大出力が大きければ、技の規模もデカくなる。

ナギトの「超過式」は自身の最大出力に加え、太刀に込めていた闘気を解放する事で、一時的に自身が出せる全力以上のパワーを発揮できるというわけだ。

「扱いが難しいから、解放した闘気を段階的に固めていつてるんだけどねー」

と、軽々しく語るナギト。太刀に込めていた闘気をそのまま刃に流し込めれば話早かったのだが、それをするのは難し過ぎた。故に一度太刀から解放して周囲に拡散しようとする闘気を押し固めて武器とするのだ。

「あの時使ったのは解放した闘気を4つの矢の形に押し固めた『四象絶矢』——まあ、あれで騎神に通じる威力があれば上々かな」

超過式にはさらに上の段階がある。解放した闘気はまず8つに固められ、次に4つとなり、2つとなり、1つになる。解放された闘気の総量は変わらないため相手に与える総ダメージも（全段ヒットすれば）変わらないが、一撃の威力としては四象絶矢は下から2番目だ。

ナギトが教えるがままにラインとラウラはそれぞれの得物に闘気を込めるが、2人もその状態が保持できるのは精々5分だった。

武器がギリギリ壊れない程度の量の闘気を込めつつ、それでいて他の事もしないといけないのだから大変なのだ。戦闘中にはほんの数秒保たせるだけのスクラフトとは話が違う。

「俺は蓋をするイメージだな」とナギトはアドバイスする。

「まあ込めるってより溜めるって感じだから瞬時に闘気を変換できないのが玉に瑕だけど」

“込める”ではなく“溜める”。そんなイメージ付けのおかげでナギトは今や就寝時以外は常時闘気を太刀に閉じ込めているような状態だ。

やはり軽々しいナギトの言葉にリインとラウラは戦慄する。言っている事は何となくわかるが、どうやっているかが全くわからない。共に肩を並べて戦う仲間の、その背のなんと遠き事か。

そんな剣術談議が一段落して。

3人の間に流れる空気は柔らかなものになっていた。ナギトが例え《閃嵐の騎士》であつても、自分たちの知るナギトには変わりないのでリインとラウラは心底から理解した。

談笑の合間。ベンチに座っている3人は風を感じた。どこからか機械の駆動する音が、あるいは釘を打つ音が聞こえた気がした。

黒銀の鋼都ルーレの日常を取り戻したのだという思いが3人の胸中に去来する。

リインはそろそろ本題に入ってもいいのではないかと感じた。いや、そもそも他愛ない話が目的なのだから本題もなにもないのだが。

横目でちらりとナギトの様子を伺う。ころころと表情を変えたナギトは最後に「ナギト」の顔になった。

「俺はな、ラウラに惚れてる」

爆弾、投下。

横顔から多少の予測をしていたリインは飲み物を吹き出さずに済んだが、不意打ちで思いを告げられたラウラはバツと振り向くと口をぱくぱくさせた。

「い、いきなり何を言い出すのだそなたは!？」

動揺にまみれたラウラの言動。顔を真っ赤にした様は何とも愛らしく、ナギトは笑んだ。?

？「はっはっは。そう取り乱すでない。いや悪いな、他愛ない話をしたいってのに、愛の話をしてよ」

「かつかつか」と景気良く笑うナギトを「最悪のセンスだ」とリインは評した。ラウラもうんうんと頷き——、何とか平静を取り戻す。

2人の様子を見計らって、ナギトは言葉が続けた。

？「いや、実際な？どうして俺はラウラに惚れてるのかずっと理由がわからなかった。まあ、そういうのが恋愛感情なんだと思ってたんだが、少しばかり記憶を取り戻して、なんで俺がラウラに惚れてるのかわかったんだよ」

惚れた腫れたは人のさが——説明できないはずのそれを、論理的に解明しようとするナギトにリインは空恐ろしさすら感じたが——

？「俺にとって、ラウラは高嶺の花だったからだ」

“高嶺の花”とは自分には手の届かないものに対して使う言葉だ。美しく魅力的な人や物、あるいは高価なものに対して使う言葉だ。

？「高嶺の花……？ 確かにラウラは子爵家の息女だけど」

？身分だけ見れば男爵家の養子と子爵家の令嬢。平民と貴族ほどの隔たりはない。

？リインの言葉をナギトは遮る。「違う。そういう意味じゃないだよ」と。「まあ、とにかく惚れた理由はな？」と誤魔化すように話を戻した。

「容姿か？もちろんそれもある。性格か？大部分を占めてるさ。だけどな、根っこの部分は違ったんだよ」

？ナギトはそこで一旦、言葉を区切る。？何故リインを呼び止めたのか、その理由は続く言葉の内にあつた。

「『剣』だよ。『剣の道』と言うべきかな」

『剣の道』——それはⅦ組でこの三人だけが歩む道だ。？剣を使うだけならユーシスがいるが、彼は剣を使うだけで剣と共に生きてはいない。？フィーもまた、双銃剣という武装を有するが、あれは戦場で生きるための兵器でしかない。

？故に『剣の道』に生きるのはⅦ組ではこの三人だけなのだ。

？「ラウラの剣はどこまでも真っ直ぐだった」

それはきつとナギトやリインだけでなく、ラウラに関わった人すべてが抱く思いだ。

「百人中百人が正道の剣と呼ぶだろう。だけど、俺の剣は邪道の剣——邪剣だった。歩んでいたのは修羅の道だ。詳細は省くが、俺はかつて《剣鬼》と呼ばれた人殺しだった。《剣鬼》は共和国で100人以上を十日で斬り殺した」

100人以上をたったの十日で斬り殺す。それはもはや悪鬼羅刹の所業だ。

「その剣はまさしく、目的のためなら手段を選ばない修羅の剣だ」

そうだ。当時《剣鬼》は手段を選ばなかった。清濁問わず併せ呑む事こそを信条としていた。

「そんな邪剣を振った俺には、ラウラの正道の剣が眩しく輝いて見えたんだ。記憶はなくても、身体は邪剣を振った過去を覚えている。だから正道の剣を振るうラウラは

手の届かない存在だった」

修羅と墮ち、血に塗れ、ついにはそれすら貫き通せなかつた弱い自分。それに対してラウラは真つ直ぐ過ぎた。

その生き様は輝く星のようで。目を背けさせない煌めきを宿していて。

「高嶺の花つてのはそういう意味だよ」

ナギトの言葉に、空恐ろしさを見出したリンだったが、続く言葉は惚気のように思えた。

「だから、惚れた。だから、憧れた。正道を歩む剣に、それを振るうラウラの 剣生の道方に」

？穏やかな表情で、静かに語ったナギト。？その独白には口を挟む事が許されない雰囲気があった。その想いがどれだけのものなのか、二人は理解した。

？「すまぬ。今の私はそなたの想いに対して返せるだけの言葉を持たぬ」

だが、その想いに応えるだけの言葉をラウラは持っていなかった。

その返事にナギトは瞑目し「そうか」と納得した表情を見せる。

「ま、全部が終わったら……って話だったしな」

？二人に聞こえるか否かくらいの音量でナギトは呟く。それは、今や輝かしき思い出の象徴。士官学院祭での約束だった。

——「全部終わったなら、俺の方から正式に言わせてほしい」

その全部というのは、学院祭でのステージが成功したら……という意味だったのだが、学院祭から矢継ぎ早でトラブルが起こり、**全部**が終わるのが遠くなってしまうた。

これでは「付き合ってくれ」と言うのがいつになる事やら。？告白するのが全部終わった後なら、その返事も自然と全部が終わった後だ。

だから、今はその言葉だけで満足する事にした。

一瞬の後にナギトは立ち上がり、二人を見る。

？「すまんな、こんな話をして。もう話すつて雰囲気でもなくなったし、俺、カレイジャスに戻つとくわ」

？軽い愛想笑いを見せて、ナギトはカレイジャスが停泊してあるルーレの空港に向かう。

？真実が露見するまで、時間は僅かしか残されていない。

巧言令色多し仁

ルーレで補給を終えてカレイジャスに戻ったⅦ組は、ナギトに話の続きを要求した。さすがのナギトもⅦ組総員に詰め寄られては苦笑いで受け入れる他なく、15時にブリーフィングルームでこれまでの事実を詳らかにするように約束させられた。

「それでもまだ早いんだよなあ……」

正直な話、《閃嵐の騎士》についてだけなら説明するのも吝かではない。あれはあくまで軍人としてのつとめを果たしただけ。士官学生であるⅦ組の連中ならば受け入れる下地はあるだろう。

しかし、問題はその後だ。今、ナギトがやっている悪巧みにまで言及されるとまずい。今のⅦ組メンバーは、内戦が始まる以前よりずっと鋭くなっている。感性が冴え渡っている。ナギトの企みまで暴かれてはおしまいだ。

なので、何とか件の説明会を先延ばしにしようと勘案しつつ歩いていると、捜し人―

—もとい、捜し猫を発見した。

「セリーヌ」

「なによ」と振り返る黒毛の艶猫。人語を解するこの猫は魔女の末裔であるエマの使い魔にしてお目付役。猫の姿をした「魔」…というのがおそらく最も正しい表現なのだろう。

「ちよつと、いいか」

そんなセリーヌに頼み事をするナギトだった。

☆★

「——それが逆に致命傷になった……さあ、そろそろ潮時だぜ。正体を現せ！《変態紳士》ブルブラン！」

? ナギトがそう言ってマキアスに人差し指を突きつけた。それは、推理小説にある「犯

人はお前だ！」と問い詰める探偵役のようだった。？

と、こんな茶番が行われているのには理由があった。

15時、《閃嵐の騎士》についてナギトから聞き出すためにカレイジャスのブリーフィングルームに集まったⅦ組に《怪盗B》——ブルブランからの挑戦状が届いたのだ。挑戦状曰く、すでにブルブランはⅦ組の誰かに変装しているから、それを見破ってみせろ、と。

そういう事で、実力的に最も入れ替わりがありえないであろうナギトが探偵役に推薦され、それを務め上げたわけだ。

突きつけられたマキアスは高笑いを始める。

「フ、フフフフハハハハハハハハハハ！良くこの謎を解き明かした。《剣鬼》……君がいるために、本来考えていたものより少しばかり難易度を上げておいたのだが——、ものともせぬか！さすがだ、ナギト・シユバルツァー。だが一つ訂正しておこう！私は《怪盗紳士》であり、断じて《変態紳士》ではない！」

？高笑いする彼は姿をマキアスからブルブランへと変貌させる。どこからか花びらが

舞い散る様は、優雅ではなく珍妙。奇術師か、あるいは道化師か。どこことなくナギトと同じ人種くさい。

「うるせえ！つーかマジいいタイミングでしたありがとうございます！」

「なぜ礼を言われているかは知らないが、素直に受け取っておくとしよう！ではⅦ組の諸君、さらばだ！」

ブルブランはそう言うと、より一層花びらを舞い散らせて消失した。ナギトが彼の正体を見破ってから一分に満たない間の出来事であった。

座ったままのラインたちには、まさしく嵐のように感じられたのだろう。舞台でも見ているような表情をしていた。

？その後、マキアスが男子トイレから発見され、ナギトの《閃嵐の騎士》についての席が再び設けられた。

「ひとつ問おう」

探偵役をやった時と同じ上座で、ナギトは厳かに口を開く。

それはナギトらしくない神妙さで、それゆえに本気度も推し量れる。あるいはそうした演技かもしれないと、Ⅶ組メンバーは理解していた。

それも、ナギト・シュバルツァーという男の千変万化する性格、態度、対応のせいだ。

「お前たちは」

しかし。

「俺の」

そんなⅦ組メンバーの慧眼を。

「《閃嵐の騎士》の」

覆って、盲目にさせるだけの雰囲気をつくる事ができるのも、ナギトがこれまで培っ

た技能であつた。

「眞実を、知りたいか？」

《閃嵐の騎士》の眞実。それはつまり、貴族連合に潜入していた時のナギトの行いについてだ。

帝国時報を遡れば、その活躍ぶりがわかる。貴族連合の新兵器、機甲兵の最新鋭機体を駆る英雄。

戦場での英雄とは即ち——虐殺者を指す。

そんな惨憺たる眞実を、本人の言葉で伝えられる。実感として、Ⅶ組メンバーに刻まれる。

そうなつたらきつと、これまでクラスメイトだったナギトを見る目が変わる。これまで通りの関係じゃいられなくなる。

そんな恐怖は皆にあつた。それでも、そんな妄想は振り払ってナギトの眞実を掴みたいとⅦ組メンバーは今こうして集っているのだ。

「なによ、ここまで来て先延ばしにする気かしら？」

皆の意見を代弁したのはアリサだった。気の強さが表れた赤い瞳でナギトを貫く。なんだかんだでナギトとアリサは相性が良く、互いの口を滑らせる事ができる関係にあつた。

しかしそんな関係性も、本気になったナギトには通用しない。

「……ああ、そうだ。先延ばしにする。その方がきつと、俺たち全員のためになる」

これはナギトの本心だった。曝け出されたそれに、向けられたアリサ——Ⅶ組メンバーは眉根を寄せる。既視感を覚えていた。

「そうだよな。ブルブランの登場に、真実を知る事の意味。……思い出すよな、ユミルに湯治に行った時のこと」

そうだ、と得心するⅦ組メンバー。皇族の招待でユミルに湯治に行った際、季節外れの大雪に見舞われた一行は、その原因を突き止め解消した際にブルブランと邂逅してい

た。

その時、ブルブランとリインの間で起きた問答に「真実を知る事と真実を得る事は同じではない」という結論があつた。

「リインは言った……真実を知る事と、真実を得る事は同じじゃないと。俺がここで《閃嵐の騎士》についての事実を語つたとしても、それはきつと俺の真実を押し付けるだけになつてしまうだろう」

「真実の押し付け、か……」

マキアスは考え込むように呟いて、眼鏡のクイと持ち上げる。

「事実と真実……ナギト、そなたはここにどのような違いを見出しているのだ？」

そこに、ナギトの言葉を読み解いたラウラが質問をぶつけた。

「事実とは発生した事。そして真実とは——解釈だ」

真実とは解釈である。起こった事象に対して、自己がどういった感想を抱くのか。ナギトはそう語る。あの時のリインの言葉とも矛盾しない説明だった。

「だから、俺はここで語りたくない。俺の《閃嵐の騎士》の真実を伝えても、それは俺の主観だ。お前たちが自ら調べ、手にするはずだった真実とは乖離すると思う」

「それはもはや洗脳と言えるのかも」とナギトは締め括る。以上がナギトが《閃嵐の騎士》について話したくない理由だった。もちろん嘘だが。

しかしナギトの顔は真剣そのもので、そんな見せかけの誠意に誑かされたVII組メンバーは、この会議を延期する事にした。

「だが、その前に……だ」

と、解散する前にリインが立ち上がり帝国時報をテーブルに置いた。

「ん、忘れるところだった」

フィーは軽々しくそう言い、他の皆もまだ議題があつた事を再確認する。おそらくナギトを除く全員に共有されているものなのだろう。

「これは最新の帝国時報だ。大きな見出しとしてはログナー侯爵の貴族連合からの脱退があるが、他にも『《閃嵐の騎士》活躍！』という見出しもある。……これについてはどう説明するつもりだ、ナギト」

ラインから差し出された帝国時報を受け取り、文面に視線を向けた。そこには確かに《閃嵐の騎士》が西部戦線で活躍したとの文字が踊っている。

「まさかとは思うが――、たびたびカレイジャスを降りては貴族連合に合流し、《閃嵐の騎士》として活動しているわけではあるまいな……?」

ナギトは《閃嵐の騎士》であり、《閃嵐の騎士》は未だ貴族連合の英雄であり続けている。る。

そうなれば、ナギトがまだ貴族連合と繋がっていると推理するのも頷けるといふもの

だ。

「違うよ」

ナギトに疑いの目を向ける——そんな嫌な役目を買って出たユースに正面きつて否定する。

「俺はⅦ組を裏切らない。詳しくは、さっきの事に抵触しそうだから言わないけど、その《閃嵐の騎士》は俺じゃない」

きつとこの《閃嵐の騎士》はリヴァルだ。機甲兵プロトタイプ——オルディーネ・イミテーションには多くの予備パーツがあった。おそらくそれで新しい《閃嵐の騎士》を組み上げたのだろう。

やはり誠意らしきものを感じさせるナギトにはⅦ組メンバーも「信じる」と言葉にする。

「ありがとう。そして——」

そして、ナギトは帝国時報をテーブルに叩きつけて立ち上がる。

「真実を得るための第一歩は示してやろうともさ」

☆★

真実を得るための第一歩として、ナギトが示したのは帝国時報の隅に掲載されている記事だった。

内容は「幻獣による被害」についてだった。

「今この帝国各地で出現している幻獣……まあ特別強い魔獣、魔物と考えてもらえりやいいかな」

魔女の末裔であるエマによれば、霊脈が活性化した事で上位次元からこちらの世界に顕現した存在。

「俺は単独行動中、こいつらについて調べ回ってた」

と、ここでナギトは先も問われたカレイジャス合流後の単独行動時の内容について触れた。

「帝国東部で確認できた個体数は5体。……今の俺たちなら倒せると思う。どうだみんな、やってみないか」

「やってみないか」なんて言いつつ、ナギトはⅦ組の面々が、この提案に乗ってくる事はわかっていた。民間人に被害が出ていると帝国時報は報じている。お人好しのⅦ組メンバーが、これを助けようとしないうけないわけがない。

案の定、Ⅶ組全員が「幻獣を討伐する」で意見を固めた。

それからナギトは単独行動中に得た情報をⅦ組に共有した。幻獣の生息する地点、特徴、戦い方など。

「霊脈のバックアップを受けてるから知らんけど、リジエネ……じゃねーや、常に軽いティアがかかっているみたいなの状態だから、戦略的撤退の後、仕切り直しても相手の体力満タンからスタートだから気をつけて。あと、基本的にやつらは仕掛け——」

あつぶね!とナギトはセリフを飲み込んだ。

基本的に幻獣は、こちらから仕掛けないと敵対しない。つまりは各幻獣の射程距離外からなら先制攻撃が可能である。——そんな説明をしようとして引つ込めた。

幻獣がこちらから仕掛けないと敵対しないなら、幻獣は誰かが刺激したから各地で被害をもたらしている、と誰かが勘づきそうだったからだ。

幸いにしてこの発言は誰にも取り上げられる事はなく、ナギトは次に幻獣同時討伐作戦を提唱した。

「なんで同時に討伐すんのよ。多人数でかかった方が勝率も高いでしょうに」

サラから挙がった疑問は尤もなものだった。幻獣なんていうただでさえ強い敵に、あえて戦力を分散して戦う理由。

「確かではありませんが」とナギトは前置きして答える。

「幻獣たちはおそらく霊脈を通じて繋がってます。一匹倒しても他の幻獣が健在ならそのうち復活してしまう可能性がある」

これはハツタリだ。実際にそういうシステムがあるかないかも知らないナギトだったが、同時討伐の必然性を高めるためには嘘も方便だ。

「なるほどね。…エマ、実際そういう事はありえるのかしら？」

そんなナギトの用意していたかのような返しに、サラはエマに話を振った。エマの魔女としての見識が問われる。

「あまり聞かない話ですが……」

「まあ、そういう事もあるんじゃない？」

そんなエマのセリフを奪ったのはセリース。ナギトのフォローをする形になったのは、先ほどの密会で抱き込んだおかげだろう。ナギトはそつと胸を撫で下ろす。

サラは「ふうん」と疑問を引つ込めた。まだ何かしらの違和感は抱いていそうだ。そこをつつこまないのはナギトの思惑をどこまで見透かしているからか。

その後には特に反対意見もなく、ナギトの「お前たちの成長を見せてくれ」という言葉も後押しして、幻獣同時討伐作戦は可決。実行される事になったのだった。

後の楔

幻獣同時討伐作戦当日。その指揮はナギトが取っていた。発案者であり、作戦従事者の中で最も幻獣に詳しいとされたからだ。

組み分けに従い、各地でカレイジヤスから降りたメンバーは幻獣を遠目に、作戦の開始を今か今かと待っていた。

カレイジヤスを中継として、ナギトはアイゼンガルド連峰から帝国東部各地に散った仲間たちに指示を飛ばす。

「セリーヌ、頼む」

A R C U Sの通信機能でセリーヌに連絡を入れる。先日のお願いはこの日のためであった。セリーヌから完了の知らせが届き、ナギトはラインに通信を試みる。



A班——リイン、アリサ、ガイウスが担当するのはノルド高原は石柱群に現れた幻獣《冥き神獣》ネレゲイドだ。

「全員配置オーケーだ。頼むぞお兄様……作戦開始だ！」

「ああ、任された！」

そしてA班は見事ネレゲイドを討ち取った。

☆★

B班——エマ、ミリアムが担当するのはガレリア要塞跡地に現れた幻獣《爆震の巨獣》ヴォルグリフ。

「全員配置に着いた。エマ、始めてくれ！」

「はい、VII組B班……戦闘を開始します！」

そしてB班もまたヴォルグリフの討伐に成功した。

☆☆

C班——ラウラ、フィー、エリオットが担当する幻獣はルーレの街道に現れた《煉獄の黒狼》アグナガルン。

「準備オーケーだ。やってくれ、ラウラ！」

「——承知！全霊をもって撃破する！」

そしてC班も幻獣アグナガルンを討伐した。

☆☆

D班——サラ、ユーシス、マキアスが担当するのはルナリア自然公園に現れた幻獣《久

遠の聖獣《ヘイズルーン》。

「各員配置に着きました。お願いします、教官！」

「ええ、D班…状況を開始する！」

そしてD班も幻獣ヘイズルーンを討ち倒した。

☆★

E班——ナギトが担当するのはアイゼンガルド連峰に現れた幻獣《堕ちたる狂竜》リンドバウム。

「D班、状況終了。全員無事よ」

「はい。ありがとうございます教官」

ナギトはそう言って通信を終え、ARCCUSを懐にしまう。

A班が終了しB班が終了しC班が終了しD班が終了した。最後はE班、ナギトの番だ。

ナギトが幻獣に単独で挑む事に反対意見を出すメンバーもいたが、「弱い相手選んでるし」、「攻撃のモーション掴んでるし」、「俺強いし」……などなどという意見でゴリ押ししたナギト。

「さて、作戦の総仕上げだ。いくか——」

太刀を抜く。その側には黒衣の偉丈夫が立っていた。

「——クロウ」

黒いコート、光を鈍色に捉える銀髪。そこにいたのはクロウ・アームブラスト——

「なんてな」

——の、作り物だ。

実際に喋ったりはしないが、戦う事はできた。

それもそのはず……この場に在るクロウの偽物はナギトの分け身を“幻造”でこねて作り出したもの。

本物より数段落ちるが、戦闘技能は有していた。そして、バトルが出来るといのがこの作戦における重要なフアクターだ。

まず分け身が幻獣リンドバウムに仕掛ける。それにナギトも続く。リンドバウムの爪牙を掻い潜り、激しい攻防を繰り返している——ように見えるはずだ。

これで、クロウは幻獣討伐に参加した一員であるという事実が生まれた。

「もういいかな」

戦闘を開始して2分もしただろうか。ナギトはそう言うと、太刀を構えて集中した。立ち止まるナギトをリンドバウムは襲おうとするが、それは分け身が阻んだ。

「超過式」

瞬間、ナギトの太刀から莫大な闘気が解き放たれる。

「八卦、」

それは8つの塊になり、

「四象、」

4つに凝縮され、

「両儀、」

2つへと変じ、

「太極」

1つに成った。

そのひとつの塊が太刀に帯びた。

圧縮された闘気は刃と成り、その密度に極光を放つ。

「——太極威刀！」

振り抜く。放つ。劍閃が飛ぶ。

それは幻獣リンドバウムを一刀両断してなお止まらず、空に登り雲を切り裂き——
——、やがて見えなくなつた。

「幻獣相手にこれなら上出来だな」

“太極威刀”は現在ナギトが扱える戦技の中で最も威力の高いものだ。その威力は幻獣を一刀の下に斬り伏せるものなのだから、ナギトも満足するとうものだ。

しかし、闘気を段階的に凝縮、圧縮するにしても全工程を終えるのに10秒強かかる

のは痛い。玉に瑕だ。

ナギトは分け身を消すと、カレイジャスに通信をする。

「E班、幻獣討伐完了。以上をもつて作戦は終了です。お疲れ様でした。つきましてはトワ艦長、回収お願いします」

「それはいいけど、帰ってきたら説明してもらおうからね！」

ARCUS越しに聞こえるトワの声。それは若干の怒りが滲んでいるように感じられて怖い。

ナギトは適当に返事をしてカレイジャスの到着を待った。

「とりあえずこれで、楔は打った。……………あとは本番だけだ」

☆★

カレイジャスに戻ったナギトを待っていたのは、やはりと言うべきか、Ⅶ組メンバー＋aによる詰問であった。

その内容は、幻獣同時討伐作戦が正確に実施されなかった事についてだ。

幻獣の討伐は同時ではなく連続で行われた。

A班が幻獣を討伐したのを確認してB班は幻獣討伐にかかり討伐後、C班に作戦開始の合図がかかり——、といった感じだ。

懸念していた幻獣の復活がなかったから良いようなものの、ナギトが意図してこれをやったのが問題なのだ。

ナギトは幻獣討伐を連続で行うために作戦の指揮を取っていたと思われる。

しかし、更に問題なのはナギトがなぜ「そうした」かだ。部屋の隅に追い込まれたナギトはあっさり吐いた。

「俺も同時が良かったんだよ、本当はね」

「どの口で」と批判の声が挙がる。確かに連絡の順番や討伐にかかった時間で、幻獸討伐完了時刻がずれる事はある。しかし意図的に討伐開始時間をずらす意味がわからなかった。

「セリーヌが、そんなにいっぱい窓は開けないって言うから」

ナギトはあつさりと白状する。しかし、やはりその意味がわからない。

「セリーヌ?」、「窓?」と疑問の声は止まず、皆に迫られて苦笑していたナギトは不気味に口角を歪めた。

「……これもまた、俺の真実に近づくための一歩。あんまり慌てるなよ、すぐに効果は出るはずだ」

「効果」とナギトは言った。それにつつかかる者も数名いたが、そのすべてがいなされてしまう。

「真実を得る」事を隠れ蓑に、ナギトが何かを為したのだという確信が全員に芽生えた。

だが、ナギトを問い詰めるにも未だ材料が足りず、その真相は、その深淵は遠く感じられる。

こうしてナギトの悪巧みは果たされ——、Ⅶ組：第三の風のメンバーとの関係は歪になりつつ、カレイジャスは帝国東部巡回に戻ったのだった。

剣鬼覚醒

《剣鬼》とは、かつてカルバード共和国で1000人斬りを成し遂げた剣客につけられた渾名だ。

今や界限でも風化しつつある名前で、その正体を知っている者も少ない。そして、その由来を知る者も。

ジン・ヴァセツクは、対峙した剣士に静謐と激情を見た。《剣鬼》とは彼がつけた異名だった。

《剣鬼》とは、もちろん鬼のように強い剣士……という意味合いもある。

しかし、ジンが彼をそう呼んだのにはそれ以上の理由があった。

一見すると、無慈悲に人を殺す暗殺者。返り血にすら零度の印象を覚える冷たい瞳。しかしてその剣にはごうごうと燃え盛る激情を感じる。それこそ、鬼を想起するほどの熱量だ。

面白いのは、激情を理性で覆っているわけではなく、炎の上に氷が成り立っている点だ。

そんな摂理を無視した男に、ジンは「鬼」を感じたのだ。

☆★

ナギトは唐突に「ケルディックに降ろしてくれ」と言い出した。それを聞いたリインは当然のようにその理由を聞く。ジト目だ。

「俺が前、黒の史書について知ってるか聞いた事があつただろ？その黒の史書の一部がケルディックの市場に出回ってるらしくてね、それを入手しようかと思つたわけ。ええ、悪巧みも終わった事ですし」

黒の史書と聞いて、リインはそんなワードも聞いた覚えがあつたなあ、と思ひ出す。

「理由はわかつた。でも、なんで俺に頼むんだ？艦長代理のトワ会長に言えばいいのに」
「あー、それな。頼んだけどさ、今の俺ってやつぱり怪しさマックスらしいんだわ。会长つてば口には出さないけどさ。だからまあ、降りる前にⅦ組のやつらに伺いを立てて

からならOKだと」

？「なるほどな。確かに今のナギトは少し得体の知れない不気味さがあるし、正しい判断じゃないかな。会長の事だから義理の面も考えたんじゃないか？」

？「お前、義弟に向かって言いたい放題だな」

ナギトはそう言いつつも、リインの意見に賛成する。確かに自分がかつてにカレイジャスから降りるのはⅦ組のみんなに義理を通してとは言いがたい。

特に今は色々な嫌疑がかかっている状態だ。あまりかつてに動くと、いらぬ疑いを持たれてしまうだろう。

そういうわけでリインがその是非をⅦ組の面々に話に行く流れになった。数十分後にはⅦ組総員の大所帯になって帰ってくる。予想通りの展開だった。

「またカレイジャスから降りたいですって、ナギト？」

例の如く、やはり一番目にナギトに言葉をぶつけたのはアリサだ。

若干、責める口調だったためにナギトは目を逸らして「あ、はい。そうです」と小声で答える。アリサこわい。

ナギトの返事を受け取ってアリサはカツと目を見開き、罵詈雑言が飛び出す……かと思いきや、そのアリサをマキアスが「まあまあ」と宥める。

？「ナギト。君は今、ただでさえ微妙な立場なのに、それでも単独で動く気か？」

マキアスの言う事は正論だ。？だが、それは少し違う。言っている内容は正論なのが、的外れなのだ。マキアスの言葉に誰かが続く前にナギトはその勘違いを正した。

？「いや、俺は別に単独で動くって言ってるわけじゃないんだが」

？そもそも、ナギトが単独で動くというのがこの話題の肝なのだ。？そんな事を言っていないにも関わらず、単独で動くという前提で話が始められたのは、これまで一人で行動していたからだろう。〃ナギトがカレイジャスを降りる時は単独〃というイメージが定着してしまっていたのだ。

？そこから話は疾く詰められた。？単独で動くわけじゃないと言ったナギト。しかしⅦ組に預けられた依頼でまだ片付いてないものがあるために全員で行くわけにはいかない。誰かがついて行くのが良いが、誰が行くか？名乗り出たのはラウラだった。ラウラが共に行動する事で、ナギトはⅦ組との別行動が許された。

こうしてナギトはラウラと共に、ケルデイックへと降り立った。



「うん、まったくわからん」

?ケルディックの大市にて、予想よりはるかに簡単に黒の史書入手したナギト。?早速ページをめくって見ると、中身は古代言語らしきもので埋め尽くされていた。当然読めず、内容もわからず仕舞いだ。

?とりあえずこれはトマス教官にでも解説を依頼しよう。あの人は歴史担当だったし。とナギトは黒の史書を懐にしまった。

?ナギトはちらりと横目でラウラを見て「それで?」と言葉をかける。

?「なんでラウラちゃんは俺の連れ合いに立候補したのかな?もしかして本格的に惚れちゃった!」

?少し興奮気味のナギトにラウラは「いや」と首を横に振る。それに精神的ダメージを受けながらもナギトは平静を装ってラウラの言葉を待つ。

?「そなたが我らに合流してからこれまで、あまり話す機会がなかったと思つてな。こうしてついでにきたわけだ」

?それはナギトも考えていた事だった?自分はカレイジャスと合流したはいいものの、悪巧みの件や今回の黒の史書の入手やらでろくに他のメンバーと話していない。

しかし、それでも自分たちの友情が壊れる事がないと思うのは、おそらく自惚れだ?ただでさえ《閃嵐の騎士》の正体についての疑問から端を発する今の状況では、仲間たちとの日常を大切にすべきなのにそれをしようとしなない。ナギトは自覚していながらも直そうとしない。いろいろな気持ちがあるのだ?。

仲間たちとの日常で再び友情を育めば、自分の真実を知った時でも彼らは自分を受け入れ易くなるだろう。だがそれを考えてやるのは卑怯なのではないか??自分のいない間に仲間たちには何があった?それを聞こうともしないし、自分が何をしていたのかも話さない。これでは仲間たちからの不信感は募るばかりだ?それなのに悪巧みの件が目立った事をしてさらに不信感は増加した。悪巧みが成功した途端に、仲間たちに自分が受け入れられるか不安になってきた?。

ああ、ダメだ。これまでは考えないようにしてきた事が頭の中で飽和する。俺は小物なんだよ、もう勘弁してくれ。いっぱいいっぱいなんだ。もう小さい器には入りきらないほどのものが詰まってる。決壊寸前なんだ。パンクする。

自己嫌悪と不安と心配で頭の中がいっぱいになる。

そんな時だ、可愛らしい女の子が「あの…」ナギトとラウラに話しかけてきた。
? 「なにかな？」

童女と言っても過言ではないほどに幼い女子。ベンチに座っていたナギトに話しかけたのは、見知らぬ——実習の際に会ったかもしれない——少女だった。

? 「お兄ちゃんたち、あの大きな魔獣を倒した人たち？」

——その問いに、ナギトは計画の成功を確信した。? ニヤリと口角が歪む。それをそのまま優しげな笑顔に変化させて、その問いに答えた。

「そうだよ」

大きな魔獣とは、幻獣の事だった。? ナギトに頼まれたセリーヌの魔術により、帝国東部の町々の空には映像が投射され、VII組による幻獣討伐の様子が放映された。? ゆえに、この少女が自分たちが幻獣に立ち向かう勇姿を目撃していても何ら不思議ではないのだ。

? その答えに、少女の笑顔が花開く。? 「すごいー! すごいー!」と騒ぐ少女に、ケルドイツ

クの住民たちは気を寄せ、結果ナギトとラウラの周囲には人だかりができた。？幻獣討伐を称賛される。中には「ありがとう」と礼を言う者もいた。ケルディックは幻獣ヘイズルーンによって被害が出ていたのだ。礼を言われるのも当然と言えよう。？囲まれて称賛を浴びながら「トールズ士官学院の生徒として当然の事をしたまです」と笑顔を見せる。その笑顔の裏に歪んだものを隠しながら。

しばらくして人だかりから解放されてから、ナギトとラウラは風見亭で食事を摂っていた。少し遅めのランチだ。

そこでナギトはラウラに幻獣討伐作戦の種明かしをした。

幻獣討伐作戦ではセリーヌの力を借りて、Ⅶ組の面子が戦う様を放映した事。セリーヌの魔力では五班同時に放映できないため、幻獣討伐は同時ではなく連続で実施した事など。

そうした理由については「秘密」で通す。これもまた《閃嵐ナギの騎士ト》の真実に至るための経路なのだから、という論法だった。

その説明が終わってからの会話の内容は近況報告や面白かった事など、実に他愛のないものになる。ナギトは久しぶりに日常の大切さを思い知り——途端に外が騒がしく

なった。

? ピリついた気配を感じた二人はアイコンタクトをして、同時に店から飛び出した。

? 風見亭の外には、二足歩行の兵器が立っていた。

そして、《剣鬼》が覚醒する。

☆★

その報せを受けて、ラインたちがケルディックに到着した頃には、すでに全てが終わった後だった。

? 「なんだ……これは……」

? 一言で表現するならば、悲惨。

ケルディックの建物は少し煤けている。焼かれたがすぐに鎮火したのだろう。？煤けた建物の横にはコックピットから両断された機甲兵があつた。

コックピットの内部は空っぽで、未だ渴かぬ血の跡が残っている。血溜まりと表現してもいい。明らかに致命傷を受けたと思われる。コックピットに乗りながらにして、だ。そんな機甲兵が、五つ。町に転がっていた。

？カレイジャスに報告が届けられたのはつい先刻だ。それからカレイジャスは全速力で空を駆け、ケルディックに舞い降りた。

報告の内容は二つだ。？一つは、クロイツェン州、オーロックス砦所属の領邦軍がケルディックに焼き討ちを仕掛けた事。？一つは、ケルディックに焼き討ちを仕掛けた分隊戦力が全滅した事。

リインは全滅の言葉の意味を履き違えていた。？軍隊においては約3割の損害で戦闘不能と判断されるケースが多い。戦闘不能、つまり全滅だという認識だ。しかし、今のこのケルディックにおいて全滅とはまさしく、文字通りの意味であつた。

全て残らず滅されている。一個分隊十機甲兵五機が。

血痕は町の出口付近にもあつた。逃げようとしてやられたのだとわかる。

そして、これを誰がやったのかも。すでに理解していた。

ケルディックに入った瞬間から全身に突き刺さる濃密な死の気配。

？死をイメージさせるほどの気が、この場に焼き付いている。

それは覇気というには禍々しく、烈気というには冷ややかで、殺気というには刺々しい。

？それは、鬼気だ。

？死を覚悟させる殺気ではない、死を恐怖させる鬼気。

「なんだかっこ、怖いよ」とエリオットが口にした。エリオットは武芸者ではない。？にも関わらず、この場に残留する鬼気を肌で感じ取ったのだ。それほどまでに濃密に凝縮された鬼気がある。

リンはこの鬼気を感じたことがあった。？あれは、帝都の地下で《帝国解放戦線》に攫われたアルフィンとエリゼを救出した時の事だった。？先に行く背中から発される鬼の気配は、確かに畏怖を覚えるものだった。

ここに残留する鬼気は、あの時以上のものがある。

ここまでくれば、憎悪と言つていいだろうそれから早々と離れ、怪我人が集められて

いるという教会へと向かった。

? リインたちを出迎えたのは、ケルディック大市の元締めであるオットーだった? オットーは挨拶も控えめに、リインたちをナギトの元へと案内した。

本来なら怪我人で溢れかえっているはずだったそこは、軽傷者が少しいるくらいであつた。? その者たちはすべて、部屋の入口近くに陣取っている。奥の方のベッドは空いているのにどうして入口ばかりに集まるのか、その理由は一見して判明した。

? 一番奥のベッドに横たわる、青い髪の少女。? 目を閉じた彼女の手を握る黒髪の少年から漏れ出す鬼気が、近づく事を許さないのだ。

リインがナギトの肩を叩くと、ナギトはよろよろと視線を向けた。

? 「あ………リイン、みんなも」

リインが「どうした? なにがあつた? 」と問うより早く、泣きそうな表情でナギトが告げた。

「ラウラが………ラウラが、撃たれた」

その言葉に、全員が死をイメージした。

それは先程浴びた鬼気のせいだ。？その最悪のイメージをかき消すようにナギトは続ける。

「応急処置はしたんだけど、全然意識は戻らなくて、これ以上の治療はここのシスターにもできないって………」

思い出したかのように、ナギトは立ち上がりエマに縫り付く。

「そうだ、エマ！お前、魔女なんだろう！魔法が使えるんだろ！頼む、ラウラを助けてくれ………！」

？ラウラの治療を懇願する。そんな、これまでのナギトらしさなど微塵も感じさせない様子に驚きながらも、その願いを聞き届けるより早く、エマは治療する事を決めていた。

?? 「頼むう」

涙をぼろぼろとこぼすナギトに「当然です」とエマは微笑みを向ける。

「集中したいので皆さんは外に。エリオットさんは残って絶えず回復アーツをラウラさんにかけ続けてください！」

？エマは素早く指示すると両手を患部に翳す。？治療が始まった。リインたちはナギトを連れて部屋から退散した。

教会から出て、人もまばらな広場のベンチにナギトを座らせる。教会からここまで、引きずられるようにして連れてきたナギトの姿は最後に見た時よりやつれているように思えた。

リインたちは何があったのか、事の顛末をナギトに聞く。ナギトは視線を下に向けたまま、ぼつりぼつりと話し始めた。

☆★

「——機甲兵!?!」

風見亭を出たナギトとラウラを出迎えたのは鋼鉄の人形。機甲兵ドラッケンが5機。とても友好的な雰囲気ではなく、それ以外にも兵士が多数ケルディックに入り込んでいた。領邦軍と猟兵が一分隊ずつ、といった見立てだ。

「これは…、これは——っ！」

何が起こっているのか、瞬時に理解できた。確信が降り注いだ。思い出した。

これは、見せしめだ。貴族連合からのケルディックの解放で喜ぶ住民たちに苛立ったアルバレア公の。貴族連合の支配を拒む者たちへの。

ケルディック焼き討ち。

これはそういう事件である。

ナギトは素早くラウラに指示を飛ばし、役割分担をする。ケルディックは決して大きな町ではないが、それでも2人1組でカバーできる規模ではない。しかしそれでも町民を守りたいならリスクを取ってでも戦力を分散して敵を撃破しなくてはならない。

二人は散開し、それぞれのベストを尽くした。？単独で機甲兵を相手取るのは、《剣

鬼》としての實力を取り戻しつつある今でも難しい。？そのため、ラウラが住民の避難と歩兵の制圧を終えて来るのを待っていた。

———銃声が聞こえた。

ラウラが倒れたのがわかった。？すでに両者は互いが見えない位置で戦っていたのだが、戦術リンクを繋いでいたために動きは把握していたのだ。？ナギトは機甲兵を無視してラウラを撃った兵士を斬った。力が入ったのは倒れているラウラを見たからだろう。

？地面に伏して動かないラウラを抱き上げて回復アーツを施す。名前を読んでも返事はない。いつも手放さなかつた剣が地面に転がったのがやけに記憶に焼き付いた。

？剣を手放した指には力がなく、ナギトは唐突に目の前の少女が永遠に失われてしまうのではないかと思つてしまった。

瞬間。世界が反転した。

目の前が真っ暗になる。胸が張り裂けそうなほどに痛い。いつもは冷静な魂が呪詛を口にする。『殺せ』と。いつもは熱くなる精神の方がブレーキをかける。『冷静になれ』と。

意識が混濁する。

?それは激しい苦痛を内包し、あらゆる葛藤を収束し——そして、

——静かに——激しく——覚醒した。

? 「死ねよ」

？ゆらりと立ち上がったナギトは誰にも聞こえない音量で呟いた。それは「殺すぞ」ではない。？言葉の差異には、誰も気づけない。

暴力的だった。的確だった。？強者の戦い方ではなかった。？殺戮者の戦い方でもなかった。

それは、剣の鬼の戦い方だった。

ただ敵を追い払うだけなら、圧倒的な戦力を見せつけるだけでいい。ただ敵を全滅させるだけなら、兵士を殺すだけでいい。

？だが、生誕した憎悪はそうした所で収まるはずがなかった。

ナギトを追ってきた機甲兵がいつの間にか目の前にいた。

？どうすればいいか、わかった。

努力が、経験が、才能が、感覚が。《剣鬼》が、ナギト・シユバルツアーに追いついた。

一太刀で、機甲兵を両断する。

？コックピットも共に機甲兵の胴体からずり落ちる。その刹那、ずり落ちるコックピットの上から大量の血が流れるのが見えた。？二つに分かれたコックピットの下部には、搭乗していた兵士の下半身が残っていて、そこから血がだくだくと流れている。

？何が起きたのか、理解できなかった。？ありえないと、誰もが思った。幻覚だと。夢だと。

「死ねよ」

指向性マイクがその音を拾ったのだと理解した瞬間に、その兵士は骸と化した。再び、機甲兵を一刀両断した。やはり、コックピットは赤い血で満たされる。

領邦軍兵士たちはやっと理解した。

自分たちは、眠れる鬼を起こしてしまったのだと。

狂乱に飲まれる領邦軍兵士たち。

聞いてない。こんな事になるなんて聞いてない。鉄道憲兵隊のいない間にケルデイツクを焼き討ちして何人が殺すだけの簡単な仕事だったはずだ。それがどうしてこうなってる。仲間が死んだ。共にに訓練した仲間が。今朝話したばかりだったのに。死んだ。

仇討なんて思い浮かびもしない。

? なんで、なんで、なんで、俺がこんな目に。? なんでこんな化物に、殺されなきゃいけないんだ!?

? 「死ねよ」

いち早く状況を理解し、逃げようと動いた者ですらこれだ。

他の者がどうなったのかは、言うまでもない。

言うまでもないが、あえて言うなら。

? 地獄であつた。

? 逃げようとする兵士を捕まえて、背中を刺す。腕を斬り飛ばし、脚を切断し、滅多刺しにしてから放置する。「死ねよ」と言つて《剣鬼》は去る。? それが続く。逃げ遅れた住民の一人がその様子を目撃した。「死ねよ」。兵士は苦しんでから絶命する。

?その時のナギトは、何も考えてはいなかった。

ただ「死ぬよ」という言葉には、ラウラを傷つけたお前たちは、せめて苦しんで死ぬよ」という意味があつた。憎悪があつた。

最後の一人が終わり、ナギトはラウラを再び抱きかかえる。やはり動かない。どうする?俺には治せない。

ナギトは避難所となつた教会にラウラを運ぶ。治療できる医者がいる事を祈つて。

☆★

ナギトの語つた内容は少しばかり要領を得なかつた。語尾に「くみたいだ」「くらしい」とたまに着くのだ。まるで他人事のように。

誰もがショックで記憶が混濁しているのだと理解した。話をしていると大市の元締めオットーが申し訳なさそうな顔で近づいてきた。

「すまないね、ナギトくん。君のおかげで私たちは助かったというのに、私たちは君を避けてしまっている」

? ナギトは鈍い思考を働かせて「それも当然です」と静かに返事をした。

《剣鬼》の所業はすでにケルデイツク中に広まっていた。いくら自分たちを助けてくれたとは言え、狂気的とも言える殺人者には近づきたくない。

? 「当然ではない! 君たちがいなければ死人が出ていたかもしれないのに、私たちは君たちに何もしてやれなかった」

? 後悔しているようなオットーの声音に、ナギトは少し視線を上げた。? 悔恨に満ちた老人の顔があつた。

? 「彼女は必ず助かる。励ます事しかできないが、そう信じるんだ」

? オットーの言葉にナギトは「はい」と返す。? そうだ、ラウラは助かる。助からなきゃいけない。俺はまだラウラと一緒にいたい。笑っていたい。くだらない話をしたい。剣の道について語り合いたい。ラウラと一緒に生きていきたい。

? 「商人は借りを作らない。ケルデイツクは今後、君たちに何があつても全面協力することを約束しよう」

? オットーはそこまで言うと、言うべき事は言ったと判断したのか立ち去っていった。

入れ替わるようにエマとエリオットがやってくる。

？「ラウラの容体は？」

聞きにくいのが、聞かなければならない事。？それを聞いたのはⅦ組のリーダー格であるリインだった。

？「命に別状はありません。銃弾は貫通していて、傷はすでに完治しているのですが……意識が戻りません」

命に別状はないと聞いて安心するⅦ組の全員だが、意識がないと聞いてまた不安な顔に戻る。

？「それは……どうして？」

？確たる答えは得られないだろうと思いつつも、ナギトはそれを問う。

？「詳しくはわかりませんが……体力の低下か、精神そのものの昏睡が考えられます」
？エマの口調からナギトが読み取ったのは、前者が希望的観測であるという事だ。？そして精神そのものの昏睡というのは……ラウラの心が目覚めるのを拒否している。という事なのだろうか。

？沈鬱な表情のまま黙りこくる全員。このままでは埒が明かないという事で、サラの提案でラウラはカレイジャスに移送された。

☆★

蝶の羽ばたきは、荒野で嵐となる。

きつとこれは、そういう話だ。

「……………ごめんな……………ラウラ……………」

ナギトという人格

カレイジャスの医務室、ベッドで横たわるラウラは未だ目を覚ます気配はない。

「…………ラウラ……………」

ぼつり、その手を握るナギトは少女の名前を呼んだ。起きない。起床しない。「寝坊し過ぎだ」と軽口を叩いても、自分の心はちつとも軽くはならなくて、今にも泣いてしまいそうだ。

そんな時、ユーススが医務室に入ってきた。

「…………ナギト、もうすぐに作戦が始まるが…」

「不参加」

と短くナギトは作戦の不参加を表明した。しかしそれはユーシス——他のⅦ組メンバーも承知していて、これは確認に過ぎなかった。

作戦とは、オーロックス砦に立て籠もるアルバレア公爵を捕縛するための作戦だ。ケルディック焼き討ちという暴挙を行ったアルバレア公を貴族連合は見限り、戦力的に孤立したオーロックス砦を急襲するのが本作戦となる。

振り返りもしないナギトに、ユーシスは言葉が喉に詰まる。しかしそれも一瞬で、意を決して低頭した。

「……すまな——」

「お前が謝るなよ」

機先を制するように、ナギトは言った。

「ラウラが怪我したのはお前のせいじゃない。ましてやケルディックの焼き討ちだって……全部ヘルムート・アルバレアの独断だろ。ユーシス・アルバレアが謝る理由も、その必要性もない」

その言葉には有無を言わせぬ迫力があつた。『血縁者だから』という理由で謝罪する事を許さないものが。

きつとナギトは己の怒りの矛先をアルバレア公にのみ向けたいのだ。だから、代わりに謝るなんてされたら、その怒り熱量が分散してしまう。

「だけど」

ナギトは立ち上がって、ユーシスと向き合つた。

その瞳には怒りの炎が煮え滾っている。

「あいつがアルバレア公爵だから…なんて理由で逮捕されなければ、俺があいつを殺す」「いいな」とナギトは疑問符を付けずに言った。それは許可を得るためでもなく、確認のためでもない宣言だ。ユーシスは「確約しよう」と頷く。

もし事後に城館に引き籠もりワインでも飲んでる姿があつたなら、それだけでナギトはきつと容赦のない殺人者になっていた。

ユーシスの返事を受け取ったナギトは、数瞬間視線をぶつけ合うが、「ふっ」と自嘲するようには笑って目を逸らした。

「……なんて言っても、俺にラウラを心配する資格なんかないのにな」

ナギトの逸らした目には先程までの怒りはなく、むしろ空虚で埋め尽くされていた。ユーシスには発言の意味が本当にわからず、

「何を言っている？……俺には貴様らの関係性など興味もないが…、少なくとも友人ではあるだろう」

その言葉は「友人なのだから心配する権利はあるだろう」と受け取れる。

「友人……」とナギトはそのワードを呟いていた。友人。確かに、そうだ。ラウラとナギトは友人だ。友人なのだから心配する資格くらいはある。当然の話で、それはとても腑に落ちた。

「ああ……そうだったな。…悪い、変な事言ったな」

「気にするな。貴様が変なのはいつもの事だ」

「お前な」

ナギトとユーシスの軽快なやり取りはそれこそ友人の距離感で、先程の言葉をより良くナギトに実感させる。

「そばにいてやるといい」

「ああ」

苦笑のあと、2人はそうやり取りをして別れる。ユーシスは作戦開始を待つカレイジャスのブリッジに、ナギトは再びラウラの目覚めを待つ。

☆★

外が騒がしくなった。

作戦が開始されたのだろうと理解する。オーロックス砦に待ち受けるのは《神速》と《却炎》だが、今のVII組なら大丈夫だ。この作戦はうまくいく。

そんな「確信」も今や当てにはならない。何故ならラウラが撃たれたから。何故ならオットーが助かったから。何故ならナギトが存在するから。

「こんな事、なかった」

俺の知る限り。俺たちの知る限り。こんな展開はなかった。何百、何千、何万、何億。観測された世界には何一つゆらぎはなく。だから今が異常なのだ。

「——失礼します」

静かに、しかし確かに医務室に足を踏み入れた。ナギトは思考の海から顔を出して、目を剥いた。

「どうして……あなたがここに？ 《鋼の聖女》」

大仰な鎧を身に着けていて尚損なわれぬ気品。優美な印象。しかしてこの場には絶

対にいないはずの女性がそこには立っていた。

《鋼の聖女》アリアンロード。

結社《身喰らう蛇》の幹部であるその女は、今はクロスベルにいるはずだった。

「……………アルゼイドの娘は未だに目を覚ましませんか」

アリアンロードはナギトの質問に答える事なく、ラウラを見やる。そしてベッドで眠るラウラに向けて手を翳した。

「なにを…!？」

そうするアリアンロードに害意は感じないナギトだったが、ナーバスになっているためか声を荒げて制止にかかる。

「…シオン……今、恩を返しましょう」

しかしアリアンロードの表情は慈愛に満ちていてナギトは自ら身を引いてしまう。

翳した手に光が宿り、それはゆっくりとラウラに移っていった。

アリアンロードは手を下ろすとナギトに向き直る。視線はやや厳しいナギトに「気休めですが、いずれ目を覚ますでしょう」と告げた。

鋼、と冠は着いても「聖女」だ。アリアンロードは善なる者なのだろう。それにシオンというのは……とナギトの考察が進む前に、アリアンロードは微かに笑みを浮かべた。

「ようやく瞳に熱が宿ったようですね……ナギト・シユバルツァー」

どこかで似たような事を言われた気がするナギト。その時はむしろ逆の意味合いで「目に温度がない」だった。

「……「特異点」。あなたは今まで自分をこの世界の異物だと認識していたようですね。あくまで他人事だと」

「……そんな、ことは………」

ない、と言い切れるだろうか。

ナギトはⅦ組のみんなが大切に、この世界が楽しくて。

しかしそれは傍観者 / 観測者の視点ではなからうか。俺は「浮かれている」とたびたび言う。それはどうしてか。観測者が当事者になれたからではなからうか。

「しかしそれが崩れた……。アルゼイドの娘——ラウラが倒れたからですか？」

きつとそうだ。あの時叫んだのは、あの瞬間に怒りに狂ったのは間違いなくナギト^俺だった。俺の感情がようやくナギトのそれに追いついた。

瞑目して黙りこくったナギトに肯定を見出したアリアンロードは続けた。

「それで良いでしょう。あなたは間違いなく……ここにいるナギト・シユバルツァーなのですから」

そんな言葉に胸が熱くなるのをナギトは感じた。あまり関係のないアリアンロードだが、ずっとナギトの求めていた答えを導いてくれたようにも思えた。

「……ようやく人間になれた気分です」

人と人の間にあつてこそその人間。

俺は今まで人間じゃなかった。人間ナギトのふりをしていただけ。無自覚に、無遠慮に、無慈悲に。俺という個人を蔑ろにしていただけだった。

だけど、俺はナギトなんだ。

そういう理解と納得があつて。それを誰かに許された。それだけでもう、充分だ。

数呼吸分の間があつた。ナギトは実感を噛み締め、そして思考を切り替えた。

「それで何の用ですか？ まさかラウラの見舞いに来ただけじゃないでしょう」

アリアンロードもまた表情から慈愛を消し去り《鋼》としての役目を果たす。

「ナギト、あなたに少し協力してほしい事案があります」

「…協力？」

鸚鵡返しに聞く。確かにナギトとアリアンロードは馴れ合った間柄ではあるが、あくまで結社は貴族連合側——それを裏切ったナギトは敵であるはずだ。

「そう、協力です。……この窮まりつつある内戦で、とある事象が発生し得るのか……その実験の」

「実験」と呟くナギトの肩にアリアンロードの手が置かれる。何気ない仕草、意識の隙間を突いて、相手に気にさせないそれは超一流の技術で。

「でも俺はここを——」

離れたくない。ラウラの側にいたい。

そんな事を言うつもりはなかったが、本心だ。ナギトの中にアリアンロードは気持ちを含んでくれるだろうという甘い期待——思い込みはあった。

「ええ、そうでしょう。なので多少乱暴な手を使わせてもらいます」

言われて、不穏な雰囲気立ちあがろうとしたナギトは、そこでようやく気づく。

「ッ……！」

立てない。肩に置かれた手で、ナギトを立たせないようにアリアンロードはコントロールしていた。

多少の力を入れればすぐに振り解けるだろうそれにナギトは驚愕した。それを何気なく、ナギトの意識の隙間を縫ってやった事実に対してだ。

アリアンロードを中心に魔法陣が広がり、ナギトが目を剥いた一瞬でそれは発動した。

周囲の景観を切り替える転移。ナギトはいつの間にか見知らぬ場所に来ていた。

「ナギト……！！」

「リイン……」

横を見るとそこにはリインがいた。傍らにはヴァリマールも控えていて、ナギトの背後にはジークフリートもあつて。

「……………」

さらにこの場——遺跡の祭壇の如き台座には騎神よりもさらに大きな機体が鎮座していた。

「さて、まずは手荒な歓迎になった事を謝罪しようかしら」

祭壇の傍でアリアンロードと共にナギトたちを見下ろすのは蒼いドレスに身を包む妖艶な魔女ヴィータ・クロチルダ。結社《身喰らう蛇》使徒第二柱だ。

つまり結社の幹部が2人、この場に揃っている事になる。

「……こんな仄暗い場所にいたいけな青少年を連れ込んで、いったい何をしようってんです?」

ナギトはあえてそう振る舞うが、ヴィータはアリアンロードに視線をやると、彼女が肩を竦めたのを見てくすりと笑う。

ナギトの強がりやが微笑ましいとでも思ったのだろうか、腹立たしい。

「先に伝えた通り……あなたたちには実験に協力してもらいたいのよ」

ヴィータの言葉に、ナギトがアリアンロードと会話中にリインもまた実験の協力を要請されていたものだとは推測できた。

「具体的には……この神機アイオンTYPE α と戦っていただきたいのです」

ヴィータの言葉をアリアンロードが継ぐ。その視線の先には台座の上で沈黙している機体を指していた。

「神機アイオーン……」

「ええ。今、クロスベルで運用されているゴルディアス級の最終型……あちらで特務支援課と戦ったTYPE α と違い、こちらのTYPE α' は《零》の支援がないため超常的な力は振るえませんが」

ラインの呟きに答える形でアリアンロードがアイオーンについて説明を始める。

「その代わり、純粋な戦闘能力ならこちらの α' の方が上よ。騎神相手でも互角以上に戦えるスペックがあるわ」

ガレリア要塞を消滅せしめたのは、奇蹟の力を得たアイオーンTYPE α だ。空間に干渉する権能は恐ろしいものがあつたが、それらの力が搭載される代わりに戦闘能力を向上させたのだとヴィータは語る。

「黙って聞いていればつらつらと……!」

と、そこでリインは視線をきつくしてヴィータとアリアロードを睨みつけた。

「あなたたちの組織がどんな目的で動いてるのかは知らないが、そんな話に乗れるわけがないだろう！ 貴族連合に必要以上に肩入れしているわけでもないし、あなたたち自身が悪辣でない事もわかる……。それでもあなたたちは内戦を引き起こした側だ！ 大勢の人に、帝国に…クロスベルにだってそうだ、加害者が被害者に協力しろだなんて、ふざけるのも大概にしろ！」

リインの意見に「そーだそーだ！」と合いの手を入れるナギト。

「どんな意図があつてナギトまで巻き込んだのか…俺じゃなくちやいけないのか……。そんな事はどうだっていい。俺たちを元の場所へ帰してくれ！」

「そうだ！ 帰らせろ！」と再び声を上げるナギトに、リインが微妙な顔で振り返る。

「あの、こっちは真面目なんだ。ナギト…少し黙つててくれないか？」

小市民らしく同意していたナギトにリインは厳しい言葉を与える。いつもなら引き

下がるナギトだったが「俺だつて言いたい事があらあ！」と名乗りをあげた。

リインを押し退けて前が出る。祭壇に立つ格上2人を見やつて言った。

「こつちにはヴァリマールだつている。『精霊の道』を使えば元の場所に戻る事もできるでしょう。そういう選択肢を残したのはあなた方のせめてもの慈悲とも取れる。しかし：『獅子戦役の再現』とされるこの内戦で、騎神を用いて戦わせるのは何らかの意図が見える気もする。答えてください……この舞台には何の意味があるのか。何の意図があつてこんな事をしているのか」

それはリインとは違い、あくまで対話をする姿勢だ。アリアンロードには先の一件での借りがあつたし、ヴィータには貴族連合にいた時に色々と便宜を凶つてもらつた恩があつた。

「未来のため。帝国のため、世界のためよ」

ナギトの問いにはヴィータが答えた。その答えは抽象的ではあつたが、リインとナギトに思考を強制させるだけの魔力がある。

「あなたも……そうなんじゃないかしら？——特異点ナギト・シユバルツァー」

ヴィータはそこで風向きを変えた。矛先を向けられたのはナギト——特異点という存在だ。

「少し考えてみたの。特異点——それはいったい何なのか」

ナギトが『特異点』と呼ばれる事は知っているリイン。自然と耳を傾けていた。

「あなたのその年齢にそぐわぬ武力、知力、意志力……とても才能なんて言葉だけじゃ足りない『力』——まるでデザインされたみたいじゃない？」

その言葉にナギトはヴィータを睨みつける——否、苦虫を噛んだ表情になる。

「世界で唯一自由な存在……それが特異点なのだとしたら、あなたが戦っているのは運命——」

ヴィータは一旦言葉を切る。渋面を作っているのは聞き手のナギトとリインだ。

「運命と戦うために、あなたは世界に産み落とされた存在。故に、あなたは尋常ならざる力をその身に宿している。もしそうだとしたら——」

ヴィータはナギトに向かって手を伸ばした。

「あなたはむしろ《身喰^こらう蛇^ら》側——私も一緒に戦ってあげられるかもしれないわ」

それは勧誘のように思えた。事実それは勧誘で、その手を取ればナギトは結社の執行者になれるよう。しかし——

「うるさい」

とナギトは切って捨てた。

「それは俺の問題で、俺の使命で、俺たちの願いだ。必要なら力も借りるが、俺のそれはそんな…世界がどうたらという話じゃない」

運命と戦うという点においてヴィータの言葉は正鵠を射ていたが。それにむしろ世界は敵側だ。

「……そう。フラれちゃったみたいね」

ヴィータは差し出した手を引つ込めた。そんな彼女の様子を見てリインが「話は終わったみたいだな」と切り出したが、それをナギトは制した。

「……どういうつもりだ？」

「考えてもみろ。この2人に貸しをつくれるんだぞ」

ヴィータとアリアンロードは協力と言った。だからそれに乗ってやれば貸しがつくはずだ。結社の使徒2人に貸しがつくれるのは大きいと考えたナギト。

「だが……、それにナギト…君だって」

リインはオーロックス砦に先行したメンバーの事を気にしているのだろう。確かに離脱しているナギト、リイン、ラウラはⅦ組でも火力を出せる3トップだが。

「あいつらなら大丈夫だろ。教官だっているし」

幻獣を倒した実績もある。憂慮すべき事態は起こり得ないはずだ。

「それに…まあ……俺だけ仕事しないのも気が引けてたしな」

笑ってみせるナギト。意識不明のラウラの側にいたいがためにオーロックス砦襲撃は不参加を表明した。

今も本当はラウラの手を握っていたいが、そんな我儘を貫く場面でもない。

「……そうか」

そんな強がりも、リインは見抜けなかったふりをする。

「なら決まりだ。……クロチルダさん、その協力要請、受諾します」

続けてリインはヴィータにそう宣言する。ヴィータは微笑んで「よかった」と言った。

☆★

「アイオンTYPE α 、との戦いを開始する前に、場を暖める必要がある」とヴィータは語る。

「場を暖める……?」

それにはナギトとリインも揃って首を傾げ――、

「だから、それもお願ひするわね。お相手はこちら……《鋼の聖女》様がつとめてくださるから」

「!」

続く言葉に緊張した。

場を暖めるのに人同士でも戦う必要があり、その相手がアリアンロード。

特別実習中のローエングリーン城で戦って以来になるが、あの時は軽くあしらわれ、ナギトに至っては死にかけた。

「相手をさせてもらいましょう。……成長を見せてみなさい」

アリアンロードの言葉に圧を感じるナギトとラインの2人。あの時の敗戦の記憶が重くのしかかる。

「その前にひとつ聞かせてください。ここは……精霊窟ですね？」

ラインはアリアンロードとの戦闘が始まる前に聞くべき事を問うた。

精霊窟とは各地に点在し、霊脈が活性化した際に姿を現す霊窟の事だ。ラインはヴァリマールの武器——ゼムリアストーン製の太刀を造るため、帝国東部各地の精霊窟を訪れていたが、この場の雰囲気もそれらに似ているように思えたのだ。

「ええ、よく分かったものね。確かにここは精霊窟……実験をするのにも、それに応じた“場”というものが必要になる。精霊窟はそれにうってつけってわけなのよ」

リインの問いにヴィータもまた窮する事なく答えてみせる。どうやら実習の場にごく選んだのにも理由があつたようだ。

そんな理由にリインは苦い顔をする。リインは点在する精霊窟を巡っている間に奇妙な幻視を見ているのだ。霊脈が活性化している時にしか出現しない事もしかり、精霊窟は普通ではない。

「ナギト……本気でまずい状況になったらヴァリマールを使つて逃げる。かなり危ない儀式が始まるのかもしれない」

リインは危惧を耳打ちし、ナギトは「わかった」と返す。

トン、と祭壇からアリアンロードが飛び降り、着地した。重厚な鎧を着ながら、身軽そのものの振る舞いに、アリアンロードの隔絶した実力を垣間見る。

「では始めましょう」

言つて、烈火の如き鬨気が炸裂した。どこからともなく騎槍を取り出したアリアンロードの、可視化するほど濃密で、在るだけで空気を、大地を揺らがせる圧倒的なオーラ。

それに息を飲んで、2人は笑う。

「——神気合一！」

まずリインが鬼の力を解放した。髪は白銀に染まり、瞳は赤く燃える。

畏怖より好奇心が勝る武者震い。武者者としての一面が高みに手が届くかを試したがっているのだ。

「鬼気解放」

そしてナギトも鬨気を解き放つ。《剣鬼》として名を馳せた、緋色のオーラ。アリアン

ロードと比較し得る闘気総量はすでに世界で有数のもの。

「——真気統一」

それが、集束する。

「ほう」とアリアンロードは息を漏らした。

大気を震わせるほどの闘気のすべてがナギトの内側に閉じ込められた。

溢れ出す闘気。身体に収まらぬほど強大な闘気。可視化するほど濃密なそれを。すべて闘気のロスだと断言するナギトの、絶招。

漏れ出る闘気、拡散するそれを自身の内側に留める暴挙。実現できればこれ以上ない力になるが、その状態を維持するのは難しいなんてものじゃなく。

表情を歪めるナギトは、闘気の集束状態を維持するのに意識を割かれて戦闘なんて段ではなかった。

「……まだ、無理か」

ぼつりとこぼすと、ナギトの内側に閉じ込められていた闘気は、その周囲数リジユほどに拡散された。

「ナギト」と心配して声をかけるリインに、ナギトはにやりと笑ってみせた。

「大丈夫。絶好調だぜ俺は」

そんな強がりを——、強がりでは、ない？

「ナギト、まさか」

「おうよ、感覚は取り戻した」

あつげらかんと言うナギト。

感覚の喪失は長らくナギトを悩ませてきた事象だ。5度目の特別実習で負った大怪我に端を発するナギトの不調は内戦が始まってなお続いていた。

術理の言語化、《剣鬼》の記憶復元、闘気解放など、失った感覚を補うようにナギトは

強くなっていったが、その才能の根幹たる感覚は未だ取り戻せないでいた——はずだった。

それを取り戻したのがいつか。リインはすぐに思い至る。ケルディックの地で、機甲兵の残骸を見てから、あの場に張りつめていた鬼気を感じてから。ナギトはかつての感覚を取り戻していたのだと理解した。

「……頼もしいよ」

己もまた過大な力を持ちながら、それでもなお力不足を体感しているリインに、ナギトは快活に笑んで見せた。

「まっ、言わばこれは復帰戦だ。綺麗に飾りたいわけよ」

ケルディックで領邦軍や猟兵を塵殺したのはあくまで《剣鬼》だと決めたナギト。あの凶気の果てには八葉の精髓はなかった。

「義弟の大舞台……力あ奮ってくれよ、お兄ちゃん！」

「——任された！」

2人は笑みを交換し——駆けた。

戦闘開始。

アリアンロードを挟み込むように駆け出した2人は、一定距離に入ると同じタイミングで、

「疾風！」

二の型疾風を見舞う。2人同時のそれを当然のように見切ったアリアンロードは槍を盾に2つの斬撃を受け止めた。

槍を薙ぎ払い2人を遠ざける。着地と同時にナギトが再び仕掛ける。

「——迅」

迅雷。最短最速の斬撃。しかしそれは先の戦いでアリアンロードに見切られた戦技だ。あの頃より精度は上がっているが、未だ彼女の目をくらませる速度はなく。

「小賢しい」

アリアンロードの槍が飛び込んだナギトを貫く。その一瞬後に、そのナギトは雷鳴となって弾けた。

分け身。雷光が視界を灼く刹那で、リインはタメを終わっていた。

「蒼き焰よ…我が太刀を焦がせ……！」

すでにリインの奥義はナギトの補助なくして2人のコンビクラフト。灰焰の太刀に迫る火力を有している。

放たれる蒼焰の太刀に、アリアンロードも力ある技を振るう。構えた槍を一突きすると共に自身も突き進むシユトルムランツアー。その槍撃でリインは弾き飛ばされた。技の威力も何もかもを無に帰する聖女の戦技。岩壁に背を打ちつけ「がはっ」と苦悶を

漏らすリイン。その様子を確認する余裕もなく。

槍の連撃がナギトを襲う。

「——ッ！」

これは堪らんと跳躍して退いたナギトに、アリアンロードは追撃する。

引き絞った槍を突き出す。それだけで放たれる力の奔流は人間なぞ殺してしま
うだけの熱量が込められている。

「神威残月！」

その闘気の奔流を2つに分ち、回避する。分たれた力の奔流はナギトの背後の岩壁
を崩して消えた。

神威残月、神速の剣閃はアリアンロードの槍でしつかりと防御されている。あわよく
ば、それでダメージをと考えていたが、そんな都合のいい偶然は起きない。

リインがダメージから復帰する。再び2人でアリアンロードと対峙した。

「ふむ……やはり2人とも成長していますね。始めから兜面なしでしたが……これならデュバリイも納得するでしょう」

そう言えばデュバリイは「マスターの素顔を拝見できるのは強者の特権」なんて言っていた。今回は最初から兜面を外していたが、本来なら自らの手で兜面を砕く事で証を立てなければならぬのだろう。

「リイン、5秒稼げ」

言つて、ナギトは太刀の鬨気を解放した。『超過式』だ。そんな要求にリインは「無茶言うな」と文句を言いつつアリアンロードに呐喊していく。

「八卦、四象、」

しかし数合も打ち合わせぬ内にリインは弾き飛ばされ、アリアンロードは槍を天に掲げる。

「両儀、——ッ」

「荒ぶる神の雷よ、我が槍に宿れ」

それは戦場そのものを蹂躪する雷撃を一撃で放つ合図。雷がランスに宿り、それは放たれる。

未だ鬨気の集約は最終段階にまで進んでいなかったナギトだが、これにはもったいつけていられず、押し固められた鬨気は2本の槍となった。

「両儀葬槍——！」

「——グングニル大神雷槍！」

一本のランスとなって放たれる雷撃。受ければ即死、骨まで炭化してしまう。それを打ち消すべくナギトは2本の槍のうち1本を投擲した。

戰場を蹂躪する雷撃を押し固めたアリアンロードの戦技。その彼女に比肩する《劍鬼》の闘気を集約した槍。

一瞬の拮抗で押し負けている事実を見てとったナギトは2本目の槍も投げこんだ。

それでやつと、相殺。ナギトの“両儀葬槍”とアリアンロードの“大神雷槍”……2つの戦技は消滅し、精霊窟全体を震わせた力の名残が完全に消え去る——

「リインっ！」

——より前に、ナギトとリインは動き出している。

名前を呼ぶが早いか、リインは太刀を構えて再び吶喊していた。

すでに互いの最大火力が通じない事は2人の共通認識だった。ならば2人の力をかけ合わせなければ話にならない。

アリアンロードが縦横無尽の槍撃を放つ。闘気を伴ったそれは一撃必倒。アリアンロードの技量で百発百中の絶技だ。

「突っ込め！」

しかしリインはナギトの言葉に背中を押され、臆せず足を止めない。迫る槍撃は全て

「神威残月——！」

神速の斬撃が、後出しで対処している。

槍撃は剣圧の前に霧散し、リインの太刀が届くまであと僅か——

「荒ぶる神の雷よ…：戦場に——」

ランスを掲げたアリアンロードが発動するのは戦場全体を焼き払うアングリアハンマー。

しかしそれを放つより前に視界の端を蠢く影に目がいった。

雷光を引き連れるそれはナギトの分け身。「いつの間に」とアリアンロードは目を細

めるが、込められた闘気が己の防御を破れないと判断すると、再び戦技発動に取り掛かる。

一瞬の後に放たれる雷撃は戦技そのものを蹂躪する——が、吶喊するリインはナギトの分け身が底い被弾していなかった。

「うおおおおッ！」

振り上げたリインの太刀には蒼焰が宿り、

「それは——」

もう見た、と続けられないリアンロード。周囲にうじやうじやと湧いているナギトの分け身のせいだ。目測だけで十数体。そのすべてがリアンロードに殺到して、その闘気防護を焼き剥がした。そして分け身たちは雷に形を変える。

「絶佳臨界突破——」

リインの蒼焰は龍を象り、それはナギトの雷を纏った。
リインの蒼焰の太刀とナギトの雷神烈破の合わせ技。

「——纏の太刀、青龍！」

雷の鎧を纏う蒼焰の龍——すなわち「青龍」。それは振り抜かれ、アリアンロードに直撃した。その勢いは留まる事を知らず、《鋼》の防御を食い破らんとする。

押し負けてアリアンロードは岩壁まで退がるが、ランスを引き絞って放つ一撃、大神雷槍で「青龍」を打ち消した。

アリアンロードは膝を地面につけて呼吸を整える。ナギトとリインもまた肩で息を置いて、これ以上はない。

2人してアリアンロードの動向を見守るが、ややあつてアリアンロードは事もなげに立ち上がった。

「……やりますね。これなら本気を出せると言うもの」

そう言って、聖女のさらなる本領を見せようとしていた。

☆★

セイントアウラ。《鋼の聖女》アリアンロードの絶招。

《銀の騎神》の起動者……不死者として、より強く騎神と結び付いたアリアンロードが、騎神の力を引き出すための絶技だ。それによりアリアンロードは《槍の聖女》と呼ばれた生前以上の力を発揮する。

それこそ、〃人の身では絶対に勝てない事が決まっている〃と言わしめるほどの。

当然だ。その身に騎神の力を宿しているのだから。

その身に纏う闘気。その総身から放たれる烈気は先程と比較してなお膨大、巨大、莫大。清廉にして凄絶。壮麗にして荘厳。

どれだけ形容しても足りない。無限とすら思えるほどの闘気がアリアンロードを中に渦巻いていた。

ごくりと息を飲んだナギト。それは致命的な隙——でもない。いずれそうなる事が、少し早まったただけだ。

アリアンロードが手を翳すと、凄まじい闘気が奔流となつてリインとナギトを包み込んだ。

それはまるで嵐のようで、殺傷力こそないものの、身動きは取れそうにない。

「——耐えてみなさい」

アリアンロードはそれだけ言うと、ランスに嵐の如き闘気の全てを集中させた。

「聖技——」

リインとナギトは闘気の嵐で身動きが取れない中で、アリアンロードのランスに破滅的な力が注ぎ込まれるのを黙って見ているしかない。

一瞬の後に訪れるであろう死。あれを受ければ塵すら残らない。そう確信するだけの力量が2人にあつたのは幸か不幸か。

こうなれば、アレしかない。

ナギトは頭の中で考える。闘気の嵐に阻まれては不可能かもしれないが、聖女のSクラフトに対抗するためには、ローエングリン城でアリアンロードの戦技を打ち消したあの一刀しかない。

脳裏を過ぎる、あの瞬間。頼りたい面々——リヴァル——VII組のみんな——クロウ——
——ラウラ——、考えるな。この場にはいない者たちだ。

ナギトは嵐に動きを阻害されながらも太刀を大上段に構え、アリアンロードは槍を引き絞る。

「グランド——」

聖技グランドクロス——すべてを無に帰す《鋼の聖女》アリアンロードの超抜戦技。

「——そこまでよ」

しかしそれは放たれず、戦闘は終わりを迎えた。

止めたのは誰であろうヴィータ・クロチルダその人だ。杖の石突でカンと床を打ち、煮え滾った戦闘狂たちの熱を冷ます。

「やりすぎよ聖女様。精霊窟を壊すつもりかしら？」

「……少々、興が乗りすぎたようですね。これが礎たらんとする若者の成長ですか」

アリアンロードが笑むとナギトたちを閉じ込めていた闘気の嵐は霧散し、長大なランヌも消え失せていた。

戦闘終了の合図に、ナギトは太刀を手放して崩れ落ちた。

「……………死ぬかと思ったあ……………マあジで…」

絶死の局面から逃れて気が抜けた。尻もちまでついて、口から魂が出ていると言われなくても信じられるほどに、九死一生……………気が抜けるもの仕方ないというものだ。

「これは……………!?!」

リインは周囲を見上げて驚きを露わにしていた。ナギトも確認すると、この精霊窟という空間を闘気が満たしているとでも言うべき状態になっていた。

「ひとまず実験の第一段階は成功……続いて第二段階に移行するわ。ナギトくん、腰を抜かしている暇はないわよ？次はこのアイオンTYPEαと戦ってもらわなくちやいけないんだから」

そんなナギトをヴィータは詰り、リインは「ほら」と手を差し伸べた。その手を取って立ち上がるのと、鎮座していたアイオンが立ち上がるのは同時だった。

「……でけーな」

「ああ、騎神より……さらに」

立ち上がったナギトは太刀を納刀すると、祭壇の上に聳え立ったアイオンを見て感想を述べる。

そのアイオンに手を翳したアリアンロードから白銀のオーラが注ぎ込まれる。

「おいおいおい……」

「これは……ッ」

ナギトとリインは絶句した。笑うしかない、という絶望的な感覚。アイオーンに注がれたアリアンロードの闘気は先程不発だった聖技にも匹敵しよう規模だ。

人の身では蒸発、騎神でも一度受けければ戦闘不能は必至の、読んで字の如く“必殺”だ。

「あくまで一撃で放てば……の話です」

2人の懸念を察してかアリアンロードはフォローを入れる。確かにアイオーンには“聖技”と比肩するだけの闘気が注入されたが、それはあくまでエネルギーの充填に近く、それを一息で放つだけの胆力を機械が有しているとも限らない。おそらく戦闘中はエネルギー波として小出しするやり方になるはずだ。

「私からは……これね」

続いてヴィータが魔杖を掲げる。中空に闇色が渦巻いたかと思うと、アイオーンはそこに手を突っ込んで、魔剣を引き抜いた。アイオーンの大きさに見劣りしないサイズの魔力で編まれた剣。エマのクラフト「イセリアルエッジ」の発展系により形造られたものだろう。漆黒の魔剣が鈍銀の機体に良く映えていた。

「さて、こちらは準備完了よ。リンくん、ナギトくん……騎神の起動者としての全力……見せてちょうだいね」

アイオーンの威容を前に、正直帰りたい気持ちでいっぱいだったが、そんな感情を飲み込んでナギトはジークフリートに乗り込んだ。リンも同じくヴァリマールに搭乗し、機甲兵用ブレードを構える。

「いっちょ気張るかねえ……!」

ジークフリートも機甲兵用太刀を取り出して構える。

「やるぞナギト……！」

ラインの激に「応！」と返事をして。

実験の第二段階——VS神機アイオンTYPEα、戦、開幕。

「まずはっ……！」

ジークフリートの左手に小刀が顕現する。闘気で物質を編む“幻造”。それを投げ放つ。

アイオンは魔剣で小刀を弾いてダメージを回避した。

「反応速度はなかなか。だが」

次の瞬間、魔剣に斬撃が迸る。“衝刀練”——小刀が接触した箇所が遅れて斬撃を発生させる戦技だ。以前は遅れて衝撃が発生するだけだったが、感覚を取り戻したナギトは戦技を進化させていた。

衝撃に魔剣を取りこぼしかけたアイオンにヴァリマールが肉薄する。刹那で叩き

込む二連撃は『閃光斬』。しかしアイオーンは構わず魔剣を振るった。

「——甘い！」

攻撃を仕掛けた直後、最も防御意識の薄れるはずの瞬間にしかし、リインは完璧に対応する。大振りの魔剣を躲すと返礼の『残月』を刻みつけた。

「やるうー！」

これにはナギトも喝采を送る。軽口のようになりながらも、やはり動きは鋭く。たたらを踏んだアイオーンに追撃する。

「けんみょうれん 劍妙劍——！」

振るう太刀でアイオーンの胴体を斬りつける。斬りつけた箇所から斬撃を発生させるこの戦技は『衝刀練』の類似技。

連続で発生する斬撃にアイオーンの装甲がひび割れた。

さらに追撃しようとしたナギトは、アイオーンの翳した左手から白銀の波動が放たれるのを見た。

「うお!? ぶわわわわ」

辛うじて左腕の盾でガードしつつ退がったが。

「聖女の闘気……使って来たか……!」

リインが見立て通り、アイオーンから放たれたエネルギー波はアリアンロードが充填した闘気だった。

アイオーンは魔剣を掲げると、そこに白銀の闘気を帯させた。そして放つ縦一閃の斬撃。白銀のオーラが飛来する斬撃となってナギトとリインを襲う。

左右に分かれる形で斬撃を交わしたジークフリートとヴァリマール。その連携の間をアイオーンは見逃さない。

アイオーンは瞬時に距離を詰めると、ジークフリートに魔剣を振り下ろした。

「ぬっ！」

それは左手の盾で滑らせながら受け、同時に太刀で斬りつけようとするが、それより早くアイオーンの右拳がジークフリートの腹部を打った。

「うげえ！」

反撃を潰されて殴られるままに飛んだジークフリートは岩壁に叩きつけられる。見るとアイオーンの左拳には白銀のオーラが集中していた。

「…学習してる？」

ナギトがそうこぼす間にヴァリマールは攻撃を仕掛けていた。

蒼焔で龍が形作られる。“龍炎撃”を蒼焔でつくっているのだ。それを直接アイオンに叩きつけるヴァリマール。

リンはここで全てを出し切るつもりだ。オーロックス砦を仲間任せると決めた

からには、後でぶっ倒れてもいい、ここで体力全部注ぎ込んで勝ちを取りに行く。なるほどどうして覚悟ガン決まりだ。

ならば兄弟分としてナギトも奮起しないわけにはいかない。

続いてヴァリマールはアイオンと数合打ち合ったが、すぐに力負けして退いた。

「連携するぞ、ナギト！」

「おうさー！」

いや、力負けしたわけではなかった。リインはナギト——ジークフリートが体勢を立て直す時間稼ぎをしていたのだ。

連携しなければアイオンには勝てない。というのはナギトとリインの共通見解のようで、これまで以上に連携を意識する。

アイオンが魔剣に闘気を注ぎ込む。次の瞬間に放たれるのは飛ぶ斬撃だ。それはやはりジークフリートとヴァリマールの間を狙った攻撃で。

「同じ手を……っ！」

「リイン、お前の蒼焔を俺の剣圧に乗せる」

「……わかった。信じるぞナギト」

アイオーン最後の一撃に、こちらと同じく最高の一撃で応える。この儀式に求められているのは、そんな正面きつての闘争だ。

アイオーンは魔剣を掲げ、そこに白銀の闘気のすべてを集約させた。全身を薄く防護していたそれすら注ぎ込んで、最強の一撃を放とうとしている。

対するナギトとリインも力を高めていく。各々武器に自分の持てる限りの、それ以上の闘気を注ぎ込んで。

構えは、同時。

「——オオオオンン!!」

再びの咆哮と共にアイオーンは魔剣を振り抜いた。放たれるエネルギーはアリアンロードの聖技にも劣らぬ。

「——絶佳臨界超越」

しかしナギトとリイン、2人の闘気が融合した新たな戦技もまた互いの臨界点を超越したもので。

「——蒼焰閃花 / 火生三昧！」

振り抜かれた斬撃はX字の斬撃として飛び、アイオーンの一撃とぶつかった。

蒼焰の十字斬撃は白銀の斬撃と比較して規模が小さい。いくらか放出したとは言え、アリアンロードの奥義と同等の闘気が込められた一撃だ。たかだか20年程度しか生きていない若造2人が超えられるものではない。

しかし——

「リインの焰は、あらゆるを燃やす」

未だ本人さえ気づいているかわからない特異性——リインの焰はありとあらゆる

ものを燃やし尽くす。それはマクバーンの焰にも似て。

押し負けていた蒼焰の斬撃が徐々に白銀を焼失させていく。やがて拮抗は崩れて、白銀のエネルギーが消え失せると2人の斬撃はそのままアイオーンを飲み込んだ。

X字の斬撃はアイオーンを直撃して岩壁に叩きつけて消えた。アイオーンTYPE αの躯体は大きくX字に焼き裂かれていて、もうすでに中破以上——戦闘不能だ。

そう見て取ったナギトとリインの2人。一息吐こうとして、

「——ギ、…ギギ……………オオオオオオンンンン!!」

終わったはずのアイオーンが再び立ち上がった。未だ手から離さなかった魔剣をヴァリマールに投げ放ち、そのまま肉薄。右拳の一撃でヴァリマールを吹き飛ばす。

「リインっ!」

「ぐっ、速い!」

岩壁に埋まったヴァリマール——リインだがダメージは大きくはないようで、ほっと安心する暇もなく今度はジークフリートに接近したアイオン。やはりその装甲は大きく斬り裂かれていて、もはや駆動系すら焼け付いているはずなのに、それでも動く神機。

振り下ろされる右拳を、ジークフリートは左腕に装備した盾で受け弾く。それで大きく体勢を崩したアイオンに蹴りを入れて距離を離す。

「お前、ちよつと調子乗りすぎ」

ナギトは言いつつジークフリートを跳躍させる。遺跡内部のため余り飛べないが、背部のユニットを点火して宙空に浮いた。

「大刀錬、衝刀錬、劍妙斂——」

ジークフリートの周囲に三振りの刀が展開したかと思うと、それは太刀に収束した。

「——三明一結」

。ジークフリートはその太刀を振り抜き、放たれた斬撃はアイオーンにヒットし——
次いで“三明一結”接撃面から断続的に生じる無数の斬撃がアイオーンの全身を粉砕する。

V S 神機アイオーンTYPE α, 戦は今度こそ終わりを迎えた。

☆★

その後、ナギトとリインには労いと感謝の言葉が述べられ——そのままオーロックス砦へと転移で帰された。

結局、この実験が何だったのか、成果は得られたのか、そもそもこの精霊窟で行われたものなのかすら教えられず——。

それが、この軌跡にどんな影響を与えるか知れず——。

ラウラ・S・アルゼイド

ラウラ・S・アルゼイドは幼少の頃より剣と共にあつた。

《光の剣匠》ヴィクター・S・アルゼイドを父に持つ彼女が、剣と共に生きる事はすでに運命付けられていたのかもしれない。

良い環境で育つたラウラは、それこそ剣の如き実直な性格になつた。？男手一つで育てられたために、年頃の女子のようにはならなかつた——そのせいで地元的女子にはお姉様呼ばわりされた——ものの、真つ直ぐで一本筋の通つた人柄として領民に愛された。

そして、17歳を迎える年。ラウラは故郷を離れ、帝都近郊のトリスタへ。？トールズ士官学院に入学した彼女は、新入生最強と呼ばれていた。武を学ぶ士官学院では、武力で成績が上下する事がある。？しかし、ラウラはその称号を受け入れる事はなかつた。

特科クラスVII組。？

それがラウラの所属するクラスだ。VII組は平民と貴族の別のない、今年度から試験的に運用されたクラスだ。そのクラスの一人に、ラウラに勝るとも劣らない剣の腕を持つ者がいた。ナギト・シユバルツアーといい、どこか影を帯びたような、それでいて子供のように悪戯つぽく笑い、時に後ろから見守るような。そんな謎めいた人物だ。

VII組に剣士は他にもいた。

？ユーシス・アルバレア。？

ライン・シユバルツアー。？

二人とも素晴らしい剣士ではあるのだが、現時点でラウラを剣のみで圧倒する事はできなさそうだった。？それも当然だ。ラウラの実家であるアルゼイド流が伝わる家系だ。幼い頃からそんな場所であるニア帝国剣術の総本山であるアルゼイド流が伝わる家系だ。幼い頃からそんな場所である剣に打ち込んできたラウラに、同世代の者が比肩する実力を持つ事がむしろ異常なのだ。

？ラウラが、それを間違いと知るにはそれほど時を要さなかった。

真の実力を解放したナギトの剣を前に、ラウラは文字通り何もできなかったのだ。

同世代に、これだけ強い者がいる。？その事實は、ラウラの血を沸かせた。ラウラはそれまでより一層、劍に励むようになる。

——足りない。まだ足りない。まだまだ足りない。

修練により、ラウラはめきめきと頭角を現していく。実技試験では常にトップをひた走り、実戦では他を寄せ付けぬ強さを見せる。？それでも、あの日のナギトには届かない。

？もつと力を。もつと速さを。もつと技術を。

ナギトに近づくために。彼の全力と肩を並べられるように。

ラウラはいっしか気づく——ナギト・シユバルツァーが自らの目標となつている事に。？ラウラは《槍の聖女》と呼ばれる帝国史に残る偉人、リアンヌ・サンドロットを目標としてこれまで劍を磨いてきた。？その目標が、いつの間にかナギトに書き換わつていた。？それがいつなのか、明確にはわからない。？あの夜、ナギトの劍に魅せられて、それに追いつくために必死に劍を振り続けた。

？ナギトの横に並ぶには、まだ力が足りないと思つた。？ナギトと肩を並べて戦うには、まだ速さが足りないと思つた。？ナギトの背中を預かるには、まだ技術が足りないと思つた。

すべては、ナギトと共に戦うためだった。

それを自覚したのは、ナギトと初めて手合わせをした少し前だ。

会話している最中に、ラウラはその事に気づき、同時に自らが抱いている感情にも納得がいった。

？初めは強さだけを見ていた。？ナギト・シユバルツアーという人物をはつきりと見たのは、テロリストを追う帝都地下での事だ。？エリゼとアルフィンを人質に取られてしまい、ナギトは憤怒をあらわにした。？先を走るナギトの背中に鬼のような気迫を感じた。？結局、エリゼとアルフィンは無事に解放され、ナギトの鬼気も収まった。？その時に、これまでのナギトを。これまでナギトと過ごした時間を思い出したのだ。

？時に強く、皆を導き、？時に優しく、皆を支え、？時に厳しく、皆を叱責し、？時に子供っぽく、／ 大人っぽく、笑う。

？ラウラは、自分がこれまで“ナギト”の事を見ていなかった事を知った。自分が見ていたのはナギトの剣の腕だけだ。？それから、ラウラはナギトを観察するようになった。すると、これまで見てきたはずの、しかし新鮮なナギトの顔がわかってきたのだ。

そして、気づく。

自分が、ナギトを好きなのだ。

自覚した途端に顔から火が出るような感覚に襲われた。？ナギトに「目を瞑れ」と言う。

ドクンドクンと、心臓が跳ねる。

目を閉じたナギトの唇と、ラウラの唇が接触しそうになった瞬間。

こんな恥ずかしい事できるかっ！とラウラは心の中で叫んだ。

ラウラは誤魔化すように、人差し指と中指を閉じて指の腹をナギトの唇に押し当てた。

？目を開けるナギトに、自分の感情を伝える。

☆★

“剣の道”とは何か——、剣に対する向き合い方か。剣に生きると決めた志か。ただ剣士を名乗るための方便か。

あるいは——剣と共に在る者からすれば、それは“生き方”と言えるのかもしれない。もしくは“生き様”か。

ナギトはラウラの剣の道（生き方）を“正道の剣”と言った。そうあれかしと育てられ、そうあるべしと自己を律してきた。故にそれは当然の帰結であり——、憧れの人物にそう認められた事は嬉しかった。

しかしナギトは次に己の剣の道を“邪道の剣”と語る。目的のためなら非道を厭わぬ修羅と。理屈を聞けば、なるほど確かに自己評価が間違っているとは思えない。

しかし——しかし、だ。

それはあくまで“自己評価”——自分の目線でしか己を見れていないナギトの悪点だ。

——「私から見た見たナギト・シユバルツァーを語ろう」

かつてラウラはそう言つて語つた。ラウラ・S・アルゼイドという少女の目に映るナ

ギトという人格について。

ナギトの自己評価は正しい。客観的であるとすら言える。確かに百人斬りなんて残酷行為は悪鬼羅刹の所業だ。だがラウラは、そんな修羅たるナギトを知らない。ラウラが知っているナギトはクラスメイトとしての彼だけだ。

ナギトには主観がある、客観がある。しかしラウラやリインをはじめとする友人視点の評価がまったくできていない。

それが何に由来するのは知らないが、だからこそ言つてやりたいのだ。

確かにナギトの剣の道は邪道と呼ぶべきものかもしれない。他人が聞けば顔をしかめる悪行を成したのもそうだろう。しかし、自分から見たナギトの剣生き方の道は――

☆★

？撃たれた事だけは、わかった。

？直後、戦術リンクで繋がったナギトが飛んでくる。？回復アーツをかけてくれたの
だろうか、少しだけ楽になった。

険やけに重かった。ラウラはナギトに礼を言う事もなく、気を失う。

☆★

? 心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚え、ほんの少しだけ覚醒した。

戦術リンクで繋がった彼の姿が目映る。? 彼は怒り狂っているようだった。彼の剣が敵を切り裂く。

そんな彼の姿を見て、ラウラは恐ろしさと同時に嬉しきを感じていた。? 彼がこれまでで憤怒したのは帝都地下以来だ。それが、ラウラが撃たれた事によって発現したものだとしたら。と考えると嬉しい。

彼が、自分のために怒ってくれているのだと思ったのだ。

☆★

? 「ふんぬあ！」

? 気の抜けるような、しかし本人はいたって真面目に剣を振る。

振り抜かれた太刀の威力を計り損ねていたのか、ラウラは威力に押されて転んでしま
う。

? 今は、ラウラ史に刻まれた “誤魔化し接吻事件” の直後だ。? 初めての手合わせの途
中、何十合か打ち合って、ナギトの太刀を受けきれずにラウラは尻もちをついた。

? 「くっ、なかなかやるな……」

ラウラはそのまま空を見上げた。? もうそろそろ、星が光を放つ時間だ。? この心踊
る手合わせも終わりが近い。

? 空を見上げるラウラに、ナギトの手が差し出された。

? 「尻が汚れるんじゃないか?」

? 思えば、勢いよく地面に激突した。? 制服に汚れが付いてなければいいが。

「ほら、いつまで寝てるんだよ」

? ラウラは差し出されたナギトの手を取る。

? 「ああ、今起きるさ」

? ラウラはそうして、力強い手に引つ張られた。

☆★

——「さて、後はあれをどこまで誘導するかだが——と」

——「正義の味方になるために、悪を為す」

——「俺は、クロウを——」



「随分と、遅いお目覚めだな。ラウラ姫」

そう言われて、自分がベッドに寝かせられていた事をラウラは理解した。

？「む……ナギト、か？」

「おうとも。状況はわかるか？」

ラウラはそう言われて、自分が撃たれた事を思い出した。おそらく、撃たれた自分を仲間たちが治療してくれたのだろう。？それでも目覚めないから、こうして医務室で寝かせられていた、と言う事なのだろう。

それをナギトに伝えると短く「正解」と返ってきた。

ふと、手が掴まれている事に気がついた。？ラウラが「これは？」と問うと、ナギト

は恥ずかしげもなく「ラウラを逃さないため」と言う。

そういえば、夢から覚める瞬間、力強く引つ張られたような感覚があった。？ナギトの手に掴まれていたから、自分は目覚められたのかもしれない。なんて考えた。

それに、夢から醒める瞬間に観えた情景、情念は――

ナギトは優しくラウラの名を呼ぶ。

そして、何時間も言いたくて、何時間も言えなかつたセリフを口にした。

「おかえり」

ラウラはぼちくりと目を瞬かせる。？まさか起き抜けに「おかえり」と言われるなんて。？しかし、ナギトの感覚では自分は遠い所に行っていたようなものなのだろうと納得し、しつかりと応える。

「ああ、ただいま」

バリアハート寄港日

ラウラの目覚めは疾くカレイジャス乗艦メンバーに周知された。

人徳ゆえか、わらわらと医務室に人がやってきてナギトはその人海に押し流されるようにして部屋を出た。

が、その顔に不満はない。実はラウラが目を覚ましてからたつぷり1時間は2人きりを堪能したのだ。ラウラ覚醒からの時間をちよろまかして報告した。

ナギトは医務室を出た足でそのままカレイジャスを降りてバリアハートの街区に出た。

☆★

ナギトとリインが《身喰らう蛇》の実験に協力した後、オーロックス砦に戻るとすでに作戦は完了していた。オーロックス砦は制圧され、アルバレア公爵は逮捕され牢にぶち込まれた。

作戦終了の後、カレイジャスは解放されたバリアハートに着陸したという流れだ。

東の間の休暇。ナギトは変わらずラウラに寄り添ったが、およそ3時間もしない内に目を覚ました。そこから1時間お喋りタイムと洒落込み——、イマココというわけだ。

「さて……………」

どうしたものかと考える。牢屋に入っているアルバレア公を虜りに行こうかとも考えたが、顔を見たら殺したい欲求に駆られそうなため自重する。

作戦終了後に共有された情報によると《帝国解放戦線》の《S》——スカレットが拘束されたらしい。ゴライアスに続く新たな機甲兵ケストレルに搭乗してオーロツクス砦でヴァリマール——リインと対峙した彼女だったがあえなく敗北。爆散する機体からコツクピットを引き抜かれ、生きながらえたという。今は公爵家城館で療養中という話だった。

そんな事を思い出してナギトはスカレットに会いに行こうかと考える。言わずも

がな友リヴァルについて聞くためだ。

と、公爵家城館に足を向けた所でARBUSが通信を受け取る。出てみると相手はラインで「今から話せないか?」という事だった。ナギトは了承し、すぐに待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所は街道近くのベンチで、どうやら直前までトワが休んでいたらしく仄かに暖かい。

「話ってなんぞ?」

そんな風に話を切り出すナギトのいつも通りに、ラインは少し驚いたあと笑った。

「ラウラが目覚めたって聞いたけど…その様子だと、もう話はしたみたいだな?」

「まあな。ちよつと目え覚ました時間を誤魔化してだな…みんなには内緒だぞ?」

「それは別に構わないが…、ラウラが目を覚ましたにしても精密検査とか必要だろう

し、あんまり無茶はしてないよな？」

「少し話したただだよ。お前はいいのか、ラウラと話さなくて」

「今は先客が多そうだしやめておくよ」

「それが賢い」とナギトは返して、2人の間にしばしの沈黙が蔓延った。

2人の視線が互いから正面に向けられる。草花が風に揺れて、その一拍あとにリインは告げた。

「ナギト、わかっていと思うが…ラウラが目覚めた以上……」

「みなまで言うな、わかってるよ。もう…その時だ」

リインが言っているのは、ナギトの真実について語る時が近づいているという事実だ。

覚悟がどうの真実がどうのと言って、幻獣討伐作戦やラウラの昏睡でずいぶんと先延ばしにして来たその時がもう間近に迫っているのだと。

「ならいいんだ。…俺たちも少しずつだけヒントを得てきている。そうしてナギト、君がやった事の輪郭もすでに見えている。…絶対的に君の真実を掴んでみせる。Ⅶ組のみんなと一緒に」

「……………そうか」

ラインの言葉にナギトはそうとしか返せない。

ナギト自身、やばい事をやった自覚はあり、しかしそれでⅦ組が自分を追い出すなんて事はないだろうとたかをくくっていた。万が一に追放されたとしても、その時は自分で動くと決意していた。——はずなのに。

どうしても怖い。Ⅶ組のみんなに、ラインに、ラウラに。拒否される事がどうしても。今までぼんやりとあつた恐怖が実感を伴ってナギトを苛む。

また風が吹いた事を契機にラインは雰囲気を変えて「そういえば」と言った。

「正規軍の人たちがナギトに礼を言つといってくれて」

「正規軍が？なんでまた？」

首を傾げるナギト。正規軍も今回の作戦には参加していて、オーロックス砦を正面から攻めていたのは彼らだ。カレイジヤスは砦の守備隊が正規軍に引き付けられている間に砦を急襲してアルバレア公を拘束したのだ。

しかしその作戦にナギトは一切関知していない。アリアンロードに連れ去られるまでカレイジヤスでお留守番していたのだ。リインは砦を守っていたスカーレット——ケストレルを制圧してからヴィータに拉致られたらしいが、ナギトは本当に何もしていない。

「どうも双龍橋で領邦軍の戦力を捕獲できたのが大きかったらしい。おかげでオーロックス砦を守る戦力が激減……今回の作戦で正規軍には軽微な被害しかでなかったそう
だ」

？ナギトは「ああ、そうだったのか」と納得する。？確かに対正規軍のために戦力を集中していた双龍橋の部隊がオーロックス砦の防衛に戻れなかったのなら、それは領邦軍にとって大打撃だろう。？本拠地とも言えるオーロックス砦には精鋭を集めていたの

だろうが、いかんせん数が足りなかったようだ。

続けるラインの話によると、ケルディックを焼き討ちした分隊も全滅していたので、いくらかはマシになったとの事。

「そりゃ良かった」とナギトは感謝を受け入れる。

ラインももう話題はないらしく、解散といった空気感にナギトは立ち上がる。次の目的地はアルバレア公爵家城館だ。

「じゃあまた」と言って去っていくナギトの背中を呼び止めるライン。

振り返ったナギトに少しの間を置いて言った。

「ナギト…その、少し変わったか？」

ナギトは目を丸くして「ふっ」と柔らかく笑んだ。

「目を覚ましたラウラにも言われたよ、それ。良く見てんな…お前ら、俺のこと大好きか
よ」

そんな軽口は間違いなく肯定の意味で。

☆★

「あら、ナギトじゃない」

アルバレア邸の一室に軟禁されているというスカレットを訪ねる。? 《灰の騎神》
ヴァリマルとの戦闘で体力を削られたスカレットはベッドに身を預け、庭の風景を
見ていた。

その様子はまさしく、深窓の令嬢と呼ぶにふさわしい光景であった。物々しい雰囲気
を醸し出す眼帯さえなければ、だが。

? 入室した人物を確認してスカレットは気さくな雰囲気でもって話しかける。? ナ
ギトにはそれが逆に痛々しく思えて、しかしそれと同じテンションで接する事にした。

「やあやあスカレットさん。パンタグリユエル以来かな? お久しぶりですね」

「ええ、お久しぶり。わざわざ会いに来てくれるなんて嬉しいわね。見舞いの品はどこかしら？」

ナギトはポケットを探って、それを取り出すとスカーレットに向けて投げた。ぽりとベッドの上に落ちてはつきりと形がわかるようになった。

「……なにかしら、これ」

スカーレットは頬を引きつらせながら、それを摘みあげる。冗談のように求めた見舞いの品は、ハートの形をした眼帯だった。

「ハート型の眼帯（ピンク）です。キュートでしょう？」

「ええ、とつてもキュート！……じゃなくて、冗談でしょう？こっちは疲れてるのに……こんなコントの相手をさせるなんて」

「もちろん冗談ですとも。捕虜に見舞いの品なんてもんはないです。それはまあ……」

「ジョークグッズなんでOKでしょうけども」

冗談に冗談を重ねられ、ついには立場をはっきりと示されてスカレットは敗北を認めめた。

「私の負けね」と肩をすくめたスカレットに、ナギトもまた三枚目の顔を終わらせて、ベッドの側にあつた椅子に腰掛けた。

「……でもちようど良かったわ。あなたにリヴァルからの伝言があるの」

「伝言?」

「ええ。まあちよつとした言伝だけ……俺と同じ思惑とは恐れ入った。だがまだ足りない。英雄を討ちVII組の名声をさらに高めよ。……ですって」

「……なるほど、そうですか。わかりました、ありがとうございます」

スカレットに託されたリヴァルの言葉を何度も反芻して、意味を理解する。どうや

らリヴァルもナギトと同じ思惑を持っていたようで、しかしナギトの成した事実ではまだ不足しているとダメ出しされていた。

「私もその『思惑』とやら……一枚噛みたいところだけれど……この体じゃあね……」

目を伏せるスカーレットは、リヴァルから預かった伝言でナギトの思惑までもを見抜いているようだった。それも当然と言える、幻獣討伐作戦は大々的にやったのだから。

「大丈夫ですよ。俺に——俺とリヴァルに任せておいてください。死ぬのは《G》と《V》だけで十分でしょう……事が終わっていくらかしたら、また集まって酒でも飲めばよろしい。もちろんリヴァルも含めて」

「ええ。それができれば何も文句はないわ。……頼むわね、ナギト」

スカーレットの願いに「はい」と静かに返事をして。しばしの静寂が訪れた。スカーレットは再び庭の風景に目をやり、ナギトもつられてそちらを見やる。

さすがはアルバレア公爵家城館というべきか、客室から見える庭の風景も大したもので、何とも心を落ち着ける雰囲気だった。

「それで、わざわざ私に会いに来た理由は？まさかハートの眼帯を渡すためだけじゃないでしょう」

「いえその眼帯をプレゼントするために来ました——というのも面白そうですが……、はい。本題はリヴァルについて。あいつの過去、現在……知ってる事を教えてもらえませんか？」

「リヴァルについて、か……。私もあまり詳しくはないわよ？」

そう前置きしてスカーレットは驚くほどあっさりリヴァルについて語った。

その過去については、ほぼヴァルカンから聞いた通りの内容だった。曰くリヴァルの実家——アルヴァンス男爵家は地方南部を治める領主で、1192年頃に領内で起きた異変の真相を探る両親が不審死した後、調査を続行したりヴァル自身もまた死にかけた。

1192年——地方南部——異変——それで決意する《鉄血宰相》への復讐。

「」

つながった、気がした。

「そして現在だけど……もう知ってると思うけどリヴァルは《閃嵐の騎士》として、主に西部で活動してるわ」

「どうして西部なんです？」

「そりゃあ東部には本物がいるからよ。英雄というのは生きてこそ価値があるからね」

つまり貴族連合は《第三の風》カレイジャス組が東部でしか活動しない事を把握していて、そこに合流したナギト——本物の《閃嵐の騎士》をリヴァルと会敵させないようになっているわけだ。

「死んで祀りあげられる英雄もいますが……無貌では……という事ですな」

「ええ。《閃嵐の騎士》は不死の英雄。たとえリヴアルが死んだとしても、貴族連合は新たなパイロットを据えるでしょうね……《閃嵐の騎士》として」

まったくくだらない手法だが、兵士に幻想を抱かせるにはうってつけのやり方だった。

そこまで話したスカーレットが目眩を覚えたらしく、頭を押さえた。

「少し…喋り過ぎたみたいね」

苦笑しつつ、スカーレットはナギトを見た。

「ええ、口が軽くてたいへん結構でした」

「……まったく、口が軽いのはどっちゃやら……」

ナギトはベッドに倒れ込んだスカーレットに布団をかけてやって、今にも意識が途絶えそうな事を察する。

「……頼むわよ、ナギト……」

失う意識を何とか繋ぎ止めて、スカーレットは再び言う。そこには「これだけ情報を吐き出したのだから」という意味も含まれていて。とてもハート型の眼帯ひとつでは見舞いの品として不足していた。

「ええ、わかりました。今度はそれ……両目分持つてきますよ」

ナギトはニヤリとした顔でベッドの脇に無造作に転がるハート型の眼帯を指差す。

「いらない……わよ……」

ツツコミを入れる力すらなく、スカーレットは眠りについた。それなりに無理をして話をしてくれていたらしい。

その誠意に応える意味でも、ナギトは願いを成就させようとしてより一層決意するのだった。

☆★

「アルヴアンズ男爵家……まさか君から、その名を聞く事になるとはね」

カレイジャスに戻ったナギトは通信端末を拝借して一人である人物と連絡を取っていた。

流れる金髪。紫紺の瞳。2.5枚目具合ではナギトの一步先を行くその人物は《放蕩皇子》の異名をとる《第三の風》西部担当オリヴアルト・ライゼ・アルノールだ。

ナギトはオリヴアルトに対してリヴアルの家名——すなわち“アルヴアンズ”の名を出した。

「……存知なんですな」

「……ああ。少し前、ちよつと調べる機会があつてね」

と言うオリヴァルトの表情は優れない。当然の話だ。アルヴァンス家の悲劇は決して明るい話題ではなく、さらにその悲劇が起きた原因についてもオリヴァルトは知っているのだ。

「……事ここに至り、腹芸はしません」

ナギトのそれは宣言のようであり、真剣な眼差しで画面の先のオリヴァルトに問うた。

「アルヴァンス男爵家は——、ハーメルを治めていた貴族ですね？」

「ああ、正確にはハーメル村を含む地域一帯の領主だが」と注釈と共に目を逸らすオリヴァルト。彼の持つハーメルの悲劇の真相については、ナギトも知っているが、それを何故知っているか聞かれても答えられない。

だがもう腹芸はなしでいくと決めた。

「そしてアルヴァンス男爵とその夫人が殺されたのは、ハーメルの悲劇について調査を行ったから……違いますか？」

「――、君はまさか……あの悲劇の真実を知っているのかい？」

ナギトの語り口に、オリヴァルトは直ぐに理解した。まったく関係のないはずの事象にまで、ナギトが通じているという事に。

「はい。情報源は明かせませんが、間違いなく殿下の持っている情報と内容は同じはずです」

「ふむ……いや、今はとやかく言うまい。アルヴァンス男爵家についてだが、おおむね君の語った通りだ。ハーメルの悲劇の真相を知られるわけにはいかない政府……代表ギリアス・オズボーンは、その調査をしていたアルヴァンス男爵家を処理した。まず男爵と夫人が消され、次に一人息子が消えた。跡継ぎがいなくなったアルヴァンス男爵家は

お家取り潰しとなった……かいつまんだが、これが僕の調査結果だ」

「……………これもまたハーメルの後始末の一環ですか」

「そう言えるだろうね。ただ何度かアルヴアンズ男爵には勧告があったそうさ。ハーメルについての調査をやめろ、とね」

それで引き下がるほど、領民への愛が薄い領主ではなかったという事なのだろう、アルヴアンズ男爵家は。リヴァルについても、監視対象であるはずのナギトと必要以上に馴れ合っていた。

「そうですか。……………ありがとうございます」

ナギトは情報の提供に頭を下げる。画面越しのオリヴァルトは「ふう」と思案げな声を出した。

「本来、ハーメル村の跡地に立ち入るには特別な許可が必要だが……………今は内戦中という

状況下だ、かの村が荒らされていないか君に調査してもらいたい……という名目でどうだね？」

「はは……、お気遣い痛み入ります。見咎められたら殿下の名前を出す事にします」

オリヴァルトは皇子という立場で、ナギトのハーメル村への進入を許した。いざという時はオリヴァルト皇子の名を出せば良いという事だ。この内戦下で廃村にかまけている暇は両軍共になさそうではあるが。

こうしてまた、ナギトは友リヴァルの真実に一步近づく。その全貌が明らかになる日は遠くない。

ナギト・シユバルツァー

紅き翼カレイジャス。

今や、帝国民たちの希望として各地で囁かれているその中心にいる少年少女たちが、一室に集っていた。

? VII組の全員が揃ったのを確認し、それは開始された。

? 《閃嵐の騎士》の、ナギト・シユバルツァーの真実について。

「じゃあ今から……ナギトの真実についての追求を始めるが……みんな、構わないな?」

ブリーフィングルームの席から立ち、口火を切ったのはリインだった。その隣の席にはナギトがおり、瞑目したまま動かない。

リインの問いには是と答えられ——、それは始まった。

「まずは……」と議題をあげようとしたリインを遮ってナギトが立ち上がる。

「いいかな、この会議……基本的に俺は“はい”か“いいえ”でしか答えない。ある程度の補足はするが……、前にも言った“俺の真実”……それをお前たち自身で見出すための措置だ。ご承知置きを」

ナギトの言葉にⅦ組総員は覚悟を深める。それがもはや言い訳に近しい事は理解していたが、本人の口から語るのではなく暴かれる事で断罪されるのをナギトは待っているのかもしれない、とも。

一拍置いて、遮られていたリインは再び声を上げた。

「まずは《閃嵐の騎士》について。……もうそれだけがナギトの真実ではないかもしれない。だけどまずはこの問題から片付けたい」

リインの提案に皆もまた賛成する。唯一ユーススだけが眉根を寄せてイラついた雰囲気だったが、それでも賛同はあった。

「問題点はナギトが本当に《閃嵐の騎士》なのか……つてところよね？」

アリサの確認にリインが「ああそうだ」と答える。

「今のところナギトが《閃嵐の騎士》であるという情報はヴァルカンが指摘してナギトが認めたというだけ……。しかし今でも《閃嵐の騎士》は貴族連合で活動を続けている。この事からナギトは《閃嵐の騎士》ではないと、そう推測する事もできるからだな」

そもそもナギトが本当に《閃嵐の騎士》なのか、そんな話題が提起されたのはマキアスが語った通りの内容だった。

「これは今日発売の帝国時報だが…、ここを見てくれ」

マキアスは続けて帝国時報を取り出してテーブルの上に広げる。記事の内容はやはり「《閃嵐の騎士》活躍！」だった。

「ナギトは《閃嵐の騎士》を自称してるけど、それとは別に《閃嵐の騎士》がいる。だからナギトは偽者かもしれない。……そういう事だね」

記事の内容を鵜呑みにするならフィーの言う通り、何らかの事情でナギトが《閃嵐の騎士》を騙っているという線がある。

「仮にそうだったとして、ナギトが《閃嵐の騎士》を騙る理由がどこにある？」
しかしユーシスの言葉はマキアスやフィーの意見とは対立していた。

「そも、ナギトはヴァルカンの言葉を聞いた俺たちから問い詰められるまで《閃嵐の騎士》である事を隠していた……それこそナギトが《閃嵐の騎士》である何よりの証拠ではないのか」

ユーシスの視線はきつくナギトを睨みつけている。貴族連合でも高い地位にいたアルバレア公の息子にして総参謀ルーファスの弟であるユーシスはナギトが《閃嵐の騎士》である事を知っている。

その事についてナギトからは秘密にするよう頼まれ、了承した以上その方面からアプローチするつもりはないが、ナギトが《閃嵐の騎士》という前提の上で思考を進めたユー

シスは今、Ⅶ組メンバーの中で最もナギトの真実に近づいている。

「それは…そうかもしれないが…」

「それともなんだ？ 貴様はナギトとヴァルカンが共謀して、ナギトが《閃嵐の騎士》だど俺たちを騙すつもりだとも思っているのか。そんな事をしてナギトに何の得がある？」

ユーシスとマキアスの言い争いはユーシスの優勢だ。理に適ったロジックで、ナギトは《閃嵐の騎士》である、という説を補強していく。

苦い顔をしたマキアスを見兼ねてか、サラが「ユーシス」と注意するように名前を呼んだ。

「あんたがどうしてそこまでナギトが《閃嵐の騎士》だって確信してる理由については置いておくにしても…マキアスが言いたいのは、多角的な視点からナギトが本当に《閃嵐の騎士》なのか分析しよう…という事よ。議論を先に進めたいのはわかるけど、ちよつと強引過ぎるわね」

「よね、マキアス？」とサラは確認を取りマキアスは「そうです」と首肯した。

「とりあえずユーシスの意見は後で取り上げるとして……、そうだな、まずはサラ教官の言う通り別の視点で考えてみよう」

ユーシスの舌打ちと共に、ひとまず核心から遠ざかる。リインの号令で再び議論はいちに戻った。

「それは例えば……《閃嵐の騎士》ってそもそも何なのか、みたいな話？」

号令に従って各々考えを巡らせ、一番初めに声をあげたのはエリオットだった。

「んー？それって《閃嵐の騎士》が誰とかって意味じゃなくて？」

ミリアムの問いにエリオットは「うん」と言いつて続ける。

「《閃嵐の騎士》っていうのは異名だよ。僕の父さんは《紅毛のクレイグ》なんて呼ばれてるけど、それと一緒だ」

「ええ、貴族連合の英雄……わかりやすく言えば象徴シンボルね」

エリオットの言葉をアリサが補足する。

《閃嵐の騎士》は貴族連合の英雄。ナギトがそうだという前提があつたせいで曇つていた事実だ。

「その通り……でもそれって、いったい何を指すんだろう？」

だから続く言葉に、一同の思考は鈍つた。

「〃何〃を、か？ 〃誰〃を、ではなく」

その違和感をいち早くつづいたのはガイウス。確かにエリオットの言い口は人物を指摘するものではなかった。

「——そうか！《閃嵐の騎士》は人じゃなかったんだ！」

そこでマキアスが何かに気づいたらしく声をあげるが、その発言もまた意味深長で「？」と首を傾げる者も少なくない。

「マキアス……ナギトとてれつきとした人だぞ？」

「いやラウラ……別にナギトを人間扱いしてないわけじゃないんだが……」

そんな言葉のあとに「ごほん」と気を取り直したマキアスは再び帝国時報を指差した。

「いいかみんな……今号の帝国時報もそうだが……過去に遡っても《閃嵐の騎士》の操縦者が記事にされた事はないんだ！」

「それってつまり？」

決めたつもりだったマキアスだが、それでもまだ迂遠な答えにフィーが催促する。

「つまり……《閃嵐の騎士》とはこの機甲兵につけられた異名だ。少なくとも、その操縦者を知る者以外にとっては」

「なるほど……、確かに《閃嵐の騎士》と言えば機甲兵の姿が思い浮かぶ」

「クロウさんは《蒼の騎士》なんて呼称で、顔写真付きで帝国時報でも報じられてましたね。知名度としては《閃嵐の騎士》も負けてないはずなのに、その操縦者が明らかでないのも妙に思えます」

マキアスの説明に、ガイウスは納得し、エマがさらなる疑問を追求する。

「ふん……《蒼の騎士》と《閃嵐の騎士》は違うからだな」

「どういう意味だ、ユースス？」

「クロウが《蒼の騎士》と呼ばれるのは《蒼の騎神》の起動者だからだろう。それは替えが効かない唯一無二だからだが…」

ユーシスがぼやくように言った意見にリインが解説を求めると、ユーシスはそこまで語った。

「《閃嵐の騎士》は操縦者さえすげ替えてしまえば、例え前任が裏切ったとしても問題ない……！」

そしてユーシスの言葉を継ぐようにしてアリサが答えを導く。

「そういうことだ」とユーシスは嘆息する。それは《閃嵐の騎士》という偶像の在り方に兄の影を見たからかもしれないが、この場でそれを追求する者はなかった。

示された答えに各々が理解、納得していく。

「それってつまり、今の《閃嵐の騎士》は二代目——初代《閃嵐の騎士》ナギトの後釜だつて事だねー」

ミリアムがなおわかりやすい説明をして、皆が色々な事に腑が落ちた気分になる。

「それなら、ナギトは《閃嵐の騎士》である。事実と、《閃嵐の騎士》は別にいる。事実で矛盾しない……！」

「ああ、ルーレ空港でのナギトの発言とも合致する」

マキアスとガイウスもそれに続き、ナギトは《閃嵐の騎士》。だとファイナルアンサーが出されそうになる。しかし、それに待ったをかけたのはフィー。

「ちよつと待つて。それじゃナギトが貴族連合から離反した時に乗ってきたアレはなに？」

「——ジークフリートか」

フィーが提示した疑問は、ナギトがカレイジャスと合流してから乗り回している機甲兵ジークフリートについて。反応したリインもそれについては若干の疑問を覚えていた。

《閃嵐の騎士》とジークフリートの形はそれなりに違う。基本骨子は変わらないように見えるが、外装は違う。

「帝国時報の写真にある《閃嵐の騎士》とジークフリートは見た目が違う。これ、どういうこと?」

「《閃嵐の騎士》と2度戦った身からすると、基本フレームは同じように感じるけど……確かにフィーの言う通り見た目は異なっているな。俺の知る《閃嵐の騎士》はクロウのオルディーネみたいな形だったし……」

リインは《閃嵐の騎士》と戦った時からすでに、そのパイロットをナギトではないかと疑っていた。

「もしかして……ナギトのジークフリートは《閃嵐の騎士》の後継機とかじゃないかしら?」

そこに、らしい回答を投げかけたのはアリサだ。発想はラインフォルトの次代らしい

それだが。

「そこからへん、どうなんだナギト？」

答えをナギトに求めたリイン。この場においてそれは反則染みたものだったが、ナギトも「この話題は仕方ねーな」と嘆息して続けた。

「《閃風の騎士》と呼ばれたアレは機甲兵プロトタイプ——オルディーネを模して造られた事からオルディーネ・イミテーションと名付けられていた。試作機って事もあってか採算度外視のワンオフもので後継機や量産型の生産の話はなかったな。……まあ仮にも英雄の乗る機体だ、いつでも出撃できるようにパーツの予備は多くあったぜ」

その言葉はもはや答えに等しかった。それを受けて「ふむ……」とガイウスが顎に手を当てて考え口にする。

「ならばジークフリートはただ単に《閃風の騎士》——オルディーネ・イミテーションを改修したもの……という事か？」

「正解」とナギトは告げる。しかし問題はそこで終わりではなく。

「ならば今の《閃嵐の騎士》は、ナギトさんが貴族連合を去った後に、予備のパーツで組み上げられた二機目のオルディーネ・イミテーションという事になりますね」

エマの導いた解で、今度こそ決着だ。

「ついでに聞くが…オルディーネ・イミテーションからジークフリートに名を改め、外見も変えたのは貴様の機体から《閃嵐の騎士》らしさを取り除くためだな？」

補足するようにユーススが問いかける。「その通り」とナギトは機嫌良く答え、ユースは青筋を立てかけるが、この質問ですべての疑問が氷解したと言ってもよかった。

「つまり…今まで敵だった《閃嵐の騎士》が味方になったとして正規軍がどういうアクションを取るかわからなかったから、ナギトはそうしたんだよね」

要はエリオットの言う通り、これまで敵だった《閃嵐の騎士》がいきなり正規軍寄りの行動を取っても、正規軍がどういう反応をするかわからなかったから、ナギトはそうするしかなかったのだ。

「よし、じゃあまとめるぞ。ナギトは《閃嵐の騎士》で、貴族連合から離反した時に乗ってきた機体はそれを改修しただけのもの。今、主に西部で活動している《閃嵐の騎士》は二代目——そういう事だな」

マキアスのまとめにナギトは大きく頷き——それをもって皆の理解も終着した。

本来、ナギトの真実とはここまでを指すはずだったが、今となってはナギトが《閃嵐の騎士》であるという議題は前座でしかなかった。

ナギトがカレイジャスに合流してから幻獣討伐作戦まで——やってきた行動の意図がわからないものが多数あり、今回の会議はそれをこそ問い詰めるものだった。

「次の議題だ。ナギトの真実について……みんな、話し合っていこう」

決意を秘めた目でブリーフィングルームの面々を見たのはリインだ。これから明か

される真実如何によつては、最悪Ⅶ組が割れるとすら予想していた。

「ナギトの真実……か。そうは言つても何を話せば良いのだ？」

とは言つても、ラウラが懸念したように「ナギトの真実」という表現では抽象的で、
いつたい何を指しているのかわからない。

しかし明確に細部を詰めていくマキアスにとって、議題の提供は簡単だった。

「ナギトがやった事について……だな。貴族連合にいた時の事はひとまず置いておくとして……ナギトが僕たちに合流してからについて話そう」

「ああ、これでようやく本題に入れる。その男の——ナギト・シュバルツァーの罪について」

「罪」——そのワードで場の温度が下がった。ユーシスの怜悯な瞳がナギトを貫く。

先程の様子からもわかつていた事だが、ユーシスはナギトに対して怒っている。とて

も熱く、その真実を焼き尽くさんばかりの炎で、冷ややかに塗り固めた態度で。ブリーディングルームの雰囲気を一気にもっていった。

「罪、とはまた少し大袈裟じゃないか？」

ラインがそれに対抗しようとするも、ユーシスの冷たい炎は意に介さない。

「少しも大袈裟などではない。そうだな、ナギト？」

水を向けられたナギトは表情を沈ませて、少しの間の後に「ああ、そうだな」と肯定した。

VII組総員の目が細まる。『罪』がある事をナギト自身が認めた事で、より一層事態の深刻性が周知されたわけだ。

「さて、ではまずわかりやすい所から明らかにするとしよう」

場を掌握したユーシスが話を切り出す。

「——幻獸討伐作戦ですね」

そしてユーシスが言うまでもなく、ナギトの罪の行き着く先が“幻獸討伐作戦”に収束するとエマは言及した。

「そうだ。幻獸討伐作戦——いや、“VII組英雄化作戦”と言うべきだな」

淡々と言ったユーシスの貌は憤怒に染まっている。そんなユーシスに睨まれているナギトはしかし、にへらと笑った。

「はは、さすがだなユーシス。そこまでわかってんのかよ」

「なにを笑っている!?! 貴様がやった事はとても許される事ではないのだぞ!」

VII組のメンバーはにぶいわけではない。

だからそのユーシスの言葉で、ナギトの計画を理解した。

「ちよつと待つて。……それつてつまり…、〃幻獣討伐作戦〃の結果、Ⅶ組が英雄視されたんじゃなくて、〃Ⅶ組英雄化作戦〃のために幻獣討伐をしたつてわけね？」

しかし議論を一步ずつ進めたいアリサは、その真意を確認する。

「そうだ、幻獣討伐の後、俺たちは帝国各地で英雄視されるようになったが…それは何故だ？」

そのアリサに做うように、ユーシスもまた皆に歩調を合わせる。ナギトの罪を詳らかにするために。

「俺たちⅦ組が幻獣を討伐する様子を、セリーヌの魔術で各地に放映したからだな」

「《蒼の歌姫》——もとい、ヴィータ・クロチルダ氏の〃幻想の唄〃に似た魔術……だつたな」

ラインが答え、マキアスが補足する。

「では何故ナギトはそうした？——答えは明白：Ⅶ組を英雄と化するためだ。討伐を同時：いや連続で行ったのはインパクトを与えるため：というのが妥当な線だろうな」

ユーシスの説明は明快だった。

ナギトはⅦ組を英雄にするために幻獣討伐を行い、その様子を帝国各地に放映した。

「……君の言い分はわかった。しかしその上で聞こうユーシス……君はどうしてそこまで怒っている？」

しかしマキアスが問うたように、Ⅶ組メンバーには未だユーシスが憤怒している理由がわからない。

ある意味で鋭い疑問に、ユーシスはマキアスをちらりと見て「フン」と鼻を鳴らす。

「……当然、ナギトの所業がこれだけに留まらないからだ。皆、思い出してみればいい……俺たちは何故幻獣を討伐しようと思った？」

解答。質問。それによつて考えさせるユーシスのやり方は非常にわかりやすい。答えを与えるのではなく考えさせる事で、より一層ナギトの罪深さを理解させるためのものだ。

「ナギトの提案を受けたから……つてわけじゃなさそうだね」

フィーの言つたそれは、あくまで前提。

「あの時にナギトは『真実を得るための第一歩を示す』と言つていたな」

ガイウスの言つたそれは、あくまで契機。

「ナギトさんがそう言つて差し出したのが——」

「——帝国時報だね」

エマに続いてミリアムが、ユーシスの導いた答えを全員に周知する。帝国時報……言わずと知れたエレボニア帝国最大級のメデイア帝国時報社が発行する新聞だ。

「その帝国時報の見出しには『《閃嵐の騎士》活躍』以外にも『幻獣による被害』が取り上げられていた」

そしてラウラが指摘する。帝国時報に語られる『幻獣による被害』がⅦ組に幻獣討伐を決意させた一因であると。

「ああ。だから俺たちはナギトの指揮下で幻獣討伐作戦を実行した。……ユーシス、これもナギトの仕込みだと思っっているのか？」

「ああ、間違いなからう」

ラインの問いかけに即答するユーシス。その視線は変わらずナギトを射貫いていて、その視線を向けられた当人は瞑目したまま議論の行末を見守っている。

「そして仕込みはそれ以前から始まっていた——そうだな？」

ユーシスの視線がさらにきつくなる。あるいはそれは、*“否定してほしい”* 気持ちの表出であったのかもしれない。

しかし——

「——そうだよ」

あっさりと、肯定するナギトの悪辣。否、正直な解答だ。

言われたユーシスは憤怒や、友情や、葛藤で表情が千々に歪み——、苦虫を噛み潰したようにして、それらの感情を飲み込んだ。

「いいか、よく聞け皆の者。その男は——ナギト・シユバルツァーは………作戦のために、俺たちⅦ組を英雄とするためだけに………無辜の民草の命を危険に晒したのだ………！」

それでもなお飲み干せぬ感情の波。しかしそれゆえに気持ちの乗った言葉は、Ⅶ組の面々に実感を伴って伝播する。

「ちよつと待て……、待つてくれユーシス……！ナギトが市民の命を危険に晒しただつて……？そんな……そんな事が……」

反論したいリインに勢いはない。それは先程ナギトが肯定したからでもあるし、リイン自身がナギトのやりそうな事だどこかで考えてしまったからだ。リインにあるのは「信じたくない」という気持ちだけだった。

「ありえる……でしょう……ナギトさんのやりそうな事です」

ユーシスの言葉を後押ししたのはエマだ。Ⅶ組でもナギトの黒い部分を知っているエマだからこそ、腹黒いやり方を看破できていた。

「ちよつと待つてよユーシスにリイン、エマも。3人はナギトが何をどうしたのかわかつてるみたいだけど……それを僕たちにも説明してくれないかな」

解説を求めたのはエリオットだ。彼も本来は鋭い――機転が効く――部類だが、元来の優しさとナギトへの信頼が、真相への到達を阻んでいた。

「ユーシスの言葉から推測するに……、ナギトは故意に幻獣の脅威を帝国市民に知らしめた……そういう事だな？」

マキアスが発する言葉は未だ迂遠だ。直接的な表現を避けているとも言える。ユーシスの首肯を認めるとマキアスもまた表情を歪め呟く。

「それは確かに……許せる事ではないな……！」

その貌はやはり憤怒。ユーシスの怒りの正当性はマキアスにも伝染した。滲む怒りにブリーフィングルームの空気がさらにピリつくが。

「アンタたち、はつきり言ったらいいじゃない。ナギトが幻獣を市民にけしかけた“って”」

あつけらかんと言うサラの様子に。皆が避けた表現をあつさりを使うサラに。
一瞬、空白が生まれて。

そのあとすぐにナギトに視線が集中した。

それは少なからず非難。遠からず軽蔑。裏返る友情。回帰する思い出。剥離する、軌跡。

「順を追って……いや、順を遡って説明しよう」

言葉すら失ったⅦ組の面々に、感情を落ち着かせる時間を与えると共にユーシスがナギトの計画の全貌を明らかにする。

ナギトの目的は帝国で「Ⅶ組を英雄視」させる事。そのためにナギトは各地に出現した幻獣を利用したと。

ナギトの計画はいたってシンプルだ。帝国民に幻獣の脅威を知ってもらい、それをⅦ組が討伐する。それだけのことで、セリーヌによる助力：町村への放送はそのキモにしてオマケだ。

ユーシスが怒っているのは、ナギトが帝国民に幻獣の脅威を知ってもらうためにした事についてだ。

それについてはサラが語ったとおり、ナギトは各地の幻獣を民草の住まう町にまで誘導したのだ。そうして住民には実際に幻獣の脅威を体感してもらおう事で、幻獣を打ち倒す英雄”を待ち望んでもらう状態にした。

さらには帝国時報の記事”幻獣による市民の被害”もナギトのタレコミで書かれたものだ。

そうした準備を終えてナギトはⅦ組に幻獣討伐の話を切り出した。帝国時報で取り上げる程に被害が出ているのなら《第三の風》を謳うⅦ組がそれを無視するわけにもいかず——、Ⅶ組は幻獣を討伐し英雄となった。

「これが事の全容だ。……………そうだな、ナギト」

説明を終え、静寂となった空間で確認するようにユーシスは言った。

「——ああ、間違いないよ。幻獣の出現からこつち、俺がやった仕掛けはそんなもんだ」

それに応えるように、あるいは僅かな諦観を宿しながら、ナギトはまっすぐにユーシスを見た。

「そんなもん…だと?!」 貴様は市民に被害を出していながら、どうしてそう平然としていられる!?!」

しかしその言葉はユーシスの逆鱗に触れた。フレスオウリージュ 貴族の義務を体現する彼は、恣意的な思惑で領民を脅かすものを嫌悪する。今のナギトがまさにそれだった。

「死者は出てない。出ないようにした。…そこはさすがにな」

「そういう問題ではない!」

言い訳がましく言うナギトに、ユーシスはさらに声を荒げる。その声は、その言葉は今やVII組全体の意見だ。

「どうして無関係な民まで巻き込んだ!？」

「無関係じゃあないさ。今この帝国は内戦下であり、それは国家の問題国民の問題だ、全員が当事者なんだ。そんな状態の帝国で幻獣が現ればそれは国民の問題に等しいだろう——」

ユーシスの激昂にさらりと答えるナギトに、青筋を立て、怒声を発する間際。ナギトが沈鬱な表情に変わった。

「——つーのも自分の精神衛生を守るための言い訳なんだけどな」

自身を正当化する理由。それを虚飾だと自ら語る異常性に、ユーシスはたじろいだ。

「それで、どうする?」

その隙間にナギトは結論を問うた。

どうするか。ナギト・シユバルツァーをどうするか。その断罪はいかなるものか——

—そういう問いかけ。

「どうするかだと！そんなものは——」

VII組の総論としてユーシスが判決を下す。その瞬間。

「ユーシス。あんたたちも」

憤怒の病に冒されたVII組の熱を冷ます言葉がサラからかけられた。

「まだ、浅いわよ」

——*浅い*——。

その意味を理解して、ユーシスは一瞬放心した。

「馬鹿な……………」

だってそんなのは意味不明だ。

ナギトだって認めている。なのにまだ。

「これ以上の何かがあるとと言うのか……？」

ユーシスが暴いたナギトの真実。それはナギトがⅦ組を英雄に仕立て上げるために市民を危険に晒した事実だ。それだけの、はずだ。

「いいや。もう何も無いな、ナギトがやった事は。しかしそなたらの理解は浅い。サラ教官が言いたいのはそういう事だろう」

ラウラのセリフに、今度はリインが反応する。

「ちよつと待ってくれ。ラウラ、サラ教官も……2人はナギトの真実について、ユーシスが言った以上の事をわかつてるのか？」

ユーシスがⅦ組の中で最もナギトの真実に近い。が。

「ええ、そりやもちろんよ。半年以上あんなららの教官やってんのよ？あんまりナメンじゃないってーの」

「私はわかっているというよりも、知っている。だな」

サラとラウラは、すでにナギトの真実に至っている。

ラウラの「知っている」発言にリインはナギトを見るが、「言っていない」とジエスチャーされる。

「……私が眠っていた間、ナギトはずっと手を握っていてくれただろう？目が覚める間際……何と言うか……見えたんだ、ナギトの抱く願いが」

ラウラは愛おしむように手を胸の前で握りしめた。

「理屈はわかりませんが……ラウラさんにナギトさんの記憶か……思考が流入したという

事ですか？」

「うん、そう捉えてくれて構わぬ」

エマの解釈をラウラは肯定し、ひとまず理解は得た。ナギトには更なる真実が隠されていて、サラとラウラはその内容に納得しているから、憤怒を宿していないのだと。

「……確かに……違和感があった。ナギトがやった事を知ってもラウラが憤らなかつたからな。この場において、その事実を知って一番怒るのはお前だと思っていた」

ラウラはユーシスと同じくノブレスオブリージュを体現する帝国貴族の誇りを宿す人物だ。そのラウラが無辜の民草を危機に陥れたナギトを赦す道理はない。何ならこの場でナギトに突つかかかって行ってもおかしくはない人格だ。

それなのに、そうしないのはラウラの知っているナギトの真実は、その悪意を飲み干してなお尊いものだからか。

「……ユーシス、そなたの言う通りだ。私自身、ナギトの行為は帝国貴族として決して赦す

べきではないと思うし、憤りもある。……だがな、ナギトの心に直に触れた今、私はどうしてもナギトの行いを肯定したいと思ってしまうているのだ」

ラウラの言葉にユーススは苦い表情をする。同じ帝国貴族、しかも誇り高い彼女に民の被害を許容させるだけの願いがナギトにある事を体感したからだ。

「……そうね。ナギトの言葉を借りれば、今のあんたたちはまだ『真実を知る』段階……、『真実を得る』にはまだ至っていない……という所かしら」

黙した一同にサラが助言する。ナギトの――本当はリインの――言葉を借りた表現で。そして想起する「真実とは解釈だ」というナギトの言葉。

「皆、思い出してみてください。初めて単独行動する前にナギトが言っていた言葉を」

サラに続いてラウラもヒントを投下する。

「それってあれだよね……」

「ああ、ナギトは確かこう言っていた…」

「『本当の意味でⅦ組が全員揃うために必要な事』だと」

フィーが思い当たる記憶を掘り返し、マキアスもまた続き、リインが言葉をなぞる。

——本当の意味でⅦ組が揃うために必要な事。

それがいったいどんな意味を持つのか。

「『Ⅶ組』……か……」

ミリアムが意味ありげに呟く。その音を聞きながら、皆も一様に考えた。

「ナギトが『やった事』についてはもう語り尽くしたと思う。ラウラもそう言ってるし、ナギトも認めてる事だしな。……だが、ナギトの言葉によると真実とは『解釈』——

——その行いに、どんな意味を見出すのか……今はそれを考えてみないか？」

やがてリインの提案は受け入れられる。

「ナギトが『何故』Ⅶ組を英雄にしたのか、という事だな」

行動の理由。行動原理。意味。それを問う。

ガイウスはすぐに話題の芯を捉えて皆に共有する。

「ただ単に英雄と成り名声を得たかった……というわけではなさそうだな」

ユーシスは一度は終着と定めた議論を再開させる。

確かにナギトの性格なら、名声を得てどんな影響が生じるかまでを計算して行動していたはずだ。

『民を危険に晒した』事実が自らの目を怒りで曇らせていた事をユーシスは認める。

「ええ。焦点となるのは、やはり名声……でしょうか」

エマもユーシスに追従し、ナギトの狙いは名声を得る事だったと仮定された。

「名声を得て何がしたかったのか……いえ、名声を得る事で生じる利点は何か……」

アリサはやはり商人らしい思考回路でナギトの真実を見極めようとして、

「みんな、少し難しく考え過ぎなんじゃない？」

エリオットが、迷宮入りしそうな議論に待ったをかける。

「たぶん、ナギトの動機はもつと単純だよ。名声って言ってしまえば人気だよな？」

名声とは人気である。エリオットの表現はⅦ組総員の胸にすくと落ちる。

「ナギトは人気欲しかった？」

フィーがまたしても素直に受け止めて、

「それは誰からの——って決まってるわね。ナギトは民衆からの人気が欲しかった」

アリサは、その対象を言い当てた。

「民衆からの人気……言い換えれば民衆の英雄か」

民衆の英雄になるための計画が「幻獣討伐作戦」だ。マキアスがその視点に至ったのと同時に、また新たな疑問が湧き出た。

「ナギトはどのようにして民衆の英雄になりたかったのか——か」

ナギトはどうして民衆の英雄になりたかったのか。ナギトはどうして民衆からの人気が得たかったのか。ナギトはどのようにして民衆の支持を欲しかったのか。

「Ⅶ組が揃うために、揃っていられるために、必要な事だと思ったからである」

そこでラウラは再び、かつてのナギトの言葉を口にした。

“Ⅶ組が揃う”——吟味すべきは、その意味だった事を悟る一同。
そうすると、すぐに答えに到達した。

思い浮かぶのは上級生だったはずのクラスメイト。様々な思い出を築き——、そのすべてをフェイクだと嘯いた悪友。

——クロウ・アームブラスト

ナギトが幻獣討伐作戦を実行したのは。民衆を危険に晒してまでそうしたのは。その汚名を、悪と断罪される事を覚悟しても、Ⅶ組を正義の味方に仕立て上げたのは。すべて、クロウのためだった。

白熱していた議論は冷めやって、皆の視線がナギトを向いた。

すべてを察された事を——真実を得られた事を理解したナギトは困ったように優し

く笑って、

「まあ、そういうことだ」

そう言った。

碧く澄んでる泉に深く、そつと隠した願いひとつ

ナギトの行動のすべてはクロウのためだった。

判明した真実に、皆は言葉を失う。

「待て……待て待て待て……どうしてそうなる……？俺たちを英雄にするのがどうしてクロウのためになる……!？」

顔に手を当てるユーシスは至った解の意味がわからない。

確かにⅦ組を英雄にして、どうしてクロウのためと言えるのかは、一見するとわからない。

しかしそこに、ある事実を明かすと、謎を解くヒントにはなる。

「そうか。あんたたちは知らなかったわね」

と言ってテーブルの下から顔を覗かせたのは黒毛の艶猫セリーヌだ。そのままひよいとテーブルの上に飛び乗ると追加で説明した。

「あの幻獣討伐作戦、E班のナギトは——、って口で説明するより見せた方が早いわね」

言うが早いのか、ブリーフィングルームの中央に円形の窓が開く。それは魔術で何らかの景色を映す手法だ。

「これはE班の幻獣討伐の様子。その目で確かめてみなさい」

そう言うセリーヌにⅦ組総員がその窓に視線を注いだ。そこに映るのはナギトが幻獣リンドバウムを討伐する様子。

「——え？」

疑問は、誰の声だったのか。

その傍らには、クロウの姿があった。

クロウとナギトが協力し、幻獣を倒す様子がその窓から放映されていた。最終的にはナギトの斬撃が幻獣を真つ二つにして終了したそれ。

「ちよつとこれ…? どういう事よ!? 説明しなさい、ナギト!」

真つ先に正気を取り戻し、ナギトに事の真相を問うたのはアリサだった。

「うむ……、雲を——天を割った斬撃…あれが超過式と言っていた戦技か?」

「いやラウラ…論点はそこじゃないんだが…」

ナギトの記憶が流入したらしいラウラには、もはやその真実がわかっているために、皆とは疑問の付け所が違う。それはラインが正して、ナギトに続きを促した。

「まあ、ラウラの問いかけに対しては “そうです” って答えだな。アリサの方には——

「、これだ」

もやり、と空間が歪んで一瞬後にはナギトの背後にクロウ——らしきものが立っていた。

「タネを明かすところなもんだな。戦技の一種である“分け身”——その派生だな、俺の闘気でクロウの姿形を編んだものがこれだ」

セリーヌが見せた幻獣討伐作戦当時の光景。ナギトとクロウが共闘する様は、その実ナギトの一人芝居だった。

しかし、その“実”を知る者はおそらく極小数で。

「つまり——、民衆からすればクロウも僕たちⅦ組と同じ幻獣を討伐した英雄……ってことだよな？」

エリオットの言った通り、民衆にはそう認識される。

「クロウ・アームブラストを英雄にする——、これはそういった作戦だったのだと、全員が悟った。」

「だが待て。クロウ先輩を英雄にしてどうする？ あの人はいもう貴族連合の英雄なんぞぞ」

そして、やはり疑問。謎が解かれるたびに新たな謎が生まれる。しかもう終わりは近い。

「貴族連合の英雄を民衆の英雄としても大した意味はない、か……？」

マキアスの疑問に答えるようにユーシスも言葉を紡ぐ。

「いや、意味なら大アリよ。確かに現状ならそうでもないかもしれないけどね。……それに、今この内戦下において帝国時報の報道内容がどちらかの勢力に偏っている事は国民全員が承知してるわ、中央紙と地方紙で内容が変わってるものね。そんな偏向報道と、曲がりなりにも自らの目で見えた事実……民衆はどちらを信じるかしら？」

そう言ったのはサラだ。さすがに元遊撃士らしい民衆の目線でものを語る。

「でも、クロウが貴族連合の英雄である事実は覆しようがない」

しかしフィーもまた客観的にそれに反証する。

クロウは貴族連合の英雄である。

クロウは民衆の英雄である。

この2点は別に矛盾するわけでもなく両立する。しかし両立した所でなんだと言うのだ。

サラの言葉を受けて、リインは前にナギトが言っていた事を思い出した。

「ナギト……君は言っていたな。今回の内戦は正規軍の勝利で終わると。勝てば官軍だと」

「ああ、そうだな」

あつさりとは肯定したナギトに、皆は反応が遅れる。

正規軍が勝利する。勝てば官軍。その意味に理解が追いつくのと同時にナギトは語り出した。

「歴史とは勝者が紡ぐもの——平たく言やあ勝った方が正義ってわけだ。勝てば官軍」

正義は勝つ。勝者こそ正義。そして正義とは悪を誅するものだ。

「なら負けたら？」

問いかけるナギトの言葉はしかし、返答を求めてはいない。

すでにナギトの真実は開示されている以上、ナギト自身の言葉で解説する事に躊躇う必要はなかった。

「賊軍だよ。敗者は悪にされる」

それは勝者から。民衆から。国家から。そのように情報が操作される。

「この内戦で例えるなら、貴族連合の総主催であるカイエン公は処罰を免れないだろう。そして処罰の対象には英雄も含まれるはずだ」

ある意味で英雄こそわかりやすい処罰の対象だ。そしてその英雄というのが――

「――クロウ……あいつだって……そうなったらもう会えなくなるかもしれない。VII組が揃っていらなくなるかもしれない」

クロウ・アームブラスト。貴族連合の英雄。《蒼の騎士》。

――しかし、VII組の一員。

「だが、クロウが民衆の英雄であれば……？ 帝国政府だって民衆の支持を損なう判断はし難くなるだろう。内戦終結直後――、国が割れた後ならなおさらだ」

内戦終結後、貴族連合の英雄だったクロウは処罰されるはず。その未来を回避するた
めの一手。

クロウを民衆の英雄にして、処遇を少しでも良くするための。

「俺がクロウを民衆の英雄に仕立て上げたのはそのため。——これが幻獣討伐作戦：
もといⅦ組英雄化作戦の真意。内戦後のクロウの処罰を免除、ないしは軽減させるため
だけの……苦肉の策」

それが、ナギトの計画の全容だった。

薄氷の上に成り立つかどうかさえ怪しい計画。仮定に仮定を重ねて想像を妄想で上
塗りしただけの希望的観測。

「苦肉の策」と言うくらいだ、それはナギトも理解しているのだろう。

だがそれでも——

「……何故……ッ、俺たちに一言も相談しなかった……!?」

ナギトの真実についてはもうわかった。その悪辣のすべてが、ここにいない仲間のためであつた事は。

「……………」

ユーシスの言葉が、今のⅦ組の想いだつた。

向けられたナギトは一瞬忘我してしまう。その怒りに対する台詞は用意していなかった。だからもう本心で答えるしかない。

「……………相談…か。その発想はなかつたな」

「何故だ…………ツ!? ……………ナギト…お前の罪については……………もう、いい。最低限配慮はあつたようだしな。だが、それとこれとは話が別だ」

ユーシスの、Ⅶ組の怒りはすでに方向性を違えていた。今まで自分たちが手を伸ばさなかつた部分——戦後のクロウの救済に少しでも光を差したナギトの想いについては、

痛いほどに身に染みた。

だからこそ許せないのは、何故それを自分たちに相談しなかったのか、だ。

「――俺は……。……………相談したとして、こんな作戦には乗らなかつただろう？」

言いかけて、やめて。哀しげにナギトは笑んだ。それは無理解を承知の言葉で。

「当然だ！ 関係ない人を巻き込んで、こんな……………騙すみたいなやり方……………」

「ですが、もっといいやり方を模索できたかもしれない……！」

ラインの憤りは尤もで、エマの言い分がⅦ組の総意だった。

そんな総意を受けてナギトは椅子に深く身を預けた。天井を見上げる。

「……そうだな……………そうかもな……………」

ぼう、と呟くように言った。「でも」と続けて視線をⅦ組の皆に、やはり哀しげに笑い

かける。

「俺は馬鹿だからさ、これ以上のやり方は思いつかなかった。それに——」

それは、先程言いかけてやめた言葉。　「言うな」という自制心を押さえ込んで吐露する、ナギトの——俺の、本心。

「俺は、お前たちには綺麗なまままでいて欲しかったんだ」

ツールズ士官学院Ⅶ組には正義の味方でいて欲しかった。

ああ、かつての自問に答えを出そう。

正義の味方とはⅦ組こいつらだ。

「どうしてッ……!?!?」

ナギトの悲哀に劣らぬ悲痛さでリインが問う。ナギトは「決まってるだろ」と悲哀に

愛を混ぜて言った。

「俺がお前たちを好きだからだ」

それはとても独りよがりだ。大好きな人を好きのままに、一片の穢れを許さない我儘だ。

だから、それをとてもナギトラしいと皆は感じた。

これまでだってそうだったナギトラしさに、皆の意見はやはりひとつだ。

「君は……やはり傲慢だ……ッ！」

言ったのはマキアス。いつだったか同じ事を言われた覚えがあった。

自覚は——あった。

ナギト・シュバルツァーになる以前の記憶がなくて。《剣鬼》なんていう後ろ暗い過去があつて。それ以上に自分という異物を感じていた。

そんな重荷を背負つてなお、他人を救いたいと願う傲慢。

——だがそれでも。

「グロウを救いたい」——そんな願いの元に生まれた自分だから、止まらない。止まらないと、そう決めた。

「ナギトの行いはとても許せる事ではない。作戦の事も、それを我らに秘した事もだ」
沈鬱な雰囲気の中で立ち上がって言ったのはラウラ。

「だが同時にその想いの尊さに胸を打たれたのも事実——、事前に真実を得ていた私やサラ教官を除けば、その心中は嵐が吹き荒れるが如くだろう」

事実、ラウラやサラを除くメンバーは内心がめちやくちやに荒れてしまっている。ナギトがただの悪ではなく、友を救いたい一心で、なんなら自分たちの事さえ慮る独りよがりに、感情は上下動しっぱなしだ。

「そんな状態で結論を下せるか？——無理だろう。だからここは私に任せてくれないか。必ずや皆も納得する落とし所を見つけると約束しよう」

ラウラ・S・アルゼイドという女子は、正義を信じ、正義のために剣を振るう者である。

それはⅦ組の中でも特に顕著で—— “我が剣に懸けて悪は許さぬ” とは戦闘後によく聞く台詞だった。

その意味でラウラはもつと怒っているはずだった。

ラウラ・S・アルゼイドという女子は、今や廃れつつあるノブレスオブリージュを体現する貴族である。

それはⅦ組の中でも特に顕著で——、同じ貴族でも権謀術数に生きるアルバレアや、領民との距離が近過ぎるシユバルツァーより一層、古き良き貴族の義務を理解していた。

その意味でラウラはもつと怒っているはずだった。

ナギトの友人として。民を脅かす者の敵として。ラウラはもつとナギトに怒ってい

るはずだった。

—— 否。怒っている。

ナギトの真実を得て、怒りと同時に尊敬の念を覚えた。それはⅦ組の皆とて同じで。しかし、やはり1番怒っているのはラウラなのだ。

そんなラウラの気迫を感じ取った皆は、その提案に同意した。

ナギトの断罪は、ラウラに託された。

「頼む」と言ったりインに「うん、任された」と返し——、ナギトに視線を注ぐ。

「ではナギト——、決闘だ」

☆★

カレイジャスは街道外れの広場に着陸し、決闘のために降りたナギトとラウラを囲むようにして士官学院の面々がそれを見守っていた。

「こうして純粋に剣を競うのは久しぶりだろうな」

「8月の自由行動日以来だな。それ以外だとサシで立ち会った事はなかったはず」

固唾を飲んで見守るギャラリ―とは裏腹に、剣を抜いた2人は気楽に会話をする。

——しかし、剣呑。

すでにラウラの闘気は全開だった。

2人の決闘の行く末を見守る観衆に固唾を飲ませるだけの迫力。その精神を呑み込むが如き——。

しかし、それだけの剣気を正面から受けてなお、ナギトの表情は穏やかだった。

涼しげ、というよりも冷やややかである。より正確に言うならば、どこか虚空を見つめているような虚しさが感じられた。

「アルゼイド流　ラウラ・S・アルゼイド」
？ラウラはそう言つて大剣を構える。

「八葉一刀流　ナギト・シユバルツァー」
？ナギトも太刀を構えた。

？「いざ参るっ！」

？一足飛びに駆け出したのはラウラだ。

踏み込むスピードはリインの疾風に比肩し、この少女の成長を思わせる。

一瞬でナギトに肉薄したラウラは剛剣を迷いなく振り抜く。悲劇を予想し、目を背けた生徒が数名。しかし、彼らの予想は裏切られる。

振り抜かれた剛剣をナギトは紙一重で避ける。？ひらりと木の葉のように躲す様を見て、ラウラとナギトの実力の差を見抜いたのは、その場においてたった一人、サラ・バレストアインのみであった。

続けざまに振られるラウラの剣はナギトにかすりもしない。？すべて見切られている。紙一重で躲されるせいかがギャラリーは危ないだなんだと言っているが、そんな事はない。

？手の届かない高みにナギトは到達したのだとラウラはようやく気づいた。

ナギトがそこに辿り着いたのはいつだ??それはきつと、自分が撃たれた時だとラウラは考えた。あの時に失っていた剣技を鬼気と共に取り戻したのだ。

これは、あまりにも遠い距離。？Ⅶ組全員を単独で倒したあの時の力を平時から使えるようになってきているのだ。？手を伸ばしても届かないのは、もはや道理であると言えるのかもしれない。

「だから……それがどうしたと言うのだ」

眩くラウラに諦観の色はない。むしろその精神は燃え上がっている。

？手が届かない？

上等だ、ならば剣で届かせるまで。

「はあああつー！」

？裂帛では、まだ表現し得ぬ気迫。？

ラウラの足元にアルゼイド子爵家の紋章が広がる。 “洗翼陣” だ。？刀身は光を帯び、ラウラの目は未来を読む心眼となる。

？それを見たナギトは、ようやく虚空から目を離す。《剣鬼》の実力すべてを取り戻したナギトの興味を引く程度の価値が出てきたのだ。

？刹那で距離を詰めるラウラ。？光の剣がナギトを切り裂く。

しかし斬撃は浅く、わずかにコートを切ったのみだ。

？距離を取ったナギトが、称賛を口にする。

「やるなラウラ……、光の剣……もつと見せてみる！」

迅雷。

今度はナギトから仕掛けた。ケルいディっツクか実習の時目と同じ雷速の斬り込み。

ラウラは光の剣を振るって、最短距離で迫ってきたナギトを迎撃した。迅雷を剣の一振りで弾き返す。

「見える……見えるぞ、ナギト！」

あの時はまったく見えなかった太刀筋が見える。反応できる。対処できる。

弾かれた衝撃をいなしつつ着地したナギトは口角を緩ませた。

「このスピードを見切るかよ」

雷が落ちる速度で迫る斬撃、それが迅雷だ。それをこの齡で見切るのはやはり天才と言わざるを得ない。

「それじゃあ……数はどうだ!？」

ナギトが空に手を翳す。？中空に現れたのは、5本の剣。？幻でありながら、その密度ゆえに存在する“幻造”だ。

ナギトがラウラの方に手を振ると、中空の剣5本が射出される。

五体を狙い射出された剣を、ラウラは躲し、受け流し、防御する事でやり過ごす。

？ナギトはそれを見てまた「やるな」と言い、今度は両手を広げた。

中空に出現する、20本の刀剣。？捌く難しさは、単純計算で先ほどの4倍。？しかし、より躲す隙間が狭くなった事で、実際は4倍どころの難易度ではない。

「そら、どうだ!？」

同時に射出される20本の剣。

横に避けても、そこすらカバーされている。？だが、逃げ道が塞がれているおかげで自身の体に迫ってきている数は15本程度だ。

ならば、やれない事はない。

？ラウラは光の剣を回転させ、向かってきた剣すべてを弾き飛ばす。？ガードをすり抜けた剣は僅かに肌を切り裂いたが、それだけだ。

?ラウラは「どうだ」と言おうとして、背中に衝撃を受けた。振り向くと、背中に刺さった短剣が消失しているところだった。

「油断するなよラウラ。剣を出す方向は自在だ」

短剣が消え去り、切り裂かせた後背部の服に血が滲む。

「さて、これはどうかな? 捌けたら大したもんだ」

ナギトはまだ続けるつもりだ。幻の剣を作り出す。ラウラの周囲360度すべてに。

3段に構えられた剣の総数は数えるのも馬鹿馬鹿しい。100を超え200を超える300を超える幻で編んだ刀剣の数々。

対処できなければ、肉片と化するの目は目に見えていた。しかし、これだけの数を対処できる人類がいるのか?? 観衆は無理だと思う。ナギトですら同じだ。

ただ、ラウラだけが違った。

対処できるか否かではない。? どう対処するのか、でもない。

頭はからっぽだった。

言つてしまえば、迫ってきたら対処する。という考えのみだった。？いや、それは考
えと言うよりも、〃そう体が反応するだろう〃というだけの思考。

集中する。極限まで、精神を研ぎ澄ます。

？そして、数えるのも馬鹿らしい剣が射出された。

ナギトは直前まで動かないラウラを見て、〃幻造〃剣を消そうとして。？VII組のメン
バーはラウラの挙動を見逃さぬように目を凝らし。その他の観衆はラウラが無事であ
るようにただ祈り。

——
驚愕する。

「はは……………」

それを見て、一番早くに声を漏らしたのはナギトだった。

「マジかよ……………おいおいラウラ……………、そこはもう、達人の域だぞ……………」

360度から襲ってくる300本を超える数の剣。？剣という弾丸が高速で射出されていく。？一手違えれば、例え一流の猟兵でも瞬時に粉微塵になる剣群を、ラウラは正確に対処していた。

迫る剣を弾く。弾かれた剣がまた別の剣とぶつかり、さらに軌道が逸れ、また別の剣の行方を塞ぐ。？それがいくつも連鎖している。

無論、それだけで剣群を捌けるわけではない。？息もつかさぬ剣の雨を避ける。避けて、避けて、弾いては避ける。

僅かな時間差をつけて射出される剣群だが、すべての刀剣が捌かれるまで、もう間も

無くであつた。

？ナギトは「もつとだ」と笑う。

天に手を掲げると、中空に剣が現れた。追加された剣は30本だ。？それは360度という「横」を超える、頭上から降り注がれる「縦」からの攻撃。

「魅せてみる！」

ナギトの手掌がラウラに向かって振られる。？ラウラの頭上から襲いくる劍群。？なんの警告もなしに放たれたそれを、ラウラは事前に打ち合わせをしていたが如くに察知し、舞い踊るように避ける。？降り注ぐ劍の間でステップを踏む。針の穴に糸を通すような正確で精密な動きで、剣を避ける。

降り注ぐ劍は360度から放たれた剣にぶつかり、その攻撃を阻害する。？しかし降り注ぐ劍の雨を通り抜ける劍もあつた。ラウラはそれすら見えているかのように迎撃する。

やがて、すべての劍が撃ち終わつた。

地面には無数の剣が転がり、または突き刺さっている。？その中心に立つラウラには、傷一つなかった。？無数の剣雨は、ラウラに傷一つ与えることすらできなかったのだ。

闘気で構成されていた剣が煙のように霧散すると、観衆はラウラに拍手と歓声を贈った。

？しかし、当のラウラはそんなものは聞こえていないかのように息を乱さずに剣先をナギトに向ける。

そのラウラを見て、ナギトは再び驚嘆する。？闘気の流れに淀みがない。完璧な状態だ。？どんな達人でさえ、ぶち当たる壁が、闘気の流れを統一化する事だ。ラウラはその壁をやすやすと乗り越えている。？色即是空。明鏡止水。そんな言葉では今のラウラを表現する事はできない。言うなれば無我。？剣の神が取り憑いているかのようにある。

ナギトは称賛を贈ろうとして、やめる。それすらもこの闘いの中では無粋に感じられたからだ。

？「受けてみよ」

ラウラがナギトに向ける言葉は、攻撃の合図だった。？ラウラの体内で気が爆発的に高まっていく。

？ラウラの全身から光が放たれているかのように思える程の光量が剣に灯る。

「光の——翼——」

？それは《光の剣匠》が全力で戦う際に剣に宿る光を指して言われるものだ。？アルゼイド流の頂点に到達しなければ、それほどの剣とは呼ばれない。

ラウラは、その光の翼を手に入れたのだ。

？《光の剣匠》と並ぶ剣を。

？「我が全霊の奥義……！」

？ナギトは認めた。今のラウラが、自分と同じ位階にいる猛者だと。

だからもう、遊びは終わり。

全霊には全霊をもって応えるのが剣士の流儀。

ナギトは大上段に構える。？それはかつて、アリアンロードの戦技 グングニル 大神雷槍 を挿

き消した一刀。

大神雷槍が今のナギトの“超過式”でようやく相殺できる程の威力なのだから、この一刀の凄まじさは推して知るべしである。

狙って撃てる一刀ではない。

しかし、ナギトの全霊と言えばこの一太刀で。

なんとなく今はできる気がして——。

この一刀の名を、まだ思い出せない。

「奥義——ッ！」

ラウラの剣から弧状の光が放たれる。X字を描く斬撃は広い範囲をカバーしている。横への回避は不可能。

ラウラが跳躍する。まだ終わらない。アルゼイド流の奥義二つの合わせ技は、まだ終わりではない。

獅子が吼えた。光とともにラウラの剣はナギトに迫る。獅子の幻影がそれを追って突き進む。

「獅子洗翔乱舞!!」

? 前面からは広い範囲をカバーする光の斬撃。上からは獅子の幻影を伴う剣撃。? これを見ては、こう言わずにはいられない。

「見事だ……」

そう漏らしたのはリインだった。? 剣士同士、ラウラとは幾度も手合わせをしていた。しかし、これほどまでに洗練された戦技は見た事がなかった。? 手加減されていたわけではなく、この戦技は、今この瞬間ナギトのために創り出されたものだとして理解した。

すべての斬撃が、ナギトの^{目標}位置^点で重なる瞬間、ナギトが火の構えから太刀を振り抜いた。

光が炸裂する。？火の構えから振り下ろされた太刀は、X字の光の斬撃と獅子を伴う剣撃を斬り断った。

至高の剣比べが終わったそこを見て、ナギトは「はっ」と快哉をあげた。

「互角かよ、へこむぜおい」

ナギトの火の構え大上段から放たれる一太刀は、初めて師に認めてもらった技だ。

？だからこそ、絶対の自信があつた。

最近は見えた目が派手な大技で戯れていた——“幻造”がその最たる例——のだが、それはこの技があつたからだ。

？完全ではなくとも、この技を使えば誰もに負けないという自信があつた。

その剣技が、達人級に片足を踏み込んだばかりのラウラの戦技と互角。？それはちよつとばかりしへこんでも仕方ないというものだ。

「それはこちらのセリフだ……」

対するラウラは、劍を杖にようやく立っている状態だった。？肩で息をするラウラは、先程の“獅子洗翔乱舞”に本当に全霊を尽くしたようである。

？「こちらの奥義を簡単に相殺するとは……………。その大上段に構えてからの技は、何と
言う名なのだ？」

ラウラは疲弊しながらも、ナギトの使った技に興味深々のようだった。こういう時でも劍技への興味を抑えられないあたり、やはりラウラには劍狂いの気があると思った。

「名前は…思い出せないし、たぶん不完全なこれはその名に相応しくないと思う。だからこれは——ただの素振りだよ」

「ただの素振りか……………、そういう割には洗練され過ぎな気がするが？」

「まあ劍士が一番やる素振りだろうし、回数重ねりやそりやあ研ぎ澄まされもするわな。……………マジに言うとなれだけは譲れない俺の一番だからな」

ラウラはナギトの答えを受け取ると「なるほど。奥義が破られるわけだ」と感想を漏らす。

？「では、続けるのでしょうか」

そして、剣を構えた。

“ありえない”と誰もが思った。？ラウラはもうフラフラだ。気力は尽き果て、体力は限界。今まで剣を杖にしてようやく立っていた体ではないか。

「無茶だよ」

その闘志を受け取らねばならないナギトでさえそう言う。？すでに《剣鬼》としての技量すべてを取り戻したナギトが言う。

「もう無理だろ。光の翼を失い達人域※に踏み込んだ時間は終わった……」

フラフラなラウラに対してナギトは未だピンピンしている。幻造で消費した闘気も

総量からすれば1割未満で、未だ十全の状態と言えた。

格上がピンピンしてる状態でフラフラな格下が「戦いを続けよう」と言うのだ。それは止めもする。

ラウラは「そうだな」と言いながら、それでも剣を鞘に戻しはしない。
? 「だが、それでもやらなければいけないのだ」

強い意思を秘めた琥珀色の瞳。?それをナギトは知っていた。これは覚悟を決めた者の目だ。あらゆる苦難を乗り越えて何かを成そうとする者の目だ。

? 「なぜなら……」

?ラウラは剣を構えて突っ込む。?それには先程のような精彩は微塵も見られない。

ナギトは苦もなく太刀でガードして、その剣が不自然なほど重みを持っている事を知った。

? 「ぬっ……う!?!」

? 重い。なぜこんなにも重い??目の前にあるラウラの表情が、少し緩む。ラウラはナギトに笑顔を見せた。

「私はな、ナギトに惚れている」

それは、いつだったかナギトがラウラに贈った言葉と同じものだった。ただ、贈る者と受け取る者が逆なだけ。？衝撃の告白であるはずのナギトは、なぜかその言葉が胸にストンと落ちるように受け取った。

そして納得する。？なるほど、これほどの想いを込めていれば剣も重くなるわけだ。

「ずっと考えていた。私がそなたに惚れている理由……」

？言葉を口にしながら、ラウラは剣を振り続ける。？その剣をナギトは受け止める。？避けるなどんでもない。ラウラは自分を受け止めてくれたのだ。ここで自分がラウラを受け止めないのは筋に反する。？というか、そもそも好きな娘の声はただ聞けるだけでも幸せなのだ。？だから、ナギトはラウラの声を一番近くで聞くために剣を受け

「考えてみれば、それはやはり簡単な事だった。？私がナギトに惚れていたのは、そなたの『剣の道』に惹かれたからだ」

？ラウラの言葉を受け取って、ナギトは苦笑する。？どこまでも遠く、眩しい存在であつたラウラが、自分の剣の道に惚れている？歩む剣の道は正と邪——交わる事はない対極の道。故に眩しく見えたのかもしれない。？だから、互いが互いの剣に惹かれたのかも知れない。それが、間違いである事を、ナギトは思い知らされる。

「そなたの剣は、決して邪道……修羅の剣などではない。ナギト、そなたの剣は『兄の剣』なのだ」

？——兄の剣？

？——自分の剣が？

？ナギトは疑問に思うも、受け止める剣は重さを増すばかり。ラウラが虚言を吐いているというわけではない何よりの証拠だ。

？「そなたの剣技に届きたいと思ったのが、始まりだ。もっと速く、もっと強く、もっと美しく。私はそなたの剣技に追いつこうと必死になった」

ナギトは知っている。誰よりラウラが自分に追いつこうと日々を剣に費やしていた事を。剣技を盗もうと観察していた事を。

「剣技を……剣技だけを見て、そなたの事を見てはいなかった。それが変わったのは《帝国解放戦線》と初めて見えた時だ。皇女殿下とエリゼ嬢を拐われ、そなたは激情をあらわにした。その時、初めて私はそなたを観たのだ」

ナギトは思い出す。帝都地下で《帝国解放戦線》を追っていた時の事を。？あの時の自分は、少しだけ《剣鬼》に戻っていた。その鬼気に当てられ、ラウラは初めてナギトを観たのだ。

「それからは早かった」

？ラウラは懐かしむように笑う。？その瞬間を思い出して、自分の感情に気づくのが遅

すぎたと笑うのだ。

？「私の中にあつた絶対的な目標——《槍の聖女》リアンヌ・サンドロットを越えるという目標が、いつの間にかナギトと並び闘うという目標にとつて変わられた事に気づいた。私はそなたの剣技のみを見ていたはずなのに、その瞬間に剣の道までも観てしまったのだ」

？いつか励まされた事を思い出した。その時に言われた事を。

？—— “そなたはすでに《聖女》に代わり、我が目標となつたのだ。いつまでもうじうじされては私が困るからな”

？あの時の言葉には、そんな意味があつたのだ。

「観てしまつてからは、困惑した。そなたが無慈悲にも敵の腹を裂いても、何も言えぬほどに。それほどまでに、そなたの剣の道は魅力的に……格好良く思えたのだ」

ナギトの思考は止まる。？ラウラが想いの丈をぶつけてくれているのだ。？それについて詮索したりするのは無粋で、なにより勿体無く思えるからだつた。

? 「時に強く、皆を導き。」

? 時に優しく、皆を支え。?

時に厳しく、皆を叱咤し。?

時に暖かく、皆を見守り。?

時に悪戯つぽく……皆をからかう。

まるで、兄のようだと思った。? そんなそなたが振るう剣を、兄の剣だと思った。?

私はそなたの「剣生き方の道」に憧れたのだ!」

一際強く、ラウラの剣が振られた。? ナギトの太刀が弾かれ、地面に突き刺さる。

ラウラはナギトの腰に両手を回す。? 抱きしめられたナギトは、手に残る痺れに、ラウラの想いを実感した。

? 「好きだ、ナギト」

? それを言われては、もう赤面するしかなかった。? 嬉しくて、嬉しくて、涙が出る。?

隣にある顔も、おそらくは赤面しているのだろう。すぐ横から熱を感じている。それがまた愛しく思える。

「ありが——」

「ゆえに！」

感謝を告げようとするナギトを遮ってラウラがその身を突き飛ばす。

呆気にとられたナギトの顔面にラウラの右拳が突き刺さった。

殴られてぶっ飛んだナギトは仁王立ちするラウラを見やった。

「——ゆえに、許せぬのだ。悪ぶって独りになろうとするそなたを。何故…私だけにでも相談してくれなかった…？」

それは、ラウラがⅦ組の中でも特にナギトの計画に反対を唱えるだろうと思っただからだ。

そんな論理的な回答を求められているわけではないと理解して、返事を紡ぐ事は出来ず。

代わりにラウラが続けた。倒れたナギトの両手を己が両手で包み込んで。

「私は——、そなたとなら悪に堕ちても構わぬと思っているのに」

“「悪は許さぬ」”と公言するラウラのそれは、どうしようもない敗北宣言で。どうしようもなくナギトに惚れているという敗北宣言で。

だからナギトもそんなラウラに負けてしまう。

「いや——、俺が間違つた事をしたらラウラは叱ってくれる、怒ってくれる。正しいところに引き戻してくれる。……たぶん、今回みたいに」

ナギトの言葉を受けてラウラは正気に戻つたようで、浮かされていた熱を振り払うように「ごほん」と咳払いをした。

「う、うん…きつとそうだ。血迷った事を言ったな、忘れよ。……だが、それ以前の言葉は本心だぞ?」

ナギトは「わかってるよ」と言つてラウラに抱きついた。先程の抱擁、その続きの言葉を囁くために。

「ありがとう、ラウラ」

☆★

永遠のような刹那。抱擁を終えた2人に、それぞれの剣を拾ったリインがそれを手渡す。

「もう…いいだろう?」

リインの言葉で、ナギトは察する。すべてバレていたのだと。

今回の「ナギトの真実を得る」という名目で開かれた会議はその実、ナギト自身が罰されたいがためのものだったと。

いくら理論武装しようとする罪は罪。そして罪には罰がつきものだ。
ナギトは市民を幻獣の危険に晒した事に対して罰を欲していたのだ。

そこまで見破られる事はないと高を括っていたが、Ⅶ組の面子はナギトの思惑を見通した。

「ああ、もういい。もう充分だ。すまんかったな」

「別にいいさ。ラウラにきついのお見舞いされてたしな。それで」

あの顔面パンチの事を言っているのだろう。あれでナギトは罰を受けた事になったようだ。

「あー……………、こうなるだろーなってわかってたけどさ、いざ本当にそうになると嬉しいもんだな」

先刻のラウラの言葉は、Ⅶ組の総意でもあった。？ナギトはⅦ組にとって兄のような存在であり、そんなナギトをⅦ組の皆は好いている。

そしてナギトは、それを知っていた。

？だからこそ、ユースに《閃嵐の騎士》について黙っているよう願ったときに「どうせⅦ組は俺を受け入れる」と言ったのだ。

言つてしまえば、計画通り。その計画通りがこの上なく嬉しいのだ。

自分がやってきた事は、紛れも無い悪。？それをⅦ組が受け入れる事はないと思つていた。実際に受け入れてはいない。だが、悪を成したナギトを、Ⅶ組は受け入れた。？それは一重に、ナギトの行動が一つの念の下にあつたからだ。『クロウを救う』ただ一点の曇りなき願いを、美しいと思つた。それを叶えるために悪になる事すら厭わなかつた。？そんなナギトを、仲間としか思えなかつたからだ。

？ナギトは、Ⅶ組が自分を受け入れるだろうと思つていた。確信があつたわけではなかつた。？Ⅶ組に拒絶される事が怖かつた。

だから、受け入れられて嬉しく思つたのだ。

ナギトは、自分の行動を後悔していない。？今回の計画については反省もしていない

い。

しかし、変化した。？Ⅶ組に受け入れられ、ラウラに愛の告白をされ、ナギトの心は
确实、完全に变化した。

？それは些細なことであり、劇的なことでもある。

？ナギト・シユバルツァーがいるこの世界で、それは確かに成されたのだ。

故に、この物語の終末は、确实に変化する。

リヴァル・アルヴァンス

ラウラによる鉄拳制裁をもってナギトの断罪はなされた。

ひとまずはそれでナギトは赦され、真の意味でⅦ組と合流。再び〃手のかかる兄貴分

〃として受け入れられた。

そしてクもう一人の兄貴分ロウを取り戻す決意を新たにしながら1日前。

ナギトはハーメル村の跡地に来ていた。

ナギトの目の前にあるのは、墓標であった。？

隣には黄金の魔剣が突き刺さっている。

？「そうか。……ここがお前の帰る場所だったんだな《劍帝》」

場所は帝国南部。リベールとの国境を間近に控えた、地図から消されてしまった村の

跡地。？そこにはかつて《劍鬼》を下した男の得物があつた。今は半ばから折れてしまった黄金の魔劍。

リベールの異変の際に命を落としたとは聞いていたが、まさかあの男の出身がこの村だったとは。

しかし意外ではなく、むしろ納得していた。それもまた「確信」に連なるナギトの異物性によるものだとして自分で理解している。

「そこにいるのは誰だ?」

突然の声にナギトが振り向くと、そこには自分と同じ漆黒の髪色と、ラウラと同じ琥珀色の瞳を持った青年が、双刀を構えて警戒していた。

その傍らには、いつか出会ったスマイレ色の髪をした少女。

？蛇の人間か？とナギトは勘繰る。？ここに来る前にオリヴァルトから聞いた話では、この地がかなり特殊だという事が理解できた。？その「特殊」には、結社が絡んでいるのか？

？そう考えたナギトだったが、そのすぐ横に、まるで太陽のように光で人々を照らす如き少女がいた。そして、ナギトは先程の思考が愚にもつかない杞憂だと思ひ知る。こ

んな少女が、結社の闇を良しとするわけがない。

そこでナギトはこの人物たちの正体に思い至る。？思い出すのはオリヴァルトがラジオで語る『オリビエ・レンハイムのリベール旅日記』だ。

ナギトは手を挙げてひらひらと振って見せる。戦う意思はないというポーズだ。

？「俺はオリヴァルト皇子が理事長を務める学院の生徒で、名前はナギト・シユバルツァー。そちらさんは、エステルにシユア……それと結社は抜けたのかな、レンちゃんよ？」

そんな発言に黒髪の青年——シユアはさらに警戒レベルを引き上げた。

ナギトの滑稽洒落なあり方は、見知らぬ者からすれば得体の知れなさを感じさせる。

そんな得体の知れない奴が、こちらの素性を知っているようであれば、警戒するなど言う方が無理というものだ。

しかも、普段は冷静なシユアの沸点の低くなる場所が、このハーメル村——彼の故郷だ。

状況は最悪。まさに一触即発——、この場にナギトとシユアの2人だけだったならば。

「そうね、大正解よ《剣鬼》さん。エステルとヨシユアは知らないでしょうけど、オリビエはエステルたちと冒険した事を帝国のラジオで話してるのよね。それでエステルやヨシユアの事を知ったのかしら？」

「そつちこそ大正解……、つーか良く知ってんな」

「レンをあんまり見くびらないでちょうだい」

レンはそう言つて頬を膨らませる。？その様子を見ていたヨシユアがようやく警戒を緩める。

「レン、その人と知り合いなの？」

「知り合い……にはなるのかしら、一応。前に会つた時は、エステルたちと同業者だったわ」

「同業……って、もしかしてアンタ、遊撃士!？」

? 黙っていたエステルが驚きのあまり大声を出す。? その疑問に対してナギトは肩をすくめてから答える。

? 「まあ……そうだった、かな。今は休業中だし」

? 遊撃士のバッジは失くしていた。? いや、《剣帝》に負け、共和国を出たあの日、あの支部に置いてきた。

「あ、あんですって〜!？」

ナギトの答えにエステルはまたも驚愕する。? 特徴的な驚き方だな、とナギトは少し笑った。

「…さて、今度はこつちから質問、いいかな?」

エステルの驚きに毒を抜かれたのか、ヨシユアは警戒を解いた。それを見計らってナギトは質問する。

「ここに立つてただけで、えらい警戒のしようだったけど、このハーメル村について何か知ってたりするのかな？ 加えて……………」

？ ナギトは地面に刺さっている、半ばから折れた魔剣の柄尻に触れた。

？ 「この黄金の剣の持ち主——《剣帝》を知っている。そうだね？」

その言葉に大きく反応したのはヨシユアだった。エステルも反応していたがヨシユアのそれと比べると小さなものだ。

？ 「レーヴェを……………知ってるのか？」

？ 「レーヴェ——レオンハルト、そう略すのか。ああ、知っているとも。俺はやつに敗れた。ただ戦っただけの間柄だが、あいつが修羅道を歩んでいた事は知っている」

？ 「そうだったのか……………レーヴェ……………。ええと、ナギトさん。レーヴェは僕たちを護つて命を落としました。僕たちの道を切り拓いてくれた」

？ 「そうか……………、最期には修羅の道から脱したのか」

あの男。《劍帝》レオンハルト。自らの歩む道を「修羅の道」と語り、その意地をもつて《劍鬼》を打ち破つた猛者だったが。

どうやら最期には正道に立ち戻つたらしい。きつとそこには、このヨシユアの存在があつたのだと確信した。

「そういえば、まだ聞いていませんでしたね。なぜこのハーメルに？」

？ヨシユアは、ナギトとレーヴェの間に因縁を感じ取つたが、それは彼とレーヴェの因縁で自分には関係ない。「影の国」で話もできたし、心残りが無い……と言えば嘘になるが、彼の生涯をすべて暴きたいわけでもなく聞く事をやめ、その後ハーメルに来た理由を尋ねた。

？ナギトは、その問いに待つてましたとばかりに答える。ヨシユアなら、おそらくオリヴァルトが言つていたハーメルの悲劇について知つてはいるはずだ。

「ああ、俺はハーメルの悲劇について知りたい。そしてハーメルを含むこの地を治めていたアルヴァンス家についても」

？ヨシユアは、ナギトからそう言われると予測していた。この地に来た者は皆、ハーメルの悲劇について知りたがる。だが同時にナギトがただ興味本位で探つてゐるわけ

はない事も理解した。

「ハーメルの悲劇と、アルヴァンス家についてですか」

「ねえヨシユア……言っちゃってもいいの？」

？ヨシユアが話そうとするのを見てエステルが遠慮がちにヨシユアの袖を引っ張る。レンは黙って行く末を見守っていた。

？「エステル、彼の目を見るんだ。ナギトさんはハーメルの真実を知って決して間違いを起こさない。僕は信じてるから話すんだ。オリビエさんの紹介も同然だしね」

？「ヨシユアがそう言うなら……わかったわ、私も信じようじゃないの！」

エステル了解も得られた所で、ヨシユアはハーメルの悲劇について語り始めた。

かつて、この地にのどかな村があった。？名を、ハーメル村。だがその平和な村をある日突然、悲劇が襲った。

リベール王国製の装備を纏った数十名が村を襲撃したのだ。

？「みんな殺された……女子供問わず、行商人や旅行者まで……！」

? エレボニア帝国は、それをリベール王国によるものと断定し、戦争を仕掛ける。後の
“百日戦役”である。

宣戦布告と同時に攻め込むエレボニアは、その軍事力により瞬く間にリベールの都市を制圧していく。その最中、ハーメルを襲撃したのがエレボニア帝国主戦派の雇った野盗と判明。

? 「ハーメルの悲劇はエレボニア帝国主戦派が戦争を仕掛けるための自作自演だった……」

? エレボニア帝国はその事実を消し去るために、主戦派を処分し、リベールにある提案を持ちかける。

それは、ハーメルの悲劇の真実について口を噤むのなら、軍を撤退させるというものだった。? 秘密裏に契約は交わされ、リベールはハーメルの沈黙を守る事を条件にエレボニア軍を撤退させた。

? 「時を同じくして、リベールの猛反撃が開始された事もあり、エレボニアの撤退は自然なものに演出された」

それで終わりかと思ったナギトだったが、ヨシユアはさらに言葉を続ける。

? ハーメルの悲劇には、さらなる裏が存在した。? そのそもその原因となったエレボニア

帝国主戦派。その連中を唆したのが、結社の一柱だと言うのだ。

？ 結社《身喰らう蛇》が《蛇の使徒》第三柱《白面》のワイスマン——すべてのきつかけとなったこの男を倒すために《剣帝》は犠牲になったそうだ。

？ 「これが、ハーメルの悲劇についての全容だ。すまないが、アルヴァンス家について詳しい事は知らない。ハーメルを含むここ一帯を統治していた貴族というくらいしか……」

ナギトはヨシユアの話聞いて、自分の持っている情報と齟齬がない事を確認する。惜しくもアルヴァンス家についてはヨシユアも知らないようだったが、今回はハーメル村を自分の目で見られただけでも収穫としよう。

「そうだったのか……悪いな、嫌な事を思い出させたみたいで」

「いや、大丈夫だよ。こっちこそ、あまり力になれなくてすまない」

？と、そこでナギトは誰かがここに近づいてくる気配を感じた。それはヨシユアも同じ

ようで、二人して同じ方向を見つめる。

その方向からは、貴族風の衣装に身を包んだ男性が歩いて来ていた。

？ 近づくにつれ、その人物の顔がはつきりと見えてきた。端正な顔立ちに、整えられた髪。身を包む衣装は装飾は少ないが、どこか華のあるものだ。

ナギトは、いつもとの印象の違いに「冗談だろ」という台詞が喉元まで出かかった。

「これは珍客だな。まさか、こんな所で懐かしい顔に会うとは。……いや、これも必然か？」

？ その人物は、ヨシユアとナギトを交互に見ながら淡々と言葉を続ける。

？ 「まずは再会の挨拶といこう。久しぶりだ、ヨシユア。大きくなつたな。まあ、それは俺もだろうが」

「フフ」と優しく笑うそいつは、ナギトの戦友。

「リヴァル……」

ナギトが呟いたその名前にヨシユアは反応した。

？「リヴァル………——リヴァルって、あのリヴァル!？」

「そうだ、あのリヴァルだ。ようやく思い出したか、ヨシユア」

？ヨシユアはリヴァルの事を知っていた。？近くの村の子供で、たまにハーメルに来ては一緒に遊んでいた覚えがある。そこでヨシユアは回想から現実に舞い戻ると、目の前ではリヴァルが頭を下げていた。

「すまない………、ここハーメル村が悲劇に見舞われ、その事実が闇に葬られた事………すべては防げなかった我がアルヴァンス家の責任だ。どうか存分になじってくれ」

困惑するヨシユアと、納得するナギト。？ヨシユアにハーメルの悲劇について聞いてから、そんな事だろうとは思っていた。

？「いや、待ってくれ。リヴァル……、アルヴァンス家と言えば、この一帯を治めていた貴族の名前だ」

？「そうだ、ヨシユア。俺は昔、ここに遊びに来る時は身分を偽っていた。貴族の子息と知れば対等に扱ってくれないからな。まあ、カリンとレーヴェは気づいてみたい

だが」

？ヨシユアは「全然わからなかった」と漏らして、それからリヴァルを見つめる。

「リヴァル……、でも僕はアルヴァンス家を、君を責めたりなんかしない。聞いた話だと、アルヴァンス家はハーメルの悲劇の後に没落したそうだね。ハーメルの悲劇について調べようとして、帝国の後始末に巻き込まれたんだろう」

？ヨシユアの推測に、リヴァルは何も言わない。？正解なのだ。そしてそれは、ナギトも考えていた事だった。

？「僕は君を責めたりしない。むしろ、逃げる事しかできなかった僕より、君たちの方が立派だ」

「そうか……、そう言ってくれると助かる」

リヴァルの沈んだ表情が、幾分か普段に戻った所でレンがヨシユアに声をかけた。

「ヨシユア、そろそろ急がないと間に合わなくなっちゃうわ」

「そうだね、レン。もう行こう。レーヴェエヤカリン姉さんに挨拶して、と」

ヨシユアは墓標の前に立ち、柔らかな笑顔を見せた。名を出した二人と語らっているのだろうかとは、容易に想像できる。

ヨシユアは暫くそうしてから立ち上がる。

その様子を見ていたナギトとリヴァルに目を合わせ、言った。

「不躰なお願いなのはわかってるけど、僕たちと一緒に来てくれないかな？」

唐突な願いに、ナギトとリヴァルは思考をフリーズさせる。

？「ちよつと何言ってるのよ、ヨシユア」

？エステルが慌てたようにヨシユアにその意図を尋ねる。ヨシユアの答えは簡潔なものだった。

？「エステルだってわかるだろう。？この二人の実力……気当たりだけでもすごいじゃないか。特にナギトさんは、父さんやレーヴェエと渡り合うんじゃないかと思うくらい

だ」

？「そうね、レーヴエにそのナギトは負けちゃったみたいだけど、紙一重だったみたいよ」

？ヨシユアの言葉に反応したのはレンだ。？レンの言う紙一重はしかし、とてつもなく大きい紙一重なのだが。

「え……確かに。でもヨシユア、巻き込めないよ」

？エステルも二人の実力を理解したようだが、それでも巻き込めないと言う。

？そこでようやく思考フリーズから解放されたナギトがヨシユアの願いにN oと返す。

「すまんがヨシユア、俺も忙しくなりそうなんだ。付き合う事はできない。仲間も待たせてるしな」

？「俺もだ、ヨシユア。帝国が今、酷い状況なのは知ってるだろう？俺たちはそれを平定するために戦ってるんだ」

ナギトとリヴァルの答えを受けて、ヨシユアは「やつぱりそうですよね」とそこまで気にした様子もなく、踵を返した。

「それじゃあまたどこかで。僕はヨシユア・ブライト」

？「私はエステル・ブライト」

？「……………レンよ」

名乗っていないかっと思ひ出したのか、ヨシユアは自己紹介し、それにエステルとレンも続く。

二人の姓を聞いて、ナギトは「ブライトって、カシウス・ブライトの子供かよ!？」と叫ぶ。

「オリビエ・レンハイムのリベール旅日記」では登場人物のファーストネームは出てもファミリーネームは出ないのだ。

？ヨシユアは「僕は養子だけどね」と笑い、そのまま去って行った。

一度だけエステルが振り返り手を振ってくれる。明るい娘だな、とナギトとリヴアルは笑う。？三人の姿が見えなくなった頃、リヴアルがナギトに声をかけた。

？「力を取り戻したか。記憶の方はまだみたいだな？」

鋭い推測に苦笑いするナギト。

？「正解。今度はこつちから聞くけど、お前さんがここに来た理由は？」

「……ん、まあ………たまにはな」

齒切れの悪い答えだが、それ以上追求はしない。

「そうか」と受け取ったナギトと正面から向かい合つてリヴァルは問う。

「俺の事を探っているな？」

？その情報をどこから仕入れたのか、または単に勘なのかはわからない。ナギトはただ「ああ」と答える。

リヴァルは嘆息し、自らの身の上を語り出した。

？「俺の本名はリヴァル・アルヴァンス——この地を治めるアルヴァンス男爵家の人間だった。ハーメルの悲劇については知ってるか？」

？ナギトは答える「ああ」。それはさつきヨシユアに聞かされたばかりだ。

？「そのハーメルの悲劇に連なる、アルヴァンス男爵家の悲劇………それがリヴァル・ア

ルヴァンスが、ただのリヴァルへとなった理由……つまり、俺の原点だ」

？リヴァルの原点。それを聞いて、リヴァルがこれまでファミリーネームを名乗らなかった理由に合点がいった。

？アルヴァンス男爵家の悲劇で、リヴァル・アルヴァンスは死んだ。そして復讐鬼としてリヴァルが誕生した。それだけの理由だ。故にリヴァルは己がファミリーネームを語らないのだ。

？「言つてしまえば簡単な事だ。領内で起きた悲劇——それについて裏があると思いついて調べ、消された。それだけのことだった」

？ナギトは何も言えなかった。？淡々と語るリヴァルだが、その内には今も怨嗟の炎が渦巻いているのを感じ取ったからだ。？その炎の前には、どんな言葉も燃やし尽くされてしまうだろう。

？「父が、母が、領内で起きた異変は見逃せぬと屋敷を飛び出した。調査に次ぐ調査……悲劇の直後だった。政府の見解、自然災害による悲劇じゃない事は明白だった。……ハーメルは何者かに襲撃された。それを政府は隠している。つまり、この悲劇は政府によつて起こされたものだ」と父母は考えたんだろう。そして、その事実を公表しようとして、抹消された。……それが《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンの初仕事だった」

? 抹消。たった二文字に込められた意味。文字通りのそれに、リヴァルは何を思っているのだろうか。

「銃弾を腹に七発。しかし、俺は襲撃の翌朝まで生き延び、昨日の銃声を不審に思っていた領民に助けられ、生き残った。リヴァル・アルヴァンスが死んだのはその時だ。アルヴァンス男爵家の人間が生きていれば《鉄血》は必ず動く。だから、死んだ事にした。アルヴァンス男爵家に生まれた以上、貴族として生きるしかない。その生き様に復讐なんでものは許されない。だが、復讐はしなくてはいけない。だから、俺はアルヴァンスの名を捨てた」

何も言えなかったナギトに、話し終えたリヴァルは問う。「どうだった?」と。

それでもナギトは何も答えない。リヴァルはさらに踏み込んだ。「満足したか?」と。ナギトは瞑目したまま動かない。? リヴァルが、ひよつとしてこいつ、寝てるんじゃないだろうか。と思つたところで、ナギトはようやく開眼した。

? 「リヴァル………俺に、お前のすべてを受け止められる器量はあると思うか」

今度はリヴァルが瞑目する。？いくつかの思考の後、その問いに答える。

？「受け止める必要はない。俺の復讐はすでに終わっているはずだからな」

？言葉にある違和感を指摘せず、ナギトは「それでも」と続ける。

？「俺はお前を受け止たい。——お前の、友達でありたいと……俺自身が思ってるからだ」

ナギトにとってリインやⅦ組のみんな、それ以外の人たちは全員、言わば憧れの人だった。小説の登場人物が目の前に現れたようで興奮した。

だがリヴァルは違う。リヴァルだけがナギトの等身大の友人だった。憧れはなく、老婆心もなく、純粹に付き合える友達。

「受け止める」なんて口で言う程簡単な事ではない。それをわかっていてなお、ナギトは「それでも」と言ったのだ。

？大仰な理由などない。大層な理由などない。貴族連合にいた時に、いろいろと面倒を見てもらったから？共に戦ったから？もちろんそれもある。

だが、ここにあるのはただの友愛——僅かな時でも一緒に笑ったから。それはもう友達だと感じているから——

「俺たちは戦う運命にある。……ナギト、俺が新たな《閃嵐の騎士》である事はわかってるな？」

？リヴァルが言いたい事は、すぐにでも理解できた。ナギトは間を置かずして答える。

「わかってるさ、新しいオルディーネ・イミテーションに乗るリヴァル……間違ひなく強敵だろうな。だけど、敵は仲間じゃなくても友達ではあれるんだぜ？」

リヴァルのそれは突き放す言葉だった。しかしそれにナギトは笑って答える。敵である事実と友達である事実は矛盾しないと。

そんなナギトの言葉にリヴァルもまた笑った。？鬼とまで呼ばれる男がなんと青臭い台詞を並べたてたものだ。？しかし、同時にリヴァルは理解していた。ナギトは冗談は多く口にするが、嘘も言わない事を。

？それならば、もはや言う事は一つしかない。

「剣を抜け、ナギト。その覚悟……測ってやろう」

☆★

黄金の魔劍が風を切り裂く。？墓標のそばにある草が風に揺れる。風が通り過ぎると同時に、二人は劍を抜いた。

？「言っておくがナギト。今日の俺を、お前が知っているリヴァルと思うな。今日の俺はリヴァル・アルヴァンスだ」

？劍を構えるリヴァル。その手に握られているのは騎士劍だ。？なるほど、宮廷劍術か。これまでの右手に劍、左手に銃を持つスタイルは悲劇の後に身につけたものなのだろう。

？ナギトはその言葉を受け取り、不敵な笑みを浮かべてから太刀を構えた。

「こい、リヴァル・アルヴァンス」

？「ああ。いくぞ、ナギト！」

そうして、二人の闘いが始まった。

先手を仕掛けたのは、リヴァルだ。

帝国において、長年培われてきた宮廷剣術。？それは実戦的でありながら華やかである。一種の機能美と言ったところか。

？一太刀目をガードすると、次は連続きだ。そのすべてが正確に急所を狙っていた。？ナギトは上体のみを動かして、それを躲す。

リヴァルはそこで、このままでは通じないとわかったのか、一旦退いた。

？「さすがだな。《剣鬼》としての実力を取り戻しただけはある。……なら、これはどうだ」

突如として、リヴァルの騎士剣に白と黒が発生した。包むような白と、うねるような黒。

「復讐を誓った《R（俺）と気高くあろうとする貴族のアルヴァンス（俺）の闘気を両立させたもの——これが、俺のすべて。リヴァル・アルヴァンスのすべてだ」

立ち上る白と黒の闘気は、さすがの一言に尽きる。

だが――

「お前のそれは、これと同じものか？」

だが、《剣鬼》と呼ばれた達人のナギトからすれば、その総量、出力は兎戯に等しい。言うのと同時にナギトの全身から緋色の闘気が噴出した。それは天を衝く勢いで、普段のナギトがどれだけ闘気のロスを抑えて戦っているか伺い知れる。

闘気を可視できるほどまでに密度を高めたオーラは、本人の精神性によって色を変えらる。極一部の猟兵は最強クラスの証として漆黒のオーラを纏う事もあるが。？リヴァルの白黒二色のオーラは確かに珍しくはある。しかしその密度はナギトのそれと比べられるものではない。

「ハツタリかますなよりヴアル。……お前のぜんぶ――余す事なく振るってみせろ！」

《劍鬼》とまで呼ばれた劍の達人。？その实力はまだ扱い慣れていなかったとは言え、クロウの騎神を追い詰めるほどにあった。

いかにリヴァルの復讐の念で煮詰められたものがあつたとしても、張り合うのは無理だつた。

無論それは、鬨気の密度だけで比較すれば、の話である。

「ハッ、よかろう。では、この俺がこれまで培つてきたすべて！受け止めてみせろ！ナギト!!」

全開。全力。全霊。そんなありつたけが、ちっぽけに思えるほどに、力を振り絞る。？限界を超える。究極に至る。まだだ。まだ足りない。もつと。もつと。もつと。

そして、ようやくリヴァルは“そこ”に到達する。？武の頂点“理”ではない。武の煉獄“修羅道”でもない。

貴族としての誇り。復讐鬼としての憎悪。？帝国貴族リヴァル・アルヴァンスとしての人生。《帝国解放戦線》幹部《R》としての生き様。それらすべてを混ぜ、成したものの？文字通りの、リヴァルという男のすべて。

貴族としての誇りが復讐を許さない。？しかしそれは矛盾である。リヴァルが、リヴァル・アルヴァンスであつたからこそ起こつた悲劇。貴族であつたからこそ、起こつた悲劇。その悲劇を起こした者への復讐は、*「アルヴァンス」* だからこそありえるものだ。

？それがようやく調和した。リヴァル・アルヴァンスだけでは到達できない場所へ。復讐者《R》では到達できない場所へ。

？復讐者リヴァル・アルヴァンスだからこそ到達できた境地。

黒はよりどす黒く、白はより透き通る白に。？闘気は輝き、色を深めていく。？可視化されたオーラは全身に迸り、手にある騎士剣には、さらに凝縮されたそれが纏わりつく。

これこそがすべてだ。？リヴァルという男の、これまでの*「すべて」*。
？ここに来てリヴァルは、実力を取り戻したナギトを戦慄させるだけのものを、解放した。

リヴァルの姿が、ブレる。しかし、姿はそのままそこにあつた。気配すらも濃密に。
？《剣鬼》としての実力を取り戻したナギトですら、一瞬前にしか気づけなかつた。

鬨気を置いて、ナギトに肉薄したリヴァルは、そのまま剣を振り下ろす。

すんででガードするナギト。手に余る衝撃は、ラウラのそれに勝るとも劣らないもの。？気配を元の位置に残してからの奇襲。本体の気配は殺しているから、気づくのは至難。

？地面を削って減速するナギトに、リヴァルは追い打ちをかける。

？上下左右、あらゆる方向からかけられる奇襲。

その衝撃を殺しつつ、そのすべてを捌くのはさすがの《剣鬼》とて不可能だった。肩を。胸板を。腿を。脇腹を。剣が掠めていく。

紺色のコートがズタズタに切り裂かれる。

距離をとったリヴァルを睨め付けて、ナギトは布切れと化したコートを捨て去った。

「つたく、お気に入りのコートだったのによ」

白いシャツ姿となったナギト。冬にそれでは寒いのではないか？リヴァルの頭をよぎる余計な疑問は、すぐに解消された。

ナギトの体から湯気が立ち上っている。？リヴァルは理解した。「ようやくウォーミングアップ終了って所か」と尋ねるが、ナギトは不敵に笑うのみ。

ナギトの姿が、ブレる。？濃密な気配をその場に残し——

リヴァルの眼前に現れる、笑み。そう来ることはわかっていた。しかしなんだ、この剣に伝わる衝撃は。

今度はリヴァルが弾かれる番だった。

地面を割ってブレーキをかけるリヴァルは追撃を警戒する。が、来ない。

衝撃による後退が止まったリヴァルが目撃したのは、太刀の峰を肩に起き余裕を見せるナギトの姿。

？リヴァルは「なるほど」と笑う。

？これが天稟。これが天賦。これが《剣鬼》！

次元が違うとは、まさに的確な表現だ。？この男の才は、まさに神の領域にある。もはや、何者かが作為的にナギトに神才を与えたのではないかと言うほど。

？ならば、もはやこれまで。削り合いをしても勝ち目はない。？一発で、一撃で決めるしかない。

？「ナギト……これが俺のすべてだ！全力だ!!その身で受けてみよ、我が ノールリベンジ 貴き復讐を！」

リヴァルのすべてを凝縮した戦技。『貴き復讐』——
劍を振るう。防御される。劍を振るう。防御される。劍の連撃。目にも止まらぬ速さはしかし、通用するものではない。
技術なき連斬など、兎戯に等しい。

ただ、変化は三撃目から起きた。

続けて振られる騎士劍を防御に回そうとして、不可解な白黒が確かな敵意をもつて迫る。？兎にも角にも、まずは劍を止める。脳が出した指令を肉体は受け取り、リヴァルの騎士劍を止めると同時に斬撃が肩を扶る。

四撃目も同じだ。四撃目が、二撃あるという矛盾。それは単にスピードが成したものでない。？鬨気が織り成す刃による斬撃だ。？三撃目にあつた白黒の斬撃は、一撃目の斬撃の軌跡をなぞつたもの。四撃目の白黒の斬撃は二撃目の軌跡を。？言つてしまえば、鬨気による遅延斬撃。それが巧妙な時間差で放たれるために三撃目や四撃目が二撃あるなどという矛盾が発生する。

なるほど、これは防げない。？来るとわかつていても防御する隙間がない。

ナギトは劍を受け止めつつも、確実にダメージを蓄積させていく。皮が削がれる。肌が裂かれる。筋肉が切られる。骨が断たれる。？見事なり、リヴァル・アルヴァンス。

？全身のいたる箇所から血を流すナギト。はたから見れば虫の息というやつだ。それは、対面しているリヴァルから見ても同じだ。

リヴァルは一步退いて、剣に鬨気を収束させる。音を超える速度で振り抜くが、それはナギトの太刀にガードされる。この段に来てまだ防御するだけの気力があるのを、リヴァルは評価する。？しかし、もうこれでチエックメイトだ。

？振り抜いた軌跡を追うように白黒の斬撃が奔る。ナギトはそれすらもガードしたが、もはや体のどこにも力は入らず、その斬撃の威力に弾き飛ばされた。

ボールのように飛んだナギトは樹木に激突し、停止する。そのまま倒れこもうとするが、太刀を地面に突き立てて杖がわりに使うことで拒否した。

？太刀に体重を預けながらナギトは問う。

？「これで、終わりか？」

？それは挑発ではなかった。リヴァルは「ああ、そうだ」と答える。？すると、ナギトは誇らしげに笑った。

？「へへ……どうだ、リヴァル……お前のぜんぶ、受け止めてやった、ぞ……」

リヴァルの思考が白に染まった。？白に染まった頭のどこかで納得する。

あのクロウですら歯が立たなかった《剣鬼》に、自分が通用するわけがない。？その

大前提が崩されたのは、ナギトがリヴァルの全てを受け止めると決意したからだ。その気になれば躲された。そもそも戦技の発動すら許されなかったに違いない。それなのに。受け止めるって言ったから。そのすべてを受け切った。？だから、息も切れ切れで、あと少しで死ぬくせに誇らしげに笑っていられる。

？「チツ……あーあ、くそつたれ。ここまでやったのに俺の負けかよ」

悪態をついてリヴァルは騎士剣を鞘に納める。？ナギトの反応を伺うリヴァルだったが、何も返事がない。というか、最後の台詞からまったく変化がない。

「おい？ナギト？」

リヴァルが睨んだ通りだった。？ナギトは剣を杖に立ったまま、笑っているだけ。変化がないのも当たり前だ。すでに失神している。

血を垂れ流し、死ぬ一歩手前で、しかも敵前で失神？なんてやつだ。

リヴァルは嘆息し、自らのARCUUSを取り出す。

？「まったく、世話の焼けるダチだ」

？回復アーツをかけてやり、ナギトの懐を探つてARCCUSを取り出す。ARCCUSの通話履歴から、自分の知るナギトの知人に連絡を入れる。

ナギト・シュバルツァーが馬鹿やつて死？にかけてるから、早く助けに来てやれ。

？ナギトのARCCUSを元の位置に戻し、リヴアルはハーメルを去る。？去り際に未だ目覚めぬナギトを見て、眩くように声を出す。

「ありがとう」

終章 願いの果て

トールズ士官学院

トールズ士官学院

エレボニア帝国中興の祖《獅子心皇帝》ドライケルス・ライゼ・アルノールが建立した士官学院。？学院で語り継がれている“若者よ、世の礎たれ”はかの獅子心皇帝が遺した言葉だ。

七耀歴1204年4月、その士官学院に新しいクラスが設立された。その名も特科クラス《Ⅶ組》。

《放蕩皇子》ことオリヴァルトが提案し、設立されたこのクラスは、特別実習と称して帝国の各地を訪れていた。

？それは、今も同じだ。？Ⅶ組は色々な場所を訪れて、色々な人と出会い、色々な事を学んだ。

しかし、これは特別実習ではない。？トールズ士官学院（帰る場所）を奪われた。だ

から各地を転々とするしかなかったのだ。

だが、奪われても、抵抗はやめなかった。？正規軍と協力し、貴族連合に支配されていた町を解放した。バリアハートまで解放され、貴族連合はトールズ士官学院のあるトリストタから防衛線を下げざるを得なくなった。わずかな戦力を残し、貴族連合は退いた。

？今は手薄だ。今が好機だ。奪われたものを、取り返せ。

奪還の時、来たれり。

？「本当に行くのか？」

？質問ではなく、確認だった。？作戦開始まで、あと5分を切った。

ラインの視線の先には、全身を包帯で覆うナギトの姿があった。

？「行くとも。……ここで行かなきゃ、格好がつかん」

もつと多くの想いがあつた。もつと多くの言葉があつた。それを一言にした。？それが、そのセリフだった。どうしてこう言ったのか。それは、この言い回しこそがナギト・シユバルツァーらしいと思つたからだ。？トールズ士官学院で過ごして来たナギト・シユバルツァーらしいと思つたからだ。

？「そうか。……なら、行こう。俺たちの士官学院を取り戻しに！」

「……………ああ！」

？そうして、作戦は開始された。

トリストタに残る貴族連合の最後の防衛隊と対峙する。？最後の砦として立ちほだかるゴライアスとケストレルを、ラインとヴァリマールは易々と突破する。その手には、長らくの問題であった武器——その解決策であるゼムリアストーン製の太刀が握られている。

「……お見事」

？カレイジャスからその様子を眺めていたナギトはそう言う。強くなった。太刀筋に迷いが無い。？内戦下という特殊な状況が、急成長を促した。それが正しい成長の仕方ではないとしても喜ばしい事だ。

？こうしてリイン率いるA班は表からトリスタへ突入した。？このトールズ士官学院奪還作戦は表から突入するA班と裏から潜入するB班で構成されていた。

ナギトが所属するA班はトリスタから士官学院に入るルートだった。

？戦闘音が気になって町に顔を出すトリスタ住民たち。しばらくして現れたのは、少し前まで第三学生寮に住んでいた学徒たち。Ⅶ組のメンバーだ。？

その中には、貴族連合に下り士官学院を制圧したと噂される青年がいたものの、その青年と仲間たちの揺るぎない決意を目の当たりにし、住民たちは学徒たちにエールを送る。この顔は信じるに値するものという確信を持って。

学院の校門をくぐると、そこに待っていたのは『騎士団』団長のパトリックだった。？ここにおける『騎士団』とは、貴族連合の指示の元でトールズ士官学院を統治する者たちの総称だ。

？それは当然「貴族連合に従順」と思われている貴族生徒によって構成されている。

その貴族生徒たちも本当は、トールズ士官学院の解放を望んでいた。しかし、それは筋が通らないと言いつ出すのだ。

？トールズ士官学院は内戦開始から僅かで制圧された。そしてその制圧された地を任されたのが騎士団だ。ならば、その騎士団が何もせずにこの学院をあげ渡すのは貴族としての沽券に関わる、と。

？「そうだろう？ナギト・シユバルツァー」

？それが貴族の義務だと言うように、パトリックはナギトに問う。

？「……まったく面倒だなあ、お前ってさ」

それを、ナギトは笑い応える。受けて立つとその笑みから伝わった。

戦闘開始。

VII組メンバー数名と騎士団の4名のバトルが始まる。？ナギトは初めから戦闘不能だ。リヴァルの「貴き復讐」を喰らったせいで、生死の彼岸を行ったり来たり。それから僅か数日後にこの作戦だ。本来なら絶対安静の所を無理言って出て来たのだ。？戦

闘不能なのも理解してくれ、と言うもの。

だが、そのナギトを狙ってパトリックが飛び出して来た。？リインたちが意図的に見逃した節すら窺える。？確かにパトリックとは親交があったが、それにしてもこのフラフラ男に何を望むのか。

？「馬鹿兄貴：氣い効かせたつもりかよ」

？「いつかの続きといこうか！」

パトリックはそんな事を言いながら剣を振り抜いた。直上から真下へ。少なくとも本人はそのつもりだった。

繰り返すが、ナギトは今、戦闘不能だ。絶対安静の状態をおして出て来た。

それでもなお、隔絶した力の差が2人の間にはあった。

？振り下ろされた剣を一步引いて避け、その刀身を掌で回す。重心を崩されたパトリックの顔面を、痛烈な平手打ちが襲った。

？悲鳴をあげながら倒れるパトリック。？今、ナギトに何をされたのかわからない。？剣で切ったと思っただらいつの間にかビンタを喰らっていた。

？倒れたパトリックに、ナギトはいやらしい笑顔を向ける。

？「悪いなパトリック。今は見ての通り重傷なんだ。今は遊んでやるしかできねえわ」
？ナギトの顔の横にゆらく波紋。そこに剣が出現する。「幻造」だ。剣が射出されるが、パトリックは紙一重で避ける。

？「…内戦中に力を上げたようだな」

「そういうお前はあんまり成長してないな」

パトリックの賛辞にナギトは相手をこき下ろす事で答えとした。

そう言うのも当然で、ナギトはかつて《剣鬼》と呼ばれた達人だった頃の実力を取り戻した。それに対してパトリックは学院内で燻っていただけだ。ある程度は鍛えられたとしても、ナギトや内戦で揉まれたⅦ組と比べるとその成長は緩やかなものだ。

「抜かせ。……しかし、君と決着をつけるのにこの場はふさわしくないのは理解した。
……怪我が治ったら再戦だ、いいな？」

「おうよ」

？再戦の誓いに短い言葉で答える。パトリックは満足げに頷くと、リインに向けて歩いていった。

パトリックはリインとも多少なり因縁がある。今この場ではナギトとの因縁よりそちらを優先したのだ。

「初めからそうしろよ」と愚痴めいた言葉を呟きながら、ナギトは笑った。

？戦闘が終了する。

？リインたちがパトリックたちを下したのだ。？その後、B班も合流し学院長らがすでにパトリックらの手によって解放されていた事を知る。

ここにトールズ士官学院の奪還は成った。

☆★

?士官学院生でござつた返す学院の敷地内を闊歩するナギトの肩に大きな手が置かれる。

「ちよつといいかな、ナギトくん」

振り返ると、そこにいたのはヴァンダイク学院長だつた。白髪を蓄える老齡の男性であるが、その筋骨隆々の肉体からは少しも衰えという言葉が思い浮かばない。戦車をぶつた切つたとかいふ逸話を持つ超人だ。

?ナギトが「なんでしよう?」と話を聞く姿勢を見せると「渡したい物があるからついで来てほしい」と言われた。?言われるがままにヴァンダイクの後を追うと、学院長室にたどり着いた。電灯が室内を照らし、机の引き出しを探るヴァンダイクの背中に影をつくる。

ヴァンダイクは「おう、あつたあつた」とそれを引つ張り出すとそれをナギトに手渡した。?それは巻物だつた。どことなく既視感を覚える。ヴァンダイクも東国の筆を嗜むとは聞くが、もしや何らかのメッセージだろうか。

「さるお方からの手紙じゃ。君に向けてのな」

“さるお方”とはもったいつけた言い回しだ。？正規軍名誉元帥の地位を持つヴァンダイクがさるお方と呼ぶこの巻物の送り主とは——
？まさか皇帝とかないよな——などと思いつながら、巻物の紐を解き、最初の一文に目を通す。

？ “馬鹿弟子へ”

「はいクソ」

？その十文字にすら満たない宛名された人物への呼び方で、わかった。半ば反射的に悪態をつく。

？ナギトは右手で頭を抱えて天井を仰いで、そのままヴァンダイクに問うた。

「あの、学院長………これ、マジですか？」

「マジじゃよ」

間を置かぬ即答にナギトは「A h o o o o !」と叫ぶ。

「ファック！全部掌かよ、あのじじい！」

☆☆

？「失礼します」

ナギトはそう言つて学院長室を出た。？巻物にはすでに目を通してあり、師のニヤケ面が浮かぶそれは懐にしまつてある。

？ナギトはトイレに行くと鏡の前に立つて身嗜みを整える。崩れかけた髪型をセツトし、ボタンのかけ違いなどがないか見直す。

着ているのはリヴァルに八つ裂きにされたはずの紺色のコートだ。？「どうせ戦つてる内にボロボロになりそうだな」と考えて予備を用意していたのだ。一張羅の二着目を着ていると言つたところか。

？「さて…と！」

?ナギトはギムナジウムに足を運ぶ。?なぜかと言うと、そこにラウラの気配を見つけ
たからだ。ギムナジウムでも水練に使われる一角にラウラの姿はあつた。友人のモニ
カと一緒に。?ナギトの姿を認めると、モニカは驚くがラウラに何かを呟くと、そのま
ま水練場を走り去っていく。

?ラウラはぎくしゃくした様子でナギトに声をかけた。

?「き、奇遇だな。ナギト……」

「あ、いや。ラウラの気配を追ってここに来ただけだ」

ぬけぬけとそう言うナギトに、ラウラは赤面する。

「なっ……、そうだったのか」

ナギトはそんなラウラの反応を楽しみながらその横に並び、プールに張られた水を見
つめた。

?「……プール、使えるみたいだな」

?赤面させるようなセリフを吐くモードから一転したナギトに内心でホツとしながら、

その声に応える。

？「そのようだな。学院に残った生徒たちが整備してくれていたようだ」

「ここに思い出がある生徒たちが、帰つて来た時に寂しい思いをしないように気を利かせてくれたのかもしれない」

？ラウラの返事がない。？会話が続かないとはこの事だ。ナギト自身がこの話題を続けたいと思つておらず、それをラウラが察したかもしれない。と、ナギトは思い、何か話題を考えるが思い浮かばない。？本題に入ろうとラウラの名を呼んだ所で、ラウラとの互いの名を呼ぶ声が重なる。

それに2人は笑い「どうぞ」と譲り合う。？その譲り合いは果たして、ナギトに軍配が上がつた。

？「ふむ、それでは私から」

ラウラはわざとらしく「んん」と咳払いしてナギトに視線を合わせた。心なしか、その顔は未だ赤面しているように思えた。

？「その……後ででいいのだが。私と一緒に第三学生寮に行かないか？久しぶりに我ら

が過ぎた場所を見ておきたいのだ」

？ラウラの提案に、ナギトは目を見開く。？ナギトの反応にラウラは不安を感じたのか、少し顔を落とす。ほとんど同じ身長なのに上目遣いになった。紅潮した頬に、わずかに潤んでいるような瞳に上目遣いまでされては、ナギトは目をそらすしかない。

？「……あー、いや。全然ダメとかじゃないんだよ。ただ、俺もおんなじ事を考えてたからさ、驚いただけ。返事はもちろんオーケーです！」

？ナギトはなんとかラウラに振り返り、ニカツと笑った。？返事を聞いたラウラは安心し、ナギトとは違いふんわりと笑う。小さく呟く「よかった」はナギトの耳には届かない。

？「んじや、またあとでね、ラウラちゃん。？俺はちよつと話しておきたいやつがいるから」

？ナギトはスチャ、と敬礼紛いにラウラに挨拶し、そのまま水練場にラウラを置いて後にする。？唾然とするラウラだが、たった今ナギトが出て行ったドアが開き、そこに視線を吸い寄せられる。

？「ラウラー、後で連絡するわ」

「う、うむ！ではまた後でな」

それでナギトは今度こそ水練場を後にする。

？ナギトはまた気配感知を行い、そいつを見つけ出す。そいつの元まで行くと、そいつもナギトに気づいた。？ナギトがくいつとアゴを動かす“ついて来い”と言外の内に伝えたのだ。そいつは取り巻きたちを置き去りに、ナギトの後を追った。

？二人の足が向かったのは屋上だ。“コ”の字型に設計されている屋上には、僅かな人影があるのみで、話すには絶好の場であると思えた。

ナギトはそいつを先導し、コの字型の屋上の直角部分に差し掛かり、ベンチに座ってイチャコラするバカツプルを発見した。

「おうコラ、誰に許可とつてここでイチャついてんねん！ああん!?」
？「やめたまえ！チンピラか君は！」

両手をポケットに入れて、肩をくねらせながら威嚇するようにバカツプルに近づくとパトリックに注意された。

「ああ、ナギトか。こうして話すのは久しぶりか？」

？そんな2人のコントをスルーしてナギトに話しかけたのはバカップルの男の方、アランだった。

？「あ、あー、うん。そうかな」

？アランとはフェンシング部で知り合った仲だ。？アランの隣の女子、ブリジットはアランの幼馴染みで、今の甘ったるい雰囲気から察するにようやくくつついたようだ。

ナギトはやらかした気持ちになり、早々にこの場を立ち去らねば！”と思考を加速させる。

？「まあ、なんていうか？末長くお幸せに！」

？とりあえずの着地点が見えて、そこで自分を受け止めようとする者に爆弾を投げ込み、そのまま退散する。

背後からは「ぎ、気が早いってば！」と聞こえた気がしたが、たぶん気がしたただけだ。

ナギトは進み、屋上の鉄柵に両腕を置いて体重をかけた。

？「パトリックやい、お前ずつと俺の事ストーリーキングしてるけどなんのつもり？」

？「君が僕について来いと言ったんだらう！?!明確に言ったわけじゃないが……こう、アゴでくいつとしたじゃないか！」

ナギトのボケにパトリックが見事にツツコミを入れる。パトリックとの付き合いも長くなったもので、これは内戦前の距離感だ。少し懐かしい気持ちになる。
? 「冗談はさておき」

「冗談で済むか! まったく君は……」

ナギトの言葉に翻弄されながらもパトリックは話題を切り替えた。

「その傷はどうした?」

パトリックの疑問はナギトの状態を見たからだ。? 僅かに空いた胸元から首にかけて、肌を晒す隙間すらなく巻きに巻かれた包帯。それを見て傷を負っていると考えるのは当然というものだ。

「これか…まあ、ちよいとな。心配してくれんの?」

「ふん、話し出すきっかけ作りに過ぎん」

ナギトのニヤケ面にパトリックはわざとらしく顔をそらしながら答える。

「ま、心配すんなよ。傷は我が気術により一秒毎に大回復してるわけだから」

？「なんだそのトンデモ回復術は……」

？ナギトの冗談かどうかかわからない発言に反応しつつも追求はせずに、本題に入る。

？「……君には感謝している。僕たちを、トールズ士官学院を助けに来てくれた事を」

ナギトは雰囲気を一変させ、視線をパトリックから夜の影に覆われたグラウンドに移した。

「何の事を言ってるのかさっぱり」

？「君がとぼけるつもりならそれでいいがな……」

ナギトのとぼけつぷりにパトリックは呆れ「それじゃあここからは独り言だ」と続ける。

「内戦直後……僕たちは学院を制圧された怒りで、貴族連合に真つ向から反対していた。今ならわかる。怒りのまま貴族連合に立ち向かえば学院生に被害が出ていた。……それを防ぐには無理矢理にでも冷静になる必要があった」

パトリックの独白は続く。？視線はグラウンドに向いたままだ。それも当然。これは独り言だ。感謝を伝えているわけでもない。視線を合わせる必要もない。

？「その役割を担ったのが、ナギト・シユバルツアーだった。貴族連合の手先として学院に戻ったやつは、熱くなっていた学院生たちを力づくでクールダウンさせた。……少しばかり考える必要があった。やつは学院を裏切ったように振る舞いながらも、その真意は学院のためを思っているように見えた。その謎を解き明かす鍵となったのは、内戦開始当日に交わした言葉の中にあつた。それは僕がやつをライバルと呼び続ける限り、やつは僕のライバルであるという事だ。やつはそれに対して、何にでも当てはまると言った。それは例えばライバルだったり、学友だったり……仲間だったりするわけだ。やつが去った学院で僕は考えた。？仮にやつを仲間だとして、その行動の意味はな

にか？——冷静になつていたから、答えはすぐにわかった。怒りのままに貴族連合に反旗を翻していれば怪我では済まなかつただろう、とな。やつは何を語っていた？その行動は何よりも雄弁だった。やつは学院生でもトップクラスの實力者を倒して見せた。僕にはやつこの行動がこう思えたのだ。『俺に任せておけ。こんなに力があるんだから大丈夫だ。その代わり、お前たちは学院を頼む』——果たして有言は実行された。やつは仲間と共に学院に舞い戻り、貴族連合の魔の手から解放した」

？語り終えたパトリックは途端に沈黙した。？やけに饒舌になつていた事を今更になつて恥じているのだろうか？

ナギトはそんな雰囲気を打ち破るべく、ナギトらしい茶化し方をする。

「まあ、その感謝は受け取っておくとして」

「つて、やつぱりわかつてるじゃないか！」

「まあまあ、そんなツツコミ役狙わんといてや」

「狙つてなどいない！君がボケ続けるから自然と出るだけだ」

パトリックの切り返しに、ナギトは面食らつたように一瞬黙つてから笑う。パトリックもそんなナギトを見て笑つた。？楽しい。可笑しい。面白い。良かった。この自由に笑い合える場所を取り戻せて。

？二人でひとしきり笑い合つた後、ナギトは「それじゃ、またな」と唐突に別れを告げた。

？「どこにいくつもりだ？」

？パトリックの素朴な疑問に、ナギトはいつもの笑みのまま答える。

「どこつてパトリック……、そりゃあお前…… 家 だろ」

そう言つたナギトは振り返らずに屋上から姿を消した。

パトリックはその背中に「なるほど」と声を浴びせる。あいつの家と言えば、あそこしかない。

「つと、そうだパトリック」

屋上から消えたナギトが、ドアから半身だけ姿を見せて質問を投げかける。

「貴族連合の支配中に、この学院に変なじーさん来なかった？」

パトリックは記憶を甦らせる。思い出されたのは苦い記憶だ。

「あ、ああ来たぞ。……どんな手段を用いたのか、貴族連合の監視をすり抜けて敷地に入ってたな、僕ら『騎士団』が止めようとしたが、何もわからない内に転ばされていた。……どうやらヴァンダイク学院長の古い友人らしいが……」

「かつ！ まったく……。了解、知りたかったのはそれだけだ。んじゃ今度こそバイバイ」

やはりナギトの育て親にして師匠は、この学院に立ち入って逸話を残していったらしい。そんな話になどなく、あの人らしい」と感じつつ、ナギトは屋上を出た。

☆★

?校舎から出て人混みの中でARCCUSを懐から取り出す。?そろそろラウラと合流して第三学生寮に向かおう。通話履歴からラウラの番号を呼び出そうとして、分かりやすいシンボルを見つけた。

「おーい、ラウラー！」

?青い髪と私服は、学生服を着込んでいる他の学院生とは異なり個性的である。私服という個性はナギトも同じで、ラウラは声に反応してナギトを見つけた。

様子を見るとラウラもARCCUSでナギトを呼び出そうとしていたらしく「考える事は同じだな」と二人して笑い合った。

「んじや、もう行くか?」

?「うむ、行くでしょう」

2人は並んで、半年以上を過ごした家に向かって歩き出した。

？第三学生寮まであと一つという角を曲がった所で、目的地のドアが閉じられていくのを、ナギトは見た。

閉じるドアの向こう側に消えた人影は二つ。目立つ赤色の衣装はリイン、流れる金砂の如き煌めきの髪色はアリサのものだ。

？それを見たナギトの表情はいつも通り、邪悪な笑みだ。

「ははあん？ほうほう、そうかそうか」

？「クツクツク」と邪な笑みを浮かべるナギトに、後ろから声がかかる。

？「何をやっているのだ」

驚き振り向くと、そこにいたのは自分とラウラと先の2人を除くⅦ組の全員だ。

？その足はやはり、第三学生寮に向いていた。？なんだ、考える事は同じか。ナギトはそう思い、その笑顔から邪悪なものが消えた。と、思いきや、邪悪なものは声をかけてきたユースに転移していたのだ。

「おやおや、これはもしましや……逢引の邪魔をってしまったかな？」

「くつ……この野郎、こんな時だけわざとらしく貴族口調を使いやがって」

「でも、否定はしないんだな」

「マキアス！否定なんてするわけないだろ！つーかお前ら息びったりだなこんちくちよう！」

「息びったり、そう言えばユーシスとマキアスは取り乱すと知っていたからそう言う。？それ以外の面子には「否定なんてするわけないだろ！」で赤面させて黙らせた。それで空気は一転する。

「いいか？俺とラウラはさつき、リインとアリサが学生寮に入って行くのを見た」

「へえ、なるほどね。読めたわ」

「まだそれだけしか言っていないのに読めたと言うサラに「早すぎです」とナギトは苦笑いする。」

「んで、俺たちは学生寮に戻りたい。だがリインとアリサを邪魔するのも忍びない」

「あ、それが名分ですね」

お前もか、エマ。

皆まで言うなと言われているようだが、ナギトは続けた。

「そこで、そこで折半案がありますれば。俺たちがリインとアリサにバレないように学生寮に入るんだ」

？「要はあの二人のやりとりを覗こうという話だな」

「お前、要約し過ぎだ。俺が下世話好きなやつみたいじゃねえか」

？話を簡潔にまとめたユースに悪態を吐く。しかしⅦ組の皆はナギトの折半案に賛成のようだ。こんな面白いもの、見逃せない！とでも言うように。唯一、止めるかと思われたラウラでさえ、好奇心には勝てないようだった。

「少し……重いのだが」

「すまんが我慢してくれ」

シーつと言うようにガイウスに謝る。？リインとアリサの二人は二階の窓から街道を見下ろせる位置に立って話していた。？その二人にバレないように話を盗み聞きするためには階段に詰めるしかないのだが、詰めるためには重なる必要があつた。上に。？当然の如く、最もガタイの良いガイウスが一番下となるわけだが、それで先程の意見が出たわけだ。

？2人の会話は、すでに終盤に差し掛かっているらしかった。

「——好きだ、アリサ。この先、何があるかと……たとえ互いの道が別れてしまつたとしても。君を愛しく想うことだけは決して変わらないと思う」

告白。リインはアリサの目をまっすぐに見つめて愛を語った。

たまらない。好きな人にあんな顔をされて、そんな事を言われては、たまらない。？
アリサがリインに抱きつく。リインは優しく受け止めて、両手をアリサの背中に回した。

「悩んで、苦しみながらも、どこまでもまっすぐに、*“前”*を向いている……そんなあなたと一緒にいたから……道を見出す勇気を掴む事ができた。？私も——あなたの事が好きよ、リイン」

2人の唇が重なった。

その長いようで一瞬のような口づけは、「あいて！」というトボけたような声で遮られた。

ガイウスが支える盗み聞き組の最上に位置するミリアムが落つこちたのだ。ドスンという効果音と共に痛みを口にする。

？それで気づかれたと悟った全員がリインとアリサの前に姿を現した。

「ミリアム！それにみんな……サラ教官まで!？」

？驚くりインと、わなわなと震えるアリサ。？そんな二人にわかりやすいようにナギトはグツドサインを出した。

？それはもう、満面のニヤケ面で。

「グーじゃないわよ！あんたの手引きね、ナギト!」

？顔をひっぱたかん勢いでアリサはナギトのグツドサインを叩き落とした。

？「みんなもなに笑ってるのよ、もう!」

？アリサはぷりぷりと怒ってそっぽ向くが、次の瞬間には、その首がぐるんと回ってナギトを見た。それはいつものナギトのような邪悪な笑み……その様子は言ってしまうと、とても恥ずかしいが、それ以上に面白いものを思い出した、というようなものだ。？きんぱつのあくま、降臨である。

「ナギト……私、知ってるんだからね。あなた、ラウラと二人きりで会う約束してたそうじゃない？しかもこの場所で」

なぜお前がそれを知っている??ナギトは考えたが、弾き出された答えは一つだ。視線をラウラにぶつける。?その視線から逃れるようにラウラは目を逸らした。

?「おいしい!ラ〜〜ウ〜〜ラ〜〜さ〜〜ん!」

?ここに来る前に、ラウラはアリサに相談していたのだ。ナギトと共に学生寮に行く事になったのだが、どうすればいいのか?という内容だ。?その答えは「ありのままがいんじゃない?」というものだったのだが、その代償がこれとは。

これから何が起きるのか、それは言うまでもない事だが、あえて言うのなら、それは公開処刑だ。

ルールは二つ。

? 一つは、ここでやるつもりだった行動をとる事。

? 一つは、みんなをいないものとして振る舞う事。

? 「やつと……取り戻せたんだな。ここを……俺たちの第三学生寮……家を……」

ナギトは愛おしげに壁のレンガを撫でる。いつもの見慣れた風景の一部が、こんなにも懐かしい。

対するラウラは未だ硬い。みんなに見られている事を意識しているのだ。? しかしナギトは初っ端から全開である。聞いている側が恥ずかしくなるようなセリフを並べ立てるつもりだった。?

「う、うむ……そうだな。ようやく帰って来る事ができた」

?しかし、ラウラもまたふっきれる事にした。?私はもう、大半の生徒が見てる中でナギトへの想いを語ったではないか。

?ラウラは「ナギト」と名を呼び、その視線を自らに求める。ナギトは求めに応じて、ラウラを見る。琥珀色の瞳は、この前知り合ったヨシユアと同じだな、なんて思考を吹っ飛ばす爆弾が投下された。

?「私の想いは先にも伝えた通りだ。私はそなたに惚れている。そなたの事が好きなのだ。どうしようもなく、これ以上なく……我が人生において最上と定めた剣の道と並ぶ程に……」

?その言葉に、ナギトは顔面をぶっ叩かれたような衝撃を受けた。驚いたわけではないが、その上目遣いは反則過ぎる。

?「故に……そなたにもう一度問いたいのだ。ナギト、剣の道は好きか……?」

?その質問は当然のように、あの時を思い出させる。とある教室に拵えられた偽物だが

美しい、星空の庭園。

？ナギトは一瞬だけ太刀に目を落とした。？左手で柄を撫でる。その感触はいつでも隣にあったものだ。？記憶を取り戻していかなかったあの頃の答えを否定するつもりはない。？だがそれでも、ナギトは新しい答えを声にした。

？「あの時の俺は、剣は誰かを守る力になるから剣の道が好きだと言った。……その答えは今でも変わらない。……だけど、その意味を、今の俺は理解している。誰かを守るだけなら、槍でもいい、弓でもいい、銃だつていい。でもなんで剣なのか——それは剣でしかわからないものがあるからだ。剣以外じゃ伝わらないものがあるからだ。少しばかり記憶を取り戻したけど、その根源にあったのはやはり剣だった。俺の人生は剣の道そのものだ。……上手くは言えないけどさ、生まれた時から共にあったものだから。もう分かち難く結びついて離れないものになつちまつてるわけなんだよ。だから好きだよ、ラウラ。俺は剣の道も」

剣の道 “も”。

それだけでナギトは流れを変じさせた。

複数形が示す他のものは、たった一つしかない。ラウラだ。

? ラウラはそれを理解してより一層、頬を紅潮させた。そして、言葉では表せない想いを行動で表現した。

? ナギトの手がラウラの手に絡め取られ、胸元に誘われた。今度はナギトが頬を紅潮させる番だったが、ラウラは構わずに続けた。

? 「この鼓動は未来永劫そなたのものだ。私の道は……これからずつとそなたと共にあると誓おう。しかしこれは私の我が儘でしかない。だから聞かせてくれ……ナギト。

そなたは……私の事が……好き、か?」

? これはいけない。こりやあもう無理ですな、ラウラさんよ。? YES以外の答えがないとはこの事だ。

そんな潤んだ瞳で、そんな事を聞かれてしまつては、答えは一つしかない。

ナギトは空いている左手を顔に当てながら天井を仰ぐ。

? 「あー、これはもうダメだ。辛抱たまらんです。全部終わつてから、とか無理だわ」

? ナギトは天井からラウラに視線を移動させる。? 今度こそは視線を逸らさずにまっすぐに瞳を見つめて、答えを口にした。

「好きだ、ラウラ。大好きだ。愛してる」

? ラウラがそうしたように、ナギトも言葉にできない想いを行動で表そうとして、顔を近づける。? 唇が触れ合うまであと僅かという所で、たつた一本の指に止められた。? ラウラの人差し指だった。唇に感じるその感触が、記憶に残るラウラの唇の感触と酷似していると脳裏によぎるが、それは今では些細な事でしかない。

拒否された? その推測は瞬時に否定される。眼前の瞳は、それを望んでいるが、それ以上に言葉を求めているのだ。

「……………辛抱がたまらんのだろう?」

? 至近距離で見るラウラは、いつもとは違っているように思えた。それはただの錯覚なのか、それとも今のラウラは普段と違っているのか。

そう聞いたラウラは、意地悪に口角を釣り上げる。流れた汗が首を伝って胸元に消えていく。

？「もう、全部終わってから、では無理なのだろう？」

そう問うラウラを表現する言葉が見つかった。妖艶だ。今のラウラは妖艶なのだ。空腹な所に餌を出されてからおあずけを食らっているような気分になる。欲しい。ラウラ。食べてしまいたい。だけど、逆らうなんてとんでもない。

「だったら、言う事があるはずだ。そうだな、ナギト……」

？ナギトは、ラウラが求めているものを必死に考えた。言う事？あの時、俺は何と言った？学院祭のステラガルテンで。

？—— “全部終わったら、俺の方から正式に言わせてほしい” “

？そう言った。ああなるほど。ナギトは納得した。ラウラらしい。つまりはちゃんと手順を踏め、と。ラウラの指が唇から離れる。？ナギトは自由となったその口で、望まれたセリフを口にする。その後、言えなかったセリフを。ずっと言えなかった言葉を。

？「ラウラ、好きだ。俺と付き合ってほしい」

? 空白など、ない。? 沈黙など、もつてのほか。

? ナギトとラウラの二人は、互いに惚れ合っていたのだ。しかも、互いに好きになった理由は、相手の剣の道生き方惚れたからだ。この結末は当然と言うもの。

言葉を受け取ってラウラは両手をナギトの首に回す。唇と唇が触れ合う直前に、ナギトだけに聞こえるようにラウラは囁いた。

「——喜んで」

そうして、窓に映る影が一つに重なった。

同志

? トールズ士官学院解放後、第三の風はなにをするのか。
? それについては、すでに決まっていた。

カレル離宮の解放——そこに囚われている皇帝の解放だ。

ナギトが第三の風に合流した際に伝えた情報に、皇族の軟禁場所について、というのがあった。? 場所はカレル離宮。今回、正規軍から得られた情報と同じだ。ナギトが貴族連合を離脱してからも皇族の軟禁場所に変更はなかったようだ。?

なにせ、カレル離宮は守り易く攻め難い立地にある。陸路は鉄道のみで、そこには当然のように貴族連合の兵が詰めている。? 攻略は難航を極めるだろう。陸路からならば。カレイジャスならば、がら空き空から攻める事ができる。

それが正規軍が第三の風に協力を願った理由であり、第三の風がそれに応じた理由で

あつた。

カレル離宮には皇帝、皇族の他にエリゼやリーグニツツ帝都知事が囚われているという話だ。？第三の風の身内。カレル離宮を解放する名分はたつたというわけだ。

☆★

？「行け。ここから先は誰も通さん。ここから前にも誰も出さんがな」

カレル離宮より飛び出した機甲兵ジークフリート——ナギトは、地上に降り立ち、その決意を言葉にした。

その言葉があつたから、VII組の全員はその場をナギトに任せる事ができた。

カレル離宮への奇襲。？空からの急襲を予期していなかった貴族連合は後手に回った。

カレイジヤスから飛び出したのはⅦ組を筆頭とした士官学院の生徒たちだ。？Ⅶ組という少数精鋭でカレル離宮の解放を行う。それ以外はカレイジヤス外部の敵の排除だ。

「デケエのは任せろ！みんなは歩兵を頼む！」

ナギトはジークフリートの内部からそう叫んで、機甲兵用太刀を構えた。

戦車や機甲兵は俺がやる。だから歩兵は任せたぞ。

—そう言われた学院生たちは奮い立つ。？ここにいるのは他ならぬナギト・シユバルツアード。トールズ士官学院において最強と囁かれる男。？そんな男に、背中には任せると言われたのだ。それは士気もあがるというもの。

カレル離宮に攻めるなら鉄道から来る。なぜならそこからしかカレル離宮にはアクセスできないから。

?その前提はカレイジャスの存在が覆した。

結果、駅付近に展開されていた貴族連合兵はカレル離宮に急ぎ移動する事になった。

?カレル離宮の解放。それは貴族連合の兵力が集中していない今でしかない作戦だ。

兵力が集い、学院生たちが突破されればカレル離宮の解放は至難となる。?故に、VII組によるカレル離宮解放には速さが求められる。VII組によるカレル離宮の解放は、この作戦でもっとも重要なことだ。

?しかしその重要度と難易度はイコールではない。

ナギトを筆頭とするカレル離宮防衛貴族連合兵足止め隊の瓦解は、作戦そのものの失敗に直結するわけではない。しかし、その難易度はVII組による人質奪還より遥かに高かった。

?たった1部隊でも通せばアウト。それくらいの気概でやらなければ、すぐにでも数多

くの部隊をカレル離宮に踏み込ませてしまふだろう。

故に、1部隊も、1人たりとも通してはならぬ。

? 学院生たちの気迫には鬼気迫るものがあつた。

いかに経験で劣ると言つても気迫で勝る相手には吞まれてしまふものだ。? これまで群で戦つてきた貴族連合の兵は、数を頼みに戦つてきた貴族連合の兵は、恐怖した。

皇帝の解放という大義名分を果たすために学院生たちは命すらかけるだろう。? 対する自分たちは何だ? 皇帝を軟禁し、それを外に出すまいと足掻いているだけ。

貴族連合の兵は気迫で負けていたのだ。

しかし、それでも一筋縄ではいかないのが大人だ。

? 「怯むな! 押し返せえ!」

隊長の声で隊の気力が復活する。さらなる気力を得て学院生に銃を向け、刃を振るう。

?それを、

?「おおオラア！」

? たった一太刀が霧散させる。

誰もが、その音に耳を傾けた。戦いすら一時中断するほどに、洗練された剣の一振り。?
まるで素振りするように、鉄を両断するジークフリートの一太刀を。

貴族連合の兵は再び気迫を失する。? そうさせたのは、まぎれもなくナギトの強さだ。
? “戦闘” という行為をする以上は頭にチラつく、憧れる。それは強さという指標だ。
? 誰もが夢見る称号 “最強”。それに近いものを、ナギトに見出したのだ。

？ 脳裏をかすめる、敗北の二文字。それは氣迫を失わせるには十分だった。

一刀両断された機甲兵が爆発し、巻き上がった砂埃が晴れた向こうに、また新しい影。

？ それは、オルディーネと同じ形をした影だ。

？ 「来たか」

一も二もなく理解したナギトは、短く呟く。

？ 《蒼の騎神》と同じ形をしているそれは、コピーだ。オルディーネの偽物。色の塗られていないそれは、オルディーネ・イミテーション。

？ 「待たせたな」

？ 白と黒が入り乱れる鬨気を纏うそれは、すでに本気である証なのだろうか。

？ 「リヴァル、お前のゼンプを受け止めた。お前との因縁に、ここで終止符を打つ。それが終わったら……：そうだな、今度は剣を向け合わない友達になろう」

ナギトの言葉に、リヴァルは何も返さない。

無言のまま剣を構えるオルディーネ・イミテーションにジークフリートも剣を構えた。

「いくぜリヴァル」

誰も見惚れる戦いの幕があけた。

？ 中空に描かれては消える、白と黒、そして緋の軌跡。？ 弧状にぶつかり合うそれが剣

撃のものであると、わかっていながら理解していなかった。

?まるで、美術館に来ているような錯覚すら覚えている。?それほどに、この二機の舞は芸術的だった。

まるで示し合わせたように弾かれる斬撃の軌跡と鳴る剣撃の音。?二機の戦いは、見る者にとって舞踊に感じられた事だろう。?それだけ、その二機の実力は拮抗していた。

機体そのものの性能はほぼ同等。操縦技術はリヴァルが上。?ではなぜ拮抗しているのか?生身の實力において、ナギトがリヴァルを大きく上回っているからだ。

今やナギトの實力は、内戦という状況下で強者溢れる帝国においても指折りのものだ。?もともとの戦闘力もさる事ながら、ナギトは『強さ』を手に入れた。

その強さは、最後の最後で最も重要になるちからだ。?言わば《剣帝》の修羅のような強さだ。ナギトの強さは《剣帝》の強さとは真逆に位置するものだが。

?ナギトは半ば確信していた。自分が今《理》にかなり近い所にいると。あと一歩だ

?しかし、その一線を画していない以上は、未だ到達者たちに届き得ぬとも理解して
いた。

?拮抗したままでは罅が明かない、とジークフリートは一旦距離を取った。

?太刀を構え直すジークフリートに、オルディーネ・イミテーションの中からリヴァル
が声をかけた。

「さすがに強いな、ナギト」

?その言葉に、ナギトは疑問を覚える。?さつきまで無口だったリヴァルがこの段に
なつて口を開く?まさか時間稼ぎか?

考えてそれが正解だったと知る。

?「クロウの真似じゃないが、奥の手を使うしかないじゃないか」

?オルディーネ・イミテーションの、装甲が外れた。オルディーネの偽物だったそれが、
別の機甲兵に変貌する。?それはもうオルディーネ・イミテーションではない。まったく
新しくリヴァル専用機だ。?無色の装甲が剥がれ落ちたそこから現れたのは、オル

ディーネとは真逆の緋色だ。

？「装甲を外すことで機甲兵にかかる負担を減らし、スピードも上昇する。防御力は当然ダウンするがな。赫く染められたこの機体は、古の暴竜の名を戴く。オルディーネの偽物から脱皮したこいつは騎神から竜へと変貌した……こいつの名は『フアフニール』。行くぞ、『ジークフリート』！」

？緋の機甲兵『フアフニール』と銀の機甲兵『ジークフリート』。

ナギトは、理解した。

「ふざつ——けるなああああああ!!!」

故に、激怒した。

ふざけるな。お前は、俺の誓いを破らせるつもりか。

もしこれが単なる挑発でも、ナギトはリヴァルの決意を否定しなければならない。

ジークフリートは太刀を手にファフニールに斬りかかる。鋭い二連撃は“閃光斬”だ。

?ナギトの激昂を読んでいたリヴァルは、素早くファフニールを後退させて一撃は躲した。

リヴァルにとって予想外だったのは、怒りに任せて放たれた斬撃が、二つだった事だ。?ナギトは確かに激昂していた。振り下ろす剣には冷静さはなく、戦技など使うべくもない。

しかし《剣鬼》としての力を取り戻したナギトにとって“閃光斬”は、戦技とは呼べぬ通常攻撃だった。

?だから、リヴァルに予測できなかったのは“閃光斬”二撃目だった。?一撃目の斬撃を躲し、追撃が来る前にカウンターを合わせようとしたファフニールに“閃光斬”の二撃目が襲いかかる。

?しかし、その二撃目の速き事はまさしく閃きの如く、ファフニールが踏み込む前に剣は振られてしまう。?しかし、太刀の鋒は間違いなくファフニールの装甲を切り裂いた。たとえ薄くであったとしても、リヴァルの受けた衝撃は大きいものだった。

? 驚いたリヴァルはファフニールを後退させ、提げていた機甲兵用ライフルを手にとつて、迷いなく引き金を引いた。

戦車を一時的にクラッシュさせるほどの威力をもつ銃弾……とは最早呼べぬミサイルが、ジークフリートに迫る。

が、ジークフリートは太刀を振るいミサイルを両断した。そして、そのワンアクション分の遅れが発生する。

? ファフニールは撃ったライフルをそのまま手放し、ブレードでジークフリートに切りかかった。

ジークフリート内部で、ナギトは確かにその挙動を見切っていた。しかし、見切っていたとしても対応できるかどうかは別の話だ。

機甲兵の性能の問題である。リヴァルのミサイル↓ブレードの連撃は見事だ。初めのミサイルを迎撃される事を見越した上での攻撃。? 言わば、ミサイルに対処させる事で次の攻撃であるブレードに対応させる時間を与えない、という戦術だ。

? 「やるな」とナギトは呟く。単純な戦闘なら自分が一枚上手と見ていたが、機甲兵が絡むだけでこんなに変わるか。

その思考には、まだ余裕があった。? 対応できないのは「完璧には」というだけだ。

？完璧なノーダメージでの回避、防御は無理なら。どこかを犠牲にして生き残れ。

ジークフリートは、左腕を差し出して難を逃れた。

ガシャン、と大仰な音を立ててジークフリートの左腕が地面と激突した。？肩口からバツサリいかれたそれは、当然ながらも使用不可だ。

？しかし、意に介さず。

？リベンジの狙いでは敵機を切り裂くはずだった一撃はその左腕を断つのに留まった。それは予想外。体勢を整える時間は――

？「やるかよ！」

その心中を察したようにジークフリートの中からナギトが叫ぶ。今度は俺の番だと。さあ、どう対応する？

回転した。ファフニールはジークフリートの太刀筋に合わせるように回転したのだ。

? 「螺旋」——、こいつつ!」

斬撃と同じ方向に回転する事で、その威力を逃す様は八葉一刀流、はじまりの極点と同じ発想だ。? 最も、八葉一刀流の「螺旋」は攻撃にも応用される、正直わけのわからないくらいのスグレモノなのだが、リヴァルのこれは明らかにナギトがやっていたのを、見て習得したのだろう。

? しかし、やはり完璧ではない。? 生身であるならその完成度は推して測るべしものなのだが、機甲兵なのが災いしたのだろう。? ファフニールは一太刀の威力を逃しながら、しかし背面に大きな傷をつけられてしまった。

? 「ちつ………」

漏らしたのは苦悶の声ではなく舌打ち。リヴァルにとって、この傷は予想していたものなのだろうか? と思いつながらナギトは追撃する。

回転で威力を殺したファフニールは、完全には体勢を整えておらず、ジークフリートの追撃に後手に回る。

ジークフリートの左腕は損壊し、太刀を握る右腕だけでは、両腕でブレードを握るファフニールには力負けするのが道理だ。？しかし、その道理をわきまえぬが如き一撃一撃を、ファフニールに叩き込む。

？ジークフリートの全身を包む緋き鬨気のためだ。？機甲兵という人間のサイズを大きく越したその全身に鬨気を纏わせる事は至難である。しかし、それが大きな意味を持つかと問われれば、その解は否。気を鎧のように着込む技術も存在するが、機甲兵の全身を包もうとすれば、その気力は一瞬にして枯渇してしまう。？故にナギトは気を纏うだけに留めているのだ。しかし、気を纏うだけでは大きな意味がないと言うなら、何が一撃を重くするのか？

それは鬨気溢れるが故である。？鬨気と言えば、戦闘においてあらゆる性質を変化させて戦技発動を助するものと武術的には解が出ている。？しかし、元を辿れば鬨気とは字の如く鬨う気持ちだ。この鬨気をナギトは出そうとして出しているわけではない。憎い相手を前に殺気が漏れるのと同様に、リヴァルと鬨いたい気持ちが、自然と鬨気を噴出させるに至ったのだ。？それが理屈を超えた力を生み出している。

それが、リヴアルの計画通りと知りもせず。

「ぜあつー！」

？攻撃を受け続けるリヴアルではない。？連撃の狭間に隙を見つけた瞬間、剣に闘気を集中させて次撃を弾く。

？ファフニールはブレードを構える。ゆったりとしていながらも隙のない構えは宮廷剣術のもの。大量生産の機甲兵用ブレードすら名剣に見せるのは、やはり洗練されているからだろう。

？「ゆくぞ」

ゆらり、と白と黒の闘気が陽炎のように踊る。ナギトには次に何が来るかわかった。
ノブルリベンジ 貴き復讐だ。リヴアルという男の集大成。

この前、生身で戦った時はこれを受けて敗北した。？いや、あれは試合に負けて勝負に勝ったとナギトは思っているが、今回ばかりはマジでやばい。

前回は受けて負けたわけだが、そこには受けないという選択肢があった。戦技発動の

前に倒す、戦技を回避する。『貴き復讐』は一度剣を受ければ回避不可の絶技と化すが、発動前から行動すれば回避は可能だ。？しかし、今回は互いにオルディーネ・イミテーションという機体の性能は同じであり、発動前にどうにかする、という選択肢はない。つまり受けるしかないのだ。生身でない故に完成度は落ちるだろうが、それでも脅威である事には変わりはない。

気づけば、すでにブレードは目の前だった。

リヴァルの計画に、自らの勝利は組み込まれていない。

ナギトの誤算と言え、そこからになる。？否、ナギトはそれに感づきはした。感づきはしたが、そんなわけあるかと断じた。心の奥底ではそれに納得していながらも。

？「ふざけるな」それがナギトの感想だ。？それはリヴァルのオルディーネ・イミテー

シヨンの名を聞いた故の言葉。？「ファフニール」緋に染まった機体の名は、かつて伝説で英雄「ジークフリート」に敗れた竜から取られている。

リヴァルの狙いは伝説の再現だ。ジークフリートがファフニールを討つ。

ナギトが許せなかったのは、そこだ。

？ふざけるな。お前のゼンプを受け止めると決めた俺に、その誓いを破らせるつもりか。？リヴァル、ハナつから死ぬつもりで戦いに臨んでんじやねえ！

対するリヴァルはファフニールを操縦をしながら、その表情は微笑みを湛えていた。？まるで子供のじやれ合いを見ているかのような、柔らかな笑み。

リヴァルは、満足していたのだ。

？アルヴァンスの誇りが許さぬ復讐のために姓を捨てた。しかし《R》では、鉄血宰相に恨みのないただのリヴァルでは、復讐はできない。

それでも憎悪の感情を捨り出し、怒りの鉄槌を下した。

？復讐を果たしたのは《帝国解放戦線》の“リヴァル”で、鉄血宰相に家族を奪われた“リヴァル・アルヴァンス”の復讐への念は宙ぶらりんになってしまった。？二重人格というわけではない。誇り高いアルヴァンス男爵家の人間として復讐は相応しくないと思つたリヴァルはアルヴァンスの名を捨てたのだ。しかし、復讐の権利を持つのは“リヴァル・アルヴァンス”で姓なき“リヴァル”ではない。リヴァルはアルヴァンスの姓と決別したが故に復讐の権利を失つた。？復讐の権利を失つたまま復讐を果たしたために、本来の復讐者であるリヴァル・アルヴァンスの復讐は不可能になってしまった。はじまりからちぐはぐだったのだ。？復讐したいと立ち上がったのはリヴァル・アルヴァンスだった。だが、アルヴァンスに復讐は相応しくないと姓を捨てたせいで復讐願望まで一緒に捨ててしまった。

本当ならば“貴き復讐”はギリアス・オズボーンに叩き込むはずだった技だ。？なのに、貴族ではないリヴァルではそれが許されない。リヴァル・アルヴァンスだけが許される技だった。そしてそれは、ギリアス・オズボーンが斃れたために、振るわれるはずがなかった技。

？—— “俺はお前を受け止たい。——お前の、友達でありたいと……俺自身が思つてるからだ”

?その言葉で、何かが変わったわけではない。ただ気づいただけだ。?自分の、リヴァ
ル・アルヴァンスという男のすべてが何なのか。

“貴き復讐”?——それは帝国貴族リヴァル・アルヴァンスの復讐という物語そのも
のである。

それをナギトは受け切った。リヴァル・アルヴァンスの人生を。?受け切られてし
まったリヴァルはそれで満足してしまったのだ。

?自分の願望はすでに叶った。

自分の人生は満ち足りたものだ実感した。

だから、あとは命をどう使うかだ。

?その答えが、これだった。

復讐を成した今、リヴァルには何も無い。?生きる理由が、幸せを享受する権利が、誇
りを取り戻す資格が。

ならばせめて、この命を捨てて、連鎖を断ち切ろう。

ナギトには悪い事をする。

俺を友と呼んでくれたお前に、俺の命を奪わせるなんて、とんだ悲劇だ。？だが、それしか手はないんだ。復讐の連鎖を止める手段は。？正規軍でも貴族連合でもない、第三勢力のお前だからこそ、それができる。

復讐の連鎖の終焉。？それが、俺の死ぬ大義名分だ。

実のところ、他の目的もある。？鉄血宰相を討ち果たした今、《帝国解放戦線》の幹部である事にかかほどの意味があるか、考えた事はあるか??……結果から言えば、印象操作のためだ。？ナギトの《幻獣討伐作戦》と狙いは同じさ。貴族連合の英雄である《閃嵐の騎士》を、Ⅶ組が斃す事で、帝国国民にⅦ組は正義の味方であるという印象を植え付ける。

クロウの救済だ。

？故郷を奪われ、復讐のためだけに生きてきたあいつは、幸せにならなきやいけない。？そのために俺の命を使えるのなら、容赦なく使い潰すまでだ。？……お前らさ、あんまり気づいてなかっただろうけど俺の方が結構年上なんだぞ。だからここは少しば

かり、兄貴面させてもらう。

ナギト、お前はⅦ組の仲間たちと一緒にクロウを取り戻せ。そのための道は拓いてやるから。

?すまないな、ナギト。詫びの品は一ヶ月後くらいに届けるから、それで勘弁してくれ。

繰り返される斬撃の雨嵐。一つを防御したと思えば、もう一つが装甲を削る。?発動したが最後、無欠の戦技「貴き復讐」。

逃げ場のない斬撃を受けるジークフリートの中で、ナギトは隙を見つけた。?フアフニールがオーバーヒートしたのだから知らないが、動きが鈍ったのだ。

逆転の芽はここしかない。?守勢を解いて攻撃に移るジークフリートだったが。瞬間、ナギトは気づく。?そのあからさまに作られた隙間は、リヴアルの命脈を絶つ所に位置していると。?このまま剣を振るえば、友の命を絶つ事になる。?しかし、ナギトが手に込める力を緩める事はなかった。

ここまで、全部思い通りかよ！

機甲兵の名をファフニールにしたのはナギトの怒りを誘い、攻撃を単調にするため。
？ファフニールの装甲を外したのは『貴き復讐』を発動するためのスピードを得、且つ隙を突かせる事で一撃で自分を殺させるため。

「くッ———そ、がああああ!!!」

その狙いは、果たされた。

戦闘開始から終了まですべてがリヴアルの掌の上の出来事であり、その勝負を制した男は、死ぬ事で次代に希望を繋げたのだ。

目の前には、赫き機甲兵の残骸が転がっている。？暴竜ファフニールは英雄ジークフリートによって討ち滅ぼされる。この戦いは書き手——リヴァルの思い通りとなったわけだ。

？「くそつたれ」

ナギトはもう一度悪態を吐く。

気配を探ってみるも、当然のように残骸の中にそれは感じない。？当たり前だ。なにせ自分が剣を振り抜いたのだから、それで生きていられたら八葉の名折れというものだ。

？全部が、リヴァルの思惑通りに進んだのだと理解していた。？ナギトが突いたファフニールの隙は、リヴァルが意図して作り出したものだった。リヴァルは死ぬために自ら隙を作り出したのだ。？そして、その隙を突かなければナギトの方が殺されていた。〃貴き復讐〃の次撃にはそれだけの力が込められてた。

友をその手にかけたナギトの胸中は、悔恨の念でいっぱいだった。？こうするしかない。そうしろと言われたような気がした。？それでも、何か他に救う手立てはなかったのか？自分が腹立たしい。リヴァルを殺すのがその時の最善手であると確信した自分が。迷いなく剣を振り抜いた自分が。

「……………くそつたれ」

？悪態を吐くナギトの声に力はなかった。

？そんなナギトの耳朵を打つ歌声。

その発生源を見つめるナギトは目を細める。

？「これは……………」

？この歌声は、まさしく《深淵》の魔女のもの——

そのメロディは美しいと呼ぶ他ない。？しかし、どこか恐怖を煽るような、どこか昏いものを感じる。

歌声に合わせるように地響きが始まる。偶然でない事は火を見るよりも明らかだ。尋常ではない魔が帝都に集中していくのがわかる。

空が暗黒に染まる。

地響きが最高潮に達すると同時に、帝都の中心が魔のすべてを顕在化した。

「バルフレイム宮が……！チツ………つたく、感傷に浸る暇もねえなあ………」

バルフレイム宮の威容が変化した。？変化という表現が可愛く感じるほどの変貌だ。？黒く染まった外見に禍々しく緋いオーラを纏っているそれは、フィクションを愛する自分だからこそ、こんな表現ができるのだろう。

「ハッ、まるで魔王城か」

？ 咳くナギトは、久しく聞いていた。？ 自身の存在意義を。 誕生理由を。 人々の願いを。

？
—— 運命を、 変えろ ——

明日を掴むために

リヴァルとの戦いを終え、バルフレイム宮の変貌を見届けたナギトはⅦ組と合流した。

軟禁されていた皇帝やレーグニッツ帝都知事、エリゼなどと少しばかり言葉を交わし、変貌したバルフレイム宮——“煌魔城”へと向かう事になった。

Ⅶ組の面子がカレイジャスに戻る中、ナギトだけがその場に残る。

「ナギト？」

カレル離宮の広間からナギトを呼びリインを「先に行け」としつしつ、と追い払うようにして遠ざけた後、憤怒を、悔恨を、傲慢を、憐憫を——、それらすべてをない混ぜにした静謐で皇帝ユーゲントに向き直った。

「皇帝ユーゲントⅢ世陛下、失礼を承知で言います」

広間にはナギトとユーゲントの他に皇妃プリシラ、帝都知事カール、TMP将校クレア、エリゼと揃っている。その全員の眼差しがナギトに向けられるが、そんな事は意にも介さずナギトは続ける。

「どうして貴方は——そんな諦めたような顔をしているんですか？」

その言葉の意味を、深く理解できた者はいない。ただ向けられたユーゲントだけがナギトの慧眼に刮目したのみだ。

「確かにこの状況、貴方が慌てふためいた所で何も変わらない。でもだからって、その顔はないでしょう…?!? そんな…何もかも放棄して人任せみてえな面…：：：皇帝がしてちゃ士気に関わる！」

とんでもない暴言だ。国家の最高権力者に対する暴言。それに警告しようとしたクレアとカールを皇帝自らが制した。

「余は……………」

しばらくの沈黙の後、口を開きかけたユーゲントを問うたナギト自身が待ったをかける。

「いやいい。俺がくつちやべりたいだけだ」

皇帝の言葉を遮る——、不敬罪が適用されそうな状況下でなおナギトの決意は揺らがない。

「俺はさつき、友達を殺した。……たぶん、俺の…俺自身がつくった最初の友達だった」

リヴァル・アルヴァンス。復讐に生き、友情に死んだ男。

あいつは^権リインや^存クロウとは違う、ナギトにとって唯一の等身大の友達だった。

「あいつの剣を受けて俺が死ぬ未来もあった。でも俺はそれを選ばなかった。それは俺

の中に明確な優先順位があつたからだ」

ユーゲントをはじめ、広間の面々はナギトの独白を黙つて見届ける構えだ。

「俺たちの願いのため……俺は剣を振るつた。……それはきつと正しい事だ」

ナギトの内側で木霊する声。俺たちの願い。そのためにナギトは剣を振つた。リヴァルの命を断つた。天秤は拮抗せずに友を裁いた。

「でもそんな正しさはクソ喰らえだ」

あの時あの瞬間、他の選択肢はなかつたのかもしれない。だけどナギトはあの刹那を生涯、後悔と共に忘れる事がないと確信している。

「俺はもう何も諦めたくない」

トールズも、VII組も、クロウも。その他すべて、ナギトが大切に思うすべてを。

「俺はもう何も諦めない……！」

そう決意するのが少しでも早ければ、あの友は救えただろうか。

「だから俺はこう言う」

ナギトは右拳を突き出した。そして宣言する。

それは紛れもない決意表明だった。

「運命様、上等だ！……こんなクソツタレな御伽噺の結末は俺が変えてやる！」

☆★

「ナギト兄様……」

カレル離宮の広間から消えゆくナギトの背を見送りながら、エリゼはその名を呟い

た。

それに反応したのは皇帝ユーゲントだ。

「そうか……彼が………」

ユーゲントは当然、ナギトがかつて《剣鬼》と呼ばれた男だという事を知っている。その彼が息子が理事長を務めるツールズ士官学院で飼われている事も。

だが聞いた話と、先程の青年の印象はまるで違っていた。

「『運命様、上等だ』……か」

ユーゲントは口の中だけで唱えたのはナギトの言葉だ。あまりにも青臭く、魅力的に聞こえるセリフだ。

「陛下」とプリシラが不安げにユーゲントを見つめた。しかし見上げたユーゲントの頬には微かな笑み。

「フフ……久しく感じなかった熱を覚えたぞ」

ユーゲントはもう喪つたはずの熱を確かに感じていた。

《放蕩皇子》と揶揄される息子よりなお破天荒だった皇太子ユーゲントだった頃の記憶。何だつてできる、何にだつてなれると思つていたあの頃を。

「これも師の薰陶か……いや彼生来の資質……」

「その全てでしょう。師の教え、生来の在り方……そして、ツールズで得たものも」

ユーゲントの思考を答えに導いたのはカールだった。帝都知事にしてツールズ士官学院の常任理事であるカール・レーグニツは息子マキアスを通してナギトを知っている。

「そう思うのは理事の欲目かもしれませんが」

カールが強かに笑うとユーゲントもまた笑んで、消えたナギトの姿を思い浮かべた。

「——良き巡り合わせを得たのだろうか。……ナギト・シユバルツァーか……」

こうして密かに、確かに、縁は結ばれたのだった。



「神気合一——！」

リインが使いこなした「鬼の力」は騎神にまで影響を及ぼした。神気の発露と共にヴァリマールから噴出したのは金色の霊力。

溢れ出る力の波はすでに超級で、その一刀をもって煌魔城の門扉を両断。Ⅶ組一行は煌魔城に乗り込んだ。

煌魔城出現の影響でドライケルス広場に出現した魔煌兵は士官学院の生徒と教員に任せ、Ⅶ組メンバーは煌魔城に突入する。

カレイジヤスから飛び降りたヴァリマールは煌魔城の城門を容易く切り裂く。がその下に霊的な障壁が現れ、道を阻んだ。障壁は城門を切り裂くヴァリマールの一撃をはじき返し、Ⅶ組の入城を拒む。

しかし、神気を解放して力を上乘せしたリイン——ヴァリマールの一太刀で障壁もを突破してⅦ組一行は煌魔城に入った。

「障壁は閉じられたみたいだな……」

？ナギトはすでに遠くなつた城門の方向を見て呟く。当然のように返事をする者はいない。

引き返す事はできないって事だ。もとより最初から引き返すつもりもないのだが。とナギトはひとりごちる。？もうわかつているのだ。ここに來ることがナギト・シユバルツァーの運命だったのだと。

？運命を変える事こそが、自分に課せられた使命……運命であつたのだと。誰の運命なのか、など考えればすぐにわかる事だ。

？ヴァリマールは予見の通り動けなくなり、オルディーネ——クロウとの決戦に備える事となる。

？ダンジョンの攻略前にやる事と言えば一つだ。ナギトはしばらく単独行動ばかりしていたから聞くのは久しぶりとなる。

？「トールズ士官学院、特科クラス《Ⅶ組》——これより異変を食い止めるべく、《煌魔城》の探索を開始する。それぞれの明日を掴むため……何よりも俺たちが《Ⅶ組》として培ってきたものをクロウたちに証明するために。今はただ、ひたすらに前へ進もう。状況開始——各自、全力を尽くしてくれ！」

？今は聞きなれた／懐かしいリインの号令。？それにⅦ組メンバーは「おおっ！」と応える。

Ⅶ組は煌魔城の探索に乗り出した。

☆★

第一層、ブルブランとデュバリイを突破し。

第二層、ゼノとレオニダスを突破し。

第三層、《却炎》を——

「纏の太刀、青龍！」

《却炎》を、突破——

「いいんじゃないかねえか？……お前ら」

——突破、できない。

《却炎》のマクバーン——結社《身喰らう蛇》最強の男。

結社《身喰らう蛇》最強の女アリアンロードが武の化身なら、マクバーンは暴の化身。

その彼が本気を出した姿は《火焰魔人》と呼ばれ、その名の通り人間離れした力を発

揮した。

「はっ……はっ……くっ……」

ナギトがいる事はⅦ組にとって必ずしもプラスに働くわけではない。

今回の場合で言えば、第一層と第二層の守護者であった結社の猛者2名と《西風の旅団》連隊長2名は、Ⅶ組が意地を見せてそれぞれ下してきた。

しかしこの第三層の番人たるマクバーンは格が違った。

ナギトがいるせいで本来より早く《却炎》を突破してしまったせいで、その真価たる《火焰魔人》としての威容を解放させてしまったのだ。

その圧倒的な焰の前にⅦ組一行は平伏した。剣を杖にダウンを拒否したナギトも肩で息をする有様で、他のメンバーはそれより尚ひどい状況だった。

リインはそんな状況を鑑みて騎神を呼び出そうとする。

「待て……」

「だが……ナギト……！」

その行為を止めたナギトに、リインは悲痛な顔を見せる。リインとてわかっているのだ。騎神を持ち出した所でマクバーンに勝てる保証はなく、よしんば勝てたとしても次に控えるクロウとの戦いに響く事を。

「まあ……任せてみろよ」

軽々に言つて見せるナギトはようやくやく息を整えて前に出た。

「鬼気合一！」

ナギトにとってそれは最早、あまり意味のない自己暗示だった。前までは《剣鬼》往時の実力を取り戻す絶招としてナギトの奥義であったが、《剣鬼》としての実力を取り戻したナギトは今や常時「鬼気合一」状態にあると言つても過言ではない。

しかし、言霊を紡ぐ事で当時を——帝国最強を謳われる《光の剣匠》と伍した当時の無敵感を思い出す事ができる。

ナギトは鬼気を解放するとそれを自身に這わせるように圧縮した。『真気統一』劣化バージョンだ。

「そうか……まだお前がいたな、《剣鬼》」

それを目にしたマクバーンは、変異した魔剣アングバールを振るう。黒焔が斬撃となつてナギトに迫つた。

「残月」

一刀両断。迫る焔を一太刀で霧散させたナギトにマクバーンは目を輝かせた。

「やるじゃねえか……さては力を隠してやがったな？」

「合わせてた……つてのが正しいな。今の俺は少し……違い過ぎる」

ナギトの絶招「鬼気合一」は5度目の特別実習の際、ヴィクターの言葉を受けてナギトが自身の《剣鬼》としての力を受け入れて発揮したもので、その実習の最後アリアンロードの槍技で怪我をした後、失ったものである。

その後《剣鬼》としての記憶を取り戻して鬼気の解放が可能となり、《剣鬼》の実力を取り戻して鬼気を自身に合一するまでに至った。

そうして《剣鬼》往時に限りなく近づいたナギトの実力はⅦ組でも隔絶したものだ。辛うじてついて来れるとするなら、教官であるサラと神気合一したりインに加えて、ナギトと立ち会った際に覚醒したラウラくらいのものだった。

だからナギトは力を抑えていた。Ⅶ組のメンバーと連携をとるために。Ⅶ組の一員として在るために。

だが事ここに至り、実力を隠す真似はしない。

「はっ、そうかよ……じゃあその力…見せてもらおうじゃねえか！」

マクバーンは言うど、魔剣を振るつて先程と同じ焰斬撃を飛ばす。いくつもの焰がナギトに肉薄する。それはⅦ組を殲滅して余りある熱量だ。

「剣鬼七式、二ノ太刀」

しかし、それを前にしたナギトには一片の恐怖もなく。

「絶刃壁」

太刀を縦横無尽に振るつて刃の壁と成す。その斬撃の壁の前にはいかな焰も煙もなくて——否、煙さえ斬り刻まれて消え去るのみ。

「剣鬼七式、六ノ太刀」

マクバーンが目を見張つた一瞬で今度はナギトが攻めた。

「閃行嵐舞」

《閃嵐の騎士》——その異名を基に開発した戦技。それが『閃行嵐舞』だ。閃きの如く踏み込み、嵐の如き斬撃を刻む。

隔絶した剣速は刹那で無数の斬撃を成し、それをもって斬撃の嵐とした。

「ハハツ……！——アングボール！」

絶死のはずの斬撃の檻をもともしないマクバーン。《火焰魔人》は魔剣を掲げると焰を凝縮させて一刀のもとに解き放った。斬撃の嵐を焼き尽くして焰はナギトに迫る。

「螺旋——魔剣返し！」

迫る焰を巻き上げてマクバーンに返却する。ナギトの剣圧が上乗せされた焰は再度、絶死の形相だ。

「いいじゃねえかッ——！！」

それを嬉々として受け止めるマクバーン。まだまだ。もつともつと。アツくなれる。

「ジリオン——」

右手の魔剣で返された焰を受け止めつつ、空いた左手に却炎を集約させる。

「奥義——応龍裂破」

そこに刻まれるのは龍の爪に見立てた三閃。重く鋭い斬撃にマクバーンはたたたらを踏んだ。

ナギトはたたみかける。太刀を構えて戦技を装填していく。

大刀錬、衝刀練、劍妙斂——

三つの斬撃を一太刀で結ぶ。故に——

「三明一け——」

「——ハザードオ！」

ナギトが太刀を振り抜くより先に、マクバーンが却炎を撃ち放った。

「——っ！」

ナギトの心には油断があつた。マクバーンを「暴の化身」と評した事もそうだ。マクバーンは体勢を崩されて尚、戦技を継続できる技量があるとは思つていなかった。たたみかける、なんて表現がそも自分が押しているという錯覚——

「超過式——」

ナギトの太刀から解放された闘気が周囲に拡散した。収束する時間は瞬きの程しかなく。

「八卦覇掌！」

その一瞬で鬪気は掌を形作ると、8つの防壁となつてジリオンハザードを阻むが、それらは脆くも破られていく。しかしその威力は大きく減衰された。

ナギトは「三明一結」のために集約した鬪気を別の戦技に切り替える。

「神威残月——！」

神速の剣閃はジリオンハザードを2つに断ち、そのままマクバーンに直撃した。

「くっ……！」

真つ二つになつたジリオンハザードはその場で爆ぜて、解き放たれた焰がナギトを煽る。

「ぐうっ！」

マクバーンは魔剣で神威残月をガードし、ナギトはギリオンハザードをそもそも受けてない。爆炎の煽りを受けただけ。互いにノーダメージ。

それなのに、憔悴の度合いではナギトが先を行っている。

ブルブランにしろデュバライにしろゼノにしろレオニダスにしろ、ここまで煌魔城を駆け上がって来るのに突破してきた敵たちは、正直言つて強いが、度が過ぎていてるわけではない。

だがこのマクバーンだけは格が違った。未だに底が見えない。敗北の2文字が頭を掠め——、あるいは戦いを見守っているⅦ組を先行させるかと思案する。

「ククク………いいいぜ《剣鬼》——いやナギト・シュバルツァー！　ここまで愉しませてくれたのはあの阿呆以来だ」

その選択肢だけはありえない。

ナギトを除くⅦ組で煌魔城最上層に行けばそれはこれまでの焼き増しに過ぎない。だからこそ、ナギトはここでマクバーンを下さなければならぬ。

「喜んでくれて何より。……ふう、仕方ない。これはまだ未完成だが——」

ナギトの強みは、闘気の総量にある。それをを用いてSクラフト級の戦技を連発して相手を圧倒するのが——見せかけのスタイル。

本来は技術で翻弄するのがナギトのスタイルだ。

そしてこの新たな戦技は、その2つのいいところ取りを目的に考案したもの。

「——周天・緋浴連理の陣」

ナギトの闘気が拡散した。ナギトを中心に半径5アージュほどの半球場にドームが広がる。それはきらきらとした緋色の欠片が舞う空間だ。

それは言ってしまうえば、ナギトの闘気の領域。

「へえ……？」

マクバーンは、その意味を理解していない。しかし興味は惹かれた。

あの《劍帝》と同じくらいに自分を愉しませてくれる男が、未完成ながら披露する代物だ。これならマクバーンに対抗できると踏んだ戦技だ。

「さあ！もつと俺をアツくさせてみる！」

「来い…《火炎魔人》！俺の結界を——」

「——その必要はない」

声が。

マクバーンの足元に展開する2つの魔法陣。それは一瞬で形を成して滅光を立ち上らせる。

飛び退いて躲したマクバーンを絡め取ったのは鋼糸。その五体を縛り付ける《死線》。

そして、そこに刻まれるのは――

「――奥義・洗風劍！」

アルゼイドの絶技。光が収束した極限の一振り。帝国最強を謳われる《光の劍匠》の宝劍。

「おおっ………！」

魔人マクバーンは斬撃に押されるようにして柱に背中を打ちつけて膝をついた。ここまでナギトができなかったマクバーンにダメージを与えるという事柄をやつてのけたのは4人の勇士。

それがⅦ組を守るようにしてマクバーンと対峙している。

「待たせたね君たち。真打登場………といったところかな？」

「殿下！」

《放蕩皇子》オリヴァルト・ライゼ・アルノール。銃の腕前もさる事ながら卓越したアーツ使い。

「遅くなったが……何とか間に合ったみてえだな」

「トヴァル!？」

《零駆動》トヴァル・ランドナー。その異名の通りアーツの扱いがずば抜けた遊撃士。

「ええ。……どうやらナギト様が気張ってくれたご様子。VII組の皆様も……もう安心ですわ」

「シャ、シャシャ……シャロン!？」

《死線》シャロン・クルーガー。《身喰らう蛇》執行者N〇。IXの座を頂く暗殺者にしてラインフォルト家に仕えるスーパーメイド。

「よくぞ粘り、耐え忍んだ。ここは我らに任せるが良い」

「ち、父上！」

《光の剣匠》 ヴィクター・S・アルゼイド。

その4人が、救援にやってきていた。

「よくやってくれたナギト……また成長したな」

そうやってナギトの肩を叩き、その前に出てマクバーンと相対したヴィクターは宝剣ガランシヤールを構えた。

「……………待ち侘びましたよ」

ナギトは安心の一息と共に “周天・緋浴連理の陣” を解く。

ヴィクターと対峙するマクバーンはすでに立ち上がり、剣を担いで余裕は崩れない。

「ハハツ、勢揃いだな。こりやあそいつらや《剣鬼》一人よりよつぽど俺をアツくさせてくれそうじゃねえか。……だがその面子でも俺は倒せない……それは《光の剣匠》——
——アンタも判つてるんだらう？」

マクバーンはすでに洗風剣で受けた傷を修復しており、その全身、魔剣から立ち上る焰はナギトと戦っていた時より熱く燃え上がっている。空間すら焼け爛れていると錯覚するほどの炎熱がマクバーンの周囲を渦巻いていた。

「さて……始めるとするか？　ま、この力の前には抗うだけ無駄だと思ふがな」

そこに存在するだけで世界を灼く《火焰魔人》の有様を前には、確かにこの面子と言えど勝利をもぎ取るのは至難に思えた。

それがナギトの直感で、近しい実力のヴィクターも同じ見解だろうと視線をやる。
しかし。

「——若いな」

ヴィクターはその不安を一蹴した。直後、吹き出す闘気は練達のもの。

「『劍』や『力』は『己』の続きにあるものに過ぎぬ。その尋常ならざる力、確かに私を凌駕しているだろうが——、振るうのはあくまで『己』の魂と意志——最後に私はそれがすべてを決する！」

宝剣が極光を放つ。それはヴァンダール流と並んで帝国の双壁とされるアルゼイド流最強の剣。『光の翼』だ。

「子爵閣下の言う通りさ——、我々はそれをこの内戦で示してきた……《第三の風》として——」

ヴィクターに続いてマクバーンの前に立ったのはオリヴァルトだった。魔人に銃口を向ける金髪的美丈夫は、それこそ《光の劍匠》に勝るとも劣らぬ氣迫を秘めていた。

「《放蕩皇子》だったか……たしかアンタはリベールの異変で……」

「ああ、あの《劍帝》と戦った事もある。その僕から言わせてもらえば……君より彼の方が強いよ……ずっとね」

オリヴァルトのそれはもちろんヴィクターの論に則った判定だ。《劍帝》レオンハルトは劍の腕もその異名に違わぬものだったが、何より強かったのはその魂と意志であった。

ヴィクターとオリヴァルトの言葉を受けてマクバーンは大笑した。

「ハハ、いいだろう！ だったらアンタらの魂と意志、焼き尽くしてやるぜ！」

こうして《火焰魔人》マクバーンとヴィクターをはじめとする猛者4人によるバトルが始まった。

そこはもはやVII組の立ち入る事のできる領域ではなく、隙を見てヴィクターが道を切

り拓いた。

「さあ、征ぐがいい——！　そなたたちの本懐を遂げるために！」

魔人の焔に晒されながら、ヴィクターらは一步も引かずにⅦ組に明日を託した。

その想いに応えるためにも、Ⅶ組は先に進む。

そして煌魔城最上層《緋の玉座》に辿り着く。

運命の刻

幻を見た。夢を見た。——何者かの記憶を見た。

? 知っている。知っている。知っている。

ここまでのすべてを、俺は知っている。? リイン・シュバルツアールとVII組が織り成す物語を、俺は知っている。

なぜ? どうして?? 理由は明白。願いのせいだ。

七夕に短冊に願いを書くように、クリスマスにサンタに欲しい物を願うように、それは願われた。

? 俺が見たそれは、悲劇だった。

いつか見た、誰かの記憶。

? 対峙する灰と蒼。

裂帛の咆哮の後、交わる太刀と双刃劍。

? いつか見た、誰かの記憶。

黒い靄に包まれた世界。

? 俺がいなかった世界。望んだ未来は訪れず。

蒼の騎士はその胸を貫かれる。

? —— 「俺は……立ち止まっちゃった……」

—— 「だがお前は……お前らは……まっすぐ前を向いて歩いていけ……」

? —— 「……ただひらすらに……ひたむきに、前へ……」

その意味が、今ならようやくわかる。

? 根源には、願いがあった。
? ただ、願いがあったただけなんだ。
? 願いがあったから、俺は。

☆★

煌魔城最上層、《緋の玉座》へと至る回廊を抜け、昇降機で登った先に、クロウは待っていた。

? 「よお、来たぞクロウ」

「おう、来たかナギト……、みんなも」

交わる視線は哀愁を醸し出していた。ナギトとクロウは最早、宿縁の敵ではない。？その役目はすでにリインに譲られている事は、二人共が熟知していた。クロウの《蒼の騎神》と渡り合える《灰の騎神》はリインのものとなった。《起動者》たる資格はナギトも持っている。しかし、当の《灰の騎神》ヴァリマールがリインを相棒として認めたと、その力を十全に振るえるのはリインのみだ。

? 故に、クロウとの決戦はリインのものとなった。

だから二人は、共通の友人の話をするのだ。

? 「リヴァルは、逝ったぞ」

? ナギトの宣言に、クロウは目を瞑る。すでにわかっていた事だったが、言葉にされてより現実味が増す。

? 「……そうか」

? 短いやり取りだが、その中には言葉以上の意味が含まれていた。? リヴアルとクロウは境遇が似ている。親族が土地の管理者であり、それが鉄血宰相の手により奪われたのだ。クロウの場合は純粹に土地を、リヴアルの場合は管理する土地に起きた悲劇の真相を。? すべての眞実は奪われ、闇に葬り去られた。

思いを馳せている場合ではない。

ラインはクロウに告げる。クロウをトワやジョルジュたちと一緒に卒業させると約束して来た。? クロウは肩を竦めて「冗談だろ」と言う。

? 「それがあり得ない事くらい、いい加減、判つてゐるだろうが?」

? 現実を見据えたクロウの発言を、横にいるクロチルダが否定する「違うわ、クロウ」と。

「数多の困難や現実を前にただ立ち竦むのではなく……ある一つの想いを抱いて明日へ続く道を歩んでいく。——それを『夢』と言うのよ」

その通りだ。そして、その“夢”を夢物語にしないために、楔を打ち込んだ。

? 「そうだ、クロウ。その夢物語を現実にするために、俺がいる。……………後の楔”だよ。クロウ、お前もⅦ組の一員だろ。リヴァルだってそのために……………」

? ナギトに続くようにしてⅦ組の全員がクロウに言葉を浴びせていく。

クロウはそれで、困ったように笑った。? Ⅶ組に潜り込んだのは目くらましのつもりだったらしいが、このお人好したちのせいでもここまで崇つて来るとは。

? そこで、空気を一変するように手を鳴らされた。音の発生源は、大樹のようなものに封印された緋い巨人の前に立つカイエン公だ。

? 「見果てぬ夢を共に追い求め、一時の情熱に酔いしれる……………、これも若さゆえの特権だろう」

? 小馬鹿にしたようなセリフを並べるカイエン公。その横には目隠しされたまま椅子に座らされている皇太子セドリツクがいた。? 皆の注意は、さらにその後ろに向く。緋

き巨人に。エマが言った。

? 「《緋の騎神》テストロツサ——永きに渡り帝都に封印され、幾度も災厄をもたらした存在」

? 使い魔セリーヌが続ける。

? 「〃千の武器を持つ魔神〃とも伝えられているわね。250年前、獅子心皇帝と槍の聖女に封じられたはずだけど……」

? その言葉をカイエン公が肯定する。

「その通りだ。そして〃起動〃できるのは皇族アルノール家の血筋のみ。だからこそうして殿下に協力して頂いている」

? セドリツクの顎をなでたカイエン公は笑みを浮かべる。

？「私も私でさきやかな『夢』があるのだよ」

？高々と語るカイエン公。その夢とは、かつての祖先が追い求めたものであると言う。
？オルトロス・ライゼ・アルノール。後の世に《偽帝》と称される人物。獅子戦役の時代、帝都を支配した彼の血をカイエン公爵家は継いでいるのだと。

今回の内戦を引き起こしたのは帝都ヘイムダルに眠る支配者の証である《緋の騎神》と《煌魔城》を手に入れるためのものであると。

「それこそが私の大望——公爵家の果たすべき使命なのだ！」

？身勝手であると断じるのは容易い。しかしこの世はその身勝手に成り立っているのだ。？だから、カイエン公のそれを身勝手であると否定はしない。

？「見果てぬ夢を追い求め、一時の情熱に酔いしれる……、これが若さゆえの特権ならば、あなたはそんな夢を見る事すら烏滸がましいのでは？」

？だが、阻みはする。それが覚醒してしまえば、変えられなくなるからだ。

? リインがナギトに続き「クロウとのケリをつけるついでにあなたの野望も阻止させてもらおう」と言った。

? 「小癩な……」

? 歯ぎしりをするカイエン公だが、戦えない者にはそれが限界だ。? そこで黙って見ているがいい。

「すぐに乗り込んでもいいが、それじゃ芸がないだろう」

クロウは剣を抜いた。騎神 v s 騎神の前に生身でやり合うのも一興と。

それはナギトとリインがクロチルダとアリアンロードに連れられて行った精霊窟での出来事と似た、ある種の儀式のようにも思えた。

クロウとクロチルダ間に戦術リンクが形成される。すでにARCSでの戦術リンクはVII組だけの専売特許ではないのだ。

? 交わされる言葉も少なく、戦闘は開始する。

「魔劍よ、踊りなさい」

玲瓏な声と共に宙空に劍が出現する。それらは舞うようにしてⅦ組に襲いかかった。魔女クロチルダによる『魔劍舞踏』——さすがに成長したエマを上回る練度を『蒼の深淵』は誇る。

「グリアノス」

Ⅶ組が魔劍を相手にしている間にクロチルダは次手に移っている。自身の使い魔グリアノスの名前を呼んで、その姿が巨大化したと思うと、それはブレスを吐き出した。精霊窟でグリアノスと対峙したⅦ組は知っている。このブレスが奔流を思わせる破壊の吐息である事を。

皆が防御を固める一瞬で、その内に潜り込んだのはクロウだ。

「喰らいやがれ！」

“クリミナルエツジ”——勢い良く叩きつける双刃剣の回転斬りはⅦ組メンバーの大半を弾き飛ばした。

防御を崩されたところに吹きかけられたのはグリアノスのブレス。魔力の奔流が弾き飛ばされたメンバーを襲う——。

クロウとクロチルダの連携を見破っていたナギトは跳躍してそのコンボを避けていた。構えた太刀を地面に打ち付けるようにして振るう。

「裂甲断——！」

それをクロウは跳び退いて避け、グリアノスはブレスを中断して回避した。

グリアノスのブレスに灼かれたⅦ組メンバーも軽傷だったがしかし——、いかに人数で勝ろうと油断は禁物である事を再認識した。

「お前らが内戦で磨いてきた力……こんなもんじゃねえだろう!？」

「さあ、まだまだいくわよ……！」

頭は冴えていた。声が聞こえる。

？——運命を変えろ——

戦いながら、その考察を形にする事を止められない。

？この声はどのタイミングで聞こえていた？《C》を前にした時だ。夏至祭の帝都地下で。《剣鬼》としての最後の戦いの場で。《C》と対峙した瞬間のみに聞こえていた。

《C》の正体はクロウだ。ではなぜ、クロウの前で声は聞こえなかったのか？

それは“時”ではなかったからだ。

“時”とは何か？

?それは《C》の正体がクロウだと暴く瞬間の事だ。

《C》は仮面で正体を隠していた。だから仮面を割れば、必然その正体も割れるわけだ。

?《C》の正体がクロウだとその時点でバレればどうなる?

?運命が変わる声の言う通りになる。

?では、何故今も声が聞こえるのか??それは運命を変える事ができる機会だからだ。ク

ロウを救える最後のチャンスだからだ。

?俺は知っているのだ。?このままでは、クロウが死んでしまう事を。

俺は見えていたのだ。あれの覚醒のせいで、クロウが死んでしまった瞬間を。

?ただしそれは、今の、ナギト・シユバルツァーの目線からではない。?それはそう、俺

の目線であったり、お前の目線であったりするわけだ。

?ではまず、根本的な疑問を呈そう。

運命を変える

? 今も聞こえるこの声の主は?

? ————— 答えは、俺たちだ。

「終ノ太刀——暁!」

リインの太刀がクロウの双刃剣を弾き飛ばす。パンタグリユエルの再現だ。しかし、今度はリインとクロウの一騎打ちではない、VII組と蒼の異名を持つ二人の総力戦だ。

? この場では、VII組が勝ったと表現するのが相応しいと言えた。? ただ、VII組のメンバーも満身創痍であり、辛勝というのが正直なところだ。

そして、前哨戦は終わり——

「さあ——終幕だ。ケリをつけるとしようぜ?」

「——ああ」

クロウの声に応えたのはリインだ。それ以外には、その声に應える資格がなかった。
? リインは手を掲げ、彼を呼ぶ。

? 「来い——」

? その時、ナギトとリインの視線が交わった。

「《灰の騎神》ヴァリマール」

ヴァリマールは「応」と返事をする。その声が聞こえたのは《灰の騎神》の《起動者》たるリインとナギトのみだ。? 煌魔城の第一層の始点からここまで飛翔して来る。その間の、短いやり取り。

? 「頼むぞ」

？「ああ、任せろ！」

？義兄弟の会話。

程なくしてヴァリマールは到着し、リインはセリーヌを引き連れて《灰の騎神》に乗り込む。？クロウも《蒼の騎神》に乗り込み、ここに最終決戦は始まった。

オル^クデー^ロネの双刃剣が、ヴァ^リマールの太刀が交わっては離れ、交わっては離れる。剣撃の撃ち合いはワルツの調べの如く。

不思議とリインと共に戦っている気になる。それは他のⅦ組メンバーも同じようだった。

？クロウは奥の手を出し、それに合わせてヴァリマールも太刀から金色のオーラを放つ。？五分五分の勝負だ。リインとヴァリマールは内戦が始まってからクロウとオルデー^ロネに比肩する程に強くなったのだ。

？やがて、決着はついた。？オルデー^ロネは双刃剣を弾き飛ばされ跪き、ヴァリマールも力尽きたのか剣を杖に地に膝をつく。

？「これ、は……」

? 「勝った、の?」

それは相討ちのようでありながら、しかしラインとヴァリマールの勝利である。

? 「ええ、勝負あつたわ」

? サラがその事実を口にしようとして、

「ラインの勝ちだ!」

? ナギトがそのセリフをかつさらう。いつかのお返しだ。

すると、Ⅶ組はラインに喝采を送る。? ヴァリマールからラインにⅦ組は駆け寄り、賛辞を浴びせる。

「ありがとう。信じて見守ってくれて」

? その言葉に、ナギトは返す言葉を一つしか持つてなかった。

? 「ヴァリマールの《起動者》が、お前で良かったよ。俺じゃこうはならなかった」

? 知っている。ここまでは最高のエンディングへの道だ。だからこそ、ここからの悲劇が際立つのだ。

クロウもリインに賛辞を送る。「騎神でのARCSの戦術リンク……完璧に使いこなしてたじゃねえか」と。それが共に戦っていた感覚の正体なのだと言得する。

? リインはそれをこう説明した。

「それでも無心だった。多分、みんなの想いも含めて俺の一部になっていたんだと思う。ヴァリマールや……ひよつとしたらクロウまで含めて」

? それは色即是空、彼我一体の境地だ。サラはそれを“剣の至境”と表現した。? リインはそれを夢でも見ていたようで、もう一度は難しいと言う。締まらないオチだとみんなは笑う。

ナギトも「《剣聖》の域までは遠いようだな」と肩を竦めた。

? そうしたらクロウは笑い出した。そして、敗北を認める。

「俺の負けだ——完璧に、完膚なきまでにな」

? その落着を見て激昂した人物がいた。カイエン公である。ふざけるなど。これで終わりにするつもりか? と。? それにクロチルダは結社は今回の舞台を作り出す事が目的で蒼と灰の勝敗以外は興味が無いと言っていたはずだと言う。

? カイエン公は「こちらでも手段を選ばぬまでだ」と言うとかクロウやクロチルダの制止も聞かずにセドリツクの目隠しを取ったかと思うと《緋の騎神》に押し付けた。

? 「殿下、霸道のお時間ですぞ。古のアルノールの血……存分に滾らせるがよろしい!」セドリツクと《緋の騎神》の接触地点に紋章が発生する。《緋の騎神》を起動できるというアルノールの血に反応しているのだ。

ダメだ。あれを目覚めさせてはいけない。あれが覚醒してしまつたら、運命は変えられない。? ナギト・シュバルツァーが存在した意味がなくなつてしまふ。

だから、跳んだ。？風よりも疾く雷のように、ナギトは跳んだ。

こうなるとわかつていたのに、どうして自分は動かなかったんだ!?

？リインとクロウの戦いに見惚れてたからだ。それを見届けたいという衝動に駆られたからだ。

あの戦いを見届けた事に後悔はない。俺ならセドリツクが《緋の騎神》に吸い込まれる前に助け出せると思っただからだ。

実際に間に合った。？カイエン公を突き飛ばし、セドリツクの手をナギトは掴んだ。だがセドリツクはすでに《緋の騎神》に吸い込まれ始めていた。

どんな力で引つ張ってもセドリツクの体は《緋の騎神》に沈むのみ。《緋の騎神》はついにナギトの体まで吸収し始めた。

？「ちよ、マジか……!」

すでにナギトの半身も飲み込まれてしまい、セドリツクを見放したとしても逃れられそうにない。

？飲み込まれる寸前、ナギトは叫んだ。

「くッ——ソがよおおおお！」

ナギトはこうして《緋の騎神》に飲み込まれていった。

☆☆

『馬鹿弟子へ』

ヴァンダイク殿やおぬしの友人から話を聞くに、良い学院生活を過ごしているようである。安心した。

やはり記憶喪失は良い機になったようだな。

おぬしが儂のもとを去ってから二年近くが経つ。大切な事は掴めたか？力だけでは無い強さを得る事はできたか？

？もし、本物の強さを得る事ができたならば、こう名乗るが良い。

二代目 八葉一刀流とな。

それでは達者で。生きてさえいれば、またどこかで会えるだろう。また会える日を楽

しみにしているぞ、我が息子よ。？

ユン・カーファイより』

？ 思い出されたのは、理事長室で呼んだ老師じしからの手紙だった。あのじいさんにしてはまともな文面だな、と思ったことを覚えている。？それがどうしてこの瞬間に思い出されたのか。それは抛り所となっているからだと思う。剣の師にして父親たるユン・カーファイからの手紙だったんだ。無理はないと自分でも思う。

ナギトは目を覚ました。周囲は緋い靄あに包まれていて、自分の足すらぼやけて見えるほどだ。

？ 気づくと、目の前には窓ができていた。丸い窓だ、そこからは映像が垂れ流されている。？魔法で形成した窓に酷似した窓の映像は、ヴァリマールとオルディーネが協力し

て、これに立ち向かっている姿だ。

これはなんだ？

これは《緋の騎神》が神の領域まで押し上げられた姿……エンド・オブ・ウァーミーオン《緋き終焉の魔王》だ。

？そこまで考えると、やるべき事がわかってきた。？このままではクロウは死ぬ。それは確定事項だ。何回も何千回も何億回だって同じエンディングしか流れていない。I'll remember you私は貴方を忘れないそれしかない終わり方。それを変えるために自分は存在しているのだ。

だから、変えなければいけない。この運命を。クロウが死ぬという運命を、変えなければ。

？と、力を入れても《緋き終焉の魔王》はピクリともしない。いくら《灰の騎神》の《起動者》と言えども動かせはしない。その時、足元で「う……」と声が出た。

？見てみると、そこにはセドリックが倒れ込んでいた。

？クロウが死ぬという時にこいつは何を呑気に寝てんだ？？正統性のない怒りがこみ上げてくる。悪いのは身に余る大望を抱いたカイエン公だ。セドリックを《緋の騎神》に

取り込まれる前に助け出せなかった自分だ。

? 「殿下……起きて下さい、殿下！」

? 声をかけてみるが、起きる気配はない。

? 「殿下、皇太子殿下！」

? 声を荒げるもまだ起きない。

? 「起きて下さい、セドリック王太子殿下！」

? 肩を揺すつても起きはしない。そろそろ焦る。

? 「起きろ！セドリック・ライゼ・アルノール！」

名を叫び、平手打ちまでしてようやくセドリックは目を覚ました。

? 「……………あなたは……………」

「俺はナギト・シュバルツァー。VII組の一員だ。カイエン公の蛮行を止めるためにここに来た。ついでにお前さんも助けにな」

「え、あ、はい」

「んで、下手うつて今ここだ。お前さんを助け損なつた。だけどチャンスはまだある。おわかり？」

「え……つと。わかり、ます」

「いいか、《緋の騎神》を起動するためにアルノールの血……、つまりお前さんの血がいるんだ。その条件はクリア——今こうして騎神は魔神にまで変化して暴れまわっているわけだ。それで俺は灰の、とは言えども騎神の《起動者》だ。これで何のバグかはわからないが、緋のテストタロツサ内部には《起動者》の資格が揃つたわけだ」

「えつと……つまり、僕たちがこれを動かすと？」

「その通り。寝ぼけてるとは思えないね」

「これでも帝国を治める皇族ですから」

? 軽妙とも取れるやり取りを終えた二人は立ち上がり、窓を見据える。あそこから見える景色……仲間と並び立つクロウを守る事だ。

? 「いくぞ。民草を守る覚悟はできてるか？」

? 「ええ、何としても。皇太子としてのつとめを果たします」

? 皇太子の肩に手を置き、意思を束ねてなんとか《緋き終焉の魔王》を動かそうと試みるが、状況は芳しくない。

それでも、刻一刻とシーンは進んでいく。いつも通りに。それを見て焦るべきなのだろう。しかし、ナギトの顔に浮かんだのは笑みだ。

? 「……つたく、妬けるなあ……」

? 完璧な連携とはこの事だ。自分でさえ八葉一刀流という繋がりと一年の期間があつ

てあそこまでリインとの連携ができたのに。

クロウは今の今まで敵対していたのに。？クロウの隣にいた可能性が自分にもあつたかもしれないのに。

「なにか言いましたか？」

「いや、なんでもありませんよ」

その眩きをなかつた事にして、また窓に向き直る。

？「道は俺が拓く——行け、リイン！」

「判った——クロウ！」

《緋き終焉の魔王》の防御はすでに剥がれかけていた。敵意を向けてくる二機に向けて、千の武器を持つ魔神と言われる本領を發揮した。

《緋き終焉の魔王》の周囲に浮かんだ波紋からいくつもの武器が射出される。

? クロウは裂帛の気合いでもって双刃剣を振り回し、射出される武器を弾いていく。

射出される武器だけでは迎撃できないと思ったのか《緋き終焉の魔王》の尾がピクリと動いた。槍のように尖った先端は武器としても使えるものだ。

知っている。これでクロウの心臓が貫かれると知っている。

? 止めろ。止めろ。止めろ。止めろ。

? 考えろ。考えろ。考えろ。考えろ。

これまでは漠然と全身を操ろうとしてダメだった。なら、一つの部位に絞って操作を試みればどうだ?

? チャンスは一度きり。失敗すればクロウには死が、ナギトには存在意義の消失が待っている。

それでも、その可能性にかけた。

「無想霸斬！」

太刀は縦横無尽に振るわれ、ついに《緋き終焉の魔王》から核が取り出される。

——
運命は変わった
——

溢れてきたのは安心感と充足感だ。それでもまだ足りないとはかりにナギトは遠くなる意識をなんとか繋ぎ止め、セドリツクに話を持ちかける。

「殿下、この後、クロウはいい奴だと言ってくれると助かる」

？「……わかりました。僕を殺人者の汚名から守ってくれたあなたの仲間です。悪し様には言いません」

セドリツクも意識が遠ざかっているのか、返事は遅かった。しかし、それでも返事をくれた事に感謝する。

「……………ああ、安心した」

？意識が闇に落ちる最中、ナギトはそう口にしたのだった。

ナギトの存在、クロウの生存
蝶の羽ばたき、荒野の嵐

願いの果て

目を覚ます。ナギトは一人で緋の玉座に立っていた。

周囲にはⅦ組の仲間たちやクロウ、クロチルダ、カイエン公などの人物はおらず、その有様に既視感を抱いた。

「……………この展開は」

「よう」

ナギトの理解と共に、それは現れた。かつて遭遇した時とは違い、その姿形ははつきり見えおり、声もモザイクがかかったようなそれではなく、きちんと聞き取れる。

「よう、——俺」

そして、その姿形と声はナギトと全く同じものだ。その意味も、今ならわかる。ナギトの言葉と同時に、そいつは「ふっ」とはにかんだ。

「ああ、俺。よくやった……よく——運命を変えてくれた」

そいつは本当に嬉しそうに、感慨深そうに、ナギトに感謝を告げる。

「いや、いいさ……。そもそもこれは俺たちの宿願——『願い』だろう。」

「……そうだな。これは…俺たちの願いだ」

『願い』——、それはナギトの存在意義。それはナギトの誕生理由。

「答え合わせ、しとくか？」

そいつはナギトに向かって言う。

答え合わせ——、それはナギト・シユバルツァーの軌跡が、何故発生したのかという問いへの答え。

「いや……いいよ。もうわかつてる」

しかしナギトはその答え合わせを固辞した。それはもうわかっている事だったからだ。

ナギト・シユバルツァーという存在は、閃の軌跡という物語において死亡する運命にあるクロウを救う事を願われて誕生したものだ。

正しい男女の愛で生まれたわけではなく、幾千、幾万、幾億の俺たちが、定められた運命を破却するために願い生誕したもの。

だからナギトは強いのだ。

《剣仙》の養子という立場で八葉の剣士として育ち、破格の剣才をもって生まれた。

終ぞ乗る事はなかったが、騎神の起動者という資質さえ持っていた。

そして“確信”——、これまでの特別実習や内戦中に幾度となく発動したそれは、空

の軌跡から閃の軌跡までを経験したプレイヤーたちの記憶。ナギトの妙な勘の鋭さはそこに起因している。

尤も、ナギトが記憶を失っていたせいであまり役に立った事はなかったが。

だが、それだけじゃない。確かにナギトはクロウを救済するために生まれた。けど、それだけじゃなかったんだ。

だからナギトは答え合わせをしない。

「本来なら、1204年4月の時点で俺の意識が覚醒するはずだった」

そいつは語る。

「だがそうはならなかった。システムの強制力——、運命の強制力と言うべきか。それが働いて特異点……つまりバグである俺を封印した」

「それがあのアイゼンガルド連峰での出来事——、俺が記憶を失った事件か」

それはナギトが「ナギト」になる以前。《剣鬼》としてユミルに行く道中で《帝国解放戦線》に襲撃されたあの事実だ。

「そうだ。俺の記憶喪失によりお前が生まれ、記憶には蓋がされて俺はお前の裡に閉じ込められた」

「それが俺の記憶喪失の真相……、高所からの落下、衝撃によるものと思っただが……」

「ああ、尤もらしい理由があれば運命は介入できるらしい。俺たちが《剣鬼》として名が馳せていた事にも一因はあるし、それが俺たちだと貴族派に掴まれて戦線の奴らを送り込まれたのも、尤もらしいだろう」

「尤もらしい理由」——確かに高所からの落下、衝撃で記憶を失うのは、いかにも有り得そうな筋書きだ。そして運命とやらは、そんな有り得そうな事実介入できると。

「俺が、こうしてお前と話せているのは……」

「推察の通り。すでに運命は変わった。クロウは助かった。だからもう運命は俺を押しさえつけておく理由がない。じきにお前の《剣鬼》以前の記憶も戻るだろう。……俺たちの経験と共にな」

ナギトが今こうしてこいつ——言わば、願いの化身と会話ができているのは、もう運命が諦めたかららしい。既存の物語通りに展開を進める事を。

「そうか……俺は、俺たちはどうなる？」

「ん？そりやまあ消えるだろうな。すでに運命は変化した。俺たちの願い——『クロウの救済』ならすでに達成された。これ以上、この世界にナギトという存在は必要ない。むしろ雑音だ」

その言葉にナギトは顔を歪めた。言っている事はわかる。

俺たちが願ったのは『クロウの救済』一点のみ。ナギトという存在はその願いの器で

しかない。だから願いが果たされた以上は、もうナギトは不必要。

むしろ、俺たち^{プレイヤー}が愛するこの軌跡の世界においてポツと出のナギトなんてオリジナルキャラクターが幅を効かせるのは雑音である、と。

「……………いや、まさかな」

そこでそいつは、思わせぶりにかぶりを振った。「なんだよ?」と聞くと、考えを形にするように言う。

「運命の、それらしい介入は終わった。もうクロウは助かっていて、それは過ぎた事だからだ。——そう思ってたが、逆かもしれん」

「逆、というと……………運命はお前を押さえつけていたりソースを別に回せるって事か?」

「ああ。可能性は低いだろが有り得る。……………運命はまた何らかの機会を狙って、物語

を正しい軌跡に戻そうとするかもだ」

「そいつはまた……」

面倒な事だ、と続けようとして、そいつの眼差しがナギトに突き刺さる。

「だが、それ以上に現実的な脅威がある。わかるな？」

現実的な脅威——、ナギトは思案を巡らせると、すぐに答えに行き着いた。

「《鉄血宰相》か」

「そうだ、ギリアス・オズボーンは生きている。その事をクロウが知ればどうなるかわからん」

ギリアス・オズボーンはクロウの仇敵だった。

かつて併合されたジュライ市国を治めたクロウの祖父を自殺にまで追い込んだ。

それを契機にクロウは復讐者へと転身した。《帝国解放戦線》の《C》へと。その復讐は終わったはずだった。帝都、ドライケルス広場で演説するオズボーンの心臓を撃ち抜いた瞬間に。

だが、その復讐が終わっていないなかったとしたら？
ギリアス・オズボーンが生きていたとしたら？

クロウはまた復讐者へと成るのではないだろうか。復讐を果たしたと思い込んで死んでいった同志たちのために、今度こそ復讐の鬼になるかもしれない。

「まあ、なんとかするさ」

そんな懸念を、軽く受け流したのはナギト。しかしその言葉には絶対の決意を秘めていて。

「そう、か……。まったく頼もしいな、ナギト」

そいつは初めと同じように「ふっ」とはにかんで。

「頼んだぞ」

そう言ったのだった。

☆★

声が、聞こえていた。

「——カイエン公。その手を離しなさい。これ以上、場を弁えないようなら……」
? ゆらり、と水中を漂うようなふらついた意識で。
? 「私にも考えがあるわよ」

それは徐々に意識が覚醒していると自覚させるには充分な要因だ。だが、セリフの意味まで理解できるほどにまだ頭は冴えていない。

地に耳をくつつついていると、やけに音が大きく聞こえた。靴音は当然のこと、衣擦れや息遣いまでわかる——というのは、感覚が鋭敏になっているのだろうか？とおぼろげながらに考えて。

その足音を聞いた。

知っている。聞いた事がある。俺はこの足音を聞いた事がある。どこで聞いた？

——その答えが思い浮かんだ瞬間。

？意識は急浮上し、疲弊した体を引きずって、主人を守ろうと打って出た蒼き鳥をおしのけ、その足音の主と対峙する。

? 「まさか、君が起きてしまうとはね……」

「これは少々計算外だ」と表情を歪める彼に絶句したのは、彼の弟だけではない。? それでも沈黙を破ったのは、弟の兄を呼ぶ声だ。

? 「兄上……!?!」

? ユーシスの驚愕に「フフ……」と苦笑するのはルーファス・アルバレアだ。

金髪を流し、翡翠の衣服を着こなす彼は間違いなく貴族連合の総参謀たるルーファス・アルバレア。

? そのルーファスに希望を見出したのはカイエン公だ。

「私を助けに来てくれたのだろうか!?!」

? と言うカイエン公に、ルーファスは冷ややかな視線を向ける。

「カイエン公にも言いたい事はありますが……どうやらナギトくんが通してはくれないようだ」

「もちろんだ。場を掌握させるつもりはないですよ、ルーファスさん」
？ルーファスの言葉にノータイムで応えるナギト。

？ルーファスの狙いはすでにわかっていた。カイエン公を捕縛した後、その異名を披露した勢いに任せて場を自分のものとするつもりなのだろう。カイエン公がどうなろうが知らないが、場の雰囲気ルーファスのものにさせるのはいけない。ここで場を自分のものにする。

「フフ………ナギトくん。私は正義を執行しに来ただけだよ。そこを通してはくれないか？」

「正義、ね………」

それはこの内戦中、ナギトが自問自答していた命題だ。故にその問題はすでに通り過ぎていく。

「そりゃあ誰しも正義を抱いているでしょう。でもそれは個々人で万別だ。俺の正義は、あなたの正義とかけ合う。だったらもう、戦うしかないでしょう」

よもやこの段に至り、弁論で相手を退かせる事はできない。だから人は戦うのだ。

そうした真理を告げられて、会話は打ち切られた。

? 「……ルーファス・アルバレア」

? 彼の名乗りは、武人の決闘前のそれと同じだ。すでにナギトとルーファスで心境は同じらしい。

「身分は名乗らないんですね? ならば、こちらは名乗らせて頂こう」

? やけにらしくない物言いに、一同はすでに太刀を手にする男の雰囲気は飲まれかけていた。

? 「俺は、二代目 八葉一刀流——」

？名乗り疑問を覚えたのは、八葉に関わるラインだけではなかった。？この男は何と言った？二代目の八葉一刀流だと？頭の回転の早いルーファスのみが、男の名乗り前に、答えに至る。

「——ウイル・カーファイだ」

“ウイル・カーファイ”？その名はかつて《剣鬼》と呼ばれた、今まで “ナギト・シユバルツァー” を名乗っていた男の本名だ。

？《剣仙》ユンに拾われるように、赤子の状態で発生し、八葉一刀流を叩き込まれた。赤子は “ウイル” と名付けられ、養子縁組を経て “カーファイ” の姓を貰い “ウイル・カーファイ” となった。

そのウイル・カーファイが、二代目 八葉一刀流をこのタイミングで名乗るのか？

確かにウイル・カーファイは八葉一刀流のすべての型を皆伝しているが、未だかつて二代目を名乗った事はなかった。

？様々なルートを持つルーファスの情報網でもそれはなかった。ウイル・カーファイでは力はあるても名乗らなかった称号。ナギト・シユバルツァーでは力と記憶を失い、名乗れなかった称号。

？誰もが理解した。？雰囲気が違うはずだ。記憶を取り戻したこの男は、また武の位階を上がったのだと。？俗に言う、国の最高戦力に比肩してなお有り余るオーラを感じるのだ。

「まさか……このタイミングで記憶を取り戻すとはね」

「最高でしょう？俺は八葉を継ぐ者です。こんなおあつらえ向きの舞台上で剣を交わらせる事ができる」

こんな誘い文句は、きつとオーレリアのような女傑にこそ刺さるものだ。

こんな気分がアガる舞台上で、一見ただけでわかる達人と剣比べができる。

ルーファスにその気がないわけではないが、重要事を後回しにするほど剣に酔っているわけでもない。

「……これは、いつぞやの雪辱戦になりそうだね」

太刀を構えるナギト——ウィルの剣気にルーファスは眩いた。それはウィルの耳に

も届いたようで、ふっと柔らかく笑む。

？ウイルは余裕を隠そうともせず、ルーファスを見やる。その目線からは何も掴みとれないが、何もかも見え透いているとでも言わんばかりでもあった。

ウイルはゆるりとした動作で太刀を直上に構えた。大上段から放たれる剣撃は、ナギトが「ただの素振り」と言ったあれに酷似していた。？というよりも、あれを下地にあらゆる剣技を乗せた究極の一撃だと表現するのが正しい。

「これなるは、八葉始まりの一太刀……八用に分かれた極意すべてをただ一太刀に乗せて放つ剣技なり」

八葉一刀流は、ここから始まったのだ。？修行時代のユン・カーファイが偶然発動してきた、武の極意を集約した一太刀。？それをその極意毎に分けたのが八葉一刀流の八つの型だ。八葉すべての技はここから始まり、ここに終わる。

「八葉一刀流 始の太刀」

誰も動けない。緩慢に格式張った動きで剣を構えるウイルに、誰も反応できない。？
時が静止した中で、ただ一人だけが動いているようにすら映る。

？ 「—— “八葉一閃”」

？ 八葉を一太刀に結ぶ。故に “八葉一閃”。

？ ウイルは、剣を振り下ろした。

☆
★

「これは、情けをかけられたのかな？」

？「八葉一閃」——八葉最高の一太刀が斬ったのは、ルーファスの外套を留めていた紐だった。

濃紺の外套がルーファスの肩からずりりと落ちる。

「これは貸しですよ。ルーファスさん」

ウィルはそう言うのと太刀を鞘に納める。

？「ありがたい。では、本分を果たさせてもらおう」

？ルーファスは納刀したウィルの横を通り、カイエン公に向き直った。その額から一筋の冷や汗が流れたのは、誰も見ていない。

？太刀を振り振られた瞬間に死を受け入れたなどは、口が裂けても言えない心情だった。あらゆる抵抗が無意味と理解できてしまい、構えられた剣が振り下ろされると同時に死を享受する事が当然だと思つたのだ。

再度、ルーファスに助けを乞うカイエン公。「私を助けに来てくれたのだな?」。その彼にルーファスは言った。

「庶民的に言うなら、『寝言は寝てほざくが良い』」

? 次の瞬間、「目標確認」という無機質な声と同時にカイエン公は黒塗りの傀儡に殴り飛ばされる。現れたのはアルティナ・オライオンとその武装たるクラウⅡソラスだった。アルティナはクラウⅡソラスで殴り飛ばしたカイエン公を押さえつけると「制圧完了しました」と告げた。

驚愕したのはカイエン公だけではない。しかし、そんなものは知らぬとばかりにルーファスは反逆の理由を並べ立てる。

皇族への度重なる不敬、帝都全域を巻き込む大災厄。同じ貴族連合と言えどもこれ以上は見過ごせない、と。? 詭弁であるのは間違いないが、反逆の理由としては充分なものだった。

? 「カイエン公、貴公を拘束する!」

? 皆はまだ何が何だかわからない。そんな皆を尻目にルーファスは「本当は魔女殿も拘束するつもりだったが、ウィルくんがさせてくれなさそうだ」と苦笑する。

このシーンを知っているウィル以外で始めに事実気づいたのは、クロチルダだつ

た。

始めからおかしいと思っていた。《黒の工房》の娘——アルティナをどこから連れて来たのか？

「どうやらずつと……『機会』を伺っていたわけね？」

？クロチルダの確認に、ルーファスは当然のようにとぼける。そこでクロウが「クク」と笑い出した。

？「なるほどな。……そういうことかよ。つまり、全部もっていこうって腹なわけだ？」

そのクロウの推測は正解でありながら、不正解でもあった。全部もっていこうと思っているのは確かだが、それはルーファス・アルバレアではない。

？「クロウ、正解だが黒幕は違う。……頼むから、動くなよ」

「——なに？」

クロウの疑問をよそに、ルーファスの正体に気づいたのは、彼と同じ立場のミリアム

だった。

？「ユーシスのお兄さんも、〃そう〃だったんだね？」

？その答え合わせに応えたのは、ルーファスではなくまた別の声。軽薄とも取れる青年だった。

？「ま、そういう事みたいだなア」

？現れたのは情報局のレクター・アランドールと、TMPのクレア・リーヴェルトだ。その二人にミリアムを加えた面子といえ、それはもう《アイアンブリード鉄血の子供達》しかない。？しかもルーファスはその筆頭を名乗った。

他の《アイアンブリード鉄血の子供達》は、筆頭がいることは知っていたが、それが誰かまでは聞かされていなかったと言う。

しかし、ルーファス・アルバレアがこのタイミングでそれをカミングアウトする理由は？この内戦は貴族連合の有利に進んでいた。VII組がいなければそのまま貴族連合が

帝国を統治していたとしてもおかしくはなかった。ルーファスが新たなアルバレア公となるのも時間の問題だったわけだ。

？それなのになぜ、このタイミングで貴族連合を裏切るのか？ギリアス・オズボーンの亡き後に鉄血の子飼いでであると明らかにする必要がどこにあるのか？

？「——だからこそ『今』なのだよ」

？カイエン公の疑問の声に応えたのは、またしても新たな来訪者。

ギリアス・オズボーンだ。

「鉄血——!？」

感情のままに立ち上がるうとするクロウの眼前に刃を突きつけたのはウィルだ。？
そしてまた、同じセリフを言った。

？「頼むから、動くなよ」

？アルティナと同じ方向から登場したオズボーンは驚くミリアムに「久しいな」と声をかける。

あの時、胸に大穴を開けられて死んだはずじゃなかったのか??死んだはずの人間がどうしてここにいるのか?

？「さて、影武者がいたのか、それとも見間違いだったのか——…それは今、問題ではあるまい？」

？どうして生き残ったのかは、大いなる謎だが、確かにそれは今、問題ではない。？ギリアス・オズボーンが生きていて、これからどう動くかが問題なのだ。

？「確かな事は、我が子供達の筆頭にこの事態を收拾してもらおうという事だ。なるべく穏便かつ、角を立てず、しかし確実に貴族勢力の力を削ぐ形で」

オズボーンの狙いはそれだったのだ。？内戦が勃発したのは貴族勢力の力を削ぐためだった。貴族派による帝国内の混乱、皇族への不敬行為を大義名分に貴族の権威を失墜させるための策。無論、それだけの狙いで内戦を起こしたわけではない。クロスベル

が不可侵となり、それを挟み対立するカルバード共和国から侵攻を受けない事も見越していたのだ。そして、防壁消失の後のクロスベル弱体化まで。

？クロスベルの防壁を見越して内戦を起こしたというのなら、オズボーンは結社と繋がっていた事になる。しかし、その部下たるルーファスはクロチルダを切ろうとした。つまり、オズボーンは結社を裏切ったという事になる。

？クロチルダは言った。「クロウの執念があつたとは言え、貴方が死んでいない事は予想していた」と。

？「リベールでの一件に関する結社との水面下での取引……恐ろしく油断ならない相手だという事はわかつていたものね……」

「とは言つても、このタイミングで内戦が起きたのは少々予定外だったがね。本来ならクロスベルを取り込んでからゆつくりと貴族派を呑み込むつもりだったが……：……：そういう意味で私はまんまとしてやられたわけだ。……クロウ・アームブラストにね」

その言葉は賞賛か挑発か。あるいはその両方であるかもとウィルは受け取る。

剣聖か、それ以上の存在へと飛躍した今のウィルでさえオズボーンの大きさは測りき

れない。単純に人間としてデカいのだ。

ちらとクロウを見ると、オズボーンの言葉の受け取り方はウィルと同じように向けていた敵意はわずかに変貌していた。

「良く言うぜ。その予定外ですら利用してこの結末に持つていつちまうんだからな。……敵ながら大したもんだ、と言っておくぜ」

そのクロウのセリフに、ナギトは冷静な印象を受ける。それが思わず顔に出てしまったように、

「意外かよ？俺は言った——お前らも聞いてたはずだぜ。これは気が抜いた方が負けるゲーム——あくまで俺は祖父さんの代わりに一発殴りたかっただけさ」

そしてそれは暗に、狙撃に成功してオズボーンを葬ったと勘違いしたクロウの敗北宣言のようにも思えて。

「……私は君に敗北していたよ、アームブラスト。私が人の身であったならば」

それは後に、オズボーンが《子供達》に出す宿題の答えを暗示していて、そういつたズルがなければクロウに敗北していたという宣言に他ならない。

「そうかよ。ならまた挑ませてもらうぜ。……次は剣か、あるいは政での舞台か……せいぜい楽しみにしてやがれ」

両者の敗北宣言をもってクロウとオズボーンの会話は一段落を迎え、雰囲気がまた一層引き締まる。

？「まさか十三工房の一角まで完全に取り込んでいたなんてね……この先、どうするつもりなの？」

クロチルダの驚嘆と問いかけに、オズボーンは不敵に笑った。

それはウィルたちⅦ組に詳細はわからないまでも、確信させる。

？「決まっている。結社の《幻焰計画》とやら——このまま私が乗っ取らせてもらう！クロスベルの後始末も兼ねてな」

“激動の時代”はこれから来るのだと。

クロチルダはオズボーンに「帰って他の蛇共に伝えるがいい。立ち向かって来るのであれば、遠慮なく叩き潰してくれろ」と言われ、転移魔術を発動した。足元に青い輝きを放つ魔法陣が描かれる。

？「無様なところを見せたわね…婆様によろしく。？君たちも…色々と迷惑をかけたわね。クロウ……貴方にも」

「ヴィータ……いや、こっちも世話になった」

「いつかまた、会いましょう」

そう言ってヴィータ・クロチルダは輝きに包まれると姿を消した。？姉の敗北にエマは呆然と、逃げ去った姉の名を呟くのみ。

その間にレクター、クレア、ルーファスがオズボーンの元に集い、ミリアムは一瞬の

逡巡の後にそれに追従した。

？「今回は良くやってくれた。？」アイスメイデン 《氷の乙女》、ホワイトラビット 《白兎》、スケアクロウ 《かかし男》、——そして
ルーク・オブ・ジェイド 《翡翠の城将》よ」

「閣下こそ、良くご無事で」

？「ま、あなたが死ぬとは端から思っちゃいないけどな」

？「オジサンならもしかして、と思ってたけど」

？「結局、復活の顛末は教えて頂けなさそうですね？」

オズボーンの死亡について、子供達が抱いていた感想に「それは宿題としよう」と誤魔化し、ルーファスに指示を出す。

？「ルーファス——、一週間で後始末をしたまえ。終わり次第、クロスベル制圧を任せる」

その後、この場の後処理が始まる。気絶したままのセドリックはレクターに抱えられ、現実逃避したカイエン公をミリアムとクレアが見張る。ルーファスは今後について

オズボーンを話し合っていた。

VII組はどこまでも蚊帳の外だ。？それでも、腹を立てるところか、呆然とするしかないのが現状。

そんな状況に風穴を空けるのはウイル。空けなければならぬ。

？「ギリアス・オズボーン。あなたと取引がしたい」

オズボーンはルーファスとの会話を中断し、わざとらしくニヤリと笑う。

「ほう……取引とな？それはいかなる要件かな？ナギト・シユバルツァー、いやウイル・カーファイと呼ぶべきか？」

「どつちでもいい。面倒だから腹芸はなしだ。今後、俺たちツールズ士官学院特科クラスVII組のメンバーに立場が不利になるような事を一切するな。卒業した後にもだ。噂話が流れる事も禁ずる」

「それはそれは……また難しい条件を突きつけられたものだ。この内戦終結に手を貸して

くれた君たちにそんな事をするわけがないだろう？噂話にまでは手を出せんがね」

「言い方を変える。あなたが、あなたの部下が、あなたの息がかかった者が、帝国民に間違った情報を噂として流すな、という事だ」

「ふむ、いいだろう……了解した。？だが、その青年はどうする？アームブラスト……彼がテロリストである事はすでに不特定多数に知れ渡っている。これからどう手を回した所で拘束せぬわけにはいくまいよ」

「それならそれに協力したルーファス・アルバレアもだ。……クロウはテロリストグループに潜入捜査していた人物として報じればいい。そのルーファスさんのように」

「…彼が私を撃つた所をツールズ士官学院の生徒たちに見られていたのだろうか？それは生徒たちにどう説明するつもりだ？」

「あなたは生きています。あの場であなたが死んだと見せかけるための罠だったという事にすればいい」

? 誰も口を挟む事はできない、裏側の打ち合わせというものに、クロはシロに変わる。クロウは少しばかり苦い顔をしたが、今は構っている暇がない。

? しかし、話はそんなに単純なものではない。これは双方が望んでいる結末ではないのだ。不穏分子クロウをなんとかしたいオズボーンと、救いたいウイル。問題はウイルがどうオズボーンを説き伏せるかだった。

「……なるほどな。しかし、ならば英雄として活躍してもらおう事になるが?」

「構わん」

? 「フフ……了承しよう。だが、その上でこの話、断ると言ったら?」

? もしも、の話だった。しかし、それを聞いたウイルからは途端に剣呑な雰囲気が出された。

? 「あんたら全員を、ここで殺す。オズボーン宰相はすでに死んでいると国民に知れ

渡っているから問題ない。ルーファスさんは煌魔城の中で不幸な事故に遭い、レクターさんも同様。クレアさんだってそうです。今の俺なら可能だ。……ミリアムは俺たちの側になるんだつたら見逃すけど」

「フフ…殺すとはまた恐ろしい話だ」

「オズボーン宰相、あなたがどんなマジックで甦りを果たしたのかは知らないが、微塵切りでもすればさすがに復活まで時間がかかるだろう」

？「まったく《剣鬼》とは良く言ったものだ。親しくない者であれば、こうも無慈悲になれるとはな。安心したまえ、そちらの条件はすべて飲んでやろう」

オズボーンの返事を聞いて、ウィルは安心した。これで、とりあえずは大丈夫なはずだ。？しかし、気は抜くな。これは取引なんだ、殺すと脅されても、突く所は突くのがギリアス・オズボーンという男だ。

「では、その対価に君は何をくれるのだね??そんな条件を飲むのだ、それなりのものを用

意してくれているのだろうか？」

「もちろんだ。だけどここでは言えない。？少ししたら使いを寄越せ。その後に伝える」

ウィルの答えに、オズボーンは首をひねるが、おおよその見当はついていて事だろう。

？「そうか。では期待しておくでしょう」

取引は終わった。？これで、完璧に運命は変わった。煌魔城でクロウは死なず、その後も士官学院生として生きることができ。『願い』通りだ。

しかし、この後の展開はどうなるのだろうか？自分が歪めてしまった『閃の軌跡』のストーリー。？本来の流れならここで……、と考えた所でオズボーンが動いた。

？オズボーンはⅦ組のメンバーたちの間を割って進み、そのラインの肩に手を置いた。？他の人物には、その行動の意味がわからない。ウィルでさえ、知識がなければ「何故ラインに？」と思った事だろう。

同じく疑問に思っていたであろうラインの、表情が一瞬ののちに変貌する。

「あな、たが……まさか………」

「そうだ。……思い出したようだな」

？オズボーンはまた笑う。それは笑いでもない嗤いでもない、何か他の種類のものだ。
？そして彼は、衝撃の事実を口にした。

「——久しいな、我が息子よ。？お前にも内戦終結の英雄として、しばらくは働いてもらうぞ」

後日譚 青春の終わり

友の声

『……よお。お前がこのメッセージを聞いているということは、俺はおそらく死んでるという事なのだろう。？このメッセージは12月31日……お前との決戦前に録音していたものだ。今から一ヶ月後に、お前のARCSに届くように設定した。……この戦いの後に俺が生き残れば、お前へのメッセージ送信はキャンセルするつもりだが。？……さて、まずは感謝をせねばなるまいな。？ありがとうナギト。お前のおかげで俺はおれの人生を取り戻す事ができた。俺の人生は報われた。……だから、ありがとう。

お前の事だ。「なぜリヴァルが死ななければならなかったのか？」なんて考えているかもしれないな。結論から言えば、狙いはお前のやった『幻獣討伐』と同じクロウの救済だ。《閃嵐の騎士》は貴族連合の英雄……、この内戦が正規軍側の勝利に終われば、敵方の英雄を倒した者の株が上がる……ただそれだけが狙いだ。

?だから《閃嵐の騎士》を打倒したのはお前ではなくVII組だということにしろ。……
まあ、この話も全部、クロウが生きていれば……の仮定のもとに成り立っているんだが
な………ナギト、お前ならクロウを助けてやれると思つたから、俺も躊躇わずに死に
にいける。

?………長々と語つてしまったが、本題はここからだ。いや、むしろ蛇足かもしれない
な??これから語るのは、俺が半生をかけて知り得た《鉄血宰相》ギリアス・オズボーン
の謎についてだ。

?ギリアス・オズボーン………すでにクロウの狙撃によって命を落としたはずの男だ。
無駄になるかもしれない。無駄になればいい。無駄にならなければいけないはずの男
の話だ。

俺は、ギリアス・オズボーンが死んでいない可能性を考えている。?胸に大穴を開け
られた人間が死んでないなんて………はは、冗談にもほどがある。だが、それでも俺はギ
リアス・オズボーンが生きているのではないかと疑っている。?じゃあ、クロウに撃た
れたあいつはいつたい何だったのか?影武者か?違う。クロウに撃たれたギリアス・オ
ズボーンは本人で間違いない。あの宣説にあのカリスマ………あれがギリアス・オズボ
ーンでなく何だというのだ。?ならばなぜ、撃たれたはずのギリアス・オズボーンが生
きているのか?という話になるわけだが………あれは生きていたのではなく、一度死んで生

き返ったのではないかと俺は考えている。？確認もなしに、推測だけで話すのはここまですておこう。

だが、その代わり確証ではないが、俺がそう推測するに至っただけの理由を聞かせようと思う。？《鉄血宰相》ギリアス・オズボーン……あいつが宰相になって初めての仕事は『ハーメルの後始末』。あのハーメル悲劇の隠蔽工作の事だ。俺の家族もそれに巻き込まれて死んだようなものだ。？俺は復讐者となつてまず、俺の家族を奪つたのが誰なのか探つた……そして行きついたのがあのギリアス・オズボーンだったわけだが、そこからさらに調査を進めるにつれ、おかしな事が判明した。

ギリアス・オズボーンは宰相就任の祝いとしてか、家族旅行を計画していた。行き先はハーメル村だ。時はハーメル悲劇の直前……これだけでもう、おかしいとは思わないか??宰相ともなれば、ハーメル襲撃の件も知つていて然るべき。だがあいつは知らずにハーメル村に旅行しようとしても思つたのだらう。宿に予約まで取つていた。……だが、直前に予約をキャンセルしたんだ。ハーメル悲劇の直前に。まるで土壇場で悲劇が起きると知つたかのように、だ。

？不自然さはこれだけに留まらない。ギリアス・オズボーンは自身も含めて三人での家族旅行を計画していた。自分と妻と子供の三人だ。しかし、ギリアス・オズボーンの妻など、どこを探しても存在していなかった。書類上は存在する。戸籍もあつた。だが誰

も見た事がない。？それがギリアス・オズボーンの妻……カーシャ・オズボーンだ。

？ならば子は？ギリアス・オズボーンの子供の名はリイン・オズボーン。奇しくもお前の義兄の名と同じだが、その子は存在していた。リイン・オズボーンが存在を確認した者はいた。しかし、その子もハーメルの悲劇の直後に行方不明となっている。……もしかししたら、お前の義兄リインは、ギリアス・オズボーンがどこかへ里子へ出したリイン・オズボーンなのかもしれないな。

？……話が脱線したが、おかしいのは妻だ。カーシャ・オズボーン……存在しないはずの女。ハーメルの悲劇の直前に、人々の記憶と共に姿を消した人物だ。……俺はこれに、何かを感じた。なにか人の考えも及ばぬ不可解な現象を。神秘というやつを。

？……それに、不自然といえ、俺もそうだ。俺はハーメルの後始末の際に腹部に銃弾を七発撃ち込まれ、一晩を越えて近隣の村の者たちに助けられた。まだ幼い俺が銃を七発受けて一晩生き延びる？どう考えても不自然だ。……俺は、それすらギリアス・オズボーンの仕業ではないかと疑うほどになっている。

俺がギリアス・オズボーンを、どこか超常的存在だと思つたのはいつからだつたか……？ナギト……お前はギリアス・オズボーンにどんな印象を受ける？辣腕？剛腕か？……だが、それにしてもギリアス・オズボーンのやることなす事すべてがうまく行

きすぎているとは思わないか?……今回の内戦だつてそうだ。クロスベルという防壁を盾にカルバードからの侵略を避け、貴族勢力の力を弱める狙いとするならば、それはどんぴしゃりとすら言える。あいつはクロウの狙撃のタイミングすら操っていたのではないかとすら思う。

……ありえない話だが、こうもギリアス・オズボーンがうまく立ち回っているのを鑑みると、妄想してみたくもなる。

?あいつは世界を繰り返し返してのではないか?やり直しているのではないか?時間を巻き戻して間違いを正しているのではないか??でないと、あいつにとつて常に最良となる結果がついてくるとは考えにくい。

もう一度言う。これはありえない妄想の話だが、ギリアス・オズボーンが時を巻き戻して、常に最良の結果となるようにやり直しているのなら、これまでの快進撃のすべてに説明がつく。?それに、ハーメルンの悲劇の回避もだ。ギリアス・オズボーンは悲劇が起きると知らなかった。そして、悲劇が起きた村で自分が助かるために時を巻き戻して旅行に行くのをやめた。

……ははは。ありえない、話だ。?さてと、妄想話も聞いてもらったし、そろそろ俺は行くとするよ。お前との決戦にな。?……どうか、達者でな。さらば、我が友よ』

どっちでもいいの真意

あの後。煌魔城でリインがオズボーンの実子であると判明した後、VII組のメンバーはエマの転移術によって煌魔城より退去した。

まるで夢だったかのように煌魔城はバルフレイム宮へと姿を戻した。

内戦終息の声明が発表されたのは、混乱の収束した翌日だった。

貴族連合は正規軍に全面降伏し、与みしていた将らはすべて階級を落とすか、閑職に追いやられた。

しかし、その事に文句を言う人物は誰もいない。この内戦で一人勝ちしたとも言えるギリアス・オズボーンによる正当な人事異動だとされたからだ。

その後、内戦終息は帝国各地に広まり、混乱していた帝国民も落ち着きを取り戻した。かと思えば、帝国はクロスベル侵略を始めたのだ。

内戦開始直前のクロスベルの暴挙に対する制裁にして、その行為を正す。という名目のもと、クロスベルは瞬く間にエレボニア帝国領となった。

エレボニア帝国の内戦やクロスベルの異変と時を同じくして国内が荒れていたカルバード共和国も、帝国のクロスベル制圧の報に本腰を入れてクロスベルより帝国を追い払おうとするも、機甲兵の存在により敢え無く敗れ去る事となる。

カルバードも飛空挺部隊を投入するが、これも撃墜される。その際に活躍したのが内戦終結に尽力したと言われる二人の若き英雄——《蒼の騎士》と《灰色の騎士》だ。

そして、現在。

クロスベルのオルキスタワーにて、ルーファス・アルバレアがクロスベル総督に任命された。

しかし、クローウやリインの事を除けばクロスベルの事など、ナギトにとっては所詮は他人事であった。

内戦終結に一役買った英雄として二人はクロスベルの守備に駆り出されていた。

クローウの復讐すると誓った相手の言いなりになるのは、いったいいかなる屈辱かはわからない。だが、それでも今は言う通りにしてほしい。でなければナギトも運命を変えた意味がないのだ。

ナギト・シュバルツァーを名乗る男は、すでに自身の記憶のすべてを取り戻していた。ウイル・カーファイとして剣技を培ってきた年月を。《剣鬼》と呼ばれ恐れられた僅かな期間を。ナギト・シュバルツァーとして友人たちと共に成長した時間を。

ならば、この男を今は何と呼べばいいのか？

本名であるウイルか？親しみを込めて呼んできたナギトか？はたまたは渾名である《剣鬼》か？

《剣鬼》呼びはないとしても、ウイルと呼べばいいのか、ナギトと呼べばいいのかわからない。

本人は学院卒業までは（手続きが面倒だから）ナギト・シュバルツァーと名乗るつもりらしいが、本心はどうなのだろうか？

そこがはっきりしないせいで、内戦終結から今まで彼を呼ぶときはほとんどの人物が「ねえ」とか「なあ」とかになってしまっているのが現状である。

それに、少し気になっている事がある。気になっているというか、腹が立っているというか。

煌魔城で彼がオズボーンと話す時、オズボーンの「何と呼べばいいのか？」という問いに対して「どっちでもいい」と吐き捨てたのだ。

ウィルでもナギトでもどっちでもいいと。それはいったいどういう事だ。ウィルとして過ごした年月も、ナギトとして過ごした時間もどうでもいいという事なのか。

あの場では、そんな事を言っている場合ではないとわかっていた。しかしそれでも「ナギトと呼べ」と言って欲しかった。自分たちと過ごした時間は特別なものだったと。Ⅶ組で共に励んできたナギトの名は特別なものだと、発して欲しかったのだ。

それがこの所、Ⅶ組がぎくしゃくしている理由である。

☆★

中庭のベンチからラウラがギムナジウムから出てくるのを確認して話しかける。「よう、ラウラ」と。

「ナギトか。どうしたのだ？」

ナギトは「ラウラを待つてたんだよ」と返して、ラウラがどう反応するのか見てみる
が、ラウラは平然と「そうか、では行こう」と歩き出す。
ううむ、やはりこの程度では赤面すらしなくなつたか。

ラウラと並んで歩きながらナギトは言った。

「そーいや、今日は水泳部も送別会だつたんだっけか？何をやつたんだ？」

「競泳が主だ。あとは簡単な引き継ぎだな。ナギトはフェンシング部の送別会によべれ
たと聞いたが？」

「部外者だから断ろうと思つただけだな。まあ、部員全員の総当たり戦をやつた感じ
かな」

舐めプしたら先輩フリーデルに一本取られた事は内緒だ。迅雷もかくやというス
ピードで踏み込んできた時は本気でフリーデルが人間か疑つた。

他愛のない話をしながら学院を出て、寮に戻る前にナギトはラウラを喫茶店に誘う。

喫茶店に入ると、いつもと違って客は少ない事に気付く。秘密話もできそうなくらいだ。

テーブルに着いて飲み物を注文すると、ラウラが唐突に、その問題を出した。

「ナギト、いつまで今のままでいるつもりだ？」

何が？と問い返すほどナギトは鈍いわけではない。ラウラはいつまで一部のメンバーを除くⅦ組のメンツと不仲もどきを続けるのか？と問うているのだ。

「まあ……いつまでも今のままってわけにも行かないよなあ。来週にはリインとクロウも帰ってくる予定だし、噂の件もあるしな……」

来週には政府の要請でクロスベルに向かっていた二人が帰ってくる。帰ってきた二人にまでナギトとその他のメンバーの不仲を見せたくはない。

ラウラもそこまでは承知していたが、その次のワードについてまでは考えていなかった。「噂？」と聞き返すラウラにナギトは「ほら、常任理事の」と言う。

それで納得したラウラは、それでも首をひねる。そんなのただの噂だし、噂には手を

出せないはずだと。

ナギトはラウラのその疑問を察しつつも、話題を一つ前に戻す。その噂にはある人物の作為が感じられる、とは言えないことだ。

「今日の内にでも動くとするわ。いいかげんにしとこうと考えてたところだしな」

「うむ、それなら安心だ」

「ならこの話は終わり。恋人らしい会話をしようじゃないか」

ナギトはそう言って雰囲気を一変させる。内戦終結直前に恋仲となった二人だったが、あの夜からあまり恋人らしい事をしていない。このあたりでそろそろラウラ成分を補充しなければバーサーカーと化してしまう（大嘘）。

「うむ…それはいいのだが、こういうのはもつと雰囲気が大事なのではないのか？」

「時にはこういうのもいいだろうよ。というか、こんなやり方でもないとなんか雰囲気

にならないしさ」

ラウラの「それもそうだな」という声を聞き届けてから、ごほん、と咳払いをしてナギトは訊く。

「ラウラは俺のどんところが好き？ 剣の道って答えはなしで」

と、初期の恋人にありがちな質問をした。それも、ラウラの挙げるナギトを好きな理由の主たる『剣の道』という逃げ道を塞ぎつつ、である。

ラウラは「ふむ……」と数瞬思考し、「無理だ」と言う。

「私はそなたの剣の道……つまりそなたの生き方に惚れたのだ。そなたの、ナギト・シユバルツァーの生は剣の道とは切り離せぬものなのだろう？ ならば私はやはり、そなたの剣の道が好きだと言おう」

正論すぎる正論だ。しかしナギトは予想していたかのように、わざとらしくぶーたれ

る。

「そんなのわかってるよ。でも恋人つてのはもつと甘い言葉を求めるものなんですー」

だだをこねるナギトに、ラウラは「では、言い方を変えよう」と続ける。

「私はナギトのすべてが好きだ。嫌いなどころなど、何一つとしてない」

これにはさすがに赤面したナギト。そのナギトに次はラウラが訊く。

「ナギトは私のどのような所が好きなのだ？」

「真っ直ぐなところ。かわいいところ。困ってる人がいると助ける性格。……うん、全部かな。嫌いなどころは一つもないよ」

言うど、この言葉にはやはりラウラも赤面する。はたから見る店員は初々しいな、

と思いつつ新たな客にいらっしやいませ、と声をかける。

ナギトは、今夜このままイケるか!?!と半ば興奮しつつ、さらに会話を続けようとして、その声に遮られた。

「やつほー、二人とも!ここでなにしてるの?」

ミリアムの登場である。情報部に戻っていたミリアムが帰ってきたのだ。

「ちよつとお喋りだ。帰ってきたのか?」

甘ったれ恋人モードから切り替わり、いつもの表情でミリアムに問いかける。それにミリアムは「うん、やつと仕事が片付いてさー」と返す。「どうしてここに?」とナギトが訊く。

「第三学生寮に帰ったんだけど、誰もいなくて。それで町に出たら店の外でナギトとラウラを見つけたから来たんだ。もしかしてオジヤマだった?」

「そんな事はない」と言いかけたラウラを遮ってナギトは「そうだよ。まったく、俺とラウラのLOVE LOVEタイムを邪魔してくれやがって」と悪態を吐く。ミリアムはニシシと笑って悪びれもせずに「ゴメンね?」と言った。

勘定を済ませて店を出てから、第三学生寮へと帰る。三人並び歩きながら、ミリアムは「そういえば」と話を振る。

「噂ってここまで広まってるんだね」

ナギトは「そうだな」と答える。

「ねえナギト。……気づいてる?」

その主語のない問いに、ナギトはたったの二文字で応える。

「——ああ」

噂について、確信はあったが確証はなかった。このミリアムからの問いかけが、確証になった。

「なんの話だ？」と首をひねるラウラには、とりあえず「なんでもない」と答えておく。

☆★

寮での夕食後、皆が席を立つ前にナギトが声を張り上げる。

「みんな、話があるんだ。しばらく付き合ってくれないか？」

異を唱える者はいなかった。

「あ、サラ教官は結構です」という言葉にも笑いをこぼす者も。

「なによ、あたしはいらないって言うの？」

むつとするサラにナギトは「だって、教官はわかってるでしょう？」と言った。
「他にもラウラ、ユース、フィーにガイウス……あれ、けっこういるな。まあいいや、全員に確たる言葉として伝えよう」

そのセリフは、いきなり本題に入るといふ事を示唆していた。

「俺の事はこれまでのとおり、ナギトと呼んでくれ。これからはずっと」

言葉の意味を考える一同だが、その中で一番ナギトを遠巻きにしていたアリサが言った。

「どういう事かしら？……その意味が私にはわからないのだけど」

アリサは煌魔城でのナギトの「どっちでもいい」を根に持っているのだ。若干の棘がある言い回しにナギトは逆に「どういう意味だと思う？」と問いかけた。

その表情は、最近の落ち着いたナギトではなく煌魔城以前のナギトがよくした表情だった。その表情の意味は「考えろ。考えればわかる」だ。

「……いかな。これじゃいつもとおんなじか。俺はこれでも反省してる。煌魔城でのオズボーンとの会話の際、呼び方をどっちでもいいと軽々に言った事を」

ナギトは言つてのける。本人には無自覚だろうと思われていた、不和の原因を。煌魔城以降、磨きのかかった慧眼に皆は一様に瞠目した。

ナギトは「だが」と続ける。

「それでも、その真意を考えてみてほしい。俺は、やつにナギトでもウィルでもどっちにでも呼んでもらつて構わなかつた」

「だけど、みんなにはナギトと呼んでほしい。とはもはや答えとも言えるヒントのために口に出さなかつた。」

「だから、どっちでもいいと言つた」

「しかし、僕たちにはナギトと呼べど？卒業までしかそう名乗らないのだろうか？」

論理の矛盾に早く気づいたのはマキアスだった。しかし、そこからの事までに頭は回っていない。

ナギトはいつものようにニヤつくが、それではやはり、いつも通りなのだ。今回は反省の意を込めて、早々に真意を明かすでしょう。

「そうだ。俺はツールズ卒業までしかナギト・シュバルツァーを名乗らない。

その後は、こう名乗るつもりだ。ナギト・ウィル・カーファイと。俺にとっては、ウィルとして過ごした年月もナギトとして生きた期間も等しく大切なものだ。だから、どちらかを捨てるという事はしない。これまでみんなにはナギトと呼んでもらっていた。だからこれまでもそう呼んでほしい。……それだけの話だよ」

そう言ったナギトの顔は少し寂しそうだった。

誰にも言えない。言わないと決めている。

——ナギト・シュバルツァーという存在は消える。

“クロウを救う”——その一点のために発生したバグは、それを達成したら消えてなくなるのが運命だ。

だからきつとナギト・ウイル・カーファイなんて名乗れないし、この時間も長くは続かない。

今のこれは、ただのエピローグ。閃の軌跡Ⅱという物語が真のエンディングを迎えるまでの猶予時間に過ぎない。

だからこそナギトは、いつも通りに過ごすのだ。

ナギトの言葉、そこからの理解は早かった。

オズボーンからは何と呼ばれてもいい。大した関わりも親愛の情もないからだ。だが、Ⅶ組のメンバーにはこれまでの通り、親愛を込めてナギトと呼んでほしい。

たったそれだけの事だったのだ。

あまりにも簡単でありにも難解な謎は、こうして解かれた。

言ってしまうば、これはナギトのわがままだった。ウイルの時に親しくなった人物にはウイルと、ナギトの時に親しくなった人物にはナギトと呼んでほしい。大切な思い出の象徴ともいえる名を、その時のままに親愛を込めて呼んでほしい。

たったそれだけを言うのに、どれだけの時間をかけているのだから。とナギトは我が事

ながら呆れる。しかし、本当はみんなにそう気づいて欲しかったのだ。本当はすぐにも言いたかった「俺はお前たちだからナギトと呼んでほしいんだ」と。

ナギトは「話はこれで終わりだ」と言つて、一人食堂を出て行く。残された皆はその後ろ姿に若干の照れ隠しを見てとりながら、安堵していた。

これで、疲れて帰ってくるであろうリインとクロウを、ぎくしゃくしたまま迎えなくていいわけだ。

食堂から出たナギトも、それについては安堵していた。

しかし、目下の一番の問題はそれではない。確かにリインとクロウにぎくしゃくしたVII組を見せるのは嫌だったが、そこまで大した問題ではなかった。

「明日、行くかなあ」

ナギトは呟いて、自室に入る。
後ろ手にドアを閉じるナギトの表情は、明日の事を考えて早くも緊張したものとなつていた。

《緋玉の騎兵》

噂——それは、クロスベル総督となったルーファス・アルバレアに代わり、ギリアス・オズボーンが、ツールズ士官学院の常任理事につくという噂だ。

理由としては、碧の大樹の出現と消滅の混乱後のクロスベルを治める立場は多忙を極めるだろうという事で、クロスベルが落ち着くまでの代理としてオズボーンが常任理事を引き受ける、というものだ。？総督より多忙だと思われる宰相が代理とは、笑わせるなという話ではあるのだが、あのギリアス・オズボーンならもしや……と誤ってしまうのだ。

ギリアス・オズボーンが常任理事になったらツールズがめっちゃくちゃになるだろう事は目に見えている。？故に、その噂を真実にするわけではないのだ。

この噂の出所はまず間違いなくオズボーン本人だろう。では何故オズボーンがこんな噂を流布したのか？それは、ナギト・シユバルツァーに対する合図と脅迫だ。

煌魔城での取引……今後、ナギトの友人知人に悪い影響を与えないという条件の引換として「ここでは言えないが、あとで使いを寄越せ」と言つたのだ。言わば、この噂こそがオズボーンの使いなのだ。そして、脅迫でもある。それは単純に、この使いに応じなかつた場合、オズボーンがツールズ士官学院の常任理事になるということ。要は、学院をめちやくちやにされたくなければ来い。というわけだ。

？ナギトは明日、行く事を決意しそのまま眠りにつく。

☆★

翌日の朝、ナギトは起きるとサラに事情を説明する。宰相に会いに行くとなれば、授業をサボる名目は立つだろう。「卒業できないわよ」などと脅されたものの、なんとか承諾を得て列車に乗り込み、帝都ヘイムダルに到着した。

バルフレイム宮に繋がるドライブケルス広場で、宮殿を守る衛士に名乗り、要件を告げると、しばらくしてクレアがやってきた。

「クレアは「ようこそ、お待ちしております」と懇懇に頭を下げた。？ナギトも同様に「いえ、お待たせして申し訳ない」と応える。

「案内します」と言うクレアの後を追いつ、バルフレイム宮に足を踏み入れる。？オズボーンの執務室に行くまでの、長いようで短い道のり。その間で、ナギトはクレアに話した事があつた。

「クレアさん、リインがオズボーン宰相の息子だつて気づいてましたか？」

「クレアは「雰囲気や話し方でなんとなく」と言う。それを言わなかつたのは、リインに嫌われたくなかつたからなのかどうかは、知る由ではない。

「リインは隠されていた、と思うでしょうなあ」と、ナギトが嫌みつたらしく言うと、クレアは悲しそうに「嫌われちやいますね」とこぼした。

「『氷の乙女』とまで言われたあなたの鉄面皮はどうした」と喉まで出かかつたナギトは、なんとかそのセリフを飲み込み、代わりの言葉を用意する。

「まあ、素直に謝れば許してくれるんじゃないですかね？俺も協力しますよ、兄弟分たちが悲しむ顔は見たくないですから」

?にこやかにそう言える自分に、リインの影響を感じた。あの人たらしの手管がわかってきた感じがする。

?クレアは感謝を伝えると「そういえば」と話を変えた。

?「ナギトさんは閣下に何を与えるおつもりですか?」

?それこそが、今日の本題だった。しかし、クレアにとり、それは未だ知らなくてもいい事だとナギトは判じて「さあ?」と誤魔化す。

?「あなたならわかるんじゃないですかね??というより、俺はもう答えを言っちゃってますけど」

?それでもヒントだけは残しておく。それがナギトのやり方だ。?「ここですね?」と宰相の執務室前で立ち止まり、クレアに確認を取ってノックする。?「入れ」という声が聞こえてからドアノブをひねり、「それでは」と敬礼するクレアに、ナギトは茶化したように答えを言った。

?「それじゃあまた。ばいばい、お姉ちゃん」

執務室に消えるナギトが残した言葉に、クレアは確信を得た。ナギトがオズボーンに

突きつけた条件の引換に差し出すものは――

☆☆

？「よく来た。ナギト・シユバルツァー……煌魔城以来だな」

赤色の豪華な絨毯に、壁には値が張りそうな絵画、調度品は華美ではないが、その造りと醸す雰囲気から大した逸品だとわかる。大きなガラス張りの窓からは帝都の景色が一望でき、その支配者である事を実感させるようだった。

「……ずいぶんと手の込んだ使いを寄越したもんだな。テスト代わりのつもりか？」

会話のキャッチボールが成立しないナギトの言動に、オズボーンは苦笑する。どうやら自分はこの男にとって嫌われるという次元を通り越したところにいるらしい。

？「私とお喋りをするつもりはないか。まあいい、では建設的な話題に入ろうではないか」

？「ニヤリ。オズボーンは笑った。」

「そうだ。噂の流布は試験のつもりだ。……ふむ、いささか話が飛躍したな。まずは確りと言葉で表してもらおうか、ナギト・シユバルツァー。？煌魔城での取引……君の条件を飲む私が飲む代わりに、君が私にくれるものはなんだ？」

？ナギトは、応える。

「俺が《^{アイアンブリード}鉄血の子供達》になつてやる」

？悩んだ末の結論——ではない。これは初めから考えていたことだった。煌魔城での取引……クロウを含むVII組メンバーに対し、手を出さない事を誓わせるための条件。それがナギト・シユバルツァーの鉄血の子飼化だ。

ギリアス・オズボーンにしてみれば、破格の取引だった。木っ端を十人前後見逃すだけで、この男を手駒にできるのだから。

「ようこそ。歓迎しよう、ナギト・シユバルツァー」

深い笑みを浮かべるオズボーンに、ナギトは鋭い視線を向けたままだ。

？「初めに断っておくが、俺はあんたの手駒にはなるが、絶対服従になるわけじゃない。それは理解しておけ」

それにツールズ卒業後はどうなるかわからない身だ。オズボーンならそこまで見通しそうなのが怖い所だが。

オズボーンはほくそ笑む。それでは「いつか裏切る」と宣言しているようなものだ。優しいのか？いや、易しいのだと。

？「よかろう、承諾した。細かい事は、もはや言うまい。三月までツールズ士官学院に在籍するつもりなのだろう？？であれば、四月からここに来るといい。情報局の方で雇ってやろう」

「それについてはお断りする。働き口くらいは自分で見つけるさ。もちろん《子供達》としてのオーダーは受け付けるがな」

？「警戒が強い事だ。そんな事では交渉など上手くはいかんぞ？」

「大きなお世話だ。それはレクターさんの役目だろうが」

売り言葉に買い言葉。ナギトはオズボーンのペースにはまりかけている事を自覚しながら、そのやり取りをやめることはしなかった。このまま軽妙に言葉を交わしてこの場から立ち去りたかったからだ。

「……仕事があれば呼び出す。私に用があればこの番号にコールするといい」

？オズボーンは数字が羅列するメモ用紙をナギトに手渡した。「一国の宰相とのホットラインとは。恐れ入る」とナギトは肩を竦めるが、オズボーンの雰囲気は、鉄血宰相と呼ばれるそれに変化していた。

「迎えが来たようだ。それではまた会おう。《ブラッドフオード緋玉の騎兵》」

同時にドアがノックされ、クレアが入室してくる。どうやら《緋玉の騎兵》というの

がナギトの《子供達》としての渾名らしい。？物騒な名だ、と思いつつナギトは執務室を後にする。

またクレアと共に話しながら歩き、バルフレイム宮を出て街を抜け、列車に乗り込む。

？すでに時刻は夕闇が差し迫る頃合いだった。

ほんの1ページ

《灰色の騎士》リイン・シユバルツアー？

《蒼の騎士》クロウ・アームブラスト

？この二人は内戦の終結に尽力した若き英雄として前線に身を置き、敵の排除と味方の鼓舞という役目を担っていた。？それだけでなく、政府からの極秘の要請も遂行していた。

『英雄』という役目は権限こそないものの、その肩にのしかかるものは重責と言つて過言ではなかった。

？そんな英雄二人が、トリスタに帰還する。駅から降りた二人を迎えたのはⅦ組のメンバーだった。仲間であり友人でもあるⅦ組のみんなを見れば、なくした元気もいくらか取り戻せる。

？皆から背を押される形でナギトが一步前に出た。二人を迎える最初の言葉はお前が

こそ言うべきだ、と。

？「よう。…言いたい事、聞きたい事はたくさんある。だけど、とりあえずお疲れさま。それと……………おかえり」

？いつものニヤニヤとした笑みではなく、柔らか微笑みに、リインとクロウもまた笑みを浮かべて応える。

？「ただいま、ナギト」

？「出迎えご苦労！……………つてな雰囲気でもねえな。ああ、ただいま」

そのやり取りを皮切りに、皆が二人に声をかける。サラは（実はナギトも）このままお疲れさま会に洒落込もうと考えていたのだが、それを他ならぬⅦ組メンバーが許さなかった。？リインを除くⅦ組のメンバーは、全員が今年で卒業するつもりだ。そのため、今のⅦ組は授業をハイペースで行なってもらっている。故に一度サボればもうついていけない、というのが実であり、そのためこのままお疲れさま会に洒落込むわけには

いかないのだ。

?Ⅶ組のメンバー全員で学院への坂を登っていく。?雲一つない空はしかし、近づいてくる別れを予感させていた。

☆★

ライノの花が咲く頃に出会った、この仲間たち。これからどんな事があっても。例え敵になったとしても、友人と呼べるような……そんな得難いものを得た。

?夏には共に星空を見上げた、この仲間たち。これからどんな事があるうとも、お前たちと星空を見上げた記憶は色褪せないだろう。?

深くなる秋。もうその頃には俺たちはかけがえのない仲間として、一致団結していた。

最初は互いの距離に戸惑っていた。貴族と平民。相容れない身分の差に。しかし、それも時が経つにつれ問題ではなくなった。打ち明けた夢、生い立ち……、赤の他人だった俺たちが絆を深める様は、誰かからは不思議に思えた事だろう。

愛している。信じている。言葉じゃなく、感じている。響き合う鼓動が一つになった

感覚を今でも覚えてる。

今、別れるとき。手を振る君の涙を胸に焼きつけておくよ。たとえもう二度と会えないとしても。

? I'll remember you — 私はあなたを忘れない。



「クロウが帰ってきて、またこの部屋が狭くなるな」

? ニヤリと、いつもらしく笑ってそう言うナギトに、クロウもまた笑って言い返す。

「なんだ、俺がない方が良かったのか？」

「まさか。もうお前がいなくなんか物足りなくなっちゃってな」

「そいつは嬉しいセリフだな。…だが、聞く奴が聞けば、けっこうヤバめのセリフだぞ、それ。委員長ちや……エマとか」

「あー、そつち系か。……俺のセリフは健全な意味で言ったんだからな？」

「わかってるよ、まったく……。俺としても、お前とこうやってバカ話できるのは嬉しいんだぜ。ナギト」

肩を竦めるクロウに、ナギトは「ならいいんだが」と返し、表情を一変させ声のトーンを落とす。

？「どうだった？」

要領を得ない質問はしかし、クロウにとってはそれで十分だったようだ。

「……やっぱ鉄血にいいように使われるのは癪だな。……しかしまあ、今はただ生き残れてる事に感謝だ。あの野郎を叩きのめす……次は正面からだ——と、心機一転できた

のもあるがな」

ナギトが聞いたのは、クロウの心境だった。親の仇とも言える鉄血宰相ギリアス・オズボーンに従うという事は、クロウにとつてひどく屈辱的な事なのではないかとナギトは考えていたのだ。？クロウの吐き出した言葉が、真実のすべてであるとは言えるまい。しかしそれでも、真実の一端である事は確かだ。

クロウは「ふ」と柔らかく微笑んだ。それは、その一助となったナギトへの礼でもあつて。

？「そいつは重畳……。クロウ、お前が生きてて良かった……。……本当に」

「なんだよ、大袈裟だな。まあ確かに死ぬかも、とは思ったけどさ。あと、変なもんも幻視したし」

？クロウのつぶやくような声にナギトは反応し復唱する。

「幻視？」

「ああ、《緋き終焉の魔王》に胸を貫かれるイメージだ。まあ、実際はそうならなかったんだから、単なる幻なんだろうけどな」

？目を細めたのはナギトだ。だってそのイメージは、ナギトがいない場合の世界に起きていた真実だからだ。？もう、そんな事はありませんはずなのに、ナギトは少しだけ嫌な予感がした。

不思議に思っている事がある。？それは“クロウが生き残った”という事だ。もちろん、そう仕向けたのは自分なのだが、こんなに簡単だとは思わなかったのだ。

？クロウの死は、言わば神により定められた物語。予定調和のはずの物語が狂ったというのに、何のテコ入れもしてこない。？ナギトというバグを発見し、その記憶を奪ったように、クロウの生存というバグを処理しようとしていない。バグを消すための修正力が働いていないのだ。

ナギトの本質——願いの化身が、あの異界の緋の玉座でそう暗示してからそういう不安が渦巻いている。

ナギトはそれを、クロウの生存という決定的バグによって、世界の修正力が働かなくなつたためと納得しているが、油断は大敵だろう。

？ナギトは妄想を振り払い、いつもの顔でクロウを見た。

? 「正夢にならないように気をつけろよ。特に夜道に注意だ。お前の敵は鉄血宰相……油断、慢心は厳禁だぞ」

? クロウは「わかつてらあ」と返事をしてベッドに寝転がった。もう夜も更けている。明日の、最後の自由行動日に向けて今日は早めに眠るとしよう。? ナギトはそう思考し、クロウに倣ってベッドの上で目を閉じた。

☆★

? 3 / 13 自由行動日

? 今日は、今年でツールズ士官学院を卒業する者にとっては、最後の自由行動日だ。

この日、ナギトは存分に笑った。? リインとアンゼリカのバイクでのレースを見物し、再びのブレードマスター選手権で優勝し、学院最強決定戦に参加する。

ナギトは言わずもがな、学院最強は自分だと考えている。《剣鬼》としての鬼気を取り戻し、ウィルとしての記憶を取り戻し、この学院で友らと笑い合った思い出が、ナギト

を《理》に至らしめた。

今のナギトは誇張なく世界でも有数の武人、剣士だ。それは紛れもない事実で——
「、だからこの最強決定戦（笑）には参加しない事にしていた。

が。

「どれ、ナギトくん。君も来なさい。ユン殿の後継……八葉一刀流を継ぐ者よ。この儂
がその剣力……測ってくれようぞ」

そう言ったのはリインらと戦い惜敗——したかと思えば消耗もなく戦後すくつと立
ち上がった学院長ヴァンダイクだった。

未だ名誉元帥として正規軍に籍を置く生きる伝説ヴァンダイク。装甲車を袈裟斬り
にしたとか、機甲兵を相手に生身で渡り合ったとか逸話に事欠かない古兵だ。

他にもナギトやリインの師匠であるユン・カーファイの知己でもあるとか。世間は意
外と狭いと感じる。

「それはそれは。光栄な事です。しかし老骨に鞭打つ恩師をあまり見たくは——」

“ない”と続けようとして、発されたヴァンダイクの覇気にナギトは目を剥いた。

「御託はいい。かかって来なさい」

口調は穏やか。雰囲気は剣呑。恐ろしいほどに練磨された闘気はただでさえ巨躯のヴァンダイクを巨人の如く錯覚させる。

「はは」

思わず笑みが溢れる。ビリビリを大気を震わせるヴァンダイクの覇気はまさに達人クラス。軍人としてはおおよそ最高峰の武力を誇るだろう。

「それじゃあお言葉に甘えて。行きます——」

踏み込む。最速の一刀は雷鳴を纏って。

「——よっ！」

剣鬼七式、外ノ太刀 雷の型 迅雷。

雷速の踏み込みはしかし、慢心の自覚のないナギトの慢心の証。スピードに特化した迅雷は直線を駆ける。それは達人にとって読むに容易い一撃だ。

案の定そのスピードを見切られたナギトを待ち受けていたのはカウンターの一闪。業風を引き連れたヴァンダイクの長大な斬馬刀が太刀ごとナギトを押し潰さんと待ち構えている。

それを見てとったナギトは直前で迅雷を取りやめ、斬馬刀を紙一重で躲す。刃は避けだが斬馬刀が纏った業風がナギトの頬を切り裂いていった。

しかしそれを気にする事ができるほど余裕のある状況ではなく。むしろ武器を振り切ったヴァンダイクは死に体というやつで、これはナギトにとってのチャンスだった。

地面に打ち付けられた斬馬刀を踏みつけて跳躍。そのままヴァンダイクの顔を足蹴

にした。あまりにも硬い感触。

「岩かよ!?!」

「もつと力を込めてよいぞ」

驚愕したナギトの脚を掴んで乱暴に投げるヴァンダイク。空中で体勢を取って危なげなく着地したナギトにヴァンダイクは追撃している。

「う、お、わ」

剛力で振られる斬馬刀を太刀でいなしていく。次の強引に振られた一撃を受けて距離を取り、ナギトは笑ってみせた。

「首がもげても知りませんからね!」

それはさっきのやり取りの続きだ。ナギトが本気で蹴れば普通に鍛えた軍人くらい

なら首が飛ぶ（物理）。いかに鍛え上げられた肉体をもつヴァンダイクでも最悪の場合があるかもしれない。

しかし、それを押ししても全力を出せる悦びをナギトは受け入れる事にした。

「剣鬼七式」

太刀に闘気を装填する。解き放つ一撃は方向を限定して威力を底上げた三ノ太刀。

「破空　：　突！」

迫る暴威を前にヴァンダイクもまた薄く笑んで斬馬刀を振るった。老練な一撃はしかし若さを思わせるほど荒れ狂った闘気の奔流で、ナギトの破空を相殺するのみならず、そのままナギトを蹂躪すべく猛っている。

「二ノ太刀改メ、螺旋流壁」

しかしそれは剣鬼七式、二ノ太刀“絶刃壁”を改良した防壁で防ぐ。“螺旋流壁”は

迫る攻撃を螺旋によって受け流し拡散するナギトの新たな戦技だ。

「むうん！」

ナギトが螺旋流壁を解除すると同時にヴァンダイクの猪突猛進が襲う。察知していたナギトは十全の体勢で防御するが――

「ぐうっ!？」

そのあまりにもあまりなパワーに押し負けて吹き飛ばされてしまう。

闘気の総量も出力もナギトはヴァンダイクを上回っているし、なんなら剣技においてもナギトが上だ。それなのに圧倒できないのは経験値の差か、あるいは――

校庭の端にまで飛ばされて着地。顔を前に上げるとヴァンダイクの投げ放った斬馬刀が目と鼻の先にまで迫っている。ローリングして回避。危うく死ぬ所だ。

地面に突き刺さった斬馬刀を引き抜いて、お返しの投擲。かなりの力を込めたつもりだがヴァンダイクは苦も無くキャッチした。

「返してくれてありがとう」

挑発も忘れずにセットされている。「ははは」とナギトはイラつきを噛み殺してヴァンダイクとの距離を詰めた。

「疾風——」

風のように鋭く、風のように軽やかに。刻む斬撃は疾風の如く——

「——孤影燎原」

着地の衝撃を跳躍に利用したナギトは無数の孤影斬でヴァンダイクを狙う。この戦技の連続も以前とは比較にならないほど練磨されていて。疾風の速度、孤影斬の雨あられは規模と威力を増していた。

「——喝！」

しかしそれを喝破だけで霧散させる老練の名誉元帥。

着地したナギトはヴァンダイクを見据えた。筋骨隆々な巨軀。さすがに最強格の軍人は違うものだ。

「こんなものかね？」

ヴァンダイクもまたナギトと同じようにその姿を見据えていた。自身とは比較にならない矮軀が、自身を圧倒するほどの心技体を持っている。それが自分の教え子ともなれば魂に火が着くのも当然だった。

「……さつきから……やけに挑発しますね、学院長」

「挑発？……ふむ、確かにそうかもしれないんだな。そんなつもりはなかったが」

つまりは本心だと。そう言うヴァンダイクにナギトは“徹底してるな”と感じた。

「わかりました。見せましょう……俺の八葉を」

ヴァンダイクはナギトの養父にして剣師たるユンの知己でもあるらしい。

この手合わせは“学院最強を決める”という以外にも八葉一刀流の後継者を試すという側面もありそうだった。

「八葉一刀流、始の太刀」

す、とナギトは太刀を大上段に振り上げた。攻撃に全振りしたその構えは誰から見ても隙だらけだ。これまでの目を見張るスピードや周囲を巻き込むほどの力もなく。波濤のようだった鬨気の奔流はすっかりなりを潜めている。

ヴァンダイクは武の者ではない。軍に生きた戦人。軍に生きる上で武を納めたに過ぎず、その本質はどこまで行っても軍の者だ。しかし、その道の頂点に立った一握りの

人間でもある。

だから、感じ取る事ができたのだ。

——
静謐。

至境の領域に踏み込んだ者のみが発する / 感知できるその雰囲気。

「これがユン殿の……、面白い。……征くぞ！」

ヴァンダイクは久しく軍人としての血が沸き立つのを感じて、斬馬刀を力いっぱい握り締めてナギトに肉薄した。

胸を薙ぐ一閃。ヴァンダイクの全霊を乗せた渾身の、会心の一撃——

振り下ろされた太刀には尋常ならざる力はなく、見紛うほどの速度もなく。それはまさしく素振りのようである。

両者、得物を振り切った。

それは本来あり得ない出来事だ。太刀と斬馬刀はどこかで打ち合うはずだ。鉄と鉄のぶつかる音が聞こえなければおかしい。

ナギトの矮躯とヴァンダイクの巨躯で武器のぶつけ合いで拮抗するほうがまだ自然だ。

「——ッ」

息を飲んだのは誰だったか。少なくともナギトではない。ナギトにはこの結果がわかっていたから。当然の事が当然のように起きて息を飲む必要はない。

「——末恐ろしいのう」

ヴァンダイクの一言に場の空気が弛緩する。互いに得物を振り切った体勢から立ち直り、ナギトは太刀を鞘に納めて、ヴァンダイクはすっかり軽くなった斬馬刀を見て微笑んだ。

ヴァンダイクの斬馬刀は半ばから断ち切られていた。ナギトの太刀との拮抗はなく、一切の抵抗もなく、まるで空を切るように斬馬刀は斬られた。

「……自慢の得物だったのじゃがな」

「それは……すみません……？」

謝るべきなのか、少し疑問に感じたナギトは語尾に疑問符をつけてみる。

「いや、謝罪の必要はない。……いいものを見せてもらった。ユン殿の後継……八葉を継ぐ者の技を体験できたのは万の軍を動かすよりも価値がある」

「恐悦です」

そうしたやり取りを経て試合は終わりを迎えた。結局学院最強は有耶無耶になったが、そんな称号よりも輝くものを得たとその場に集った者皆が一様に感じていた。

グラウンドから去るヴァンダイクは生徒たちの視界から外れたところで膝を折った。

「ク……、ははは………老体には堪えるのう」

脂汗が全身から噴き出す。あと一步でも踏み込んでいたら命はなかったという確信がヴァンダイクにはあった。

「まったく……もう若くないのですから、無理はなさらない事です」

《死人返し》のベアトリクスでさえナギトの一刀には怖気を感じていた。ヴァンダイクの業物を豆腐のように斬った事もそうだが、人に死を確信させるほどの何かがあるのだと。

「ふ……手厳しい」

言葉少なに呼吸を整えたヴァンダイクが立ち上がる。

「でも、生徒たちの前で無様を晒さなかった事は褒めてあげます」

やんわりと微笑んだベアトリクスにヴァンダイクもつられて笑う。

「そりゃ嬉しいのう。これだけであと10年は生きられるわい」

「……冗談を」

そんな軽口を交わす老体2人は、本当にまだまだ現役を続けそうであった。

☆★

「ナギトは……《劍聖》なのか？」

夕食後、第三学生寮の自室でクロウと談笑していた所に訪問してきたリインが神妙な顔をして切り出した第一声がそれだった。

《劍聖》——それは八葉に連なる者にとって特別な意味を持っていた。

例えば《瘦せ狼》。例えば《黒旋風》、《漆黒の牙》、《不動》。

世界には数多の強者がいて数多くの異名がある。どれも大層な呼び名だが、それそのものに大した意味はない。

しかし《劍聖》だけは話が別だ。それは八葉一刀流において奥伝を認められた者だけが名乗る事を許される称号で、それは武術における極致《理》に身を置くほんの一握の人間である事の証左でもあった。

聞かれて薄くニヤリと笑んだナギト。一拍置いた彼にクロウはお膳立てをするように情報を並べたてる。

「少なくとも、かつてのナギト——《劍鬼》ウイル・カーファイは名乗っていないはずだ。強さだけは本物で、そいつは俺も太鼓判を押すが……」

クロウはかつてウィルと戦った記憶を掘り起こして苦い顔をした。騎神を持ち出してやつと勝てた相手だ。

「俺も老師から少しだけ話を聞いた事がある。俺と同じくらいの歳で、すべての型を皆伝し……しかし至らぬ弟子がいると」

語るリインにナギトは「かつ」と大仰に笑った。

「そりや俺だな。確かに至らぬ弟子、至らぬ子だったよ」

ナギト——もといウィルは才に溢れようとも決して良い弟子ではなかったはずだ。すべての型を皆伝しても《理》には至れず、あまつさえ《剣鬼》とさえ呼ばれるほどの悪行三昧。

「でも今……そう言えるって事は………ナギト、君は『至った』という事なんじゃないか？」

「なんでそう思った？」

「ヴァンダイク学院長との立ち合いを見て。ナギトは強い——それは元から知っている。だけどそれだけじゃない気がしたんだ」

リインの言葉はどこか臆げで。しかし確信を孕んでもいた。今はそれを言語化できていないだけなのだろう。

「特に……あの最後の一闪。八葉一刀流の『始の太刀』だったか？ 煌魔城でもルーファスさんと対峙した時に使った技だよな。あれが特に印象に残ってて……」

リインもそれがわかるという事は、やはり一度でもその領域に踏み込んだ事実の証明になるだろう。ナギトは少し嬉しい気持ちになった。

「そうか、それを感じ取れたのは成長だな。……『始の太刀』はその名の如く八葉一刀流の始まりの技。すべての極意をただ一刀に乗せて放つだけの——素振り」

「おいおい」

「ただの……素振り……!?!」

ナギトの言い草にクロウもリインも目を見開いた。されども兩人ともナギトがヴァンダイクと手合わせしたその場に立ち会った事から、それが嘘とも思えなかった。

「いや……でも……そうか、素振り……」

「リイン、わかるのか？」

クロウの問いかけにリインは顎に手を当てながら考えるようにして呟いた。

「素振り……っていうのは結果……? 結果ありきで太刀を振ってるのか……?
……ダメだ、上手く表現できない」

リインはお手上げという様子で、そんなリインをナギトは「ははは」と笑う。

「まだまだ精進あるのみだな、リイン。…んで、さっきの質問の答えは——『否』だ」

ナギトが答える最初の質問へのアンサー。『《剣聖》なのか?』という問いへの答えは『否』であった。

リインが何かを問いただす前にナギトは先手を打って答えておく。

「とは言っても『《剣聖》級なのは間違いない。謙遜なしに言って……そうだな、『《剣聖》』として代表的なカシウス・ブライトとも今は遜色ない……以上の実力があると自負している」

「そりや大きく出たな」と笑うクロウも、ヴァンダイクと互角に打ち合い、果てにはその得物を両断した光景を目の当たりには認めるしかなかった。

「老師からの手紙にあったよ。俺が『本物の強さ』を得たのなら二代目八葉一刀流を名乗れ、とな。俺がもう八葉を継ぐ者である以上は自ら『《剣聖》』を名乗る事も許されよう

が……、まだ実際に老師から認められたわけじゃないからな。それに認められたとしても《劍聖》を名乗るつもりはないし」

「《劍聖》は名乗らない……か。八葉一刀流の二代目伝承者なら老師の《劍仙》を継ぐつもりか？」

「それはなんかジジ臭いからやだ」

わざとらしく渋面を作ったナギトにリインとクロウは笑い、つられてナギトも笑う。

それは紛れもなく内戦以前の関係と同じで。

こんな当たり前の日々が、何よりも美しいと。こんな日々を取り戻すために、自分は戦ったのだと確認した。



不意に、
世界が反転した。

八葉を継ぐ者

不意に、世界が反転した。

?しかしそれは一瞬で、世界から色をなくしたようなものを感じただけ。この感覚は、旧校舎の「試シ」があつた頃のものと同種だ。

ナギトはクロウたちとの雑談を中断し「ちよつとトイレに行つてくる」と席を立つ。

ナギトの、ここから先の記憶は曖昧だった。

?自らの内にあつた、数多のプレイヤーたちの閃の軌跡に関する記憶。プレイヤーたちの願いはクロウの生存。故に必要なのは煌魔城までの記憶で、そこから先の記憶は重要視されていないかつた。それが、この後日譚の記憶が曖昧な理由だ。

しかし、覚えている事はある。?この後、旧校舎の異変が再発して、それを協力者の力も借りながら解決する。?それがⅦ組の最後の自由行動日の過ごし方だ。

？旧校舎に向かう途中で、本校舎屋上から視線を感じた。見上げた先にいたのは歴史学を担当する教官のトマスだ。普段ののほほんとしたトマスらしからぬ視線に、ナギトは目を細める。

そしてまた、世界が変転する。？前回と違い、今回は一瞬の変化ではない。世界から光が消え去った、まるで海の底で不自然なスポットライトに照らされたトマスと対面する。

？「これは……………」

？見た事がある、というのは主観の話ではなく、客観の話だ。思い出した、プレイヤーとしての記憶。トマス・ライサンダーという男の正体。

「落ち着いてください。私にあなたを害する意思はありません」

「……………ドミニオン守護騎士第二位《匣使い》トマス・ライサンダー」

ナギトに敵意がないと宣言するトマスの正体を言い当てて見せる。それは決して良手ではない。無駄に警戒心を上げるだけの行為だった。

「何故…私の事を？」

瓶底メガネの奥の瞳が細められる。

ナギトがトマスの正体——七耀教会における戦闘部隊……星杯騎士団の副長である
と見抜いた理由は、いくらでも並べ立てる事ができた。そもそも動き方が怪しいだの、
人当たりが良くてメガネをかけてるだの、と。

「思い出しただけですよ、副長殿。……とは言ってもそんなズルももうそろそろおしま
いですが」

ナギトの言い方は相変わらず迂遠で、わざとわからないように言っている。

しかしそれは逆に言っている内容自体は真実であると感じさせた。

トマスは色々な聞きたい事を飲み込んで、さっさと本題に入る事にした。

「ナギト・シユバルツアーくん……あなたはいつたい何者ですか？」

ナギト・シユバルツアーとは何者か。

問われた意味を考えて。そんな「作者の気持ちを答えよ」みたいな問題の捉え方に苦笑した。

ナギトが答えに詰まっていると捉えたのか、トマスは問いかけの内容を開示した。

「ナギトくん、あなたの存在はいかなる書物にも記されていません。我々の教典はもちろん、数多の禁書、この内戦中に帝国に出現した黒の史書の写しにも……です。蛇の連中には「特異点」と呼ばれていたようですが……」

トマスの言葉に「それはそうだろう」と納得するナギト。ナギトの存在は特異点——イレギュラー、願いの化身。世界に^{ゲームをバグらせる異常}変革を齎す者。

「『特異点』……………」

言つてしまえばナギトはただそれだけの存在。そのためだけの存在だ。
やはり答えに窮したナギトにトマスは畳みかける。

「今…教会内部では意見が分かれています。……つまり、その後に備えてあなたと協力体制を敷くのか、それとも——外法として狩るのか」

「……………封聖省お得意の外法認定ですか」

「ええ。ひと一人殺すにしても大義名分が必要な時代です。あなたが内戦中に画策した『幻獣討伐作戦』——あれだけで外法認定するのは難しいですが、多少の無理は通ります」

さすがに権力者は言う事が違う。親が白と言えば鴉でも白というやつだろう。それに『幻獣討伐作戦』に関してはナギトは白とは言えず、むしろ真つ黒だ。いくらか配慮したとは言え民間人に重傷者も出た。

「ですが私もこの一年、こここツールズ士官学院で教官としてあなたを見てきて………決して善人ではないとしても、悪辣さを持つているとしても。あなたが自身の正義に従って行動できる人間である事はわかっているつもりです」

トマスは「幻獣討伐作戦」に隠された意図を読み解いたのか、ナギトの在り方に言及した。

「………だから、答えてください。あなたは…世界の味方ですか？ それとも世界の敵ですか？」

その質問はきつと、世界に害するか否かという意味だ。しかしひねくれているナギトは、それを額面通りに捉えて答える事しかない。

ナギトは——いや俺たちは、クロウを殺そうとした、この世界の敵だ。

「その聞き方なら、俺は……」

回答しようとしたナギトを「身内の恥を晒すようなんですが」とトマスが話題を変えて止めた。

その氣遣いに嘆息しつつナギトは話を聞く。

「我々星杯騎士団が所属する封聖省と、法国の正規軍や隠密僧兵を擁する典礼省は対立しています。派閥争いみたいなものですね。そこで話は戻りますが、ナギトくんを取り込みたい側の人間は、それで派閥争いを一気に優勢にしたいからそう言っているんですよ。あなたが味方になれば、それだけで守護騎士数人分の戦力と目されていますからね。……かく言う私もあなたを味方にしたい側の人間でして……、それだけあなたは危険で魅力的な人なんですよ」

「たはは」と笑ってトマスは頬をかいた。

「……やっぱり、優しいですね……トマス教官」

トマスはナギトを死なせたくないのだ。ナギトがいかに隔絶した実力を持っていたとしても、星杯騎士団の総力、僧兵庁の総力を挙げれば、その首を取る事が叶うと思っ

ているが故に。

だから、手を取れと言っているのだ。味方になれと。

そんな優しさを見せたトマス相手にだからこそ、ナギトは真摯に応えようと思った。

「俺はこの世界を愛しています。でもクソみたいな筋書きを用意するこの世界が大嫌いです。だから俺は世界の味方ですけど、ある意味で敵でもあります」

「それは……………」

トマスによるナギトの言葉の内に秘められた意味の想像は、ありふれた悲劇を回避しようという意志。

それは正解でもあり不正解でもあった。

喜劇も悲劇もその実、すべて世界に用意された脚本だ。クロウの死もその一端に過ぎず、今日も世界は一分のズレもなく運営されている。

——はずだったのだ。ナギトが現れるまでは。

“クロウを救いたい”——その一念の元に集合しヒトの形を成したのが“特異点”
“。つまりナギトだ。”

ナギトは自身の掌を見つめる。この手が世界の筋書きを変えた。クロウを死の運命から救った。

ああ……もう、それだけで満足だ。

「最初の質問に答えます。俺はナギト・シユバルツァーです」

本当か？

「この世界が大好きで、八葉一刀流が大好きで、Ⅶ組のやつらが大好きで、」

そんなわけがない。

「そんな大好きなやつらとまだまだ生きていたい。——そう思ってるだけの、ただ

の人間です」

クロウを救えたから満足だなんて、そんなのは俺たちの勝手な感想でしかない。

ナギトは——俺は、まだ、生きたい。

リンと、クロウと、ラウラと。

他のⅦ組の連中に知り合った人たち。

彼ら彼女らと一緒に、今度は俺自身の軌跡を描いていきたい。

「そんな答えで、どうですか？」

閃の軌跡は、素晴らしい物語。

ただ一点、クロウが死んでしまうという事実を認められぬ者たちが特異点としてその世界に化て出たのだ。そしてクロウの救済という無念を晴らした特異点は成仏する。それが正しい帰結。当然の結末。

その後の世界に特異点という存在は雑音だ。俺たちはただクロウが死ななかつたというIFが見たかっただけ。そこに変なキャラクターを混ぜて物語が濁るのは嫌だ。

だから消える。特異点は、ナギトという存在は。この世界に発生したバグは。それこそが俺たちが望んだ展開。軌跡の末路。希望に満ちた物語の続き。

そんなものは、クソ食らえだ。

俺が、まだ、あいつらと一緒にいたい。

俺にはそれだけでもう充分過ぎる理由だ。

願いの果てに歪んだ希望だとしても。この美しい物語を穢してしまう行為だとしても。こんなこと誰も望んでいないとしても。

それでも俺は、生きていたい。

「……いえ、それを聞けて良かったです。むしろ完璧な答えですよ」

ナギトが出した結論に、何にも忖度しない意思にトマスは敬意を表した。

ナギトが己の命可愛さに星杯騎士団と協力する、というのがトマスとしては既定路線の考えだった。

しかしこうも当たり前の幸福を祈られては、教会の人間として損得や責任なんて言葉で縛りつける事はできなかつた。

「…それはそうと、ナギトくん。今後教会と協力していくつもりはありますか？」

だが、それはそれとして。トマスは最低限、聞かなければならない事があつた。

「つもりはあります、が………確たる事は何も言えませんので、何とも……」

この後日譚をもって「ナギトは消える」。そんな運命への叛逆を決意したのはいいが、何も具体策がない状況だ。

そんな状態では七耀教会への協力を約束する事もできずにふわふわした回答になつてしまう。

「……わかりました。前向きに検討してもらえ、と理解しておきますよ」

ひとまずトマスはナギト状況を理解しないまでも、この回答の意図は何となく感じ

取っていた。

「その上でひとつ警告です。すでにあなたもわかっているでしょうが、今回の内戦はあくまで序曲に過ぎません」

「はい。……まだ何も終わっていない」

「その通り。ここから先は各勢力が入り混じる総力戦になるでしょう。だからあなたも備えるべきだ……この先に待つ激動の時代に」

☆★

トマスとの会話を終え《匣》から解放されたナギトはその足で旧校舎へ向かった。

すでに鐘が鳴り響いている旧校舎だったが、学院祭の時のように障壁は展開されていない。

「ナギト！　今までどこに……」

「まあちよつとな。それより状況は？」

リインの疑問をかわして現況について尋ねる。

とは言ってもⅦ組や揃った一同はろくに事態を把握できていなかった。

それも当然だ、そんな不測の事態をどうやって予測しろと言うのだ。

ともあれ中に入らない事には話は進まない。ナギトを含めた一同は旧校舎の内部に進入した。

扉の先はもはや旧校舎と呼べるものですらなかった。第七層の時のような異空間が広がるのみだ。

しかも、今回はそれが旧校舎の入口から直接繋がっていた。あの昇降機があつた部屋に続く扉さえ跡形もない。

？ 《灰の騎神》 ヴァリマールを手にするために、Ⅶ組は旧校舎に潜った。文字通り、地下へ地下へと歩を進めたのだ。しかし、今回の昇降機の行先はどうやら上らしい。上に登った先にはヴァリマールの他に別の騎神でも封じられているとでも……、と言うのは

冗談にしても。

？この異変の原因がわからない事には、これが悪性によるものなのか、そうでないのかはわからない。

VII組は協力者の力も借りて、この夢幻回廊とでも言うべきダンジョンの攻略に乗り出した。

夢幻回廊の攻略メンバーの数は協力者も含めて20人に及ぶ。そのため、探索メンバーと休憩メンバーに分かれて攻略を進めていた。

その途中で、ナギトとリインとクロウが同時に休憩メンバーになり、ナギトは二人にトマスから呼び出されている事を告げた。

あの2人もナギトと同じく忠告を受けるのだろうか。この内戦はあくまで激動の時代への序曲でしかない事を。

やがて2人が戻ってきて夢幻回廊の探索も後半に入る。

終わりは近く、ナギトは自らの未来に想いを馳せる。

ツールズを卒業したら、まずはレグラムに行こう。ヴィクター・アルゼイド子爵にラウラと交際してる事を伝えないと。たった1人の愛娘だ、どんな反応をするのかと思うと今から笑みが止まらない。

次はやつぱりユミルかな。記憶を取り戻した事、シユバルツアー家を出る事は伝えなければならぬ。感謝を伝えて、これからもリインとは義兄弟のままにいる事を許してもらわなければ。

ああ、あと老師にも会わなきや。俺はちゃんとあなたの息子として恥じない剣士に成長したと、この姿を見せなきやいけない。

忘れるところだった、共和国にも行かなければ。あの辺境の遊撃士協会支部での出来事は俺にとつてとても有意義な月日だった。その感謝と、突然去ってしまった事への謝罪をしなれば。

……ああ、やる事がたくさんだ。やりたい事がいっぱいある。やらなきやいけない事も。

「消えたく、ねえなあ……」



永遠に続くかと夢幻回廊も、ついに終点を迎える。白い闇の先にあつたのは、いつか見た、灰の戦場。

？灰の如き砂の積もる、戦場跡のような景色。地面に突き立つ無数の剣は墓標のようにも見えた。？しかし、そんな世界に異物が存在した。Ⅶ組が足を踏み入れた地面は灰の砂ではなく、煌魔城の緋の玉座を模した場所だったのだ。

つまり、Ⅶ組と協力者たちが見ている光景は、灰の戦場跡にぽつんと緋の玉座のようなものがある、というどこか不自然なものだった。

だがここで、ナギトだけが別のものを見ていた。

「やっぱり……………来ると思ってたよ」

「ここは、そういう場所だからな」

景色が風化する。色彩が喪われて目の前の男だけが黒々とした色を放っている。

周囲にはいつの間にか自分たちだけしかおらず、ここが異界である事を理解した。

「よう、俺たち」

ナギトはあえて気軽に手を挙げた。挨拶として放たれたそれをもう一人のナギト――願いの化身はため息で迎え撃つ。

「……何だよ」

大きなため息にたじろぐナギトに、願いの化身は「お前な」と告げる。

「今もまだ思い悩んでるの、わかってんだぞ。消えたくねー、って無様に心が喚き散らしてるのをな。そういう強がり、もう身体に染み付いてんな…ナギト・シユバルツァー」

「む……」

「俺たちはお前だ、お前の一部だ。だからそういうのはわかる。でもお前はもう俺たち

じゃないんだな」

願いの化身の言葉にナギトは疑問符を浮かべる。そんな様子に化身は「はっ」と鼻で笑った。

「お前はホンットーにどうしようもない大馬鹿だ。俺たちの大願は“クロウの生還”：それだけだ。それなのになんだ？ リインと義兄弟？ VII組の一員？ ラウラといい感じ？」

それはナギトがこれまでやってきた事だ。その全てがナギトの選んだ道ではないが、その全てがあるからこそ今のナギトがある事は確か。

「——ふぎっけん!! 俺たちはただクロウに生き残って欲しかっただけだ！ それを……こうも物語に介入しやがって……俺たちの大好きな“閃の軌跡”が台無しだろうが」

「それは……えっと、すみません」

ぶっちゃけた話、願いの化身が言っている事はわかる。ナギト自身、この物語にテキトーなキャラクターが介入して原作ぶち壊しとか発狂案件だ。

「……でも」

「黙れい！ 俺たちが喋ってんだよ！」

有無を言わさぬ願いの化身。怒髪天を衝くとはこの事だ。

「だいたいお前は好き勝手やり過ぎだ。何だよ、貴族連合に参入するとか。いくらスパイ目的でも限度つてもんが——」

——と、化身の小言は続く。いくらでも捲し立てられそうな舌にナギトは口を噤むしかない。

5分もしただろうか、化身の口撃も収まって、チラリとナギトが視線を上げると同じ顔と視線が交わった。

「——けどまあ、悪くなかった」

端的に言ったセリフに「は」とナギトは息を飲み込んだ。

「面白かったよ。お前という人間が増えた閃の軌跡は」

「え、いや……え？」

「記憶喪失で、八葉一刀流の剣士で、《剣鬼》なんて過去があつて、拳句の果てにはヒトの形をしたバグだった——なんてトンデモ設定だったけどな」

「……………お前が言うのかよ……………」

化身の言葉にナギトは苦笑いしながら言葉を返す。2人で少し笑い合って、穏やかな顔のまま化身が告げた。

「そんなお前に朗報だ、ナギト・シユバルツアー」

化身は一旦言葉を区切って、やはり穏やかに笑って続ける。

「この世界で、お前という存在が確立した」

「……………、……………?」

考えてみたが、ちよつと意味がわからなかった。

「?」じゃねえ! わかんねえのか!? お前はこれからも生き続けられるって事だ!
!」

その言葉に、俺は――。

「……………、…マジ、か？　嘘じゃね？え、嘘だよね？」

「ちったあ希望を信じろ。……………泣いてるくせに」

「泣いてねえやい！」

制服の袖口で頬を拭った。何だか初めて、この赤い制服が自分のものになった気がして、また頬を拭う。

「でも、なんで？」

ひとまず現実を受け入れた。これからも生きられるという希望の道。受け入れたからには、どうしてそうなったのが気になるところ。

「さつきも言ったが……、お前は俺たちじゃなかったからだ」

それは化身が先程も語った言葉。

願いの化身——「クロウを救いたい」という願いが織り重なって生まれたのが「俺」という「特異点」だ。「俺たち」というのは化身の裡側で織り重なった願いの聲が複数あるからだ。それはつまりクロウ救済を願った魂の数だけ。

そんな中、運命の強制力——システムの抵抗で記憶を失って生まれたのが「ナギト」という人格だった。——正確には「人格らしきもの」だが。

そんな「人格らしきもの」はユミルで郷の皆と触れ合い、ツールズでたくさんの友人に恵まれ、帝国各地で様々な縁を結んだ。

「俺が紡いだ縁が、俺をこの世に留める『重石』になった……」

「そうだな。あるいは『鎖』か……。まあ、おめでとさんだ」

化身の言葉に「ありがとう」と言ったナギトは返す言葉で尋ねる。

「でも俺たち——いや、お前たちはどうなる？」

「俺たちは消えるさ。この後日譚の終わりと一緒に。俺はナギトじゃないからな」
軽々に言う化身に、ナギトはどこか物悲しさを感じる。

「——、そうか」

それを飲み込んだところで、化身は言った。

「話を変えるが、もうひと山ある」

「え？」と聞き返すナギトの横——緋の玉座で影が盛り上がった。

「…来たか」

化身が眩き、影は緋の玉座でぐねぐねと踊った。

「あれは――」

「システムの最後の抵抗だ」

ナギトの疑問に化身が答える。

「……まだ何かあるのか」

「気を抜くなよ。今はまだアレイシヨナルタイムってところだ。逆転される恐れがある」

呆れたようなナギトの声音に、しかし化身は警戒を促す。額には玉の汗があるように見えた。

「どういう事だ……?」

「前提から言うが『クロウの生存』は『ナギトの存在』あつてこそだ。……お前がここで負けて『ナギトの存在』が最初からなかった事にされれば……」

化身の説明に思考を巡らせる。思い当たったのは最悪の可能性。

「——『クロウの生存』までなかった事にされる」

「そういうことだ」と肯定する化身。2人が話す間に影は形を変えていく。

幻獣からロアIIエレボニウスへ。ロアIIエレボニウスから《灰の騎神》ヴァリマールへ。《灰の騎神》ヴァリマールから《紅き終焉の魔王》エンド・オブ・ヴァーミリオンへ、変態を遂げつつあった。

目を細めるナギトに化身は告げる。

「《紅き終焉の魔王》……現状最強最悪の敵だな。……やれるか、ナギト」

「やるしかないならやるだけ……だけでも！　なんであんなのが生えてきてんの？」

「^{システム}神だからな。物語の内にあるものになら何にでも干渉可能なんだろう。再現だつてお手のもの……。とは言つても煌魔城からクロウが生還した事でシステムももう虫の息……。これが正真正銘、最後の戦いだ」

《紅き終焉の魔王》は騎神2騎、VII組に加えて《蒼の深淵》が協力してやっと倒せた相手だ。

それをたつた1人で打ち倒せとは――

「はっ、いいね。滾る……!」

兇悪に嗤う。

しかしそれは紛れもなくナギトだ。これまで積み上げてきたナギトらしさ――
数多の人と縁を結べたナギトの個性だ。

「……手助けは期待するなよ。代わりにひとつ助言してやる」

太刀をすらりと抜いたナギトの背中に化身が語りかける。

「〃特異点〃を使え」

〃特異点〃とはナギト自身の事ではなかったか。そんな疑問を口にするより早く化身は言い放った。

「あの紅蓮の魔王はおそらく、本来の魔王を上回る強さだろう。わかりやすく言えば全パラメータ無限みたいなもんだな」

「それ勝てるか？」とぼやくナギトだが化身は無視して続けた。

「だが、俺たちの本質はバグ——ゲームのデータをぶっ壊す最悪だ」

「つまるどころ、〃特異点^{バグ}〃はシステムに特攻を持つてるって話？」

「それだけじゃねえよ。俺たちの力は言わばデータの改竄。この世界に対して特攻を持

っ

「くっそチートじゃん」

「そうだ。この力を使えばクロウの生存ももつと楽だったかもな。………これまで俺たちがいたから無制限に使えたはずだが……、これ以降はもう使えないだろうな」

「使えない？」

「正確には使えるだろうが、代償が必要になる。それはおそらく存在そのものだ」

「こえーな、使わんとくわ。んで、まだお前がここにいてるって事は、その特異点としての力は振るい放題って事でいいか？」

「そうだ。やれるか？　ってかやれ」

軽妙にやり取りを交わすナギトと化身。本質は同一だからか、会話のテンポが噛み合

う。

しかし、本質は同じ、根っこが同じでもナギトは“特異点”から分たれて“ナギト”
ととして確立した以上は差異はある。

化身からの言葉にナギトは応える。

変態を遂げて真に魔王と化した紅蓮を前に笑んだ。

「やってやるさ。俺を誰だと思ってる？」

太刀を、構える。

「——知ってるさ。やってやれ、ナギト・シュバルツァー八葉を継ぐ者」

ニヤリ、笑って。

「——願いを織りて生まれしこの身、願い叶えて未だ在り」

太刀に、己の存在を乗せる。

特異点という世界を変える存在を乗せる。

“八葉一閃”に全てを解放する力を乗せるのだ。

「——在りて続けばこの身世界に変革を齎さん」

それは祝詞のようであった。

「千の人に千の軌跡を」

否、事実それは祝詞であつた。

世界を定められた軛から解き放つ。その祝福を寿ぐ言葉であつた。

「軌跡改竄
／ 落涙叛転」

☆★

時間が経つというのは案外早いもので。

あの旧校舎の一件があつてからの学院生活は一瞬で過ぎていった。

「光陰矢の如し、か」

なんて呟いた日にはクロウに盛大にバカにされたが。

とうとうツールズ士官学院を卒業し、VII組が別れる日が来た。

VII組全員がトリスタ駅前集まり、別れを惜しまぬ、湿っぽい事はなしの雰囲気です。
いい思いに言葉を紡ぐ。

サラにこの一年の指導の感謝の言葉を告げる不意打ちも成功し、見事にオチがつく。

それぞれの目的地に向かうため駅に入ったところでナギトがひよこつと顔だけを戻

して「リイン」と呼んだ。

「なんだナギト、忘れ物か？」

「ああ、ベッドの下のエロ本を処理しといてくれ——つて、そうじゃなくて」

いつもと変わらぬやり取りにやはり、2人とも笑んで。

「俺たちは義兄弟だ。いつまでもな。達者でやれよ」

そんなナギトの不意打ちに、リインは少し涙ぐむ。

「バカ……………、不意打ちか？」

「正解」とナギトはがははと笑う。最後に「じゃあな」と手を振って今度こそ別れた。

駅のホームでクロウの隣に座る。ナギトとクロウはここから東と西で早くも別れる事になっていた。

やがてジュライへ向かう列車が来て、それに乗り込むクロウの背中を呼び止めた。

「クロウ、生きろよ」

「なんだ突然。言われなくても拾った命だ。精一杯生きてやるさ」

言われなくてもクロウはわかっていたらしい。

しかし、ナギトは何度もクロウの死を看取ってきたプレイヤーの願いの化身。その生に感謝と祝福を贈らずにはいられない。

「ああ、生きろ。今を、力一杯生きろよクロウ」

クロウはニヒルな笑みと共に列車に姿を消す。

やがてレグラム行き列車が来て、数名の友と共にそれに乗り込んだ。

まずはレグラムだ。ヴィクターにラウラとの交際を報告せねば。次はユミル。シユバルツァーの名を返上すると共にテオに感謝を伝えなければ。

未来の展望を夢想してナギトは微笑む。

やりたい事が、たくさんあるんだ。

だから。

「俺も生きよう。この素晴らしい世界を」

T H E
a n d
T o b e
c o n t i n u e d
E N D